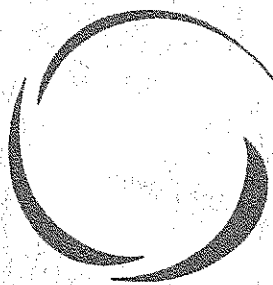

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

海部 俊 樹 (元内閣総理大臣)

オーラル・ヒストリー

下 巻



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

海部俊樹オーラルヒストリー 下巻《目次》

第20回 中曾根内閣成立（一九八二〜八三）……………11

◆質問項目

- 現在の政局から1（保守新党）
- 現在の政局から2（保守合同の可能性と解散風）
- 日中教科書問題1（中国訪問）
- 日中教科書問題2（教科書問題）
- 鈴木後継総裁戦1（河本氏の立候補）
- 鈴木後継総裁戦2（総裁戦の様相）
- 中曾根内閣の成立1（海部氏と中曾根氏の関係）
- 中曾根内閣の成立2（中選挙区事情）
- 中川一郎の自殺
- 中曾根内閣の成立3（首相訪韓）
- 中曾根内閣の成立4（不沈空母発言）
- 初の比例代表制・参議院選挙（一九八三年六月）

第21回 中曾根内閣時代Ⅱ（一九八三〜八四）……………39

◆質問項目

- 現在の政局から（イラク戦争）
- ロッキード事件、田中実刑判決
- 北朝鮮との関係
- 新自由クラブとの連立1（新自由クラブの位置づけ）
- 政治倫理協議会
- 野党との関わり1（石橋・社会党）
- 野党との関わり2（民社党）

第22回 中曾根内閣時代Ⅲ（一九八四〜八五）……………67

◆質問項目

- 中曾根・教育臨調
- 韓国・全斗煥大統領の来日
- 二階堂擁立劇
- 筆頭副幹事長1（金丸幹事長と「筆頭」）
- 筆頭副幹事長2（参議院幹事長）
- 現在の政局から（イラク戦争）
- 筆頭副幹事長3（副幹事長の選任）
- 筆頭副幹事長4（副幹事長の役割）
- 筆頭副幹事長5（金丸幹事長）
- 新自由クラブとの連立2（山口労相入閣）
- 金丸氏と黒川総評議長の会談
- 創政会の旗揚げ1（竹下氏の心の準備）
- 創政会の旗揚げ2（田中氏倒れる）
- 民社党の世代交代
- 定数は正問題
- 金丸氏と北朝鮮
- 中曾根政治1（国鉄民営化問題）
- 中曾根政治2（防衛費1%突破と靖国参拝）
- 中曾根政治3（総理と幹事長）
- 三光汽船の倒産と河本派1（三光汽船の倒産）
- 三光汽船の倒産と河本派2（河本氏と中曾根氏）

第23回 中曾根内閣時代Ⅳ（一九八五～八六）……………99

- 文部大臣1（就任の経緯）
- 世界政治フォーラム

◆ 質問項目

- 文部大臣2（入試改革1）
- 文部大臣3（入試改革2）
- 文部大臣4（いじめ事件）
- 文部大臣5（教育基本法問題）
- 東京サミット
- 文部大臣6（教科書問題）
- 八六年同日選挙1（死んだふり解散）
- 八六年同日選挙2（閣僚としての解散・総選挙）
- 八六年同日選挙3（中曾根三選）
- 文部大臣以後1（藤尾正行氏に交替）
- 文部大臣以後2（教育改革基本問題調査会長）
- 新自由クラブ解党と田川誠一
- 藤尾正行文相罷免（一九八六年九月）
- 文部大臣以後3（やるなら通産大臣）

第24回 竹下・宇野内閣時代（一九八六～八九）……………125

◆ 質問項目

- 現在の政局から（自民党総裁前哨戦と解散総選挙）
- 売上税法案の廃案
- 竹下内閣の成立1（中曾根後継、安竹宮の争い）
- 竹下内閣の成立2（中曾根から竹下へ）
- 労働運動の統一、「連合」の結成
- 消費税の導入1（竹下内閣の課題）
- リクルート事件1（事件の経緯）

第25回 海部内閣Ⅰ（一九八九）……………157

◆ 質問項目

- リクルート事件2（藤波孝生氏の動き）
- 消費税の導入2（税制改革特別委員会）
- 消費税の導入3（三%の税率）
- 三木派の帰趨1（三木元首相の死去）
- 三木派の帰趨2（河野金昇氏のことなど）
- 三木派の帰趨3（河本敏夫と河本派）
- 昭和から平成へ
- 宇野内閣1（竹下内閣の総辞職と宇野内閣の成立）
- 宇野内閣2（宇野総裁選出の経緯）
- 宇野内閣3（参議院選挙）
- 宇野内閣4（組閣と幻の官房長官）
- 宇野総理退陣と後継総裁戦

- 現在の政局から1（二〇〇三年総選挙）
- 現在の政局から2（保守新党の自民党への合流）
- 現在の政局から3（中から見た自民党）
- 現在の政局から4（小泉内閣の現状）
- 総裁戦への経緯1（橋本・河野・海部会談）
- 総裁戦への経緯2（三木派河本と家族の反応）
- 総裁戦への経緯3（派閥の力学）
- 総裁戦への経緯4（海部・林・石原の総裁戦）
- 海部内閣組閣1（官房長官）
- 海部内閣組閣2（女性入閣）
- 海部内閣組閣3（党三役人事）
- 海部内閣組閣4（官房長官辞任、各派閥の動き）
- 海部内閣組閣5（各省次官、官房副長官、秘書官）
- 訪米1（ブッシュ大統領とのテータ・テート）

■訪米2 (全体会議)

第26回 海部内閣Ⅱ (一九八九〜九〇) ……………

189

◆質問項目

- 現在の政局から (自衛隊イラク派遣)
- 訪米3 (日米構造協議)
- 訪米4 (カイフ?フー?の払拭)
- 訪米5 (メキシコ、カナダ訪問)
- 日米構造協議1 (大店法関連)
- 日米構造協議2 (独禁法の強化)
- PLOアラファト議長来日
- 参院補選勝利と総裁再選、政治改革
- 二十一世紀に向けて目指すべき社会を考える懇談会
- ベルリンの壁崩壊1 (冷戦の終焉)
- ベルリンの壁崩壊2 (体制の選択)
- ベルリンの壁崩壊3 (東西ドイツの統一)
- ベルリンの壁崩壊4 (日本外交への影響)
- 消費税の見直し論議
- ヨーロッパ歴訪 (ポーランド、ハンガリー)

第27回 海部内閣Ⅲ (一九九〇) ……………

221

◆質問項目

- 九〇年総選挙1 (年内解散か翌年解散か)
- 九〇年総選挙2 (党首公開討論)
- 九〇年総選挙3 (選挙戦、応援演説)
- 九〇年総選挙4 (選挙期間中の総理職、花押)
- 第二次海部内閣発足1 (西岡武夫と加藤六月)
- 第二次海部内閣発足2 (竹下氏と金丸氏)
- 第二次海部内閣発足3 (官房長官・坂本三十次)

■第二次海部内閣発足4 (国会との関係)

第28回 海部内閣Ⅳ (一九九〇) ……………

249

◆質問項目

- 日米構造協議1 (日米首脳会談)
- 日米構造協議2 (コメ問題など)
- 日米構造協議3 (国内での反発)
- 政治改革1 (小選挙区比例代表並立制)
- 政治改革2 (小選挙区の区割)
- 南西アジア諸国歴訪1 (外交課題として)
- 南西アジア諸国歴訪2 (大国インド)
- 南西アジア諸国歴訪3 (インドの印象)
- 南西アジア諸国歴訪4 (バングラデシュ)
- 南西アジア諸国歴訪5 (スリランカ)
- 南西アジア諸国歴訪6 (インドネシア)
- 盧泰愚・韓国大統領の来日1 (盧泰愚大統領)
- 盧泰愚・韓国大統領の来日2 (天皇のお言葉問題)
- カンボジア和平東京会議1 (タイ首相チャチャイ)
- カンボジア和平東京会議2 (ポルポト派の出席)
- ヒューストン・サミット1 (サッチャーについて)
- ヒューストン・サミット2 (冷戦後のヨーロッパ事情)
- ヒューストン・サミット3 (対中借款再開問題)

第29回 海部内閣Ⅴ・湾岸戦争1 (一九九〇〜九一) ……………

275

◆質問項目

- 現在の政局から (国民年金未納問題)
- 湾岸戦争1 (イラクのクウェート侵攻)
- 湾岸戦争2 (経済制裁の決定)
- 湾岸戦争3 (陛下への内奏)

第30回

海部内閣VI・湾岸戦争2（一九九〇～九一）……

◆質問項目

- 子供のための世界サミット（ニューヨーク）
- 湾岸戦争12（ブッシュ大統領との会談）
- 湾岸戦争13（中東歴訪）
- 対北朝鮮交渉1（仲介者）
- 対北朝鮮交渉2（正式国名）
- 対北朝鮮交渉3（韓国の対応など）
- 湾岸戦争14（戦端）
- 湾岸戦争15（開戦と支持表明）
- 湾岸戦争16（危機対策本部の設置）
- 湾岸戦争17（被災民移送）
- 湾岸戦争18（九十億ドル追加支援）
- 日米構造協議（九一年四月訪米）
- 湾岸戦争19（掃海艇派遣）

303

第31回

海部内閣VII（一九九一）……

◆質問項目

- 現在の政局から（二〇〇四年参院選）

329

第32回

海部内閣VIII（一九九一）……

◆質問項目

- 中国・モンゴル訪問
- ソ連邦解体の始まり
- 政治改革の周辺1（政治改革法案の閣議決定）
- 政治改革の周辺2（宮澤派、YKKの動き）
- 政治改革の周辺3（政治改革法案の廃案）
- 政治改革の周辺4（損失補填、佐川急便事件）
- 首相の情報源
- 海部内閣の最後1（「重大な決意」発言）
- 海部内閣の最後2（竹下派の動向）
- 海部内閣の最後3（続投せず）

361

■ 湾岸戦争4（貢献策第一弾・十億ドル拠出）

■ 湾岸戦争5（在留邦人の保護）

■ 湾岸戦争6（貢献策第二弾・物資輸送）

■ 湾岸戦争7（アメリカの要請）

■ 湾岸戦争8（党内情勢と人的貢献問題）

■ 愛知参院補選（一九九〇年十一月）など

■ 湾岸戦争9（国連平和協力法案1―意図）

■ 湾岸戦争10（国連平和協力法案2―起案）

■ 湾岸戦争11（国連平和協力法案3―廃案）

■ 「即位の礼」と式典外交

■ 訪韓・盧泰愚大統領との会談

■ 東京都知事選（鈴木 vs 磯村）

■ 小沢一郎幹事長の辞任

■ ゴルバチョフ大統領訪日1（末次一郎氏の役割）

■ ゴルバチョフ大統領訪日2（共同声明と北方四島）

■ ASEAN歴訪1（マレーシア、シンガポール）

■ ASEAN歴訪2（ブルネイ）

■ ASEAN歴訪3（フィリピン）

■ 中曽根康弘の自民党復党

■ 安倍晋太郎の死と安倍派の帰趨

■ 国連軍縮京都会議

■ 雲仙・普賢岳の火砕流災害

■ ロンドン・サミット

■ 日本・EC首脳会談

第33回 宮沢内閣と五五年体制の崩壊（一九九一～九四）

385

◆質問項目

- 内閣総辞職以後
- 自民党分裂への序曲1（宮沢内閣の成立）
- 自民党分裂への序曲2（竹下派分裂、羽田派結成）
- 環境問題への取り組み1（地球環境行動会議）
- 環境問題への取り組み2（公害対策の回顧）
- 環境問題への取り組み3（地球規模の環境問題）
- 五五年体制の崩壊1（宮沢内閣不信任案可決）
- 五五年体制の崩壊2（新生党と新党さきがけ）
- 五五年体制の崩壊3（細川内閣の成立）
- 五五年体制の崩壊4（自民党内の動き）
- 五五年体制の崩壊5（羽田内閣の成立）
- 自民党離党と首班指名選挙1（引き金）
- 自民党離党と首班指名選挙2（擁立）
- 自民党離党と首班指名選挙3（決断）

第34回 新進党（一九九四～九七）……………

413

◆質問項目

- 新進党1（結成と党首就任）
- 新進党2（九五年地方選・参院選での躍進）
- 新進党3（明日の内閣）
- 新進党4（九五年党首選、小沢 vs 羽田）
- 新進党5（任専問題に対するピケ戦術）
- 新進党6（九六年総選挙での議席減）
- 新進党7（基本政策に関する全議員会議）
- 新進党8（小沢一郎党首の保路路線）
- 新進党9（九七年党首選、小沢 vs 鹿野）

- 新進党10（解党）
- 現在の政局から「名古屋市長選」
- 新進党11（新進党の評価）

第35回 現在まで（一九九八～二〇〇四）……………

439

◆質問項目

- 選挙区・支持者・後援会
- 無所属の会
- 小渕内閣時代1（小渕恵三の思い出1）
- 小渕内閣時代2（小渕恵三の思い出2）
- 小渕内閣時代3（小渕内閣について）
- 自由党への合流と自自連立1
- 自由党への合流と自自連立2
- 自自公連立
- 保守党の結成
- 森内閣から小泉内閣へ
- 保守新党
- 自民党への合流
- 自民党の変化
- 過去から未来へ1（総理のリーダーシップ）
- 過去から未来へ2（世界の中の日本）
- 過去から未来へ3

あとがき…………… 楠精一郎 468

海部俊樹オーラルヒストリー 上巻《目次》

海部俊樹 略歴……………12

第1回 誕生から早大編入まで(一九三一〜五二)……………13

- 名古屋の写真館に生まれる(一九三一年)
- 南久屋国民学校時代(一九三七〜四三年)
- 旧制東海中学に入学(一九四三年)
- 三菱発動機への勤労働員
- 空襲下での生活
- 少年航空兵を目指す
- 一九四五年八月十五日
- 弁論を始めたきっかけ
- 弁論大会で優勝
- 弁論の心得と練習法
- 中央大学専門部に入学(一九四八年)
- 六人の兄弟姉妹の中での「突然変異」
- 海部姓と海部郡
- 中央大学「辞達学会」
- 政治との出会い
- 早稲田大学法学部に編入(一九五二年)
- 河野金昇議員の学生秘書として
- あつせん利得罪について

第2回 衆議院初当選まで(一九五二〜六〇)……………41

- 河野金昇氏についてI—中野正剛の心酔者
- 河野金昇氏についてII—演説上手
- 政治家への志
- 河野金昇議員の秘書としてI—後援会づくり
- 早稲田大学雄弁会

第3回 一、二年生議員時代(一九六〇〜六五)……………67

- 選挙演説の心得
- 大学時代の弁論大会
- 水玉模様のネクタイ
- 三木武夫氏との交流—「県会には外交がない」
- 一期待て—河野金昇夫人の立候補
- 三木武夫氏の人物像
- 職場結婚
- 河野金昇議員の秘書としてII—公設秘書
- 衆議院選挙に立候補
- 議員秘書として見た安保改定(一九六〇年)
- 一年生議員としてI—議席は一丁目一番地
- 一年生議員としてII—自民党青年局学生部長
- 一年生議員としてIII—商工委員会、農林水産委員会
- 一年生議員としてIV—国会対策委員会
- 一、二年生議員時代(一九六〇〜六五)……………
- 現在の政局から(森内閣不信任案否決)
- ロバート・ケネディの来日
- ドイツ行き(一九六二年八月)
- アメリカ行き(一九六二年九月)
- 海外視察の総括
- 青年局長(一九六三年十二月)
- 青年海外協力隊の構想
- 二回目の選挙(一九六三年十一月)
- アフリカ行き(一九六四年五月)
- 韓国行き(一九六四年十一月)
- 議運・本会議事進行担当(一九六四年十二月)
- 地元後援会との関係と三木派

- 自民党商工部会の副部長 (一九六五年八月)
- 選挙資金と応援
- 選挙の変化 (小選挙区制)

第4回

労働政務次官時代 (一九六六～六八) ……………

- 現在の政局から (自民党総裁選前)
- 労働省政務次官1 (政務次官の仕事)
- 労働省政務次官2 (政務次官の位置づけ)
- 労働省政務次官3 (労働大臣・早川崇)
- 労働省政務次官4 (ILO総会に出席)
- 労働省政務次官5 (野党対策)
- 労働省政務次官6 (海外事情視察)
- 労働省政務次官7 (祝日改正法案)
- 労働省政務次官8 (保革対決)
- 労働省政務次官9 (アジア労働大臣会議)
- 労働省政務次官10 (衆議院社労委)
- 労働省政務次官11 (ILOでの演説と労働貴族)
- 労働省政務次官12 (マイスター制度)
- 自民党青年局長1 (青年局と地方青年部)
- 自民党青年局長2 (党の組織について)
- 自民党青年局長3 (沖繩遊説と津雲國利氏)
- 三木武夫と総裁選1 (連想されること)
- 三木武夫と総裁選2 (佐藤三選と三木票)

第5回

議運副委員長時代 (一九六九～七二) ……………

- 現在の政局から (自民党総裁選後)
- 大学紛争と大学立法 (一九六九～七〇年)
- 国対副委員長・議運理事1 (国対副委員長の仕事)
- 国対副委員長・議運理事2 (各党の国対)
- 国対副委員長・議運理事3 (議運と国対の関係)
- 現在の政局から (自公保連立政権、二〇〇一年)
- 国対副委員長・議運理事4 (国対副委員長の仕事)

第6回

田中内閣時代 (一九七二～七四) ……………

- 国対副委員長・議運理事5 (社会党の国対)
- 国対副委員長・議運理事6 (法案を「つるす」)
- よど号事件と山村新治郎 (一九七〇年三月)
- 労働問題調査会副会長 (一九七〇～七四年)
- 種々の委員会、議連での活動 (一九七〇～七二年)
- 佐藤首相四選問題 (一九七〇年)
- 衆議院議員運営委員会委員長 (一九七二年十二月)
- 現在の政局から (元首相付SP、いわゆる人権派)
- 現在の政局から (小泉政権の誕生、二〇〇一年四月)
- 現在の政局から (田中外相とアーミテージ)
- 田中内閣の成立前夜 (一九七二年)
- 田中内閣の成立、三木副総理の入閣 (一九七二年七月)
- 自民党人事局長 (一九七三年)
- 五回目の当選と選挙応援
- 自民党選挙対策委員会幹事
- 四十七年十二月の総選挙
- 通年国会の議論
- 金大中事件 (一九七三年八月)
- 小選挙区制への動き
- 愛知三区の事情
- エジプト、クウェート訪問 (一九七四年一月)
- 日米繊維交渉との関わり (一九七四年六月)
- 三木副総理辞任と三木派内の序列
- 三木副総理辞任から推名裁定まで

第7回

三木内閣時代 I (一九七四～七五) ……………

- 現在の政局から (都議選・防衛省昇格問題)
- 三木内閣の成立 I (官房長官から副長官へ)
- 副幹事長の経験 (田中内閣末期)
- 三木内閣の成立 II (組閣事情)

第8回

- 三木内閣の成立3 (三木氏のブレイン)
- 三木内閣の成立4 (閣僚への自薦、他薦)
- 三木内閣の成立5 (閣僚候補と派閥の推薦)
- 三木内閣の成立6 (中曾根幹事長)
- 三木首相と民主主義
- 官房副長官時代1 (初閣議と川島副長官)
- 官房副長官時代2 (閣議と事務次官会議)
- 官房副長官時代3 (閣僚懇談会)
- 官房副長官時代4 (議運での日々)
- 官房副長官時代5 (井出一太郎官房長官)
- 官房副長官時代6 (議運理事兼国対委員長)
- 官房副長官時代7 (官房長官代理)
- 官房副長官時代8 (夜の三木邸)
- 三木内閣の仕事 (独禁法、政治資金規正法の提案)
- 三木内閣時代Ⅱ (一九七五) ……………
- 独禁法と公職選挙法改正1 (初閣議での提案)
- 独禁法と公職選挙法改正2 (法案)
- 独禁法と公職選挙法改正3 (根回し)
- 独禁法と公職選挙法改正4 (難航した独禁法改正)
- 独禁法と公職選挙法改正5 (参議院と党議拘束)
- 佐藤栄作元総理の国民葬 (一九七五年六月)
- 日米首脳会議1 (準備)
- 日米首脳会議2 (三木・フォード単独会談)
- 日米首脳会議3 (シナリオ)
- 日米首脳会議4 (議題と共同声明)
- クアラルンプール事件への対応
- 三木総理の靖国神社参拝1 (公的と私的)
- 三木総理の靖国神社参拝2 (法制局の見解など)
- スト権スト1 (労働側、富塚三夫)
- スト権スト2 (食糧輸送対策)
- スト権スト3 (社会党と民社党)

第9回、第10回、第11回 (掲載省略)

第12回

- 三木内閣時代Ⅲ (一九七五～七六) ……………
- 新自由クラブ結成への動き1 (発端)
- 新自由クラブ結成への動き2 (伏線)
- 新自由クラブ結成への動き3 (新党結成)
- 新自由クラブ結成への動き4 (新党の意味)
- ロッキード事件1 (発端)
- ロッキード事件2 (フォードへの親書)
- ロッキード事件3 (稲葉修法相)
- ロッキード政局1 (挙党協の動き)
- ロッキード政局2 (臨時国会召集か解散か)
- ロッキード政局3 (松野政調会長)
- ロッキード政局4 (一九七六年十二月の総選挙)
- 防衛費GNP-%枠問題
- ミグ二五強制着陸事件 (一九七六年九月)
- 三木内閣退陣
- 外交・危機管理問題
- 総裁選への予備選挙導入 (金大中事件の政治決着、クアラルンプール事件)
- 三木内閣時代Ⅳ (一九七五～七六) ……………
- ランブイエ・サミット1 (サミットへの招請)
- ランブイエ・サミット2 (国内の対応)
- ランブイエ・サミット3 (スポークスマンとして)
- ランブイエ・サミット4 (同時通訳とシエルパ)
- ランブイエ・サミット5 (G7、組合支部、三木発言)
- 天皇皇后両陛下初訪米1 (訪米の決定)
- 天皇皇后両陛下初訪米2 (政治的な意味)
- ソ連グロムイコ外相来日 (一九七六年一月)
- 現代中国論1 (台湾問題)
- 現代中国論2 (通貨、民主化問題)

第13回

- 三木内閣時代Ⅳ (一九七五～七六) ……………
- ランブイエ・サミット1 (サミットへの招請)
- ランブイエ・サミット2 (国内の対応)
- ランブイエ・サミット3 (スポークスマンとして)
- ランブイエ・サミット4 (同時通訳とシエルパ)
- ランブイエ・サミット5 (G7、組合支部、三木発言)
- 天皇皇后両陛下初訪米1 (訪米の決定)
- 天皇皇后両陛下初訪米2 (政治的な意味)
- ソ連グロムイコ外相来日 (一九七六年一月)
- 現代中国論1 (台湾問題)
- 現代中国論2 (通貨、民主化問題)

第14回

三木内閣時代Ⅴと福田内閣時代Ⅰ(一九七六～七七)

◆質問項目

- 現代中国論3 (靖国神社問題)
- 日本・モンゴル国交樹立三十周年(二〇〇二年)
- プエルト・リコ・サミット1 (サミットの概要)
- プエルト・リコ・サミット2 (サン・ファン)

- 現在の政局から1 (辻元清美と田中真紀子)
- 現在の政局から2 (加藤紘一)
- 三木武夫のアメリカ観
- 防衛費一%枠問題
- 鬼頭史郎のニセ電話事件
- 国会対策委員長1 (議運と国対)
- 国会対策委員長2 (野党対策)
- 国会対策委員長3 (国対への適性)
- 国防会議と日米首脳会談
- エリザベス女王からの勲章
- 三木内閣最後の選挙戦
- 「福田内閣時代」

第15回

福田内閣時代Ⅱ(一九七六～七七)

◆質問項目

- 福田内閣の閣議と閣僚懇談会
- 文部大臣5 (ゆとり教育の始まり)
- 文部大臣6 (学習指導要領の改正)
- 文部大臣7 (日教組と社会党)
- 文部大臣8 (芸術、文化関係の仕事)
- 文部大臣9 (国立大学と入試制度1)

第16回

福田内閣時代Ⅲ(一九七七～七八)

◆質問項目

- 文部大臣10 (国立大学と入試制度2)
- 文部大臣11 (主任制度と学歴偏重打破)
- 文部大臣12 (日教組との対立)
- 文部大臣13 (心の教育のために)
- 派閥解消と三木派
- 文部大臣14 (役所と秘書官)

第17回

大平内閣時代(一九七八～八〇)

◆質問項目

- 一般消費税導入論と七九年総選挙
- 四十日抗争1 (三派連携)
- 四十日抗争2 (福田・大平密約)
- 四十日抗争3 (主流派と中間派)
- 四十日抗争4 (分裂の回避と財界)
- 四十日抗争5 (東西冷戦との関連)
- 四十日抗争6 (連立政権構想と組合)

第18回

◆質問項目

- 党広報委員長1 (広報委員会の位置づけ)
- 党広報委員長2 (広報委員会の仕事)
- 八〇年総選挙
- 韓国との関係
- 日独議運会長として
- 三木派党員数の増減
- 自民党刷新連盟
- 大平内閣不信任案の可決

第19回

◆質問項目

- 対北朝鮮交渉について (一九八九年頃)
- 鈴木善幸内閣の成立1 (後継総理)
- 鈴木善幸内閣の成立2 (組閣)
- 文教制度調査会長1 (調査会と部会)
- 文教制度調査会長2 (高等教育の充実)
- 文教制度調査会長3 (地域特性の活用)
- 文教制度調査会長4 (戦後教育の見直し)
- 文教制度調査会長5 (週休二日制と初任者教育)
- 資料の保存について
- 憲法調査会

- 現在の政局から1 (自由党と民主党)
- 鈴木・レーガン会談と「日米同盟」
- 現在の政局から2 (イージス艦派遣)
- 自民党、中選挙区事情
- 非核三原則についての議論
- 第二次臨調の始まり
- 参議院への比例代表制導入
- 党国民運動本部長1 (位置づけ)

- 党国民運動本部長2 (仕事)
- 党国民運動本部長3 (副本部長)
- 党国民運動本部長4 (派閥と人脈)
- 党国民運動本部長5 (労働組合対策)
- ワインバーガー米国防長官の来日
- フォークランド紛争
- ロッキード事件の判決1 (判決と反響)
- ロッキード事件の判決2 (灰色高官)

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 20 回

中曽根内閣成立（1982～1983）

【2003年1月20日（月） 14:15～16:15】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー]（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

[記録、編集] 丹羽 清隆

(2003年1月20日)

1. 前回の最後に教科書問題についてお聞きいたしました。82年7月から問題は紛糾するわけですが、この過程で先生は中国に行かれたというお話がありました。その点を含めて、教科書問題に関して先生がどのような関わりをされたのかお願い致します。
2. 82年10月、鈴木首相が退陣を表明します。鈴木退陣についてはどのように見ておられたのでしょうか。また、その後党首脳による候補一本化調整が失敗し、11月24日に総裁候補決定選挙(予備選)が実施され、中曽根氏が57%を獲得します。そして翌25日に臨時党大会が開催され、中曽根総裁が誕生しました。予備選には河本氏の立ち、二位となったわけですが、この一連の経緯についてお願いします。
3. 11月27日、第一次中曽根内閣が成立します。官房長官に田中派の後藤田氏が就任したのをはじめ、田中系が7名を占めて「田中曽根内閣」などといわれました。先生は発足した中曽根政権についてどのようなご印象でしたか。
4. 83年1月、自民党の若手リーダーの一人である中川一郎氏が自殺しました。これについてはどのようなご印象でしょうか。
5. 中曽根首相は首相就任後最初の外遊先に韓国をえらび、また韓国訪問の直後訪米しました。最初の外遊は米国が多い中で中曽根首相が韓国を選んだ点、さらに訪韓の成果などについてはどのようにお考えでしょうか。
6. 上の質問とも関連しますが、訪米した中曽根氏は、「日本列島不沈空母」発言などをなさり日本国内で論議を呼びます。こういった中曽根発言や防衛力増強への取り組み方を先生はどのようにご覧になっておられましたか。
7. 83年6月、参議院選挙がありました。全国区ははじめて比例代表制が導入された選挙でしたが、国民運動本部長として選挙の事前活動等に先生はご活躍されたと思います。自民党は安定多数を維持、ミニ政党が躍進したこの選挙についてご記憶の点をお願いします。
8. 9月、大韓民航機撃墜事件が発生しました。先生ご自身に直接関係のある問題ではありませんが、この事件についてお聞きになったときのご印象はいかがでしたか。また、対ソ関係では重要な問題ですが、この事件をめぐって自民党内で何か議論などなさいましたか。あるいは自民党の遊説のなかで問題にされたりということはございましたか。
9. 10月、東京地裁でロッキード事件丸紅ルート裁判が行われ、田中元首相に4年の懲役および5億円の実刑判決がありました。これはどのようなご印象ですか。また、政界へはどのような影響がありましたか。

10. 10月、ビルマのランゲーンで北朝鮮のテロ事件がありました。また日本関係でも第18富士山丸の拿捕、紅粉船長らの抑留事件が11月に発生しました。北朝鮮との関係について先生はどのようにお考えでしたか。また国会内で対北朝鮮問題の議論はどの程度なされていたのでしょうか。
11. 12月、総選挙があり、自民党は大幅に議席を減らし、無所属8人の追加公認で過半数維持という与野党伯仲状態となりました。この選挙についてご記憶の点をお願いします。

※今回は以上のような点を中心にうかがいたいと思います。

■現在の政局から1（保守新党）

海部 ご機嫌うるわしいですか。

伊藤 まあ、どうでしょう。先生も年末は予測通り、解散ではありませんが、いろいろゴタゴタがございましたね。大政局ではありませんでした。「二〇〇二年十二月保守党に、民主党を離党した熊谷弘、佐藤敬夫らに加わり保守新党を結成。同時に野田毅党首が自民党に戻り、熊谷氏が党首となる」

海部 全然、全然、大政局じゃないんですが、志の低いやつがおつて、駄目です、あれは。

伊藤 何か民主党から少し来たと思つたら、突き出されるように自民党のほうにちよつと行きましたね。

海部 あれは扱つて立つ基盤が違うし、話をしておつてもルールが違うから、全然駄目なんです。少し増えるとか増えんとかいつても、あんなことでは大した変化はないです。

伊藤 プラスマイナスは、プラス一ぐらいですか。

海部 結局プラス二でしたね。

伊藤 十ぐらい増えるよね。

海部 法案提出権までは行かせたかつたんです。そうすると、物を言うときに迫力が出ますね。

伊藤 そうですね、法案提出権がないというのはちよつと寂しい限りですね。

海部 法案提出権がない政党は、政党であつても寂しいわけです。それよりも何よりも寂しいことは、選挙区の事情で当選できないから頼みに行つて、了解してくださいということだ。お前の立場はなんだい、と思う。

伊藤 本場に立場ですね。

海部 ほかのものならみんな観念して、追放してやるけれど。しか

も僕はあのためにえらい迷惑を食つたんですからね。どうしても党首をやらせてくださいと言うから、扇さんがいやがるのに、理由をつけて引きずり降ろして辞めさせたんだから。

伊藤 泣いてもらつたわけですね。

海部 そうそう。「あのときのセリフや、あのとき手をつけて物を言つた態度はどうしたんだ」と言つて怒つた。だからあれは志が低いわ、みんな。要するに自分の選挙が弱くなると駄目だな。

伊藤 やつぱりそういうものですかね。

海部 現実にはそうじゃないですか。

伊藤 それはそうですね、弱いといつても立場というものがあつたんじゃないですか。

海部 そういう名誉の意識とか名誉の感覚が、あいつらからはなくなつてゐるな。

伊藤 そんなに選挙は危ないんですか。

海部 このあいだの熊本の市長選挙が惨憺たる結果でしょう「二〇〇二年十一月十日投票、無所属新人の幸山政史氏が、無所属現職で三選を目指した三角保之氏、自民、公明、保守推薦、社民支持を一六、四二四票差で破り当選」。

伊藤 それを見て、アツというものですか。

海部 ああ。だからそんなものは、それを乗り越えてやつていくと、また開けるものなんだ。

伊藤 まだ選挙まで時間がありますからね。

海部 そうそう。だからあのときも、最初、三角市長の選挙のときは行つたんです。

伊藤 応援にですか。

海部 応援に行つて街頭演説をやつたんだ、一緒になつて。あそこには昔からの仲間やほかの筋の人もおるから、合わせて集めてやつたんですが、何か萎縮しちゃつて、これで選挙は駄目になりますという。やつてみて、落ちたときにそういうことを考えればいいわけで、そのときが来るまでは楽天的に、勝てる、必ず勝てるという必

勝の信念を持ったら勝てるんだ。まだ済んでおらんのだ。「だいた
いお前は選挙区に帰って、人の中に入って、手を握って、心の通い
路を求めたことがあるか」といつて聞いたたら、「いろいろ帰ってや
っておりますが」と言っていたけれど。

伊藤 あの人はお役人ですね。

海部 役人です。大蔵省だもの。

伊藤 やつぱり地元民との触れ合いが少ないんですかね。

海部 少ないわけだ。ほとんどないですね。

伊藤 役人から転出した人には、そういう人がかなりいるわけです
かね。

海部 まあ、ひとのことだから。

伊藤 議員さんにはいろいろなタイプがあるんでしょうけれどね。

海部 いろいろなタイプがありますが、どんなタイプでも、自分の
後援会に楔を打ち込んで、その拠点と心の通い路さえあればいいん
だ。自民党に頭を下げて入っていかなければこの次の選挙で当選で
きませんなんて、そんな情けないことを言うぐらいなら、初めから
出て来なければいいんだ。

伊藤 自民党に入ったら当選できるかといったら、そんな保証はな
いでしょね。

海部 「当選」できない。だんだん悪くなっていくんだからね。も
う首を括って死のうというやつそばに行つて足を引っ張ろうとい
う役をやるわけだ。徐々にそうなってきたでしょう。だから改革と
いうのはもう少しきちんとやらなければならぬ。「君は自民党を改
革しようというので、改革特別委員会の委員長までやってくれたん
じやないか」と言ったら、「そういう話はいま聞いても——、まあ
その通りです。返す言葉がございません」とか言っている。「もう
目の前に来ている選挙のことを思うと、この場で頭を下げていくの
が一番いいと思う」という。それでみんな仲間の議員も怒っちゃっ
たんだ。

伊藤 怒るでしょうね。だっていちおう自分たちの親玉でしょう。

海部 いちおう党首にしたんだ、みんなだ。それから大臣ポストの
割り当ても党で持っていたんだから。扇千景は、おれがやるやると
いうものだから、あの頃はえらい恨みに思っていたみたいけれど。
「なくによ、海部先生、このていたらくは。先生も人を見る目がな
いね」なんて言われちゃって。さんざん言われた。

佐道 返す言葉がないですね（笑い）。

海部 「まあまあ、一杯飲んで。そんなことは言うな」と言つてね。

伊藤 でも扇さんはいいいじゃないですか、ちゃんと大臣のポストは
あるし。

海部 それは彼女は御の字ですよ。

伊藤 野田さんはあのとき替わりたかったわけでしょう、党首にな
ったんだから。

海部 そう。

伊藤 それで今度の新しい党首はどうですか。

海部 あれはまたちよつとクエスチョンマーク付きだから、いまよ
く注意して見えますわ。いろいろなことがあるんだ。僕個人も一
つ接点があった。海部内閣のときに、小沢一郎が「ソ連に行かせて
ください、そしてなんとかというのと裏交渉をやってくる」と言っ
たんだな。「まあいい。その代わりお前、約束は守ってくれよ。四
島返還が大前提だから、そこを間違えなければ、おれはそれをやる
うと思つているから、行つていいから、やつてらっしゃい」と言っ
た。そうしたら、そのとき見せた電報が、熊谷が向こうに先行して
打つてきた電報なんだ。向こうのなんとかというのと裏話をして、
例の二千八百億ドルの金を出してくれたんだ。それで四島を返すと
は言わないけれど、それが全部の条件緩和につながつて、いい結果
が出る、なんていうことをやつておったんですね。僕は「きちんと
紙に書いて残して来いよ。しかも四島だよ、二島じゃ駄目だ」とい
った。それに騙されて小沢は飛んでいって、赤つ恥をかいた。会つ
たその日になんとか四島で行けるという何かをもらえらると思つたら、
木で鼻を括つたように会談は終わつて、ゴルバチョフにもう一回会

つてくれと言ったら、なんべん会つてもいいけれど、話をするのは今度日本に行つて総理と話をすることになってるんだから、という言い方をされた。すぐに電話をしてきて、申し訳ありませんでした、その通りでしたという。

伊藤 それは誰が電話してきたんですか。

海部 それは熊谷本人、二度目のときは小沢本人だ。それはそうだよ。あれだけ大きなことを言つて出て行つて駄目だったんだからね。だから危ないんだな、日本のああいふ外交は。

伊藤 何とかの筋を通つて、というものです。いまの北朝鮮もそうすけれどね。

海部 そうだよ。だから何とかの筋だとか、誰がこう言つたからいいとか、誰がこう言うというけれど、そんな正式な立場じゃないやつかやつても駄目だな。

伊藤 結局詐欺に等しいことになるでしょう。お金なんか渡したら。

海部 お金なんか渡しているから。通産省もそれに嘯んでおつたんだ。外務省の鼻を明かそうと思つたのかな。

佐道 熊谷さんはもと通産官僚ですからね。

海部 そうだ。まあ、複雑怪奇なことがあるけれど、さわやかじゃないな。

楠 一番腹が立つのは、創価学会への態度が一八〇度変わったことですね。熊谷さんは民主党の中で批判の先鋒に立っていましたね。ほかの宗教団体に支持してもらつて。

伊藤 何か土下座しているとかいう話ですね。

楠 そうそう、反省文を財布に入れて持ち歩いてるんでしょう。

海部 反省しますといつて。あれも長くないわ。

伊藤 海部党首という話はないんですか。

海部 いや、頭からお断わり申しあげたんです。小さい政党のあれで、さんさん苦勞して駄目でしたから、やるときはやっぱり法案提出権があつてね。

伊藤 少数派閥でずっとやってきましたからね。

海部 そんなことをやるぐらいなら、もういつペン呼んで、もつと陽の当たる場所で大同団結をして、保守再編成をやつて、保守合同をやるうと。全部一緒になつて参加するならいいというのが、そのときの僕の議論の一つでした。

■現在の政局から2（保守合同の可能性と解散風）

伊藤 いま保守合同の可能性はどうですか。

海部 いま現段階は、選挙が目の前にありますし、いろいろなものがいつぱいおるから、いまは駄目です。雑然たる中からは何物も生まれてきません。

楠 今度保守合同なんていうことになつた場合、三木武吉に代わるようなキーマンはいますか。

海部 出て来るでしょう、そのときになれば。

楠 こいつかな、という人は先生の中にいますか。

伊藤 それがあれば、もう半ばできたような話だから。どういふうに物事が転ぶのか全然見えないというのがいまの現状じゃないですか。

海部 選挙の結果でどれぐらい淘汰されるか、それもありますね。

伊藤 かなりお年寄りが蹴られるかな。

海部 辞めた方がいいと思う。

佐道 みなさん、いつあるかわからないけれど、解散ということ浮き足立つているという感じになつてるんですか。

海部 まだまだ。新聞が先走つてるだけだ。一番先走つて浮き足立つているのは新聞で、いままだ比較的みんな落ち着いています。今日の本会議なんかでも定足数に欠けるなんていうことはまるつきり心配無いですからね。

伊藤 やっぱり浮き足立つてくると――。

海部 ——本会議なんか来なくなり、弱いやつは。

伊藤 そうすると定足数も割れるということがあり得るわけですか。
海部 そうです。

伊藤 それは一つの目安ですね。

楠 解散風というのは、そういうことなんですね。

海部 それこそ、みんな背に腹は替えられなくなるから、心配になってきて、あそこの村が弱い、この町が弱いといえばそこに行つて、本当に人が集まってくれるかどうか、後援会の基盤はしっかりしているかどうか、みんなやってくるじゃない。

佐道 その風は、議員先生方は肌で感じて、だいたいわかってくるものですか。

海部 どうでしょう。

楠 風邪だから、うつちやうんでしよう。

海部 風といつても目に見えないものだからね、その人の志が低いというか、心が弱い人は、怖れおののいて浮き足立つわけだ。水鳥の羽音に驚く平家の群集心理みたいなものが働く。だからやたらにポスターを貼つてみたり、やたらに帰つて、人を集めて物を配つたりし始めるわけです。いまでもそうだ。

伊藤 これからしばらく、お話を伺っているあいだにいろいろ展開があると思いますが、このあいだのは小さな波乱ですね。

海部 あれはちよつと、波乱といつてもきつかけにしては小さすぎる。

伊藤 そうですね、広がるものではない。民主党も、あれから漏れてくるといふ可能性はあまりないでしょう。

海部 いや、漏れてくる、漏れてくる、ときかんに強がりをおつておるんですが、漏れてきても、ちよろちよると水が漏れるぐらいのことです。大した変化はありませんわ。

伊藤 そうですね。保守党に行つたからといって風が吹くわけでもないですからね。

海部 ありません。ただ一つ言えることは、保守新党になったら、いままです世論調査で〇%であったのが、〇・一%になった。そんな

ことでお前ら喜んでいたら駄目だ、と言つただけだ。

伊藤 いろいろ変化があるでしょうから、それはまたそのときにお話を伺うことにして、また元に戻ります。

■日中教科書問題1（中国訪問）

伊藤 鈴木内閣のときのお話で、八二年、鈴木内閣が退陣するちよつと前ですが、教科書問題がありまして、中国とのあいだでもめて、先生はそのときに中国に行かれたんですか。

海部 小川平二さんの代わりみたいな格好で行つたんです。

伊藤 小川さんは何ですか。

海部 文部大臣です。

伊藤 文部大臣の代わりとして行つたんですか。

海部 当時僕は文教制度調査会長か何かを党でやっていた。

伊藤 それでお出かけになつて、どうでしたか。

海部 どうもクソもない、何東昌という向こうの当時の文部大臣に「あんたの方はいまえらいガタガタ言っているけれど、われわれは悠久の未来を目指している。日中両国がこれからきちんとしていかなければならぬ」ときに、後ろ向きの問題でやっていてはいけません」と言つた。そして、ここで一発中国をほめなければいかんと思つた。

当時、三木武夫さんは周恩来さんを非常に評価しておつたんです。周恩来さんとのやりとりも当時はずいぶんあつたんですね。僕は横におつて、いろいろ聞いておりました。当時中国は、百家争鳴みたいなことがあつたけれど、最後のまとめをやるときは周恩来さんが深夜代表団を呼んで、有名な「忘れるけれど許さないよ。けれども、それは前向きに乗り越えてやっていこう」という非常に高い次元で物事を片付ける決断をされたので、日中平和条約ができるきっかけになつたんだということですね。それは三木さんから前に聞いて

いたことがあります。

それからあのころ、日本と中国のあいだを取り持って一所懸命走り回っておった、孫平化さんという人がおりましたね。あの孫平化さんは文部省までもときどき来ましたよ。僕のところにも上がってきた。周恩来・三木会談の通訳をやったのが王效賢さんという、当時日中友好協会の副会長か何かの女性で、その人が背景を説明してブリーフしてくれると言うから、それを聞いた。どっちの誰がどう言ったか、詳しくは忘れたけれど、全体の人の話を聞いていると、周恩来さんは「とにかく昔話はやめにして、手を握ろう、それが両国のプラスになるんだ」といって、その点では一致した。

それで僕が行ったときに、「あなたの国が小川平二文部大臣の訪中を断ったから、僕が来たんだけれど、せっかく僕は中国を尊敬しておったのに、どうしてあんなおかしなことをやるんですか」と言った。

むしろ中国は、僕がまだ一年生、二年生の議員の頃は、招待する前に誓約書に署名捺印させたんですね。日中平和三原則をあなたは認めますか、認めませんか、というやつだ。あのとき窓口をやっておったのが、先輩の川崎秀二という人です。いまの川崎二郎君のお父さんだ。これは三木先生の弟分みたいな関係だったんだ。中曽根さんもそうですよ。当時の三木派の朝食会は、三木さんがおつて、川崎、中曽根、という両者が来ておつたんです。その川崎秀二さんが、若いわれわれを中国に連れて行きたいから、「勉強させてやってくください、三木先生、いいですね」という。三木さんは「いいですよ、行ってらっしゃいよ」というわけだ。さて行こうと思つたら、誓約書だ。日中平和三原則を認めて、それに従うかどうか。いまから思えばそう大した問題じゃないんですよ。内政不干渉の原則を守るとか、なんとかかんとか書いてあった。

その頃、西岡「武夫」は「それでよろしい、行こう」と言うんだね。けれども「私は」、「初めから手を縛られて、これに約束して署名捺印しなければ許さないとまで言われるなら、もういい」とい

ってやめたんです。「そこまで君、頑なに拒まなくても、素直に行つて向こうを見て、話を聞いてくるだけでも中国という国がわかるよ」と三木先生は言われた。「それは駄目だ、そういうふうになつたらまた行きますから」と言った。ここにお使いに来ておつたのは、孫平化と肖向前といったかな。そしてその肖向前さんがいろいろ言つたけれど、とにかく僕は署名捺印しないからこれは持つて帰つてく大きいと言つて、やめになつた。川崎さんのほうは行きました。西岡もそのとき確かつて行っているはずだ。それからあと、自民党青年局の若手が二、三人おりましたね。僕はそういうことが前に一つあつた。「中国はいろいろそういうことを覚えておつて、いつでも尾を引くかもしれんぞ」と言つた人がおるけれど、「結構だよ」と言つておいた。

そうしたら案の定、覚えていました。それで、文部大臣の代わりに僕が文教制度調査会長として行つたときは、「海部先生は今日こうしておいでいただいたけれど、初めるときはなかなか原則を強硬に言われた」という。「それはそうだ、あなたの国も原則だから、日本は日本の原則があつて、日本の国会議員に來いといつて呼んでくれる以上は、そんなに縛らないで、あるがままの中国を見てくれ、そして何でもいいから聞いてくれとならなければね。あれを言つていいとか、これは見ちゃいかんとか、これはこうだという方向性の決まつたことでは行きません」と言つた。そうしたら、「あなたは民族自決、相互不干渉、平和共存には反対なんですか」というから、「いや抽象的にそういう言い方をされると、その精神はみんないいことだから、反対しませんよ。ただ行く前から、どうなるかわからないのに、この三原則を私が認めて、それを守りましょうという署名捺印までさせるということが、どうも私には許せなかつたんだ。けど、いつまでもそんな古い話はやめましょう。いま古い話をしているところではない。教科書問題で足下に火がついてしまつている。私は言わなければならんことがあつたから来たんだ」と言つた。

■日中教科書問題2（教科書問題）

海部　　そういうやりとりをしていたが、そのとき、その上の人は誰であったか。日中友好協会を代表して趙安博といったかな、肖向前の親分で、何回も日本に来たことがあるでしょう。その人ともいろいろな話をして、当時の文教の關係で話をした。

教科書問題でどうしてそんなにいうんだ、あなたの国は検定教科書をやったことがあるか。もちろん国定教科書しかあなたの国にはないでしょうけれど、日本は国定教科書ではないんだ。ただこういう枠の中でつくりなさいよという方向性と範圍を狭め、そして業者に投げかける。そうすると、我と思わん業者が著者をピックアップしてやる。著者がまとめて書いた本を白表紙と言って、誰が書いたかわからんような状態にして、文部省の教科書調査官が検定する。あれもずいぶん細かいことをつけたんですね。テニヲハに至るまで、ああたどうかこうだとか。けれども一冊の白表紙の本に、何百ヶ所となるような要請がついたんです。そこで問題になるのは、検定を受けたいと言って出して白表紙の本をつくるまではまったく自由なんです。言うなれば、左の方の人も右の方の人も、みんな出て来るわけですね。その中にこれを書いてある、これを書いてないと言って怒られたのでは、これはいかん。日本の検定の制度はそういうことなんだ。検定をして、なおかつ出来上がる教科書について、最終判断が出たあとで、なおどうしてもいかんというときは、近隣諸国とのあいだの相互の信頼關係を損ねてはいけなやか、いろいろなこと教科書の訂正ができるんですね。

伊藤　　あれは検定の過程でやるはずだと思います。

海部　　検定の過程で、文部省が何百ヶ所かつけるでしょう。それにどうしても従えないと言われたらどうするかというのと、もう一段上の裁判になるわけですから、そこに行く前にだいたい片が付いたわ

けですね。教科書裁判でずいぶん頑張った家永「三郎」さん、ちようどあれとは、いろいろなところで交差してダブっていましたけれどもね。

伊藤　　あのときはたしか、朝日「新聞」が、「侵略」を「進出」に変えさせたという誤報をしたんですね。

海部　　それ「侵略」を「進出」に変えさせたこと」はやったことがありませぬ。絶対にありません。

伊藤　　ないんです。だけど朝日が先走って報道したものですから、ワーツと広がっちゃったんですね。火をつけたんですね。

海部　　あれはどれだけ調べてもありません。ただ、敢えて言えば、それまでも二十何種類あった社会科の教科書の中には、「中国本土へ進出した」と書いてあったのもあったし、「侵略した」と書いてあったのもあるし、いろいろあったんです。だからそれを捉えて、変えたとか変えないとか、変えさせたいとかいうことは、日本の検定制から言ってありませんよ。あのとき僕らも歯がゆいなと思ったのは、ここはこうしたいという申請があつて初めて判断の対象になるわけで、申請がなければ、変えろとも変えろとも言えないわけですからね。

伊藤　　途中ではね。

海部　　はい、そういう途中の経緯なんかも説明して、「私は今日は大臣の代理で来たんじゃないから、別に有権的なやりとりができる権限を持っているわけじゃないけれど、党の文教制度調査会長として来た。みんながこの問題は注視しているから、両国は今後とも、それこそ『日中友好子々孫々』というのは、あなたの国の最も信頼する周恩来先生が言った言葉じゃないか。子や孫の代まで友好を続けていこうというのなら、教科書の問題で、もうそろそろこのへんで了解するところは了解してもらわなければいかんよ」ということを言ってきたんですね。

伊藤　　それは党の代表ですか。

海部　　党の代表です。党の調査会を開いて。もちろん中には、部会

のメンバーもダブっているということを申しあげましたが、部会の代表も入っています。そういうときは「文教合同」と言いました。

伊藤 文教部会と調査会の合同ですね。

海部 はい。そこへもってきて、超ウルトラ・コンサバティブみたいな人がおつて、教科書問題に関する特別委員会なんていうのを党内でつくつて、そちらもまた光を当てて、これは右寄りから出てくるわけですね。

伊藤 誰ですか。

海部 これは奥野誠亮あたりだ。そしてそれをバックしたのが稲葉修さんとかね。

伊藤 稲葉さんもそつちですか。

海部 われわれから見ればそうだ。特に教科書問題で大きく分ければ、奥野誠亮、稲葉修、大阪の原田憲。原田憲は文部大臣経験者じゃないのに、特に志願して文教制度調査会に参加してきた。

伊藤 かなり議論したわけですね。

海部 はい。

伊藤 それで中国側では、例えばこちらが党の代表として行ったら、向こうは誰が対応するわけですか。

海部 文教部長です。

伊藤 政府の人でしょう。

海部 そうです。文部大臣ですから。

伊藤 こちらが党の代表が行っても、向こうは共産党ではなくて、政府が対応するわけですか。

海部 そうです。その筋道や手続加減は、僕もよくピンと来ないけれど、事実そうで、その中でやってきたんです。それで、これは余計なことかもしれないが、周恩来閣下を褒めるに如かずと思って、さんざん褒め称えて、「われわれはみんなそう思ってやってきたのに、こんなことであなたの国に横を向かれたのでは耐えられない。せつかく壊れそうなものを壊さないで、大事に大事にやっつけていこう」としているときだから、あなたの方もそのぐらいやっつけてください

よ」と言った。小川平二という文部大臣が来たいといったら、向こうは招待もしたんだから。「素直に呼んでみせてもらったらどうでしょうか」というような話までそこではやっただんですが、完全合意には至らなかった。

伊藤 言いつ放しでも、とにかく言ったわけですね。

海部 言いつ放しで言ってきた。その代わり、帰ってからいろいろ大きな修正ではなかったけれど、部分的にどこかちよつと直したはずですね。けれども、そんな小手先の作業で片が付くような問題ではない。

伊藤 あとあとずっと尾を引くんですね。でもそのときはそういう形で、一応決着させたということですね。お互いに合意したわけではないけれど。

海部 文書を書くような仲間でもなかったけれど、その代わり向こうも、今度日本にお帰りになるときに、中国の教科書をみんな持って行ってくださいという。

伊藤 中国の教科書はひどいですからね。

海部 それで持って来たんだ。

伊藤 日本の悪口ばかり書いてある。これが子々孫々の平和か、と思うような。

海部 本当にひどいことが書いてあるね。そういうことまでやり出すと、これはキリがありませんから、そういう不毛な論争をやめて、前向きに未来志向で、守るべきものは何で、一番大事なことは何で、お互いに内政不干渉の原則もありますからね。教育というのは、きわめて、それぞれの国の主権の問題だと思っっていますからね。だから表現をあしるとかこうしろと言われて変えたりすることはできないという立場ですつと一貫しておりました。それがいつか、宮澤内閣のときに河野洋平官房長官の談話でガラツと変わっちゃったからね。洋平も昔は文教部会におりながら、なんだ、お前はといて、いろいろ議論があったことが思い出されますね。

伊藤 そうですか。それはまたそのときに伺います。

海部 あとから出て来ますからね。

佐道 もう一点だけお願いします。先生は中国にいらつしやつたわけですね。教科書問題のときには、韓国の方でも問題があつて、韓国はもつと具体的に記述の訂正まで覚え書きにして、外務大臣が日本の大使に渡す。つまり外交折衝を申し入れるわけですね。これは普通の外交常識的かというと、かなりひどい話なんです、これはいかがでしたか。

海部 あの頃はまだ中国だけの窓口になつて、中国をやりましようということをやつていましたが、このあいだのときは韓国は、またいまおつしやるようにやるんです。政府に対してものを持つてきて、申し入れをして、何十項目かこれを訂正してもらわなければ受けられません、とかね。

伊藤 このあいだもやりましたが、この時もやつたんですか。

佐道 この時もやつたんですね。

海部 それは行き過ぎだ。内政不干渉という大原則に立つて、教育というのは優れて国家の基本に属することだから、いちいち外国の教科書の、ここを訂正しろ、ここを改めろということ、はいはいと聞いて改めておつたらキリがありませんからね。

伊藤 よその国ではそんなことは受け付けませんからね。

海部 それはそうですね。ただそのとき僕は、韓国とはそういう直接のことはやつていなかった。日韓議連の誰かがやつたんでしような。中国はとにかく何東昌を相手に、いろいろやりました。

■鈴木後継総裁戦1（河本氏の立候補）

伊藤 ではまたあとで伺います。そしてその「一九八二」年の十月に、鈴木さんが退陣します。結局そのあと中曽根さんになるわけですが、その選挙のときに河本「敏夫」さんがお立ちになるとい

とですね。そもそも鈴木さんがお辞めになることは、だいたいわかつていましたか。

海部 あまり前からはわかつていませんでした。

伊藤 何か非常に突然のような。

海部 唐突のような外への漏れ方でした。あれは一週間か十日前に、三木さんのところへ行つたら、夜、新聞の番記者が帰つたあとで、「ひよつとしたらこれは政変になるぞ」という。三木さんは誰から情報をとつて、連絡が来ておつたんでしような。

伊藤 やつぱり三木さんというのはいふん早耳なんですね。

海部 早耳です。それで、「言うなよ」といった。言つてはいかんことは必ず口止めされるから、私はそういうときは絶対に言いませんでした、縛りが解けるまではね。それが政治家の財産だということですからね。

伊藤 信頼の問題ですからね。

海部 「言うなよ」と言うから、「わかつた」といつて言いませんでした。

伊藤 この時に予備選が行なわれるわけですね。予備選のときに河本さんもお立ちになるわけですが、二位になって、結局本選挙に至らずに終わり、そして中曽根さん「が総裁」になるといふことです、河本さんが予備選に立つと、海部さんは必死になって働かなければなりませんね。

海部 必死になつて働かなければならなかつたし、また現にやりました。ただあのときの間違いは、僕らの立場をもうちよつと考へて前からやつてくれればいけれど……。そのときまで僕は、自分の支持者であっても現金を配つてものを頼むことは、買収につながるからやつてはいけません。それをやつたら金の切れ目が縁の切れ目で、落選したら困るし、せつかくこつちが築き上げてきた鉄壁の布陣がくずれても困る。

伊藤 それはご自分の選挙区ですね。

海部 そう、僕の選挙区。僕の選挙区に行つて、立替分は全部出す

から名簿を出してくれ、ということなんだ。自分の後援会を二つにきちんと分けるわけですからね。そんなことまで僕はできません。

「とにかく正面切って頼んで、票をつくるだけはおつくりします」と言ったから、そんなにたくさんはできなかったんだね。

伊藤 結局党員による投票ですからね。

海部 党員による単純投票です。党費がたしかあのかは三千円だったかな。

伊藤 河本さんはずいぶん「党員を」おつくりになったわけでしょうね。

海部 一万票をつくるためには――。

伊藤 一万×三千円ですね。

海部 二千円だったかもしれないか。二千円か三千円か、どちらかです。とにかく三千円でやったときは、バックペイがあったんですよ。だから職域支部とか地方のグループをつくって、そこにどんとお金を持って行って、党本部にお金と票の名簿を持ってくるわけだ。そういうことは、あつたとき僕は後援者には言いにくかつたし、そんなことを言ったら、きょうまで一所懸命演説と説得だけでやってきた五万ぐらいの票がありました。後援会の組織がガタガタになる。お金をこつちから出すという癖をつけたら、この次に何かをするときに駄目になりますからね。

伊藤 しかし河本さんは、ほかの選挙区でそれをやっています、それが聞こえたりしたら具合が悪いじゃないですか。

海部 だいたい聞こえたんじゃありませんか。

伊藤 なんてうちの先生は、となりませんか。

海部 それはありません。

伊藤 しかし河本さんもお金を使ったんでしょね。

海部 ずいぶん使ったよ、それは。

楠 その本選挙に入る前に、立候補する際にはたしか議員の推薦人が必要ですね。どのぐらい外から集められたんですか。他派閥、あるいは無所属からということですね。

伊藤 三木派だけでは足りないですね。

海部 足りなかったもので、しょうがないから、よその派の人で訪ねていけるところは正攻法で訪ねて行って頼んだわけです。

楠 たしか父も、そのときに推薦人にさせていた（笑い）。

海部 本当、「楠氏を見て」このお父さんに推薦人になってもらっているんだ。

楠 それは、ほかの派閥の場合もあつたわけですね。無派閥だけではなくて。

海部 ありましたよ。三木派だけではとてもできませんでしたから。それぞれが、かわいがってもらっている人や親しい人や、口の利ける人のところへ、それこそ夜討ち朝駆けで誠意を示して頼んだんですよ。

楠 中曽根派、田中派、鈴木派、こういうところは頼んでも駄目ですよ。

海部 駄目ですよ。

伊藤 中曽根さんのところは駄目でしょう、中曽根さんが出ているんですからね。

楠 そうすると、鈴木派あたりの忠誠心の低いところに頼むわけですか。

伊藤 まあ、かなり機微な問題だけれど。

海部 まあ、それはちよつとなあ。いろいろなことになるから。

伊藤 推薦人というのは別に公表されるわけではないんですか。

海部 公表しますよ、新聞が聞きに来るから。それから、たしかあつたときは、三十人とか五十人とかだつたんですよ。

楠 何回か数が変わりましたね。

海部 選挙のたびに変わっているんだ。とにかくそれが満杯になつておらなかつた。三木派だけで、三十人にちよつと足りなかつたんだ。それで足りるところを埋めろということで、それぞれ頼みに行ったんです。

伊藤 河本さんはこのとき当選できると思って立候補したんですか

ね。

海部 本人の心の中にはあったでしょうね、未必の故意ぐらいのものは。落ちるかもしれん、落ちてもしょうがない、しかしやってみよう、やれば行けるかもしれない。それからやるならば、惜しまずに要るものは使ってくださいと。

伊藤 三木さんとはだいぶ違いますね。

海部 感じが違う。三木さんはどっちかというところ、呼んで、人を説得する。えらい時間をかけて説得して、せいぜい料理屋に行つて飯を食いながら頼む。説得して一票ずつ取るというほうで、あの人に今日会うから呼んできてくれとか、ここへ連絡してくれとか、いろいろやりましたよ。河本さんの場合はそうじゃないもの。

伊藤 大きな網を広げて、ブワツと集めるんでしょう。

海部 そう。

■鈴木後継総裁戦2（総裁戦の様相）

楠 あのときは、安倍「晋太郎」さんとか中川「一郎」さんも出ているんですね。

伊藤 あとでちょっと出て来ますが、中川さんが問題なんですよ。

佐道 単純に考えますと、中曽根さんを田中派が応援しているわけですね。本選挙になった場合、予備選の段階で落ちたところとうまく合従連衡をして、二、三位連合をやつて、という計算、目算だったんですか。

楠 それよりも、出ないと草刈り場にされてしまう。そうすると派閥として将来がなくなつてしまふ、ということがあつたんじゃないですか。

海部 いまの話で、そうしたら中曽根派に五億行けば、中曽根は立候補を思いとどまつて、中曽根派はオーブンの草刈り場にさせるとか、いろいろな裏の話があつたわけです。どこまでそれが本当か、

よその派閥のことまでは見たり触ったりしたわけではないけれど。

伊藤 噂はいろいろあつたんでしょうね。

海部 噂はいろいろありました。

伊藤 あとになるいろいろなことがわかるでしょうが、その場にいたら、どの噂が本当なのか――。

海部 これは墓場まで持つて行かなければならぬような話もだいぶあるんですよ。

楠 「資料を見て」この当時、推薦議員は五十人ですね。

海部 それが大変だから、三十人にしたのか、二十人にしたのか、だんだん少なくて来たんですよ。

楠 しかも、候補者が四人いないと公選にならない。それで中川さんが出て来たんですよ。

伊藤 出たんだ。あれは福田派の――。

楠 ――別働隊ですね。

海部 そこであの中川が、出る出るといったつて人がおらんから、推薦人を貸してくれと言つて、安倍晋太郎のところを頭に下げに行つたり、そこで何人か渡したとか渡さんとか、そんなことも問題になつていた。

伊藤 河本さんは、どこからゴソツと、というわけではないんですか。

海部 ゴソツとは借りてきませんでしたが、足りない分は穴埋めしなければならぬので、それぞれが手分けして。

伊藤 でも、ポロポロと一人ひとり集めても駄目でしょう。どこから借りてこなければ。

海部 いや、しかしそれでやつたんです。

楠 まとまって貸してくれるところは、考えてみるとないですね。

佐道 その立候補者からするとそうですね。河本さんの場合、三木派で河本さんの選挙のための選挙参謀といえますか、参謀長はどなたですか。

海部 井出一太郎と松浦周太郎じゃなかったかな。

伊藤 海部さんは？

海部 僕は参謀長じゃないです。まだ第一線の斥候小隊長ぐらいだな。ハツハツハ。

伊藤 斥候ということはないでしょう。だけど、あまりそういうやり方には馴染んでいないですよ。

海部 そうです。だから私にとつても初めての体験ですからね。おそらく三木さんにとつても初めての経験でしょうね。

伊藤 そうでしょうね。三木さんもびっくりされたんじゃないですか。

海部 それはびっくりした。「もうちよつと政治が本当にきれいなって改革するためには、多くの人が有権者にならなければいかん。いまのように、国会議員だけが有権者だから、裏ですぐにこういうことが起こる。それなしにして、広いところで訴えて、国民が投票するようにしなければならん」という発想だったんだ。じゃあ誰にやらせるか。街頭演説をやつて、誰かわかった人がここに集まつて、名簿を書いてください、それだけでそれが総理大臣を決める選挙の最初の入口ではちよつと困るから、やはり自由民主党の党員に限定する。それから党員じゃないけれど、あとき初めて党友というのをつくりましたな。たしか一万円でしたよ。党員になるのは三千元か何かだったんだけど、党友になると一万円。その代わり投票権は、党友も一票ずつしかない。そういうことになったんだな。

楠 この時、「総総分離論」があつて、中曾根総理、福田総裁でした。ところがそれを中曾根さんが拒絶して予備選に突入したという経緯が、私のメモにはあるんですが。

海部 あの時とき総総分離という話は、ほうぼうでありました。そして中でも最も珍案は、有権者の投票の一位を総裁にしる、二位が総理になれば、というものだ。そうしたら誰も真剣に争わんじやないか。いやおれは二位でいい、ということになる。そんな話も、みんなで真剣にやつた。

伊藤 二位が総理なら、河本内閣ができたじゃないですか（笑い）。

佐道 そのための議論だったとか（笑い）。

海部 あの時とき河本さんには、一位になるつもりがあつたんですからね。

伊藤 そうですか。先生がごらんになっていて、どうでしたか。

海部 いや、いろいろなところに広く広く手を打つておつたことは間違いありません。特に三光汽船の関係で。

伊藤 あと日大とか。

海部 日大は応援団長がここへも来て、日大は組織を挙げてやる、これだけやりますという。日大なんかには本当に、河本さんは持ちきれないぐらい重いお金を持っていったんだから。だから全部が全部、三木流の選挙ではなかつたと思ひますけれどね。

伊藤 全部が全部というか、まるで、というか（笑い）。どうして三木派がこういうことになるのか、よくわからなかつたですね。

佐道 予備選は、そもそも三木さんの提唱ですからね。

海部 三木さんが言い出して、それをする事によつて、最初は党勢拡張といった。われこそはという志の高い党員をたくさん集めて、党員の投票で決めればいいんだという。

伊藤 こと志とだいが違つたわけですね、結果としては。

海部 だいが違つちやつたな。

楠 前に伺つたかも知れませんが、どうも先生の話を伺つている限りでは、三木さんと河本さんは政治スタイルがずいぶん違うような気がするんですね。

海部 違う、違う。

楠 ただ、どこかでやつぱりつながつていたんじゃないかと思うんですが、思想的にどうか政治思想というのか、考え方としてはどうなんですか。

海部 いや、どこかでつながつていたことは間違いない。それからまるつきり違つていたことも間違いない。いつか三木さんが、おれに烈火の如く憤つて「海部君、あのね、河本が田中角栄のところを頭を下げていった。あんなちんちんしては駄目だ」と言つた。ちん

ちんしてはというのはどういうことかと思つたら、犬がちんちんしたという言い方だったな。「あれは最も恥ずべきことだ」なんて言つていた。そういう政治手法の違いもあるわけだ。明らかに聞いたのは、そのとき、そのことだ。

佐道 政治思想が違つて、政治手法も違つてると――。

楠 全然、合うところがないじゃないですか（笑い）。

海部 いやいや、それは三木さんがやろうと思つた日中国交正常化、これなどは河本は一所懸命支持をした。その代わり拠つて立つ岸が違つていたかもしれないけれど、中国とは協力して仲良くしていかなければならぬという。

楠 三木さんは国協党のほうから来たわけですね。いわば修正資本主義といえますか。だけど河本さんは財界人ですね。そのへんはどうですか。資本主義というか、経済に対する考え方として通じるところがあつたんですか。

海部 はつきり言うと、河本さんは財界主流じゃないでしょう。河本の話をいろいろ聞いてみたこともあつたけれど。船舶利子補給法というのができて、当時の運輸省のあれに従えば、船会社を計画造船の枠の中に入れてやる。そうしたら船会社が、我も我もとみんなそこに寄つていったわけだな。そういうことは好ましいことではないというのが、三木さんの政治手法とも合つてくるわけだ。

それで対岸に旗を立てて歯を食いしばつて自分が正しいと思うことをやつていくのが政治家の一つの資質であつて、河本さんの船会社があれだけ大きくなつてきたのも、官の金を両手を出してもらわなかつたからだ。官の金をもらうと、今度は船の総トン数から、いろいろなことについて規制をされる。そんな規制をされておつたのでは、十分四海に羽ばたいて商売ができない。だからその金は喉から手が出るほど欲しかつたらうけれど、取らなかつた、借りなかつた。その代わり香港に行つたり、ニカラグアに行つたりして便宜置籍船がおけるような会社をつくつたり、中国の方からとつてもない金持ちが香港にはおるから、そういう人から金を借りたりしてやつ

たわけです。

だから、時の与党からすると型破りだったことは間違いないんだな。素直に来てやれば、計画造船で金を貸すじゃないか、利子をつけないじゃないか、といろいろ言つても、それは結構です、それを借りたいろいろな規則で縛られたり、行きたいときに動かせないんですという。

伊藤 その面ではたしかに三木さんと通じますね。自由主義というか。

海部 そういうところに人生、意気に感じたんだろ、三木さんは。「河本のやつておることは、あれはすごいことだよ。よほどの度胸がないと、ああいうことはできない」と言つていた。

伊藤 それは非常によくわかる話ですね。

海部 「三木氏の声音で」官に向かつて、あれだけ楯突いたんだから」と言つた。

伊藤 河本さんの話はわかりませんが、三木派の中で河本さんを非常に積極的に支援していたのは、さつきおっしゃつていたお二人ですか。

海部 上の方では井出一太郎と松浦周太郎。この二人は国民協同党の如きは、「極まらば 眼つむりて 谷底へ 飛んで果てんと 誓いてし仲」なんていう歌を残して、三木さんが決断ができなかつたときには、やりましようといつてやつたぐらいだから。松浦周太郎さんは、ご承知のように北海道の山持ちですね。だから資金的な面倒は、井出さんのお酒の上がりではなくて、松浦さんの材木の上がりが大きかつたんじゃないかな、三木派にとつては。

伊藤 そういう人たちが河本さんのために一所懸命やつた。

海部 「うなづく」

伊藤 やつぱり、海部先生みたいに違和感を感じる人と、必ずしもそうではない人とがいたわけですね。

海部 それはそうです。

伊藤 このあたりはあまり詳しく伺えないので抽象的に伺いますが、そういうことですね。結局この時二位になったということは、将来への権利を確保したというふうに評価されるんですか。

海部 そうですね。二位になった。前回二位だったということは、もう軌道に乗ったと、われわれはそう評価をした。

伊藤 だからこれはよかったです、ということですか。

海部 よかったということです。

■中曾根内閣の成立1（海部氏と中曾根氏の関係）

伊藤 結果的には中曾根内閣ができるということになりますね。先生は中曾根さんとは、それまでどうですか。

海部 それまで中曾根さんは、三木派の青年将校でしたから、朝食会にもいつも来ておったんですよ。

楠 三木派ですか。河野「一郎」派でしょう。

海部 三木派ですよ。

伊藤 河野派になる前、青年将校と呼ばれた時代ですね。

楠 ああ、自民党ができる前の話ですね。

海部 いや自民党ができてからも、暫時三木派におったんです。石田博英とか。僕はよう忘れませんが、朝食会には、まだこっちが国会議員に当選する前から行っていましたから。その代わり序列は、松浦、井出のもつと下だ。けれども川崎秀二がおって、それから中曾根さんがおった。そのちよつと下がったところに毛利松平、丹羽兵助。

それから私が初めついておった河野金昇さんという人は、中曾根さん、川崎さんと当選回数と同じくらいですよ。戦後初めからだから。そして中野正剛の直系の家来だったわけですから、東方会の人、三木派には入っているわけですね。だから、一つ間違うと日本刀を抜くような組だよな。黒シャツを着て、中野正剛は自分で本場に

腹をやっちゃったんだから。そういう序列の中に中曾根さんも入っておって、当時は青年将校という言葉の走りなんですな。

伊藤 昔の中曾根さんの議会での演説を見てみると、本当に後年の中曾根さんとはだいぶ違いますね。左翼張りというのとも違うけれど、右翼張りというか、とにかく過激ですよ。その頃からご存知ではあるんですが、直接的な接触というのはどうですか。

海部 その頃からよく知っておったということです。それは議員会館が隣同士でしたから。中曾根さんの部屋と私の親分の河野先生の部屋が。

伊藤 それは、場所はどこですか。

海部 衆議院の一番古い、第一議員会館です。

伊藤 それはいまと同じところですか。

海部 いまの第三議員会館のあるあたりですか。木造の二階建てのガタガタの診療所のようなところですよ。

伊藤 そうですか。じゃあ若き日の中曾根さんもよくご存知なんですよ。

海部 よく知っております。そして、あの人は靖国神社の前に行つては、「ここにお祀りしなければならぬ人がまだいっぱいある。上は井伊掃部頭（かもんのかみ）から、下はそのへんの家事で殉職した消防夫の人まで、全部ここはお祀りしていいところなんだ。だから恐れ多くも天皇皇后両陛下も頭（こうべ）を垂れて尽くされるのは、国に対してこれだけ将来に向かつての手厚いあれがあるんだ」というようなことを、街頭演説で滔々とやっていたんだから。僕はそれを聞いておって、覚えていきますよ。

伊藤 でも政治的には、この時点までそんなに接触はないわけですね。

海部 その時点は、議員会館が隣同士だった。一番あれ「接触」ができたのは、中曾根さんの本会議での演説が全文取り消しを食ったことがあるんですよ。

伊藤 はい、ありますね。

海部 あのととき河野金昇さんは、兄弟分みたいいなものですからね。三木派の中で兄貴的で、中曽根さんが弟みたいな立場だった。それで全文取り消しを食ったりしたときに、ちよつと動いたんです。速記録から名誉回復をしてやらなければならんといつて。そのときに中曽根さんはこういう人だな、と思つて見ておりましたね。

伊藤 でも中曽根さんが河野「一郎」派に行き、やがて自前の派閥をつくるというプロセスでは、あまり接点がなくなってくるわけですね。

海部 そうです。

佐道 三木内閣の時に、先生は官房副長官、実質官房長官で、中曽根さんは幹事長ですね。

海部 スト権ストの時なんかは、毎晩のように党と内閣が連絡をとつていた。

伊藤 中曽根さんに対して、あまり悪い感情をもつておられないんですね。

海部 それは、なんというか、私の仲人ですもの。仲人という言葉の方が悪いけれど、表向きの仲人は三木武夫さんになっていますが、実質的には――。

楠 それは議員会館の関係ですか。

海部 そうそう。

楠 初めて伺いました。

海部 そんな話あまり政治には関係ないけれど。

佐道 いや、それが実は――（笑い）。

伊藤 でもこの時は、中曽根に対して戦つていたわけですからね。

海部 そうですよ、政治の世界というのは、割り切つて戦わなければならん。非常に非情な面がある。特に竹下さん、安倍さんと僕の関係というのは、ときどき上の親分が仲良くなつたり、分かれたり、組み合わせが変わつたりしますでしょう。そうすると、戦わなければならんわけだ。

伊藤 敵になつたり、味方になつたりしますね。

海部 それは戦うけれど、「おまえ、今日はひどいことを言つておつたな」と電話がかかってくるから、「しかたがないな、あれは」という。

楠 先生の話はずつと伺つていると、あまり敵がいらないというか、いろいろな関係が良好にみえますが、絶対に相容れないという関係もあるんですね。

海部 それはあるよ。

伊藤 絶対に相容れないんですか。

海部 絶対に相容れない人もあるでしょう、それは。

楠 差し支えなかつたら――。

海部 いやいや、そんなことは言わないけれど。そこは三木さんをなんとか、と思つているときには、中曽根さんだつて。

楠 それは、部分部分の局面では、絶対に相容れない関係がある、割り切つた上での相容れない関係があるでしょうが、人格的とか、そういうことも含めて、絶対にこいつだけは、というのは、やっぱりあるんですか。

海部 ハッハッハ。ないことはないけど、誰だか言えといわれると、忘れちゃつたな。ハッハッハ。

伊藤 局面が変われば、相許せない人とも握手しなければならんということでしょう。

海部 それはそうでしょう。それから変な話だけれど、NHKの討論会で各派の若手とか斬込み隊の参謀長が出るといふと、たいてい竹下さんや安倍さんや、そういうのが出て来るわけだ。ときには渡辺美智雄になつたこともあった、中曽根派は。そういうのと、ああいうところではバンバカやるけれど、夜になって、「本当の裏の話」を教える。なんていって、会つて裏の話を聞く。それはきれいな話。言うわけではないけれど、こんなでいたらくではわれわれの時代が来たときに困つちやう。底なしに金を使つたり、底なしに裏の方から応援団が出て来たしたりしたら悪くなつてしょうがないから、それだけはやめておこうやな。情報を透明にして、おまえの方はどれくら

い手を打ってあるかとか、どれぐらいあるかとか、物の相場を決めるためにはどうしたらいいかとか。特に河本さんなんかは、田中角栄でさえ、「河本は銭金（ぜにかね）にかけてはおれよりもやるかもしれないぞ、探ってこい」と言うわけだからね。

楠 絶対に相容れない人の名前は覚えて伺いませんが、たいてい政治家の場合、同じ選挙区の人と相容れないというのがありますけれどもね。

海部 ハッハッハッハ。いや、それは次元が低いよ。

楠 すいませんでした（笑い）。

■中曽根内閣の成立2（中選挙区事情）

伊藤 それで中曽根内閣ができて、官房長官が後藤田さんになって、閣僚もかなり多くが田中派で占めて、「田中曽根内閣」なんて言われていますが、中曽根内閣ができたときには、中曽根内閣に対してどういう感想でございましたか。

海部 それは田中曽根内閣といわれたことに全部現われているじゃないですか。そして官房長官を後藤田さんにしたということが、なるほどな、と思ったんですね。要するに、「三木さんの声で」後藤田はみんなの裏を全部掴んでおる」という。

伊藤 それは噂じゃないですか。

海部 三木さんもそう思い込んでおったんだからしょうがない。僕はその情報をとったときに、「官房長官は後藤田ですよ」と言ったら、徳島の同じところで、いまの「同じ選挙区という」話だ。自分のあれをやられて、最も心を許しておらん相手だけれど、「決まっちゃよ」とおれが教えたら、「そうか、誰がそう言っておる」と言うから、こういうところで聞いたと答えた。「間違いないな」「間違いないありません」。

伊藤 後藤田さんは徳島だからね。

楠 久次米健太郎さんとやりあったんですね。

海部 「三木さんの声で」ひとの選挙区に暮夜秘かに泥足で入って来るのは強盗だ」と言った。「後藤田」をもじって「強盗だ」というんだな。

伊藤 それは相許せないですね（笑い）。

海部 あのとときはもっと激しい選挙をやりましたよ。

伊藤 やっぱり中曽根内閣に対して、三木派としては、ある意味では干されたのかもしれないが、ちよつと距離を置いたわけですか。

海部 そうではなくて、三木さん自身は、心の底で相通うものを持つてらつしやつたはずですから。

伊藤 中曽根さんも少数派閥ですからね。

海部 少数派ですつと一緒にやってきたわけで、いつ頃だったかさだかではないけれど、三木さんと中曽根さんが飯を食いながら打ち解けて、鍋を突きながらいろいろ話をして、「あの頃はみんな貧しかったけれど、心は豊かだったな」と言っていた。何の頃の話を思い出したか知らないけれど、そんな話をしていた。そういうとき、「君なんかはもう天下がそこまで来ておるような話をよくしておつたな」と言っていた。だから天下を取るような話をしていたんじゃないですか。

伊藤 お二人とも天下をとられたわけですからね。先生ご自身は、中曽根政権に対してはどういうスタンスだったんですか。自民党の総裁に対するごく当たり前のスタンスですか。

海部 ごくあたり前の関係ですよ。向こうは向こうで、警察出身者を大事にしたり、東大閥だから東大を大事にしたり、それはしますでしょう。それから、中曽根派で当時われわれに接触してきておつたのは、渡辺美智雄と藤波孝生だから。この二人がまたちよつとニユアンスが違うものだから、両方の話を聞かなければならなかったけれど、中曽根派に対するスタンスも、そこから話をとって、三木さんにも全部伝えてある。三木さんのところは、そんなことをやって心配しなくても、例の稲葉修さんとか、森清さんとか、そういう

筋からもいろいろな話が入っておったはずだ。

伊藤 藤波さんと先生は——。

海部 早稲田大学雄弁会の同期ですから。

伊藤 何かというらしい間柄なんですか。

海部 はい、だってあれの初めの選挙から応援に行つて、街頭演説から何から全部やっているんですもの。そのために、田村元がいつかおれのところに来て——。

佐道 同じ選挙区ですね（笑）。

海部 「君は将来、総理大臣になろうという夢もないかい」といういやな言い方をしてきたんだね。ピンと来なかつたんだ、「できたらなりたいですね」と言つたら、「そうしたらな、あんまりひとの困るような所へ——ああそうか、このあいだおれ行つたな——演説にやつてくると、評判が良くて困るんだ。うちの先生よりもっと若い」。田村元は当時まだ若かつたからね。そうかな、そういうことになるのかな、と思つてじいっと聞いておつたことがあるな。

同じことは福家俊一にも言われたよ。福家俊一が四国の香川で選挙をやつたときに、おれは藤本孝雄の応援に、三木さんに言われて行つたんだ。三木派の一年後輩ということだね。そうしたら福家もそれをどこで聞いてきたのか、見たと言うが、見たはずはないんだ。

楠 福家俊一というのは変わった経歴の人ですね。

海部 大陸浪人だ。

楠 どういう印象の方ですか。

伊藤 岸さんなんかと関係が深かつた人ですね。

海部 それで、岸さんたちと大陸時代は同じ頃ですが、岸さんなんかは興亜院といいましたか、ああいうところの生え抜きで正統派だ。福家俊一はそのころは、大陸新報論説委員とかいつていた。大陸新報論説委員だから、あの頃の岸さんやなんかより、おれは羽振りがよくつたんだということ、われわれにはよく言うんだ。そして

「海部君、君はな、三木派の中で弁も立つし、見た目もいいし。けれども惜しいわな」「何がですか」と言つたら、「ひとの選挙区を

見る目がない。藤本ちゆうのはな、こういう男やから、あんなのとあんまりつき合おうと思わんほうがええで」といういやなことを絡めて、いろいろ言われたものだ。田村元と福家俊一の二人にはさんざんそれを言われたが、しかし根に持たなかつたよ、二人とも。

伊藤 それはそれでしようね、お互い様の話ですからね。

海部 全然根に持たない。そして、これは飛びますが、僕の名前がチラチラ出始めたとき、田村元さんは、そのへんで会つたときに、「ここ来い、もうじきな、上の方からフーツといひ話が流れてくるから、おまえびつくりしてな、断わらんようにしなさいよ。初めから、『そんなものは私は』と断わっちゃうと駄目だから、『考えさせてもらいます』と、こう言つとけよ」というんだ。何の話だろうと思つたら、それは各派閥で集まつて、海部俊樹にしよう、ほかにタマがおらんじやないか、消去法でやつていくと、という話をどこかで田村さんが耳にしてきたんだ。それをちよつと教えてくれたんだ。

楠 それが一番初めの情報ですか、先生が総理になるといふ。

海部 そうだよ、一番初めの情報だ。話はそれつきり、その後はずつと続かないんだけれど。

■中川一郎の自殺

伊藤 先ほどの予備選のときの候補者の一人の中川さんが自殺されますね。これは政界にかなり衝撃を与えたのではないかという気がします。これは政界にかなり衝撃を与えたのではないかという気がします。

海部 いろいろな噂がありましたね。最も有名な噂は、田中角栄が中川本人を呼んで、「お前、おれのところの池の鯉を見てみる。威勢のいいのが飛び出すと、間違えて岸に乗っちゃたら、それで日干しだぞ。おとなしくしておれ」と脅かされた。そんな話は本人が言うから間違いないと思うんだ。

伊藤 先生は、中川さんとの接点はどうですか。

海部 彼は初め大野伴睦の秘書だったんです。大野伴睦の家来で、僕の方が一期早く国会に当選しておったんですね。大野伴睦の秘書で、北海道開発庁の水産部長か何かから来たんだな。えらいガラの悪い腕っ節だけは強そうな、ごついやつが大野伴睦さんの秘書だなと思っていた。

ちよつと背景が必要ですが、大野伴睦さんと私とは選挙区が隣同士で、まったく合わないわけですからね。大野伴睦さんは三木さんが大嫌いだから。だから伴睦さんが、最初の選挙のときに、中川も秘書で当時ついてこようと思つたそうですよ。まだ役人のくせに。ところが大野伴睦さんの演説というのは、びつくりしたのは、「今日は頼まれてここに応援に来たけれど、疲れ果てて岐阜から居眠りしながら来たら、車が急に揺れだした」というんです。それで運転手に、「これ、どうしたんだ、気をつけろ」と言ったら、「先生、ここから愛知県になりました。岐阜ほど道路がよくありません」と言われた。それで「愛知県の代議士は誰だ」と言ったら、江崎真澄と河野孝子ですという。まあやつぱり政治家はいいのを出さないと、というんだ。それで加藤という、ミカドという名古屋のパチンコの親分が立ったでしょう。あれが大野派に入っておるんですよ。それで立候補することになっていたわけだ。その応援ですからね。だから加藤を代議士にすれば、こんな愛知県の道は岐阜県の道と同じように車の中で眠っておられるような道になる、ということだ。わかりやすい話だ。

伊藤 わかりやすいですね。利益誘導みたいな話だけれど。

海部 利益誘導の最たるものだ。

楠 そのものですね。

海部 そうでしょう。そんな頃、あのへんの道は、まだ舗装もされてない土砂道路が多かったから、それはガタガタでしたよ。もう四十七、八年前になりますからね。

楠 岐阜羽島の駅は、本当に大野伴睦の圧力でできたんですか。

海部 あったんだ。だから銅像をつくらせた。

楠 銅像が建っていますね。

伊藤 じゃあ中川さんは、前々からご存知のわけですね。

海部 はい知っております。中川とは、そのうちに中川がいろいろな場所に出て来るようになる、官僚政治はいいか悪いか、派閥政治はいいか悪いかということ、意見がまったく対立するんですよ。私は官僚政治は駄目だということ、中川は官僚の代弁をする。「私が」派閥政治はいいか悪いかということ、いや派閥でなければという。公の場所では言わんけれど、「あんなきれいな事ばかり言つても派閥がなかったら、海部さん、あんただって当選できつこなかったんだよ。おれだつてそうだから」と言つて、派閥で当選したようなことを言っているから、「それもいくらあるかもしれないが、中川一郎待望論が北海道にもあつて、あのへんでは珍しく頭が良くて、大学を卒業した有為の青年がおるからということでおまえは送り出されたんだよ」と、そんな話をしたことがありました。

伊藤 写真を見ると、精悍な感じですね。

海部 野人だ。

伊藤 ですけども、役人なんですね。

海部 役人で、気は本当に小さいんだ。本当に気の小さいやつだ。僕はそういうことで、中川を知っておったから、何派でもいいから、議運にはなるべくそういう若手の威勢のいいのを入れておいた方がいいということ、浜田幸一を入れたのも中川一郎を入れたのも、みんな僕ですよ。それから、これは見損なつて申し訳なかったが、中曾根派の暴れん坊は森下元晴だと思つてた。みんなそういうのを集めては、議運の理事を構成させておつたんですね。けれどもそういうところにつき合つてみると、またまた違った面が出て来るわけですね。

伊藤 このあいだ話題になった鈴木宗男は、中川さんのところの秘書をやっていたわけでしょう。

海部 中川の秘書だ。あれはたしかに、中川も最後は手こずったね。
伊藤 中川さんがなんで自殺をしたのかというのはいまでも——。
海部 いまでも真相はわからない。僕らもその場におったわけではないからわからない。

伊藤 政界の中でも定説というのはいないわけですか。

海部 ないわけですよ。

佐道 中川さんは、小なりとはいえ「中川グループ」と言われるものがあつたわけですね。その中川グループの実態はどういうものだったんでしようか。本当にまとまりがあるものだったんですか。

海部 さあ、それは中川グループの人に聞いてもらわないとわかりんと思うけれど。

伊藤 誰が代表的な人ですか。

楠 石原慎太郎ですよ。

伊藤 のちのち旗揚げした青嵐会が、あるときまでは中川グループの中核だったんですね。石原慎太郎は「理論的な指導者がおれだ」と言っておつたけれど、たしかにそうだったかもしれない。

楠 中川派のあと、ほんの一時だけ石原さんが継ぐわけですね。

海部 石原がやつたんだ。それで森下元晴が一時期、中川グループの資金を出す係にもなつたんだ。

伊藤 結局中川さんは、予備選に出てすごいお金がかつたわけでしょう。借金の問題は非常に大きかつたんじゃないかと言われているが。

海部 そのときに——。ここから先はわからんことだから、よそで調べてからにしてください。あるはずだと思つたやつがない。誰だ、というように怒つた。中川がどこかの料亭で荒れちゃつて、

鈴木宗男をぶん殴つたという話は、あの頃から伝わっておつたんだ。

伊藤 そうですか。その当時ですか。

海部 おお、そうだよ、その当時。それは思わぬたくさんの金があるはずだったものが、なかつたんだ。中川はああいう大雑把な男だから、どうしたんだといった。それがこのあいだうちブツブツとま

た出て来たんだ。あの話は昔はちらつと聞いたことがあつたけれど。

伊藤 そうですか、当時から言われていたことなんですね。

佐道 鈴木宗男氏自身は、秘書時代からかなり有名な人だったわけですか。

海部 そう有名でも有能でもなかったと思うよ、僕は。

伊藤 議員になる前からご存知でしたか。

海部 知っていました。秘書としてついてきているんだもの、鞆を持つて。

楠 こんな個人的なことを言うのもなんですが、私は父が青嵐会だったものですから、中川さんとも関係があつたんですね。さっきの話じゃないですが、一見大胆剛胆に見えるけれど、非情に細心なところがあつて、「大胆にして細心だ」といって父が評価していたんです。それだけに、私が大学を出るときに、「おまえ、政治の世界

にもし進むんだつたら、中川の秘書になるように口を利いてやる」と言われたんです。もしそれで行つていたら、だいぶ人生が変わつたと思うんですが。

海部 そして鈴木宗男の弟分になっているな。

楠 弟分というか……。

海部 それはそうだ、その代わり得難い経験ができたと思うな。

佐道 立ち回れたかどうか。

海部 それで今ごろは、あなたは正当な後継者としてやつてくださいますか。

楠 今ごろは刑務所か何かに入っている。

伊藤 でも中川さんの息子がいまやつているじゃないですか。

海部 あれは全然線が細いもの。鈴木宗男とは太刀打ちができませんわ。

伊藤 だけど、中川昭一さんというのは、なかなかよくできる人でしょう。

海部 頭はいいんです。いわゆる社会の評価は、頭がいいということになつていけるけれど。

伊藤 政治家としての力量の問題ですか。

海部 頭はいいんです。いわゆる社会の評価は、頭がいいということになつていけるけれど。

伊藤 政治家としての力量の問題ですか。

海部 頭はいいんです。いわゆる社会の評価は、頭がいいということになつていけるけれど。

伊藤 政治家としての力量の問題ですか。

海部 頭はいいんです。いわゆる社会の評価は、頭がいいということになつていけるけれど。

伊藤 政治家としての力量の問題ですか。

海部 頭はいいんです。いわゆる社会の評価は、頭がいいということになつていけるけれど。

伊藤 政治家としての力量の問題ですか。

■中曾根内閣の成立3 (首相訪韓)

伊藤 中曾根内閣ですが、普通の内閣は総理になるとまずアメリカに行く。中曾根さんは初め韓国に行きましたね。これについては何かご記憶がございますか。

海部 あります。中曾根さん一流の人生経験則から来て、目立たなければならん、世間の注目をとらなければならん。そして、「海部君、これからはアジアの時代だよ。アジアが大事だから、まず韓国に行つてやつてくるよ」という。僕はその話は、どこかの酒の席でみんながおつたときに聞いたんですね。そしてそのとき、なるほどなど思ったのは、その場で、韓国の当時たしか「黄色いリボン」

「黄色いシャツ」か? という歌が流行っていたんだ。「歌う」テンチリンリン、シリニシマルロ、シジリマルロ」とかいいう歌だ。忘れたけれど、それもちゃんと練習して覚えて、「青瓦台にいったら歌ってくるんだ」という。なるほど中曾根さんというのは、そういうふうにはパツとやる。

伊藤 いわゆるパフォーマンスですね。先生も少しはおやりになるじゃないですか。

海部 ハツハツハ。中曾根さんの影響じゃないけれど。

伊藤 それは政治家として大事なことでしよう。

海部 大事なことだ。韓国の慶熙(キョンヒ)大学に行つてスピーチをやつたときに、学生が言うことを聞かずにいろいろ質問をする。「あとから質問は全部聞いてやるから、静かにしとつてくれ」と言つただけけれど、収まらなかった。けれども、その日のあと、学生がさらに話を続けたいという。「ここで議論をしましょうがないから、おれが覚えてきた韓国の歌を歌うから、君らも知つておつたら一緒に歌え」といって、その「黄色いリボン」を歌つた。いまでも「黄色いリボン」というのは、韓国の非常にポピュラーな歌なん

だ。中曾根さんはそういうことを最初に実践したんだな、と思う。だからどこに行つても、その国の歌を覚えていって歌つてやると、たしかに心の通い路はポツと開ける。

これはベルリンを行つても同じことでした。ライン川を下るとき、中曾根さん本人が総理になつて行つたとき。ライン川の上が寒かつた。コール首相以下、向こうの首脳もいるんですよ。それで「海部君、なんかやつてくれ」という。ラインはワインの女王が出て来て、こんな大きい「両手を三〇〇四〇センチ開く」ワイングラスに注ぐわけだ。それを飲めないのにまず飲んで、そしてこれは歌でいかなくはないけれども、ドイツ語の歌なんて難しくて僕は知らないから、「非常に日本では高く評価されており、誰でも知っているドイツの歌を歌うから」といって通訳をやらせて、「ローレライ」を日本語で歌つた。ラインを下りながら。そうしたら、コール以下がみんな笑う。「これは日本では教科書で教える歌だ、小学生がみんな習つてくる歌だ」と言つたんですが、あまりピンと来ていないんだ。日本の教科書でドイツの歌を日本人が歌っているかわからない。それでまあ、日本とドイツの関係は日独伊三国同盟から、と言いたかつただけけれど、そんなことを言つたらまずいから言わなかつたけれど、それにしても、ドイツは知らないんです。「なじかはしらねど」の歌を日本語で替え歌を歌つても。

伊藤 その歌自体がわからないんですか。

海部 わからないんだ。ローレライの歌だよ。もちろん、そこまで言うとはわかつている随行員もおつたけれど、トツプのほうはわからないんですよ。あれにはいささかがっかりしたな。

伊藤 結局、韓国に行つて、一応成果をあげて、それをもって今度はアメリカに行くことですね。これは新しい手法というか――。

海部 新しい手法だし、ややもするとあのころはまだ外国の中で、あなたの最も嫌いな国を三つ挙げなさいというのと、たいてい二番目か三番目には韓国が顔を出すんだよ。

伊藤 まずロシアがあつて、ですね。

海部 だから真つ先にそこに行つたということは、中曽根さん一流のパフォーマンスですね。

伊藤 韓国の側も非常に多としたでしょうね。首相の最初の訪問国としてくれた。

海部 それはそうです。

佐道 今回の質問の範囲の中にはないんですが、あとで臨調の所でよく出てくるの何おうと思つていたんですが、この中曽根さんの韓国訪問のときなどに、総理の特命という形で瀬島龍三さんがよく動いたりということが、中曽根さんとの関係で出て来るんですね。

伊藤 たしかこの時も瀬島さんなんだね。

佐道 この時も瀬島さんだと言われているんですが、瀬島さんとかが動いているというのは、お耳に入つておられましたか。

海部 いや、瀬島さんを使つて動かしなさいというのは、中曽根さん以外の人からも言われたんだ。瀬島さんを使つて国際的なことをやつたらいい、ということ、いろいろな人が知つておつた。だから私のときは、初めはわざと、と言つたら悪いけれど、瀬島さんを使わないで、正式の線で行け。瀬島さんはあまりにもいろいろな派閥のいろいろな人々の裏を知りすぎているから。

だからもうちよつと新しい感覚でいくときは、それこそ外務次官を呼んで、外務省に、おまえら正面攻撃でやつてこい、と言つたことがあるぐらいだ。

伊藤 やつぱり瀬島さんは、瀬島さんの筋ということなんです。

あれはたしか陸軍士官学校の関係だから。

海部 民間の筋があつて、瀬島さんが動いてくると、だいたいのこととが——。事前のPR係としては最高だとみんなが評価しておつたんだな。

伊藤 先生は瀬島さんとはいつごろから。

海部 湾岸戦争の始まるもつと前からです。瀬島さんと最初に親しくなつたのは、中曽根内閣の文部大臣のとき、教育改革のときだ。瀬島さんが、軍のOB上がりで特に陸軍士官学校の同台なんとか会

というのがあるんだ。

伊藤 はい、同台経済会。

海部 同台経済会へ来て、こういう話をしてください、と言われたんだ。それで僕は行つたんです。そこでぶち上げてきた。そうしたらそれをえらく褒めてくれて、ご馳走になつたりなんかして、その後ちよいちよい、いろいろなところで出会うようになった。だから総理になつた頃には、裏からコソツと入つて来た。ああいうことがあの人は得意だな。そして非常に説得力のある話し方をする。十二年前の湾岸のとき、「開戦の時期は、向こうの月夜の日で、静かな夜がいい。それを星で調べると、だいたい一月の十五日から二十日前後のところが、潮の退き加減、満ち加減、明るさ、何から言つても誰もそこを考へるでしょう」というようなことを言つて、これは忘れられんわ。そんな話をボツツ、ボツツと話された。すごく記憶力のいい人だと思ひましたね。

佐道 実際、一月十七日でしたからね。

海部 一月十七日ですよ。けれども十七日とは言わずに、「いろいろなものを見ると、山水の関係から、月の出、水の満ち干、そういうものからいつて、十五日から二十日頃が、誰が考へても作戦を起すのにいい時期だ」という。それは瀬島さんに教わつたな。

■中曽根内閣の成立4（不沈空母発言）

伊藤 中曽根さんがアメリカに行つて、例の「日本列島不沈空母」といったような話をされる。それだけではなくて、一般的に防衛力の強化、安保条約を実質化するというか、もうちよつと同盟として強化するという方向を指示するわけですね。こういう行き方に対しては、海部先生の側はどうなんですか。中曽根内閣のそういう姿勢に對して。

海部 あ頃は中曽根さんがそういうことを言つた。けれども僕は

あの頃、別の角度からのものの考え方で、誰に教わったのか忘れただけで、アメリカの戦後の予算を調べてみると、日本に対するガリオア・エロアを含むいろいろな無償の援助資金は、そのときの値段で四千五百億でしたか。数字は間違っているかもしれない、僕も記憶だけに頼っているから。そしてそれをずっと続けてくれた。そのアメリカは、しかも戦勝国だ、いやな言い方だけれど。ところが戦いに敗れた国に、食料でも何でも惜しみなく与えた。そして何よりもかによりも、敵視しなかった。だから戦後、日本が立ち上がった好条件がいくつもあるが、その一つは、占領された相手がアメリカというきわめて善意がある国だったことだ。アメリカには善意というものがあるんだ、と誰か言った人がおりますね。

僕もなるほどと思って、その話を聞いたことがある。善意に導かれて日本の国民のことをやったから、民主主義というものが日本に持ってこられたんだという。そういうアメリカだから、僕は別に敵視する必要はない。

同時にそんな頃は、いまほどひどくなかったけれど、目の前の朝鮮半島が非常に不安定要素であった。ロシアがどうだというようなことで、われわれが代議士になった頃は教育されてきましたが、どうもロシアじゃないみたいだ、もつと近いところにあるんじゃないか、というようなことから、日米安保条約の存在というものは、日本の防衛のために、最悪の事態が起こったときの防衛のために必要だ。僕は僕なりに、あのころはそう割り切っております。日本だけで何もできないように、手足はあるけれど制約されていますから、アメリカが及ばないところは協力するんだ。バンデンバーグの決議の唯一——という言い方をしておいたが——の例外が日米安保条約である。これは間違いかもしれませんが、日本語としては、けれどもよく討論会でもそういう言葉を僕は使ったことがあります。

そして双務条約なら、日本がもつと負担しなければならぬものが多いはずなんだけれど、そこはやっぱ二つの面からそういう政策がとられたと思う。というのはアメリカは、中国やアジアの

近隣諸国に対して、日本に対する「ビンの蓋」論を持つていった。アメリカがビンの蓋だから、おれが蓋をしているから安心しておれという説得をしたはずです。日本はその中におるんですから、さあというときはアメリカに、あんたの方でやってくれよと言えるし、言わなければならぬ。そのためには、多少のことは——という言い方をしたかどうかは別にしても——出せるものは出すし、できる協力はする。それが日本の平和と安全を守っていくことになるんだ、というふうには、僕は僕なりに割り切っておりますから。伊藤 わかりました。さてどうしましょうか。四時になりましたが、もう少しよろしいですか。

海部 よかったら区切りのいいところで。

■初の比例代表制・参議院選挙（一九八三年六月）

伊藤 ではもう一つだけお願いします。「一九八三年六月に」参議院選挙がありまして、全国区で初めて比例代表制導入ということになりました。参議院選挙でこういうことになると、国民運動本部長としてはいろいろ関わりがあったのではないかという気がしますが、いかがでございますか。

海部 国民運動本部長というものは半分以上は全国を回る。国民運動だというけれど、眼光紙背に徹すれば選挙に勝利するための事前の準備工作ですから、全国を遊説して回っておりますよ。

伊藤 この時には、全国区というのは残酷区と言われていて。

海部 まだ名前投票だったんじゃないですか。

楠 この時は完全に政党名だけです。

海部 この中曽根内閣のときはそうでしたか。

楠 これは間違いないですね。これで父が落ちましたから、よく覚えています。

伊藤 政党名だけですか。

楠 ええ。拘束名簿式比例代表制です。

海部 だから安西愛子さんだったかな、「安西愛子という名前を書かせてくださったら、当選確実だけど」なんとかんとかと言っていた。変わり目というのは、そういうことがあったんだな。

伊藤 そうすると運動の仕方もちよつと変わってくるわけですかね。要するに「自由民主党」と書いてもらわなければいかんわけでしょう。

楠 だから上の方は全然運動しなくなっちゃいますね、名簿が発表された瞬間から。下の方もやってみようがないから運動しなくなる。ポスターラインのところしか運動しない。

海部 そのへんだけが運動したんだな。

伊藤 一位は林健太郎さんだったかな。

楠 そうです。

海部 あのとときか、林健太郎が一番になったのは。

楠 あのとときだけは、みんなトップに学者を据えたんですね。社会党も公明党も。

伊藤 だから選挙のやり方としては、いままで全国区でやっていたんだったら、みんな自分の名前を書いてもらわなければどうしようもないわけですから、必死になって全国を駆けめぐっていた。それで先生のような国會議員には、あんたの選挙区で何票とつてくれとやらなければならぬわけですね。ところが今度は「自由民主党」と書いてもらうわけですから、選挙のやり方はずいぶん違ってくるだろうな、と思いますよ。

海部 いわゆる、なったばかりの党が一番厳しいですよ。

伊藤 でも新しいものは珍しいということもあり得るな、と思ったんですが。

海部 思い切った身近なパフォーマンス。経済政策で、僕が街頭に出て行って一番拍手が多かったのは、このあいだうちは「利子をもういっぺん戻しましょう。六法全書の「民法の」四〇四条に五%と書いておきながら、いま〇%じゃないですか。それは家庭の中のお

じいさん、おばあさんとの関係も壊しました」ということだ。それからもう一つは、いまようやく三党合意で、二千五百万円までは譲渡免税にしましたね。あれは国会が始まって法律をつくらなければなりません、三党が合意しておれば通るんです。それが不動産売買に関連してくると、さらに一千万を上乗せ、三千五百万が行く。そうすると滞っておる一千四百兆のお金が音を立てて動き出すようになる。

伊藤 そううまく動いてくれるかどうかかわからないですけどね。

海部 ハッハ。そう思ったら、それは駄目ですけどね。

伊藤 この参議院選挙で、自民党は安定多数を維持したんですが、このときのミニ政党というのは――。

佐道 ――青木茂のサラリーマン新党とか、八代英太の福祉党とか。

伊藤 野末陳平の税金党とかができましたね。このときはあまり記憶はないですか。

海部 陳平は、早稲田の上下の関係もあつた。あれの街頭演説を聞きに言ったら、変な三角巾を被って、花咲翁さんの頭巾だと言っている。「おい陳平、何をやつとるんだ、おまえは」と言ってからかつておつたことはありますが、真面目に応援しようという風潮ではなかったですね。

佐道 この選挙のちよつと前ですが、統一地方選挙があつて、福岡と北海道という北と南で革新知事ができるんですね。これは自民党にとつてショックでしたか。

海部 ショックだったでしょうね。その頃東海道線の当時、急行が停車するところはだんだん革新系になるでしょう。東京を出て横浜、それから静岡も危ない。名古屋はもちろんだし、大阪も京都も、というようなことがさかんに流布された頃でした。

楠 それは少し前ですよ。東海道ベルト地帯が革新知事になっていくのは、もうちよつと前の佐藤政権の頃の話ですね。

伊藤 このころまで残っていたんじゃないですか。

楠 ときどき先祖返りして、北海道と福岡がそうだったんですね。

伊藤 だから今度は新幹線のところじゃないんですね。

佐道 新幹線の最終駅なんですけれどね。「福岡県は」亀井「光」さんという知事が、十二年の多選批判と、豪華庁舎を建てたということで批判された。

楠 九州大学の教授の——「奥田八二が当選した」。

海部 タナカケンゴという九州大学の学者を候補にしたことがあったんだ。負けちゃったけれどね。

佐道 田中健五、文春の前の社長と同じですね。「北海道の」横路さんは、いまの民主党の横路「孝弘」さんですね。

海部 いまの横路さんが北海道で知事になった。

伊藤 ちよつと自民党は長期低落だということ、この参議院選挙でちよつとは格好がついたわけですね。ということは、国民運動部長としてはちよつと——。

海部 それを命じられて、全国、特に大都会の盛り場で桃太郎をやって歩いたりね。前後に旗を立てさせて、こちらが演説をやる。いまの参議院議員でも、「当時、あそこを先生にマイクを持って歩いてもらったですな」なんて言うやつが、まだおるわ。

伊藤 海部先生はそういうことをかなり積極的におやりになったわけですか。

海部 やったんです。

伊藤 宣伝カーの上に旗を立てて、上に乗って。

海部 はい、やりました。

佐道 国民運動本部長というのは大変なんですな。

海部 それをやらなければならんだ。それから商店街なんかでもちよつと長いところは、候補者を連れて一緒に歩いてきたりしたこともよくしましたよ。

伊藤 それは候補者が頼むんですか。

海部 それは地域の先輩、党の支部が計画して、「一緒にお願います」というので、「よし」といっておくと、候補者がちゃんと来ておるわけです。

伊藤 参議院選挙ですから、自分の選挙はないわけですからね。

海部 けれどもそういうことを一所懸命やったということは、そのときは何も思いませんでしたけれど、やがて、じわっじわつと思いつくことがあります。いまだに、「いつかの選挙でどここの路上で先生があつて、あのとき握手してもらつて」なんていうことを言ってくるやつがおるし、「あのときの写真がこれです」といって送ってくる人もおる。そういうことが意外に残っていると思います、全国に。

伊藤 面白いですね。

海部 面白いです。だからやっぱり木下藤吉郎のように、そのことに全力を挙げて真面目にやっておけば、お返しはあるものだというのが僕の実感ですね。

伊藤 なかなかみんな忘れないんですね。わかりました。それでは次回を決めて、終わりにしたいと思います。まだ中曽根内閣の話がしばらくあります。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 21 回

中曽根内閣時代Ⅱ（1983～1984）

【2003年3月12日（水） 14:00～16:10】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー]（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

[記録、編集] 丹羽 清隆

1. 1983年9月、大韓民航機墜落事件が発生しました。先生ご自身に直接関係のある問題ではありませんが、この事件についてお聞きになったときのご印象はいかがでしたか。また、対ソ関係では重要な問題ですが、この事件をめぐって自民党内で何か議論などなさいましたか。あるいは自民党の遊説のなかで問題にされたりということはございましたか。
2. 10月、東京地裁でロッキード事件丸紅ルート裁判が行われ、田中元首相に4年の懲役および5億円の実刑判決がありました。これはどのようなご印象ですか。また、政界へはどのような影響がありましたか。
3. 10月、ビルマのラングーンで北朝鮮のテロ事件がありました。また日本関係でも第18富士山丸の拿捕、紅粉船長らの抑留事件が11月に発生しました。北朝鮮との関係について先生はどのようにお考えでしたか。また国会内で対北朝鮮問題の議論はどの程度なされていたのでしょうか。
4. 12月、総選挙があり、自民党は大幅に議席を減らし、無所属8人の追加公認で過半数維持という与野党伯仲状態となりました。この選挙についてご記憶の点をお願いします。
5. 84年2月6日、衆議院政治倫理協議会が発足しました。議長の諮問機関で与野党代表で構成されるわけですが、先生はこれには関与なさいましたか。2月末、田中問題を実質棚上げにしたうえで、審査会設置に向けて、倫理綱領制定、懲罰対象の拡大、議院証言法の改正という三つの優先課題が決定されます。そして翌年12月に両院政治倫理審査会ができるわけですが、協議会および審査会ができた意義や役割についてはどのようにお考えでしょうか。
6. 2月27日、社会党第48回大会が開催され、「自衛隊違憲・合法」という運動方針をめぐって激論がありました。結局、石橋委員長の「非武装中立論」確認で決着しますが、社会党の現実路線化は波紋を呼びます。一方で民社党は4月の大会で佐々木委員長が自民党との連合を提案したりするわけですが、こういった野党の動きを先生はどうご覧になっていたのでしょうか。
7. 2月1日、首相直属の「教育臨調」設置が決定され、3月27日、臨時教育審議会設置法案が提出されます。文教族の有力者として、この教育臨調に先生はどのように関与されたのでしょうか。
8. 教育臨調に同調して、反日教組の「全日本教職員連盟」が結成されます。この結成に当たっては、先生は何か関与されたのでしょうか。また、首相の私的諮問機関である「文化と教育に関する懇談会」が3月22日、戦後教育批判、中等教育入試の多様化、試補制度導入などを内容とする報告を提出しました。この報告などを含めて当時の教育制度改革の動きについてはどのように見ておられましたか。
9. 9月6日、韓国の全斗煥大統領が国賓として来日しました。宮中晩餐会で、天皇陛下が不幸な過去に「遺憾」の意を表明されたわけですが、韓国や中国との関係でいつもこの「お言葉」の問題が議論になります。全斗煥大統領訪日ならびに天皇「お言葉」問

題については先生はどのように見ておられたのでしょうか。

10. 9月ごろになると総裁選をにらんだ動きが活発になってきます。田中元首相が中曽根再選を支持する一方で、宮沢氏が出馬を表明し、安倍、河本両氏も意欲をみせます。このときの総裁選に向けた政治状況はどうだったのでしょうか。とくに、前回河本氏が立候補して存在感を示した三木派としてはどのような心積もりだったのでしょうか。
11. 上の質問とも関係しますが、このときの総裁選では、田中派の二階堂副総裁を擁立する動きが急浮上します。二階堂擁立劇についてはいろんな見方があると思いますが、先生はどのようにご覧になっておられたのでしょうか。また、結局実力者会談や公明・民社の連立問題などもあって中曽根再選で落ち着きました。この間の経緯はどのようになっているのでしょうか。
12. 11月第二次中曽根改造内閣が成立します（蔵相：竹下登、外相：安倍留任、新自由クラブ山口幹事長入閣）。先生はこのとき筆頭副幹事長に就任されます（幹事長：金丸信、総務会長：宮沢喜一、政調会長：藤尾正行）。金丸幹事長についてはどのように見ておられましたか。また、第二次中曽根改造内閣が成立しましたがこのときの中曽根首相については、リーダーシップ、田中派との関係、安定度、政策など、どのようなご印象ですか。

※今回は以上のような質問についてお願いします。

■現在の政局から（イラク戦争）

海部 ……雑用が多くてね。ああいうことを突然考えて起こしたりね。大きな筋から言ったら、雑用だ。

佐道 ブッシュさんととの会談はいかがでしたか「海部氏は渡米し、二月二十日にブッシュ・シニアと会談した」。

伊藤 それも雑用ですか。

海部 ハッハッハ。あれは雑用ではないですけれどね。ただどうなるか、まだちよつと揺れておるようだな。

伊藤 どうなりますか、非常に危ない状況ですね。

海部 しかしどうしても僕には解けん疑問が一つあるんですね。われわれだったら割り切らなければいかんのもしれんが、サダム・フセインは、湾岸のとき、アメリカと仲裁してくれといった。隊を引き揚げるから退路を追撃しないでくれ、とプリマコフが言いに来たのは本当なんです。そういうふうにはフツと気が弱くなったり、国連を大事にしていこうか、という気持ちに戻ることもあるんですね、サダム・フセインという人は。

僕はその経験がある。今度もそれを期待しているし、この前できただんだから、それができんはずはないじゃないか。今度やったら、あんたのところ、駄目になっちゃうよ。アメリカは武器やなんかをだいぶ開発しましたからね。

このあいだうちも、久しぶりに、アーカイブスというのかな、NHKが記録に残っているから来てくださいというので、行った。湾岸の頃の、わが若き日の姿も出て来たけれど、あの頃の古い資料を見ると、停戦ができた、したいという気持ちだが、僕はあつたんじやないかと思う。みなさんはどうか知らんけれど、世の中はこのごろ、悪いのはアメリカだということになっちゃうているわけだな、いろいろな本でも何でも。

一つだけどうしても僕が疑問に思っていることがある。あのときイギリス、フランスは日本に来て、「あの悪の象徴のサダム・フセインのために、武力行使をして協力したのは、われわれではないか——しかも真つ先に出撃したのがイギリスとフランスなんです——」だから日本も、アメリカばかりに金を出さずに、われわれにもいくらか出せ」といった。遅ればせながら、今朝の会議に外務省の連中が来たものだから、「君ら帰ったら、資料をいっぺんひっくり返して見てみる。おれの記憶に間違いなければ、そんなにたくさんではないけれど、フランスにもイギリスにも出したんだ。国連の平和回復協力活動資金とかなんとかいう名目で」と言っておいた。

フランスは、いまになつていろいろと迷つてらっしゃるけれど、あのときの立論は非常に整然としておつたはずだ。あれを叩かなければいかんと言つておつた。しかもこちらに強烈なカウンターパンチになつたのは、「日本に出て行けとは言わないけれど、われわれはすでに出て行つたんだ。だからいくら出さない」ということで、出したんです。フランスにもイギリスにも出した。フランスはあのときの態度、あのときの考え方が、いま一八〇度変わつていくわけでしょう。

伊藤 拒否権を行使すると言つていますからね。

海部 まあ、本当にはしないだろうと思うけれど。フランスが本当に拒否権を行使したら、これから先ずつと、国連の場を通じてアメリカとの対決が続くわけですからね。それではフランスの権益も駄目になる。いまドイツがああいう体たらくですから、フランスもああいうことが言えると思うんだけど、もしドイツが往年のドイツでちゃんとしておつたら、フランスはEUの中でもどうなるか。孤立問題が出て来ますからね。いつまでああいう強いことを言つていられるかと思うんですが。

伊藤 アメリカが単独でもやつちやつたらどうするのか、と思ひますけれどね。

海部 いや、単独ではやらんでしよう。

伊藤 イギリスや、その他を含めて連合軍をつくって――。

海部 単独ではやらんと思う。そして四十一世、パパ・ブツシユのほうは、「国連を無視してやらないで、国連の決議をとってきちん」とやれ」ということをいろいろ言っておるわけだからね。そうしないとアメリカ自体が、今度は変なところで孤立させられたりして、大変なことになるだろうと思いますよ。

伊藤 しかしアメリカに無視されたら、国連自体が危ないですからね。

海部 はい、もう国連自体も――。日本もこのごろちょっと考えが変わって、今朝の八時からのわれわれの会議のときには、「いったい日本は国連にいくら出して、どういう相談をされているんだ。こちらの意見は聞いてくれんのか」ということで、ちょっと変わった風が吹き始めておる。

伊藤 むかし、国連というのはどこかの信用組合のなんとか、といつて問題なつた人がいませんか。

楠 「田舎の信用組合」ですね。

海部 あれは西村直己さんです。

佐道 西村防衛庁長官ですね。

伊藤 いまの国連を見ると、そういうことかな、と思いますけれどね。日本はすごい拠出金を出しているんでしょう。アメリカは滞納しているみたいだけれど。

海部 日本は二番目の拠出国ですよ。

伊藤 そのわりには発言力があまりない。

海部 はい。そのことを言うと、また日本は金だけか、と言われるけれど、しかしそれも一つの協力ですからね。平和維持活動の協力ですから。シュワルツコフの書いた回想録を読んでみても、「砂漠の盾作戦が成功したのは日本の湾岸協力基金のおかげだ」ということをはつきり書いておるんだもの。

伊藤 今度出すお金は、もうないから。

■ロッキード事件、田中実刑判決

伊藤 それでは本題に入ります。ここ「質問項目」には、先生とはあまり関係ないかもしれない事柄が並んでいると思いますが、思い出されるだけでもお話しただけですか。

海部 「一九八三年九月の」大韓航空機撃墜事件ですか。これはサハリンの領空を通過した後で、撃墜したという話でしょう。

伊藤 はじめは撃墜なんかしていないと言っていたのに。

佐道 あとで日本が傍受したテープを出して――。

海部 日本のあのへんのレーダーサイトの性能が非常に高かったというのを――。

伊藤 暴露しちゃったんですね。

海部 日本のほうがよく知っているじゃないか、といつて。

伊藤 いやアメリカも知っているはずなのに。

海部 それで日本の「レーダー」で、ということにして、やったんだと思いますよ。アメリカが知らないなんていうことはないと思うけれど。ただあのときは、われわれのほうにも一種の爽快感みたいなものがあつた。

伊藤 そうですか、ああ、やってるじゃないの、ということですか。

海部 ああ。いままで何もやってない、全然役に立たないやつらだと思つたら、そうでもないんだな、そういう感じがあつたことは事実ですね。

伊藤 この問題自体には、あまり記憶はありませんか。

海部 あまり記憶はありません。

伊藤 これは、乗客の中に日本人もいたんですね。

楠 だいました。

伊藤 でもあまり当時もそのことは報道しなかつたですね。

伊藤 では二番目ですが、「一九八三年十月に」田中さんの実刑判決がありました。そうなるだろうと思っておられたのか、どうか。

海部 これは気をつけて物を言わなければならぬけれど。

伊藤 そうですか？

海部 そうですよ。稲葉「修」さんと三木「武夫」さんの関係が後ろにずつと流れている。そこだけは話を聞いておったのか、ということになつてもいけないし。例の鬼頭「史郎」判事補のニセ電話事件も、裏から指揮権発動みたいなことを言わせようとしていた。

伊藤 これは裁判で実刑判決が出たときですね。

海部 最後に実刑判決があつたわけです。

伊藤 やはり実刑判決になるだろうと「お考えでしたか」。

海部 いや、そんなことは想像憶測の世界ですから、なるだろうとかならんだろうとか、そんなことは思っていないんですけど、これは明らかにならなければ事件だと。とにかく三木さんが政治生命を賭けたわけですから。途中で、判決が出る前に、田中さんが喉に引つかかつたとか死になつたとかいって、救急車で運ばれたことがあつたでしょう。「生かしておかなければ。ここで死んで駄目だ、うやむやになつてしまふ。きちんと判決が出るまで、生きていてもらわなければな」という。あれは執念だな。そういうやりとりがあつたことを思い出すな。

伊藤 総理大臣が裁判にかかつて実刑判決を受けたというのは、史上初めてではないですか。違いますか。

海部 あまり昔話は知りませんが、西尾末広さんは首相じゃないな。とにかく首相が実刑判決を食うなんていうことは、われわれの記憶にはないと思うんだけど。

伊藤 だからこれは非常に大きなショックが政界にあつたんじゃないかと思えますが。

海部 大きな事件でもありませんから。

楠 元「首相」ということでしたら、芦田「均」さんもそうですね。伊藤 芦田さんは最後は無罪になつたんですね。

佐道 芦田さんの裁判も長かったですね。

伊藤 これは田中さん自体が、この時点でまだ政界において大きな重みを持っていたわけですから。

海部 最大派閥を依然として維持していて、それに「軍団」という名前を新聞がつけるほど、戦う集団にして、「ここは総合病院だ、何科の医者でも全部揃っているから、来るやつは来い」ということでやっていたところですから。「田中軍団」というのはそのころの言葉じゃないかな。「政治は数だ、数は力だ、力は金だ」ということを言いながら、数を増やしてやっていかなければならぬ。だから金も要つたんだな、と思つたわけですね。

佐道 あとでは、田中さんも竹下さんに取って替わられるということがあるわけですが、この時点で、田中派、田中軍団の中の田中さんの地位・立場というのは、よそからごらんになつていて、こういう判決があつても揺るぎないものだと思つていらつしやつたんでしょうか。

海部 判決が出て揺るぎないものだと思つた。それは、あの頃私どもの周辺には田中派の若手というのは、渡部恒三とか橋本龍太郎とかおるでしょう。ちよつと上には竹下登とかがおるわけでしょう。そういう連中の話を聞いたりしておつても、「必ず復権するために、いまみんなで臥薪嘗胆だ」ということを公言しておりましたから、そうとう上からの締め付けがあつたというか、上の意志が下に降りていたと思えますね。その証拠に、あのころ、田中さんがあんなつても、田中派はしよつちゅう集まつて、いろいろやっていましたからな。

伊藤 たしか二階堂「進」さんが会長なんですね。

海部 はい。二階堂さんは「趣味は田中角栄だ」と言う人だから。

伊藤 でも、こういうことがあつて、田中派がどうかなるのではないかという感じはなかつたんでしょうか。

海部 そういう感じはありましたが、そうすると、「一強五弱」で「弱」と言われたわれわれの方は、「一強」がガタガタになれば少

しは、と思つたら、そうでもなかった。選挙のたびに向こうが力を
持つてきたということでしたね。

佐道 実際には、これは高裁に行つて、それから最高裁に行つて、
ということになるわけですね。田中さんがこのあと倒れるというこ
とはどなたも予想していなかったと思いますが、政治家の方々は、
どうせまた高裁や最高裁があるから、という感じで見ておられたと
いうことになるんでしょうか。

海部 そのままで長い目盛りでものを考えて、そこまで行けばあな
る、こうなるという見通しを確固として持つている人はいなかつた
ろうと思うね。いずれにしろ、一番でも判決が出て有罪と決まつた
ということになれば、それは真つ白ではない。

伊藤 今頃になって、田中さんは無罪だったんじゃないかという人
も出て来ていますね。

海部 だって、閣議でもそういうことを言った人がおつたんだ。顰
蹙を買つてすぐに「この話は外へは出すな」と言われたことがあつ
たぐらいだから。

伊藤 それはもつと後になってからですか。

海部 もちろん、もつと後になってからです。

伊藤 田中問題はまだしばらく続きますので、また伺います。

■北朝鮮との関係

伊藤 今度は話が変わつて、北朝鮮になります。このころいろい
ろな事件があります。「八三年十一月の第一八富士山丸の」紅粉
「勇」さんの話とか、ラングーンで大きな爆発があつて、たくさん
の高官が死んだということもありましたね。

佐道 韓国の全斗煥政権の有力者がかなり亡くなるという事件でし
た。

海部 あれば北朝鮮がテロ国家と言われても仕方がないようなこと

を、次々と起こしたころではなかったですか。

伊藤 拉致なんかこの前後なんでしょう。

佐道 このちよつと前ですね、七〇年代後半ですから。素朴な疑問
として、第一八富士山丸の拿捕は日朝間の厳然とした事実ですから
当然なんです。最近でこそマスコミもこぞつて拉致問題を含めて
北朝鮮はテロ国家だ、問題の国家だ、ということでもみんな認識は一
致しているわけですが、この当時ですと、マスコミの中でも北朝鮮
を持ち上げたりしているところがたくさんありましたね。

海部 そう、「北朝鮮は地上の天国だ」と言つておつたし、土井た
か子なんかは、北朝鮮は天国だというのを一所懸命応援していたん
だからね。拉致なんかあるはずがないと言つていた。

佐道 例えばビルマのラングーン事件をお聞きになったときに、本
当に北朝鮮がテロを起こしたんだということをスツと信じられたも
のなんでしょうか。自民党の方、先生などはいかがでしょうか。

海部 私に関する限りは、ああいうことを言われると、わけのわか
らん国だな、と思ひはしますね。それはテロをやるかもしれない。そ
してまだ拉致事件のことについては具体的な話は出て来ていなかっ
たけれど、いろいろの意味で北朝鮮というのわかれからわかれ、
わかりにくい国だといった方がいいかもしれません。闇に閉ざされ
たわかりにくい面が多いという印象は持つていました。ただ、それ
を地上の樂園だとかいい国だとか、社会党が言うから、おかしいじ
やないかと。

伊藤 北朝鮮ないしは朝鮮総連との接点はございましたか。

海部 僕は個人的にはありません。かなり後にならなければ――。

うちでは当時、塩谷一夫というのがおつて――楠さんのお父さんは
よく知つていて――、そいつが初めて北朝鮮に国会議員として招か
れていったときに、行つて帰つてきて、その報告を朝食会でやらせ
たんだ。そうしたら感激して、素晴らしい国だという。「だいたい
子供たちの目が澄んでおつた。あんな澄んだ目をした子供が育つて
いく社会は素晴らしい」という。「おまえはどこを見てきたんだ」

と言ったら、「あなた方は行っておらんから信じられんだろうけれど、信じなければ駄目ですよ」というようなことをさんざつばら言われたことを思い出すね。それは初めのころ、北朝鮮に行った人たちですよ。僕はその報告については、てんから、これは何かかされてきたな、と思いました。まさに北朝鮮天国説が一部でポロポロ言われておったころですよ。

伊藤 それは自民党の中でしょう。三木派の中ですね。

海部 そうですよ、三木派の一部です、おかしかったのは。

伊藤 やつぱり行くと洗脳されるのかな。

海部 洗脳されるんです。洗脳されて、そういうふうにおかしくなつて帰つて来るから。刻印の捺してない延べ棒か何かを内緒でもらつてくる人も出てくると、これは一つ、ということになるんじゃないですか。

伊藤 さもしい話ですね。

佐道 北朝鮮の問題というのは、富士山丸は具体的な案件として出ているわけですから、なんらかの決着を着けなければいけないということになると思うんですが、いまだにまとまらない日朝交渉を考えると、対北朝鮮について何らかのコンセンサスとして、自民党としてどうしようということとは議論されていたんですか。

海部 そのために、政調会の中に北朝鮮問題特別委員会をつくつて、久野忠治さんという人が委員長になつたんだ。そして北朝鮮に対しては、いまになつていろいろなこれが真相だ、という本には裏の話が書かれるけれど、私はああいうことばかりではなくて、隣の国だから、本気になつてやろう、仲良くして行かなければならんと思つておつた人も多いと思いますよ。久野忠治なんかは、善意に解釈して、その一人だと思つてあげたいほどだ。ところが持つてらつしやる話が、まるつきり駄目だったので、そこで信用が一挙になくなつてしまつた。

伊藤 久野さんというのは、もともとハト派というか、社会主義寄りという人では全然ないでしょう。

海部 だって、田中派の土建屋のおやじだもの。

伊藤 クノチユウさんは、北朝鮮で土建屋か——。

海部 それがさつぱり北朝鮮一辺倒になつたから、驚きましたけれどもね。その久野さんが、いろいろと、このへんの許宗萬あたりとも連絡があつたんじゃないですか。許宗萬あたりに呼ばれておいしいことを言われると、すぐに走つて連絡にいらつしやる。

僕もあの当時は国交正常化というのが大きな錦の御旗でしたから、北朝鮮との国交正常化ができると思えば、それはいいことだ、やるべきだと思つてた。そうしたら、この前話したことでダブるかもしれんけれど、国会に出入りしているある新聞社の有力な幹部が僕のところに来て話すには、「北の政府はいよいよ国交正常化、前提条件なしでぶつかつて話したいというメッセージを持ってきた」ということだ。「それならそれでいいけれど、どうしたらいいんだ」「それは日本の方も、それがわかつたという返事を」という。まだあの頃は国交も何もありませんから、手紙を書くわけにもいかん。だからわかりやすく言うと、新しい総理が国会で、正式の場で活字に残るように北朝鮮人民民主主義共和国と共和国の名前を正確に言う。

伊藤 「北」をつけたらいけないんですよ。怒られるんですよ（笑い）。

佐道 朝鮮民主主義人民共和国です。

海部 そうか、朝鮮民主主義人民共和国だな。そういう正式の呼び方を、公の場で総理大臣が言つてくれることが、日本がこの問題に真正面から真摯に取り組んでいるという良いアピールになる。そのメッセージがもらえたら北朝鮮の方も反応すると思う。そういうときは北朝鮮と言わずに、たしか「共和国」と言つたと思いますね。

伊藤 「共和国ってなんだ」と言つたら、「北朝鮮のことだ」という。

海部 それは先生が総理になられてからですか。

海部 はい。最初の総理の演説にそれを入れてくれとやることできたんだから。そのころは向こうの交渉の窓口は、金容淳という人だ

った。

伊藤 最近よく名前が出てくる人ですね。

海部 そして田辺誠。あの頃は自民党には久野忠治以外にはあまり北朝鮮と連絡を取っているのがいなくて、社会党に多かったですね。

伊藤 田辺さんはその一人なんですね。

海部 田辺もその一人だ。それからもうちょっと下の方で、肩を振って歩いているのがいたな。本会議中でも社会党「の席」からずっと、すぐそばまで来てしゃべる。みんな見ているところで平気でやるからね。あるいはああやって、わざと領収書を取っておったのかもしれない。これだけおれはちゃんと話をして努力をしておるぞという事です。

楠 埼玉から出ていた、社会主義協会の書記上りの――。

伊藤 深田さんでしょう。

楠 深田肇です。一回か二回、参議院に当選したんですね。でもあの人が社会党のキーマンだったらしいですね。

伊藤 大した当選回数もないのに、威張っていたんですね。

楠 専従書記としてえらかったんですね。

伊藤 「海部先生は」そのへんまではあまり北朝鮮との直接の関係はなかったんですね。

海部 ないけれど、そのときやらんか、と言って中に入って言ったのが、久野忠治さんだったから。これは愛知県の人で、おれの中学の直接の先輩でもあるし、その息子がこのあいだ辞めた久野統一郎です。ちよつと変わった人だな。小泉ほどじゃないが、久野さんの息子も変人の一人だ。

楠 向こうの窓口は労働党ですか、それもと対外文化協会とか、あるいは外務省なのか、どういうところが北の窓口になるんですか。

海部 外務省なんて窓口になるはずがないんだから。国交がない国だから。だからせいぜい外務省的な立場でおったのは、富士見町の朝鮮総連ですよ。そこにいる責任副議長というのが日本における一番えらいので、それが許宗萬だ。

楠 社会党も、共産党の方が北から優先されている時期には、労働党と接触するのではなくて、対外文化協会という北朝鮮の中の一部民間団体のようなところと接触していたんですね。それで、日共が向こうと関係が悪くなってからは、社会党の地位が上がって、労働党と接触するようになったということを知りましたけれど。

海部 なるほど。それは知りません、僕は。そのへんの経緯は全然知らんけれど。そうそう、社会党に沢田「広？」というのがおった。背がそんなに大きくなくて、関東の出身ですよ。埼玉か茨城かどこかだ。それがよく連絡に走り回ってきました。そして、責任副議長の許とつなぐのは沢田なんだ。

けれどあの頃は、正直言って僕らも、国交正常化ができればいいでしょうと。パスポートを見ても、「北朝鮮を除く」ですからね。

「without North Korea」じゃ駄目だから、入って来いや、ということも冗談半分にもよく言ったんだけど、それができれば一つの成果になると思って、やろうと思つて取り組んだわけですね。

伊藤 それはまたそのときに伺います。

海部 それまではあまり関係もなかったから、この辺のことについては、危ない、恐ろしい、いやな噂のある国だな、という程度にしか思つていなかった。そうしたら紅粉さんの問題が起こったときに、例の田辺が中に入って、紅粉さんを取り返しに行くからと言ってきたことがあったね。

佐道 先生は国民運動本部長で、この時期は全国各地を遊説されたり運動されたりしていると思うんですが、そういう自民党の遊説などの活動の中では、対外問題のお話は、あまり大きな比重を占めないものでしょうか。

海部 共産系関係の人たちと仲良くしているとか、なんのかんの言ううと、これは票が減ることになるから、そのへんの虫けらみたいな扱いをしておらんといかん。非共産の自由陣営の方がいいんだ。だから外交問題の話をするときは、アメリカとかイギリスとか、そういうところが中心になる。僕らは青年局で日本青年海外協力隊を始

めたので、あのころからアジアの話や文化の話はしましたが、そういうときも朝鮮とか中国は――。中国も初めは僕は素通りでしたからね。三原則に署名しなければ、将来取り消すと言われたときに、そんな手を縛られるような国となぜつき合わなければならんか、と行って生意気に反発しておったんだから。ですから初めは協力隊の行っておる国だけをずっと歩いた。

伊藤 やはり、ソ連、中国、北朝鮮というのは横に置く。べつだん演説でそれを非難するわけでもないんですね。

海部 非難はしない。だって非難できないんだもの。非難しようと思っても、実情を知らないから。

伊藤 それをやったらまた左翼からいろいろ攻撃もあるでしょうしね。

■新自由クラブとの連立1（新自由クラブの位置づけ）

伊藤 そしてその年「一九八三年」の暮れに総選挙がありました、これは先生は楽勝でございましたか。

海部 いや、楽勝なんていうことは今日までいっぺんもありませんけれど、票だけは少しずつ増えていきました。

佐道 じゃあやつぱり楽勝だったんだ（笑い）。

海部 選挙のたびに票が増えた。それはありがたいことでした。

伊藤 でもこのときは自民党がかなり議席を減らして、無所属で当選した人を入れて、やつと過半数になった。これは中曽根内閣の最初の総選挙ですね。中曽根さんもちよつとあわてたと思いますが、これは田中有罪判決があった直後ですからね。

楠 そのあと、新自由クラブと連立を組みますね。

伊藤 それはちよつと後だと思えますが。

楠 少し後かもしれませんが、選挙でいうと、この選挙の結果を踏まえて連立を組むことになりますね。

伊藤 それは最後の方に質問がありますが、第二次中曽根・改造内閣が成立して、先生が筆頭副幹事長になられるときに、山口「敏夫・新自由クラブ」幹事長が入閣をするということですね。

楠 その前に田川「誠一」さんが入りましたね。それから、総裁声明を中曽根さんが出した。ロッキード事件の判決の後でしたから、「いわゆる田中氏の影響力を一切排除する」という声明を出したんですね。そのへんで、いろいろ伺うところがあるんじゃないかと思えますが。新自由クラブとの連立に関しては、党内でどういう議論があったんでしょうか。

海部 議論もくそもない、あれを連れてきて、入れちまわないと。政治には数がとにかく必要だから、新自由クラブでも何でも入れちゃえ、ということだ。

楠 だけど、「新自由クラブは」自民党を飛び出した、いわば裏切り者であるわけですね。

海部 その面もあるけれど、背に腹は替えられんような状況がいっぱい出てくるでしょう。

伊藤 でも、ほかの議員さんの話を聞くと、新自由クラブというのは自民党の派閥の一つだという感覚だったというようなことを。

海部 そう思っていますよ。

伊藤 そうなんですか。

海部 それでご連絡係の佐々木義武が、ちよつと手間がかかるようになったが新自由クラブ係になって、袋を抱えたり、風呂敷を抱えたりしていった。ある時みんながやったら、落としちゃったとかなんとか、面白い話が伝わって、それで西岡「武夫」におれが注意したことがあったんだ。

伊藤 政界というのはいろいろ面白い噂があるんですね（笑い）。

海部 いや、噂じゃない、本当だ。

伊藤 落としたのか（笑い）。結局与野党伯仲状態になりますね。でも国民運動本部長としては、具合の悪い事態ですね。

海部 それはそうです。国会運営がぎくしゃくしてきますから。

伊藤 それに、遊説して何をやっていたんだ、ということになる。
海部 結果は、遊説が良かったから、悪かったからという、国民運動本部だけで全国のかさ上げはできませんからね。それよりも、そういう風潮をつくったものが悪いんだ。もとをただせという議論になりますからね。

伊藤 もとを正すということで、衆議院の政治倫理協議会ができるわけですね。

佐道 中曽根さんの責任云々ということはそんなに出て来なかったんですか。

楠 だから総裁声明とかを出さざるを得なくなったわけですね。

佐道 それで済んだんですかね。

伊藤 それが最大の踏み絵だったんじゃないでしょうか。田中さんの影響力を排除するということですから。

佐道 「田中曽根内閣」といわれていたわけですからね。

伊藤 そこに二階堂さんがいたということで、二階堂さんがまたやられちゃうわけですね。

佐道 一気に中曽根さんを追い落とし、という雰囲気は、当時の党内にはなかったんですね。

海部 なかった。どうなるか、もっと悪いやつが出てくるんじゃないかという疑心暗鬼もあった。

佐道 選挙では負けましたが、先生からごらんになって、初期の中曽根内閣に対してはどういう評価をお持ちでしたか。

海部 初期の中曽根内閣にはそれなりの期待もあったし、ある意味では、形容詞で言うところの颯爽としておって、街頭演説なんかをやる人も集まる。だから自民党のためには、これが一つの中興の祖みたいな役を果たすのではないかと思っただ。そして、その後はちょっと事志に反したかもしれないけれど、自民党の政策はいいけれど、態度が悪い、姿勢が悪い。だから政治姿勢を改めろという批判は、政策を取り上げてやっていくことによって解消できるのではないか。また、解消するためにわれわれもやろう、といって、みんなが全国

に行ったこともありましたしね。

■政治倫理協議会

伊藤 それで結局、翌年の政治倫理協議会ということになってくるんですが、この一連の動きには先生は関係なさっていらっしやいますか。

海部 政治倫理協議会というのは、党を挙げて金銭と政治のあいだをきちんときれいにしなければならん、それができなければとても国民の信頼を得ることはできないということで、正式機関の設置になっていったんでしょう。このころ、大先輩方いろいろ、どうやったら自民党が倫理を取り戻すために生まれ変わることができるかと聞いた。それで政治倫理協議会というのは各派からそれぞれ代表選手を送らせて、ここで決まったことは、各派を通じて党全体に浸透していく、ということをやってきたと思いますよ。

伊藤 これは衆議院につくったんでしょう。

海部 はい、衆議院です。衆議院につくったって、衆議院の委員会の理事何名、委員何名を各派から出してくれと必ず言いますから。またそうしないで、衆議院にできた委員会が、党に持ち帰ったら党の一部だけだったということになったら、またおかしくなりますからね。それは十二分に配慮して、このときは本気になって生まれ変わろうという気もいくらありましたから。

伊藤 だけど実際問題、その後を考えてみると、政治倫理の問題は今日でも次から次へとぼろぼろと出てくるものですね。

海部 どうしてこうなるのかと思うほど、次々と続いていますね。

伊藤 だからいろいろ議論はされたんでしょうけれど、そして若干の手直しとかもいろいろおやりになったと思います、なんで状況はあまり変わらないんでしょうね。

海部 これは選挙制度、選挙の仕組みだ。政治家というのはやはり

選挙に当選するということをぎりぎりの問題として考えるでしょう。そうすると究極にあるものは選挙だ。選挙の究極にあるものは勝つことだ。勝つためには、街頭に出て一人ひとりの有権者を説得するか、そんな手間のかかることはとても困難だといって、そこからずつと分かれてくるか。どうしても楽な方へ、楽な方へと流れるようになるんじゃないか。楽な方へ流れると、先立つものが要るようになる。それが日頃の汚職、疑獄が絶えない根底にあると思いますからね。

伊藤 やはり少々の処罰を考えても、民主主義に伴う必要悪といえますか――。

海部 これは僕一人の意見かどうか知らんけれど、ついこのあいだまでは、政治資金規正法できちんと正直に届け出さえてあれば、だいたいのは大目に見てもらえるだろうという風潮があったと思います。だから、政治資金規正法で厳しくしたということは、そこを通ればそれでいいんだということにしようと思ったことが一つ。もう一つはやはり選挙制度が中選挙区で続いてくると、お金が要る。そして派閥を運営するためにお金が要る。その両方が相乗効果のようになってきたという点があったことは間違いないかと思えます。

それではいかんということ、いまわれわれは反省に立って、いろいろなことを言ったりやったりしてきたわけです。政治倫理をきちんと確立していこうということで、集めたお金、届け出をするお金と――。最近、政治資金規正法違反でくられたのはちよつと行き過ぎじゃないか、なんていまでもびつくりしているやつがおりますから。罪の意識がないんですね。それがそんなにいけないことだと自覚があったら、届け出のときからもつときちんとやるだろうし。伊藤 数年前から問題になった秘書疑惑の問題がありますね。あれも似たような問題だと思えますが、法を犯しているという意識がありません。社会党にしても共産党にしても。もちろん自民党でもああいうことをおやりになつていられる方はたくさんいらっしゃ

ると思います。いろいろと、あれをしてはいけない、これをしてはいけないというものをつくりましたが、してはいけないといったら地下に潜る。

海部 裏をかく人も出てくる。

伊藤 裏がときどき表に出て来て、事件になる。

海部 それから口利きというのも、自分さえ関係していなければいいんだらうといううな甘えにも似た逃げがあった人が多いと思いますね。

伊藤 口利きというのは難しいですね。だって、入学問題とかでやったのも口利きでしょうし、いろいろなレベルがあるでしょう。そうすると、選挙民からの陳情は全部口利きになってしまふ。

海部 全部口利きになる。僕はいつべん真剣に考えてみたが、選挙区に行つていろいろ演説をする。終わつてからみんなと座談会になる。「先生、これを頼む」「あれを頼む」ということになる。そのとき、その人個人の利益に関するとか、その人が所属する職能組合とか職域団体の利益になるようなことだったら、それをきちんと一所懸命やつて成果を上げると、対価を渡したということになるんじゃないか。だから真剣に考えたことがあつたね。

といつても、そういうときに、「そんなことを言つたつて、それはいま禁じられておることだから駄目だ」と言つたら、今度選挙で落とされたらいやだな、ということ、真面目にやつていこうという人の期待可能性がなくなつてしまふわけです。だから、そういう点もいろいろなことで考えていかなければならんと思えますよ。けれども、そんなことばかり言つておるとだんだん甘くなつて、良くないことをするのがいい、ということになつたら大変だ。だから政治家のところは何でも頼みに行けばいいんだといういまの風潮、国民全体の意識改革してもらわれないといかんのじゃないですか。伊藤 しかし、アメリカの議員さんだつて、みんな選挙民の要望を聞いて活動しているわけですね。それはイギリスだつてどこだつて同じだらうと思えますが。

海部 だから僕だって、このごろいろいろなことを頼まれるけれど、「それは一つ間違うとすぐに新聞沙汰になるから駄目だ。駄目なもののは駄目だ。やっつて欲しいことがあったら、これこれこうだという筋道の通る話を持ってきてくれ」といろいろ言いますが、そうすると、「どういふ話が筋道を通るんだ」と言われて、困っちゃうんだ。あんまり困っておっては、政治家としての才能がないと言われるから、「よし、うまいことやっつてやるわ」ということになるが、そのうまいことというのが一番悪いことになるわけだね。

伊藤 対価を求めれば――。

海部 対価をもらおうということさえなければ、たいていのことが通ると思うんだけど。しかも一時期は、もらった対価を全部政治資金規正法で収入として届けておけば、そこでお金の趣旨・内容が変わるといふ勝手な解釈をした人がだいたいぶおったわけですね。それは駄目だということが、このごろようやく裁判例などで出てくるわけですから。

伊藤 手足を縛られたようなもので、どこまで活動していいかわからないという状態になる。そういう逆の危険性もありますね。

海部 けれども、そこは個々の人々の倫理観というか、個々の政治家の判断で、「それは悪いけれどいただけない」とか、「それはお断りする」というようなことを言い切ることで、日常茶飯事のように、「いや、それは駄目だ、断る」とはつきり言う癖をつけてしまえば、例外はつきり言えるものなんですね。

楠 先生の長い政治家生活の中で、政治と金に関する問題は、今も昔も全く同じだと思われるか、それともだんだん世論が厳しくなってきたとお考えか、どちらですか。

海部 昔と全く同じではないね。それは、受ける方の立場のわれわれが変わってきたからだ。

楠 厳しくなってきたということですね。

海部 厳しくなってきた。そして自分でみずから戒めていくわけです。これはやばいなと思つたら、はつきりそう言つて、自分の態

度に表わさないといけませんな。

楠 カネの問題をきれいにするべきだというのは正論ですが、厳しくすると、今度は政治の中のリーダーシップのようなものに影響が出てくるということもあるんじゃないですか。

伊藤 つまり政治というものは、どうしてもお金が必要だ。そのお金は政党助成金で、国から出すという建前ではありますが、それで全部カバーできるわけではないでしょう。

海部 政党助成金を出してあげているからそれで全部、と言われても、できる人はごく一部の人でしょうね。残念ながら僕らも、政党助成金は党がいくらもらつて、個人にいくら渡しておるのか、全部明らかになつておらんものね。党は党の経費を取るでしょう。そのあとは、これは議員一人あたりに来ているものだから渡しますね。一人あたり、正確に言うと三千万とか四千万になるでしょう。

佐道 このときの政治倫理協議会は、自民党の各派閥の有力な人がメンバーで入られたわけですね。衆議院ですから野党も入るわけですね。

海部 そうです、国の機関ですから。

佐道 自民党も、ロッキードの田中さんの判決があつて、選挙に負けて、ということ、これはちよつと真剣にやらなければいけないなということでおやりになつたと思ひますが、野党の方からすれば、これはチャンスということ、あれこれ自民党の手足を縛ろうということ、いろいろのことを言つてくると思ひます。政治倫理協議会における野党のことで、印象に残つておられることとか、覚えておることはございますか。

海部 政治倫理協議会に、野党から出て来た論客は誰だったかな。あまり与党にとつては分のいい話ではなかつたね。だからきれいな話ばかり言っている。そこで金丸「信」さんが、「倫理、倫理といつておつておまんまが食えるか、おまえらは。何を言つておるんだ」と言つて怒つたことが、ワーツとニュースになつたこともあつたけれど。

伊藤 社会党も、あまり自民党を深追いすると自分の方も傷を負うわけですからね。それはなかなか大変な話ですね。

海部 あまり重箱の隅を突つくようにきれいな事を言い合っておると大変なことになりますな。それじゃあ君のところは大丈夫か、と言って別れると困りますね。

伊藤 ついこのあいだもあつたじゃないですか。今度逮捕された議員の秘書を喚問しろとか言ったら、社民党は、土井さんの秘書をどうするんだ、と言われて引つ込んじゃった。

佐道 あの問題はいまだに残っていますね。

海部 あれが教唆、指導した張本人でしょう、土井さんのところの五島「昌子」というのが。それで辻元「清美」なんかはみんなあれの子飼いだから、公金移転横領の方法を、事細かにご指導されたというんだ。

伊藤 倫理問題は、三木派が一番お得意なところで、三木先生ご自身もそうだと思いますが、これもあとあといろいろ事件が起こってくると思いますので、そのとき伺います。

■野党との関わりー(石橋・社会党)

伊藤 この時期になってくると、社会党が動揺してくるといいますか、特に防衛問題などではガタピシとしてくるわけですが、社会党などに対する関心は、先生はおありでしたか。

海部 当時社会党というのは、いずれにしても自衛隊は憲法違反、戦争反対といい、子供を戦場に送り出すなどということを目教組がしよつちゅう言う。日の丸反対、君が代反対で、きれいに線が引けておりましたから、それが間違っているんだという立論をするのも、あのころはしやすかったですね。

伊藤 石橋「政嗣」さんの非武装中立論というのは、ちょっと曖昧な感じですね。

海部 僕らも、憲法の前文をずっと読んで、やられたらどうするんだ、といった。すべてを諸国民の公正と信義の委ねるんだ、ということでしょう。それじゃあ、もし来たらどうするんだ、それでも来たらどうするんだ。古来、戦いの歴史というのはそういうものだ。来たら手をあげて降伏するのか。最後はそこに行っちゃうんだな。手をあげて降伏したら、何もなくなっちゃうじゃないか。そこが弱いところじゃなかったですか。

伊藤 手をあげて降伏しても、第二次世界大戦のときは、日本はちゃんと復興したじゃないか、あれで徹底的に戦ったらもつとひどい目に遭った、という議論もあるんですね。

佐道 社会党自体、少し変わって来つつあるかなという感じでしたか。理屈としてはおかしいですよ、ね、「違憲合法」というのはどこから出してきたのかと思います。

海部 「違憲合法」というのが、合法であつたら違憲じゃないんだ。違憲ということは合法じゃないということだから、あの「違憲合法」論は口先だけの辻褃合わせ。しかもそれは、いつも鳥が鳴き花が咲くということが大前提の日本という恵まれた局地においてできる議論であつて、東欧諸国のようなところに持つて行ったらこんなことを言っておられるか。あのころから僕はそう思つて議論した。あのころの国会討論会で、社会党もそういうつまらんことを言っておる。

あのころ「民主連合戦線」なんていう言葉があつたけれど、「共産党と社会党が一緒になつたときは、いったいどっちがウイスキーの役割を果たして、どっちが水の役割を果たすんだ」と僕は言ったんだ。そして、「おまえらはみんな真つ赤になっちゃうぞ。飲んだら真つ赤になる」と言った。

楠 「違憲合法」というのは、東大の憲法学の小林直樹さんが最初に言ったんですね。

海部 だからあれは実体法と手続法という分け方ではいかんかもしれないけれど、何かそういうことを混同した間違いじゃないかと思

って、言ったことがあったんだけど、残念ながらそれはまだ結論が出ていません。

佐道 理想を現実は無理やり合わせるために、とにかく捻り出したんですね。

伊藤 ちゃんと法律によってつくられている自衛隊を全く無視するわけにはいかない。

海部 しかし法律で決められた自衛隊を憲法違反だといって決めつけたのが社会党ですからね。

伊藤 だからこれは、少しスタンスが変わってきたんだというサインのようなものですね。

楠 存在意義を認めるということでは毛頭ないんですね。自衛隊の役割を積極的に評価しているのではなくて、あるものはしょうがない、みたいな感じですね。

伊藤 まあそうですね。社会党の議員さんとは、個人的に話をするというチャンスはないものですか。

海部 僕の場合は、そんなころまでは議員宿舎というところに住んでいまして、共同風呂の時代ですから、夜、風呂に入ると、そこに入ってくるんだ。そこでいろいろ話もしましたから。テレビに出てからよく喧嘩をするようになった石橋政嗣だって、あの頃は宿舎におったんだ。

伊藤 じゃあ、石橋さんと話をしたりしたんですか。

海部 はい、何回も話をしたことがある。

楠 どういう方ですか。なにか非常にエキセントリックな感じもしますが。

海部 エキセントリックな感じがある。声もときどきエキセントリックな声を出す。

伊藤 あと、社会党の議員で印象に残るような方は誰ですか。多少なりとも個人的に関係があったような人では。

海部 あのころ、あまり有名人ではなかったかもしれないが、横山利秋とか加藤清二とかいたね。

伊藤 横山利秋というのは国鉄かな。

海部 国鉄上がり、名古屋です。そいつらがある参議院議員の前に行くともまるつきり頭が上がらなくなった様子を見て、おかしいなと思った。それは参議院議員は、全国の委員長が出て来ているからだ。組合まで帰ると、横山利秋というのは県の地労の代表だけれど、野々山「二三」とかいいう全国委員長がおったでしょう。その前に行くと言葉遣いも正しくなるし、直立不動になる。「へえ、組合というのは、こういう鉄の団結秩序がいまでもあるのか」といってよく冷やかしたんだけれど。

■野党との関わり2 (民社党)

佐道 この時期社会党が「違憲合法」とかよくわからない議論でふらふらしている一方で、民社党は自民党との連合、合同のようなことをぶち上げてみたりしているわけですね。おそらく自民党が選挙に負けて実質的に新自由クラブと連合するという状況で、野党の方も政界再編を考えますね。七〇年代後半から野党連合の流れのところでゴタゴタしていたと思いますが、こういう動きは、非常に細かいところまで先生の方には情報として入ってきていたものなのでしょうか。それから国民運動本部として遊説に行ったりするときには、こういう野党の状況は、格好の批判材料になって、そういうことをよくおっしゃったのでしょうか。

海部 格好の批判材料になります。だから、さっき言った、「どちらが水でどちらがウイスキーの役を果たしているんだ」というようなことを例に引きながら言うと、わかりやすいから。

佐道 たいへんわかりやすいです。

海部 そうでしょう。「それで結局馬鹿を見ておるのは社会党で、ウイスキーは共産党だ。だから最後は真っ赤な色だけ残って、社会党なんていうのはそのへんでわけのわからんことを言っておるん

だ」と言ったら、パーツと拍手が来たものだな。そうするとそれを聞いて、委員会で頭ごなしに叱られたこともあったしね。

伊藤 民社党が新自由クラブと同じ時期に連立を組もうというアプローチがあったはずなんです。民社党といえば、本場は名古屋なんです。

海部 春日一幸さん。

伊藤 あのへんにはかなり強い基盤がありますね。先生は民社党等との関わりはいかがですか。

海部 春日一幸さんとか、その家来の塚本三郎なんていう忠実なのが民社党におりました。あれは昔は社会党の右派といったんです。それでどちらが先だったか、春日一幸さんはとにかく面白いおやささんで、あのころから、「いつでも連立政権をつくって協力をする」とにやぶさかではない」というようなことをちらちら匂わせながら、しばらく経つと「貴殿、いっぺんしんみり話をしよう」なんて言われて、なんの話だろうと思つて行くと、そういうようなことさ。

伊藤 民社にはやる気があつたんでしょね。

海部 佐々木良作にも会いました。それから永末英一。あの連中とは、僕は国会運営を通じて、あるいは国民運動を通じて、よく話をしました。

伊藤 民社は、話がわかるわけですね。

海部 われわれから見ると、わかる組であつた。ですから国会がもめてくると――、委員会で、いまでも大島「理森」の秘書の証人喚問問題で、審議に参加しないなんて民主党がやっているでしょう。ああいうことになる、動かさなければならぬわけですね。そういうときと一党ではいけないから、どこかが賛成すれば動く。そういうときに僕らはまず民社に行つて、「すまんけれど、助けてくれんか。これでは国会がみつともない。国民からはみんなまとめて面倒見られちゃうから、そのときやっぱり野党の中でも話がわかるのは民社党だ」という評価は、いつも先生が言っておる通りじゃないか。「評価が」うんと高くなるから、出て来て、何を叱りつけてもらつてもい

いから、審議再開は不肖民社党からまけてみせるといつてやってくれんか」と頼みに行くと、「こんな時ばかりおだてても駄目だ」なんて言っておるけれど、あとになって連絡が来て、「いつごろ応じたいんだ」なんていうことを聞いてくる。

こちら真面目に、当時の国対委員長や議運の委員長を集めて相談する。そうするとみんな一刻も早いほうがいいと言ふに決まつているから、すぐ開けということになる。そこに行くまでのあいだに、まあ個人的ないろいろな難しい問題があつたので、それを一つずつ一つずつ片付けては、やつていったわけです。そういうことが国会対策の裏の、比較的きれいなドロドロした面ですよ。

伊藤 まあ民社としては、自民党と連立を組んでやつていく以外に生きる道はないと思つたでしようね。

海部 俺たちは社会党とは違うんだということだ。

伊藤 もう根本的に違いますね。

佐道 その春日さんや塚本さんとの関係から見ると、先生は対民社のパイプというんでしょうか――。

海部 対民社の役割はよくやらされました。それは結局、日頃の人間関係でありますから、電話をかければ、会議中でもすぐ出てくれるし、予算委員会ですら怒っておるときでも、発言席の横に行つて、「ちよつと先生、用があるから」というと、廊下まで肩を揺すつて出て来て、「何を申し上げる？」といつて、話を聞いてくれるわけだ。そういう関係になるまでが、国会対策委員会の第一線としては非常に重要であつたということですね。

佐道 先生は正式な所属として国対ということではない時期でも、そういうことをされるわけですね。

海部 はい。官房副長官のときも、国対の頃の財産を活かしてやりました。それは少々立場とか形が変わつても、最後は人間関係ですからね。そう思います。

伊藤 国対のときだけ、ということはないわけですね。

海部 国対のときだけつき合つて、国対が終わつたら「はい、さよ

うなら」では、それは信頼が一挙になくなりますから。

佐道 そういう方はいらつしやいますか。例えば国対をやっているときは一所懸命やっているけれど、国対をやめたらバタツという人は。

海部 まあ他人のことはあまり言えないな。

伊藤 でもみんなそれは財産だから。

海部 そんなことをやることはないと思いますけれどね。

楠 それでは政治家になれないでしょう。

佐道 その傾向の方がけっこういらつしやるのかなと思ひまして。

伊藤 いまは社会党と自民党の時代のようにパツとうまく分かれていないで、民主党の中に旧社会党も吸収されて、非常に曖昧なことになっている。だから、いろいろなパイプが複雑になっていそうです。

海部 民主党といつても、僕が一番象徴的な例としていつも申し上げるのは、国旗国歌法案のときだ。民主党の態度は一票差ですね。五〇対四九。あれは国のシンボル、国の歌、基幹でしょう。それがまっ二つに分かれて平気なんですから、ずいぶんあると思う。

それはよその党のことばかり言えませんが、臓器移植法案のときには、みんな違うんですよ。みんな確信犯だ。「それじゃあ党議拘束を外したらいいか」というから、「いい」といつて外した。それは後日のことですよ。

ちよつと僕の頼み方が悪かったんだけど、頼んだ人がまさか反対しないだろうと思って、梅原猛さんに「脳死臨調に」入ってもらった。先輩だし、日頃仲良くしておるから。やってもらったら、臓器移植法案反対なんだ。「先生、反対か？」といったら、「あんなものは人間の尊厳に反するからいけません」なんていう。困ったなと思つたけれど、しようがないな。それで投票のときも党議拘束をかけずにやったら、票はバラバラに割れましたね。

伊藤 党議拘束をすることが、そもそも民主党では難しいんですよ。

海部 できません。それを強行すると、またいつ分裂するかわからんし。

楠 民主党の中にこそ国対が必要なんですね。

伊藤 党内国対ですか（笑）。

海部 その点、公明党は羨ましい政党だな。

楠 命令一下ですから。

海部 親玉がいいと言つたら、みんなそれでいいわけだから。

佐道 公明党と共産党ですね。

伊藤 共産党も最近はちよつと怪しいんじゃないかな。

■中曾根・教育臨調

伊藤 中曾根内閣の一つの大きな目玉として、「一九八四年三月」教育臨調をつくりますね。これには関わられましたか。

海部 はい、中曾根内閣の頃は、私はたしか政調会の文教制度調査会長か何かを受けていた。あるいは文部大臣をやったあとですから。

佐道 中曾根内閣における文部大臣の前ですね。

海部 いずれにしても政調の文教合同にはいつも顔を出してしましたから。

伊藤 臨時教育審議会ができて、その委員にはなられていないんじゃないですか。

海部 教育臨調の中には入っていません。それは文教制度調査会のほうで対応したわけです。それで中曾根さんの教育改革を助けなければならんということです。

伊藤 中曾根さんはいろいろおやりになったんですが、結果としては、このときの教育臨調でいろいろ議論したことは、いまでも実現していないことが多いですね。

海部 あのと藤尾正行というのがおつて、中に入ってきて一所懸

命右寄りの案を出して、結局おかしくなっちゃったんだ。時系列的なことはもう一回調べ直してみなければいけません。

伊藤 報告書は一応出たんですね。中等教育の入試の多様化とか、教員の試補制度とか、教育の複線化とか、いろいろなことを提言したんですが、全然駄目。全然ということはないでしょうが。「海部先生は」これ自体には直接関係なさらなかったということですね。

海部 部会の現場、調査会の方でやりました。

佐道 文教制度調査会では、かなり連動して議論されてこられたんですね。

海部 そうです。文部省からしよっちゅう、作業の進行状況や進展状況を聞いて、議論もしました。その中曽根臨調のときは、中曽根内閣だから福田内閣のあとだ。福田内閣のときは僕は第一回目「の文部大臣をしたわけ」だけど、第二回目の文部大臣になる前のところですね。だから文教制度調査会長で協力しておったということですよ。

伊藤 そこで一番議論になったことで、ご記憶のあることはありますか。

海部 中曽根さんは、基礎研究の峰を高くしろ、といったな。それは、結果だけ見ると、今度でも当たったと思うんだね。ノーベル賞はそれが理由ではないかもしれないが、数が増えた。あれに対しての批判は、学会の中にはあるけれどね。けれどもそんなことは抜きにして、基礎学問の研究が日本には足りないということ、基礎研究がもつとできるようなにして欲しいといった。小学校や中学校のことは、あとになってからいろいろ、非行の問題が出て来たり、心の教育と言いついたんだけれど、その前に中曽根さんが言った一番初めは、「日本の国の教育で遅れておるのは、基礎研究の峰が低いところだ」ということです。「大学院教育をよくしなければならん。初等教育、中等教育は、日本の場合全部平準化されているから、箸にも棒にもかからない子供はほとんどいないはずだ。けれども上にあがっていくと駄目になる。どうして十八歳から日本の教育は駄目に

なるのか。海部君、そこから一つ考え直してくれ」ということでした。

伊藤 そうやって中曽根さんと直接話し合うことはしばしばあったんですね。

海部 しばしばありました。

伊藤 内閣にお入りになる前は――。

海部 内閣に入る前は、あの人は昔から派閥のことを言えば三木派ですから。三木派の青年将校ですから、しばしば、朝食会ではなしに、話し合いもしました。言っては変ですが、私の結婚式のときにはあの人名古屋まで乗り込んで来て、来賓祝辞のトップをやってくれたというようなこともあったものだから、「弟のような気持ちで今日は結婚式に来ました」と言って演説をしてくれたことをみんな覚えてるんだ、うちの選挙区の人たちは。ただ愛知県には横井太郎という代議士がおって、その横井太郎という人が中曽根派の代議士だった。

伊藤 それはなかなか難しい（笑い）。

海部 そして議員会館でいくと、僕の隣の隣が中曽根さんの部屋ですから、暇なときはちよいちよい行った。あそこに、上和田「義彦」さんという人が秘書でおって、それが後日――、まあこれはいいや。例の事件になったときに向こうのほうと取り次いで、一番因縁が深かった秘書だったということになりますね。

それは抜きにして、いろいろ話をする機会もあったし、あの人が何を考えているか、どんなことを言おうとしているか、よく聞いていました。中曽根さんの「青雲塾」といいましたが、高崎まで応援に行つたことがあるんです。記念講演をやりに行った。まだ当選してすぐの頃です。僕がついておった河野金昇という先生とは、中曽根さんが自由民主党に来るもつと前の国民協同党の頃、同じ所属ですから、したがって昔から話もよくしたし、仲も良かったということですよ。

伊藤 中曽根さんは「弟として」と言つたんですね。

海部 ああ、「弟のような気持ちで、今日はこの結婚式にも来ました」という祝辞をやってくれた。

伊藤 二人で会うときに、「海部さん」と言うんですか

海部 「海部君」という。昔からそうだから、しようがないですな。

伊藤 じゃあ中曽根さんに対しては「中曽根君」というんですか。

海部 いや、言わないです。

伊藤 「中曽根さん」と言うんですか。

海部 それはそうさ。それは一目置かなければ。

伊藤 それは昔からですか。

海部 昔から。

伊藤 やっぱ先輩だから？

海部 大先輩だから。

伊藤 「大」が付くんですか。

海部 はい。その代わりあの先輩も、僕の言うことはできるだけ聞いてくれた。こっちは言うことを聞かなかつたけれど。「派閥へ来

ないか」と言われても行かなかつたから。けれども、芸術議員連盟の会長をあの人がやっておつて、「海部君、きみ、すまんけれど替

わつてくれんか」と言われて、僕は芸術議員連盟の会長を受けた。

そして絵を描いて、このあいだ中国に持って行って、絵の展覧会をやつたり書の展覧会をやつたりしてきました。

伊藤 それを中曽根さんから引き継いだわけですか。

海部 引き継いだわけです。

伊藤 いろいろ因縁があるんですね。

海部 だから違うところでは、交わるところがあるわけです。

佐道 そうすると、文教制度調査会では先生を中心に、中曽根さんの考え方をなるべくバックアップしようという形で議論をしておられた。

海部 そういうわけではありません。中曽根さんの考え方をバックアップしようなんていう気持ちは、悪いけれど、なかつたです。い

いところはうんとバックアップして行く。しかしあの人とはときどき

「中曽根ヒトラー」と言われるように、脱線されることがあるから、危なくてついていけないと若い連中が言うところもある。

あのころ河野洋平とか西岡武夫とか藤波孝生とか、ああいうのが

文教でわれわれの周辺にずっとおつたわけです。それらと話をしている

と、中曽根さんの危うさというか、勇ましさというものに対して、みんながそれなりに一歩身を退いたものを持つておつた。

伊藤 藤波さんも、ですか。

海部 はい。

伊藤 中曽根派なのに。

海部 中曽根派だけれども、そちらのほうについては、一歩退いて

いた。

佐道 先ほど藤尾さんがいろいろと右の方に引つ張つたとおつしや

いしましたが、中曽根さんの考え方とまたちよつと違つるところに藤尾

さんがいらつしやるわけでしょうか。

海部 そう、藤尾はもつと右でしょう。

佐道 そうすると中曽根さんがいらつしやつて「その右に」藤尾さ

んがいて、反対方向に先生たちがいらつしやつた。

海部 そう、河野洋平や藤波がいるということ。私は中曽根派

ではありませんから、三木派ですからね。

伊藤 しかし藤波さんというのは、左の方なんです。

海部 いや、神社神道のあれだから、ある一部では非常に右ですけ

れど、しかしいわゆる一般の政策論争や政治理論をやるときは、彼

は好んでハト派のほうに来ておりました。

伊藤 そうですか、どうもよくわからんですね（笑い）。

楠 先生と中曽根さん、あるいは中曽根さんと河本「敏夫」さんと

か藤尾さんと違いというのは、世代的な違いもあるんじゃないです

か。片方の中曽根さんは主計少佐か何かで戦争体験がある。

海部 藤尾だってあの世代じゃないですか。

楠 その世代的な差ということを意識されたことはありませんか。

海部 わざとそんなことを意識したことはありませんが、話をして

おつて、結果としてとか、結論を出すときになると、ああそうか、そういうことか、中曽根さんのやることはやつぱりヒトラーだな、みんなが言うとおりのだ、と思つたこともありません。

佐道 そうすると、中曽根さんの教育臨調が始まつて、先生たちは文教制度調査会にいらつしやる。教育臨調の議論の方向自体については、先生方の考え方からするとちよつと違ふぞ、という目ですつと見ておられたということになりますか。

海部 あの人はそう自分の考え方をしやにむに出して引つ張つて行くかうという人ではない。中曽根さん自身が出て来て、自分の考えを説いたという事はほとんどありませんから。だから文教合同へ行って、われわれと喧喧諍諍やつて、本当にバカヤローまで口に出るぐらゐまで言い合つて議論して引つ張つた人たちは、ちよつと違ふ。藤尾正行もそうだし、森山欽司なんていうのもおつた。彼もウルトラ・コンサバティブだな。決してハト派じゃないですよ、三木派であつても。

伊藤 あまり派閥とは関係ないんですね。

楠 森山さんは教科書問題に熱心でしたね。

佐道 そういう人たちと先生方ががっぷり四つに組んだわけですね。

伊藤 何が争点だつたか、お聞きしたいところですが。

佐道 議事録とかがあると面白いですね。

楠 やはり歴史観の違いがあるんですね。

海部 あるんでしょうね。ただ歴史観なんていうことを言える人は、少なくともわれわれの十年ぐらい先輩までだ。竹下のところに行くとか、ちよつとも歴史観なんてありやせんもんな。片足軍隊に突つ込んでおつて、片足戦後派で、精神的混乱の最たるものじゃないですか。われわれのちよつと上だから。だから世代で歴史観を見ようと思つたら、十年ぐらい先輩でないとか、ちよつと難しいんじゃないですかね。気宇広大な発想をする人が、われわれの十年前ぐらゐまではおつたけれど、その後だんだんなくなつてきた。

伊藤 気宇壮大というよりも、実務的になつてきたということですか。

かね。自民党の内部自体が、戦国時代というよりも官僚化していくということを感じますね。

海部 そうですよ。そしてみんな一人ひとりがごちんまりと辻褄を合わせて、自分の専門分野と称するものをきちんと握る。専門分野を握るといふことは、いまから思えば、それにつながる利権も握つて、落ちないようしておくということでしょう。

楠 族議員化ということですね。

海部 だからあれが一番政治を悪くしたもどかと思ひます。僕はそういう意味で、国会対策とか議運を長くやつている人たちは、族議員にならんわけです。なんのでもなくて、なれないんです。そこへちよろちよろ勉強しに行つたり、相談に乗つたり、深く突つ込んで知つたり、いろいろなことができないわけでしょう。全天候戦闘機は忙しいから。そういうことだと思ひます。

伊藤 じゃあ海部先生も、本格的には文教族というところとうんと首を突つ込んで、ということでは必ずしもないんですね。

海部 結果としてみなさんがそうおつしやつたというだけのことだが、顧みると自分も文教は長くやつておるな。大学法案とかいろいろなことよく考へてやつたし、文教のシンポジウムや文教がテーマの勉強会にはよく出ます。そういうときにそのことを勉強すると、やはり文部省を呼んで、文部省の考えを聞いたしなればなりません。そういう意味では突つ込んでいったな、と思ひます。

けれど選挙区の関係があるから、中小企業のことを放つておくわけにはいきませんし、繊維産業のことを蔑ろにするわけにはいきません。だから誰でもそうでしょうが、自分の選挙区と関連のあるところを勉強したり、突つ込んだり、掘り下げたりしてその専門家にならないと、選挙のときにはあまりいい影響がないんじゃないですかね。

■韓国・全斗煥大統領の来日

伊藤 ちよつと話を交えて、全斗煥大統領が国賓として日本に、「一九八四年」九月にやってみますけれど、こういうことは先生はあまり関係がないんですか。

海部 全斗煥という人は——。「お言葉」問題は内閣官房でいろいろやっておつたことは覚えておりますけれどね。こういうことをやるのは内閣官房の仕事ですね。井出「一太郎」官房長官のときには僕も副長官で、ずっと下働きはしていましたから。あのときは法制局長官なんかも入れて、どういう「お言葉」にするのか、ということのやりとりもしました。

伊藤 そういう場になければ、特別にこういうことには関わりがないんですね。

海部 あまりみんな関係しないんです。

伊藤 傍観というのも変ですが——。

海部 傍観というよりも、委員会にも係らない問題であるから、特別関心のある人とか、特別意見を持つている人は別だけれど、さもない限りは、官房の文書課長あたりが清書したものを持ってきて、こうなっております、これはこういう意味です、ということの説明しに来る。それを聞いて、そうかという。

僕の場合はだいたいそういう説明を聞くときは、三木さんの家に行つて、そこに説明に来たり報告に来るのを一緒に聞いておつて、そつてだいたい頭に入れていったんですから。こういうときもあまり卑屈になつた言葉を使うな、というあれが来た。右寄りの団体から、しつかり頑張つてやってくれというのがよく来たものですよ。

佐道 その右寄りの云々の人ですが、教育改革を巡つても議論をされている問題にもつながると思うんですが、七一年に陛下が訪欧されたときは、センチメンタル・ジャーニーで行かれたら、英国でのスピーチでエリザベス女王が第二次大戦のことについて触れられたのに、日本のほうは全然戦争のことについて触れなかったから、日本はどう考えているんだ、ということが議論になりました。それで七五年にアメリカに行かれたときに、どういうふうに述べるか、と

いうときに先生が官房副長官で、いろいろとさっきの「お言葉」で議論をされたと思うんです。陛下が外国に行かれるとき、あるいは国賓が日本に来られたときに、陛下が戦争の問題と関係しているところをいつたいどういふ言葉を述べるかというのは、かなり政治的には関心が高く、ジャーナリズム的にも関心が高かつた問題になつていたと思うんです。

さっきの右寄りの人たち、かなり保守的な人たちは、あまり変な言葉をお話しになつてはいけな、という議論もあつたと思うんです。その意味で、韓国の大統領が初めて日本に来るわけですから、そのときに陛下がどういふ「お言葉」を言われるのかということには、けっこう関心があつたと思うんですが、先生ご自身は、こういう問題についてはどういふふうにお考えになつておられましたか。

海部 あのときはむしろそういう難しいややこしい問題は、学者や官房長官が対応した方がいいと。井出一太郎さんが。そしてできたものを持つてきて、「これより言ひ方はないのか」とか三木さん自身が自分の意見を述べたときに、井出さんは歌人だから、言葉も深い詳しいものがあるわけです。そこにときどき、いま思うと永井「道雄」さんが出て来て、意見を挟んでおつたことを思い出しますね。だから間違つても右寄りの人が筆を入れには来なかつた。だから右寄りの人が見たら腹が立つような文章でも、三木内閣に関する限りは、井出さんと永井さんとかいう連中が集まつて書いています。

■二階堂擁立劇

伊藤 話を先に進めます。いよいよ総裁選挙ということになってまいります。前回お話を伺つたときに、河本さんはかなり一所懸命おやりになつて、あとへの布石を打つたという感じになるわけですね。今度は中曽根さんが出られて、田中派がまた非常に複雑な動きをし

て、二階堂さんの擁立問題があつて、安倍「晋太郎」さんも出る、宮澤「喜一」さんも出るといふことで、いろいろぐじやぐじやするわけですが、このときの政治状況をご記憶でしょうか。

海部 いろいろなきがかりましたね、あのときは。おっしゃる通り。

伊藤 このときはまだ三木派ですか。

海部 三木派です。

伊藤 三木派としては、河本さんが出たいわけでしょう。

海部 河本さんが出たいといつても、派閥が小さかったから、準備も何もなしにいきなり出るわけにいかんし。

伊藤 三木派としては、この前河本さんが出てやったのに、今度出さないというわけにもいかんでしょう。

海部 一回出て、そして負けて——。思い出せんわ、こんがらかつて。

佐道 このときは「総裁」選挙をやらなかつたんですね。

楠 最終的には一年延長するんですが、その前に、選挙で勝つために「死んだふり解散」をするんですね。それが八六年七月ですね。

佐道 これは八四年の話で、十月に自民党の最高顧問懇談会で話し合いによる総裁選出、ということになつたんですね。

伊藤 みんな出るか、出るかといつてやつていて、結局話し合いで中曾根さんと決まつたんですね。

佐道 それでもめて、鈴木さん、福田さん、河本さんも出ようとす

るけれど、再選の結論を持ち越すとかいろいろするんですが、結局十月の後半に、各派執行部が中曾根再選で合意する。

伊藤 結局、対抗馬を立てないわけですね。

佐道 その過程で二階堂さんの擁立問題とかが出てくるわけですね。

海部 二階堂擁立問題というのは覚えてるけれど。

伊藤 二階堂擁立問題というのは二回ぐらいあるんですね。このときは「中曾根」再選で、そのあと、「中曾根総裁」任期延長一年と

いうのがまたあとであるんですが、これは再選のときです。

佐道 最高顧問懇談会で、話し合いによる中曾根総裁選出が一致したんですが、公明・民社の両党が二階堂さんを擁立しようという工作をして、二階堂さんも田中さんに中曾根再選はおかしいんじゃないかと批判したりといふことで、いろいろゴタゴタしたんですね。

海部 このときは矢野「絢也」・竹入「義勝」と春日一幸が入つて、やつたんだな。

楠 この二階堂擁立のときは、福田さんも三木さんも、擁立の動きに同調しているんですね。

佐道 そうですね。

伊藤 じゃあ、先生は渦中にいるんじゃないですか。

海部 いや、渦中すぎて真つ白になつちやつていて。

楠 ここは先生にご整理いただいて、お話を伺いたいところですね。伊藤 そうですね。二階堂さんといわれて、このときのことでも何か思い出せることがありますか。

海部 二階堂さんの擁立運動があつたことはそうであるし、そんなころ、民社の佐々木良作が入つて動いていたし、おれもお使いに一回行かされたこともあつた。公明も二階堂擁立の気になつた。

そうしたら、それをたしか金丸さんがぶつ壊したんだな（楠 そうですね）。それで金丸に会つて話したら、「あれは駄目だ、われわれはとても急に方向を変えるわけにはいかん、今回はこれで行くんだ」といふ。

伊藤 中曾根で行くんだということですね。

海部 決めた以上、行くんだという。

楠 二階堂擁立の主役は、私が調べた限りでは公明・民社よりも、むしろ鈴木善幸さんですね。鈴木さんの中曾根さんに対するジエラシーみたいなものが引き金になつた。

伊藤 辞めてから、ちゃんと自分を立ててくれない。

楠 立ててくれないし、「日米関係は鈴木政権のときには最悪だった」といふ批判をするわけですね。それで鈴木さんがカチンと来て、八四年十月に鈴木さんが北京から帰国したその足で田中さんを訪問

して、二階堂総裁擁立を提案する。だけど田中さんは中曾根支持であった。それで最終的には二階堂さんの擁立に関しては、金丸さんあたりがつぶして、それで金丸さんが浮上してきて、幹事長に就任するという流れのようですね。

海部 金丸がつぶして、というところあたりは、僕も覚えておるんだけれど。

楠 鈴木善幸さんについてはあまりご存じありませんか。

海部 善幸さんについては、善幸さんの中に入れてやっておる人がいなかったから。金丸さんのことは竹下を通じて全部わかるし、金丸さんと直接話もしたし、いろいろ聞いてもおるけれど、鈴木善幸さん「と私とのあいだに入るの」はせいぜい田中六助だ。それで初めに鈴木善幸が「総裁に」なるときに、六助が僕らを集めて、「頼むよ、その気になっておるから」といった。「ほんとか」といったら、「本当だ」という。そういう話を聞いたりしておったけれど、あとのことはよう知らんわ。

伊藤 じゃあこのときは三木さんもその気になったんでしょね。

楠 そのようですね。

海部 そういうことをからめて、佐々木良作や竹入が、三木さんのところにもいろいろ物が言いたいといつて、どこかで設定してくれとか会わせてくれとか、いろいろなことがあった。それは事実でしたね。

伊藤 まだ先生として、自分の意志でああだこうだと動くようなことではないんですね。

海部 まだそこまでしません。壊しちゃってくれたから。

伊藤 やっぱ先生が動かされたということは、三木さんがその気になったということですね。

海部 そう、三木がその気になってやろうというときしか、僕らはあまり軽率には動かなかったということですね。

楠 八七年の竹下内閣のときに、二回目の二階堂擁立劇があるんですね。

伊藤 そのときは茶番になっちゃうんですね。でもこのときは、ある程度——。まあこのときも、二階堂さん自身が趣味だといっている田中さんが反対しているんだから、実現するはずがないんですが、みんなが動いたから。

佐道 年表風に言うと、かなり急激にドタバタしているんですね。十月十六日に自民党の最高顧問懇談会で話し合いによる総裁選出で一致する。そして二十七日に二階堂さんが午前中に田中さんに会いに行つて、田中さんの中曾根支援を批判する。その中で、公明・民社両党が自分のことを擁立しているということで、田中さんと二階堂さんが激論をされる。同じ二十七日に自民党の執行部各派実力者会談というのが、岸信介さんが座長になって行なわれて、金丸さんは中曾根再選方針を説明するけれど、二階堂さんは党の現状はおかしいと言つて批判して改革を要求して、それに鈴木さん、福田さん、河本さんが同調して、再選についての結論は出せないということを持ち越しになる。そして同じ日に、公明・民社両党も連合政権の工作を進めているんだということを認める。

翌日、自民党執行部の各派実力者会談が再開されて、中曾根さんが「党改革をきちんといたします」という誠意を表明されることで、中曾根さんが再選されるという合意ができた。そして三十一日に決定されるということです。

伊藤 そのときに、田中さんの影響力を排除するという声明を——。

海部 そう、田中の影響力排除宣言をどこかでして、それが一つのターニング・ポイントになった。多少覚えておるね。それはどこでやったことになっていきますか。

伊藤 最高顧問会議でしょう。たしかそうです。だから二階堂さんもいたわけです。そういうゴタゴタの中で、先生は三木さんの意を受けて、いろいろ動かされたわけですね。

海部 そうそう、三木さんの情報を集めて報告した。目や耳の役を果たしておった。

伊藤 手もやったんでしょ。連絡とか、そういうことをおやりに

なつたんですね。

佐道 九月十日に、鈴木派から官澤さんが一度総裁選出馬を表明されるんですね。にもかかわらず、鈴木さんは、楠先生のお話によると、二階堂さん擁立のほうに走る。官澤さん擁立ではない。

伊藤 「鈴木善幸は」官澤さん、嫌いなんだ。

佐道 やっぱりそういうことなんでしようね。

伊藤 そうだ、それは多方面を睨んでやっているんじゃないですか。楠 鈴木と田中六助、大平の官澤というつながりですね。

■筆頭副幹事長1（金丸幹事長と「筆頭」）

伊藤 そうですね。それで「一九八四年」十一月に中曽根さんの第二次「中曽根内閣第一次」改造内閣ができて、それで大蔵大臣竹下登、外務大臣は安倍さんが留任、そして山口さんが入閣することになって、海部先生は筆頭副幹事長になる。これはかなり大きなポストですね。筆頭ですからね。

海部 そうですね。けれどもその後、この筆頭というのが、総括副幹事長というのに変わったんだから。西岡を処遇するところがなかったときに、持ってきて、「じゃあおまえは総括副幹事長だ」とやった。

伊藤 「総括副幹事長と筆頭副幹事長と」どっちが上なんですか。

海部 どっちでも、おれが上だ、おれが上だと言っておれや。そうは行きませんけれどね。まあ筆頭が一番上ですよ。筆頭副幹事長が役員会でも七役の次に座るようになっていきますから。ほかの副幹事長は並び大名で、その他大勢になる。

楠 たしか副幹事長というのは五派閥から一人ずつですね。そうすると五人ですか。

海部 （うなずく）

佐道 筆頭は一人ですね。内閣は十一月一日にできるんですが、そ

の前に三役はできていますね。金丸さんが幹事長、官澤さんが総務会長、藤尾さんが政調会長。先生はその三役と同時に副幹事長に任命されたんですね。

海部 だいたい幹事長が決まると、自分と気心が合わぬ副幹事長がおつても困るし、どこの派からも来ていなければ困るから、「これ頼む」「これ頼む」ということになるんだね。

伊藤 これは派閥からのお仕着せではないんですね。

海部 派閥に推薦依頼することになっておるんですが、派閥の順番通りにいかんときには、そのときの幹事長なりが、「これは」といつて直接交渉をする。そうすると、スツと決まるわけだね。

伊藤 先生の場合は、金丸さんが幹事長ですから、金丸さんが「海部がいい」と言ったわけですか。

海部 「海部がいい」と言ったかどうか知らんけれど、その前に議運、国対で長かったから、気心がわかっていてということはあると思います。

伊藤 金丸さんとは長いおつき合いですか。

海部 いやいや、おつき合いはそんなに長くないけれど、田中角栄さんと三木武夫さんの関係があつたものだから、さあとなると、お互いに悪口も言わなければならぬ、戦わなければならぬけれど、それはそれ、まあいいじゃないか、ということを書いて、おつき合いをした。中曽根さんと同じぐらい長かった、ということですよ。

伊藤 じゃあ金丸さんとしても多少気心が知れているからいい、ということですね。

海部 そう、そういうことだったろうと思います。それから野党のほうの連中も、だいたいこっちは顔を知っておつたし、物も言っておつたし。

伊藤 その五人の副幹事長の中で誰が筆頭になるかということは誰が決めるんですか。

海部 それは幹事長ですな。幹事長が自分で決めるんだと思います。伊藤 弱小派閥でも。

海部 ああいうときは、みんながやりにくいと思つたらうな。一番小さい派閥を筆頭に置かなければならぬので。

伊藤 置かなければならぬというのはどういふわけですか。

海部 「海部氏が」筆頭だ」と金丸さんが、みんなの前で言うものだから。

佐道 ほかの副幹事長の方と比べて、先生は年次とかからして一番上でいらつしやつたんですか。

海部 どうかしら、そこまで調べた覚えはありませんが、年齢からいうと、「僕より」上の人はおつた。ただ当選年次からいうと、僕は比較的早かつたから、引けを取ることはなかつたらうと思ひますね。

伊藤 第一、大臣経験者だからね。

佐道 幹事長が閣僚三つ分ぐらいに相当するという言われ方をしますが、筆頭副幹事長ぐらいになると、処遇的には閣僚級ということでしょうか。

海部 これはもう閣僚級です、はい。仕事もそれぐらいのことはやらされます。苦勞して走り回る。

伊藤 僕らは、幹事長が何をするかというのはなんとなくわかるよな気がしますが、筆頭副幹事長というのは何をするんだらうか、と思ひます。

海部 下請けですよ。

伊藤 幹事長の、ですか。

海部 そう。「この問題はどうかやたら糸がほぐれると思つておるか」と聞くから、こうこうこうだと言うと、「絵に描いてきてくれや」という。そういうときは各党の考え方や、なぜこの法案があがらないかということを考えて、これは一期先回しとか、これはこうだとか、国会の中の法案の交通整理だな、そういうこともやらされました。

佐道 そうすると、幹事長と筆頭副幹事長の組み合わせで、だいたい副幹事長の仕事の内容も変わってくるわけですね。

海部 人によりけりだと思ひます。幹事長が任せる人と、任せない人で違ふ。

佐道 能動的な人だつたらずいぶん違ふわけですね。

伊藤 金丸さんはどうですか。

海部 任せる方だ。

佐道 そうすると、前の官房長官と副官房長官時代の再来ですね（笑い）。

海部 任せる方だな。

伊藤 じゃあ、実質的に筆頭副幹事長は大きな力を持つたわけですね。

海部 その代わり、やろうと思えば朝から晩までおらなければならぬですからね、幹事長室に。いろいろな話が素通りしたら困るから全部捕まえて知っていなければならぬし、各省の連中も、いろいろなことを途中下車してでも報告していかなければならぬと思う。それがみんな整理されて、幹事長のところにあがつていくものになりますから、筆頭副幹事長のあいだは、朝出て来たら幹事長室に入つてしまふ。

伊藤 副幹事長室ではないんですか。

海部 「幹事長室に」幹事長の机があつて、「副幹事長の机は」その前にずつとありますから。

伊藤 同じ部屋の中ですか。

海部 はい。あれは田中幹事長の頃からあなつたんじゃないですか。

伊藤 じゃあ幹事長があつて、あと副幹事長がずつと並んでゐるわけですか。それで幹事長に一番近いところが筆頭副幹事長ですか。

海部 そう。ところが、全副幹事長は必ずしも、いつもいないんですよ。それぞれ委員会の担当があつたり、選挙区のことがあつたりする。だからだいたい幹事長室におるのは、幹事長がおるときは、副幹事長は二人か、せいぜいおつても三人でしょうね。

伊藤 幹事長はしよつちゆういるわけですか。

海部 たいていおります。それが国会の中で司令塔になるわけですから。特に国会開会中はそうです。

伊藤 会期外るときはどうですか。

海部 会期外るときは、党本部に幹事長室がありますから、そっちに行きます。

伊藤 ああ、ちよつと待つてください、そうするといまの話は――。

海部 院内の「幹事長室」です。

楠 院内に幹事長室というのがあるんですか。

海部 あります。開会中は院内の幹事長室におる。閉会中は党本部の幹事長室だ。それ以外は、みんな個人事務所を持っておる。田中角栄さんも金丸さんも個人事務所があるから、そこへ行っている。

伊藤 そうすると、幹事長は議会中はそのにデンといるんでしようが、それ以外ときは筆頭副幹事長がずつといなければならぬんですか。

海部 ずつといなければならぬことはないけれど、いなければその後の戦闘、航海に支障を来しますからね。どういことが起こったか、どういことが行なわれておるか、誰が出入りしておつて、この法案には誰が熱心か、役所はどういう感觸で動いているか。そこに用があつてもなくても、おるといことが大事になってくるんじゃないですか。おるとやっぱりわかるんです。

■筆頭副幹事長2（参議院幹事長）

佐道 金丸さんという方は、幹事長室にずつと詰めておられる方だったんですか。

海部 どうかしら、他の人の筆頭をやったことがないから、あまり他の人と比較して物が言えんけれど、あのおじさんはおつたし、おらんときには、「ここに行つとるからな」とちゃんと伝言したりメモを置いたりして出かけた。「楠氏を見て」君は覚えておるかもし

れんが、佐藤さんという古い女の子がおつたよな。あれにみんな教えていくんだ。だから行き先まで僕らは知つておつた。だから「今日はちよつと用があつて、つまみに行つておるから」というと、どこにつまみに行つておるかは、ちゃんとわかるわけだ。

楠 そういふところで暇なときは、先生は何をされているんですか。よく囲碁をしていたりといいますが。

海部 いや僕は囲碁はできなかったものだから。そういふときはしようがないから、新聞を読んだり、本を読んだり、原稿を書いたり、ダベツたりしておつたんですね。

伊藤 暇なこともあるんですか。

海部 ありますよ。それは二十四時間全部忙しいわけではありませんからね。暇なこともあります。

伊藤 やはり議員会館におられることもあつたわけでしょう。

海部 はい。選挙区の人に会うときには議員会館に帰つてそこで会つたり、話をしたり、いろいろしますから。

伊藤 幹事長とは絶えず報告をしたり、指示を受けたりということになるんでしょうが、筆頭以外の副幹事長との関係はどうするんですか。

海部 どうしたかな。やっぱり副幹事長はそれなりに仲良くして情報も教えておかなければいかんから、二週間にいっぺんぐらい、「飯を食おうや」と言つて、定席もありますから、そこに行つて、いまこういふことになっていると、いふことを言う。みんなそれぞれ副幹事長には委員会の部屋も担当させてありますから、そういうところで農林委員会の報告、外務委員会の報告を聞いて、各委員会で何が行なわれて、何がもめていいるか。ブロックしておるのは社会党の誰だ、ということまで全部ずつと聞いて頭に入れる。じゃあこの次はこうするか、この辺まで行つていいるか、とやる。だいたい国会の中頃を過ぎると、今度はこれとこれは積み残しになるんだな、ということもおぼろげながらわかつてくる。これを通そうと思つと、ちよつとガチャンコと手荒なこともやらなきゃならぬな、というこ

とになる。そういうときには、その判断は幹事長に仰ぐわけです。

伊藤 まあ、国対の延長みたいなものですね。

海部 はい。結局幹事長室というのは、議運も国対も全部引き受けた最高最終判断みたいなものだからね。幹事長室が知らんとは言えないわけです。

楠 参議院は参議院自民党で別に幹事長とかありますね。その参議院のほうとの関係はどうなるんですか。

海部 それは毎週一回、朝の拡大役員会議といったかな、そこに衆参両方の筆頭さんもそれぞれ集まるわけだ。そこで意見を言ってくれという。

楠 そこで調整するわけですか。

伊藤 役員というのは誰ですか。

海部 党の役員です。

伊藤 三役ですか。

海部 そうです。総裁なんていうのは滅多に出ませんから、幹事長政策問題のときは政調会長、それからややこしい話になったら総務会長。いつも三人も揃っておる必要はないから、そういうときには国対委員長をそこに侍らせておいて、あとは良きに計らえ、ということに任せるわけだ。平和時はそれでいいんです。もめてくると、

ここをどうするか、これはどうするか、党の態度はどちらに決めるか、ということになって、選挙の票にも影響してきますからね。そういうときは党の役員室に集まって、全体で会議をする。そのとき参議院だけ「つんぼ敷敷」に置いておくというわけにはいきませんから、絶えず話して、意思の疎通を図っていなければならぬ。

伊藤 参議院の幹事長とか、筆頭副幹事長とかを呼ぶわけですね。

海部 そうです。

伊藤 これは議会の中はわかりませんが、国会開会中は議会の中、開会中は党本部。参議院はどうなるんですか。

海部 参議院も党本部に来ます。国会が閉会になれば、参議院もクローズされる。

伊藤 参議院自民党というのは――。

海部 それは一つの立派な勢力ですからね。

楠 議員会長、幹事長、政審会長ですから、ちゃんと役員がいますね。

海部 国対委員長もおれば、議運の委員長もおる。それから議長もおれば、一時期は副議長もみんなあったんだ。それからそれぞれの委員長もおるわけでしょう。だから僕らが一番手を焼いたのは、常任委員長連絡会議というやつだ。週に一回衆議院の常任委員長と参議院の常任委員長を全部集めて、そこで両方の委員会の進行状況を聞く。そのときに衆議院から音を立てないで参議院に持ってくる法律はどれとどれか。音を立ててもつてきたものは、参議院は会期延長後の国会に回すとか、いろいろなことをそこでだいたい話して、専門家が決めるんです。だから参議院も、日頃は何も力がないけれど、最後にそういうときにはゴネることができるわけだ。

伊藤 自分の力を誇示しないと、忘れられちゃうから。

海部 参議院は、われわれ衆議院のほうから見れば、いったん通れば憲法上のあれで通るわけでしょう。けれどもそれを口に出すと大変なことになる。気を遣いながら、腫れ物に触るように扱うわけです。

伊藤 何か非常にわかるような話ですね。さて、どうしましょう、四時を過ぎました。筆頭副幹事長になられてからのご印象というところから、次回また始めていただければと思います。

佐道 そうですね。この関連質問からまたつくります。

伊藤 それで二年経って、任期延長で中曽根内閣が続く。そのあいだまた文部大臣がありますからね。

佐道 次回はまた盛りだくさんです。

海部 ちょっと思い出して、整理しておかなければならぬ。二度目の文部大臣のところですね。

伊藤 文部大臣の前にいまお話を伺った筆頭副幹事長があります。その時代のことも含めて、お話を伺いたいと思います。(以上)

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 22 回

中曽根内閣時代Ⅲ (1984～1985)

【2003年5月28日 (水) 14:00～16:20】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

楠 精一郎 (東洋英和女学院大学教授)

佐道 明広 (政策研究大学院大学元助教授)

[記録、編集] 丹羽 清隆

(2003年5月28日)

1. 今回は、前回に引き続き、84年11月第二次中曽根改造内閣が成立し、先生が筆頭副幹事長（幹事長：金丸信、総務会長：宮沢喜一、政調会長：藤尾正行）に就任された頃のお話からお願いします。金丸幹事長については前回、国対の関係で比較的長いお付き合いであったとのお話がありましたが、幹事長としての金丸氏をどのように見ておられましたか。最近、奥島貞雄氏が出した本によると、通常国会の会期延長問題での「舌禍事件」等もあったとのことですが、いかがですか。
2. 副幹事長として先生のほかに、森喜朗、小淵恵三、武藤嘉文、水野清、浜田幸一、渡辺美智雄（幹事長代理）といった方々がおられたようですが、役割分担等はどのようにしていたのでしょうか。
3. 12月6日、金丸幹事長と黒川武総評議長が会談します。自民党首脳と総評首脳の初会談ですが、これは労働勢力取り込みの一環ということでしょうか。また、階段の実現に向けてはどのようなことがあったのでしょうか。先生は何か関与されましたか。
4. 1月27日、竹下登を中心に創政会発足が表面化します。2月7日、40人で初会合するわけですが、この中心に金丸幹事長がいました。創政会旗揚げの動きについて先生はどのように見ておられましたか。
5. 上の質問とも関連しますが、2月27日、田中角栄元首相が脳梗塞で倒れ、入院しました。いろんな噂も流れ、政界にも大きなショックがあったということですが、先生は「田中倒れる」の知らせをどこで、どのようにお聞きになり、どのような印象をおもちになりましたか。
6. 政界の世代交代の動きは民社党にも波及し、4月の党大会で佐々木委員長が退陣し、春日一幸常任顧問も辞任します。塚本書記長が新委員長となりますが、人事をめぐっては、留任を望む春日氏や塚本氏と世代交代を主張する佐々木・永末国対委員長が対立し激論になったということです。先生は春日氏とは長年親しくされ、民社党にもパイプを持つ先生は、この一連の展開についてどのように見ておられたのでしょうか。
7. 5月31日、自民党は定数是正問題で「6増・6減」案を国会に提出します。議員の政治生命にかかわる問題ですから、党内のとりまとめにはご苦労されたと思いますがいかがですか。また、自民党案に対抗して社・公・民・社民連が4党統一案を作成し国会に提出します。7月7日には最高裁で現行定数配分は違憲という判決が出るなかで、自民案・野党案は両案とも継続審議となり、結局12月21日に両案とも廃案になりますが、この経緯についてもお願いします。
8. 6月25日、衆議院は自民党が議員立法として提出した国家機密法案（スパイ防止法案）を異例の記名投票で継続審議とします（当初反対の新自由クラブが賛成に回る）。議員立法から継続審議に至る経緯等について先生は関与されていたのでしょうか。
9. 7月7日、都議会議員選挙があり、自民党56（5増）、社会党11（4減）で勝利を収めます。都議会議員選挙は地方議会選挙の中でもかなり重要度が高く、今後の政治動向を示すものともいわれていますが、都議会選挙について先生は関与されていたのでしょうか。

10. 前記の奥島氏の本によれば、6月6日、日朝友好議員連盟を通じて、北朝鮮の代表団が金丸幹事長に会いたいと言ってきたことが書かれています。結局、諸般の事情を勘案して幹事長ではなく渡辺幹事長代理が都内のホテルで会ったということですが、この件について先生は何かご存知でしょうか。
11. 7月26日、国鉄再建監理委員会は、6民間会社への分割、貨物分離、余剰人員9万3000人等を内容とする最終答申「国鉄改革に関する意見」を首相に提出しました（これを受けて10月11日「国鉄改革のための基本方針」を政府決定）。この問題は行財政改革の柱として単に国鉄の問題にとどまらない重要性を持っていますが、先生は何か関与されたのでしょうか。
12. 7月27日、自民党セミナー（軽井沢）で中曽根首相は、防衛費の1%枠突破、靖国神社公式参拝についての意思表示を行い、「戦後の見直し、総決算」を強調しました。中曽根首相が強調したことは党内にもかなり異論もあり、先生ご自身もいろいろとお考えがあると思いますが、中曽根氏の主張やその後の展開について、当時どのようにお考えでしたか。また、田中元首相が倒れるなど、思わぬ展開もあったわけですが、この時期の中曽根首相のリーダーシップ等については、どのように評価をしておられますか。
13. 日航機が御巣鷹山に墜落し、520名死亡という大事故があった翌日の8月13日、三光汽船が5200億円の負債（実質1兆円）を抱えて倒産しました。戦後最大の倒産と言われ、河本敏夫オーナーは投機的経営だと厳しい批判をあび、責任をとって沖縄開発庁長官を辞任しました。今後の河本氏の政治生命だけでなく、実質的な派閥の長がこういった事態になり派閥の関係者への影響も大きかったと思いますがいかがでしょうか。
14. 9月22日、G5の蔵相・中央銀行総裁会議で、ドル高是正の推進が打ち出され（ブラザ合意）、そのあと円高が急速に進行します。これは日本の中小企業にも大きな打撃を与え、円高不況ともいわれましたが、この問題に対する自民党内の動揺などはいかがでしたか。
15. 第2次中曽根第2回改造内閣が12月28日に成立し、先生は文部大臣に就任されます。就任の経緯などお願いします。

※今回は以上のような質問についてお願いします。

■現在の政局から（イラク戦争）

伊藤 今日、主として楠さんからお伺いします。前回は三月でしたが、そのとき冒頭で話していることはイラクがどうなるかということでした。でも、もうとつくとつくと終わってしまいましたね。

海部 とつくとつくと終わりました。しかもアメリカの評判がガタツと変わって、とうとう私も余計なことを一言、トリノの会議で言ってきた。あまりやられておったから気の毒だったので。

伊藤 応援してあげましたか。

海部 応援したんだ。だってヨーロッパがあんな様子だとは知らなからね。ひどいんだ。

伊藤 フランスもいま頃になって謝っても遅いですよ。

海部 遅いですよ。あのときに、フランスはまだ先頭に立って反対している急先鋒みたいな顔をおつてね。ゴルバチョフも調子がいい男だから、「おやじの方はよかつたけれど、息子の方は馬鹿だ」というようなことを言うんだ。

「そんなこと、君ら言っても駄目だよ。アメリカは今回片鱗でも領土的野心を見せたことがあったか。全くないじゃないか。いままでの戦争とは全然違うよ。同時に、アメリカは善意をもってやっている。解釈の仕方はいろいろある。裏と表があつて、意地の悪い国の人は、アメリカは石油目当ての戦争だとさかんに言うけれど、そうじゃなくて、正義を守るために一所懸命やっているんだ。それを、頭ごなしにみんなで寄つてたかつて、いけない、いけないと言うのは、なんだ」ということも言った。

その前に、誰だったか、ジョセフ・ナイ、前の次官が今年のダボスの会議に行つて、「ダボス会議というのはこんなに反米の意識が強いところか」ということを言ったとか言わないとかいう連絡が来た。ヨーロッパの声は、反米とは言わないまでも、アメリカに対し

て物を言うほうですからね。僕もどちらかといえばアメリカには「あまり早まるな、ひと呼吸おいた方がいい」というようなことを、決める前には言っておつただけけれど、あまり四面楚歌で叩きまくられておるから、かわいそうだね。

ゴルバチョフとは共同議長になったんですよ、僕は。ゴルバチョフが横におつて、反対側の横にアンドレオッテイがおるんだ。「あんたがた、ゴルバチョフさんもアンドレオッテイさんも、ジョージ・ブッシュとはよく話し合つてご理解があるはずだ。あんなひどいことはないじゃないか」といろいろ言つたけれど、万雷の拍手は起きなかつたな。ほんのちよつとだけだ。

楠 早期に戦争が終結したおかげで、「小泉」内閣の支持率も上がりましたね。いったん下がったのが、また上がりましたね。

海部 上がったね。あれが続いておつたら大変だったな。

■筆頭副幹事長3（副幹事長の選任）

楠 それでは質問に移らせていただきます。今回は前回に引き続いて、一九八四（昭和五十九）年十一月に成立した第二次中曽根改造内閣のあたりからお話を伺いたいと思います。このとき先生は筆頭副幹事長に就任されておられます。幹事長は金丸「信」さんということですが、仕事を通じて、金丸さんをどのようにごらんになっていたかということをお話しいただきたいんですが。

海部 金丸さんというのは、われわれ仲間、といつても派閥ではなくて、国対あるいは議運、幹事長室の仲間である話するときには、ちよつと申し上げにくいけれど、アバウトスキイと呼んでいた。それは竹下が命名したんですよ、海部俊樹ではない。何かあると、「あれはアバウトスキイだから」と言っていた。その金丸さんが、「とにかくみんなに協力してもらわないとうまくいかんから、よろしく頼むよ」というようなことで、それぞれの派閥から副幹事長を

選んだ。

伊藤 それについては、幹事長が発言権があるんですか。こいつを寄せ、とか。

海部 事前には、ありません。

伊藤 話し合いをするわけですか。

海部 話し合いをするわけです。誰に来てほしいとか。それで各派から一人ずつですから、派閥の意向もあるので、派閥のボスのところにもちゃんと連絡をつける。

伊藤 組閣みたいなものですね。

海部 そうですね。それで田中大助をどうのこうの、ということがあったが、それは駄目になった。それから自薦組の浜田幸一は、議院運営委員会で私も長い付き合いがあったので、「海部君、ハマコーを下にくつつけるから、手綱を引いておつてくれ」「と金丸さんが言う」。「あんなじゃじゃ馬はどうにもならんよ」と言ったら、「いや、あれは使いようによる。なんとかとハサミだ。あれはあれで使い道があるんだよ」という。

楠 ハマコーさんは無派閥ですよ。

海部 無派閥です。けれども、出てくるわけだ。

伊藤 各派閥一人ということではないんですか。

海部 各派閥一人ずつになつていたんですが、強いていえば、このときは川島派の枠で採つたんだ。昔の椎名派というのかな。たしかそんなことがあります。無派閥からという、前例になるからいいんだ。

楠 このときの印象では、ハマコーさんは金丸さんのボディガードみたいな感じでしたね。

海部 用心棒だ。

楠 なんでハマコーさんと金丸さんはそんなに関係がよかつたんですか。

海部 いや、よかつたんじゃない。ハマコーが押しかけたんだ。

伊藤 物事はやつぱり、やつてみるものだな(笑い)。

楠 それでその二人の関係はどうでしたか。

海部 金丸さんは適当に使つておつた。

伊藤 金丸さんのことだから、それはうまく使つたんでしょね。

海部 便利でもあるから、上手に使つたり、お使いに走らせたり。

伊藤 金丸さんはアバウトだと言われていますが、実際にそうなんですか。

海部 いや。細かいことや数字をきちんとかえたりはしないけれど、全体の勘所だけは、なんのこのいつてもよく掴んでおつた人だと私は思います。そして、どこを押さえてどうしたらいいか、わかつておつた。あの人は法律を通さなければならぬという人だ。法律のつくり屋ではなくて、上げ屋ですから、この法律を上げるにはどうしたらいいか、どこに手を打つたらいいか、どこをどう口説いたらいいかということを決えず考えていた。そういう分析の仕方とか手の突っ込み方は、いまは通用しないと思うが、当時としては実によくやつておつたと思う。

伊藤 でもそういうことについては、海部さんもベテランのわけでしょう。

海部 はい。けれどもそれよりも、もつともつとウルトラベテランだ。

佐道 ハマコーさんは使いよう、ということですが、ハマコーさんはどういうところに得意な点があるのでしょうか。テレビとかで拝見していると、うるさいことをガタガタ言っているイメージじゃないんですが、どういう分野が得意なんでしょうか。

伊藤 あとは机を振り回すとか(笑い)。

海部 テレビを見てみると、そういうところしか出ないけれど、いろいろ法律の大詰めの場面に来ると、それが通るようにするにはどうしたらいいか、ということをやっている。健康保険法の問題か何かのときだったな、これはいつかもし上げたかもしれないが、田川誠一君が社労の委員長で、この日までにやるといつておつた採決をやらなかつたんだ。やらないと、あとが困るといふことになつ

てきた。そうしたら、「田川を刺します」と言うんだね。よう忘れんけれど、真面目な顔をして胸を張って「田川を刺します。それ以外に手はないでしょう」と言う。さすがの金丸さんも「駄目え！」と言ったね。

それをまた逆に利用して、党へ行くと、「ハマコーあたりが田川を刺すと言っておるから、あんたも気をつけて、あまりどこまでもごてんようにしとった方がいいよ」と言ったりする(笑)。その頃は、河野洋平とか、西岡武夫というのが田川とは比較的話のよくできる方だった。

■筆頭副幹事長4 (副幹事長の役割)

楠 副幹事長は、先生のほかに、森喜朗、小淵恵三、武藤嘉文、水野清、浜田幸一、渡辺美智雄がなっていたということです。渡辺さんは幹事長代理ということですが、筆頭副幹事長と幹事長代理はどういう関係なんですか。どちらがえらいんですか。

海部 それはお互いに両方とも、自分のほうがえらいと思ってる。幹事長代理というのは、幹事長が出て行けない仕事を、代わりに出て行って祝辞を読んだり取り仕切ったりしてやる。それから筆頭副幹事長というのは、副幹事長会議を統率して、そこで意見をまとめていくというような役割分担があったと思うんです。

楠 事務次官会議における事務方の官房副長官みたいな感じですか。海部 まあ、事務方ほど明々白々と境界はできていないし、筆頭副幹事長といっても、どういうことかこの時こうなったのか知りません。ただ僕は、「とにかく副幹事長できてくれや」と言われ、「ああいいですよ」といった。役員会で座るときは、副幹事長は別の列にずっと座りますからね。「筆頭さんはちよつとここに座って。ここから先は君、決めてやれよ。歳の順でもいい。歳の順だけで決めると文句を言うからな」と言われた。このとき、佐々木義武なんか

はどうだったかな、あれとも一緒に副幹事長をやったつもりでおったけれど、時期が違ったかもしれない。

楠 副幹事長は、参議院からは入らないんですか。

海部 入りますよ。参議院の連絡さんも入ります。

楠 ここには載っていないですね。

海部 そうしたら、あの頃は国会対策だけかな。参議院担当がおつて、毎週必ず会には出て来ておつた。そして党の役員会をやるときには、委員長と衆議院と参議院の副幹事長が出てくる。僕らは、参議院は連絡担当だと見ていますからね。

楠 副幹事長のあいだの役割分担みたいなことはあったんですか。

海部 筆頭は総括。総括ということは各役所全部を見ておれということだ。あとはそれぞれによつて、得意・不得意がありますから、君はどこ、という。

伊藤 役所を分けるわけですか。

海部 そう。だから社労担当といったり、大蔵担当といったり。渡辺美智雄は大蔵担当をやったはずだ。

伊藤 森さんは何でしょう。

海部 森はあの頃はなにをやっておつたんだろう。

伊藤 この副幹事長の中で、先生が一番印象に残っておられるのは誰ですか。

海部 ハマコー。乱闘になるときは喜び勇んで、一番最初に走って行って、首を絞められたりぶん殴られたりして、「このまに早く採決を」とか言って、勘所はよく知っておつたからね。乱戦を切り開くんだ。法案採決の時は、どうせ向こうも労働組合上がりの腕に自慢のやつが飛んできて暴れますから、そういうのを(伊藤 蹴散らかす(笑))。いい話ではないけれど、あれは体力派だということだ。「体力派の出番だ!」という、ハマコーが「はい!」というて走って行くわけだね。

伊藤 渡辺美智雄さんはどうですか。

海部 渡辺美智雄は税理士会の代理みたいなもので、法案が大蔵委

員会で出てきたり、税理士会関係の法案になると、一所懸命いろいろなことを言っておりましたね。

伊藤 この人もニューリーダーの一人として、当時から注目されていたのではありませんか。まだですか。

海部 まだちよつと早かつたんじゃありませんか。こんなころは、小淵恵三もまだだ。

楠 この中で現役でおられるのは、先生と森さんと武藤さんですかね。

海部 武藤も現役だね。

伊藤 ハマコーはテレビで現役だけれど（笑い）。

佐道 小淵さんはこの当時はどういう印象でしたか。

海部 竹下の連絡係だ。いろいろ難しいことや、やりにくいことの前例を、「竹下のところに行つて教わつてこい」という。金丸さんはそこら上手に使つたんだ。「おい君、竹下が何を考へておるか聞いてこい」という。というのは、あの頃は役割分担はだいたいうまく行つていたと思いますよ。

伊藤 それでこの副幹事長同士は、やはり仲間ということになりますか。あまりそういう感じでもないですか。

海部 やはり仲間になつちやいますね。

楠 定例の副幹事長会みたいなものがあるんですか。

海部 あります。

伊藤 そうしたら懇意になるでしょうね。

佐道 あの頃は役割分担がうまく行つていた、とおっしゃつたんですが、そうするとある時期からはうまく行かなくなつてきたということですか。

海部 いや、そういうふうには取られると困つちやうな。それでは前言取り消します。あの頃は各派閥があつて、「副幹事長は各」派閥から出ているわけです。それぞれの副幹事長は派閥に帰ると、派閥の立場と副幹事長として党へいつて仕事をやるときの立場と顔は、ちよつと違ふんですね。派へ帰ると、スパイが帰つてきたような顔

をされる。「おまえら、そんな顔をしておつたつて駄目だ。もうちよつと協力しろ」とよく言つたことがあるけれど、党全体のことに對して全力を挙げて協力するということをあまり快しとしないような雰囲気があつたし、況んや、議運、国対のことを一所懸命やつておる人は軽蔑されるような冷たいムードもあつた。

伊藤 三木派の中でもそういう感じがあつたんですか。

海部 どの派閥でもそうです。

伊藤 でも三木さんとか河本さんとは直（ちよく）でやるわけでしょう。

海部 直（ちよく）でやりますし、指示は直接もらつてやつておつたけれど、やはり歳上で当選回数が多い人や、斜に構えたい人がおるでしょう。名前をいつたら悪いけれど、そういう人たちが「海部さん、海部さん、ちよつと教えてよ。このあいだの委員会の強行採決はよくないと思うよ、僕は」という。それが鯨岡兵輔だ。あの人は今でこそみんながきれいだと言つけれど、真つ青になつたのは、いつか新聞に税理士会汚職が出たときだ。あのとき一番たくさん巨額をもらつていたのが鯨岡兵輔だ。そのことが新聞に大きく載つたんだ。そうしたらガタガタ震えて、「議運のほうではこういうことはどうなるんだろう」というから、「デーンとしておればいいだろう。もらつたつて、きちんと届け出をしてあるんだろう」と言つたんだ。

伊藤 人によつていろいろあるんですね。

海部 それから金丸さんのところに、都連の金をくれと言つてきた。「筋が違うじゃないか」「まあ幹事長、そう言わずに。都連がガタガタになつてゐるから」。東京都連の会長も鯨岡がやつていた。そのとき幹事長の金丸さんのところに金をもらいに行つたわけだ。それは筋が違うじゃないかと僕は言つたんだ。「都連は都連で片を付けなさいかんじじゃないか。そうやつて行くなら、都連の会長の肩書きを抜きにして、一長老議員として、『見るに忍びん、少し、あるところから出してくれ』と言つて取りに行くのが筋じゃないか」

というような議論を下でやったこともありましたな。「それはそうだ」と言っておれの説に賛成したのが、議長になった伊藤宗一郎だ。

■筆頭副幹事長5（金丸幹事長）

楠 こういう本があるんです「奥島貞雄著『自民党幹事長室の30年』中央公論新社刊、を示す」。ここに通常国会の会期延長問題での舌禍事件というのが書いてありますが、それについて何か思い出すことはございますか。

海部 いや、会期延長の舌禍事件というのは誰のことを言っておるんだ。

楠 金丸さんですね。

海部 おれはまだその本を読んでいないので、買ってきて、いつべん読んでみますが、その奥島君というのは幹事長室にずっとおつて、いろいろなことを知っておるわ。

楠 ちよつと細かい話になりますが、金丸さんの人柄について面白いことが書いてあります。意外に公正な人だったという話ですね。というのは幹事長のときに、「応援演説「の依頼」が選挙のときには殺到する。そういうときに自分の派閥の候補を優先しがちだけれど金丸さんは決してそういうことはしなかった。ほかに例を探すなら、田中角栄もそういうところがあつた」ということですね。そういうことで、知られざる金丸さんの一面を紹介しているんですが、そのあたりはいかがですか。

海部 それは幹事長として割り振るときは、「応援演説の」要請は全部幹事長を通さなければいかなから、みんな幹事長のところに持ってきてます。誰のところに行くってくれ、彼のところに行くってくれ、といて割り振る。だいたい無理のないように、要望に応えられるようにしたわけです。そんなことをいっても、あら探してみたいなことをやったら別だけれど、金丸幹事長が自分で出そうと思つた滋賀

県かどこかの上田という土建屋の一年生がいた。これはからつきし演説ができたのだな。それであるとき、おれと宇野宗佑と竹下とを呼んで、「困っちゃつたな、上田のところにはみんなに行つてもらわなきゃならんけれど、まず誰か。あまり田中の息のかかつたものばかりではないかん。田中金権反対といつて地元でやられてるわけだから、毒消しに行つてもらわなければならん。一番いい毒消し役は、ここで見ると海部君だな。ひとつ行つて、やつてきてくれい」と言う。「それは三木さんの了承をとらんといかんですよ。ちよつと話してきますわ」と言つて話したら、三木さんほうまいことを言つたな。

「天下国家のためになるようなことなら体を張つても断われ。しかし君らが応援を頼まれて行くのなら、選挙もまだ始まつているわけでもないし、『わが党のために、こういう若い候補者が必要だ』というようなことを、君の立場で言えばいい。誰に頼まれたというようなことはあまり表に出さずに、青年部の関係で見つておつて、見所のあるタマだというように言つてやれば、両方とも顔が立つじゃないか」という。そういう判断は三木さんはよくしたな。あれもバルカン政治家と言われた一面だ。みんなの立場を考えて、スツと行ける。そのとき、上田なにがしは僕は初対面ですが、頼まれて行つた。「海部君、頼む、頼む」といつて、金丸さんが頭を下げるわけだ。

伊藤 金丸さんにそう言われたら断われないですね。

海部 断われない。毎日一緒に幹事長室で顔を合わせるわけですから。それから昔に言われているように、事前に金を持ってきて、行つてくれ、頼む、とは言わんから。行つて帰つてくるときはゲンコツですよ。

伊藤 何ですか、ゲンコツつて。

海部 行つて帰つてくるのはタダ、ということだ。けれども、ちゃんと長い目で見ておると、「ああ。君にはあれもこれも世話になつた。これは幹事長の上積みだと思つて取つておいたらいい」という。

あの頃は、副幹事長にもなにがしか渡すわけだ。そのなにがしかを渡す上に、自分の闇魔帳を見て、これには何回か無理を言った、というときに――。

伊藤 プラスαが付くんですね。

海部 あの頃は何かというか、毒消し役というの必要だったんだ。

伊藤 海部先生の話を聞いていると、いろいろな新しい言葉が出て来ますね。

海部 田中角栄が親分のころ、金丸さんを育てたいというので、田中さん自身「山梨県に応援に行った」。あの頃は総裁でも地方に応援に行ったんだな、知事選挙か何かにかこつけたのかもしれない。「山梨へ行って、ちよつとしゃべってくれんか」というので、「いいですよ」と言って、行ったんだ。「三木派の出身代議士がおるところには絶対に行きませんが、それらがおらんところはいいいですよ」ということで、いつも行ったんだ。

そうしたら、田中角栄が甲府かどこかで街頭演説をする。これもびっくりするような演説をした。「自分は金丸君を非常に信頼しておる。あんた方がみんなして出した人だ。きつとこの役に立つから、落とさんでもらいたい」という。そして、いろいろなことをしゃべって、「これから先の政治の中では、金丸君がいま一所懸命育てておる人がここにもおる。海部君はその一人だ。こうやって自民党は、次々と自分の周辺における世代の中から歳の下の人を選んで応援して、連綿とやっていくのでありまうす」なんて言っているんだ。そして僕らは山梨なんて知らんが、「おい、海部君、君は選挙区は愛知県だったな」「そうです」「この男は愛知県です。愛知県にお知り合いや友達があつたら、どうぞ応援してやってください。田中角栄がそう言って頼んでいたと言ってもらえればいい」という。そうするとこっちは感激しちゃうんだ。「そこまで言ってもらえたらありがたいことです」ということになるわけです。

伊藤 人心収攬ですね。

海部 あれはどこに行ってもそれをやったと思うんだ。どこの選挙

区に行っても、そうだ。あとから話を集めてみると、そうだね。

伊藤 それはいい方法ですね。

海部 だから、「田中角栄はこういう演説で結びましたよ」と三木さんにも教えた、「先生はあんまりそういうことを言わんからな」と言ったら、「そうだ、わしはそういう取つてつけたようなことは言わんのだ」と言っておった(笑い)。

■新自由クラブとの連立2 (山口労相入閣)

楠 ちよつと金丸さんから離れて、事前の質問項目に入っていないことなんですが、八四年十一月の第二次中曽根改造内閣に、新自由クラブから山口敏夫さんが入閣しています。

海部 労働大臣だ。

楠 労働大臣です。この経緯について、何かご印象はございますか。

海部 あれは部分連合の走りです。

楠 その前に田川さんが入閣していて、河野さんが科学技術庁長官で入閣していて、三人目が山口さんということでしたね。

海部 新自由クラブというものを枠内に入れたいということで、部分連合のはしりなんだ。それは竹下が一所懸命でした。

楠 山口さんを入閣させることは、特に問題はなかったんですか。

海部 特になかったです。

楠 当時の新自由クラブは人数はたしか五、六人ですね。だから改造ごとに入れていたら、すぐにタマが切れてしまいますね。

海部 そういう面から言うと、当時自民党の連中には、「チンネンはまだ早過ぎる」というやつかみみたいな声もあつたけれど、そういうときは、「まあそういうな、これも入れておかなかければならん」といって、連立の苦しさ、辛さを竹下が一所懸命説いて回っていたことを思い出しますね。

楠 のちにこの人はスキヤンダルで失脚しますが、このときには、

そういうことは特に問題なかったんですか。

海部 だってあれは石田バク「博英」さんのところにおって、バクさんがあれをしょっちゅうやっておったから、そういう話は伝わっておる。

■金丸氏と黒川総評議長の会談

楠 そこで話が戻りますが、この「一九八四」年の十二月六日、金丸幹事長と総評の黒川「武」議長が会談をする。これは自民党首脳と総評首脳の初会談だったということです。先生は労働問題にもお詳しいわけですが、労働勢力の取り込みの一環ということだったんでしょうか。

海部 これは、ウイングを広げようという当時の狙いがあったことは間違いないです。

楠 中曽根内閣の、ですね。

海部 はい。そして、総評のほうにも当時、まあみっちり話だけれど、政府の審議会委員になれるかどうかということがあった。こんなところから、総評の幹部の連中が勲章を欲しくなったんだ。

伊藤 たしか同盟系が勲一等をもらったりしていますね。

海部 総評も欲しくなったんです。「労働組合関係者が勲章をもらった」と大きく新聞やテレビが騒ぐ。けれど、同じ労働者同士で、あれは総評だとか、あれは同盟だとか細かい説明をしてもわからんでしよう。そこで、両方とも「勲章が」欲しいということになってきたんです。金丸さんは、「欲しいものはたくさんつくってやりやあいだろ。ほんの十五万か二十万でできるだろう」という発想の人だったな。「国のためになるかならんかは、みんな同じくらいだ」という。

楠 これは国鉄の民営化とか電電公社の民営化ということとは関係なかったんですか。

海部 直接関係なかったですね。国鉄の民営化は、もうちよつと後になってからギラギラしてくる話だ。

楠 その伏線というわけではなかったんですか。

海部 なかったと思う。あるいは、われわれが考えも及ばんような長い目盛りでやっていらつしやった面があったかもしれないけれど、それはわかりません。

伊藤 幹事長が総評議長に会うというときに、根回しとかは誰がやるんですか。

海部 それは自分自身だ。そして懐刀みたいなのがヒソヒソと入れ知恵をする。世の中では竹下登が全部やっておったようなことになっていくけれど、そうばかりでもないんだな。

楠 この会談には、先生は同席されたんですか。

海部 いや、していません。一番肝心の会談には同席していません。

伊藤 金丸さんの腹心は誰ですか。代議士でいますか。

海部 誰だかよくわからない。どこの女将みたいな、ドーンとした色の黒いおばさんがよく現われておったが、そういうのが情報を収集して伝えたりしておったんだらうな。

伊藤 幹事長室に来るんですか。

海部 来るんだ。弁当箱を包んで、昼時に来る。

伊藤 どこかの料亭の女将か何かですかね。

海部 あれは料亭の女将です。

伊藤 先生のところにはそういう人は来ないんですか。

海部 来ないな（笑い）。せいぜい、ぼた餅か団子だ。

伊藤 よく、人と人をつなぐときに新聞記者の人がいたりしますが、そういう人はいませんか。

海部 おりました。金丸さんの場合は麻雀がとても好きだったものだから、新聞記者でも、これはといたらご存知のような人ですが、二、三取り巻きがおったんだ。

伊藤 その新聞記者の取り巻きは誰ですか。

海部 いや、それはいまでも影響があるから。そいつらの政治生命

が——。政治家ではないから政治生命はなくなってもいいかもしれないが。そういうのがおつて、それ「麻雀の集まり」を設営する。そこに呼んできて、やつておつた。びっくりするような話ですが、財界では——。言わん方がいいかも知れないな。

伊藤 大丈夫です、あとで消せばいいんですから。

海部 すごい人が麻雀の場を通じて一緒になっていた。そこではどんな話をしておつても、終わつてからヒソヒソとやるわけだ。麻雀をやっているあいだは、真面目な話はしませんからね。

楠 先生は麻雀をされますか。

海部 します。だって必要以上に、呼ばれば時にはつき合わなければならぬ。

楠 じゃあ、金丸さんともやりましたか。

海部 やつたこともありませう。メンバーが足らんときは、「おい、ちよつと手を貸してくれ、もうじき誰々が来るから」と言われて。

楠 金丸さんは麻雀は強いんですか。

海部 強くない、と思う。アバウトだから。わざと負けているのかもしれないね。

伊藤 それはわからない（笑い）。

海部 竹下もそうだ。麻雀はそんなに強くない。

伊藤 あまり強いとまずいでしよう。

海部 結局、最後の最後は負けなければならぬでしょう。負けるつもりだ。だから鯨岡だとか、ああいう人たちにはできんわけだ。そんな馬鹿なことはない、なんて言い出すと、全部すつ飛んじやうから。

佐道 黒川さんと金丸さんの会談のあとで、金丸さんがこんなことを話したよ、ということをお聞きですか。

海部 こんなことを話したよ、という報告はありませんが、一人語りで、「いまの総評の議長も、欲しいのか」というようなことが、ポロッと漏れることがあった。だから、ああ、今日は勲章の話をしたんだな、というふうなことで、あとは類推する。その足らざると

ころを補つて解説してくれるのが、例の竹下登なんだ。

伊藤 やはり政府の審議会の委員や何かを振つてやらないと、なかなか勲章は出せないでしょう。

海部 そうですよ。それで政府の審議会の委員に、総評や労働組合の人が入つてくるようになったのが、もうちよつと前からだったと思ひますよ。

伊藤 総評があとじゃないかな。

海部 それは同盟が先ですね。「総評も入れなきやならんからな、海部君」と言われて、それを考えた。だからこちらが内閣に入る前の三木内閣の頃から陳情が多かった。副長官の私のところに、「これをなんとかしてやつてくれ、ああやつてくれ」という。

伊藤 それは労働界から、ですか。

海部 はい。

伊藤 先生も労働界との接点があるでしょう。

海部 ありましたけれど、それはスト権スト以来の仲間ですから。それで社会党の古手の議員たちが仲を取り持つて、おれが話をつけるから、と言つて、よく来たわけです。

伊藤 あの頃はまだ、社会党の人たちは勲章をもらわないという風潮でしたね。

海部 そんなことはないな。

楠 この時期はもうそんなことはないでしょう。

海部 もらつていますよ。それで、これにもやつてくれと言つて、社会党の同僚議員のことも頼まれる。勲三等以上は内閣のあれがいますからね。「そのところは三木さんにきちんと話をつけてきてくれよ」という。勲一等というのは希有な例でしたが、労働組合の代表に勲一等をもらつてやろうということになって、前科前歴を調べた。いろいろなお話がありましたね。

伊藤 同盟系のほうが先にもらったんですね。

海部 そうです。それが総評系には残念で残念で、恨み骨髄なんです。

伊藤 勲章というのは欲しいものなんです。

海部 本人が、ということではないけれど、ある程度の歳になれば、もらっていないと周辺がうるさいんですよ。選挙区の人たちは新聞を見るでしょう。新聞に出るわけですからね。当選回数が同じで、歳がいくらも違わないやつが勲一等旭日大章なんていうのが出ると、「先生、どうしてももらえんのじゃ」と言う。だから、「おれはまだ現役だからな、断わっておるんじや」と言うんですが、「そんなこと言わずに、もらいなさいよ」というんだな。

楠 でも勲章をもらっちゃうと、一丁上がり、みたいな感じになっちゃいますね。

海部 いや、こういう人がこういう発言をするから、影響力も大きいんだ。ご苦労でした、と天皇陛下でさえ言っておるのに、続けてやっているのはおこがましい、ということになるかもしれない。現に中曾根さんや宮澤さんが辞退して断わっておるのは、選挙に響くから、ということがあるからですね。中曾根、宮澤だけじゃないですよ、まだもらっていない人がだいたいおる。

楠 中曾根さんは大勲位をもらいましたね。

海部 ああ、このあいだもらったな。

伊藤 だからみんな、「上がりじゃないのか？」と言っているんです。

海部 それで宮澤はもらわなかったんだ。

伊藤 「中曾根氏は」大勲位までもらってまだ頑張っているというので、いろいろ批評があるわけです。

海部 僕も、今度制度が変わったら、変わった新制度の第一回でもらってやるうかと思うんですよ。

伊藤 いよいよ一丁上がりになるんですか（笑い）。

海部 いやいや、絶対にそれはない（笑い）。

伊藤 勲章の話はいいとして、先に行きましようか。

■創政会の旗揚げ1（竹下氏の心の準備）

楠 一九八五年一月二十七日に創政会の発足が表面化します。先生は直接関係ないと思いますが、創政会の旗揚げについてはどのような見えておられたでしょうか。

海部 あんなころ、ときどき夕飯と一緒に食べたり、呼ばれて行ったりすると、竹下は、「そろそろおれもな、人に言われれば、いつまでも『心の準備ができておりません』なんて言っておるわけにはいかんから、やらなければならんのだな」ということをボソボソ言っておりました。金丸さんなんか、もつとあけつびろげに言っていたな。「『心の準備ができておりません』なんてたわけたことを言っておる。何しに政治家になったんだ、あいつは」と、竹下のことを言っていた。

こちらは創政会で一票入れるとか入れんという立場ではありませんが、仲間が議運、国対の関係者、文教関係者、商工関係者といういろいろおるわけです。そうすると、あちらのほうで話をつけて相談して聞いてきてくれんか、こっちにちよつと来るように言ってくれんか、という向こうの懐勘定があるけれど、そういうことは経世会の人びみんな手慣れた人だから、うまいこと引っ張り込んでやっているわけだ。

伊藤 脇で見ているというのは、どんな感じで見ているわけですか。

海部 だいたいこれは優勢になってきたな、と思っただけです。

伊藤 でも田中派というとてもない大きな派閥ですよ。代替わりで、しかも禅譲じゃなくて、反乱が起きるとい感じでしょう。

海部 戦うんですよからな。

楠 創政会というのは一応勉強会ということでしたな。

海部 いや、それでないと——。これもあとから聞いた話で、現場におったわけではないけれど、竹下が田中のところに行つて、「こ

これは派閥を作るではありません。勉強会を始めるんですから、勉強だけさせてください」と言っただな。

楠 当時は先生はどうご覧になっていましたか。やはりこれは派閥の旗揚げだ、と思っただらうしやいましたか。

海部 それはそう思うさ。だってあいつは、「十年経ったら竹下さん」と、昔から酔っぱらうと歌っていたんだから。

楠 佐藤昭（あき）さんという、田中さんの愛人、越山会の金庫番だった人が書かれた手記の中に、「あの鋭敏な嗅覚を持った田中が、勉強会という言葉をなぜ額面通り信じてしまったのかいまでも不思議に思う」といったようなことを書いていますね。そのあたりは、どうお考えになりますか。

海部 両方ともキツネとタヌキだから、承知の上で、「ここで正面切って喧嘩をして、駄目だ」と本当に反乱を起こされる。いまはまだこうすれば、こちらの影響力の及ぶ範囲内で、頭を下げて謹慎しておる」と。

楠 じゃあ額面通り信じたというわけでもないわけですね。

海部 それはないわけだ。竹さんはいつかはやろうと思っただけで、やがてその時期が来た。その話は小沢辰男に聞くと詳しいんだ。小沢辰男は、とにかく田中角栄には信頼されておったし、われわれみたいな外様ではない。それからいっぺんは、「自民党の幹事長を本気にさせてやれと言われたが、海部、おれ、やっていいかな」なんていって、真剣に悩んでいたこともあったんですからね。

伊藤 なんだかんだ言っても、竹下さんとは非常に近い関係である金丸さんが、この会ではかなり大きな役割を果たしているわけでしょう。「海部副幹事長は」その幹事長の下にいるわけじゃないですか。あまり見えないものですかね。

海部 あまり見えないものです。勘が悪いのか、見通しが悪いのか。そういうところでは、露骨に言ったらすぐに広がりますから、そこは金丸さんも言わんわ。ただ、ちよつと離れて秘かに小人数で夕食に行つたとか、あるいは誰かが麻雀をやっておるときに「どうして

も足らんから助けてくれんか」なんて言われて行っているやつが出るときに、話を聞いたりする。

それからあの人が好きな天ぶら屋があつたな。よく行く天ぶら屋だ。ただ、そこは口の堅い天ぶら屋で、誰と来たとか何を話したとかいうことは信用の中で話ができる人だった。そういうところに行つたときに話をちよつと聞いたぐらいのことで、名前を挙げていちちやらないけれど、竹下さんが最後まで「心の準備ができておりません」と言っておつたことを金丸さんはえらく怒っていた。「それは伝える、ということか」と聞いたら、「そんなこと、伝えないもいんだ。おれのところに『準備ができておらん』なんて言っているうちは駄目だ」なんて言っていた。

その頃は小淵君がその下におつたですからね。僕が行つて金丸さんと話してくると、小淵が必ず、「海部さん、さっきどんな話をした？」と聞いてくるわけだ。「君のほうが近いだろう」と言うと、「近いけれど、おれは竹下に近いと思われていて、おれには本音をしゃべらん。おれに言うとすぐ伝わるから」、「恵ちゃん、そんなふうか」、「そうだ」という。だから金丸さんも、小淵には「目置いているけれど、それは竹下の直の家来だと思っておるから、さらに突っ込んだ話はしなかつたんじゃないですかね。」

そういう点で、もうおわかりだと思いが、哀れだったのは橋本龍太郎さ。あれにしゃべるとみんなすぐに伝わっちゃうという。しかも間違つて伝わったり、こうなつて「胸を反り返す」伝わったりするからいかんといつて、「気をつけてくれよ」と言われた。全体の流れを話すときだな。

佐道 そのとき、竹下さんの側近ナンバーワンは小淵さんですか。

海部 おれは小淵だと思つている。

伊藤 金丸さんの子分はどうですか。金丸さんの子分はいないんですか。

海部 「小淵氏は」竹下のほうです。合わせれば、竹下も金丸のあれだから、小淵だつてそうだけれど。

伊藤 金丸さん直系というのは、いることはいらぬでしょう。

海部 誰だろう。おれはあまりおらんと思います。

楠 用心棒はいるけれど、直系は——（笑い）。

海部 ハマコーはもう、金丸さんが「帰れ」というまでちゃんと動かなかったという用心棒志願者ですからね。ちょうど福田赳夫さんのところに毎朝洋ランを持って通った藤尾正行と双壁をなすという話が、われわれのところには伝わっておるんだ。

楠 まだ鈴木宗男なんていう人はバツジも着けていなかったですね。

海部 鈴木宗男君というのは、ちよつと過大評価の面があるな。世の中を面白おかしくしようと思う人たちがおるから。

■創政会の旗揚げ2（田中氏倒れる）

佐道 竹下派の七奉行と言われて、小淵さん、小沢一郎、橋本さん、梶山静六さん、渡部恒三さん、羽田孜さん、「奥田敬和さん」がいますが、その中でも小淵さんが一番ということですか。

海部 まあ、竹下さんが一番話がしやすかつたんじゃないかな。また小淵君が持つてくる話が、いまにして思えば本筋の話であった。

佐道 この当時は、小沢一郎の存在はどの程度のものであったんですか。

海部 どつちかというと、小沢一郎という人は、そんなに腹の底から信頼しきつて竹下さんに使われていた人ではないわな。金丸さんはいろいろな面で、これを重宝に利用して、ものすごいことまで言ったり教えたりしていたけれども。

伊藤 どちらかという和金丸系なんですね。

海部 大きく分ければ、僕はそう見ているな。

伊藤 やはり自民党の中の最大派閥での異変ですからね。これは影響するところが大きいですね。だからみんなウォッチングしているわけでしょう。

海部 それはそうです。

楠 さつき話題に出しました佐藤昭さんの手記には、「田中さんを一番憤慨させたのは梶山静六、小沢一郎、羽田孜の三氏が創政会の発起人に名を連ねていたことだ」と書いてあります。

海部 それは綱引きをやつたら、金丸さんのほうが田中角栄よりも引きが強かつたんだらうな。僕はそのへんの事情は知りません。ただ、そういう解説をしているとすれば、佐藤昭さんが日頃綱引きをやると、金丸さんの引きのほうが強かつたんじゃないですか。羽田孜君というのはどちらかと言えば、蒼白きインテリ的なところがあるから、悩んだりするわけだね。あれに話を聞くと、「角さんの言うことは無茶無茶だ」とかいつて、心の中にいくらか批判的なものを持つていたから。

佐道 創政会ができて、そのあとで田中さんが倒れてしまうので、そのまま竹下さんの独立がうまく行くという形になります。できた当初は、あの田中さんに反抗してこういう会を立ち上げてうまく行くのかどうか、周辺にいてどういうふうにごらんになっていましたか。

海部 数さえきちんと集まれば、うまく行くも行かんもない、それは行つちやいます。全体のムードがそういうことだったでしょう。同時に田中さんの影響力はあるけれど、日本の政治にとつて本当に腹の底からあのやり方がいいかどうかということになると、みんないろいろ疑心暗鬼、批判もあつたわけです。そこで長いこと、慮げられたわけではないが、頭上げようと思つたとコツン、頭上げようと思つたとコツンだった連中が集まつて一旗揚げるわけですから、それに対しては、比較的好意的な雰囲気があつたのではないかと見ていますよ。

楠 田中さんは二月二十七日に脳梗塞で倒れるわけですが、そのニュースは、先生はどこでお聞きになつて、どのような印象をお持ちになりましたか。

海部 まず第一の印象はびっくりしたということだ。それから重ね

絵のように思い出したのは、その二、三日前に、たしか羽田孜を励ます会だったか、七奉行の中の一人の誰かを励ます会があった。そのときの田中さんの挨拶が非常に印象的だったんだな。

伊藤 その励ます会にはいらっしやったわけですか。

海部 そのだけは、何回も何回もテレビで放送した。いくらなんでも、励ます会に乗り込んでいくわけにはいかんから。テレビでやったところは、田中角栄が、もうおまえもそろそろ年貢を納める、と言ったのかな。「心配無いんです、そんなことは。そういう時期が来たら、神様は、すぐにお召しになるようになっております」と、いかにも自分が倒れることを予感しているように聞き取れた。みんな、「角さんの挨拶を聞いたか？ ちよつとあれは異常だな」と言っていた。そうしたら案の定、それからじき、ああいうことになったな。

伊藤 すぐに神に召されたわけではありませんが、倒れたわけですね。

佐道 政治的には神に召されたのと同じようなことですね。

海部 それが突破口になって、竹下のほうにぐつと弾みがつくわけですからね。

佐道 容態とかそういう情報は漏れなかったですか。

海部 あのとときは漏れなかったですね。脳梗塞で倒れるなんていう情報はなかったです。たしか羽田孜を励ます会だったと思いますね。そこで挨拶に立っている際に、「もうそろそろ田中も終わりじやないかという人がおるけれど、心配ありません。ご心配ない。神様がお召しになる時期があれば……」と、そこだけテレビで何回もやりました。

伊藤 これは中曽根さんにとっては助かったというか。

海部 中曽根さんにとっては、待つてました、だな。変な話だが、目の上のたんこぶがなくなったということだから。

■民社党の世代交代

楠 それで同じような世代交代の話になりますが、民社党も同じ時期に佐々木「良作」委員長が退陣して、塚本書記長が新委員長になる。春日さんとか塚本さんは、先生は選挙区の関係もあって非常にお親しいと思いますが、そのへんは先生はどう見ておられましたか。民社党の世代交代について、何かご記憶がありますか。

海部 塚本三郎は、初めから春日一幸の腰巾着みたいなので、はじめ選挙区が大きかった頃は二人とも名古屋で立候補しておったんですね。

楠 同じ選挙区だったんですか。

海部 ええ。そしてそれが、地盤分けみたいな格好になった。塚本三郎は三回か四回連続して落選しておるわけです。おれはあれが当選するのは初めの頃は思っていないかった。彼は中央大学の頃に専門部の経済の代表か何かになって、ときどき弁論大会に出ておったことを僕は覚えていますね。よくしゃべる。

楠 そうですか。塚本さんは大学の専門部を出ていたんですか。

海部 いやあれは学歴詐称にはならんだろうと思うけれど、あのととき国鉄の職員だったんだね。あの頃通信教育というのがあったのかどうか。

伊藤 いや、あったでしょう。あつたと思いますよ。

海部 そうすると、国鉄職員が働きながら大学の資格を取るとは、道としてはあつたのかもしれないな。

楠 じゃあ通信教育部に所属していたわけですね。

海部 たしかそんな記憶があります。そしてその塚本が春日一幸の秘書で、選挙区地盤をもらって、何回か落選して、とうとう隣の選挙区に選挙区替えみたいなことで行った。そして赤松勇（楠社会党の）、それから公明党の、忘れもしないが石田幸四郎と同じ

選挙区に行った。犬と猿みたいなものだね、民社と公明は。悪い選挙区に変わっていったな、あれは、と思っていたら、塚本が最後は、やり勝ったんだな。

楠 塚本さんはあとで自民党に入っちゃいますね。いま、どうされているんですか。

海部 いまそこにおるかとも言われんけれど。

楠 引退されたんですか。

海部 だつて立候補できないもの。

楠 大内「啓伍」さんと塚本さんという、歴代の民社党委員長が自民党に入っちゃったんですね。

海部 あんな頃から自民党とのパイプがお二方とも太くなって、最後は、そこでよし、これがついの棲家、ということをやったんじゃないかな。どうせ民社党がいつまでもやっておられるという自覚も理解もなかったんじゃないですか。

伊藤 なんとか取り込むチャンスをこの時点からずっと狙っているわけですね。

海部 そうです。

伊藤 この春日一幸さんにしても、塚本さんにしても、自民党に連携したいというグループだと思うんですが、書記長交代とか委員長交代というのは世代間競争ですか。

海部 よその党の内情は、そんなによくわかるものじゃありませんけれど、いろいろな話を聞いたりすると、僕らはその頃は永末英一君というのを高く評価しておった。永末君もときどきは向こうの議運になつたり、国会討論会に出て来てやつたりした仲ですから、いろいろ聞いておつただけけれど、そういう人たちから見ると、必ずしも塚本三郎という人は、世代若返りをしたとか、よくなつたというふうには受け止められてはおらんわけですね。春日一幸の悪いところをみんな背負って伸びてきたような受け止め方をされている。だから最後に自民党に替わったときも、さもありませんかという事で片付けられておつたんじゃないですか。

伊藤 民社党がどう動こうが、自民党としては別に味方になる、ならないということとはあまり関係ありませんから。どっちにしても味方なんですから、あまり大きな影響はないという見方ですね。向こうはコップの中の嵐だど。

海部 はい。

■定数は正問題

楠 昭和六十(一九八五)年五月三十一日に、自民党が定数は正問題で六増六減案を国会に出しますが、これは副幹事長としていろいろ関わられたと思います。このときの経緯についてご記憶でしたら、お話しいただきたいんですが。

海部 あのころは、自分の選挙区が変えられるということは政治家にとつてはまさに死活問題ですから、みんなが非常に厳しく受け止めて、金丸さんも、「何かこれは片をつけてやらなければならんが、どうしたもんだ」ということで、みんなに電話をしたり、人を呼んだりして聞いておつたな。どうやって解決していったらいいか、ということだ。

楠 こういふ問題は、とりまとめていく上で、各派閥を固めるといふことが手順としては最初なんですか。

海部 はい、そう。この派閥はこの人を命がけで守るか、命がけまではいかないか、どれぐらいか、ということを調べるとともに、その人が選挙区でどれぐらい強いかということもそれと併せて調べますけれどね。

楠 そうすると、派を代表している副幹事長が、派内あるいは該当者の説得に回つたりするわけですか。

海部 派内というより、該当者の説得ですね。該当者はなかなかウンとは言わないから。しかもいまのように比例区だとかコストリカ方式のような調子のいいものはありませんからね。

楠 そうすると何を代償に説得するわけですか。

海部 それは曰く言い難いところだ。当座の名譽を尊重するとか、ベリ・ニア・フューチャーの入閣を条件に、そうしてくれるのなら自分は引つ込むとか。

伊藤 あるいは長期決裁とか、いろいろあるでしょう。だけど、結局最初は数字から、人口から出てくるわけですね。

海部 そうです。

伊藤 それで、全体「の一票の格差」を三倍以内に収めるためには、どこどこをどうしなければいけない、ということですね。そこから説得になるんじゃないんですか。

海部 あの頃は、コストリカ方式なんかまだなかったですからね。

いまはコストリカでだいぶ抑えることもやっていますが、あの頃はなかったから。

楠 自民党案ということは議員立法ですか。

海部 議員立法ですよ。

楠 そうすると、どこがそういう試算をしたり、原案をつくったりするんですか。

伊藤 やっぱり自治省じゃないんですか。

海部 それは自治省が内緒でやって持ってきて、それをみんなが読んで、ちよつと鉛筆で線ぐらいを引いて、これで自民党案ということになる。

楠 党の職員の中で、そういう担当の人がいるということはないんですか。

海部 そこまでではできませんね。党の職員といつても、さつき例に出た奥島にしても、非常に長けた才能を持っているかというところ、裁判官が忌避されるように、あれは田中派だからいかん、といってやられるからね。

楠 職員の中でも色がついているんですね。

海部 それはそうだ。誰の紹介で入った職員か、誰のもとでどこにおったか、ということが知れ渡るようになっておるから。

楠 じゃあ実際には、議員立法といつても自治省がそつと持つてくるわけですね。

海部 それはいつでもそうです。海部内閣の時の小選挙区の案でも、こっちは総理は全然見ません、見てはならんとみんな言いに来る。

誰かが叩き台をつくってくれなければいかん。読売の小林「与三次」さんが、何を思ったか知らんが勝手な案をつくって、ある新聞がそれを抜いたがために、最後の時に金丸さんがケツをまくって、「金丸信の選挙区はこんなところか」と言った。東京のどこかに移

されておつたから、「それならおれは政治家も何もみんな辞めるわ」なんて言って、本気になって怒り出すぐらいだから、あのとき

あの案は、自治省が作った案でも何でもない案で、新聞社が勝手に出したんですけれどね。

伊藤 実際の実務的な話になると、議員立法であろうが何であろうが、自治省が案というか叩き台をつくって、幹事長のところでまとめなければ、まとまるわけがないですね。

海部 そうです。

伊藤 それをまとめたからといって、野党のほうがウンというかどうかはまた別問題ですからね。

海部 野党「が相手」のときは、押したり引いたり、足蹴を喰らわしたり、いろいろなことをするけれど、最初の案は誰が見ても納得できるような原則を作って、その原則に従った票割りをしようというふうになるんだ、できるものなら、あんた代わりにやってください、とやるわけだ。

楠 自分の党の内側に向かつては幹事長・副幹事長が説得に回って、外側に向かつて、野党に対しては国対ですか。

海部 国対だ。正式の議題になる前は議運には上がりませんから。佐道 党に選挙制度調査会がありますね。あれはどういう役割になるわけですか。

海部 法案を作る大前提です。あのときから自治省の選挙局長以下がみんな入り込んでいる。共同で票割りの案をつくっていますから

ね。

伊藤 知恵を借りなければできないでしょうね。人口と定数ですからね。

楠 選挙制度調査会は、もつと大きなテーマの時に開かれるわけですか。これ「六増六減案」はいわば微調整ですね。

伊藤 いや、これは大きな問題ですよ。

楠 それは大きいと言えば大きいですが、選挙制度そのものを変えるところのようなことではないですからね。

海部 六増六減というのは、当事者にとつてみれば選挙制度を変えるところであるわけだから。

楠 じゃあこういうことも調査会にかかるわけですか。

伊藤 調査会にかかるでしょう。それで政調を通らなければ――。

海部 それはいきませんよ。

佐道 選挙制度調査会自体は、活発に活動しているかどうかは別として、ほぼ常時あるわけですね。そうすると、その調査会の会長に誰がなるかということは、それこそこういう問題を抱えているときには結構重要な問題になってくるわけですね。ただ、本当にとりまゝとめてやるとなつたら、幹事長以下が動くということになるわけですか。

海部 責任を持って幹事長が、選挙制度調査会長を呼んで、「どの辺まで行けるか?」「これとこれは駄目だ」「これとこれはなぜ駄目か?」「ヒモがついているからだ」「そのヒモは誰と誰だ?」というところからずつとやらなければならんわけですね。

伊藤 野党案が出て、結局は廃案になるのかな。

楠 継続審議、廃案になりますね。これはなぜ廃案になったんですか。

伊藤 いや、どっちもやりたくない、ということでしょう(笑い)。

楠 でもそのあと、八増七減があつて、死んだふり解散という話になつていくわけですね。なぜこのとき六増六減が通らなかつたのか、何かご記憶はありますか。

海部 いまとなつてみると、あまり正確な説得力のある理由は思い出せないな。

伊藤 この六増六減は、海部先生自身には関係がないから。

海部 全く関係なかつたですね。

佐道 三木派自体もあまり関係なかつたですか。

海部 なかつたです。

伊藤 だから他人事ですよ。これは飛ばしましょう。

楠 次にスパイ防止法、国家機密法案が六月二十五日に議員立法として自民党から提出されましたが、記名投票で継続審議となるわけですか。このへんについての経緯をお聞かせいただきたいんですが。

海部 これは大きな本論としては、一国である以上、筒抜けのようなことではいかんではないか。スパイ防止法の提案理由の賛成・反対を聞けばわかるだろうけれど、あのときはいまと一緒で、スパイをやつておつたというようなことをいって、スパイ同士が国民を暗くする、とかなんとかいつて、これも鯨岡の組が強硬に反対しておつたな。「海部さん、いいと思うのか、あんなこと。みんなスパイ、スパイと言ひ出したらキリがないな」と言つていた。

楠 勝共連合か何かが一所懸命やつていましたね。

海部 言われてみれば、あのころ勝共連合というのも入り込んでおつた。われわれのところにもずいぶん来たな。

楠 だから私もうさんくさい運動だな、と見ていたんですが。

海部 あの勝共連合の会長が、何を最終的な目論見として持つているかというところは、いまでも不明な点がたくさんありますから。

伊藤 この国家機密法案も直接関わっていないから、あまり記憶はないんでしょうね。その次の都議選もそうですか。

海部 「質問票を読み、」都議選は、あのときは「自民党」五増、社会党四減で勝利を収めます」ということですか。都議選も、応援は一所懸命ほうぼうに行かされたという思いはあるけれど、これは政権交代には関係ありませんから、という受け止め方をしておつた。そんなことより自分の県の選挙のほうが大変だな。

伊藤 それはそうですね、当然ですね。

■金丸氏と北朝鮮

楠 次に、日朝友好議員連盟を通じて、六月六日に北朝鮮の代表団が金丸幹事長に会いたいという申し入れをしてきた、ということですが、これは奥島さんの本の一五六ページに書いてあるんです。これについては何かご存知でしょうか。

海部 僕は、金丸さんと北朝鮮の関連についてはもうちよつと後、海部内閣になってから金丸さんが言い出されたことについては関連しますが、このときはまだそれ以前の問題ですね。石井ピン「石井一」あたりが、ごぞごぞやった話じゃないかな。

佐道 こういう申し入れがあつたとか、会談が行なわれたということはお聞きになっておられましたか。

海部 はい。

伊藤 渡辺さんが会いに行つたんですね。

海部 どんな話をしてきたとか、どんなことを決めただ、ということをいろいろ聞きますな。

楠 それは副幹事長会で報告みたいなことがあつたんですか。

海部 それは、そういうことです。いくら渡辺美智雄でも、一人だけでやっているわけにはいかん。金丸さんはそういうときは、「ちよつとみんなで、よう話をこなしておいてくれよ」という。「こなしておいてくれ」という言い方だったね。何を話して、どうなつて、どういふふうになれば一番いいが、どういふふうになつたら危ない、とかね。

伊藤 だいぶ後になりますが、金丸訪朝問題までつながっていくわけでしょう。先生は金丸さんの北朝鮮問題はもつと後だとおっしゃいますが、このへんから始まっているんじゃないやありませんか。

海部 いや、北朝鮮が本気になつてそういうことを言い出してきて

のは、もうちよつと後になつてからじゃないかな。漁船を返せとか返さんということが具体的なテーマになつてからです。

楠 そもそも、なんで北朝鮮が金丸さんに目をつけたんですか。

海部 それはあの人がアバウトだからだ。

伊藤 いや、実力者であるからじゃないですか。

海部 アバウトスキイだからだ。

楠 実力者はそれぞれの時期にいるわけですから、特に金丸さんに目をつけたというのが、ちよつとよくわからないんですが。

海部 そこは、言いにくい話だけれど、アバウトスキイだから、ちよつとこうしてああすれば、と思つたんだろう。だから三十六年の謝罪と、いままで触れたこともなかつた戦後の賠償を書いちゃつたんだ。それが狙いだったことは間違いない。

楠 その謝罪に関しての歴史的な認識の問題ですが、そういうことは金丸さんはそれ以前に何か発言していましたか。日本が戦前、朝鮮に迷惑をかけたとか、そういうことを言っていたんでしょうか。

海部 迷惑をかけたとか、かけんとかじゃなしに、北朝鮮だけは、どう考えてもおかしいのは、あの頃パスポートに、「without North Korea」と書いてある。隣の国でこんなことではいから、

ここは風穴をぶち開ける、国交はいいけれど、その前に片付けなければならん問題があるから、ということだ。竹下さんなんかは、「おとつとあん、あんまり簡単にあれやればできる、これやればできる、なんて思つていつちやつても、そうは行きませんぜ」ということをさかんに注意しておつたな。

楠 でも例え、第二次中曽根改造内閣のメンバーを見てみると、党のほうは、幹事長は金丸さんで、総務会長は宮澤さんですが、政調会長は藤尾正行さんですね。藤尾さんを抱えているような党執行部に北朝鮮が接近して来るというのも、考えてみれば不思議な話ではありますね。

海部 不思議な話です。

楠 それほどに金丸さんについては、北朝鮮はくみやすしと読んだ

んでしょうか。

海部 そこから先はいろいろなことが言われておるから、もうちょっと後世の歴史家にはつきりしたことを探索してもらわなければいかんけれど、金丸さんのところにはそういう筋の人が出入りしやすかったということなのかな。それまで出入りしておったということかな。

伊藤 それは北朝鮮だけではなくて、ですか。

海部 いろいろな筋の人が。

伊藤 いわゆるその筋のほうも含めてですね。

海部 ああ。

佐道 金丸さんは幅広くいろいろと——。

海部 得体の知れぬ大物だから、ダーンとして、「構わん、来るやつはみんな食っちゃまえ」というようなことでやるわけですから。

佐道 北朝鮮訪朝団の話は奥島さんの本に書いてあるわけですが、そもそも北朝鮮の人が日本の政界の有力者に裏面から接触をした来るとか、そういう話については、先生はこの前の段階でお聞きになったりしたことはございますか。それともこれは金丸さんだから、ということなのでしょう。

海部 金丸さん一人に絞ったわけではないでしょうが、一番ガードが軟らかいし、アバウトスキイという名前があるぐらいだから、うまいこと持っていけばできるのではないか、と思ったんですよ。僕がもう一つ調べなければならんのは、金丸さんときき合って入り込んでおった新聞記者の中に、あれがおったのかな。そんなことを思いますね。向こうは新聞記者と特別な関係を持っているやつが複数いますよ。

伊藤 それは日本人の新聞記者でしょう。

海部 そうです。

楠 あるいは社会党の国対関係の人が朝総連を通じて——。

海部 朝総連は本気になってあれを信用しておるのかしら。

伊藤 社会党を、ですか。

海部 ああ。社会党の国際族の言う話は、あまり役に立たなかったな。ただ僕の記憶の中で言えることは、施政方針演説の中に正式な国名を言うてもらうことだった。

伊藤 それは総理になったときでしょう。

海部 総理になってからだ。そういうことがあったけれど、そのとき今日までのいろいろなことを思い出して、中に入った人は社会党ではなくて、当時自民党の朝鮮問題特別委員長だった（伊藤 久野さん）、久野忠治だ。僕の中学の先輩でも話せる人だから。伊藤 久野さんなんていう人はタカ派じゃないかと思っていました。が、そうではないんですね。日朝問題は、先生が総理になってからもいろいろ伺いますので、先に行きましようか。

■中曽根政治1（国鉄民営化問題）

楠 国鉄の問題ですね。「一九八五年」七月二十六日に、国鉄再建監理委員会が「国鉄改革に関する意見書」を総理に出しますが、これが分割民営化の流れをつくっていくわけですね。先生はこれに何か関与されたでしょうか。

海部 このときは、佐々木義武くんというわれわれの同年で、元満鉄におった、これまたちよつとスケールの大きい人がいた。これが国鉄の当時副総裁だった磯崎「叡」と、「海部君どうしても会ってくれんか」という。「なんで会うんだ、そんなのに」と言ったら、「いやいや国鉄は、これから大変なことを考えておるんだ。それで中川一郎とおれ」「海部俊樹」と渡辺美智雄を呼ぶから、来てくれんか」といって、佐々木義武が昔の顔で磯崎とつないだわけだ。仲間同士のことだから、いやとも言うっておれんから、行って話を聞いたら、国鉄は再建するためには当時はやりの分割民営化だ、という話を聞いて、「これは中曽根さんもその気になっておることだから、これで頑張らなければならんから、みんな協力してくれ」という話

でしたね。最初はそうだった。

伊藤 国鉄の民営化問題というのは中曾根内閣の非常に重要な懸案ですが、だからといって、「海部先生は」直接の運輸族でもないし、それほど関わった問題ではないということですね。

海部 そうです。

伊藤 見ていた、という大変ですが。

海部 いや、頼まれたからいやとは言えんから、「じゃあ協力しよう」ということだ。佐々木義武というのは、自分は満鉄の出身だけれど。

楠 その中川、渡辺、海部という三人の取り合わせはどういう意味があつたんですか。

海部 それは佐々木義武が国鉄と相談して、各派の派閥から、派の中堅でフットワークの軽そうなを集めたということじゃないですか。議運、国対におつて。

伊藤 法案が出たときによろしくね、ということですね。

海部 法案が出たときに、なんらかの形にお力添えを願いたいとその前のところで、こういうことも協力願いたいということで、初めは頼まれた。

伊藤 それにはいちおう応じたわけですか。

海部 はい。

佐道 それはいつごろの話ですか。

伊藤 もっと前じゃないのかな。

佐道 中川さんはもう亡くなっているのでは。

海部 中川も、そのとき話しておつた一人ですよ。

佐道 中川一郎さんは八三年に亡くなっているはずですよ「八三年一月九日」。だからもっと前の話だと思えますが。

海部 もっと前の話か。

楠 そうですね。磯崎という人も、もうちよつと前ですよ。

伊藤 これはだいたいぶ押し詰まって、いよいよ分割民営化という段階ですからね。

楠 磯崎さんはマル生をつぶした人だから、だいぶ前ですね。

海部 そして中間管理職のやる気がなくなつて、マル生がガタガタ来たから、それを立て直さなければならんから、というのも大きな協力要請の理由の一つだった。

伊藤 じゃあ、やつぱり、これより前ですね。この段階は、もうほとんど出来上がりかけているときですからね。

海部 このとき、社会党の野々山「一三三？」とかいう全国労「↓全交運」の委員長がおつて、これとも会つてくれといわれて、会つて話したことがあります。そのときは社会党の国対委員長の山口鶴男が、この方面の社会党とのパイプになるから、磯崎と会うときにも来たことがありますね。

伊藤 社会党としては国労は大事ですからね。

海部 大事なんだ。

伊藤 だからこの分割民営化には反対していたわけですね。

■中曾根政治2（防衛費1%突破と靖国参拝）

楠 次なんですけど、この年の七月二十七日の自民党の軽井沢で行なわれたセミナーで、中曾根総理は、「戦後の見直し、戦後の総決算」ということを強調されるわけですね。それで防衛費の1%枠突破とか、靖国神社の公式参拝の表明を行なつて、実際にこの年の八月十五日には、総理大臣として初めて靖国神社の公式参拝をされます。そういう流れがあるわけですが、先生はこうした中曾根さんの一連のお考えに対して、どういうふうに考えていらつしやいましたか。

海部 これはいよいよ第一歩を中曾根さんも踏み出したんだ。その頃、逆に言うると三木さんの考えに対して、党内のタカ派の中心におつたのが中曾根さん。それから国鉄の時にちよつと集められた中川一郎だとか渡辺美智雄だとか、ああいうのはみんなタカ派ですか。

らね。そういう連中が三木さんがやるうとしておった一%枠にこだわって、そんな錢金で国が守れるかい、といろいろ言うのがおった。ただ金丸さんだけは、そういうときに「とはいっても相手国のこともあるから、日本だけが威勢のいいことを言っておったってできぬえこととできることがあるんだよ」というような、まことに中庸をとった議論をした人です。

楠 先生のお考え、あるいは先生が所属されている三木派は、このあたりは中曾根さんとスタンスが違うと思うんです。そういう中で先生は副幹事長をなさっているわけですが、そういうときにはどうお感じになったんですか。

海部 それは三木さんの考え方がある。一%枠を決めたときの官房副長官をやっておったわけですから、三木内閣で一%枠突破を決めなかった。それを中曾根さんがアメリカに行つて、一%枠突破もあり得るようなことをやっていたときには、ちよつとした三木さんとのあいだで議論がありましたけれどね。それを許してやっていったらキリがない。際限なくなっていくんだ。蟻の一穴論じゃないけれど、あのときは年々国民総生産も増えつつあるという背景があったし、防衛予算のほうも大きくなってくるから、一%枠の問題はそれほどシビアな議論にはならなかったように思います。しかし国鉄問題になってくると、そういうときにいろいろやってきた向こう側の人たちがみんな中曾根さんのほうにおるわけだから。ただ佐々木義武だけはそんなことではなかった。

伊藤 防衛費の一%枠突破というのは別にそれほどの衝撃ではないんでしよう。そもそも三木派の中にもいろいろ意見があったわけでしょう。

海部 そうです。それから変な話だけれど、あれは放っておけばもうじき、すぐ突破しちゃうわい、ということ、事実突破しそうだった。

伊藤 中曾根さんは「突破もあり得る」と言っただけれど、結果的には突破しなかったんでしよう。

海部 結果的にはしなかった。

楠 公式参拝のほうはどうですか。

海部 公式参拝は、あのときに妙なタネをまいたものだから。中曾根さんは行くと言っておいて行つちやつた。けれどもすぐやめちやつた。その亡霊が残つておるのが、小泉です。小泉はそこだけ受け継いで、やるかやらんかどうするの、早く精神決めなさい、という歌もあるけれど、あれはそういうときに、僕らに言わせれば姑息なんだ。日にちを二日前倒しにしたから、八月十五日ではない。靖国問題の本質は、私は八月十五日に参拝するからいいとか悪いとかではないと思つているんです。

中国に行つて向こうの首脳にオフレコの話をいろいろしてみてもそうなんだ。要するに日が替わろうが替わるまいが、行つてもらふこと自体がありがたいことではない。だからやめなさいと厳命「言明とも」しました、というようなことになるわけでしょう。けれども、やめなさいとは言えんから、やめてください、やめることが望ましいです、という程度にしているけれど、その先言えないことがあつて、ならばこういう反応があつてもしょうがありませんよ。

僕は、これはお話ししたと思うけれど、日本におつた楊振亜という中国の大使、彼は知日派のはずですよ。日本のことをよく知つておる。名古屋で育つた夫人をもらつているんだね。日本語もべらべらです。それがいつか北京のシンポジウムの時にいきなり唐突に立ち上がつて、「小泉はけしからん、靖国神社に行つたではないか」と演説をぶちだしたので、終わつてから、「楊さん、あんた何を言うんだ」というようなことを言つた。ああいうときにはああいう強がりと言わなければならんのか、大変な劍幕であつたことを覚えておりますが、こんにち、いまもまだ尾を引いているわけでしょう。

伊藤 でも今度の新しい政権になつて、どうかわかりませんよ。

■中曾根政治3（総理と幹事長）

佐道 ちよつと話は違ふんですが、筆頭副幹事長という立場では、中曾根さんとは頻繁にお会いになる機会が多いんでしょうか。

海部 公式に頻繁に会うのは、朝の役員会。そこでは会いますが、お互いに決められた舵と枠の中で、短いやりとりでありますね。

伊藤 まあお互いに、いるな、という感じですね。

海部 ええ。それから、中曾根さんの頃は、「今日は各派代表と飯を食うか」というと、副幹事長と総務会の副会長が集まる。総務会の副会長と副幹事長を集めれば、だいたい各派閥の中堅が全部来るわけです。そういう会もあった。

伊藤 それは飲み会ですか。

海部 飲み会、食う会だと思つて。あの頃は、飲むことが一番意志を疎通する場であるという理解だったから。

伊藤 そういう飲み会の場で、中曾根さんと一対一で話すことはあるんですか。

海部 それはありますよ。だってあの人は前から個人的にもよく知つておつたし、私の結婚式の時はちゃんと来ておつてくれておるし。いろいろな関係で、会えば話もしますね。どちらかといえば、「千代新」だとか「金田中」とかああいうお座敷でやるるときも、中曾根さんは非常に気を遣つて、みんなのところをずっと回つて歩いたわけですね。

佐道 中曾根さんに先生が個人的にいろいろお考えを述べたり、意見をお話になつたりという機会は、結構あつたわけですね。

海部 あるある。それは、向こうはああいう立場の人だから、いろいろな情報を知りたいと思つているんじゃないでしょうか。だから特に党内の問題とか、派内の問題とか、「あの人がこう言つておつたから、これはどうなるか知らないけれど、あとは総理の判断だけだ、そこはこういうふうにされたらいいと思いますよ」とか、いろいろなことを言いますね。

佐道 八五年ぐらいになると、田中さんも倒れたりということもあるわけですが、総理大臣としての中曾根さんには変化があつたところ

らんになりますか。

海部 総理大臣としての中曾根さんは、私には「教育改革をやれ、やれ」というご下問がまずあつた人で、教育改革の話の返事はよくしておりました。ちようど、いまみたいなものだ。今朝も歴代大臣が集まつて話をする時、「中曾根さんの時もこれがあつた、君のおやじの時だよ」と、前の中曾根「弘文」文部大臣に言う時、「いや、おやじからよく聞いております」なんて言つておつた。歴史は繰り返しておるわけです。そんな頃、中曾根先生は「戦後総決算は教育から始まるんだ、しつかりやってくれ」といつて、きわめて意気軒昂としていた。

伊藤 やつぱり田中さんという重石がとれたので、少し自分で思うようにやれるという感じになつたんですかね。

海部 そうですよ。また、やつたらいいと思つてやるんだ。あの人は「戦後政治の総決算」という言葉が好きですけど、総決算することを自分が思つた通りにやっている。仏教の言葉で言うならば、何物をも私の良心や行ないを差し止めるものがないという状態、それが一番必要なんだ、ということ、あの人はどこかの座禅を組むところで教わつてきたんじゃないかな。

伊藤 幹事長と総裁というのは、ある程度一体といいますか、連絡が密でなければならぬと思いますが、中曾根総理と金丸幹事長という組み合わせは、どういう具合だつたんでしょうか。

海部 そこは功罪相半ばするとか、裏と表があるというか、あの「金丸氏」は別れてみると、差し違えてもやめさせると言う。法案で意見が合わんときは、「中曾根総理と差し違える」ということまで対外でも言いながら、大変激しい言葉を使います。それがそれで夜中の十二時までそういう状態なのは、われわれにはわからんが、心配した竹下さんあたりがそばに行つて、「そこはこういうことだ、中曾根にはこう言つてきてあげましょう。あんたもここまでは降りなければいかん」と仲を取り持つておつたと思います。中曾根が窮地に追い込まれんように、金丸さんには「おとつあん、

そう言ったって、それは通る、通らん、いろいろあるから、そこはちよつと任せておいてや」といつて、竹さんが抑えておつたね。

伊藤 なんとなくわかるような気がしますね。

楠 じゃあ金丸幹事長というのは、竹下さんと二人三脚をやつていたような感じなんですか。

海部 まさにそうだと思うよ。

佐道 そこで竹下さんの名前が出てくるわけですが、総務会長が宮澤さんで、安倍晋太郎さんは外務大臣をずっとやつておられるわけですね。自民党のニューリーダーということで言えば、竹下、宮澤、安倍といわれているわけですが、先生からごらんになると、中曽根さんとの関係は、竹下さんが一番密接だということになるでしょうか。

海部 思想信条やいろいろなことから言ったら、むしろあの頃は安倍さんのほうが近いんじゃないかと思つたけれど、あの世界はそれだけではありませんから。そうするとやつぱり、数は力なり、力は金なりというのが金丸さんだから。金丸流に言くと、竹下が一番数もあるし、力もあるし、金丸もついているから、という発想もあつた。あの頃の二人はどつちつかずで、さっきちよつと言つたように綱引きがあつた場合に、最後はどつちが強かつたんだらうか、ということ、最後の帰着が決まるんじゃないですかね。

伊藤 金丸さんと中曽根さんの関係はそう密着したものでないということですね。

海部 そうです。そう密着したのではないけれど、利用できるときには、この人の力を借りてやつていかなければならんという思いは絶えずあつたんじゃないですか。

伊藤 中曽根さんのほうに、ですね。

海部 はい。だから少々何を言われようが、かにを言われようが、「中曽根が金丸を」大事にしてきたわけです。

■三光汽船の倒産と河本派1（三光汽船の倒産）

楠 八月十三日に三光汽船が多大な負債を抱えて倒産します。三木派というか河本派のオーナーである河本さんの会社が倒れたということ、派閥関係者にも影響が大きかったと思いますが、どうでしょうか。

海部 これは大変なショックであつたし、われわれは表面しか見ておらん。表面だけを見ておれば、これでお手上げだと思つたんですが、お手上げじゃないんだな。会社というのは倒産したって、前オーナーがよけて塹壕を掘つて埋めておいたお金は自由に使えるわけだ。どういう経理決算をしたか、それはよくわからんけれど。それで香港とか、便宜置籍船というのがある。パナマのほうに持つていった資産はどうなつたのか、船がどうなつたのか。そういう細かいことまで、こつちは興味もなかつたし、問いただしてもしょうがないけれど、渋谷直蔵とおれとが行つて、「おやじ、大丈夫か」という。「大丈夫です。仲間の皆さんにご迷惑はかけません」「仲間の皆さんにご迷惑をかけません」といつて、会社のほうは完全にこれ「お手上げ」でしょう。「そうです」「そこで一線を引いて、整理して、ニュー河本になつて、生まれ変わつてやるんですね」といつたら、「そうです」といつた。

楠 まだこのときは三木派ですね。

海部 そうですよ。

楠 そうすると、「三光汽船が」倒産してから、三木派が河本派になるんですね。何か問題はなかつたんですかね。

伊藤 これは本当に不思議ですね（笑い）。

海部 不思議だよな。僕が不思議だよな、と言つてもいかんけれど、本当に不思議だ。身に余る巨額な財産を持つておるか、負債を持つておるか、どつちかだからね。

伊藤 負債を持っていても大丈夫なんですか。

海部 大丈夫なんです、あれは。

伊藤 それがわからないな、ぜひそれを教えてもらわないと。

海部 要するに区別してあるらしいんですね、会社のものと個人財産を。個人財産までは手が突っ込めんような法律の秩序になっているわけですね。

佐道 三木派の運営にかかるお金もあるし、若い代議士の世話をするためにもお金が必要ですね。そういうものはずっと河本さんが変わらないうちにお出しになれたわけですか。

海部 やってやったわけですね。

佐道 すごくいいですね。

海部 そのへんがもうちよつとメイク・パブリックしなければ、政治不信になってくるのかも知れんが、当時は幸か不幸か、そこまで行かなかった。三光汽船が手を上げてつぶれたんだ、というところまで、まあまあと収まっちゃったわけだな。

楠 この問題が起こってからは、三木派の中で河本さんの影響力は落ちなかったわけですね。だから、河本派になったわけですね。

佐道 影響力というのはあったわけですか。

伊藤 それはあるでしょう、オーナーですからね。

佐道 例えば、いろいろな問題があるときに三木さんに相談に行かれるわけですね。そういうふうには、河本さんにもきちんと相談をしなければいけない、という感じがあったんでしょうか。

海部 河本さんも歯を食いしばって一所懸命やってきた人でもあるし、対外的に河本派と言っておったから、河本と相談しよう。だから、河本さん自身も諦めなければならんということは、それこそ断腸の思いだったろうな。

楠 必ずしも派閥の長が大金持ちでなければならぬということはないですね。例えば橋本派の橋本さん、河本さんの後の高村「正彦」さんだって、そんなに大金持ちだとは思えませぬ。

伊藤 あの人は全然大金持ちではないでしょう。

楠 だから、別に河本さんを担いでいなければならぬ理由は特にないわけでしょう。

海部 お金では、特にはないですよ。

楠 そうすると、お金以外の部分で何か河本さんは強みがあったわけですか。

伊藤 それまでスポンサーでお金を出していたから。

楠 金の切れ目が縁の切れ目とか。

伊藤 金がなくなつたわけではない、というのがいまのお話ですか。それだったら、いままで通り続けていけばいいわけですね。

楠 でも政治家としての責任を問うような声はなかったんですか。

伊藤 だって辞めたんでしょう。

佐道 沖縄開発庁長官を辞めましたね。

楠 それは閣僚を降りただけですね。

伊藤 それだけで終わりになったと思えますね。

佐道 三木派、河本派としては、イメージダウンですね。

海部 それはそうですね。

伊藤 さんざんからかわれたはずですね。

佐道 経済の河本と言われていたわけですからね。

海部 「てめえの会社すらわからなかったのか」と言われて、僕らは言い訳できないから、「そんなことわかっておいたら、ああいうことをしやしないわい」と言うのが精一杯だったな。

佐道 三光汽船が危ないという話は、前々から伝わっていたんですか。

海部 いろいろな筋からいろいろなことを言われて、私も言いに行つたこともある。「会長、言いくい話だけれど、こういうことが耳に入ったけれど大丈夫ですか」「ええ、大丈夫です。ご迷惑かけませんから」「本当ですか」と言つたが、そこまでおっしゃるなら大丈夫だろう。けれど、いよいよよつぶれることが決まつたちよつと前には、「情勢がいろいろ変わつてきまして、なにしろ相手がおりますから、手を引くと言いますから、引かれると会社は残念ながら

そこまです。会社のほうは駄目になります」と言ったわね。けれどもそんなときでも僕らは、「会社経営者と政治家の二足の草鞋を履いていると必ずしもいいことばかりではないから、身ぎれいになったら、一つしつかり頑張つて」と言つて、本気になって激励もしておつたんです。

佐道 三木さんはこれについて何かおつしやつていましたか。

海部 それは三木さんのほうだって、河本さんから資金的な援助がいろいろあつたわけだから、そう冷たいことも言えんしね。

伊藤 これから後もあるわけですからね。

■三光汽船の倒産と河本派2（河本氏と中曽根氏）

佐道 中曽根さんと河本さんの関係というのはどうなんですか。

海部 一時期までは、三木派の中のライバルだね。中曽根さんも河本さんも政治家になつた頃は似たような青年将校という肩書きをもつておつた。ただ河本さんは一所懸命金儲けに走つておつたし、中曽根さんは、勇ましいウルトラ・コンサバティブでやつておつた。だから政治家として政策的にガチ合う部分はなかつたわけだ。それから河本さんの経済政策というのは、通産大臣をもらつてから、経済政策は積極政策でやるということを言い出した。どちらかという自分自身の生きた経済の体験があるわけですね。

あの時期に、運輸省に頭を下げて造船基金を一銭も借りなかつたんだ。「なんで借らないんですか、借りて使つたらいいじゃないか」と言つたら、「お金を借りて使つたら、全部従わなければならぬ。細かいことまであしる、こうしろとなる。それでは自由な商いはできませんから。その代わり資金は割安で調達します」と言つていた。そんな頃から、香港だとか便宜置籍船の国といろいろな関係ができたんでしょうね。そう細かいことまでは僕らに語らなかつたけれどね。

後日、河本さんが総裁戦に出ると言い出した頃に、その話を根掘り葉掘り聞いたら、「その通りだ。何か大型タンカーの時代に背を向けるような話ですが、自分は小型タンカーをたくさんつくつた。いっぱいつくりました。それで近いところは全部それで市場を押さえました」というようなことを言つて、「それが河本哲学ですな」と言つていた。

佐道 中曽根さんと河本さんという関係ですが、河本さんはまだ三木さんから正式な派閥の代替わりはしていかないかもしれないけれど、実質的に三木派の後継者ということですね。それで総裁選にも出られたわけですね。大臣ポストの割り振りということからいうと、沖繩開発庁長官というのは、いくらなんでもひどいんじゃないかという感じもするんですが、それはどうですか。

海部 それはたしかにあつた、そういうことは。あの人は通産大臣を一番願つておつただけだ。あの人は科学技術庁長官も一回やつたんじゃないかな。「そんなものなら、河本さん、断つて、やりたくて今日までうずうず待つておる仲間がいっぱいおるから、そつちにちよつと回してやつたらいいじゃないですか」とまで、おれは言ったことがあつた。飯を食いながらだけだ。

佐道 沖繩開発庁長官は、初めてなられる方ならいいですけどね。海部 初めてじゃないんだもの。「総裁候補で総裁選挙までやつた人が、そんな伴食の大臣をもらつておつたのではいかんから、あの頃やりたかつた人がいっぱいおるわけだから、それにやらしたらどうか」ということを私は言つたんだ。

伊藤 さて、四時になりましたが、次のプラザ合意の問題ですが、これはたしかに円高の進行で、先生の地盤にも非常に大きな影響があつたのではないかと思ひますが、プラザ合意が行なわれたそのとぎに別段どう、ということではないでしょう。

海部 そうです。

伊藤 その結果として、ドル高は正が進められて、その結果として選挙区でいろいろバタバタと機織りのところがつぶれるようなこと

が起こった。ということでは直接先生に関わってくる。

海部 直接私が何かしたことはありませんが、舞台上上って踊っておった竹下登の回顧録などを聞くと、新聞記者のまき方で、「海部さん、あんたも覚えておいたらい。おれはゴルフに行く格好でな、一番売れているゴルフの帽子をかぶって、ゴルフのセーターを着て、自動車のトランクにちゃんと着替えを入れておいて、スーツと逃げていったんだ」とか、そんな得意話をいろいろ聞いたことがあった。

■文部大臣1（就任の経緯）

楠 次回は、それでは文部大臣就任から、ということにしますか。

伊藤 いちおう文部大臣の就任の経緯だけでも伺いまししょうよ。内閣改造の時は、三木派で候補者のリストを出すんですか。

海部 出すんじゃないでしょうか。自薦他薦がそれぞれの派でもありますから。

伊藤 ええ、でも派を飛び越えて直接ということはないでしょう。

海部 だから三木さんのところに夜遅く訪ねてくるとか、あれを頼みに行くとかいうのはおりましたね。

伊藤 頼みに行かれましたか。

海部 僕は行かなかった。

伊藤 だけど、何かになるためには、直接頼まないといかんのじゃないですか。

海部 いやいや、ああいうことを直接頼むと、それが好きな人と、好きじゃない人がいるんだ。そんなことをやって仲間を引つ張り落として出世しようなんて思うやつはろくなやつじゃない、という言い方もある。一番腹が立つのは、あれはいかん、これはいかんといつて足を引つ張る専門が。これが一番いかん。そんなことを言っておいたらいつまで経つてもなれやせん、と思わんわけでもないけ

れど。

しかしそんな頃は、三木さんがこうだったのか、新聞記者もみんな見ておるし、仲間の議員もみんな見ておるから、三木さんが直接やるといかんけれど、僕のこのときには、松野頼三という人が僕を呼んで、たしか隣のホテルだったな。あれも開けつぷろげな人だな、ホテルの食堂だよ、部屋じゃないよ。「海部君、腹が減ったからそばでも食おうや」と言つて、そこで「やっぱり今度は君も、番だよ」という。松野さんがどうして大臣を決めるあれになるのか聞いたら、「これは三木がそう言うんだ、三木がそう言われているらしいんだ、福田から」という。

伊藤 いや、中曽根から、でしょう。

海部 そうそう、中曽根からそう言われている、と言うんだ。「それでポストのことはなんともわからん」「ポストはまあどこでもいい、こうなった以上。これでいよいよ世の中が変わるときですから」とまで言ったことは覚えていますけれど。

伊藤 そうですね、松野さんは――。

海部 最後は三木さんと非常に良かったんだ。三木さんは三役にしようと思つておるんだ。

伊藤 だって「松野さんは」福田派でしょうが。

海部 そんな頃は福田派は脱藩しちゃっているわ。

伊藤 でもあとでちゃんと戻っていますからね。

海部 精神的に脱藩している。田中派の加藤常太郎もそうですよ。

伊藤 やっぱり三木さんは教祖的などころがあるな。

海部 だったと思います。

伊藤 それでそういう情報を伝えてくれるわけですね。

海部 僕もわざわざ――。喜ばれんということは知っていますから、自薦他薦組が。僕は三木さんのところは夜はしよつちゅう言っておりましたけれど、あまり物欲しそうな顔をして来ておるのは、三木さんは嫌うよ、といって。

伊藤 わかっているわけですね。それで、実際に呼び込みが始まっ

て文部大臣ということがわかるわけですか。
海部 そうです。

楠 議員会館に電話か何かがかかってくるわけですか。よくそういう光景がありますよね。議員会館で待っていると電話がかかってくる。

海部 電話がかかってくる、とつて、「ありがとうございました」なんて、みんなやっているな。

楠 そういう感じだったんですか。

海部 僕はなんと言ったか忘れちゃったけれど、「総理がお呼びですから、官邸まですぐにおいでください」という。

楠 やつぱりモーニングを用意していくわけですか。

海部 いやまだまだ、モーニングは早過ぎる。そのとき着たら、

「こら、あわて者」と言われる。モーニングは部屋に置いておけばいいんだ。僕は宿舎でしたから近いところですから。会館まで持っていくって、恥を搔いて持って帰る人があるから、その例だけは踏んじやいかんと思った。

伊藤 しかし、また文部大臣ということですね。それは多少あるかな、と思っておられましたか。

海部 というのは、二度目というのは、本人はほかのところを希望するんですけどね。初めのときはすんなりと文部大臣で受けました。それは政争の外で仕事ができるから。言ったら悪いが、福田さんとはいろいろ激しいあれがありましたから、おれは福田さんだから、この次の次でもいいから、というようなことまで、正直言っているつもりでしたし、あまり気持ちよくできるものじゃない、と思つた。そうしたら三木さんが「行って来いよ。断わることができないのは、総理大臣をやれと言われたときだけだ。そういうときには、ちよつといまの状況では受けられませんかと言うのはいいけれど、ほかの大臣ならそんなことは言っちゃいかん」という。「ああ、そういうものですか。選挙区も喜びますから、それじゃあ行ってきます」と、そこは素直です。

伊藤 それは初回の「文部大臣になったときの」話ですね。
海部 はい。

伊藤 二回目の時はそうではないでしょう。サツと行くわけでしょう。

海部 二回目の時は、慣れているところだからまあいいや、イロハのイから勉強せんでもいい。官房長やお使いに来る総務課長も、

「ありがとうございました、まあ、いい方に来ていただいて」とお世辞を言うんだけれどね。

楠 なかなか二回目に「閣僚に」なるというのが大変のようですね。
海部 その役所に毛嫌いされると。

楠 そうではなくて、一回目は当選五、六回でほぼ全員がなりますね。だけど二回目がなかなかなれないという話をききますが、そういう意味では先生は政治家として喜ばれたんじゃないかと思えますが。

海部 まあ、運がよかったというのかな。

楠 ただ、もうちよつと違う役職という感じが。

海部 本当はそういう気持ちも、正直に言うとは半分以上あつたけれどね。

伊藤 だけど、同じ役所といつても悪いわけではないでしょう。気心は知れているし。それにそんな年月が空いているわけでもないから。役人の入れ替わりはあるでしょうが、そのあいだ文教の調査会長をやっていましたから。あまり似たようなところにいすぎると、いう感じはあるのかもしれないが。

海部 役所のほうは、ちよつとわからん人が来てくれるとありがたいな、と思う。

伊藤 そうですか、そつちのほうか。

海部 そうでしょう、細かいことまで知っておるから。

楠 コントロールできない。

海部 そこは違ふとか、ここはこうだ、と言うでしょう。だからあまりそういうことは言わんほうがいいな、と思つた。

伊藤 いろいろ違いがあるものですね。どうもありがとうございます。ごさいました。では次回は二回目の文部大臣のお話からお願います。

海部 中曾根第二次内閣ですね。

■世界政治フォーラム

伊藤 先生のところは松浪「健四郎」さんの問題があるでしょう。

海部 ただでさえ少ない十四を、マイナス一されると。十四人国会議員がおるか、十三人しかおらんかでは、だいぶ違う。それからあの松浪健四郎はいろいろ批判はあったけれど、行動力もあつたし、普通の代議士の二人分か三人分働きますからね。僕が何よりも困っているのは、今度でもイタリアの政治フォーラムに行くときに、「一人ついて来い」というと、「はい喜んで」と言つてすぐについて来たんだけど、こんなことになったら連れて行くわけにはいかんでしょう。

これはちよつと脱線ですが、あのゴルバチョフ・フォーラムも、ゴルバチョフというのはもうちよつとあれだと思つたら、一所懸命頑張っているんだな。そして、ゴルバチョフが自分の人脈を全部集めた、アンドレオッティとか。イタリアでやりましたからね。不思議なことは、なぜロシアでやらずにイタリアでやったのか。イタリアの投資銀行というのがいかにがわしい設定になるのか、ゴルバチョフとのあいだで。そこが全面的にバックアップしているんだ。

そして行つたらいきなり、アンドレオッティのほかに、イタリアの前の大統領のコッシーガとか、ドイツのゲンシャーがいる。コルは今回は行けんけれど秋の本会議には行きますという。今度は世界政治フォーラムの設立総会「↓発会式」でしたからね。そして七十五名集めた。ブトロス・ガリも来ておつた。アメリカからは返事だけで、パパ・ブツシュのほうは忙しくなつたからちよつと勘弁してくれといつて来なかつたけれど。

伊藤 アメリカからも来ていたんですか。

海部 来ていました。上院議員とか、直接政府の役職に関係ないのが来ていました。

伊藤 いや、相変わらずゴルバチョフも頑張っているとは知りませんでしたね。

海部 相変わらず影響力を持って頑張っているんだ。

伊藤 国際的に、ですか。

海部 国際的に、だ。なかなか人気もあります。

伊藤 プーチンとの関係はどうなっているんですかね。

海部 いまは自分はプーチンを支持しておると言っていましたね。だからイタリア政府もそれなりに協力し、応援しているわけです。

秋の十月にいよいよ設立総会をやる。

伊藤 本当の中心はゴルバチョフなんですか。

海部 ゴルバチョフのほかにそんな名を通つた人がいないもの。

伊藤 じゃあ、ゴルバチョフのための会かな。

海部 ゴルバチョフが自分の昔の仲間を集めたわけです。このポリテイカル・フォーラムは、このあいだトリノでやったのが発会式で、最初の総会を今年の十一月にやる。「発会式の写真を見せる」

伊藤 その写真に写っている日本人を指して、これは誰ですか。

海部 NECで、ちよつとかわいそうな末路であつたが。

佐道 関本さん。

海部 関本忠弘も日本のメンバーの一人だ。日本人はもう一人、沖繩代表の関屋さん。

伊藤 政治家ですか。

海部 いや、実業家。だからゴルバチョフというのは、よそにいろいろスポンサーを持っているのかな。スポンサーも見返りがなければ、そんなことはやりはしないはずだし。そこでの雰囲気はアメリカの悪口を言うやつが多い。

伊藤 それでさっきの話になるんですね。

海部 ドイツもイタリアもそうだ。

佐道 十一月の総会はどこでやるんですか。

海部 トリノ。だから僕はそこで「何を言ってもいいか」と言った。日頃よりもちよつとトーンをアメリカ寄りに変えてやって。

佐道 今の時期には大事なことですからね。

海部 「今日この話を聞いておると、みんな「アメリカが」駄目だ駄目だと言うけれど、私は二つの点を反省してもらいたいと思う。ものには光の面があれば必ず影もある。アメリカの持つておる善意をまず見てやれ。頭ごなしに全部石油のにおいがするとか、利権漁りだとか、そういうしみつたれたことを言つてはいかん。善意の固まりだ。苦しんでおる国を助けてやろうという人道的な善意がある。もう一つは、今日に至るも、一点たりとも領土的な野心を見せたことがないじゃないか。これはなかなかできないことだ。私はその意味で、湾岸戦争と一緒に戦つたジョージ・ブッシュ、ここにはないけれど、このあいだ会つてきたら、彼は彼なりに真面目に考へて一所懸命やろうとしているんだから、そうみんなで寄つてたかつて叩かずに」と言つた。そうしたら、何か送ると言つていたよ。ゴルバチョフはゴルバチョフなりに考へてやつているから。だからどつちに転んでもわからんけれど。

伊藤 いずれまた、そつちの話もぜひ聞かせてください。

一同 どうもありがとうございます。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 23 回

中曽根内閣時代Ⅳ（1985～1986）

【2003年6月23日（月）14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2003年6月23日)

1. 今回は、85年12月28日に成立した第2次中曽根第2回改造内閣で、先生が二度目の文部大臣に就任されたときのお話からお願いします。中曽根首相は翌年の国会でも「戦後政治の総決算」「行政・教育・税制改革が国際国家への礎石である」と、教育改革の意義を強調していました。二度目の文部大臣就任に当たり、最重要課題とされたことはどんな問題だったのでしょうか。
2. 2月、中野区中野富士見中学2年の男子生徒自殺事件をきっかけに、学校での「いじめ問題」が社会的な話題になりました。こうした問題について、文部省としてはどのように対応しようとされたのでしょうか。
3. 4月、アイドル歌手の自殺を契機に、青少年の自殺が急増し、社会問題化しました。「いじめ問題」に続いて、なかなか政治や行政では対応できない問題ではありますが、先生はこういった問題については当時どのようにお考えでしたか。
4. 5月4日、第12回（東京では2回目）サミットが開催されました。各国から首脳が参集し、首都は警戒態勢になるわけですが、このときのサミットについて何か印象に残ることはございましたか。またサミット開催のとき、参加メンバーではない閣僚はどのようにしているものなのでしょうか。
5. 5月27日、「日本を守る国民会議」が編集した高校教科書『新編日本史』が検定に合格し、これに対して6月7日中国が、同14日韓国が批判します。結局中曽根首相の超法規的措置で修正して合格とするわけですが、この問題についてお願いします。
6. 6月2日、第105臨時国会召集、異例の冒頭解散となり、衆参同日選挙（7月6日）となります。結果は自民300議席という記録的大勝利となるわけですが、衆参同日選挙については、先生はどのように見ておられましたか。また、これほど圧勝するという手ごたえは、やはり選挙中ありましたか。最大の勝因は何だとお考えでしょうか。
7. 選挙後第三次中曽根内閣が成立し、文相は先生から藤尾正行氏へ交代します。結局、二回目の文相は半年間で終わったわけですが、もっともご記憶に残っているのはどんな問題でしょうか。
8. この年に文部省が発表した統計では、85年度の中学生登校拒否が2万7926人で10年前の3・6倍、高校の中途退学者が全高校生の2・2%に上る11万4834人で過去最高でした。まさに教育の危機という状況ですが、こういった問題に対し、文部省としてはどのような対策を当時考えていたのでしょうか。
9. 86年7月に文相を交代されたあと、役職としては先生はどのようなポストにおられたのでしょうか。
10. 8月12日、新自由クラブは解党し、田川誠一氏を除く6人は自民党に入党しました。新自由クラブ解党の経緯について、先生はいろいろとお聞きになっておられたと思いますがいかがですか。また、田川氏のみ自民党にもどられなかった経緯についてもお願いします。

- 1 1. 教科書に関する日中、日韓問題が一段落した直後、就任したばかりの藤尾文相が、「日韓併合には韓国にも若干の責任」と雑誌『文芸春秋』で述べて問題になりました。結局藤尾文相は辞任を拒否して罷免されるわけですが、この問題に対して先生はどのように見ておられたのでしょうか。
- 1 2. 中曽根首相は選挙前、大型間接税はやらないと言明していましたが、選挙後はこの問題が急激に浮上しました。12 月には山中自民党税調会長が「間接税は選挙公約違反で総理がうそをついた」と発言して紛糾したほか、同税調が「売上税」88 年 1 月などを主張した税制改正大綱を決定し（12 月 23 日）、政府税調もほぼ同内容の答申を発表するなど、売上税導入の動きが高まってきました。これに対して先生は当時どのようにお考えになっていたのでしょうか。
- 1 3. 87 年になると、売上税はかなり大きな政治問題化し、中曽根首相の公約違反が批判される事態となってきました。3 月には参議院岩手補欠選挙で、売上税を争点に社会党が圧勝するなど、前年の同日選挙の大勝から事態は一転して自民党に逆風になってきました。当時の状況について先生はどのようにご覧になっていましたか。また、どのような活動をされていたのでしょうか。
- 1 4. 2 月に政府が提出した売上税法案は、党内からも反発をうけ、結局 5 月 27 日に廃案になりました。これは中曽根首相へのダメージはかなり大きかったと思われませんがいかがですか。
- 1 5. 10 月、中曽根総裁の任期終了に伴い、後継総裁が選出されることとなります。竹下、安倍、宮沢の三候補が立ち、中曽根総裁に調整一任となって最終的に竹下氏が選ばれます。一連のこの経緯についてお願いします。

※今回は以上のような質問についてお願いします。

■文部大臣2（入試改革1）

楠 今日では伊藤先生が来られなくなりましたので、私が司会進行をさせていただきます。今日は二十三回目です。まだまだ、先は長いですね。

海部 次々と新しいことが起こるものだから。とんでもない間延びした昔話をしているようで申し訳ないと思つています。

楠 いえいえ。今回は、二度目の文部大臣にご就任なさったあたりまで伺いました。一九八五年十二月に成立した第二次中曽根・第二回改造内閣で、先生が二回目の文部大臣に就任されたときから、今日はお伺いしたいと思います。

中曽根さんは国会でも、「戦後政治の総決算」とか、「行政・教育・税制改革が国際国家への礎石である」といったようなことを強調されていましたが、先生が文部大臣として取り組まれた重要課題はどんな問題だったのでしょうか。そこからお聞かせいただきたいのですが。

海部 文教政策ですね。第二次内閣の時は第一次と違って「二回目の文相のときは一回目のときと違って」、イロハの「イ」からの勉強をなささいということもなかった。また中曽根さんがやろうとしていることは教育改革であつたことは間違いないんです。それは「戦後政治の大決算」というあの人の一連の大きな動きの中で、これをやり遂げたいという思いがあつたんでしょうね。

佐道 いままた教育基本法の改正が問題になっていますが、この当時も問題になつたんでしょうか。

海部 中曽根さんはそれがやりたかつたわけで、ちようどいまの現状とだぶつちやうんだな。このあいだもお話をしたけれど、歴代文部大臣会議というのを三回ぐらい続けてやつたんです。中教審の会長の鳥居「泰彦」さんを国会へ呼んで、みんなて話を聞いて、こち

らの意見も言おうと思つただけでも、歴代の文部大臣を呼ぶとこのごろは中曽根二世「弘文」が出てくるんだよ。直前の文部大臣ということだね。それで、親と子であるけれども、考えはだいぶ違ふなというふうな気がします。

楠 どう違ふんですか。

海部 お父さんのような非常に堅い頑固一徹ではない。しかし同時に「お父さんには」世の中が非常に期待をしたというか、あの人ならばきつとやつてくれるだろうということで、非常に右寄りの発想かもしれないけれど。だから「中曽根ヒットラー」というようなあだ名も、あのころ裏では使われましたよね。「いたずらに躊躇臣従しておつたら、横波を食らうばかりで前へ進まない」というのが中曽根さんの好きなセリフだった。

楠 教育基本法ですが、このときにはどうして本格的に取り組むことにならなかつたんですか。

海部 そうしてならなかつたんだろう。あのころの議論をいろいろと思ひ出してみると、もうちよつと枝葉のところへ入つて行つた。教育基本法とか愛国心からやり出すと、中曽根さんへの反対が強いだろうと思つて、もうちよつと身近なところから教育改革をやつた方が早いのではないか、いいのではないか。僕はいまでもそう思つていますけれどね。

今度言つてやろうと思つただけで、いきなりそういう大きな全体の枠組を変えるようなことを言い出すと混乱する。それから当時、大学の入学試験というのが、ある意味で諸悪の根元のように言われた。入学試験の制度を変えることが教育改革の一番大きな目玉である、というような風が吹いていた。それで、われわれもそれに対する議論をいろいろしたんです。どうしたらいいか。

楠 いま「センター試験」と言われているものは、それがきつかけでしたか。

海部 はい。それが土台というか、敷石というかな。

楠 その前は「共通一次」と言つていましたよね。では、共通一次

試験からセンター試験に変わった時だったでしょうか。ご記憶はないですか。

海部 センター試験のときも僕はいろいろ参加しておったけれども、共通一次試験というのは、通ればよろしい、通らなければいけませんというので、足切りみたいなことを考えたんだね。けれどもあの制度自身は、あのときに何が問題になったのか。古いことであるものだから、思い出せずに申し訳ない。

必ず五教科の試験を受けて、それに合格しなければ次の本試験に進めないということだったんです。それで、当時の国会のやり取りを聞いておると、足切りをするのがいいことか悪いことか、ということがだいぶ問題になって、「足切りをしてはいかん」というのが、あのころの社会党その他の意見でした。僕は「足切りはいいことだ」と言った。議論しなければなりませんから、いいことだと言った、「だからこういう法案も出したんだ。何がいかといたら、親切丁寧に個人々の能力や意欲や知識を試すことができるんだ。学校へ来るか来ないかもわからん人をたくさん集めて、全部合格にして、キャパシティもないのに受け入れたらどうなるのか。だから第一次試験で足切りもやり、適正規模というか、ある程度引つ込めるようにしたらどうだ」というようなこともあったんです。

楠 いま、枝葉の部分から入っていくというお話でしたけれど、そうすると中曽根首相の言う戦後政治の総決算にはならないんじゃないですか。

海部 だから、それは中曽根さんと僕との主観の違いというか、それぞれのアプローチの違いというか。最後は仕上げたいと思つていきますよ、私も。

楠 アプローチですね。

海部 僕は仕上げたいと思うけれども、どこからアプローチするかを間違えると、初めから空中戦になっちゃって、キャンキャン言い出して前へちつとも進まなくなる。そのことはこのあいだ、いまの現役が集まってくる「歴代文部大臣会議で言った」。保利「耕輔」

座長が私の「内閣の」時に任命した文部大臣で、彼も一緒になつていろいろ苦労をしたんだ。中曽根さんの息子もおるわけだ。だから、保利・中曽根の二人の文部大臣経験者に「当時のことをよく勉強してみてくれ。僕の言いたい基本は、いまいきなり、やれ愛国心だとか、やれなんだとかというところから言うと、必ず反撃・反論が来るということだ」「と言ったんだ」。

楠 では、教育基本法の改正というものを最終的には目指していたけれど、文部大臣としての先生は、いきなり愛国心とかいうとまた妙なところに議論が行って空中戦になるから、まずは枝葉のところから始めようということですね。

海部 そうそう、枝葉のところというよりも、身近なところからと言ってもらわないと。枝葉のところからと言うと、どうでもいいみたいだからね。もつと身近なところですか。

楠 それが入試改革とか、そういうことですか。

海部 そうです。

楠 それで結局、このときは教育基本法の改正には至らなかったわけですね。それはどうしてですか。

海部 それは、基本法というのは基本ですから、そう簡単に変わるものではないわ。

楠 社会党、共産党あたりはもちろん反対でしょうし、公明党もいまでも反対と言っていますが、そういう野党の抵抗が強かったということですか。

海部 いや、そのときはわれわれも、各党の中で話のできそうな人たちと何回も議論しました。特に公明党の皆さんは教育基本法の改正に理解を示した人が多かった。

楠 先生が文部大臣の当時ですか。

海部 そうです。その時のメンバーは、正木良明政調会長とかが、公明党の文教の代表で出ておったんです。それで本当によく時間をつくってくれて、われわれの言うことに同意できることは同意し、合意できることは合意しようということでした。話をしたことがあったん

です。

それで、いきなり愛国心ということをやると、何を期待して、どういうことを考えている人間をつくりたいと思っているのか、というところへ議論の中心が飛んでいつちやう。もつと身近なところで、現在何が問題なのか、問題なのは入学試験があつてよくないんだということだから、入学試験の制度を改めれば学校教育に関する問題がいくらかは解決するんじゃないだろうか、ということですよ。

■文部大臣3（入試改革2）

楠 入学試験の改革のほかに身近な問題は何かありましたか。

海部 諸悪の根元は入試制度にある、といつてやつたんだから。

楠 これは党主導でやつていくものなんですか。党の文教部会か何かでしょうか。

海部 あのころは党の文教主導でやりました。

楠 文部官僚、お役人が何かアイデアを出してやる、ということではないわけですか。

海部 文部官僚も当時は真面目に議論に参加してくるのがおつた。あんまり真面目にやりすぎて、当時の政務次官からクビになつた文部省の局長もおつたぐらいですからね。だから中曾根さんの言い出した頃の教育改革というのは、やはり諸悪の根元は入試制度にあるということだ。その入試制度の問題を議論するときも、「手を挙げ希望したら、みな入れればいいのか。そんな入試制度は良くない。落ちるかもしれないから、みんな歯を食いしばつて勉強するんじゃないか。それが一人ひとりの学問知識の向上にもなるんだ。だからそういう、ある意味の競争制度というものは認めておいたほうがいいだろう。切磋琢磨という言葉もあるように」といつて、議論したんです。

だから、当時の国会の会議録なんか読んでみると、野党の、特に

日教組出身者たちは大学入試制度のことをいろいろ勉強して、「改革するとおっしゃっているようだけれども、あの共通一次の足切りとは何ですか。足を切っちゃうのか。痛い、痛いと言つて泣いている子どもを教育では救わないんですか」という角度の、ちよつとピント外れみたいな質問をする人もおつた。私は「足切りというのは、著にも棒にもかからないという人が世の中にはおるはずだから、それを第一次のところでは選抜するのであつて、それはわかつてもらわにやあいかん。それから、ものになるかならんかもわからんのに、一所懸命一次試験を勉強して、二次試験に入つて行こうと思つている人もいるわけだから、駄目な人には、あなたはまだ大学教育を受けるだけの知識教養が備わつていないから今度の一次試験で落ちたんだ、と言つて、ひとつの説得力が出てくるんじゃないか」と言つた。

けれども、五教科の第一次試験に落ちたからといつて、人生すべての落伍者であると思つてはいかんから、それがすべてではないよということだ。当時は「敗者復活」という言葉を使つただけけれども、何か敗者復活の道はないだろうか。ということは、入学試験の制度そのものの中に、専門科目だけで入れてやつたらどうだろうか、というような議論もよくしましたね。

楠 専門科目というのは何ですか。

佐道 一芸入試とか、ああいうものですか。

海部 そうそう。ご理解願えんかもしれないが、五教科全部点が取れなくても、優れた教科が一教科でもあれば、それを中心に伸ばしていったらいいではないか。だから、そういう採点方法も大学で発見して、特色を出していったらいいのではないかとというような議論もしましたね。高崎経済大学でしたか――。

楠 それは私が以前に勤めていた大学です。

海部 その大学で、入学試験の時に、科目を二科目だけ受けなければいけないことをやつたことはありませんでしたか。

楠 それは高崎経済大学ではなくて、亜細亜大学だったかと思いま

すが。

海部 それから秋田鉾山大学「↓秋田大学鉾山学部か」というところは、一科目か二科目だけで試験をやった。中曾根さんの発想も、そういうことを議論に行ったときは、「文部大臣、それでいいですよ。なにも五教科五科目全部でいい点を取るのが必ずしも将来に国のためになる人だとは限らない」と言っていた。

佐道 この時代という、もういまから二十年近く前の話になりませんが、まだ旧制高校を卒業したような人が一線で活躍していた時代ですね。そういう人たちの口から、よく旧制高校の復活みたいな話が聞かれることがあります。そういう議論はなかったですか。

海部 この時は旧制高校のようにしろ、という議論はなかったです。もしそういう説が出て来たとしても、それはいまの学校は当時とうんと違うという。旧制高校復活論が出てくる背景は、進学率が一〇%から一二%のところだ。ところがこのころは四〇%を目指して、二九%とか三〇%を超えたとかいうように、大量教育の時代になっていましたから、「いまと昔とは条件が違うよ」ということを言ったことを思い出しますね。

楠 中曾根さんはその世代だと思うんですが、旧制高校復活のような発想はなかったんですか。

海部 だからいま言ったように、「一科目でも優れた子があつたら、その子も合格できるような方法をとっておいてやるのも、海部君、必要だよ。アインシュタインはそういうところから出てくるんだ」と言っていた。

楠 その、一芸に秀でたものを入れるというのは中曾根さんの発想なんですか。

海部 そう。あの人はそう言いました。

佐道 六・三・三・四制とか、そういう制度自体に手をつけるという発想はまだなかったということですか。

海部 ちょっと待ってください。こんがらがっちゃうな。いま入学試験のことを一所懸命思い出しておっただけで、六・三・三・

四の制度を変えようということとは、議論としてはありました。特に

それを一所懸命言ったのは、私の記憶に間違いなければ、新自由クラブで、河野洋平と西岡武夫がいつも六・三・三・四を変えろと言っていた。そして最後のところだけだったか、五・五にしろと言っていた。そのころ新自由クラブが教育改革の原案を出しました。入学試験のことから飛んじやって悪いけれども、それを読むと、区切り方を変えろという議論が相当あつて、それを説得するのも大変だったという思いがあります。中曾根さんはそちらには賛成しませんでした。むしろ、「選抜や競争の道を絞るものは絞ってあげれば、そのことだけには自信と夢があるという生徒が胸を張って受けるだろう。そういうところから——何故だか知らんけど——アインシュタインも生まれてくるんだよ」という言葉があつたな。

佐道 先ほど、中曾根さんの教育基本法に手をつけるということではなくて、先生は身近なところからやる、そうしないと議論がいろいろ飛んでしまうから、というお話でしたが、自民党の文教部会自体もやはりそういう議論でしたか。

海部 いやいや、文教部会の中では、そこまで細かく分けた議論をそんなにたくさんする人はなかった。けれども当時、「愛国心が足りない」とか、「国を愛する気持ちが持てんようではどうなんだ」とか、「民族のアイデンティティの一番根本にあるものはこの国を愛する気持ちがあるかどうかだ」という勇ましい議論が、われわれの先輩クラスのところからよく出てきたわけですね。けれども、そういうことに関しては、当時は西岡君とか河野洋平君とかが文教部会の若手代表だったわけだから、そこに行く、そういう議論には必ずブロックができて進まなくなる。そのころのことがいくらか僕の頭にイメージとして残っているかもしれないけれども。しかしいまの「歴代」文部大臣会議なんかには西岡もときどきは出てきますしね。

楠 この時の党の文教族の中心というとなたですか。

海部 それは、誰だったか忘れました。西岡の名前が——。

佐道 西岡さんは「自民党を」出て、もう戻ってきたところかな。
海部 藤波「孝生」君というのも文教におったな。ただ、藤波君は積極的に自分から進んで意見を言う人ではなかったんだよ。ああいう人柄だから、「まあ、ねえ、えへへ」というようなことで、座をうまく取りまとめていた。

■文部大臣4（いじめ事件）

楠 一九八五年当時のことですが、「いじめ」の問題が社会問題になりました。それに対して文部省はどのように対応されたか、ご記憶がありますか。

海部 あれが社会問題になったというのは、朝鮮人学校の生徒をいじめたとかいじめないとかということが社会部で大きく扱われたことだ。それが発端になって、各学校の中で日本人同士でもあれをやる、これをやる、ということ、いじめが社会問題になってきた。一番最初に火をつけたのは、朝鮮人学校の生徒をどうのこうのしたという社会部の記事が発端だったと思いますね。

楠 そうですか。私が記憶しているのは、ここ「質問票」にも書いてありますが、中野区の中野富士見中学の男子生徒がいじめでもって自殺をした、それがきっかけになって社会問題になったような気がするんですが。

海部 この「中野富士見中学の二年生の」問題は、自分が本当に信頼しているおばあさんが遠いところに住んでいたんだ。「↓岩手」。それで、どうしようかという悩みを聞いてもらおうと思って、そこへ訪ねて行ったんだよ。誰も悩みを聞いてくれる人がそのときいなかったの、訴えたかった。それで行ったんだ、僕の記憶に間違いがなければ。行ったところが、会えなかった。その日おばあさんは外出しておった。そこで、一晚そこで待ったわけだ。翌日帰ってきて「↓帰らずに岩手で」自殺をしたわけだ。その涙ながらの遺書に

は、そういうことが書いてあった。それで、「そのときもしおばあさんがおつて、まあまあ上がつてこい、と言って一晚話を聞いて励ましてやってくれれば、どんなにかその子供の心は救われたであろう」と、それは委員会の問題になって、僕はそう答えたことをいま思い出しました。

楠 文部大臣というのは、こういう場合にはお悔やみに行ったりするものなんですか。

海部 お悔やみに行ったりはしませんでした。

楠 では、そういう事情は新聞か何かでお知りになったんですか。
海部 事情はみんな新聞で読んで、です。そして教育委員長を呼んで、教育長を呼んで、話を聞いた。そのことはどこかへ行つて話してあげた。それで僕は、「心の通い路を大切にしてください。子供が心を閉ざしてしまつて寂しがつておつてはいけません」と言つたんだ。せつかく、おばあさんに会いたい、あのおばあさんなら話を聞いてくれるだろう、というので行つたんだよ。遠いところまで青森だったか、行つただけけれど、訪ねて行つたらその日はおばあさんはいなかった。誰もその家になかった。誰かが一人でもおつて、上げて聞いてやってくれればよかったんだけど。子供だから、もうこんなところにいつまでもおつても駄目か、とますます寂しくなつて帰つてきた。というのが、この事件だと思うね。

「秘書の方を呼んで」いつだったか、いじめの問題のさなかに、中学校の子供がおばあさんを訪ねて行くんだよ。青森かどこかだ。それで会えずにそこで一晚おつて、翌日帰つて来たんだ。それで、自分は会えなかったという遺書を書いたんだ。これは忘れられん痛ましい事件であつただけけれども、近藤「信司」君が秘書官の時だったな。ちよつと近藤君のところへ電話して、そういう事件があつたが、そのことを覚えたらんかと言つて聞いてみてくれ。
楠 それは文部省の方ですか。

海部 そう。僕の秘書官だったんだもの。いまは局長だよ。
楠 なんの局長をされているんですか。

海部 何かの局長だよ。「生涯学習政策局長」。いまでもいろいろなことを説明に来るよ。だからそれに聞いたらわかると思う。初めての自殺事件みたいなものだったから、僕の思いにも強く残っておるんだよな。「のちに秘書の方が報告、「鹿川〔裕史〕君いじめ自殺、中野富士見中学、集団でいじめられて「葬式ごっこ」、岩手、父の郷里」。これだけわかれば思い出す。そう、先生も葬式ごっこをやったんだ。

楠 そうだ、先生も加わって葬式ごっこをやったんですね。

海部 先生も加わって一緒にやったから、よくなかったんだ。

楠 それで安らかにおやすみくださいとか、馬鹿なことを書いたんですね。寄せ書きか何かしたんですね。

佐道 ひどいものですね。

海部 教師も一緒に寄せ書きをしたんだ。それで子供が、「このままでは生きジゴクになっちゃう」というようなことを書いた。

佐道 「生きジゴク」と遺書に書いてあったんですね。

海部 遺書だ。それで、もうこれは僕で最後にしてくれということをしたしか書いたんだ。そうそう、鹿川君だ。昭和六十一（一九八六）年二月一日というから、だいぶ前の話だな。記憶が薄れてくるわけだな。けれどもこういうことだけはよく覚えてるんだな。

だから、いじめの事件という、そのことがついつい口をついて出てくる。あの一晩、どんな気持ちでおばあさんの帰りを待ったかなと思っておいたら、本当に耐えられない気持ちになった。そのことはそのまま国会の中でも報告してやったんだよ。

楠 先生ご自身は、この問題についてどういうふうにお考えになりましたか。

海部 それは心痛ましいことで、いいことでも何でもありません。それは最初に言ったように、どうか子供の心を寂しがらせなくてくれ、ということだ。近くにいる大人が、できればお父さん、お母さんが一番いいんだけど、何か変わったことがあるといったら、どうかしたのか、何かあったのかと、思い煩うようなことがあったら相談で

きるように。相談してものを言っちゃえば、ある程度子供の心は救われるんじゃないかな。あの頃のいじめの背景にはそういうことがいくらかあったんです。

佐道 こういう問題の場合、例えば野党が、大臣である先生に質問をするわけですね。それで先生は、「痛ましいことであつた。これこれこういう事情で」とご説明になるわけでしょうけれども、野党はどういった切り口で聞いてくるんでしょうか。行政が右から左に何かできるという問題でもないわけですね。

海部 それをおっしゃるのなら、あの速記録を全部読み返すのは大変な作業だけれども、それは国会図書館にあるから、それをいっぺんお読みになると一番正確に反映できる。要するにそれは、「文部省のアレが間違っているんだ。おまえらは子供の心がわかっていないんじゃないか」というような角度の切り込みだったと思うね。

佐道 ということをとをなんとか言わせたいということで、聞いてくるんでしょね。

海部 だから、何か聞いてほしい、何か訴えたい、というものがあるんじゃないですか。特に中学の二年、三年というのは、そんなことが多いんじゃないかしら。これは本当に忘れられんことだ。確か青森県だったよ。そこまで行ったというんだから、覚えておつた。楠 あれだけの社会問題になると、文部省としても、文部大臣が一般的に、「周りの大人がもう少し気を使ってください」と言うだけでは済まないで、何か制度的な対応を求められるんじゃないですか。

海部 いや、そうおっしゃるけれど、それは全国的に――。

楠 例えばカウンセラーを各学校に置くとか、そのような話は――。海部 それも、当時からやらなければならぬことだ。カウンセラーも置いてやったし、それを増員しろとか――。「近所の大人たちももうちよつと自覚をもって、共通の思いであたたく目を向けてやってもらえんどうか」というようなことを、僕は文部大臣の立場で、当時、教育委員会とかPTAとかへ行つて訴えたこともありました。それは、これを例にした。だからそれは、みんなが大

人の責任として目を向けてやってもらわないと、うまくいかんのかな。

■文部大臣5 (教育基本法問題)

海部 だからいま僕が、今度の教育基本法で、初めて法案で、「家庭の責任」とか「両親の自覚と協力」をお願いしたい、というのは、そうしないといふ効果が現れないんじゃないかという気がしたからで、今度もそれは言っております。そのことはだいたいぼほかの経験者たちからも賛同が得られておることです。教育基本法に「家庭の親」なんていうことが載るのは初めてですからね。

楠 現在進行している教育基本法の改正については、先生はいろいろな形で関わりを持たれているわけでしょうか。

海部 いま申し上げたように、歴代文部大臣経験者を集めている。それからもう一つは、別に与党三党で教育基本法関係の枠組を議論していこうということをやっている。けれどもそこで難しいことがある。自民党の文教族は大体考えもわかっているし、文部大臣経験者は自民党にしかおらんわけですから、みんなわれわれの後輩もしくは仲間だから、そこはいいんですけれども、西岡が文部大臣で経験者でたまに出てくるか。西岡はもう自民党じゃないんだよ。自由党だ。「西岡氏が」出てくるんですが、あまり片意地張って、昔のようにブロックはしないけどね。

楠 この歴代文部大臣会議というのは、先生が主宰なさっているんですか。

海部 それは大きいところがやれとあって、自民党だ。いま出てきている中では保利君が一番古いんじゃないかな。海部内閣の時の文部大臣だから。保利耕輔が、集まったところで座長をやるわけだ。彼は当時の事情はよく知っていますからね。それから私の国会答弁なんかも、いろいろなことを覚えておってくれるから、話が早いわ

けだ。

それから、いま公明は入っていない。三党協議でやるならば、公明も入れたらいいけれども、入って来ないんだ。結局この前の教育改革のころには、当時の公明党の政調会長も書記長も文教部会長もみんな参加してやっておった。僕も直接担当して、公明の人と話し合ったことも何回かあります。けれども今度は初めから構えちゃっているんだ。党で申し合わせでもしてきたのかな。あるいは、発想した人がどこへ終着点を持っていくのか見てみると、自分たちの党の考えと合わないから初めからつぶしておいたほうが安心だ、と思っておるのか、そんなところまでは突っ込んでまだ聞いていませんけれどね。

楠 そうですか、かつては公明党はこの教育基本法改正に理解があったんですか。

海部 あったんだ。理解があったから、ときどき集まって話をしていたんだ。

楠 それはさっきの話ではありませんが、愛国心とかそういう話を出さないから、彼らがついてきたということですか。

海部 そうそう。だから僕は、「初めから愛国心でやると不毛な議論になるから、もっと身近なところから話そう」と言ったんだ。

楠 その身近なところから話した成果で、公明党がついてきたということでしょうか。

海部 うん。だから変な言い方だけれど、当時はそういう会が遅くなるよ、夜いろいろなところで一緒に飯を食ったり、一杯飲んだり、潤滑油としてやったものだ。

楠 じゃあ公明党のスタンスに大きな変化があつて、あのときは議論に乗ってきたけれど、今回は立場が変わったからついてこないということでは必ずしもないわけですね。

海部 今度は何故ついてこないのか。最初の与党三党の政策会議のときにも、初めから愛国心とかなんとかいう議論には賛成できないと「公明党は言っていた」。

楠 新聞の報道などによれば、一説には、支持団体の創価学会が、教育基本法とか思想がらみ、イデオロギーがらみのことには反対している、今回は与党でありながら、公明党がこの基本法の改正には慎重だといわれています。でもいままでの先生の話を伺った限りでは、基本法の出し方、教育問題の出し方にちよつと違いがあったということですね。だから、かつては容易に乗ってきたのに、今度は乗ってこない。考えてみれば、あのときは公明党は野党のわけですね。いまは与党ですね。だからどちらかと言えば、その反対であつてもいいはずなのに、前は初めから愛国心とは言わなかつたから乗ってきたんだ、というふうに理解してよろしいわけですか。

■東京サミット

楠 よくわかりました。ありがとうございます。ちよつと話題が変わりますが、次にサミットのことを伺いたいんですが、「一九八六年」五月四日に、東京では二回目になる第十二回サミットが開催されます。このとき東京都内が厳戒態勢になりましたね。このときのサミットについて、何かご印象、ご記憶はございますか。サミット開催のときに参加メンバーではない関係はどのようにしているものなのでしょうか。

海部 このサミットは、省エネ問題で石油を無駄遣いするのはよくないんだ、という議論が燃えさかつた頃かな。

佐道 それは最初の東京サミットだつたと思います。七九年の第二次オイルショックの直後だつたと思います。

楠 このときのサミットのテーマは何でしたっけ。特に強い印象がなければ――。

海部 特に強い印象はありません。最初の「東京サミットの」ときは強い印象がありましたけれどね。例の半袖シャツを着なければい

かんとか、背広の袖を半分に切つたり――。

佐道 ありましたね、省エネ・ルックですね。

楠 いまだに羽田「孜」さんはあの格好をされていますね、しかも親子で。

海部 あれを作つてやるという業者がおるんだというんだね。江崎「真澄」さんもあれを着ていたな。「七九年」当時、通産大臣だったから。

楠 うちの父も一時期、あれを着てバッジを付けて国会に行っていましたね。

海部 はやりのように半袖を着たことがあつたな。僕は絶対に着なかつた。だつて僕の後援会長は毛織工業協同組合の理事長だから、洋服を半袖にするのは邪道で、それぐらいなら着てくれない方がいい、半袖はいかんという。これは蛇足のこぼれ話です。

楠 サミット開催のときに、参加メンバーではない関係はどういう具合なんですか。

海部 サミットときは、差し障りがあるといかんけれど、心臓の強いやつがいる。通産大臣というのは正規のメンバーじゃないんだ。総理と外務大臣、大蔵大臣が正規メンバーだったんだ。けれどもいつの頃からか、通産大臣が「メンバーだから出せ」と言うようになった。それで私のときも通産大臣がついてきましたよ。出番を作つてあげなければいかんで、非常に困つた。問題が通商問題になつたら、通産大臣と大蔵大臣は場を替われ、という。

楠 先生が総理になられる前からですね、通産大臣が出るようになったのは。

海部 そうだろうな。おれがなつたときにも、通産省から「せひうちも連れて行つてください」と言つてきた。あれは秘書官を通産省も出していたんだ。いわゆる弁当持ちだ。通産省は官邸に、大蔵、警察並みに然るべき弁当持ちを出しておるのに、サミットのときには、つんばい数ではあれだから、そこにに入れてもらつて勉強もしたという。

楠 そうすると、歴代の通産大臣で初めてサミットに加わった人を調べれば、心臓の強い通産大臣が誰かわかりますね（笑い）。

海部 うん。

楠 サミットに行っているあいだは、緊急事態を想定して、誰が総理大臣の代理とか、誰が外務大臣の代理とか、そういうことはちゃんと決めていくんですね。

海部 それは内閣で決まっております。行く前に決まっております。楠 それは慣習的に決まっておりますか、それとも何か法的な根拠を持って決めているんですか。

海部 さあ、あれは法的な根拠があつたのかどうかは別にして。

楠 アメリカのように固定的に、副大統領の次は上院議長とか、そういう順番はあるんですか。

海部 閣僚の在任期間の長い順かな。

楠 閣僚の在任期間というのは、一斉に就任するわけだから、同じではないですか。

海部 いや、その人の生涯計算で、いろいろな閣僚をやつたことだ。あの一覧表は、このごろはあまり必要ないから見もしないけれど、衆議院手帳に別冊付録でついているんですよ。いつ誰が、総理大臣臨時代理をしているとか。それが経歴とか履歴になるわけだ。そういう規定がないから、ああいうふうにもめたんだらうな。「おれが行く」「おれは行かんでもいい」といつて。

楠 少なくとも先生が総理だったときは、そういうものはなかったんですか。

海部 それは官房長官の仕事になつちやうんだ。留守中は誰に交替をやらせるか、ということだね。

佐道 総理ご自身で指示を出されている、ということではないわけですか。

海部 そういうことはないですね。だいたい役所の方で決まっていますし、いちいちもめることはないんです。

楠 じゃあ官房長官に丸投げしているような感じになるんですか。

海部 官房長官のほうで、この次はこうなるから、このときはこの人です、とかなんとか言ってくる。よほどのことがない限り、それはいかん、なんていうことはなかったですね。

楠 時間的にもそんなに長い時間、国を空けているわけではないですからね。岩倉使節団ではないんだから。

海部 昔の岩倉使節団のように、国の大事なときに一年も船に乗ってみんな行つちやうというようなことではないから。さあとなつたら、呼び返せばすぐ帰ってくるわけだから。

■文部大臣6（教科書問題）

楠 次に教科書問題なんですが、この年の五月、「日本を守る国民会議」が編集した高校教科書『新編日本史』が検定に合格します。

それに対して、六月に中国あるいは韓国が批判します。中曽根さんが超法規的で修正して合格とするわけですが、当時の文部大臣としては、この問題をどうお考えでしたか。

海部 教科書の問題は、審議会の意見が要るわけですね。ところがこのときは緊急だったから。超法規的緊急措置というのを考え出したのは後藤田「正晴」ではなかったかと思う。中曽根さんがこんな言葉を使って教科書問題に対処したとは思わない。後藤田さんが役人の知恵でやつたんじゃないう気はしますが、表向きは総理がこういうことだという発表をしているでしょうね。ただ、総理大臣が何をやってもいいかという、教科書検定は総理といえども喙を容れられないということに、一応はなっているんですね。

楠 これは何か、総理から文部大臣に対して指示はなかったんですか。

海部 このときこの問題で、これをうまくやれとか、守っていけという指示は特になかったと思います。

楠 これは一歩間違うと外交問題になりますね。それだけに慎重な

対応が要求されただろうと思いますが。修正の内容というのほういうことだったんですか。

海部

佐道 検定は、教科書として事実関係が間違っているとか、そういうところでないか、実質的にやらないですね。

海部 そういうときは訂正命令を出すなり、出版社の方からここを変えたいと思うという上申書を出させて、それでOKとすればよかったんだね。

佐道 そういう点は一応きちんとしているから、検定には合格したわけですね。

海部 そうそう。それで外国から批判があつたので、それはどういう扱いになるのかということで、酢だの蒟蒻だといろいろ議論をしておつた。こういうときは、右寄りの人からは、「外国の干渉でそう簡単に変えちゃあいかん、変えるべき問題ではない」とか、「この次のときに考えるべき問題だ」とか、いろいろな議論があつたんですね。

佐道 これは日本の検定制自体にも関わる問題になると思ひますので、文部省あるいは大臣としても対応に苦慮されたと思うんですが。

海部 そうですよ。あのときは――。

楠 党内からの突き上げで、ご記憶はないですか。右寄りからの、「そんな外国の批判に屈するな」というような。

佐道 内政干渉だ、というような。

海部 それはありました。それは年上の文教族からだ。ここ「質問票」に藤尾正行なんて書いてある。藤尾正行は歴代「文相」の中では最も変わった人だけれど、そんな人ではなくて、あの頃は長谷川峻とか、原田憲とか、森山欽司とか、そんなところが一所懸命、これは駄目だとか、これはやらせろ、というようない意見を絶えず言っていましたね。

佐道 外交関係に配慮ということで、外務省、外務大臣の方から何

か話があるということはあるんですか。

海部 外務大臣から外交関係に配慮しろというの、あつてもよさそうなはずなんだけれど、ないんだ。

佐道 それは立場が違ふ、文教政策は違ふ、ということですか。

海部 そうそう。外交問題にするべきことではないと思つていたんだらうな、あの頃は。むしろそれよりも、検定制を守らなければいかんという別の角度の意見があつて、「何のための検定制制度ですか。せっかくこちらがいろいろ手順を踏んできちん検定したものです。これは総理、あなたが簡単に變えてはいけません」ということを言つておつたのは、さつき言つた大先生方ではなしに、中トロという失礼だけれど、われわれの弟分みたいな人たちですね。西岡君とか。

楠 先生は教科書検定制についてはどういうお考えですか。

海部 あれはあつた方がいいと思ひますよ。とんでもないのが出てきたら困るので、あつた方がいいと思ひます。その代わり、言うべきときは、こういう理由でいけないんだということ、わかりやすく説得のいくように、事情を世にわかるようにすべきであるし、検定の方に文句を言いたい人は、いつ言つてもらつてもよろしい。例のなんとかという先生がおつたじゃないですか。長い裁判で（楠 家長「三郎」）、家長裁判で手こずつた頃だよ。だから言うならば、そういう人々の救済も必要だ。けれども、家長裁判はあまりにも度を過ぎておつたよ。よくみんなここまで辛抱して我慢しておるな、というようないこともありました。教科書というものは、国が責任を持つて児童・生徒に示すべきものであるから、ということが基本にあつたから、僕も教科書検定制というのには賛成しておつたんです。

楠 でも教科書検定制があるから、外国から難癖が付けられるという面もありますよね。自由に書かせれば、文句の付けようもないわけだけれど、検定をすると、国定教科書というわけではないですが、日本の国家公認ということになりますね。歴史教科書は特にそ

うですが、国家公認の歴史教科書ということになって、難癖をつけやすい形になりますね。だからいつそのこと検定制度は外した方がいい、と思つたことはありませんか。

海部 ありません。検定制度を外したら——。ピンからキリまで、とんでもない意見がたくさんあつた頃ですから。それこそ家長さんの教科書みたいなものに尾ひれをつけて、あの人の周辺における中堅の執筆者が書く教科書が出回って、教科書の中で目指している方向とか思想信条がまったく違うものがあつたりしたら、それはためにならんじやないか。そして教科書検定制度といって、教科書を国が検定するのはよくないことだというような反論もあつたが、われわれに言わせてみれば、教科書検定制度があるからこそ、児童・生徒が手にする教科書は、北海道で手にしようが沖縄で手にしようが、基礎基本だけは保障される。逆に言うと、日本国民として身につけなければならぬ資質を、学校の教科書を通じて身につけるんですから。教科書というものは、子供にとってみれば初めから間違つてゐるとか、これは違うというようなものではないわけですから。だから検定のときには、念には念を入れてきちんとやらなければならぬ。反対のときにも、反対の制度とか、その扱いはいろいろあつたと思うんですね。

楠 検定制度については、自民党の中での意見の違いということはいまありませんか。

海部 ありませんでした。

佐道 検定制度をこのまま続けていくことを前提にして、そのあとどうするかということになるわけですね。つまりこういう問題が起つたときに——。

海部 そうそう。

佐道 そうしますと、こういう問題が起きて、文部省、文部大臣と官邸で——。

海部 官房長官を巻き込んでやるわけですね。いつだったか「一九八二年八月」、官澤「喜一」官房長官が、あれは誰に知恵をつけた

れたか知らんけれど、ああいうことをやるね「中韓両国に配慮して教科書をつくる」という談話を出す」。あれは官房長官がやつていいことか悪いことか、いまでも深刻な疑問があるけれど。

佐道 周辺国「↓近隣諸国」条項ですね。

海部 周辺国の意向を尊重するということになってくると、こういうふうな周辺国からどんどん文句が出てくる問題は日本国教科書では教えられなくなるのか、そうすると日本の審議会よりも外国の意見の方がいいのか、ということになりますね。そしてそのとき「一九八二年当時」一番大きな議論のときに間違ひになったのは、ほんとうに日本の教科書検定委員会が「侵略」と書かないで、「進出」と変えさせたとか、いろいろなことがダーツと一回議論になりましたが、あれはとことん調べても、そんな事実は全くなかつたんです。全くないということ、僕らは委員会でも国会でも答えました。

楠 でもそのときはまだ社会党があつた時代ですから、社会党が後ろの方から鉄砲を撃つていたんじゃないですか。

海部 ——。

佐道 「日本を守る国民会議」というのは、たしか作曲家の黛敏郎さんを中心になって、当時の日本の全体的な教科書がけしからん、新しい教科書を作らなければいけない、ということから始められたんですね。

海部 そういう人が集まって作つたんですよ。

佐道 これはどういふものができてくるのか、ということについては、前から先生も注目しておられたわけですか。

海部 白刷りという段階で知っておりました。

楠 原書房か何かが出したんです。

海部 ああいうときは、あの本は飛ぶように売れるんだ。だから印刷屋は絶対に損しないんだ。

楠 でも「高校で教科書として」採択したところはほとんどなかつたんですね。

海部 はい。採択されると思つて書いてゐるわけじゃないんだから。

要するに、こういう意見もあるぞ、ということ、印刷屋、出版社の方は儲かればいいんだから。

佐道 いまの教科書運動もそうですね。採択されたところは少ないんですが、店頭販売で、一般の書籍としてたくさん売れている。

楠 今日、ご欠席の伊藤先生にぜひとも伺いところですが。伊藤先生はもう少し最近の新しい教科書をつくる運動で、執筆をされているんです。扶桑社から出たんですね。

■八六年同日選挙1（死んだふり解散）

楠 それでは次に移らせていただきます。「八六年」六月二日の臨時国会の冒頭で、異例の解散ということになって、参議院・衆議院の同日選挙に突入するわけです。いわゆる「死んだふり解散」ですが、ここで結果として、自民党の三〇〇議席という大勝利になるわけです。そもそも「死んだふり解散」と呼ばれるのは、中曽根さんが同日選のための臨時国会を開かないと言っていて、日程的にも非常にタイトになっていたわけです。それは最高裁の判決で、選挙区の「一票の」格差が三倍以上に開くと違憲だということもあって、八増七減が実現し、その関係で日程がタイトになり、中曽根さんも臨時国会を開かないという発言があったのに、臨時国会を六月二日にポンと開いて、解散、同日選挙ということになるわけです。そのへんの経緯を、ひとつお話しただきたいんですが。

海部 それはやっぱり中曽根さんの作戦、戦略を支えて、そばにおった人たちが一番詳しいだろうと思いますよ。けれどもわれわれは、例えば藤波なんかを呼んで、「おい、ナミさん、本当のことを言えよ。どうなんだ」と聞く。藤波はそういうときは答えない。「えへへ」と笑っている。それで西岡なんかに、「ちよつとあれを呼び出してしごけ、あれはわかっているはずだから」と言っても、答えなかった。その答えないボーカークフェイスに対して、「これは全

部間違いなのか、ごく一部は合っているのか」というようなことまでいろいろ言っても、あの人は本当にボーカークフェイスだよ。けれどもしかし、だいたい同日選挙ができたならやりたいと中曽根さんが思っていることは間違いないだろう。

楠 そうですね。中曽根政権ができたときから、そういうふうを考えておられたわけです。

海部 そうそう。だからそれは、「一応「同日選が」あるものとして、われわれはやりましょう。選挙があるものとして、なければなかったでそれだけ儲かったと思え、また運動ができるんだから」と、そういうことをみんなで言い合って、同日選挙があるものとして、われわれはみんな対応しておった。にっこり笑った良い写真があったら、これでポスターだと言って、それぞれ注文も出しているぐらいだから。

楠 じゃあもう、自民党内では同日選は必至と思われていたわけですね。

海部 だから、もしなかったら、それが見破れなかったこちらの不徳の致すところで、いくら運動期間が延びるわけだから、それは儲かったと思っておれば、そんなに腹は立たんだろう。いずれにしても解散は近くあるんだ、という感じだったですね。われわれも、仲間や後輩たちにはそういうことで説得をしておった。

楠 それで三〇〇議席という記録的大勝利になるわけですが、これはあらかじめ予想されたものでしたか。

海部 いや、予想しておったというところには聞こえますが。楠 いや、選挙中に手応えがあると思うんですが、ほかの選挙と比べて非常に手応えがあったとか、そういうことはありましたか。

海部 そう言われるように、全滅する選挙ではない。それからわれわれがずつと横並びになって応援しておった仲間たちも、だいたい勝てそうじゃないかということで、そういうのがたまに集まって、「どうだ」「君のところはどうだ」と当時は派閥で話しますからね。

「いや、どこの派でもそんなに悪い感じはないよ」という。ああい

う中曾根さん式のスタイルは、言ったら悪いけれど、今日の小泉人
気に似ているところがある。物事を断言して、かつこよくワーワー
と言うから、それはそれで、もって行けるだろうということだ。
佐道 先生はこのときは地元ではなくて、日本全国応援脚という
形ですか。

海部 はい、もうそういうふうになっていました。

佐道 そうすると、日本全国だいたい、いまお話になったような形
で、調子がいいぞ、ということだったんですか。

海部 そうです。行った先、行った先で、その土地の話も聞くし、
どこかですれ違ったり、ちよつと飛行機の中で一緒になったり、列
車の中で会ったりして話して、みんなそれぞれ耳学問がありますね。
このころは、たいへん生意気なようだけれど、初日は「地元で」
事務所開きだけやっておいて、そこで「さよなら」といって、ダー
ツと飛んでいったという選挙をやっていました。

楠 それで、万歳はどこでされたんですか。

海部 万歳はしようがない、家内と子供が「地元事務所」行って、
やったんですよ。

楠 先生は自民党本部か何かにいるんですか。

海部 党本部だ。

楠 選挙期間中は、事務所開き以外は一回も「地元」お帰りにな
らなかつたんですか。

海部 この頃は、途中で一回か二回は帰ったと思いますよ。要領よ
く、新幹線が名古屋に行ったらそこで降りて、翌日の新幹線に乗っ
て行けば、その次の日はどこそこを応援してやるという約束を守れ
ますからね。

楠 先生の閣僚としての遊説スケジュールはどこで決めるんですか。

海部 党本部。

楠 党本部の遊説局か何かですか。

海部 ああ。それで「何日供出していただけますか」と言うから、
「よし、今度は十日間」とか「十一日間」と言っ、出すわけだ。

そのあいだは自由にどこを決めてもいいよ、という。

楠 そういうやり方は一般的なんですか。

海部 ええ、そうです。そしてよほど調子の悪い事情のある先生は、
「おれは十日出せといわれたけれど、五日しか出ないよ」という人
も中にはあつたけれど、党本部がそれくらいの幅を持って采配した
わけです。

楠 妙な話ですが、そういう遊説をする経費、いわゆる旅費ですが、
それは個人負担なんですか。それとも党が出してくれるんですか。

海部 いや、党が出しますよ。飛行機で移動するときでも、飛行機
賃は要りませんから。

楠 あとホテル代ですね。

海部 ホテル代も出ます。

楠 電車はパスがあるわけですが、それ以外は党本部が出すわけ
ですね。

■八六年同日選挙2（閣僚としての解散・総選挙）

佐道 「海部先生は」現職の閣僚でもいらつしやるわけですね。そ
うすると、文部省としての仕事もあるわけですね。先生の最終的な
はんこがないとどうしようもないという問題もたくさんあると思う
んですが、それは事務方の秘書官とかがずっと随行するということ
になるんですか。

海部 そうです。一人随行していました。今度の教育改革で一所懸
命やっている近藤信司君というのは、二度目の「文相の時の」秘書
官だっと思えます。

佐道 本省に戻って、本省の椅子で決裁するということは、選挙が
始まったらなかなかできないわけですか。

海部 いや、そんなことはありません。今度はいついついたん東
京に戻る、という粗日程ができておりますから。そしてこちらも着

替えぐらいの身支度はしなければならんし。だから、選挙中でも閣議はありましたよ。私の記憶では、選挙中でも閣議はあったので、閣僚として閣議に出て、そこで秘書官が持ってきているものをみんなで議論する。役所には帰りにちよつと顔を出す。そんなに長時間はいませんが、行って、やりましたよ。

楠 そういえば、解散ということは結局衆議院議員の地位を失うということですね。それで総選挙があるわけですね。そうすると選挙期間中、あちこち行くときに、例えば国鉄に乗ったらパスは出ないですね。

海部 それが、「余後効の原則」というのがあって、次期選挙で当落が明らかになるが、誰でも甘えた気持ちで、おれは当選すると思つて全力を挙げてやっていますからね。

楠 議員としてのパスは使えるんですか。議員特権というのは、選挙期間中は生きていますか。議員特権というのは、選挙期間中は生きていますか。

海部 生きていたんだ。

楠 だって、解散の時点で衆議院議員の地位を失うんじゃないですか。

海部 本当は失うんですけれどね。

楠 だから、前議員ですね。でもおかしなことにみんなバッジをつけていますね。

海部 いや、バッジは外しますよ。というのは、うるさいマスコミは、「すみませんが、バッジは取ってください」という。僕らは「選挙が」始まつたら、バッジはいつも取っていました。

楠 そうですか。でもポスターにはついているような印象がありませんけれど。

海部 それはつけておつた方が重みがつくというか、いいと思つておる人もたくさんおるんだらうな。

楠 参議院の場合は選挙期間中も現職なんですね。だけど衆議院の場合は前職ですね。

海部 解散になると、その職を失うんですが、「余後効の原則」と

いうのが適当な言葉だな。余後にも効力がある。それは、選挙があるまでは使つてもよろしいとみんな理解しておつたし、そういう待遇も受けてきた。だから僕らは、解散になったその日からすぐに、ということはないけれど、考えてみると閣僚のあいだは、秘書官が護衛さんの分と、自分「秘書官自身」の分と、こっち「大臣」の分もたしか買に行つたよな。だから、どの辺からそれがおかしくなつてきたか知らんけれど、途中までは甘えておつたことは間違いないわ。選挙が済んで当選すると、新しいものを持ってきてくれる。だから、解散の日までは議員であつたけれどなんて言つておらずに、次に落選と決まるまではよろしいというふうに、勝手に解釈しておつたのか、そういうふうにみんながしておつてくれたのか。突き詰めて聞けば、解散したら一切の権利は失効するはずですね。

楠 そうですね。議員特権は失効するはずですね。

海部 けれども、議員宿舍もすぐに出て行けとは言わんな。議員会館もすぐに出て行けとは言いませんね。

楠 それは物理的にすぐに出て行けといつても難しいからだらうな、と推測できますが、汽车租赁とか、そういうものは、すぐに打ち切りだつて構わないような気がしますけれどね。

佐道 厳密に言えばそうですね。

楠 でもそうじゃなかった、というお話は面白いですね。

海部 だから、その次までは可能性が残つておる。誰がということはないから、いちおうみんなにそういうふうにして、議員会館も使つてもいい。次のあれ「落選」が決まると、十日以内にお部屋は空けてくださいという通達が議員運営委員会から、落ちた人のところに届くんだな。だからあの頃は、落ちた部屋はかわいそうだったよ。こそそとたくさん荷物をまとめて、出て行かなければならんわけだ。

■八六年同日選挙3（中曾根三選）

佐道 この三〇〇議席という数字なんです、そろそろ中曾根さんの総裁の任期がどうなるのかという議論も起きていた頃なんです、これはどういふふうにお思いになりましたか。ちよつと勝ち過ぎかな、とか。

楠 勝ち過ぎということはないでしょう、いくら勝つても。

海部 うくん。四六七の時代だな。三〇〇あると、衆議院の常任委員長が全部独占できたはずじゃないかな。それで三〇〇ということがいろいろ言われたと思います。三〇〇取れば御の字だ、一党独裁という言葉が悪いが、一党責任政治が衆議院でもできるという議論があつたことは確かですね。

楠 このときの同日選挙は二回目ですね。一回目が大平内閣のときですね。だからかつての同日選挙である程度の実績があつたわけですから、そこそこ行くとは思われていたんじゃないですか。

海部 同日選挙をやれば強くなるとみんな思っておりましたよ。またいまごろ、同日選挙をやつたらどうなんだと、どほどぼ言う人がおる。同日選挙をやるに本当に無駄を省いて、みんなが力を合わせられるという願いもあるわけだな。

楠 今度もなりそうですか。

海部 どうでしょう。小泉さんは常人ではない、変人だから、変則的に考えると――。

楠 ちよつと話が横道に逸れますが、十月と、来年の同日選挙と、先生はどつちだと思えますか。

海部 来年同日選挙をやるなんていうことを、いまから決めている人はまだいないと思う。

楠 いないでしょうけれど、可能性としては、「今」秋の方が多いですか。

海部 こういうときはきちんとして、天網恢々疎にして漏らさずで、踏むべき手続は踏んで、どこから言われてもケチのつけられようがないという、正々堂々たる王者の振る舞いをしなければならぬときには、同日選挙なんていうことを軽々に考えるべきではない。前からそう思っておりました。それから衆議院には衆議院の、参議院には参議院の、それなりの院の使命と決められた任期があるわけだから、それをほかの政治的な思惑で同日だ、なんていうことを言うのは、やっぱり邪道だな。どちらかというところでは、そういつたことを、僕はそう真剣に考えたことはないし、今度もおそらくそういうことにはならないんじゃないかと、甘いかもしれないけれど、思っております。

楠 今回、同日にすると、任期満了ということですね。

海部 来年の六月頃だ。

楠 任期満了というのは結局解散権を行使できなかったということ、解散権を行使できないというのは、そう言つてはなんです、総理大臣として恥になるんじゃないですか。そんなことはないですか。

海部 あれを恥と考えるかどうかは別だわね。

楠 解散権も行使できない弱体な内閣であつたと言われてしまつて、恥だという理解もできますね。

海部 まあ、そういう理解をする人も、中にはいるだろうな。けれども、三木内閣もそうだったんだよ。解散権を行使できなかったんだ。けれどもそれにはいろいろ理由と事情がある。僕がいまでも覚えておるのは、野党第一党の社会党が、「頼むから解散をぶたんでくれ」という。「本音の理由は何だ」と聞いたら、本音の理由は、在任期間十年を数える議員が引退を予定している中に何人かおつたんだな。二桁の数、おつたんだ。

楠 その人たちのためですか。

海部 いや、そのことを考えて、社会党全体は党を挙げて、「どうせ同じじゃないか、どうせみんなここまですが任期だと思つていん

だから、こつちも四年の任期があるんだから、任期いっぱい頑張るのは憲政の常道からいって当たり前のことだ」という。結局あのときは、社会党の、それを最後に辞めていく人、落選した人も、全部救われたわけです。

楠 でも社会党の引退議員のことを考えて解散を打たなかった、というわけではないでしょう。

海部 それは違います。そういうことも理由の一つとしてあったということですよ。そのためにやらなかった、なんていうことは言いませんけれどね。

楠 それはそうですね。どうもありがとうございました。それから、この選挙の圧勝を受けて、中曾根三選か任期延長かという問題が出てきますね。それで結局両議院総会で、総裁任期を一年延長ということになって、第三次中曾根内閣が成立するという流れだったと思います。三選か任期延長か、そのあたりの議論で何かご記憶はありませんか。

海部 あの頃、各派を代表してみんなが出てきているいろいろなことを言った。そして、結局は一年と決まったんだけど、やるならもう一回やらせたらどうだと言ったり、一年ではせつかくのが短すぎるじゃないかとか、というような議論がいろいろあって、その結果、まあまあそのへんだらうという、当時のいわゆる自民党的な「まあまあ政治」で、一年延長しておくのがいいところだらう、ということでも収まったんじゃないかと思えます。そういう議論は各派の実務者が集まって、いろいろなところでやりましたからね。

海部 実務者というのは事務総長のことですか。

楠 事務総長もしくはその指示する者、ということだ。事務総長というのも、どこにも規定がないんだもの。

楠 でもこの当時、事務総長会議というのがあったんじゃないですか。

海部 その当時はね。

楠 各派の事務総長の連絡会議ですね。

■文部大臣以後1（藤尾正行氏に交替）

楠 そして中曾根第三次内閣が成立し、先生は文部大臣を藤尾さんに交代するということになりましたね。この半年間の文部大臣をお務めになった中で、いままで伺ったもの以外で何かご記憶に残っている問題はないでしょうか。

海部 二度目の文部大臣のときは、秘書官は近藤君に変わっておりましたからね。そうすると、特に文部大臣としてやったということは、イギリスの文部省との定例協議ということで一回イギリスに行きましたよ。在任中に。そこで話を聞いたのが、イギリスにおけるAレベルといったか、Eレベルといったか、大学入学試験のための制度です。それを勉強したといえれば勉強した。それからもう一つは、イギリスは日本と違って、学習指導要領というものが無い国である。では誰が基準を決めるのか。相対的に学力低下は心配ないのかということを議論し、勉強したことを覚えていきます。

楠 それで文部大臣を藤尾さんに交替されたということですが、先生の立場からすると、藤尾さんというのはだいぶ右寄りの感じがします。そこには何か意味があったんですか。先生が文相在任中に教科書問題があつて、そのあとで藤尾さんが出てくるというのも何か意味があるのかなと勘ぐってしまうような人事ですが。

海部 中曾根さんの発想からいったら、あつたとは言えないよな。ああいうやり方は、中曾根さんとは人ではなかったから。藤尾さんというのは非常に特異な考え方の人もあつた。みんながいろいろ陳情に行っても、「もうちよつとお静かに願います」なんて。

楠 実際に藤尾さんが文部大臣に就任されて、日韓併合の問題に関する発言をして、それで罷免されてしまうという流れになるわけですね。日中、日韓の関係がまだややこしいときに、どうしてこういう硬派、タカ派の人を文相に据えたのか、いまになってみると非常

に疑問に思えるんですが、そのあたりはいかがですか。

海部 そのあたりはむしろ任命権者に聞いてもらわないと。こちらが推薦したわけでもないし、部会や調査会に出て来てても、いつもあの人はふんぞり返って威張っているだけだ。

楠 「なんだ、この人事は」と、先生はお思いにならなかったですか。

海部 どうしてこういう人を選んだのか、やっぱり――。

楠 そのとき思われましたか。

海部 いや、それは僕だけじゃない、みんながそう思ったんだよな。あのあとで、みんなが、「えらい人が文部大臣になった。これは一波乱あるんじゃないか」と言っておったのが、ちょうどなっちゃった。それでみんなが、「これはいま一番大きな問題だから、お辞めになったら」「いや、辞めないよ、おれは」と――。

楠 もしかして、こういうときだからこそ、藤尾さんご自身が自薦運動でも展開して文部大臣になったということはないんですか。

海部 そんなことはないと思うけれど。有名な話は、福田さんの家には、いつもランの花を持って日参したということが新聞にも載せられた。笑い話だけれど。何か自薦運動をしたことは間違いないだろうけれど。

楠 それはこのときの話ですか。

海部 うん。けれどもこのときは、彼もだいぶ辞めさせたかった。

「藤尾さん、もうちよつとあれしてやったらどうですか」、みんな西岡でも藤波でも言いに行つたことがあるんだ。僕らも呼んで話したこともある。「こんなところで藤尾さん、責任をとって辞める必要ないよ」とみんなが言つても、「おまえらにはそんなことはわからんよ。だから言つてこい、クビにしる」。

楠 その日韓併合の問題ですね。

海部 その問題ですね。

■文部大臣以後2（教育改革基本問題調査会長）

楠 次に移らせていただきますが、中学の登校拒否とか、高校の中途退学者が非常に多くなつてしまつた。教育の危機が言われるような時期だったんですが、こうした教育の危機と言われる事態に対して、文部省、あるいは先生はどのようなようにお考えになつていたか、ということなんですが。特にご記憶がなければ、次の問題に移らせていただきます。

海部 僕は一般論でいつて、そういうことが起こるたびに、それは日本中で本当にみんなが等しく考えて、どんな地域でも起こつていく問題ではなくて、一地域だけに偏つた問題なら、原因はそこにあるのではないかと、一地域だけに捉えませんでしたからね。だから――。

佐道 登校拒否が増えたり、先ほどのいじめの問題があつたり、教育現場自体もいろいろ問題もあるということが言われていた頃だと思ひます。先生が最初に文部大臣になられたときには、重要な柱をいくつか立てられた。例えば日教組の問題にどう対応するかということ、いろいろ努力をされておられたわけですが、そのあと自民党自体も左の方にウイングを広げようといろいろなことをされてきているんですが、この二度目の文部大臣のときに、日教組の問題などは、第一回目のときに比べてどういふ感じになつていったのか、何かご印象がございますか。

海部 日教組に所属する職員がサボタージュをしたりして、昇級延伸という処置を、日本中でよく食つたんですね。そういうときに一番面白かつたのは、社会党の文教関係の政治家の子供がそういうことに引つかかる例が多い。それですぐにわれわれのところは泣きついてきて、「ほどほどのところにしておいてくれや」というような陳情にも来た。当時、鉛筆法案の代表的な鉛であつたけれど、現場教職員の海外研修というのがあつたんだ。しかしそういう処罰を受

けた者は海外研修には参加させない、それが鞭だったんだな。ところが各学校に帰っていくと年功序列で、そこまでいっても年功序列だ。「もう何年経ったし、順番だし、今度いよいよ行けるところまで来ているのに、あんなことで駄目になっちゃった。なんとかしてよ」という父親としての立場からの陳情や要請があったことも事実ですよ。そういうときには「いっぺん呼んで、教育庁あたりからきちんと注意して、もう二度と再びやらんという一筆でもとつたら、そういう制度があるんだから、出してもいいですよ」と言つて、現にあの人、この人と名指しできる人が、親としての立場で、よくやってくれということがありましたね。

そういうことは、やっぱり教育の現場でやる気を出してやつてもらわんと、よくない。やる気を出してやるためには、処罰だけがいわけではない。だから両方をかけて行けということで、この頃はいろいろ話をしましたよ。

楠 ちよつと話が抽象的なので、次に進ませていただきます。文部大臣を退任なさったあとの役職はどんなポストになったんですか。

海部 文部大臣を辞めたあとは、僕は文教制度調査会長というのもあることながら、教育改革に関する基本問題調査会長というのがあったはずなんだ。それで中曽根さんがいろいろ言つておつた教育改革について、試験制度もからめて考えなければならぬかな、ということも議論していこうと。ちよつといまの教育問題検討会議みたいな形だ。しかし集まつているいろいろ議論しても、ああ言えばこう、こう言えばこうで、こと教育問題についてはみんなそれぞれの経験も理解もあるので、なかなか一本にきちんとまとまつて、こうだ、というところには落ち着きかねたんですね。

楠 その教育改革についての基本調査会長のほかには何かお引き受けになつていたんですか。もう二回目の閣僚のあとですから、常任委員長ということはないですね。

海部 ありません。

楠 そうすると、あとは何でしょう。

海部 だから何々会長というような役職は、その後あまり就いておらんはずですよ。

佐道 先生のホームページを拝見しても、文部大臣のあとは総裁まで飛んでいて、「自民党史」も、ちよつと中曽根内閣のこのころで記録が終わっているものですから、ちよつと追えなかつたんですね。楠 先生の手がかりがないんですね。それは秘書の方に聞いたらわかりますね。

海部 ちよつとロシアでゴルバチョフ政権が誕生する頃ですね。それでプラザ合意が行なわれて、「前川レポート」を発表して、国鉄が分割民営化される。そして竹下内閣ができる、というふうが続いていくわけでしょう。そして消費税の問題が生臭くなつてくるということですね。そんな頃は、あまりいろいろなことには出て行かずに――。

楠 通常だと、閣僚を二回やつたら、そのあとは経済閣僚かあるいは党三役か、そのぐらいですね。少しあいだが空くんですかね。竹下、宇野、そして海部ですね。竹下内閣とか宇野内閣のときは何をやっていたか、ご記憶はないですか。つまり総理大臣になるまでの主要な役職は何かご記憶はないですか。文部大臣から総理大臣までのあいだですね。

佐道 二年ぐらいのあいだですね。

楠 竹下内閣あたりだと、先生は竹下さんから重用されたんじゃないですか。

海部 いろいろ話を聞かされましたけれどね。竹下内閣のときというのは、いまから考えてみると不思議なくらい、何もやらなかつたね。宇野のときもそうだね。

佐道 宇野さんも短かったですからね。比較的自由な立場から、いろいろの問題をごらんになつて発言されていたりしたわけですね。

海部 そういうことですね。だから会っていましたよ、このころも「何時にどこ」といって、いつも集まる場所で集まつて、飯を食つたり話したり。連絡に来るのは、小淵が来たり――。

楠 職務に戻っていたんですね。

海部 もちろん職務ですよ。そして——。そうだ、消費税問題が出てくるときだね。

■新自由クラブ解党と田川誠一

楠 経歴のことはまた秘書の方にでも伺って確認するとして、次に新自由クラブの解党という出来事がありました。田川誠一さんを除く六人は自民党に戻る。しかし田川さんのみ自民党に戻らなかったということですが、そのへんの経緯について何かご存知ですか。

海部 田川さんはすでにあのときに、一人一党をつくっておつたですよ。そして、改進黨といったかな、当世流行の個人献金制度を採り入れて、「こんなに集まった」とかなんとかいって、自信を持っていたことを思い出しますね。

楠 先生は田川さんとは個人的にはご関係は親しいですか。あまり関係がないですか。

海部 いや、ないと言えませんが、あると言えればある。田川とは同期当選、昭和三十五年の当選です。だから政務次官とか委員長をやった時期はみんな同じさ。それから田川誠一という人は不思議な縁で、三木先生がいくらか買っておつた点もあつて、「田川は何をしとるかな」なんて聞いたこともあつたので、よく田川のところに行つた。

彼は社会労働委員会の仕事をよくやっておつたので、あそこに行つて、「ハマコーが暴れるからなんとかしてくれんか」と言われたときなんかには、田川と中に入つて話しました。いつかも話したと思うが、ハマコーが激昂して、「あんなのはお国のためにならん、私が刺します」という。「刺しますとはなんだ」と言つたら、浜田幸一が「日本のためにならんとするから、あの委員長を刺します」と言つたから、「そんなこと、いかんよ」と言つて、いろいろなだめ

たり、すかしたりしながら。そんな関係やそんな出入りで、友達づきあいがありました。

楠 田川さんは松村謙三さんの秘書でしたね。松村さんといえば、三木さんと一時期政治行動を一緒にされていましたね。ということでは、田川さんと先生は同根というか、ルーツは同じなんですね。

海部 まあ、そう言われてもしようがないな。

楠 じゃあ、国会に出る前から、何かお知り合いでしたか。

海部 ちよいちよい顔を合わせたことがありました。例えば三木さんの家に夜行つたときに。田川も将来はやるんだということに、心を決めておつたんでしょうね。

佐道 新自由クラブということで、自民党を離れられてからはどうなんでしょう。田川さん個人と先生とは。

海部 田川個人とは、西岡とほど親しくつき合っていますから。新自由クラブの田川になつてからは、つき合いは鈍くなりましたね。

佐道 やはり西岡さんが中心ですか。

海部 新自由クラブの連中の中では、西岡君が一番中心だったな。

楠 それは文教関係、文教族ということですか。

海部 文教族ということもあるかもしれないが、それ以外にも、いろいろな関係があつた。西岡と僕と小淵恵三とは早稲田の関係で仲が良かったから。ちょうどこの部屋「TBRの海部事務所」のここで、毎週水曜日のお昼には、一緒にカレーライスを食つて議論しようとする。そんな難しい天下国家の議論はしなかつたけれど、ときどきいろいろな情報交換をやつた。そういうときに脱線すると、「今度オリエンタル特急に乗りに行こう」と言い出すのは小淵恵三だ。そういう会に何度誘つても一度もついて来なかつたのは、西岡武夫だ。それでもみんな仲良くやつておつた。非常に不思議な友情があつたんです。

楠 西岡、小淵、海部のお三方ですか。

海部 そう。だから、「ハワイの」マウナケアの山頂に望遠鏡を置

く天文台を作るときも、当時僕は総理総裁の座を降りたあとだったけれど、小淵と一緒にオープニングセレモニーに行った。それからスペインのオリンピックピックのときも小淵と一緒に行ったよ。

佐道 バルセロナですね。

海部 バルセロナだ。暑い日、暑いときだった。不思議なことに、西岡とは一回もそういう旅行はしていないんだな。ここで何回誘っても、なんののかんのと理由があつて来られなかったけれど、小淵とはいつも一緒に行った。向こうから誘われたこともあつた、「海部さん、今度はここに行かんか」といつて。

楠 国会議員を二十年、三十年とされていると、人間関係はかなり濃密になつてくるんじゃないですか。

海部 そうです。

楠 国会議員といつても数が限られているし、それだけ長いキャリアを持つている代議士は少ないわけですから、非常に濃密な人間関係がそのあいだに形成されるわけですね。だけど外から見ると、そういうことはよくわからないですね。

海部 それはまったくわからんだろうと思いますよ。

楠 誰と誰が仲良しで、ということを知らないと、政治の動きは掴めない、把握できないですね。面白いお話でした。

■藤尾正文文相罷免（一九八六年九月）

楠 最後に、先ほどもちよつと触れられた藤尾文部大臣の辞任の問題ですが、辞任を拒否して罷免されるわけですね。その経緯をちよつと伺いたいと思いますが。

海部 率直に言うと、非常にかたくなな人だな。何も辞めてしまう必要はないではないか、だからこうこうこうだと言つた。中曽根総理自身も、そんなところで文部大臣を替えようとはあのととき思つていなかったと思うんだ。だから然るべく藤尾さんが頭を下げれば、

続けてよろしいと。それはそうでしょう。当時は藤波が中に入つて、一所懸命言つてきてくれたんだ。西岡も「こんなところでやったら、何もあれではないか」と言つただけけれど、藤尾は「これが俺の生き様だから、わかつてくれ」と。

佐道 生き様ですか。

海部 「だいたいこんな文部大臣ぐらいでどうの言うのは間違つておるよ」「と藤尾氏は思つていた」。

楠 閣僚が罷免になるということは戦後の歴史の中であまりないですよ。かつて片山内閣だか芦田内閣のときだか、当時の農林大臣がなつたとか、その程度ですね。

海部 彼は、率直に言うの間違ふかもしれないが、「俺を軽んじたな、文部大臣をやってくれとは何事であるか、俺は大蔵大臣か外務大臣をやる器だ」という思いがあつたんじゃないかな。だからこういう問題を論じるときでもあつたんじゃないかな。だからこういうときに、この人は何か不満があるんだな、ということを感じた。だからみんなが、「総裁、総裁」と呼んでやると喜んで、「はい、はい」と返事をおつた。

楠 「総裁」というのがニックネームなんですか。

海部 おう。「逆せむし」というのが悪い方のニックネームだな。こうやつて反つくり返つていふから「胸を反り返す」。

楠 「逆せむし」と「総裁」ですか！

佐道 これはもうほとんど確信犯としてなさつたんですね。

海部 もう確信犯でしょうね。そして、確信犯はいいけれど、「時機^{とき}至りなば雲呼びて／天翔けゆかん蚊竜の／地に潜むにも似たるかな」という歌もあるけれど、いつか何かあつたら、「こんなポストは屁でもない、見損なうな」というところがいくらかあつたんじゃないの。

楠 何かそれは藤尾さんなりの、韓国なんかに対するメッセージという気持ちはあつたんでしょうか。

海部 どうでしょうか。それは残念ながら聞いていないし、彼も口

の端に乗せなかつたけれど。僕の見た観察では、たぶんそうだと思うな。

楠 先生、ここだけの話ということで伺いたいと思いますが、私は「日韓併合には韓国も若干の責任」という藤尾さんの発言は、別に間違っていないと思うんですが、先生はいかがお考えですか。政治家の立場でいうとんでもないことになってしまふわけですが、政治家の立場を離れるとかがでしよう。場合によっては削除して結構なんですが、いかがですか。

海部 まあ、いろいろ解釈の仕方はあるだろうな。

楠 そうですか。私は歴史を研究する人間の端くれですけど、これは、なんでいけないのだろうかとときどき思いますけれどね。実際に最近では、韓国人の立場からこれを言う人も出てきたぐらいですけどね。これ以上は敢えて伺いません。

海部 いや、僕はそんな深く知識を持っていないから、これについてもものを言うあれがありません。

佐道 これは事実上は、辞任を拒否されて罷免、という形になったわけですが、藤波さんとかいろいろな方があいだに入つてまとめようとされたのは、どういう収束をしようとしたんでしょう。辞めないと終わらない問題ではなかったか、という気もするんですが。

海部 それは藤尾君がそういう気持ちになつてから。

佐道 罷免ではなく、辞任で辞めなさいと説得しようということですか。

海部 傷がつくし。そうしたら、「罷免でいいんだよ」と言う。

楠 それは罷免された方には傷がつくでしょうけれど、罷免した方はどうなんですか。罷免することによって、かえつて内閣の強さを示すことになるのか、それとも内閣自体も傷がつくのか。

海部 それは取るほうの取り方によりけりだな。最初にこういう人を任命したことが間違いであったと。

楠 それを確認することになつてしましますね。

佐道 その任命責任ということをよく聞くんですが、この当時は

どうなんでしょう。それがそんなに議論されていたでしょうか。

海部 むしろこの当時は、藤尾さんに、「そう短気を起こさずに」というような、まあまあという声が多かった。要するに自民党的な解決というか、「頭を下げるときは頭を下げて、まあまあということとで続けたらどうだ。その方が君のためにもなる」というような意見の方が多かったと思うね。それはあのころ思いを一緒にしておつた長谷川峻さんとか原田憲さんとか、ああいう人たちも、「こんなところでいきなりケツまくつて辞めちゃうという手はないだろう」ということだったと思うな。しかもその人たちに言わせれば、「こうなることは、お見通しだったろう」と。

■文部大臣以後3（やるなら通産大臣）

楠 だからそれだけに、第三次中曾根内閣で藤尾さんが先生のあとに文部大臣になつたということがよくわからないんですね。なんでこういう人事が起きたのか。これは先生が継続という話はなかったんですか。

海部 なかったです。継続という話があつても、それは「充分やらせていただきましたから、ありがとうございました」ということでしょう。

楠 充分といつても半年ですね。

海部 半年でも、それは二度目だもの。省内のあれも全部知つておるし、政策の動きも、今後どうなるということも全部わかつておるので、やるべきことはやつたと。僕は文教だけで終わつてはちよつと狭いから、もうちよつと広くやりたいという、こちらにもちよつとした思いがあつた。

楠 文部大臣の次は、先生は何をお考えでしたか。

海部 いや、何も考えていない。

楠 いや、次にやるとしたら、こういうのをやりたいな、というの

は。

海部 それは通産大臣だよ。それは通産大臣をやってみたいなと思
っていた。

楠 大蔵ではなくて。

海部 大蔵ではなくて。

楠 それはまた、どうしてですか。

海部 非常に現実的な答えになるけれど、当時、中小企業問題は今日とはまた違った意味で問題があったじゃないですか。そしてまた、中小企業団体の代表である繊維の全国の理事長が僕の後援会長を引き受けて、一所懸命苦勞をともにした。ということ等もあって、会うたびにいろいろな泣き言も聞くし、また選挙区の実情を見ると、そういう人がまことに多い。これをなんとか救わなければならぬだろうと思つて、僕は最初に輸入促進税制という制度をやつたよね、日本で。その輸入促進税制では、単年度で対前年と比べて一五%ぐらい輸入を増加したところは表彰されるんだ。その表彰の時に、変な話だけれど、賞状一枚だ。賞状一枚ということはいかんじやないかといつて通産省に話して、バッジをつくつたんだ。バッジをつけて、家に行くとき表彰状がかかつているんだ。そういうことが当時の繊維の下積みで頑張つておる中小企業の経営者には、たいへんな誇りであつた。そういう人と一緒に住み、一緒に暮らして成長してきたので、これらの人々に一回報いなければいかな、みんな一所懸命やつているじやないかと思つた。

そして当時労働基準局は、そういう工場に乗り込んで来て、おまへのところは三六協定違反だといつて逮捕した。三六協定というのは例の八時間労働のときさ。八時間労働以上でやりたい人は、第三六条に基づく協定を労使間できちんと結んで、ということがあつたけれど、まあ納期が決められておつて、いついつまでに納めなければならんと言われれば、そんな三六協定を結んで届け出をしてというよりも、よしわかつたということであの頃はやつておつたからね。だから、そういうことで泣きつかれる地元の下請業者たちの声とい

うのは大事にしてあげなければいかな、というのが、僕の政治家になつたときの原点でもあつたわけだから、どんな時代になつてもその方面のことは考えておつた。

それがいま、みんなさっぱり火が消えたようなことになつちやつた。だからいま、アラミド繊維というのを知っていますか。アラミド繊維を試作させて、「それができるならば、これをみんなやれ。これが地元の繊維産業の復興にもつながるんだぞ」ということをこのあいだうち、地方選挙があつたときに話してあげて、「みんなも協力しなさいよ」と言つただけれど、なかなかどう転んでいくかわかりませんけれどね。これまでは日本を支えた中小企業が力をつけることがいいことなんじやないか、と思つてんです。

楠 わかりました。その通産大臣を通り越して、一気に総理大臣まで行つちやつたわけですね（笑い）。

海部 本当に通産大臣にいつペンなつてみたいなという気持ちがあつたから、二度目の文部大臣の時には、俺は文部大臣はもう充分やらせてもらったから、一つ通産大臣にでもしてもらえませんかといつて――。

楠 じゃあ官澤さんのように、これから通産大臣というのはいかがですか（笑い）。いや、ありがとうございます。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 24 回

竹下・宇野内閣時代（1986～1989）

【2003年9月17日（水）14:00～16:10】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2003年9月17日)

1. 中曽根首相は86年7月の選挙前、大型間接税はやらないと言明していましたが、選挙後はこの問題が急激に浮上しました。12月には山中自民党税調会長が「間接税は選挙公約違反で総理がうそをついた」と発言して紛糾したほか、同税調が「売上税」88年1月導入などを主張した税制改正大綱を決定し(12月23日)、政府税調もほぼ同内容の答申を発表するなど、売上税導入の動きが高まってきました。これに対して先生は当時どのようにお考えになっていたのでしょうか。
2. 87年になると、売上税はかなり大きな政治問題化し、中曽根首相の公約違反が批判される事態となってきました。3月には参議院岩手補欠選挙で、売上税を争点に社会党が圧勝するなど、前年の同日選挙の大勝から事態は一転して自民党に逆風になってきました。当時の状況について先生はどのようにご覧になっていましたか。また、どのような活動をされていたのでしょうか。
3. 2月に政府が提出した売上税法案は、党内からも反発をうけ、結局5月27日に廃案になりました。これは中曽根首相へのダメージはかなり大きかったと思われませんかですか。
4. 10月、中曽根総裁の任期終了に伴い、後継総裁が選出されることとなります。竹下、安倍、宮沢の三候補が立ち、中曽根総裁に調整一任となって最終的に竹下氏が選ばれます(10月20日)。一連のこの経緯についてお願いします。
5. 11月20日、全日本民間労組連合会(連合)が結成されます。戦後の労働運動の歴史から見ると大きな転換点となったと思いますが、連合の成立についてはどのようにご覧になっていましたか。
6. 88年6月、自民党税調は「税制抜本改革大綱」を決定します。これは所得税減税、住民税・法人税減税を行う一方、その財源として一般消費税を導入しようというものです。中曽根内閣で躓いた間接税の導入ですが、先生はどのように見ておられたのでしょうか。
7. 7月5日、リクルートコスモスの未公開株譲渡問題で、中曽根前首相、宮沢蔵相、安倍幹事長の秘書が関与していると判明しました。その後問題は拡大し、竹下首相自身にも及びます。拡大していくリクルート事件問題について、先生はどのようにご覧になっていたのでしょうか。政権を揺るがす事件に発展すると思われましたか。
8. 11月14日、三木武夫元首相が死去されます。リクルート事件が大きな問題になっている最中の死去ですが、政治の師としての三木元首相の死去はかなり大きな精神的ショックではないかと思いますが、いかがでしたか。また、三木派内の様子はいかがだったのでしょうか。
9. 89年1月、昭和天皇が崩御されました。昭和から平成へと変わったわけですが、天皇崩御についてはどのようにお感じでしたか。
10. 89年に入ると、リクルート問題は自民党をきわめて厳しい状況に追い込みます。竹下内閣支持率は一けた台となり、福岡の参議院補選(2月12日)では19万票の大差

で社会党に敗れました。4月には竹下首相が予算成立後の辞任を表明し、翌日には青木伊平秘書自殺します。自民党は大変な危機に陥ったわけですが、先生はこの事態にどのように対応すべきだと考えておられたのでしょうか。

- 1 1. 6月2日、竹下内閣は総辞職し、宇野宗佑内閣が成立します。なぜ宇野氏だったのでしょうか。党内的に宇野氏の首相就任はどのように見られていたのでしょうか。
- 1 2. 宇野氏も女性問題が影響し、結局参議院選挙での敗北の責任をとって辞任します(7月24日)。その結果、先生がいよいよ内閣を組織されることになるわけですが、その間の一連の経緯についてお願いします。

※今回は以上のような質問についてお願いします。

■現在の政局から（自民党総裁前哨戦と解散総選挙）

伊藤 相変わらずお忙しい状態でございますか。

海部 相変わらず雑用が入ってきます。

伊藤 そうですか。来月はちよつと難しくなりますね。十月ですかね。

海部 十月、国会を開いて、法案が通るか通らんかの最後の詰めをやるわけですな。

伊藤 でも、もう解散の空気でしょう。

海部 解散はしますよ。だって、解散しなかつたって任期がくるんですから、来年には。

伊藤 そうじゃなくて、十月解散という話でしょう。そうなりそうなんです。

海部 そうですよ。

伊藤 やつぱり「自民党総裁選で」小泉再選で、解散ですか。

海部 諦めちゃつたんだ、みんな。

伊藤 諦めた感じですか。

海部 諦めちゃつたんですよ。それで、しょうがないということになつて――。

伊藤 じゃあ雪崩をうつたわけですか。

海部 雪崩をうつた。そのきっかけになつたのは、自民党側の対立候補がみんな弱過ぎるからだ。

伊藤 亀井「静香」でも「弱過ぎですか」。

海部 亀井のあの顔と、今日までやってきたことでは、みんなが燃えるような後継者としては盛り上がつてこないわ。だから僕は高村

「正彦」なんかがもうちよつと伸びてこないかなと思つたが、意外と伸びなかつたですね。

伊藤 いま、世論調査か何かやると、高村さんは一番下ですね。

海部 そう、藤井「孝男」と並んで。

伊藤 ちよつと線が細い感じがしますね。

海部 そこにもつてきて、ちよいちよい新聞が本人の評価についていろいろなことを書くでしょう。われわれから見ると、つまらんことを意地悪く書かれるから、「おまえ、この新聞は何か恨みがあるのか、喧嘩でもやったことがあるのか」といったら、「別にそんなことはしていませんが」という。もつて回つたような言い方をするところが反発を買うのかな。ずばつと正面から言わずに、ひねつて言うでしょう。ものはもつとわかりやすく、スパツと言つた方がいいんじゃないのか。そういうことでは評価があつて、いい話が僕のところに来るんだけど、ああいうふうにならな。

伊藤 でも投票するのは自民党員ですからね。自民党の中で雪崩が起つたら、もうどうしようもないですね。前に僕が『テレビタックル』を見ていたら、福岡「政行」という行政学者（佐道 政治学者、選挙分析です）が、「一〇〇%小泉再選はない」と言つていました。

海部 あの人はときどきああいう変わったことを言う癖（へき）があるんだな。

伊藤 それで、このあいだの『テレビタックル』でさんざんいじめられて、「いまはどう思つていますか」と聞かれて、「小泉再選一〇〇%です」と言つていました（笑い）。

海部 そういうふうなことをいうけれど、単純に数字の計算を現象面的にやると、日頃からまともに小泉を替へなくてはいかんと言つている人や、小泉政策に批判を言つている人がみんな集まると、それは交替ですよ。それじゃあ誰がそれを束ねるかと言つたら、残念ながら束ね役がいなかつた、ということでしょう。伊藤 そういうことですかね。

海部 僕はそう見ますね。そういうときには、僕は身びいきかもしれないが、高村君は一つのタマでもあると思つたし、持つて行き方に

よつては風も起きるのではないかと思つたけれど、あそこまでいろいろなことを新聞がひねくつて書いてはいけないわ。

伊藤 基礎票が十九だからな。

海部 いや、基礎票なんか関係ないですよ、いまの世の中では。

伊藤 推薦人が間に合うかどうか、という話でしょう。

海部 推薦人は頭を下げて、よそから借りてきたわけだけれど、ところが最大派閥があつていたらくで、半分は違ふわけでしょう。

伊藤 海部さんがかつての経世会を見ていたときは、本当に難攻不落のお城みたいな感じだったでしょう。

海部 経世会は、「数は力だ、力は金だ」とズバツと言って、金丸

・竹下流の攻め方で押してきますからね。やっぱり経世会が二つに割れて候補も出せんというところは、青天の霹靂であるし、また領袖

の跡を継いだ橋本の威令行なわれず――。

伊藤 あれはシャツポだから、オーナーじゃないじゃないですか。

海部 オーナーじゃないから駄目なんだろうな。

伊藤 おそらく海部先生が総理のときだつて、あそこ「竹下派」に推されてなるわけでしょう。

海部 そう。

伊藤 だから、あれに逆らうなんていうことはできない(笑い)。

海部 それは竹下とあれ「金丸」がみんな押さえていてくれた。

伊藤 だから隔世の感だと思えますね。

海部 本当に全然違います。

伊藤 いまあれ「橋本派」はバラバラの感じですね。

海部 バラバラであるし、身内の野中「広務」の行動を誰も押さえることができない。下手に押さえに行つたら、返り討ちを食つちやうし。

伊藤 あれ「↓野中氏」はいろいろなことを言いますが、このつき

立候補しないということは敗北宣言でしょう。

海部 敗北宣言です。けれどもわれわれに言わせれば、彼がこの次

はやらんということは前からわかつていたんだから。

伊藤 ああ、そうですか。

海部 選挙区の事情やら、いろいろなことだね。

伊藤 決意表明でも何でもないわけだな。

海部 そう。だからいいところでエクスキューズをつくつて因縁をつけたな、と思ひましたね。

伊藤 新聞の読み方と、比較的知つておられる方の解釈はまるで違ふんですね。

海部 だから別に驚きはなかつたですよ。ただ、いい材料で、転んでもただでは起きないという話があるでしょう。だから彼にしてみれば、いいお膳立てができたなと「思った」。

伊藤 ただ静かに消えていくというのは違ふということですね。

海部 ただ辞めるというのではなくて、こうこうだから辞めるという。しかも、こういう気に食わんやつがおる、とか。

伊藤 何か名前を挙げてやりましたからね。

海部 それはあの人のお人柄だな。

伊藤 前からあの人はそのうなんでしょう。人を名指しでやる。海部

先生はそういうことはおやりにならないですね。

海部 やらないし、やれないわ。おれにやられても、みんなそう怖がらんしな。

佐道 だけど強烈ですね。名指しであそこまで徹底的に批判するといふのは、同じ仲間なのに。

海部 腹を決めているからやるんだらうけれど、あそこまで言うからね。まあ、敵もできますよ。

伊藤 そうですよ。それにシラケるんですよ。いままであの二人

「野中氏と青木氏」でやっていたのは何、ということになりますからね。

■売上税法案の廃案

伊藤 それでは本題に入ります。この前のお話では、中曽根内閣の文部大臣をおやりになって、途中で文部大臣を替わられます。それから党の文教関係、議会の文教関係のお仕事をやっていて、特に目立った役職は、そのあとしばらく、総理になるまではないということですね。ということがこの前のお話でした。

そして中曽根内閣は、一九八六（昭和六十一）年に総選挙をやつて勝ちます。それで「中曽根総裁の任期が」一年延長になるわけですね。その選挙のときに「中曽根氏は」大型間接税はやらない、と言ったわけです。だけどやらざるを得ない事態になってくる。これは中曽根さんが図っていたのかどうかちよつとわかりません。そのへんの事情はわれわれもよくわかりませんが、党内の意見でやらざるを得なくなったのか。もともと何か表現してましたね。

海部 「縦横十文字にやるような大型間接税はやらない」と言った。あれは言つちや悪いけれど、竹下が一流の悪知恵で授けたんだと僕は思っています。

伊藤 じゃあ、縦横十文字に縛るようなものでなければ、いいと。

海部 そう。ここが縛つてないだろう、ここに抜け道があるだろう、だから縦横十文字に縛つた大型間接税ではないんだよ、と言えろということだ。あの頃は、僕もあの委員会の筆頭理事か何かだったな。

伊藤 あの委員会というのは何ですか。

海部 大型間接税をやるとき、竹下が出て来て、金丸さんが委員長になって――。

伊藤 それは議会の話ですか。

海部 議会、国会の話です。金丸委員会です。金丸さんが「各派のあれを集めてくれ」と言うので、「集めてくれて、あんたが集めればいいじゃないか。おれが集まると言っても来ないやつがおるよ」と言つたら、「どんなやつが来ないんだ。それじゃあおれが来ないやつだけ呼ぶわ」と金丸さんが言う。「どんなところを呼んだらいい」と言つたから、こちらが言つたら、安倍派は三塚でしたし、田中派は竹下本人というわけにはいかんだろうから、小淵恵三が来

たかな。それから中曽根派は藤波孝生が来た。

伊藤 じゃあかなり大物が集まっているじゃないですか。

海部 議運、国対の関係で、金丸幹事長のときに、各派代表の副幹事長ですからね。党内の話をして、気心もわかつておるから、それじゃあやろうと「いうことになった」。

伊藤 そういう人を集めたわけですね。

海部 金丸さんというのは、そういう人をみんな集めるわけだ。けれども、これは後日の話になります。どうしても藤波を入れてくれと言われて藤波を入れたら、ああいうことになるわけでしょう。だから本当は、リクルートの問題で藤波を使つてはいけなかったんですね。

伊藤 結局それで、「中曽根さんは売上税はやらないと言つたのに、なんだ」という問題になってくるわけですね。それでいろいろあつて、一つは、次の年の三月に岩手の参議院補選でボロ負けするわけですね。

海部 しかもあのおばさまにね。名前を言うつと失礼だから名前は言いませんが。

伊藤 社会党ですね。

海部 そうですよ。

伊藤 あそこで社会党に負けたんですからね。

海部 しかも演説もろくろくできん人ですよ。驚いた。

伊藤 それぐらい名指ししても大丈夫だと思ひますが（笑い）。

海部 だから国民の憤りというか、嘘つきという憤りというか、それらが渾然と混ざつたんだね。あんな惨めな負け方をしたということとは。

伊藤 この問題について、売上税は必要だ、これなしには財政の問題はもたない、ということとは先生もお考えだったわけですか。

海部 考えていました。われわれはその頃は、理論武装をさせられたんです。毎日毎晩のように集まつて、どうして必要か、財政の現状からいつこれぐらい基盤はある、お金はこれだけしかない、だ

からやるのはこれだ、ということでした。いまの消費税議論も似たようなものですね。売上税が一番幅広くみんなからもらえる。景気がいい悪いに関係なく税収を確保しなければならので、そこは広く薄く「徴収する」。そしてその先のことはあまり言わんが、そのうちに「税率を」上げればいいからな、というのが裏の声というか、竹下のリードだ。竹下さんが国対の筆頭副委員長か何かだ。この委員会は奇しくも早稲田大学がほとんどですからね。慶應大学は誰も入っていないんだ。「入れると斜に構えて動かないから、あいつらは駄目だ」といつて。

佐道 いま慶應はずいぶん勢力がありますけれど、このときは——。

海部 いまは慶應ばかりですが、あのときは早稲田ばかりですよ。

伊藤 そうですか、だいぶ違うんだ。

海部 「さあ」と言えば、みんなすぐ「ほれ助ける」ということで、藤波の問題のときでもみんなで助けた。助けてもらえなかったのは宮澤「喜一」さんだな。

伊藤 でもそれだけ評判が悪くなって、選挙で負けたのは間違いないその問題ですね。

海部 そうです。

伊藤 じゃあやつぱり売上税はやめなければしょうがない、ということになってくるわけですか。

海部 それは金丸さんが早くから言っていたもの、「駄目になったらそんなものはいっぺん引つ込めて、おれが泥をかぶってやるからそれでやり直せ」と。だから、いつ引つ込めてもいいんだな「と思つたし」、また引つ込めなければちよつと選挙にならない「と思つた」。だから僕はあの最中にNHKの国会討論会に出るときに、「『いま出して審議しているんだから反対とは言わないけれど、こ

ういうわけだから通らんこともあるかもしれん。通らなくても仕方がない。国民のみなさんのご理解を得るためには、こちらもいろいろ努力をしなければならん』と言つてぶつてきますよ、少々迷惑がかかるかもしれない」「と金丸さんに言った」。

伊藤 それで金丸さんも、「まあそれでいいや」ということですか。

海部 「おお、いいや。何を言われても飲んじまえ、みんなそんなのは。骨格だけ、名前だけ残すようにすればいいけれど、なかなかそれも難しそうだな」ということだった。

伊藤 結局これは廃案になつてしまふわけですね。継続審議はできない。

海部 できない。「けれど、この次の次はやるんだよ、ということぐらいいはきちんとつないでおけ」ということだ。そのために、言いにくい話ですが、あの当時、野党の社会党やら、まだ民社党といつておつたところから出て来ておる理事のみなさんにも話して、「これはしかし、諦めたら日本の財政が駄目になる。今日のところは岩手でもああいうことになつてくるし、いま国会内もいかん。今回は兵を退くけれど、これは局地戦だと思つてくれるな。もう一回態勢を立て直してやつてくるし、やり直すから。だから抜き差しできないようなことまで行つては、国のためにならんぞ」ということで最終的には合意して、それからどうやってたんでいくかという收拾を考えた、という覚えがあります。

伊藤 逆に言えば、社会党や野党の側も、これはいずれ、ある程度しようがないんだな、という感じは持つていたんでしょうか。

海部 それは本音の話をきちんとすれば、「そういうときに君のところはどうするんだ、何でやるんだ」といつて、材料を細かく出していろいろ議論したら、「それならそれで、もつと上品にやれ」とかいふ。

伊藤 「社会党が政権を取つた場合、どうするおつもりですか？」と聞いて、「いや、政権を取るつもりなどさらさらありません」なんて言われたらおしまいですね（笑い）。

海部 そんなことは言えんだろうからね。だから最近でもそうでしょう。その社会党の尾っぽを引きずつておるから、これは今日の議題には関係ないけれど、われわれが驚いておるのは、民主党の中核になつておる旧社会党が税金から社会保障のあれは全部出すんだと

いうことを言い続けてきたでしょう。マニフェストも初めの頃はそれを出しておつた。ところが最近の話はどうですか。読売が今日ちよつとスツパ抜いたけれど、昔「直人」が自分が代表になると決まったら、「できることと、できんことあるんだ」と言つて、先延ばし。そうしたらちよつとも変わらんじゃないか、と思つて、僕はあの記事を読みましたね。それだけ、大人になつたことは大人になつたんですね。政権に近づいてきたから。

佐道 手が届かない先、というわけではなくなつたわけですからね。

海部 けれど本当に手が届くんですか。

伊藤 届かないでしょう。

海部 みんな自由党と民主党が合併すると、あれでこうなるんだということをマスコミの人は先走つて言つたり書いたりするけれど、一つ一つ選挙区を分析してみても、なかなかそうはいかん。与党三党は押されますよ、押されるけれど、今度で一氣に変わつちやうか。合併効果でそんなには——。そこから先はあまり言わん方がいいけれどね。

伊藤 合併効果でご祝儀というのは、もうあまりないですよ。そのあいだに、小泉再選でウワツとなつていますからね。

海部 「合併効果は」もう消えちゃつています。

伊藤 このところ民主党の声なんていうのは、ほとんど新聞に出ないでしょう。このあいだ出たと思つたら、鳩山「由紀夫」が場合によつては小泉を助けるみたいなのを言つている。

その当時はそういうことで終結して、結局「一九八七年」五月で廃案になる。これは中曽根政権にとってはマイナスであることは間違いないですね。

海部 間違いないですが、金丸さんに言わせれば、「これは途中の一里塚だ——当時国対委員長ですからね——きちつと決着がつくまで、この問題は責任を持って泥をかぶつてやつてもらわなければい

かん。自民党がどうなるか。自民党はどうなつてもいいけれど、これだけはやつておかないと天下国家のためにならない」ということだ。金丸さんが大上段に振りかぶつて、まさにあの人の一世一代の話だつたな。あまり演説をやつたりしない人が、「これができないと駄目だから、よろしく頼む」ということだつた。

伊藤 金丸さんというのはそういうところがあるんですね。

海部 ある。最後の最後、どこで決心してきたか知らないけれど。竹下さんに言わせれば、「金丸のおとつあんは、ああいうことをいつべん思い込んだら——。お国のためだといえ、そうか、わかつたと言つてやりだすよ」と。

伊藤 だけど知恵は竹下さんなんでしょうね。

海部 竹下の知恵でやつているんだ。竹下さん自身も、「金丸さんはアバウトだから」と言つていたが、アバウトスキだから、だいたいおおよそのことでもいいわけだね。だから最後の採決のときだつて、委員長が「ちよつと、ちよつと」とおれを呼んでおいて、「ちよつとおれ——。あと全部決めちゃつてくれ。これ採決のあれだから、これで決めちゃつてくれ」と、ポケットから「紙を」出してね。「おい、おい」と「僕が」言つているうちに「金丸さんは」

立つてスツと行つちやうんだ。それでしようがない。みんなを呼んでも、「いや、おまえさん筆頭だから、筆頭さんやれ」と言われて、僕があのとときの強行採決をやつたんですよ、金丸さんに代わつて。忘れられんことになつてくるな、そうなつてくるよ。

「秘書の方を呼んで」僕の国政報告の古いものの中で、特別委員会で強行採決をやつたときのものがあるんだ。金丸委員長のときにそれをちよつと引つ張り出してきて。

伊藤 それは竹下内閣になつてからですね。

海部 いや、あれは竹下内閣になつていませんよ。中曽根のときにあれは陽の目を見せたんだもの。党の国政報告を読んでみないと、記憶が不確かになつておつたりするから。

伊藤 売上税は廃案になるわけですから。

海部 売上税は廃案ですよ。それでもういっぺん出し直そうということ、やり直したわけですね。そのとき、「オール日本」オール国民のみなさんと、オール税務署で試合をやるんだ。オール国民のみなさんが勝つようにするんだ」というアバウトな理屈をつけては、それを街頭演説でやる。

■竹下内閣の成立1（中曽根後継、安竹宮の争い）

伊藤 だけど中曽根さんはその年「一九八七（昭和六十二年）の十月に総裁任期が終了します。それで後継選びということになって、これは大変でしたね。竹下さんと安倍さんと宮澤さんが候補になって、中曽根総裁に一任ということになり、最終的に竹下さんが選ばれるわけですが、このプロセスは先生には見えないわけですか。

海部 見えないけれど、各派の代表が出て来て、どうするのか、ということを派閥に持ち帰って、みんな話をしてくる。あの頃から、談合と言ったらいい過ぎだな（伊藤 話し合いと言えはいんじやないですか）話し合いだ。話し合いで、「結局、ニツカとかサントリーとか良くない言葉が飛び交ったけれど、今度だけはそれはふつたりやめておかないと、全部面倒見られて、駄目になっちゃうぞ。そんな噂はこれっぽっちも出してはいかん。それから、誰にやるかということ、それぞれが集まって、心を割って話してみい。誰になつたら一番お国のためになるか」なんていう正論を金丸さんは言うわけだ。

伊藤 するとこのころは、金丸さんを中心に動いているわけですか。海部 そんな頃は、そろそろ金丸さんも俗世間の欲とか夢とか、そういうものがだんだんなくなってきた、本当にこの国のためにという高い次元で、どこかのお坊さんに説教されたのか、話を聞いてきたのか、そんなことが言葉の端に出て来ましたね。

伊藤 それで、海部先生の場合から見ていると、竹下さん、安倍さん、

宮澤さんのどれがよく見えましたか。これだったらいいだろうな、というのはい。

海部 最後に決まったのはまったく自民党的に、誰がしたらこの法律は通るか、来年の予算はどうしたら通るか、選挙は誰がやったら一番勝ちやすいかという点で考えていく。あのとき、はっきり言うとう安倍さんが「おれはちよつとなあ、と自信がないから」とか、心の準備ができておらんとか、できておるとか、そういうようなことを言いながら、結局竹下さんに最終的に譲ったという言い方が悪いが、「竹下、どうだ」と言ったのは、安倍さんだったと思う。

伊藤 やっぱり竹下さんが間接税、つまり売上税に代わって消費税という形でそれを実現していくというのは、ずつとつながっているわけですね。

海部 つながっているわけです。竹下さんがあのころ僕に言ったのは、「国民の前に出るとおれの顔には『税金、税金』と書いてある。海部さん、あんたが行くと、このあいだの街頭演説でも、おれと一緒にやっておつても、あんたには拍手が出たり、みんながワーッと笑ってくれるのは、あんたの顔には『税金』と書いてないからなんだ」ということだ。竹下は自分で僕に言ったわ。

■竹下内閣の成立2（中曽根から竹下へ）

伊藤 この中曽根さんから竹下さんへ、というときには、派閥が動くということはありませんか。というわけですか。

海部 あまりなかったんです。というのは、動いたって、じゃあ宮澤さんでそれができるかというのと、できなかつたし、中曽根さんはもう去っていく人だから、それはあまり影響力は残らんし、言えない。そうすると結局、「安倍さんと竹下さんと、二人で腹を割って話せ。ローマ法王が決まるときに、白い煙が出るまで誰も入るな」ということになる。竹下と安倍を赤坂のなんとかというよく行く待

合いへ放り込んで、飯とお茶ぐらい差し入れて、「話をつけるまで出てくるな」と金丸さんが捨てぜりふをして、「真剣に考えろよ、おまえらは、二人で」とやっていった。初めから宮澤さんは外されておったように思うな。中曾根さんはもちろん入れていますけれど、伊藤 それで竹下さんが出て来たということについては、先生は、ああよかつたな、という感じでございますか。

海部 よかつたなというか、昔からいろいろな経緯があつて、全然口をきいたことがないやつよりは、口をきいた人の方がいいからね。伊藤 うんと口をきいているわけでしょう。

海部 それから、学校の縁とか関係ということでは、早稲田というのは横のつながりはずいぶんあつたと思うんです。

いろいろな話があるけれど、ちよつと飛びますが、例えば竹下さんは海部内閣ができたときには、「小淵がなんとか外務大臣をやりたい、やりたいと言っているが、やらしてやれんだろうか」ということをさかんに言つたものです。みんながそれでよければいいけれど、外交のことではあのころ安倍さんが一所懸命執念を燃やしていたんだな、自分の生命を賭けて。そういうこともあつたので、「だから「外相は」安倍派のほうへ話をして安倍さんの志を持って走る人じゃないと具合悪いじゃないか。要するにみんな支えるわけだから、弱いから。そこで大蔵のことは竹下さん、あんたに任せるし、お願いしなければならんし、税もやらなければならんけれど、外交のことも両方とも竹下さんのところというわけにはいかんじゃないか。恵ちゃんの処遇はいくらでもあるから、外相のことは安倍外交を継承する」「と言つた」。そうすれば、つけ入る隙がないわけだよ。言つちや悪いが、下手に宮澤さんがつけ込んできたり、よくないことを言つたりやつたりされると基盤が弱くなる。志というか腹というか、日頃あまり話もしたことのない、飯も食つたこともない、飲んだこともないような人と腹を割つた話はできない、ということになるんですね。

伊藤 やつぱりそうですね。

海部 僕の意見は竹下さんもわかつてくれて、「わかつた、小淵はそのうちに、またいずれの場合にな、考えてくれ。小淵がやりたいと思つていることだけはわかつておいてくれよ」という。それがあつたので、不思議に覚えてるんだ。

■労働運動の統一、「連合」の結成

伊藤 全然話が違いますが、ちよつどそのころ「連合」ができます。これは戦後日本の労働運動の一つの結着点みたいな感じですが。いまはゴタゴタして、何をやっているのかよくわからんですが、先生は労働問題に対してご関心があつたと思います。このときは何かお感じになりましたか。

海部 このころは、正直に言うとな、なるべく一緒にならんほうがいいと思つていたんです。というのは、いまのお話があつたように、総評というのが威張つておつて、力もあつたし勢力もあつた。そして政府の審議会の委員に入りたわけですね。そうすると当時は、「同盟からも出せ」と民社党が言ってくるわけです。民社党と社会党がそれぞれの利益代表みたいにデンと出ておるわけだ。「divide and rule」ということがあつて、これは分けておいたほうがいいな。

伊藤 よくわかる話ですね。

海部 それで二人用意して、二人にポストを与えればうまく行く。それは「僕は」官房副長官が長かつたから、そういうところから身につけたしがらみですね。それから勲章の話でも、「あれに勲一等をやつたなら、不肖わがほうのこういうのもおるだろう」といつて、すぐに力んでくる人が春日一幸とかだ。それで堅山「利文」さんなんかに勲一等をあげたりいろいろしたのも、「総評ごときに出すのなら、我がほうにも出せ。やつても、ありがとうでもなければ、すまんでもなければ、ドボンと音もせんやつにやるよりも、うちのあ

れにやってみる。堅山は喜んで、折伏するだろう」なんて、よう忘れんけれど、ここへも来て「春日氏が言った」。こっちは当時は「官房」副長官ですからね。「三木さんによく言っておいてくれ」「と言う」。それでよく同盟のほうにも僕は勲章でも何でもあげましたからね。

そんなことのみならず、ILOの労使の代表を選ぶときも、「民社系の代表を一人入れなさい。入れたらこれはこっちに出しましょう」といって、労働代表に入れるとか、そういうこともあった。だから僕は労働組合は二つのほうがいいと思っていたんです。話がしやすい。片方に行つてちよいちよいと聞けば、あちらのことを教えてくれるし、両方とも持つていけば、話の場で、「こういうこともあったじゃないか、これはどうするんだ」と言つて、うまく収まるわけです。だから弱小内閣の番頭としては、そういうたそれまでの経験を最大限に活かしてやったわけです。だから一緒になるときは、そういう立場から、僕は正直に言つて、困つたな、やりにくくなるぞ、と思つた。けれど、大きな大きな潮流として、働く人たちの立場から見れば、働くものが統一することのほうが力が出て来てくるというのが素直だろう。

伊藤 あまり力が出ないですね。

海部 最後は出なかつたけれど、出ると言われておつたからね。しかしせつかくそうなつても、旧民社系と旧社会党系は水と油と言う通りであつて、おかげでわれわれも、最後の最後まで選挙のときは民社系の票はみなもらつておつた、裏話をするよ。

伊藤 そうですね。連合で一本化したけれど、内実はどうも、いろいろあるようです。

海部 旧民社系というとぼやけてくるのは、ゼンセン同盟だ。ゼンセン同盟というのは社会党とは相容れませんか、全部こっち「に来る」。

伊藤 ゼンセン同盟というのは組合の中でも特異な、すごく強い組合なんです。

海部 とにかくありがたい組合でしたよ。そして選挙の始まる前には、僕のポスターを、「貴殿じきじき来られると、やっぱり建前というのもあるからそれはいかんけれど、組合の本部にボンと置いておいてくれ」といふ。職場にみんな貼つてくれるんだ。貼るついでに、上に貼つていってあげるから、前のやつは――。

伊藤 愛知県が一番強いですからね。

海部 ゼンセン同盟、繊維産業。だから脱線するようですが、このあいだも帰つて行つて、あるところで話をした。繊維がいま非常に悪いというでしょう。

■消費税の導入1（竹下内閣の課題）

海部 消費税の時は、「税制改革が実現すると暮らしはこうなりませう」、なんてよくやつたんだよ。

伊藤 昭和六十三（一九八八）年ですね。だからこれは竹下内閣で、消費税の話ですね。

佐道 「写真のキャプションを読む」「海部氏は」委員長代理として委員長席に着き、与野党議員の質疑をとりまとめる筆頭理事」。

海部 僕は強行採決をやらされたんだ。

伊藤 それは消費税のほうですよ。

海部 消費税のほうですね。

伊藤 これからちよつと消費税の話を伺いますが、所得税、住民税、法人税の減税ということと裏表に、消費税を導入するということになるわけですね。

海部 そうしたときに、差し引きをするとこうなるんだという、なるべく耳障りのいい材料だけをつまみ食いして、それで街頭演説をやつたわけですね。

伊藤 竹下内閣ですから、竹下さんはこれで失敗したらちよつと何とも形がつかない。

海部 しかしこれを成功させることによって、周辺に飛んできた火の粉は全部すつ飛んじやうということもあつたんでしような。

伊藤 だからこれは竹下さんとしては必死ですね。

海部 必死だ。

伊藤 金丸さんもこれは――。

海部 金丸さんはそれはわかつていたろうと思えますよ。竹下さんと金丸さんの関係だから、われわれの知らんことだつて、あの二人だつたら、二人だけでしつかりと話ができたろうから。「これをやれば、それで空気がガラツと変えられる。党内に反対するやつがおつても守り抜くから」というようなことでやつたんじやないでしようか。

伊藤 そういう格好で物事が進んでいるんですね。

海部 ただ、いまにして思えば、それを理由に、予算委員会なんかで竹下さんが往生しそうになつたときに、安倍さんが心の準備がどうとかこうとかいって、一歩退いたような格好をしておつた。それは安倍さん自身にも、その問題は竹下さんが全部片付けてくれなければ、またイロハのイからやられたらかなわん、ということがあつたんでしよう。あとから思えばね。そのときはよくわからんけれど、伊藤 そうですね。安倍さんではちよつと税制問題を解決するのは難しかったでしようね。

■リクルート事件1（事件の経緯）

伊藤 竹下さんは、でも消費税のことをやっている最中にリクルート問題が出て来ちやうわけじやないですか。僕はリクルート問題は、元はといえば文部省の問題だと――。

海部 藤波ですよ。

伊藤 藤波さんだつて文教族でしようけれど、海部さんだつてそうじやないですか。

海部 文教族ですよ。そうですね。

伊藤 西岡「武夫」さんとか、みんなそうですね。なんで藤波であつて、先生とか西岡さんは――。

海部 捕まらなかつたか、ということでしょう。それは「自性清浄心（じしようしようじようしん）」ですよ、仏教の言葉ですけどね。自分がこれをやるうとうときには、ちよつと待てよ、それはやばいよ、と自分の心の中から出てくる声がある。そういうときに、悪魔の囁きに負けて、それに手を出してしまうか、あるいはやめるか、自分だけの道を歩くか、それによりけりだ。そういう大変厳しい誘惑のときに、人間の根性、性（しん）というものは、自分の中にあつて、人間だから、一〇〇%正しいことを言っておる、やつておるとは言いませんが、きれいな事ばかりでは渡つていけないことはわかつておるけれども、そういうときに、それはやつちやあいかんよ、という良心があるはずだから、その良心だけは自らが守るべき節度としてきちんと守つていく。

伊藤 あのリクルートの江副「浩正」さんは、よくご存知なんですよ。

海部 よく知っていますよ。よく知っていますけれど、僕には、残念ながら、本當に持つてこなかつた。

伊藤 言つてこなかつたんですか。

海部 言つてこなかつた。日頃そういうことばかり言っているからかもしれん。森「喜朗」なんかは、おれの後輩のくせに――。だからそのころは、そう思つたり言つたりしたこともあつたんだ。「江副も人を見る目がないなあ」と言つて（笑い）。あのころはみんな政治資金に困つていて、選挙の前になれば喉から手が出るぐらいお金が欲しい。億のお金が入るような未公開株を出して、「この株を買つておいてくれればこれだけで売れるよ、売れば何億儲かる」という。

伊藤 それも賭けなんですよ。必ず儲かるとは限らないじやないですか。

海部 必ず儲かるとは限らないけれども、儲かったんですよ。結果としては、全部。必ず儲かりますといって持ってくるけれど、おっしゃるようにたしかにリスクを伴うものでもあったけれどね。けれどそのときドンと受け取らなかつたというのは、あとになってみれば――。

伊藤 これは未公開株を買っているわけでしょう。少なくとも買った形にはしているんじゃないですか。

海部 買った形にしただけじゃないですか。だから後日宮澤さんが問題になったときも、必要な元金もリクルートのほうが出したんでしょう。

伊藤 貸したみたいな形ですね。

海部 「株を買ってあげたいけれど、買うお金がないよ」とわれわれが断わると、「それはご心配ないように、ちゃんと別の方法で」という。それが一連の過程でバレたんです。

■リクルート事件2（藤波孝生氏の動き）

伊藤 江副という人はどういうふうにごらんになっていましたか。有能な方なんでしょう。

海部 有能な人ですよ、それは馬鹿ではないわ。

伊藤 だってリクルートをあそこまでできて、そのときに言っていることは、青田刈りをやめろということじゃないですか。それは正論ですよ。

海部 大きなところは正論ですよ。頭はいい人だったな。

伊藤 藤波さんだとか、そういう人たちは、どうしてそれに乗ったんですかね。だって藤波さんは文教族の中心の一人ではあるんですね。

佐道 労働省ですね。

海部 藤波君は、本当は労働省のほうで引っかかったんですよ。文

教族ではたしかに森喜朗よりも早かったし、先輩でもあったけれど。森のところは、労働省ではなしに、文部省関係で持ってきたわけだ。それは江副のほうは「安倍さんに渡してくれ」といって持ってきたわけだ。藤波のところには、中曽根さんに渡してくれといって持ってきたのではなくて、「藤波にいろいろお世話をかけておるからこうだ」といって持ってきたんです。

伊藤 そうですか。藤波さんは気が迷ったのかな。

海部 魔が差したのか迷ったのか。あのころ彼も「政治工学研究所」で、河野洋平と張り合つて人集めをやらなければならぬ。あのときの立場になってみれば、お金はいくらあつても足りなかつたわけですよ。

伊藤 「新生クラブ」で人を集めていましたからね。新生クラブでやっていて、機会が来たら、あれが一つの派閥になるんでしょうね。海部 いや、派閥を乗っ取るつもりだったんだ。中曽根派の中の不平不満組を集めて、やろうということだ。そこに横から乗っかっていたのが、生臭坊主だったんだ。玉置和郎とか村上正邦とかがうるちよろしておつて、しょっちゅう飛んできては、いろいろな話をされた。「あんたは藤波さんと仲がいいはずだから、助けてやってよ」と言うので、「どうするんだ」と言つたら、「われわれのところではニューリーダーとして、彼を売り出す」という。あの二人は中曽根にいっぺんコレされた「弾き出された」のかな。そんなこともあつた。

伊藤 そうですか。じゃあ場合によっては、竹下さんが奪権したような形になり得る可能性もあつたわけですね。でも、ほかの派閥の人も新生クラブのメンバーの中には入っていますね。

海部 それは河野洋平も入っている。

伊藤 だから派閥の再編成みたいな形になるのかな。ただ単に中曽根派を乗っ取るというのではなくて。

海部 新しくいろいろな人が来たら、それを排除しないということですよ。その話は、入らんかと言われた西岡がお

れのところに来て「天下をとる話をしておりますよ、いいですか」と言う。「いいですか、誰が天下を取るんだ」と言ったら、西岡「藤波が天下を取るといふ」、海部「藤波がそんなことを言うわけないじゃないか。中曾根さんがおるんだから」、西岡「その先のことを考えておられます」ということだった。あの中にいろいろあったんだな、ポスト中曾根で。

伊藤 そういう状態のときは、お金がいくらあっても足らんのですね。

海部 それはどれだけあつても足りない。その頃、名前は言いませんけれど、ある人と雑誌の対談のときに、「このごろ一番将来が心配になるのは、みんな若い代議士が百万円の金をはした金だと思つてゐる。百万円渡しても駄目だ」と言つていた。要するに、「札束を立てて」倒れないだけ渡さなきゃ駄目だ。百万円だったら倒れるから。

伊藤 三つぐらいないと駄目だな。

海部 三つぐらいあると倒れない。それは言い得て妙な表現ですよ。そんなところへ入つていくと、あいつはケチだとか、あれは羽がない親鳥だとか言われることになるわけだな。だからその自民党が壊れていくということは、まさに今度の総裁選挙の一番の、結果としての功績だろうと思うし、いままでそういった中に入り込んでやつてこなかったから、小泉さんにはしがらみがないわけだな。

伊藤 あれは森派だというけれど、森派じゃないですね。

海部 森の言うことも聞かんようですよ。森自身がそう言つたよ、「なんだあいつは」ということになるんですね。それはわかるんじゃないですか。今日まで一匹狼で。

伊藤 それが受けてるんですからね。

佐道 いろいろお膳立てをしても、全然違うことを言つたりされたりしているようですね。

海部 だから結局、野中がああなったのも、青木がどうしようかと思ひながら、青木は青木なりに利口だから、「小泉を」支持してい

る格好をとつてゐる。青木は竹下さんに育てられた腰巾着だからね。佐道 あれだけ政策的に批判をされているのに、でもしかたがないと思うわけですね。

海部 そこはどうしてそうなっているんでしょう。よくわからんわ、僕らも。

伊藤 でもたぶんそういう流れの中にいて、雪崩のようになつたら、それに乗つからないわけにはいかんでしょう。

海部 けれどね、あの人もときどき正直にものを言つて、あれが問題にならないのは、と思うけれど。予算委員会だよ、三十兆の「国債発行枠の公約違反」問題を追求されて、「あんなのは大したことじゃない」と言う。そんなこと言つたら大変だったよ、昔だった。そしてシレッツとして、それ以上のあれをやつたりするでしょう。佐道 昔だったら大変だ、ということをおの人はずいぶんたくさんおっしゃつてゐる気がしますけれどね。

伊藤 それで何か言われると、バツと返してきますからね。

佐道 不思議な人ですね。

■消費税の導入2（税制改革特別委員会）

伊藤 それで竹下さん自身にもリクルート疑惑が出てくるじゃないですか。これはちよつと大変ですね。

海部 本人に出て来たんだ。

伊藤 それでも消費税はとにかく通さなければならぬ。

海部 消費税だけは通そう。だからあの頃、野党に言いに行つたのは、「竹下はもう、ここでは言えんけれど、やめる腹を決めておるから、これだけ通してやつてくれ。通しておかんと、この次のやつもこれをやらなければならぬよ。野党だつて困るよ」ということですね。消費税をきちんとかやつておかないといかんから、竹下にはそれを背負つて片付けてもらおうじゃないか。

伊藤 その片づけをやる議会で中心は、先ほどおっしゃった金丸さんなんですよが、正面に出てくるのは海部先生なんですよ。

海部 走り使いをやったのはね。

伊藤 走り使いですか。ちよつと違うんじゃないですか。この写真

「自由新報」の写真、海部氏が税制改革特別委員会の委員長席に座っている」を見たら（笑い）。

海部 強行採決をやった張本人も僕ですから、それはしようがないけれど。

伊藤 税制改革特別委員会――。

海部 その筆頭理事だったんだ。委員長代理だ。

伊藤 実際に応答するのは委員長ではなくて委員長代理でしょう。

海部 理事会なんかではね。

伊藤 だから代理が、実際は特別委員長をやるわけですね。

海部 はい。最後の採決まで代理がやったんだけれど。

伊藤 「委員長を出せ」ということは言われないんですか。

海部 野党が言うけれど、当時の野党はそんなえらそうなことは言えないもの。

伊藤 「海部じや駄目だ」とは（笑い）。

海部 僕には言えるが、金丸さんにそんなことを言ったら、「おめえ何を言っているんだ、このあいだのあれ、利子つけて返（けえ）せ」なんて凄まれるから。あの人は平気なもの。

伊藤 「金丸氏は」幹事長時代にずいぶんいろいろやったでしょうからね。

海部 やっているから。だから当時、社会党の国対委員長が楯兼次郎といったね。「楯が横になっっている、やってこい」という。そういう悪い自民党もあつたんだから、それを倒さなければいかんということ、世論の支持も喝采も出るはずですよ。

伊藤 でも強行採決というのは本当の強行採決なんですか。つまり、強行採決をやります、そのとき社会党はどれだけ抵抗します、どれくらいはもたせてください、と「いう話がついていたのでは」。

海部 それはよくありました。向こうの条件は、社会党がここまで抵抗しておるからということが絵になって、わかるようにしてくれなければいかん、ということですよ。

伊藤 テレビに出なければいかんということですね。

海部 テレビに映らなければいかん。採決をやられるときは、「横暴だ、横暴だ」という声も収録マイクに入らなければいかん。そういう場面も要するという。しかしそんなことはお安いご用だ、委員会を取り仕切っていく上ではね。

そういうときに間違つて、「もういいぞ、絵になつたからいいぞ」といつて、「委員長、採決やっつていい」という裏の話までとりつけても、間違えることがありますからね。

伊藤 誰が間違えるんですか。

海部 連絡役が間違えることもあるし（笑い）、これは笑い話だ。

伊藤 不測の事態ですか（笑い）。

海部 耳打ちがあつたというと、耳打ちなんかしておらんという。やっつていいときには耳打ちに行くよといつていて、野党の前線司令官が耳打ちに来たから、やっつていいからということ強行採決をやつたら、「まだいかん、誰がそんなことを言つた？」といつて本気になつて怒るやつもいる。「本気になつて怒つたふりをして、それが絵に映ればいいんだろ」と言つたら、「そんなことじゃない！」と言う。そうなつたら、本気になつて肉弾戦で排除しなければならんという場面になつたこともある。

伊藤 このときは別にそんなことは――。

海部 このときは、もう初めからわかつておつて、こういうふうになつていくと。

佐道 比較的予定通りというか。

海部 比較的预期通りですが、このときはそういう話ができん組が大挙入ってきますからね。それこそ、総評のそういうことの専門家とか、総評の国会関係なんかというのがある。それで委員長を取り囲んで、ワーワーやり出すでしょう。

伊藤 中に入ってくるんですか。

海部 それはみんな私設秘書のバッジをもらって入って来るもの。それから、その頃でも総評の国会連絡室（そんなものはいらないだけれど）があつて、そこで第二種のバッジとか、院内通行証というのを持つてゐるわけだ。

伊藤 でも会場には入れないでしょう。

海部 入れないことになつておるけれど、ああいう修羅場になると、バートンとやつてゐるうちに――。

佐道 いつのまにか入つて来るんですか。

海部 そう。また向こうにしてみれば、そういうのをどんどん送り込んでやらないと。日頃顔なじみの議員なんかを前に出してやらしておつたら――。

伊藤 誰がやつたかわかりますね。

海部 わかるし、僕らも委員長席におつて、「伊藤先生、あんた帰つてください。」「大きな声で」伊藤先生、帰つてください。日頃言つてゐることと違ふじゃないですか「なんて、マイクに声が残るよ」に言つて、「まあ黙つておれ」ということで、そこで戦意が鈍るね。

■消費税の導入3（三%の税率）

伊藤 そうですか。とにかくそれで、今日に続く消費税が始まつた。これは歴史的なことですね。

海部 そうです。そのとき本当に、これがお国のために必要なんだぞ、ということですよ。消費税というのは、いまでもまことにアバウトな話ですが、わかりやすく言つてみる、というところ、あれは1%で税収が二兆五千億円か。それを2%にすると五兆。だから一番手取り早いわけだ。しかもそれは、どこの層を狙ひ打ちするわけでもない、広く浅く公平な税だ。あの税の理屈だけは大蔵省の主税局長

がしよつちゆう、朝早く出て来て、われわれに絵解きで教育したものです。なるほどと思うようなことを言われた。

あのとき街頭演説なんかで私が言ったことは、今日流で言うともニフェストです。「これを認めてください。どなたがなられてもこれは必要だ。しかもそれは、人間にとつて一番必要な社会保障にも使つて下さい。けれども出すときは誰でもいやだと言うことはわかるから、それは理解してください」というようなことを、苦しい弁明をしながらやつてきた。

伊藤 でもヨーロッパなんかでは十何%という消費税ですよ。日本はまだ余裕がある。

海部 3%ですからね。あのとき宮澤さんは、「どうして最初から5%取りませんか」とおれに言ったからね。「せつかくやつてゐるときで、それはのりしろは少しは残しておかなくてはいかん。将来は10%になるといつてゐるのもおるけれど、初めから5%といつては駄目だ」言つた。

金丸のおとつあんはアバウトだから、「あまりゴタゴタ言うならば、3%をやめて1%にしちやえ。1%にしたら、ダツと通るぞ」という。「それじゃあ実入りが少なくなつて足らんですよ。二・五「兆円」ぐらいではどうにもならんじやないですか」と言つたら、「まあいいんだ、それでやつておいて、大したことないと言つたら、はいあと1%、あと1%といつて、毎年1%ずつ上げていけばいい」と言う。そういう現実的な発想をした人でしたね。

佐道 最近その議論が経団連から出ていますね、毎年1%ずつ上げていくというのは。

海部 ああ、むかし言ったことを言つてゐるから、人間の知恵というものはそう変わるものではないなあと思つて、あれを見ておつた。伊藤 いや、やつぱりまったく新しい発想というのは世の中に存在しないですからね。いろいろ議論されたものをいまに適用したらどうなるかということ、前を見ないと駄目なんです。

海部 そう思いましたね。

佐道 最初から五%でいいじゃないかという宮澤さんと、毎年一%ずつ上げて行けという金丸さんというのは、違いが出ていて面白いですね。なるほど、という感じがしますね。

海部 宮澤さんはたしかに頭がいいんだろうな。それで「総理!、その」と言つて進言に行くんだ。三木さんのところでもどこでも。

伊藤 宮澤さんが、ですか。

海部 雑談かたがた来ることもあつたんだよ。

伊藤 けつこう腰が軽いですか。宮澤さんというのは書齋に籠つて動かない人かと思つていたんですが。

海部 いやいや、そうじゃない。これも言つたら悪いかもしれんが、宮澤がどうしても僕に一对一でお話を聞いて欲しいことがあると言つた。それまでそんなにしんみりと話をしたこともないのに。

伊藤 あまりお親しい間柄ではないでしょう。

海部 そう。だって、親分同士が喧嘩ばかりしておつて、仲良くできるはずがないじゃないですか。そうでしょう。けれども、竹下に内閣を作らせたら駄目だ、ということも懇々と言いましたね。「あの人は金権政治を上手に創りあげて、また世の中を暗く、政治を悪くしていく」という。おれは「本気でですか」と言つたんだよ。

伊藤 宮澤さんだつてリクルートに引つかつたんだからね。

海部 リクルートもあるし、長銀もあるしね。特にリクルートのときなんか、「あなたの場合はどういつて答えるか」と言つたら、「さあつ」と言つて首を傾げるだけで、「委員会を開いて発言を求めて弁明しなさい」と言つても、「どう話したらいいんでしょうか」と言う。「それはあなたのほうの腹心を一人理事に出しなさいよ。あなたのところは本当の腹心が一人も出て来ておらんじやないか」と言つたんだ。というのは、あの頃われわれとつき合つておつたのは、田中六助だ。あれでは駄目なんだ。一六戦争だから。放つとけ、という感じだ。

伊藤 しかし今度のことであ、宏池会も行く末がついにああいうことになりましたね。この変化の激しさには驚きますよ。

■三木派の帰趨 1 (三木元首相の死去)

伊藤 それで、小派閥の代表的な存在でありました三木さんがこの「一九八八」年に亡くなられます。ちょうどリクルートの真つ直中ですね。

海部 そうでしたな。

伊藤 この時点では三木さんは、政治的にはあまり力がなくなつていたでしょう。

海部 もう、河本「敏夫」さんになつていますね。

伊藤 でもやっぱり三木さんというのは、存在感はあつたんですか。

海部 あつたし、三木の言うことに耳を貸そうという人がおりましたね。

伊藤 党内に、ですか。

海部 ええ。

伊藤 海部先生は三木さんの直系ですから、河本派だといつてもいい。僕は三木派ですよ。だから変な話だけれど、三木さんがあ

いう状況になつたときに、これで三木さんのあれ「時代」は終わりだということ、だから河本派に入つて、昔の三木さんに忠誠を尽くしたようにやるといふわけには行きませぬ。だから僕は、河本派にはなかなか帰つていきませぬでしたし、一番最初にもボタンの掛け違いがありますからね。それはひとの悪口になつて、個人の問題になりますから、やめておきますけれど。

伊藤 そうですか。でもいちおう形としては河本派に属しておられたわけですね。会合なんかはいかがですか。

海部 顔を出しました。そして物も言いました。それから河本さんのせがれの三郎の選挙のときは、僕は姫路まで何回も応援に行つてあげました。

伊藤 じゃあ河本派に行つた旧三木派の中で、先生の仲間ということ

どういふ人たちですか。

海部 腹を割って話ができたのは伊藤宗一郎とか、鯨岡兵輔。この人はちよつと立場が違ってくるけど。

伊藤 そういふところですか。

海部 ああ。

伊藤 もう、この時点になりますと、先生より上の人たちのかなりの人はリタイアされていますね。先生もだいたい上の方になっておられますね。

海部 はい。

伊藤 やつぱり派閥というのは、代替わりしたときに、なんと云いますか、次を受け継いだ人にとって目障りになるような人が必ずいるわけですね。

海部 それを大掃除してからやつてやらんと、派閥の後継代替わりは難しいぞ、ということでしょうね。

伊藤 先生なんかはどちらかという大掃除される側のほうに――。

海部 されるほうだった。されておつたわけだから。

伊藤 されていたんですか。やつぱりそういうものですか。そういう派閥の力学みたいなものは、どこでも必ずあるんですね。

海部 ある、必ずある。

伊藤 それは政治の世界だけではなくて、代替わりという問題については、人間社会は多かれ少なかれそうですね。三木さんが亡くなられて、先生としては大きなショックがあつたんじゃないかと思えますが。

海部 それはぼつかりと穴が開いたのと同じことですね。三木さんが倒れても、僕は病院にちよいちよい行きました。そして会話はピンポン球のようなやり取りはできませんけれど、それ「僕が見舞いに行くこと」が一つの安心感にもなつたし、僕の言うことや、僕の報告は、領いて聞いておつた。「先生わかつたか、僕もう帰りますから」と言つて手を握つて帰つてきた。そういうことでしたね。しかし、やつぱり僕のことを非常に心配してもらつたことも間違いない

いですがね。それから日本の政治の将来を、あの人はあの人なりに、別の高い次元で考えておつた。

■三木派の帰趨2（河野金昇氏のことなど）

伊藤 海部先生としては、師と仰ぐ人は三木さん以外ないわけですか。

海部 いないわけです。強いて言えば、河野金昇さんという、私の初代。いまも私の選挙区の中にその人の系統がおつて、いろいろやつてくれておるし。

伊藤 ああ、そうですか。

海部 そういうことで、選挙区に帰れば、河野金昇先生という人が私の育ての親だとみんな思っている。だからいまでも僕の後援会のことを、「海部会」と名前はいちおう変えてありますが、「金昇会」といつたほうが、古い世代の人にはいい。

伊藤 じゃあ金昇さんという方は非常に人徳があつたんですね。

海部 いつまでも慕われている、ということじゃないですかね。

伊藤 でも、例えば力があるとか、そういうことだけで後まで語り継がれるということはないんですね。

海部 心のつながりがある。

伊藤 それは人徳ですね。

海部 人徳だと思えますね。お隠れになつてからもう四十何年経つのに。

佐道 先生が選挙に出られたのも――。

海部 私が当選してもう四十三年経ちます。その前に亡くなつた政治家であつたけれど、語り継がれておる。その証拠に、古いという言い方は悪いが、おじいさんが、初めに僕が出たときの後援会長で、息子が継いでやつてくれていて。後援会のほうも、会長が子供に世代替わりして、いまもやつてくれていてということがあるんで

すね。僕の選挙区では。そしてごく当たり前のことのように、それに寄ってくるわけです。だから、私がいまでもときどき帰っていつて、「どうだ、みんな元気でやっているか」ということで訪ねていくと、いろいろな話が出てくる。

いまは繊維の問題は非常に下火で、選挙区の地場産業は青息吐息でしたけれど、このごろ東海大地震の問題が出て来て、経済産業省なんかも中心になって梃子入れを始めた。そして毛織工業組合で、補強する強い物をつくれと言つてずつと指導してきた。お耳に入っていないませんか、アラミド繊維という物を（佐道 あります）。大変強い化学繊維なんだ。

伊藤 あれは化繊なんですか。

海部 化繊ですが、あれを昔の洋服を織る織機で織れるように品種改良して、出来上がったんです。それを橋桁に巻いたり、校舎の天井に裏張りしたりする。軟らかいので、鉄で補強するよりアラミド繊維で巻いた方が、橋桁も簡単に倒れなくなる。そういうことを一所懸命やらせた。そうしたら愛知県も、県の繊維がこれ「生産縮小傾向」ですからね、誰の彼の、と言わなくていいから、全愛知県の繊維産業の育成のためにやれ、という。

ありがたいことに、僕が初めて出たときに、羊毛協会の会長が僕の後援会長だったんですから。その息子も引き続いて地元の会長になつておるし、業界ともうまいこと行きますから。だからこれが経験と積み重ねというものでしょうね。地場産業全部が上向きになるようにしなければならんから、アラミド繊維でやりましょうという。そうするとみんな喜んでやってくれるし、続いてくるんですね。元通産省の繊維関係はだんだんこれ「縮小気味」になつていくけれど、経済産業省のいまの西川「太一郎」副大臣に、「あんた、これすまんけれど、担当してやっておつてくれ。そんなに大した予算はつかんから、ちよつとした研究開発費をつけて、自主的にみんなもつと仕事をやらせる」といつている。相当丈夫ないものができてきたんです。

伊藤 そのアラミド繊維は、原材料は何を使うわけですか。やっぱ石油ですか。

海部 石油製品の化合物ですが、そこへちよつとだけ炭素繊維も混ぜる。いまはいろいろその試作品をつくっている過程ですから。

伊藤 ちよつと面白い試みですね。

海部 はい。あれが本当に成功して火がついてくると、また繊維の元の経験が活かせる。幸いまだ機織りの機械は、ガチャン、ガチャンというのがありますからね。それで織つてみたら、織れたんですから。

伊藤 単なる織物ではなくて、今度は素材としていろいろ役に立つんですね。

海部 はい、工場とか、学校とか、公民館とか、橋梁とか。特に東海大地震があるんじゃないかなんて脅かされているから、喜んでみんなやっているわけですね。そんなこともあれこれあるという話です。

■三木派の帰趨③（河本敏夫と河本派）

伊藤 面白いですね。三木さんが亡くなったことで、旧三木派つまり河本派に何か影響はありましたか。もうそんな段階ではありませんか。

海部 三木先生が亡くなられて、上のほうの年配の人たちはそれで消えていった人もおるけれど、その後は、河本派としては三木派のように拡大しませんでしたね。それはしかたがない。若い連中と膝を交えて馬鹿を言い合つたり、一緒に杯を交わしたり、真剣に一晚議論したりというところが、政治家の器には必要なんじゃないでしょうか。

だから、僕は批判するわけではないけれど、「笑わん殿下」なんというあだ名をつけられておつた。総裁選挙のときに行つて、横に

置いておいて、「ちよつと失礼だけれど、あんたは笑わん殿下というあだ名があるけれど、知っていますか」と言うのと、難しい顔をしている。「みなさん、こんな顔をしておいたら総裁になれっこないんだから。今日はこんなにみなさん来ておつてくださるから、ひとつ拍手してください。拍手を受ければ、嬉しくないはずはないから、立つてにっこり笑いますから、お願いします」というと、みんな拍手する。後援者ばかり集めているわけですから、立ち上がって拍手する。「どうしてもうちよつと笑わんですか」と聞いたら。「面白くもないから笑えませんわ」と言つたもんな。

佐道 それじゃあしようがないですね。

海部 だから僕は、基本的な政治家としてのあれ「資質」が、ちよつと足りなかつたんじゃないかと思つたね。

伊藤 実はこの後に出てくるんですが、結局竹下内閣が総辞職して、宇野さんが駄目になつて、海部さん、ということになつたときに、河本派だつたら、オーナーは河本さんでしょう。そこに行かないで、海部さんに来た。

海部 僕はだから、「順番がありますから、河本さんがまずやつてください。河本さんをやらしてもらわにやあいけません」ということを竹下さんには率直に言つたし、金丸さんにも言いましたよ。あそこを差し置いてはやりにくい。それから大きな声では言えんけれど、あの人たちも困つたり、党のためにどうのこうの、というときは、河本さんが金を出しているところもあるんですからね。私もそれを知つておるから、「まず河本さんにやつてもらわんと。そこを差し置いてやつたつて、うまく行くはずないんだから、駄目だ」と、僕は僕のことだから、率直にそう言いました。そうしたらそんな頃、話がそこに行つてもいいですか。

伊藤 いや、河本派の中で、先生はどんな位置におられたのかな、ということなんです。さつきのお話で、ちよつと外様みたいな感じでおられたと思つた。

海部 外様ではなかつた。外様にしてくれればもつと気は楽だつた

な。精神的には。けれども選挙となると、あの記録はどこに行つたかしら。全河本派所属の衆議院議員が三十二、三人いましたから。ほとんど九割方応援に走り回りました。そして三木さんの最後の頃は、まず三木さんの選挙区の事務所開きをやつて、それから河本さんのところに飛んで、というようなことをやつて、ずっと四国だ、どこだと言つて、三木派、河本派の議員、みんな回つてきました。だから河本派の中で選挙になると、「いつ来てくれるんだ？」という人ばかりで、みんな行かなければならんわけです。それに、よその応援にも僕は行きましたよ。

伊藤 よそつてなんですか。

海部 よその派閥。

伊藤 ああ、よその派閥ですか。早稻田だ。

海部 行つたけれど、それは三木さんにも「行つてくるからね」と行つておかないと、こいつにはこういうときに世話になつたとか、こういうときにこういうものを取つたから、ということであつたんですね。だから全天候戦闘機みたいなもので、雨が降ろうが風が吹こうが、どこへでも飛んでいって、助けるときは助ける。それが最後は、回り回つて三木さんのところにお礼が来るはずだ。三木さんと言う、「それは大事なことだよ。それはいいことだよ。自分一人のことしか考えられんような政治家は大成しない。うるさい、くどいと言われるぐらい助けてやれよ。応援に行つて来いよ」と言われたこともあつた。

伊藤 実質的に、河本派というか三木派の顔というか看板のような形で、先生は動いておられたんですね。

海部 そういうときは、河本派はテレビの討論会でも海部さん。河本がやつたときね。三木さんがやつたときはもちろん三木派の斬込み隊長は海部さん。そのとき福田派は安倍晋太郎、田中派は竹下登と決まつておつた。中曽根派からあの頃は渡辺美智雄が出て来たかな。あの人はときどき入れ替わりがあつたけれど。

伊藤 出たり入つたりしましたからね。

佐道 実質的に三木さんから河本さんに代替りされても、先生が実質的にナンバー2ということですか。

海部 ナンバー2というと、いや違うぞと言う人が必ず出てくるから。そんなことは肌で知っておたし、いろいろな人がおったからね。例えば福島、渋谷直蔵とか、東京の鯨岡兵輔とか、みんなおれより歳は上だ。当選回数もそんなに上じゃない。そういう連中がわうわう言うから、よしよし、おまえらがそれをやっておれよと。

佐道 鯨岡さんはあれ「ちよつと別」ですけれど、渋谷さんとかは年齢は上ですが、例えば対外的な顔とか知名度とか、そういうことから言ったら、先生のほうが上ですよ。

海部 だからそれを言うよ——。

伊藤 言ったらまずいんだな（笑い）。

海部 駄目なんだよ。

伊藤 出る釘は打たれる。そうじゃなくても、テレビ討論なんかに出たら、あの野郎、でしゃばって、と言われるでしょう。

海部 替わってくれ、という。

伊藤 とにかく嫉妬の世界ですからね。

海部 それは副長官で、私が国鉄のストのときにずっと出さずっぱりだから、ときどき代わりを出して、みんな売り出してやったらどうかね。僕はいいから、あれはどうだ、あれはどうだ、まあえらそうなことを言うやつは、やつぱり本人がもっていかなくてはいいかな。だから鯨岡兵輔なんか最たるものだと思う。

伊藤 ましてや、そういうところで総理に指名されたりしたら、これは大変ですね。

海部 それはすごいことだと思います。それは上が替わったから、なくなつたからですよ。みんなだいたい失格者になつたんだから。私のときは。

佐道 リクルートで、有力候補者がみんな駄目だったんですね。

海部 みんな駄目だった。それから他派閥で、こっちに近いやつもおるわね。やれそうなやつもおる。いまにして思えば、そいつらも

みんな「腹に一物、背に荷物」で、傷もあるから、まあまあと言つて、みんな押し出してくれたんですね。

伊藤 しかしそれは河本派の中では大変なことでしたね。

海部 ああ。河本さん自身がその気だったんだから。

伊藤 だから河本さん自身は、海部さんに対して非常に複雑な感情だったんじゃないかな、と思うんですが。

海部 それはそうですよ。それを僕は百も知っておるから、はじめ新聞社が来たときも、「うちは河本さんがやるつもりで、今日まで営々と努力してきたんだから、今度は河本さんにやらしてもらわなきゃいかん」「と言つた」。

伊藤 それは河本さんのほうから見たら、「あの野郎、あんなこと言っているけど」ということになるでしょう。

佐道 河本さんはリクルートには引つかからなかつたわけですからね。

伊藤 引つかからないでしょう、あの人は自分で金を持っているんだから。

海部 自分で腐るほど持っているんだから。

佐道 例の三光汽船の再建問題とか、いろいろなこと、少し批判も出ていたと思うんですね。

海部 それはあつた。あんな頃は、香港のあれから脅かされたり、便宜置籍船であれを借りたところの政商みたいのが来て、河本さんにこんなにとられたから、あれを取り返さなければいかんとかね。児玉誉士夫まで現われたんだから。

伊藤 河本さんの商売は危ない商売ですからね。

海部 あそこもあつと言う間に伸びて、田中角栄の考えた運輸省の造船融資を一銭も借りない。「あんな金を借りますとですね、言うことを聞かなければならぬし、行政にコントロールされますから、やりたいときにやりたいことができませんよ。ここにいま行ったら、これだけ荷がある。ここに持っていったらいい、という自由貿易・自由経済をやつていかないと儲からんから。儲けるためには、やら

なければいけませんよ」という。

伊藤 だいたい河本派の中での海部先生のおられた場が見当がつきました。

■昭和から平成へ

伊藤 次の年、昭和六十四年一月に昭和天皇が亡くなられます。寒いときでございました。これは先生としては、特に役割があったわけではございませんね。

海部 特に役割はなかったけれど、しかし記帳に行ったり、徹夜で座っておったり。

伊藤 どこに座るんですか。

海部 大嘗祭。あの頃はまだ竹下さんだったから。「ああいうところではな、声を出したり笑ったりしちゃいかんぞ、今日は」なんて、さかんに人に注意していた。「黙っておるからいいよ、こんなときは。どこでもそうじゃないの。それを陛下のお葬式だ」と言っていた。

伊藤 やつぱり一つの時代が終わったという感じはありましたか。というのは、ちょうどこの前後は、共産主義社会がガタガタ崩れていくときですね。

海部 共産主義が倒れたのは、ちよつと時期が後ですね。

伊藤 ちよつと後になります、もう東ヨーロッパでは「崩壊の過程が」始まっていて、ほとんど動いていますからね。

海部 うねり、胎動はありましたね。

伊藤 だから時代が変化しているという感じであったのではなからうかと私は思ったんですが、後知恵かもしれませぬ。結局リクルートで竹下内閣が人気がなくなつて、ついに支持率がこんなに「一〇%を切るほどに」下がっちゃつて、参議院の補選でも負ける。それで、さつきおっしゃつたように、予算だけ通してくれ、ということ

でおやりになったわけですね。

海部 そうです。そしてそういうときには、言の葉にのぼつたらその瞬間から総理というのは屍になるから、言の葉にのぼらんように、その代わり本人は決意して、やるべきことをやったら、やる。そうして竹下さんがやったのは、東南アジアだったか、腹を決めてから組んで、「行つてくる。こういうことは行つてやつてこなければいかん」という「一九八九年四月二十九日〜五月七日、東南アジア諸国歴訪」。ああいうことを抱えて、よくやつたなと思う。そういう点では非常に強靱な精神力の人だと思いましたが、先生はそのときは国対関係ではないでしょう。

海部 何をしておつたかな。

伊藤 議会で何か役割を持つておられたんですか。

海部 このごろいろいろなものをつ張り出しては、当時のことを思い出したりするんですが。

伊藤 これは平成元年ですよ。

海部 元年ですね。十一月がベルリンの壁「崩壊」、十二月が米ソ冷戦の終結宣言。もうこのときは、私の内閣ができていましたよ。

伊藤 ですから、その前のことです。

海部 その前に天安門があつて、天安門の前に宇野内閣が成立する。その前に消費税三%を実施したということですね。

伊藤 さつきおっしゃつたのは、消費税の特別委員会の委員長代理として、全体として議会の中を動かしていたということですね。

海部 そういうことです。

伊藤 わかりました。

■宇野内閣1（竹下内閣の総辞職と宇野内閣の成立）

伊藤 それで竹下さんが辞任されるということが既定の事実になつ

たわけですね。それが既定の事実になったときに、次というのは、
どういふふうに考えられたんですか。

海部 このときは、埃が出てくるか出て来ないか、徹底的に叩いて
洗わなければいかん、ということですよ。

伊藤 もう一つ起こったたら、本当に大変ですからね。現実起こっ
ちやっただんですが。

海部 それをそちらのほうばかり見ておったものだから、小指のほ
う「に目」が行き届かなかったから、宇野さんが選ばれたけれど、
直ちに出て来ちゃったな。

佐道 このときは参議院選挙があるということは当然わかっていて、
その選挙のためにも、選挙受けする人を、ということが前提だった
と思うんですが。

海部 そうなんです。

佐道 ということは、宇野さんは選挙の顔になり得ると考えられた
わけですね。

海部 そういうことでしよう。要するに、借りを返していききたいと
いうことだよ。

伊藤 要するに、中曽根派に戻そうということですね。

海部 中曽根が竹下を強引にしてくれた。

伊藤 でも先生、宇野さんがなられたときにどう思いました。

海部 あれは「宇野氏がOEC D閣僚理事会出席のため」パリに行
っているときに、みんなで集まって話をして、「宇野でも呼び返し
て、あれにしばらくやらせるよりしようがない」といったんだ。

伊藤 消去法ですか。

海部 消去法です。

伊藤 ほかに候補はなかったですか。

海部 ほかにいる人は、渡辺美智雄とか。あれは竹下と一緒だから。
もらっておったから、あまりにも明白であったから。それから安倍
さんの場合も、体が弱いということにしてあったけれど、あれは

「出て行ったら一発で引つかかるから駄目だ」と自分で言い出した

らしい。

伊藤 政治家としての宇野さんは、その前はほとんど目立たない人
だったように思いますが、政界の中でごらんになっていて、どうで
したか。

海部 われわれは同期生ですからね。当選は同期であるし、県会議
員上がりだから、口八丁手八丁のところもあった。よく、べ
らべらしゃべるわけだよ。だから選挙が近いときは、ああいうのは
役に立つだろうと。そういう面だけ取れば、街頭演説を全部やらせ
られる。

伊藤 演説上手なんですか。

海部 そう。

伊藤 女を口説くのも上手なんですか。

海部 結局、それで失敗しちゃったんだものな。

伊藤 選挙演説が上手な人が女を口説くのが上手だったら、海部さ
んだって該当しますからね（笑い）。

海部 （笑い）

佐道 まあ、それは分けた方がいいでしょう。宇野さんは、上手じ
やなかったから、最後は失敗したんでしょう（笑い）。

伊藤 宇野さんはその前、外務大臣をやっていたんですね。そつな
くこなしたということ、まあいいか、ということなんですよ。

海部 三役は残念ながらやっていないけれど、いいじゃないかと。

伊藤 後ろに中曽根がついている。

佐道 中曽根さんに恩返し、中曽根派から、ということを考えなけ
れば、河本さんも候補ですね。

海部 河本さんは中曽根さんとはコレだから「仲が悪いから」。だ
からいつか河本をどうしても処遇してくれとってこじれたときに、
田中角栄の最後だったと思うけれど、どうする、行政管理庁長官で
もやるかと言われたから「第二次中曽根内閣第一次改造の際の沖繩
開発庁長官か？」、まったく河本を遇する道を知らんな、外務大臣
か大蔵大臣をやらせればいいのに、と思った。けれど河本さんはそ

れでも受けちゃったから。

伊藤 まあ、宇野さんでうまく乗り切れるかな、という感じではあったんですか。

海部 乗り切っていいこう、ということですね。

佐道 非常事態ということですね。

海部 まあ、そうでしたね。

■宇野内閣2（宇野総裁選出の経緯）

伊藤 このときには、海部先生という名前は挙がらなかったんですか。

海部 あの頃の新聞の中には、事例はよく出ましたよ。けれども、当選回数も年齢もあまり早く回って行ってしまうと、中二階が困っちゃう。もつと言うと、あのときも難しかったが、安倍晋太郎と渡辺美智雄が虎視眈々と狙っておったわけだな。まあ結果はかわいそうだったが、河野洋平君があ頃は売り出しておって、藤波もまだ問題が起こる前だから、藤波も売り出しておった。だから一挙にいきなりせんでもないではないかといって、法務省を呼んでよく調べてみたら、安倍も匂いがある、藤波も色がついている、渡辺美智雄はもろろん色がついている。

じゃあもう少し若いところを探せといったら、名前を出して悪いけれど、出した方がよくわかるでしょうから、例えば森喜朗にしても、名前は挙がったけれど、リクルートなんか多いわけだな。それは一番最初に法務省が心配した。石原信雄という官房副長官がこつと調べて持ってきて、「あれはいかんです。こちらのほうが多いです」という。

ちよつと話が飛ぶけれど、あんなころ、われわれ早稲田の仲間だから、渡部恒三や小淵を主なポストに就けてやろうと思っておるか、みんな推薦し合うことが多かったんだね。あれはこれがいい、

あそこはこれがいい、といって。それで「森がいい」と僕はよく言ったんだ。恩が売れるから。そうしたら、組閣のときもあんなものだろうけれど、携帯電話がかかってきて、駄目だという。あの頃、安倍は入院しておったから。オールウィズ入院じゃないかもしれないけれど、しょつちゅう行っておった。「今日は携帯電話で電話をさせるから、おつてくれ」という。聞くと、「あれは駄目だからもうちよつと休ませてくれ」ということだ。結局、宇野宗佑のところへすんなり行って、宇野宗佑がああいうことになったときには、みんな後のことを全然決めていなかった。それは言い過ぎですけどね。

伊藤 しばらくもたせるつもりだったんですね。

海部 そうそう。

伊藤 そのあいだにいろいろあるだろうと。しかしそれがもたなかった。

佐道 あつという間でしたね。

海部 しかも小指のほうでもたなかったから、お金のほうの問題はちよつと肩すかしができたけれど、こつちから飛んできたパンチでパンとやられたわけですね。

伊藤 あの女性問題というのはなんですか。相手の女性はプロの女性でしょう。

海部 だからね、そんなものをああいうところでしゃべられるような扱いを、宇野もしておるからいかなのだ。

伊藤 そういうことが言われますよね。つまり後の始末をきちんとしなかった。

海部 金丸さんもまず言った第一声はそれだな。

佐道 そういう問題というのはわからないものなんですか。

海部 結局わからなかったんだらうね。だから政治的なスキャンダル、どこの企業とどういふことがあるとか、汚職の問題があるか、とかいうことは、金丸さんだって毎日あれだけ新聞記者を集めて話を聞いておるからね。

伊藤 もちろん警察なんかの情報もあるんでしょう。

海部 それはそうですよ。だけど小指のほうは、警察からは情報が入らんのだ。

伊藤 入らないんですかね。

海部 警察が小指の情報をすっかり備考までつけて取ったのは、名前は言えんけれど、別の人だ。元総理大臣。尾行されてね。怖ろしい能力を持っているよ。どこの誰と会って、どうしておって、というようなことを「調べる」。宇野さんの場合は、そういうことも出て来なかったんだから。

伊藤 あれはそのときに続いていた問題ではなくて、過去の話なんでしょう。清算のしかたが悪かったんでしょかね。

海部 清算のしかたも悪かったんだらうし、知った人に言わせるとあとの面倒見も悪かった。「あとのと言って、おまえら別れてからそういうときは面倒を見るんだから、海部君、気をつけるよ、おまえも」と言ってる。

伊藤 あとの面倒も見るとですか。

海部 うん。ときどき呼び出したり、ときどき飯を食って、ちよつと小遣いをやる。それがコレになるんだ。それを宇野はやっておらんからいかん、というようなことを聞いたことがあるな（笑い）。

伊藤 それは、その女に別の旦那がつけば、また別でしょう。

海部 それはまた別さ。これは人間の尊厳に関する、一番基本の基本に関する問題ですから、聞いていやな話ですね。

伊藤 そうですね。ああいう記事が出ちゃうと、どうしようもないですね。品性下劣だと思っちゃうじゃないですか。

佐道 そういう書かれ方をしましたからね。

海部 また、事実そういうもの。

伊藤 それでも別にどうってことないと平然としていられるわけですからね。

海部 厚かましいね。ただあれがどれぐらい響くか。ああいうことが本当に響いて、理由があれば、となったときに、本当の意味での

政治改革。政治改革はお金の問題だけじゃないよということが、議論になるんでしょうね。

けれどもあの問題だけは、これも言いにくい話だが、うちにおる松浪健四郎もちよつとニュアンスが違うけれど、同じようなことがあつた。僕はこのあいだ、彼の選挙区まで行って、後援会を全部集めて、「汝の中で罪なき者のみ石もて打て、イエス・キリストがそしておっしゃったんだ。バチが当たるよ。本人はここまで反省して、ここまで覚悟しているから」と、いろいろ言つたさ。

佐道 松浪さんは選挙区はしっかりしておられるんでしょうか。

海部 しっかりしておるんだ。選挙区では出れば当選するでしょう。

■宇野内閣3（参議院選挙）

伊藤 しかしこの宇野さんのときは驚きましたね。それでその後の参議院選挙に響いたんでしょね。

海部 だって、演説がどこでもできないんだもの。一ヶ所もできないんだもの。といつても、全然やらせんわけにもいかん。どこかでやらせてくれと言つたから、それじゃあといつて自民党本部の前庭に自民党の職員や党の秘書だけ集めて、告示の日に大々的に官邸から車に乗って党本部に行つて、党本部で宣伝車に乗って、集まっている人に第一声を上げた。それが終わったところで、次はお客が来ていて前から会わなければならんとかいって、そこからちよつと走らせて帰したことを覚えていますな。

伊藤 もう、それつきりですね。やっぱ選挙というのは、総理なり総裁が顔になつて選挙をやるんですから、顔がない選挙じゃあ負けますね。

海部 そして候補者になる者が、その選挙の最中に陣営をどうやって奮い立たせるか、どうやって引き立てていくか、それは直接訴えることしかないじゃないですか。

佐道 このときは、総理の女性スキヤンダルと、リクルートの問題で、自民党にとつてはこれ以上ないぐらい悪い状況だったと思うんですが、先生はあちこち応援演説に行かれたんですね。

伊藤 大変だったろうと思いますね。

佐道 反応は全然違いましたか。

海部 初めから言い訳の選挙というのは辛いな、と思った。これが私の実感ですね。

伊藤 しかし弁明して歩くということですか。何とも言いようがないですね。

海部 言いようがない。

佐道 このときは社会党がおたかさん「土井たか子」で（伊藤 言い調子でやっていたからね）。

海部 「駄目ったら駄目」とか言つてな。

佐道 いま自分がそうなっていますけれどね。

海部 最近では民主党の強い選挙区に行ったら、「あんた方今度、おたかさんが来たら、よう聞いておいてくれ」「と言つて次のようなことを話すんだ」。海部俊樹の恨み節になるかもしれないが、あれだけ苦労した湾岸戦争のときに、トゥー・レイト、トゥー・リトルだといって、さんざん予算委員会やなんかで言われた。そのとき僕は聞いた。「もしあなただしたら、いくら出されたんですか。社会党だつたらこれだけ出すという基準があつて、それより九十億ドルは少ないから少なすぎるとおっしゃったんでしょう。いくら出したんですか。後日の参考のためにぜひお知らせいただきたいと思う」といって、僕は本当に委員会で聞いたんだ。そうしたら男の議員どもがこつちに走ってきて、「そんなことは聞くもんじゃねえよ」とかワーワー言うので、「よしわかった、わかった、やめてくれということだけわかった」と言ったことがあるんです。あれはいまでも、激戦をやっている選挙区に行つて話してやると、一般の人は聞いているよ。

■宇野内閣4（組閣と幻の官房長官）

伊藤 この宇野内閣は二ヶ月ばかりで終わりますが、この宇野内閣への入閣問題なんていうのはなかったですか。

海部 官房長官をやれと言われたんですよ。それは僕が申し訳なかつたけれど、おれはできない。官房長官というのは総理と一心同体で、少なくともそれは直系の同じ派閥の中の者が出て行く。汚れ役でしょう。みんなきれいにしておけなくてはいけません。それはいいじゃないか。

伊藤 「いまは」小泉さんと福田「康夫」さんか。これはいいのか。

佐道 難しい関係ですね。悪くはないでしょうね。

海部 だつて小泉は福田「赳夫」さんのところや安倍「晋太郎」さんのところで、あれだけ玄關番をやったり、書生をやっておつたんだから、そのまた大親分の福田さんの息子さんには、長い関連があるわけですよ。だから決しておかしくないでしょう。

伊藤 そういう人間を官房長官にすればいいわけですからね。宇野さんだつたら、宇野さん直系の人がいないんですか。

海部 いないんですよ。小泉と一緒だから。

佐道 中曽根派の中でもちよつと浮いた存在だったんですね。

海部 それが、「おれが、おれが」で、口が立つし、本当の仲間とか後輩というのがいなかったわけだ。

伊藤 でも政治家にとつて心を許せる相手がなくて、官房長官をやってくれる人がいなかったら大変じゃないですか。

海部 それは大変ですよ。

佐道 宇野さんはそもそも、組閣ということになって、ご自身が決められたんですか。それとも竹下派が――。

海部 中曽根さんが竹下と相談したんでしょうね。

伊藤 たぶんそうですね。

海部 あるいはあの頃はもう竹下よりも金丸さんとやっておったんじゃないかなと思うけれど、そこはわかりません。ただ僕は両方からいろいろな情報を聞いたから、これはここに行くなということとはわかった。それで「官房長官ということをやったよ」と言われるから、「それは勘弁してください」と言った。うまく行きっこないんだから。宇野さんと僕は腹を割って話したこともあまりないし、向こうだって、同級生のおれだから、ああこの野郎、と思っっている面もあるだろうし。

伊藤 それはやりにくいでしょうね。

海部 それから、飲みに行ったり、飯を食いに行ったりする同年兵のつき合いはあるけれど、腹を割って「話したことはない。だから」思想信条、政治の方向はわかりませんからね。そうするといちいち指図をもらわずに腹を読んで、答えなければならぬということとはとても難しいから、それはもつと身近な人から選んだ方がいい。それは僕の本当の正論だったんですよ。

伊藤 でも官房長官というポストはかなり魅力的ではありませんね。

海部 それは大きい方から小さい方までいろいろ魅力的なポストがあるし、いろいろの実権は握れます。それはそうですよ。けれどもそれは心安らかにできることじゃないから、いけませんわ。大前提が崩れますもの。

伊藤 何でもダボハゼみたいに食いついてはいかんといいことですか。

海部 それはいけません。

佐道 宇野さんは先生と同期生で、中曽根さんは三木内閣のときに幹事長をされたりしたことがあったんですが、宇野さんと先生はあまり接点はなかったんですか。

海部 いや、青年局長だとか、いろいろな仕事で向こうは前任、こちらが後任でずっと一緒にやってきました。日本青年海外協力隊をスタートさせたときも、スタート時は僕が青年局長だったけれど、その前任は宇野であったしね。だからそんな頃からつき合はずっとあ

ったわけですよ。けれども、この人の官房長官になって、酸いも甘いも全部こなし、縁の下の力持ちをやることはとてもできないわ、と思った。もうちよつと人間的な信頼関係というのかな、そういうものがないとああいいう仕事は務まらんのかな、というんですか。

伊藤 それはつき合いの仕方にもよると思いますが、相手の人間性の問題もあると思うんですね。この人だったら、多少思想信条は違ってもやれる、ということだあってあり得るじゃないですか。

海部 それはあり得ると思えますね。

伊藤 宇野さんの場合はちよつと別ということですね。

海部 ちよつといろいろ、それは曰く言い難い。

伊藤 なんとなくわかるような気がします。

■宇野総理退陣と後継総裁戦

伊藤 結局、その結果、宇野さんが二ヶ月足らずで退陣する。これまた人選ですね。何回も総裁選挙をやらずに決めてきているわけですね。

海部 話し合い、馴れ合いだ。

伊藤 そのことに対する批判もあったんじゃないですか。

海部 あったんです。

伊藤 ちゃんと総裁選挙をやれ、ということですね。

海部 だから僕がやらされたときは、お膳立てはだいぶできて、過半数はこちらを支持するとわかったところまで行っただけで、そういう自民党ですから、これは密室でつくったり、話し合い、馴れ合いでつくってはいかんから、選挙で決めようと言いついて、結構だよ、やりましょう、ということになったんですな、あのときは。それで石原慎太郎と林義郎が結果的に出たんだけれど、もう一人、やる、やると言っておいて、前日まで僕のところへ電話してきた者がいる。田中角栄の直系の山下元利。あれが私も立候補すると言っ

ていた。おれも、やめる、というわけにはいかんし、あれともいろいろつき合いがあるから、夜に電話がかかってきて、「おれは出ますから、どうしてもやらんらんことになったわ」と言うので、「じゃあやったらいいじゃないか。みんなで作って、『多々ますます弁ず』でわうわう言ったほうが自民党のためになるよ」と言ったが、山下はどうとうやめちやったな。

伊藤 それは何ですか。

海部 なんてやめたか知らん。結局、石原慎太郎は、推薦人が揃うか揃わないかで山中貞則のところに頭を下げにいつて、貞則さんが叱りとばした。それは貞則さん本人から僕は聞いたから。こつちもそんなときに、そうえらそうに、みんな駄目になったほうがいいです、とは言えんから。

伊藤 つまり石原さんは推薦人を集めたわけですね。

海部 いや集まらなかったから、最後の最後は山中貞則のところまで行って、山中貞則が、同じ中曽根派の中ですから、一人二人を大目に見て、辛うじて石原が立候補できるようにしたわけだ。林義郎は竹下のほうの組だけれど、直系直流じゃなかったのが悲しくて、竹さんが、あるとき「すでに派閥の時代じゃない」と言い出したんだからね。あまり派閥、派閥と言ってやっておったんだから、逆風を喰らったんだ。せめて今度は派閥じゃなしにやろう、と言った。

それがまた大きなことを言えないのは、派閥でやろうと言ったらあのとときの河本派は三十二、三人しかいなかったし、明らかに海部俊樹には反対だというやつが、鯨岡兵輔はじめ何人かおって、そんなことで勝てるような状況ではなかったですよ。

伊藤 河本派自体が、自分のところの候補にするかどうかかわからないですね。

海部 全会一致ではない。ただ、いまやっておる大島「理森」とか高村とか、臼井「日出男」とか、ああい組から下は全部、「やりましょう」と言って、やっておってくれたけれど、おれより上の連中は、危ないわ。

伊藤 でも推薦人は。

海部 みんななりましたよ。面従腹背かもしれん。けれどもそれは済んだことですから。僕はみんなに助けてもらって、みんなに支持してもらって、ちょうど今日の田中派と同じだ。竹下派のほうから過半数がこつちに来るわけでしょう。

伊藤 過半数なんですか。

海部 林義郎がいくつかつかかかりがあった。それから石原慎太郎は、田中派の右派のほうとあの頃からつながりもあつた。けれども「絶対負けやせんから、ええから安心して頑張り」といつて、票読みの結果は教えてもらった。

伊藤 竹下さんからですか。

海部 ああ。

伊藤 そうですか。プロモーターは竹下さんになるのか。中曽根派は――。

海部 中曽根派は渡部美智雄がいるけれど、宇野宗佑のためには本気になってやらなかったし、宇野宗佑の後の海部俊樹になると、渡部美智雄は渡部美智雄で、自分のほうが役者が上だと思つていながら。歳ももちろん上だ。スト権のときは、党の副幹事長と官房副長官の立場もあつて、一緒になつて党代表と役所代表でやつていたから、お互いによく知つているわけだ。けれども、宇野宗佑にはあまりいい感情を持つていなかった、してやられた、という感じを持つておつた。それからあの人は、自分はリクルートで激しい痛手を負つておるから、今回はしようがない、やつちやえ――。

伊藤 要するに海部さんを推すほうですか。

海部 そう、推すほうだった。

伊藤 ということは、中曽根派はだいたい推してくれたわけですか。
海部 だいたい推してくれた。それは中曽根さん自身が僕の仲人だったんだもの。そういうことは陰となく日向となく、中曽根さんはみんなに話して、僕も押さえておるから、と言つてくれたし。三木さんと中曽根さんいろいろあつたからね。思い出すと、旧改進黨

ということだ。僕はそこにもお使いに行ったことがあるし。

佐道 中曾根さん自身もリクルートで引つかかったんですね。

海部 そうですよ。

伊藤 そうすると、宮澤さんのグループはどうなったんですか。もう宮澤派になってますね。あのグループは支持してくれたんですか。

海部 いや、宮澤さんは支持してくれなかったはずですよ。

伊藤 じゃあ、どこを支持したのかな。

海部 竹下派と安倍派の影響力の及ぶ範囲をつけてくれたわけだ。

佐道 それで過半数になるわけですね。

伊藤 だけど、候補者が三人しかないのに、宮澤派はどこにいったのかな。

佐道 自主投票だったんじゃないですか。派としてはなくて。

海部 派としては、あるときはどこも何もやらないんです。

伊藤 個人が勝手にやるということですか。

海部 はい。

伊藤 じゃあ、海部さんを推してくれた人もいるはずですね。

海部 宮澤派におりながら、推してくれた人はよく知っています。

伊藤 やっぱりそういう人がいるんですね。派閥といって、昔よく言われたじゃないですか、竹下派みたいなガチツと——。

佐道 「一致結束箱弁当」ですね。

伊藤 そうは言いながら、派閥によっても違うし、時期によっても違うということですね。今日のような状況が少しずつあったわけですね。よく考えてみたらそうですね、林さんが出たって。今度だつてそうじゃないですか、藤井さんは勝手にやれという話ですからね。

海部 「今回」宮澤さんのところに行った話を漏れ聞いたね。丹羽雄哉が宮澤派から誰もやらんというのなら、みんながやれと言ってくれるからやらしてもらいましょう、ということ、宮澤さんのところにも仁義を切りに行ったと言うんだな。そうしたら、「おやりになるって、何をおやりになるんですか」「総裁選挙に参加させて欲

しいと思つています」「はあ、自民党の総裁選挙にね。申し上げておきますが、私は賛成できません」と言つたというんだ。それで丹羽雄哉がっかりしたというのが、撤退する本当の原因だつたとみんなにしゃべるものだから、すぐに伝わってくる。

伊藤 あそこは宮澤さんがオーナーなんですかね。

海部 オーナーですよ。だつてむかし長銀を食いつぶして、池田勇人さんのところに行つておつた金脈を引つ張つてきて貯めたのが宏池会ですから。そしておれも親しかつたが、前尾繁三郎先生を追い出して、クーデターをやつたのが宮澤でしょう。それは田沢吉郎だとか、ああいう連中がしよつちゅうこつちに話すわけだ。

伊藤 やっぱり政界というのは、ずいぶん情報が流れるんですね。

海部 流れます、それは流れます。

伊藤 必ず敵がいるわけですからね。

佐道 じゃあ、堀内派というふうになつていても、実質的には宮澤さんの影響力がまだ相当あるんですか。

海部 まだ残つているんじゃないですか。

伊藤 それで立てないんだな。

海部 だから宮澤さん自身は何も言つたり、やつたりしないけれど、その気になつて全力を挙げれば、堀内「光雄」で戦う目だけはあつたはずだよ。野中あたりも、「堀内で本気になつて反小泉で組んだらば、われわれも応援する」といって、そこまで腹を決めたときがあつたんだ。それが、そのつつかえ棒を外されたから、目の前から暴れる牛がいなくなつた闘牛士みたいなもので、あれよ、あれよといううちにおかしくなつちやつた。そして見渡したら、妙なものが一人、二人おる。「なんだ、あれは」と言つて、同じ派閥の中でお行儀の悪いやつに食いついたわけだね。そうすると、マスコミや国民にはそういう話のほうを受けるでしょう。活字も大きくなるでしょう。前から辞めるだろうということは、ひとにも言われておつたし、匂わしておつた。そういう人にとつてみれば、ああいう機を見るに敏な人は、ここぞとばかりに食いつくわね。それで振るわね。

そうするとだんだん高くなっていくわね。

伊藤 単なるリタイアじゃないんだ。

佐道 辞める前に最後にもう一花。

海部 ああであった、こうであったと言つて、辞めるわけだ。

伊藤 ありがとうございます。四時を過ぎていました。これで先生の内閣の組閣というところからお話をいただくということになります。内閣総理大臣の時代がハイライトですので、そこはしっかりとお話していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 25 回

海部内閣 I —成立— (1989)

【2003年12月17日（水）14:00～16:10】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2003年12月17日)

1. 今回は先生が総裁・総理に就任されるころのお話からお願いします。リクルート事件・消費税の反発・宇野首相の女性問題など大変な逆風で自民党は89年7月の参議院選挙で大敗し、宇野首相は辞任しました(7月24日)。後継に先生のお名前があがったわけですが、派閥の長たる河本氏も健在で先生の立場はなかなか難しくなられたのではと思いますがいかがですか。そもそも先生を後継にというのはどなたのお考えなのでしょうか。
2. 8月8日、林義郎、石原慎太郎の両氏が対立候補にたち、総裁選挙が行われました。先生は竹下派・安倍派・中曽根派の支援で279票を獲得し総裁に就任されるわけですが、この総裁選挙を采配したのはどなたでしょうか。また、林氏や石原氏は負けを覚悟で出られたと思いますが、両氏とは意見交換されたりなさいましたか。
3. 8月9日、海部内閣が成立します。蔵相・橋本龍太郎、外相・中山太郎、官房長官・山下徳夫(8月25日、森山真弓に交代)で、女性の高原須美子氏や森山真弓氏が入閣しました。一方、党の方も小沢一郎幹事長、唐沢俊二郎総務会長、三塚博政調会長という布陣でした。内閣および党の人事はどのようになされたのでしょうか。
4. 内閣発足直後、山下官房長官が女性問題で辞任します。政権のスタートにあたってダメージも大きかったのではと思いますがいかがでしたか。後任に森山氏をすえられたのはどういったお考えからですか。
5. 首相就任にあたって、先生が第一の課題と考えておられたのはどういった問題でしょうか。
6. 8月30日から9月10日まで、先生はアメリカ・メキシコ・カナダを訪問されます。このときの外遊について印象に残っておられることなどお願いします。また、ブッシュ大統領との会談などについてもお願いします。
7. 9月4日から日米構造協議が始まりました。貿易不均衡をもたらす構造要因の改善を一年間にわたって協議しようというものです。大店法改正、公共投資拡大、独禁法強化などが課題になっていくわけですが、いずれも国内的には対処の難しい問題でした。日米構造協議について先生はどのような見通しをもっておられたのでしょうか。
8. 10月1日、初の政府招待でPLOのアラファト議長が来日し、先生と会談しています。日本としても積極的に中東和平に関わっていく姿勢を明確にしたわけですが、このときの中東和平への取り組み方などについてお願いします。
9. 11月10日、ベルリンの壁の取り壊しが始まりました。東欧諸国は一気に民主化に向かい、冷戦も12月の米ソ・マルタ会談で終了ということになりました。戦後の国際秩序が大きく変化を始めたわけですが、先生はこの問題をどのように見ておられたのでしょうか。また、外務省などの分析はどうだったのでしょうか。
10. 12月1日、自民党は消費税見直しを決定します。そもそも10月2日の第116臨時国会の所信表明演説でも消費税見直しについては触れておられました。12月に決まったのは、食料品小売り非課税、家賃・教育・出産費なども非課税にし、福祉目的とい

うことです。消費税問題について先生はどのようにお考えでしたか。また、この見直し問題で中心的な役割を果たしたのは誰でしょうか。

- 1 1. 同じく 12 月 1 日、フィリピンで国軍約 2000 人の反乱がありました。マニラ市内で銃撃戦もあったわけですが、フィリピンは日本との関係も深く、在留邦人も多いわけですから情報収集や邦人保護体制をどうするかといった問題がすぐに生じてきたと思います。総理として日本の体制についてはどのように見ておられますか。
- 1 2. 年明けそろそろの 90 年 1 月 8 日から 18 日、先生は欧州歴訪に行かれます。このときの訪問の主目的および印象に残っておられることなどお願いします。
- 1 3. 1 月 24 日衆議院が解散され、2 月 18 日投票、275 議席を獲得します。海部内閣として最初の選挙であったわけですが、「体制選択の選挙」を掲げたこのときの選挙について、取り組み方、とくに力を入れられた点などお願いします。

※今回は以上のような質問についてお願いします。

■現在の政局から一（二〇〇三年総選挙）

伊藤 前回は九月でまだ解散前でしたから、この三ヶ月間にずいぶんいろいろなことがありましたね。僕は選挙速報を見ていたんですが、海部俊樹「当選」がなかなか出て来きませんでした。一番最初に出てくるんじゃないかと思っていましたんですけれどね。

海部 いや、そうばかりもいかんのじゃないですかね。地元の人たちがどういう評価をするかわからんから。出口調査というのをやって、前回、前々回と比べてみたら、意外と民主党が多かった。

伊藤 それでなかなか当確が出せなかったんですか。

海部 そうそう。途中で電話してきて、「そういう状況ですから、先生、ちよっとお昼過ぎの発表まで待っておってください。先ほどは失礼しました」なんていろいろなことを言ってきてさ。あれもどうかと思うね。

伊藤 出口調査というのは必ずしも当たらないんですよ。みんないい加減なことを言っているんですから。

海部 当たらないね。

楠 それに、ちよっと待っていれば結果が出るんですからね。

海部 そして途中では、いかにもこちらが落ちるような話をしてさ、「やっぱり世代交代でしょうかね」なんて言ってくるやつがおる。

「そういうやつもおるだろうけれど、おれはそんなことは信じない。君の社はそう書きたかったら、明日一番に見出しのトップに使えよ、赤っ恥かくぞ」と言ってきた。

伊藤 でもやっぱり、保守党は駄目でしたね。

海部 応援に行ったやつはみんな落ちちゃった。

伊藤 党首が落ちたらね。

海部 結局、いくらいいことを言ってみたって、政党は二大政党になっただけな。

伊藤 マスコミのリードがそうでしたからね。

海部 マスコミもそれを狙ってやっておったんだからしょうがないんですが。

伊藤 選挙が終わって、じきに自民党と保守党が合流ということになったんですが、それはサツと決まったんですか。

海部 こちら「保守新党」は十三名「候補者を」立てて、そのほとんどの応援に僕は行きました。自分の選挙区には、途中の舞い戻りを入れて三日間か四日間しかいなかった。秋田の佐藤敬夫も東京の西川太一郎も、山谷えり子も全部落ちちゃった。街頭演説をやるとうとう人が集まったんだよな、東京でも。

伊藤 そういうところに集まるというのは、あまりあてにならないですけれどね。

海部 救われるだろうと思って、一所懸命喜んで応援してきたけれど、駄目だ。それよりも、こいつはいいや、落ちるべくして落ちたんだから。

それで終わって直ちに集まって、「あまりみつともない悪あがきはやめて、グッド・ルーザーになろう」と言った。これで怒って割り込んでいっても、政局がどうなるわけでもない。政策をどれだけ変えられるわけでもない。だからグッド・ルーザーで行こう。見ておると、自民党のほうも足りない。過半数に達しないときはと、自民党のほうから事前にあらかじめ言ってきておったから。

伊藤 そういう自民党側のヨミもあるんですね。もしかすると、ちよっと足りなくなるかもしれない、という。

海部 最後は本当にそうなっちゃったんだ。そして、わがほうの四つがプラスされれば、自民党はそれで過半数に達するということですから。

伊藤 公明党と組んで過半数になっただけでも、自民党自体として過半数であるということが大事だ、ということですかね。

海部 そうでしょうね。それは公明党とのあいだは、ちよっと違いがあるものだから。

伊藤 それは「ちよっと」ではなくて、かなり違ふと思ひますが。

海部 だから、できれば自民党だけで「過半数をとりたい」。

伊藤 それは迫力がありますね。いよいよよになつたら、おれの党だけでやれるよ、ということですからね。

海部 だからどうしても話がかんときは、「わがほうは国民に、これで行きたいから、こうしてくれ」と言えますからね。またそういうわかりやすい態度、姿勢が、有権者には一番わかるんじゃないかな。

伊藤 そうですね。

■現在の政局から②（保守新党の自民党への合流）

伊藤 「保守新」党内に、合流することに反対はなかつたんですか。

海部 別のつまらん理由で、「総理、そんなことをおっしゃらずに」と言ったやつがおつたけれど。

伊藤 合流したら、自民党とバツティングする人もいるわけですか。

海部 いや、バツティングとかそんなことではなしに、もうちよつと次元の低い、いつも出てくる話です。連立与党でおるから、いろいろなところにいるいろいろな出番が回ってくるし、いいものも来るけれど、合流したら少ないワン・オブ・ゼムだから。

伊藤 そういうふうになつたときに、自民党の中で海部派になるわけではないでしょうか。

海部 なりません。

伊藤 結局、ばらけるわけですか。

海部 はい、ばらけるわけです。だって、四名だもの、ばらけざるを得ない。けれども結果としては、ばらけませんでした。みんながなんののかんのかんといつて、ちよつと一緒になろうといつと、「先生、そんなほうに行くのはやめてください」と言う。

高村派はおれに「どうせそこまで帰ってきてもらつたならば、奥

座敷まで帰ってきてください、みんな両手をあげてお待ちしております」と言う。

伊藤 じゃあ、いちおうまとまって高村派に行ったということですか。

海部 いや、そうじゃないです。それはできんわけです。

伊藤 なぜですか。

海部 一人ひとりに事情を聴くと、一人ひとりの事情がいろいろあるから、それは駄目さ。

楠 だって、二階「俊博」さんなんかは、もともとは橋本派ですよ。ね。

海部 井上喜一も農林省の関係で、そこでは旧三木派と近いところがあるけれど、いま一緒になるわけにはいかんでしようね。

伊藤 三木派の流れの派閥は高村派なんですか。

海部 いま、流れてきたのはね。

伊藤 でも保守党は必ずしも三木派の流れではないわけですね。

海部 はい。

伊藤 ですから、高村派と関係を持たれたのは先生だけ、ということになるんですか。

海部 はい。

伊藤 それで奥座敷まで行かれたんですか。

海部 いや、奥座敷までは行かないけれど、「お茶ぐらい飲みに来てください」と言うから、「それじゃあ玄関に水を打って待っている」と言ったんだ。それであの連中と二、三回一緒に食事をした。僕もあまり口をきいたことがない若いのが一人二人おるから。向こうはもうはいつくばって、「三木先生からよう伺っておりますから」なんて言うから、「よし、よし」と言って。結局最終的には、「応援にいつペン来てください」ということなんですからね。

伊藤 じゃあ、いちおうはそのへんに籍を置いたということですか。

楠 とりあえずは無派閥でしょう。

海部 はい、無派閥ですよ。

伊藤 じゃあ「高村派のお友達」という感じですか。

海部 「お友達」というのがまことにいい表現です。

楠 「叔父貴」じゃないですか（笑い）。

海部 DNA鑑定をされると、すぐバレるわな。それを僕は拒否しようとは思いません。だって、負けちゃった責任はこっちにもあるんだから。あれだけ一所懸命身を粉にして応援してやっても、みんな落ちちゃったんだから、だらしないうつたら、だらしないうわ。

伊藤 その落ちた人の中で、再起できそうな人はいますか。

海部 僕は佐藤敬夫は再起できるのではないかと思う。応援に行つてやったときのみんなの集まり具合だな。佐藤敬夫の支持者から、「むかし海部内閣のときも私は秋田県の代表で二度ほど研修にも行きました。引き続き佐藤敬夫をぜひ出したい」という色紙を書いてくるような手紙とともに、「今度頑張れ、勝てという色紙を書いてください。それを正面にかけてまた頑張ります」という。だから「落選した中で再起できそうな者は」三人、四人はおるんだな。

伊藤 でも今度、そういうところで自民党が候補者を出したら――。

海部 出さない。

伊藤 そのへんは話し合いが一応あるわけですね。

海部 はい。出したらまたそこで票が割れて、漁夫の利をとられる。

伊藤 民主党にやられちゃうということですね。

海部 そうです。だから僕らも高い次元に立って、「民主党にやられたらいいのか、日本の政治としてどつちがいいのか、よく考えろ」と言った。結論はわからんかもしれないけれど、あのマニフェストなんていうものを見たって、あれで鬼面人を驚かすように、高速道路はただにしますなんていつたら、それは払っておるのがいいか、ただがいいかといったら、ただがいいに決まっておりますよ。

伊藤 そうですよ。どこにツケが行くか、ということですね。

海部 そのツケがエブリ・イヤ―二兆一千億円でですよ。

伊藤 管理する費用だつて要るわけですからね。

海部 管理費も要るし、新線の計画も要る。

伊藤 よくもああいうことを民主党の菅「直人」代表は言ったものだと思つて、僕は感心していますけれどね。

海部 あれはつまみ食い政党の最たる姿ですね。

伊藤 菅さんとは、先生はほとんど接触がないですか。

海部 そうでもないです。昔は話したこともあります。

伊藤 菅さんも、端倪すべからざるところがありますからね。

■現在の政局から3（中から見た自民党）

佐道 いままで自民党に近いところでごらんになっていたわけですが、しばらくぶりに「自民党の」中に戻られて、「あれっ、変わったな」と思われたところはございますか。

海部 まだそこまで、実感としてはわかりませんね。

伊藤 額「歴代総裁の肖像の額」が掲げられたぐらいですか。

海部 「この額はちゃんと埃も払ってありますし、大事に保存しておりました」という。「その点で自民党という政党には、おれよりも気の長いやつがおるんだな」と言った。「どういうわけですか」と言うから、「おれだったらそんなものは捨ててこいと言うよ。帰ってきてもらえるかどうかからん人のために、そんなもの、埃を払って待っておるわけにはいかんじゃないか」と言ったんですけれどね。

伊藤 見事に、歴代総裁の肖像が並んだわけですね。一つポカッと空いていたのに。

海部 一つだけポカッと空いていたんだ。

伊藤 それはそれで、海部先生にはよかったです。

海部 はい。

伊藤 やはり自民党の最高顧問ということになるわけですか。

海部 自民党が最高顧問という制度を廃止しましたからね。要するに、自民党はどういう名で処遇するかというと、とにかく肖像画は

掲げて敬意は表しますと言う。最高顧問という名は、いつだか、なくしたんだってね。

伊藤 そうですか、知らなかったな。

楠 「最高顧問になるのは」たしか、総理と議長経験者でしたね。

海部 一つの間になくなったんだらう。小泉改革かな。

佐道 総理経験者は強制引退というところもありますからね。

伊藤 そうですよ、宮澤さんと中曽根さん、お二人は老害だとかいわれて、テレビで一番高い席を写してしまいましたけれどね。

海部 そこにまた行った。気がついたら戻らされているわけだから、

おやおやと思っただけれど。

伊藤 やっぱり上の方ですか。

海部 一番は山中貞則さんです。

伊藤 あれは年齢ですか、当選回数ですか。

楠 当選回数でしょう。

海部 当選回数でしょうね。

伊藤 そうすると山中さんと来て――。

海部 それで僕がおつて。

伊藤 もう、次が先生ですか。

海部 おう。それでその次が橋本龍太郎だ。

楠 それは全党を通じてそうですね。先生が二番目ですね。

伊藤 ほかの党にも、もう長老議員はいませんか。

海部 もういないですね。

伊藤 社会党は長老議員がたくさんいたんですが、あれはみんな大臣になって成仏したから、いないのか。海部先生は七十一歳でしょう。

海部 もう七十二歳になりました。

伊藤 えっ、定年は七十三歳じゃないですか。

海部 それは比例区に働かずして名をとどめる人は定年だ。それはなりたいやつがたくさん待っておるから。小選挙区で出て、当選するのは問題ない。

佐道 山中貞則さんも小選挙区で勝ちましたからね。

海部 やつてきたんだよ、あれは。それから森山真弓さんなんていう人は、今度は小選挙区に回りたいといっている。小選挙区で当選すればいい。あのおばさまも七十五歳だったらう、このあいだは。

伊藤 へえ、そうですね、若そうに見えますけれどね。

佐道 やっぱり小選挙区で通った人のほうが「上だ」、というイメージがあるわけですか。

海部 いやいや、男の生き様として。

伊藤 女ですよ。男なんていったらもう（笑い）。

海部 彼女もできれば、政治家の生き様として、自分の名前を書いてもらつて、それを何万票と集めて、その結果に一喜一憂しながら、最後に決まったときはこうだったというのと、順番を決めておいて「当選するのとは違う」。順番を決めるときもいい加減なものだよな、あれは。党が決めたリストの何番目で、何番まで当選できるか、あなたは何番だから駄目だ、ということになるでしょう。個人の努力とか個人の声望、人柄以外のところで決まっていくんですから、それは不満を言う人もおりますよ。僕らもやってみて、やるなれば小選挙区で名前を書いてもらおう。そういう場ならば望みますが、

党の名前でやつてくれといったら――。

伊藤 やめたほうがいいですね。でも中曽根さんの場合なんか、小選挙区で出るといったのに、駄目といって――（笑い）。

佐道 やっぱり駄目そうだった、ということですが（笑い）。

海部 中曽根さんは、口では出ると言つたけれど、出るところがないんだ、一つずつぶしてみると。それで自分のせがれ「弘文」は参議院に出している。だから群馬県の人たちは、「それはずるいよ、

息子はおれに代わつてやらせるんだからといって参議院のほうで、比例でなしに選挙区で当選しているから、それでいいじゃないか」と思うだろう。もし中曽根さんが天下っていくところを見つけてあげようと思うと、小淵優子のところしかない。

伊藤 そうか、それじゃあちよつと駄目だなあ。

■現在の政局から4（小泉内閣の現状）

佐道 このあいだの選挙では、小泉さんというか、自民党はもっと票を伸ばすのではないかと事前には言われていたんですが、結局、思ったほどではなかったという言い方がされていますね。

海部 そうですよ、小泉はもっと圧倒的に勝つつもりでおったもの。

伊藤 そうですか。だけど「事前には」、民主党が大いに伸びて、自民党は云々という話もいぶんあつたように思いますけれどね。

佐道 小泉さんの人気で選挙をやつて、だいぶ勝つだろう、少なくとも過半数は上回るだろうという言い方がずっとされてきましたね。でも実際にやってみたら――。

海部 やつてみたら――。言いにくい話だが、安倍晋三に対する過大評価もだいぶあつたな。マスコミや評論家の皆さんのあいだで。

楠 安倍さんが幹事長になったときには、先生も驚かれましたか。意外でしたか。

海部 いや、意外じゃないけれど、あそこまでとにかく降りていって漁つてこないと、人がおらんな、と思った。しかし考えてみれば、当選四回、四十六歳といえは、不足ではないな。

伊藤 まあそうですね。

楠 小沢さんだつて、そのぐらいでやつたわけですね。

海部 小沢一郎も、田中角栄も四十幾つで「幹事長を」やつていてでしょう。

伊藤 やはり幹事長なんていうのは、それぐらいまで若返らないと駄目かもしれませんね。

海部 はい、思い切つてそこまで行つた方がいい。だから僕は、

「安倍でいいじゃないか」と言っていた。

佐道 もうちよつと勝つだろうという党内的な予想があつたとしたら、小泉神話に対してだいぶ見方が変わったんじゃないでしょうか。

小泉さんもそれほど選挙には強くない、というふうには。

海部 今日になってみれば、あれは神話であつたわけだし、強くない。なぜ強くないかというところ、あれは強情だからいけない。もっと素直に、ああ間違つたなと思つたら、それを訴えて変えていったほうがいい。例えば、と言わせると、やはり靖国問題のところにもんながもつていく。八月十五日に公式参拝するのか、それを早めるとか、遅らせるとか。靖国参拝の本質は、そんなものじゃないと言うんだか。日にちがどうかとかこうだとか。それをああいふやり方をしたでしょう。要するに、いわゆる手練手管を使いすぎた。

伊藤 あとでデメリットがあつても、最初の公約どおりやればいいということですね。

海部 そういう批判が、身内からいぶんありましたね。

伊藤 でも、小泉だからこれだけで食い止めたという言い方もあるわけですね。

海部 それは、安倍だから食い止めたということを一所懸命言いたい勢力もあるし、そういうところもあつたかもしれん。

佐道 でも森「喜朗」さん「が総理の時の総選挙の自民党獲得数」と数がほとんど同じですからね。

伊藤 過半数割れというのは初めてのことじゃないですからね。しよつちゅうハラハラして、無所属で当選したのを入れたりして、やつと辻褄を合わせていたわけでしょう。

海部 そうです。

佐道 そうすると、またぞろイラクの問題で小泉さんの人気が上がつた。来年のことではあります、参議院選挙というのが目に見えてきている状況で、自民党内は少しづつガタガタし始めているんじゃないか。

伊藤 ガタガタするだろうけれど、この前先生がおっしゃつたように、タマがなければ戦争にはならない。

佐道 そういうことですね。

海部 代わるのがおらんのだから。

伊藤 高村「正彦」さんあたりが、もつとしつかりしてくれないと駄目なんですよ。

海部 あの人も、いろいろなコメントをもつと気をつけてやってくれんと。おれは呼んで会ったけれど、もうちよつとしつかりちゃんとするれば、高村あたりもときどきは「総理候補として名前が」あがってきたんだけれどね。

伊藤 もう少し大衆受けをするような態度が必要だと思えますね。

海部 そういうこと。今日の政治家というのは、一般国民から見えておつて、その目の前で、これは明らかに間違っているなと思つたときに素直に頭を下げて詫びる。判断間違いだつたという。それをやって素直に説得していけば、わかってくれると思う。それがいま、小泉にも全然ない。

佐道 戻られて、「小泉さんと」直接いろいろとお話をされましたか。

海部 はい。

伊藤 小泉さんとは前々からですか。

海部 前々からというか、海部内閣の小選挙区制の時には、あいつは反対の先鋒だつたんだから。そのときできたのがYKKですよ。だから向こうにとつてみても、一番憎いのは海部内閣ですよ。けれども向こうは、狙う相手を間違えておつたんですね。そして——、まあ、なんでもいいや、そんなことは。

こつちもやってみたけれども、YKKというのは、みんなそれぞれ反対に回つて、総務会で裏口をやられたり、工作をされたり、ひっくり返しをやられたり、いろいろされましたから（笑い）。

伊藤 いまYKKも、どういうことになったのか（笑い）。

佐道 K「加藤紘一」は一人戻りましたけれど、もう一人のY「山崎拓」が落ちて——。

海部 僕は、「ヤマタクは参議院に出んほうがいいぞ」と言つてやつたんだ。それこそ謹慎ということを日本の社会は認めるから、参議院選挙の最中は寺にでも籠らせて、それで参議院選挙が終わつた

ら、これで私の喪も明けましたといつて出て来たら、そのほうが生まれ変わるとすれば「いい」。けれどもいきなり、衆議院に負けたから今度は参議院に行くと言つたのでは、それはみんな感心しないな。だつて山崎派と言われる連中が僕らに「そう思いませんか？」と言うんだから。みんなの前で、「あんなのがやつたら恥ずかしい」と言う。「それなら君らが集まって、引きずり降ろせばいいじゃないか」と言つたら、「いいや、それは——」と言う。

佐道 クーデターを起こすほどの元気はないわけですか。

海部 ないわけです。みんなそんなクーデターを起こすようなエネルギーも活力も残っていないでしょう。全員がショックを受けちゃつて。

伊藤 自分のところの親玉が落ちちやつたわけだから。

海部 しかもその親玉がまた出てくると言い出したから、「親分、ちよつとそこところは」と腹の中では思っているんだけれど。

伊藤 でもあの親分がオーナーのわけですか。

海部 そう。

伊藤 しょうがないな。

楠 やつぱり派閥のボスとしてみれば、ノーバッジで次の選挙までいるというのは非常に辛いんでしょうね。

海部 それは辛いわ。まず資金面の問題でも辛いだろうし。応援に行つても、バッジがない人はあまり価値がないだろうし。

伊藤 応援に行つてもあまり歓迎されないでしょうね。

佐道 あまり応援してほしくないでしょう。

伊藤 ヤジが飛ぶんだ。

海部 それからあまり愛想のいい可愛い顔じゃないから。

佐道 落選した理由自体はなくなつたわけじゃありませんからね。

楠 襖ぎは済んでいないんですね。

伊藤 やつぱり愛嬌があつて、花がある、というのは必要ですね。

海部 そうして、もうちよつと明るく振る舞えね。

伊藤 そうですね。あの人、なんかちよつと暗いですね。

海部 暗い。ネクラはだめですよ。ネアカじゃなければ。

伊藤 しかしいいまでよく当選してきたな。

海部 そして国民的に、すぐに同情が湧くような科白や態度振る舞いができれば立派なものだけだ。

■総裁戦への経緯1（橋本・河野・海部会談）

伊藤 女性問題と言えば、先生が総理になる前の「総理だった」宇野さんが代表的ですが、女性問題で辞任したというところとちよつと具合が悪いから、そのあとの参議院選挙で負けたということと責任をとる、という形にするわけですね。

海部 そうです。

伊藤 それは突然のことですから、次をどうするかということについて、いったい誰がどういうふうに決めていったんですか。それはご本人としてわかるものですか。

海部 僕はわかりませんけれど――。

伊藤 だいたいの推測としては――。

海部 それは途中でピンハネして、不労所得を身につけようと思つて僕のところに来て、「今度は君だよ、断わるんじゃないよ」という者がおる。「いや、そんなこと、あんたに言われたって、そうはいかんわ」と言つたけれど、恩を売りに来るわけだ。あの頃、橋本龍太郎もたいへんな候補者だったんだ。ところが、それはいかなる加減か、金丸「信」さんのところでつぶされちゃったんだ。「あんな者は駄目だ」という一言でね。その頃、河野洋平も、さあとなつたら第三の男だった。ここから先は、悪いけれど実名が入るから、あれだけだね。

伊藤 いいですよ、あとで消せば。

海部 橋本と河野と僕と三人で、いっぺん忌憚のない話をしよう。

伊藤 誰が「言い出したんですか」。

海部 われわれ三人が。

伊藤 でも、誰かが言わなければならぬでしょう。

海部 それは私が呼んだ。橋本はその場で、「おれはやれん」と言う。それは金丸にあれだけ駄目だと言われて、田中派の中で集まつて、あれはない、とまずやられたわけですからね。

伊藤 当時の金丸さんだったら、もう言つたら駄目でしょうね。

海部 だから、「もうしようがないから、しばらくは布団をかぶるか、下働きで雑巾がけをやるよ」ということでしょう。それから洋平さんも、あの頃は河野総裁に直ちになるべしという擁立論がそんなにあつたわけではないけれど、しかしこれだけ人材不足になつてくると、宇野が駄目ならば、宇野の近いところの派閥におつたのは河野洋平ではないか。お父さんの河野一郎先生が宇野をことのほか可愛がつたわけだから。そうでしょう。

それでまんざらでもないから、橋本が、中曾根の天下を取つたときの姿を思い出したのかな、自分が一步退いて、あとの者に恩を感じさせて身を退けば、やがて芽が出る春が来るといふことで、三人で会つたんです。会つて、いろいろ話をした。僕もそんなときに、おれがなる、なんていうことは考えてもいなかったからな。名前が出ておることは知つておつたが。

そうしたら、金丸さんと安倍「晋太郎」さんと竹下さんが、それぞれ直接電話をかけてきてくれて、言うことがだいたい重なつておつたわけだ。「われわれでも話をしたから、あんたが受けてくれな」と党が大変なことになつてしまふ。腹を決める」と言う。

伊藤 金丸さん、安倍さんというのは、自民党の幹部ということですか。

海部 いやいや、自民党の幹部というより、根回し専門のボスですよ。

楠 橋本さんが金丸さんにつぶされたというのは、まだ田中さんが病氣とはいへ、生きておられたから、橋本さんになると世代交代が進むから、それで駄目だということですか。

海部 いや、いろいろな意味があったんじゃないですか。

楠 田中角栄さんが亡くなったのは九三年ですね。

佐道 亡くなったのはそうですね。この年、引退するんですね。

楠 倒れたのはもうちよっと前だけれど、それでもまだ生きておられた。そういう中で、橋本さんに権力が移ると田中さんは完全に消える。

佐道 橋本さんにスキヤンダルがあったということですね。

楠 女性の問題が橋本さんにはあるから。だけどその後、総理になつたんだから、決定的な問題ではなかったんでしよう。ただ、スキヤンダルの後だから。

伊藤 そうですよ。みんな鵜の目鷹の目で狙っているわけですから、ちよっとでも何かあつたら具合が悪い。

海部 だから金丸さんは、「あれはこれが「右手の小指を立てる」あるから駄目だ」と言った。「ほんとうにあるんですか」と聞いたら「あるんだ」という。

伊藤 昔からそういうことを言われていたから。

海部 橋本自身も、河野と僕とで飯を食つたときには、「残念ながら、おれにはあるんだ」と言う。まあ、僕らも知っておるから、

「ああ、そうか」と言ったけれどね。同じことは河野にも言えるんです。河野にもあつたんだ。だから下半身の話をすると、いろいろあるわな。というようなことだ。

伊藤 それで結局話が来て、そこで海部先生としては、受けるか、ということになるわけですか。

海部 そこでそう簡単に、受けられるか受けられんかわかりません。「こっちはまだいっぺん担いで陽の目を見せてあげたいと思つておる河本「敏夫」さんがおるから、河本のおやじといっぺん話してきてから」と言つたら、「あれでは駄目だ、早く腹を決めてくれ、選挙に勝たなければならぬのだ」ということをさかんに言うんだ。そして、「河本さんにはおれが話をつける」と言う。

伊藤 誰が、ですか。

海部 金丸。

伊藤 当時の金丸さんというのは、非常に力があつたんですね。

海部 あの当時は力があつた。それから安倍さんも、電話をしてくと、「もう腹を決めたか」「はいはい」「早く腹を決めてくれよ」と言う。あんな頃、河本さんの立場から行くと、いまがラストチャンスだ。僕らも初めの頃は派閥の総会でも「ラストチャンスだと率直にいつて思うから、その気になつて、みんなやろうや」と言つておつた。とにかくここまで来たんだから、ということと擁立運動をやつておつたんだ。それが広がらなかった理由は、すぐに安倍が電話してきて、「海部、おまえの話はいくら聞いても駄目だ。世間に行つてよう聞いてこい」と言うんだ。

伊藤 そのとき中曽根派はどうだったんですか。

海部 中曽根派は宇野の所屬しておつた派閥であるし、そういうことからあまり率直に物が言えない立場だった。

伊藤 発言権がないんですね。

海部 はい。あれは駄目だ。しかも金丸さんと中曽根さんは、あの頃は最も悪かつたですよ。

伊藤 主導権は金丸さんのほうにあつたんですね。

海部 そうです、あのときは。

■総裁戦への経緯2（三木派河本と家族の反応）

伊藤 最終的に先生が決断なさるきっかけは何だったんですか。

海部 きっかけは、「もうしようがない、そこまでおつしやるならば、いっぺんおれは河本さんと話してくる」といつて、河本さんのところに行つたわけだ。河本さんも、そういう情勢はほうぼうからうすうす聴いているわけだ。

それで正直な話をする、あのころ僕自身が、あまり言いたくない話だけれど、自分の政治献金の一覧表を洗い出してみると、私は

天地神明に誓って悪いことや疚しいことはしなかったけれど、政治資金をもらった人に悪い人がおった。そういうことが出て来たわけだ。だから、こんなことをもっているうちにやったら、また叩かれる。なつても長くない。あの頃、政治資金をどこがくれるかなんていうことをいちいち調べて、あなたのところはそこ何かやっていませんでしたか、というようなことを聞いておいたら、全然もらえなくなる。しかも秘書が、それは持ってきた人と話していて届け出なんかしておいたものですかからね。だから、そのことが僕には一つ引っかけがあった。そのことは、正直に調べてみたら、五年間にわたって一千万円になるかならんか、というところであった。それはパーティ券とか、なんとか券とか、政治資金としてだった。

伊藤 パーティ券も政治資金なんですか。

海部 あの頃はみんな一緒にされちゃったな。だから、「そういうこともあるけれど、いいですか。それでもなお、やれとおっしゃるならば、私もいつペン考えます」と。

伊藤 その一番の窓口は――。

海部 僕はそういうことは河本さんに話した。

伊藤 河本さんはもう納得したわけですか。

海部 もちろん。

伊藤 金丸さんに言われて。

海部 金丸さんに言われて、河本さんは河本さんなりの脈絡でいろいろ調べてみたら、みんなが「河本さん、あなたの出る時期じゃないから、あなたのところは世代替わりをやつて、海部を出しなさい」と言うものだから。河本さんは、安倍さんや竹下さんとも仲が良かった。それで河本さん自身は、当時は渋谷直蔵というのを非常に可愛がつておつて、「海部さん、あした早朝、すまんけれど渋谷君と二人で家まで来てくれませんか」というので、渋谷と一緒に河本の私邸に行ったんです。渋谷は、何という表現をしたらいいんだろう、利口ですね。馬鹿じゃないと言った方がいいかもしれん。話はずもう、金丸さんあたりが周辺を埋めておつたわけだ。「いいか、

そう言わなければ駄目だぞ」と言った。自民党を勝たせるためには、それでは選挙できないと。

それで中曾根は駄目、これは金丸さんがあの頃まったく合わなかったんだ。それで竹下さんがああいいう格好になる。安倍さんがああいいう格好になる。あの頃はまだ安倍さんも、体のことまでは出て来ていなかったけれど、本人はうすうす気づいておつたかもしれないが、体のこと以外のことでいろいろあるでしょう。

あのときは本当にいやな雰囲気でしたよ。みんな自分でいっぺん調べてみる、と言われて、五年間遡つてずつと調べてみたら、こちらにもあるわけですからね。しかし助かったことに、それは僕自身がおつたある秘書がそれと顔をつないで、会えば話ができる相手だった。そうしたら相手が持つてきたから、もらつておきましたという。そんなこと、後になつてから言われたつて、いちいち遡つて調べるわけにいかんから、正直にみんな言つちやおう。正直に言うことが大事だよ、ここの一番。それで、みんなにも言つたわけだ。

伊藤 河本さんにもそれを言った。

海部 もちろん。

伊藤 河本さんは、それでもやれ、ということでしたか。

海部 「大したことないぞ、これは」と言った。「こんな程度のこととは大したことがない、しかも五年間でしよう、これはあれですよ」という。

伊藤 河本さんのほうからやりなさいという話が出たんですか。

海部 「無言で頷く」。それは河本さんが、それまでのあいだに金丸さんと会い、安倍さんと会い、いろいろな人と会つて、中曾根とも会つて話しているんですよ。それでみんなの話を聞いて、河本さん自身が、自分はこの際身を退いたほうがいいと判断をされたんでしようね。

伊藤 しかし派閥の長として、海部さんの後ろ盾にならなければならぬ、とは思つていたんでしようね。

海部 そうです。

伊藤 ほかの諸派閥がみんな海部さんを応援するように、ということとは、派閥の長としてやらなければならぬじゃないですか。

海部 それはそうです。またやってもらったんです。だから、あのときの方が僕の心が一番痛かったことだ。本人があれほど自分になりたいと思っていた河本さんが身を退いたわけだから。またそれは、安倍さんと金丸さんと中曽根さんともう一人誰かが、寄ってたかって話したからだ。財界人の中にも河本さんと近い人がおった。

楠 決断するときに、先生のご家族のご意見、特に奥さんのご意見はいかがだったんですか。

海部 まず「それはやめておきなさいよ」と言ったな。

楠 実は私は前にお伺いしたことがあるんですが、家族会議を開かれたということですね。

海部 そうそう。その家族会議なんて、いつも開いたことはないけれど、「やめときなさい」というのが結論だよ。

楠 坊ちゃんやお嬢さんも——。

海部 それはうちは、家内がみんなを押さえているから。お小遣いから晩飯の盛りつけをよくするか悪くするか、そんなことまではやらんだらうけれど、影響力は持っているから。「お父さん、そんな準備はまだしてないんだから」という。

楠 でも政治家となったら、誰しも一度は夢見るポストだと聞きませうけれど。

海部 その通りです。みんなが夢見ているだろうと思うし、また夢見続けるだろうと思いますよ。だから初めのうちこそ私は、あまりにも周囲のブロックが大きいので——。長老の三木派の先輩議員たちがみな反対だから。ところが年齢、当選回数が同等もしくは下のやつはみんな集まってきたて、「この際、受けちゃいなさい」という。それを割り切って、一番最初におれのところに話を持ってきたのが渋谷直蔵で、「もう河本さんと話したって、海部君、君がまず腹をきちっと決めなければ、一対一の話はできんわけだから、決めてく

れよ」と言う。

伊藤 言い含められてきた（笑い）。

海部 それで、あれがずっと説いて回ったわけですね。

伊藤 奥様が反対していても、これは押し切る以外にない。

海部 もう「初めて国会議員に」立候補するときからそうでしたから。

伊藤 そうですか、それはしょうがないな。

海部 「あなたにはこれでなんべん騙されたらいいの。私はそんな大それたことを考えていたわけではないんだから」と、さんざん言われたけれどね。

伊藤 いや、この際断わっても、まだ次に機会があるじゃないの、という可能性もあるわけですね。

■総裁戦への経緯3（派閥の力学）

海部 けれどもあのときは、みんなが世の中の終わりみたいな気持ちで、自民党というものの政権がもう終わりみたいな感じだった。

それで私が自民党最後のあれ「総裁」だというようなことも、マスコミも言ってくるし、みんな言う。なつてもならんでも、それで最後ならしやうがないな。

伊藤 有終の美を飾るか（笑い）。

佐道 たしかに竹下内閣で一桁まで支持率が落ち込んで、その後の宇野内閣がまたスキャンダルで、参議院で過半数割れですから、たしかに状況を考えると——。

楠 ただ、「海部」先生、こういうケースは、考えてみると三木さんのときにあったわけですね。そういうこともならんかの参考になりましたか。

海部 それは三木の奥さんにも、もちろん私はいろいろな話で報告には行ったんだけど、「海部さん、あんた気の毒ね。もうちよっ

と自民党がしゃんとしているいい世の中なら、喜んで、死んでもいい、やりなさいと言うけれど、こんなところに来て死んだんじゃあ、大死にだ」とかいふ。あの人は口がきついいからね。

佐道 励ましにならないですね（笑い）。

伊藤 慰めですよ。

海部 しかも、あそこをそばを取り巻いておるのは、例の鯨岡兵輔とかで、「なあ海部さん、受けたら駄目だよ。それは三木さんが悲しむよ。あんなものの後を受けんでも、やるときはまだいくらでも来るわ」といふ。いまの伊藤先生流の口説きだよ。「海部君、見渡してみろ。おりやあせんじやないか、同じ年頃で務まるやつは。いまは誰でもいいから誰かにやらせておいて、それがみんな大掃除をして、ドボンとしたあとで手を挙げればいいんだ。だから田中派のほうは利口だから、橋本を降ろしちゃったろう」といふことを、さかんに言われた。それもそうですよ。けれどもここまで来ちゃって、もう日もないし、新聞も毎日毎日いろいろなことをちらちらと書き始めて、「自分の名前が」出てくるから、もう決心しなければならんし。

伊藤 取材もいっぱいあるわけですか。

海部 いっぱいあるわけですよ、朝晩、朝晩。

楠 そういふときの、「やれ」といふのと、「やめろ」といふ意見と、何が好意で、何が悪意だからよくわかりませんね。

海部 わかりません。それがわからんから。「やれ」といふ人の中には、やって赤っ恥をかい消えちまえ、という人もおるしね。また、「やって出て行った以上は、私が応援していることを忘れずにおいでくれよ」といふ思いがあるものもある。大きく分けて二つのブロックがあると思うね。

伊藤 「やれ」といふ方は、おれにポストを寄せ、というのもあるでしょうからね（笑い）。

海部 まあ、そういうことだ。

伊藤 親しい政治家たちは、「やれ」といふほうに傾いたわけですか。

か。

海部 はい。というのには、誰かひどいことを言ったな。「この社会はな、あんまりきれいな事を言って断わっていると、ああそうかと言って、手を離されて、もうエサは降りてこないから。目の前にちよんちよんしておるときに食いつかなければ駄目だよ」というようなたとえ話まで出して、「もたもたしておらずに、早く前に進め」といふ。

伊藤 こういふときの決心は大変ですね。

楠 大変ですな。

海部 みんながそういう、幅のある、いろいろな角度からのことを言うんだ。

楠 最終的に決断する上で、何が決め手になりましたか。

海部 僕は僕なりに、各派のいろいろな人と話をして、「本当にその通りか。噂されておるけれど、あんたもとても断ち難いほどの自分の傷があるから、それを癒すには数年かかるのか、いろいろな話を僕はひとから聞いたけれど、本当か」と言っているいろいろな話を聞いてみた。それは悪い質問だけれど、聞いてみなければならん。

伊藤 そうですよ、後になってからいろいろ言われても困りますからね。それでちゃんとみんなが支持してくれなければ、やっていけないでしょう。

海部 そうですよ。そう言ったら、表現はいろいろ違っておったけれど、「とにかくやってくれ」といふ。「やれ」ではなしに、「やってくれ」になった。

「やったときは協力してくれるんですか」と言ったら、「協力するもせんもない、もうやらざるを得んだろう」といふ。あのとき、橋本という名前もずいぶんあつたけれど、反橋本の消火器のほうに激しく効いておった。その出所は、金丸さんと竹下さんだ。

伊藤 竹下さんは、海部さんを一所懸命やってくれたわけですか。

海部 電話がかかってくるたびに、「もう断わっちゃいかんよ、これは。党のためだ、お国のためだ、海部、おまえは死ぬ、と言われ

たら、お国のために死ぬ腹を決めておいてくれよ」というようなことだ。

伊藤 なかなかの殺し文句だな。長年のおつき合いですからね。

海部 そうです。初当選したときからですから。青年協力隊と一緒につくったときからですから。

■総裁戦への経緯4（海部・林・石原の総裁戦）

伊藤 そういう形ですが、密室での決め方は駄目だということ、このときは選挙をやるんですね。

海部 やるんです。

伊藤 このときに、林義郎さんと石原「慎太郎」さんが出ますね。

海部 林義郎さんを担いだ人は、極めて微妙な話ですが、宮澤グループです。宮澤グループで宮澤は「海部では駄目だ」と言っていた。伊藤 林さんはどのグループでしたか。

楠 宮澤派でしょう。

海部 だからあの頃から、「海部さんは一所懸命おやりになっていくけれど、なにしろ高校野球の名ピッチャーですからね」と宮澤さんに言われて笑われたんですから。

伊藤 宮澤さんは嫌味を言う人ですから。

楠 「高校野球の名ピッチャー」というのはどういう意味ですか。

海部 だからまだまだ青い。まだまだ若い。

伊藤 プロじゃないんですよ。

海部 経験がない、私「宮澤」のように。それが当時の活字で、一番印象に残ったいやな活字だ。もうこの宮澤という人は——、と思っただけだ。

時がしばらく経ってから、あの人が「どうしてもアメリカに行つて大統領に会いたいから、海部先生、会えるようにしてください」と官邸まで来たので、その時はすぐにブッシュに電話を入れて「頼

む、宮澤と会ってやってくれ」と言った。「トシキ、会ってやったほうがトシキのためになるのか」と言うから、「どっちでもいいですよ」というのがここ「喉元を指す」まで出て来たけれど、本音はそうだけれど、向こうが断わってくれたらそれでいいんだけど、そうもいかんから、「考えてちょうだい」と言ったら、「細かい打ち合わせはスコークロフトにやらせるから」という。それで今度はスコークロフトが連絡してきて、宮澤さんはまたおれを呼んで、それがいろいろなことを話すきつかけになったのかもしれないが、とにかく民社党やら野党の一部も連れて、翌年か何かにあの人はアメリカに行つたんだ。

「宮澤氏が」「外務省にやらせたけれど、どうしてもうまくいきません。どうしても時間がとれない。これは官邸に頼む以外にない。私一人なら、それは恥かきで済んでもいいですけども、とにかく民社とか（あのときちよつと足りなかつたですからね。国会運営のために必要だから）も連れて行きたいんですけど」と言つて、首を歪めて陳情に來られたので、ああ、この人、こうならばよろしい、と思つた。

その代わり、言いたかつたけれど言わなかつたけれど、「加藤紘一なんかをおだてて、裏でこそそそやられたらいいけませんよ。やらんようにしてくれるなれば、行ってもらいますが」と言いたかつたけれどね。そんなことを言うと、国の話をしておるのに私憤が出てはいかんと思つてやつただけだね。「宮澤氏がアメリカに」行つたら「大統領に」会えたんです。スコークロフトが会わせてくれた。そういうことがあつたということです。

伊藤 でも宏池会が全員これ「林義郎」を支持したわけではないでしょう。

佐道 そうではないですよ。票からいったら、両院で一二〇ですね「海部俊樹」二七九、林義郎「一一〇」、石原慎太郎「四八」。

海部 そのとき江崎真澄から来た手紙が、おれのところにいまでも残っているんだ。おやじのほうですよ。いまの鉄磨じゃなしに。

楠 同じ選挙区ですね。

海部 同じ選挙区だ。「わしがええふうに話をまとめてあげるで、金丸にもこのあいだそう言つといたよ。よう決心されたな、あんたは」「いやいや、またよろしくご指導を」と言つたけれど、どどのつまりは林義郎のほうでは江崎真澄を数えておるわけだ。「こういうこともあるんじゃないですか」と聞いたけれど、最終的には林のほうに入れたわけだよ。最後になるとわかるものだな。

楠 総裁選の投票は記名投票ですか。

海部 いや、記名投票じゃない。

伊藤 でもだいたいわかるんでしょう。

海部 だいたいわかるんですよ。だって、あれだけ縦から裏から表から横から詰めていくでしょう。それはわかるわな。

伊藤 石原さんはどういふことですか。

海部 これが意外に、あの頃は票が取れなかつたんだな。

楠 これは安倍派というわけではないんですか。

海部 安倍派ですけど、表に出て来たのは青嵐会の連中ですよ、中山正暉とか。

伊藤 安倍派は、必ずしもそれを支持したわけではないでしょう。

海部 安倍さんは石原慎太郎を支持しなかつた。安倍さんはこつちの推薦人になってやつてもらつたわけだから。

伊藤 この三人で実際に選挙をやるわけですが、このほかにも出ようという人がいたわけですか。

海部 このほかにですか。いまして、その前日まで出る出るといつていたのが山下元利です。だから、「私も立候補して出るけれど、みんなから推されて。悪いけれども、勝てると思つたらんので、当選の暁はおたくに全面的に協力するから」といって、うちの家内のところに山下元利の奥さんから電話が来るわけだ。ご承知の通りのような組があるから。「そんなこと言われても、そんな怖ろしいことは私は聞いておれんし、私はなにしろ、うちの主人がなることには反対なんだから、あんたんとこ、もっと頑張りなさい」といっ

て、「うちの家内は」煽つたんじゃないかな。

伊藤 向こうは、聞いて嫌味だな、と思つただろうな（笑い）。

海部 向こうはそんな言い方をされると、何を言つてるか、と思うだろうね。だけれども、その山下元利は僕と話したいと言うから、会つて話したんです。山下元利とは個人的にもいろいろな関係が僕にはあつて、いろいろなことを知つておるけれど、彼は僕に、「最終的には私はとてもあなたと争うという気持ちはありませんから、立候補は最終的には辞退します。やりません」と言う。「そんなこと言わずに、あれがあつたらやつたらどうだ」と言つたら、「いやあ、竹下にも金丸にも言われておりますから、あなたに協力します」といって、そうなつたわけですね。

伊藤 でも林義郎さんも、石原慎太郎さんも、自分が当選すると思つて立候補しているわけでは必ずしもないでしょう。

海部 いや、そこまで言うとかわいそうだよ。石原慎太郎なんていうのは、当選するかもしれないと――。

伊藤 だって現実に党内の力学を見たら、とてもじゃない、当選できるとは思えない。つまり顔見せだという感じではないんですか。

楠 とりあえず手を挙げるといふ感じですか。

海部 いやいや、そうじゃなしに、やつぱり石原慎太郎はそのむかし昭和会の頃から、僕らは会つて、最初のとくも会つて話をしやつておるけれど、彼は彼自身のやり方で、もっとドラスティックにダーンと打ち上げなければいかんという。「のりしろを初めから決めておいて、ここまでは下がるという「のりしろを初めから決めるのりしろを捨てておいてやるんだ」。おじさん一流の言い方だよな。世の中をとにかく騒がせればいい。自分は必ずしもそこに入り込まなくても、そこからちよつと退いてもいい、というような面もあつたんじゃないかな。

伊藤 当選可能性という点からいつたら、とてもじゃないけれど。

海部 あのとく石原の周辺におつたのは、青嵐会の連中ですから、いまで言うならば亀井静香とか。

佐道 「亀井氏は」いまでこそ、ですけれどね。

海部 中山正暉とか。

伊藤 あれも北朝鮮派になったでしょう。

海部 そういう連中だ。

伊藤 これはだから、選挙のときは必ず勝ると先生は思っているわけでしょう。

海部 投票日の前には、だいたいこれで勝てるな、と思った。

伊藤 圧倒的に勝てる。

海部 圧倒的かどうかは別にして、負けることはないだろうと思つた。

伊藤 この選挙のときに、石原さんなんかと話し合つたことはないんですか。

海部 話し合いましたよ。けれども石原自身にもいろいろとお金の問題があつて、躊躇しとつたけれど、「あんたの場合は許容範囲だな」と言つて。石原自身にもほかにいろいろなことがあつて、山中貞則が初め石原慎太郎の推薦人になつておつたけれど、その推薦人を直前に辞退したんだね。それで「海部、やっぱりおまえのほう而立派だよ、きれいだよ。おれは向こうの推薦人は降りるんだ」と言つた。それは投票日の間近ですよ。慌てたろうと思ふな。

■海部内閣組閣1（官房長官）

伊藤 それで選挙で二七九票を獲得したわけですから、圧倒的な支持を得たと言つていいんだろうと思ひます。そこで組閣ということになります。実際に組閣になつた場合、歴代総理はどうかわかりませんけれど、中曾根さんなんかは「閣僚を」自分で決めたんだろうと思ひますが、ご自分の考えだけで組閣するというわけにはいかんでしょう。

海部 ですから、だいたいこの村からはこれぐらいの人が来るだ

ろう、ということはおわかつていますね。それから特に――。

伊藤 それは現有勢力で考えるわけですか。

海部 あの頃は、派閥の大ききで決まっていますからね。

伊藤 だいたい慣例化しているわけですか。

海部 おおむねですが、私の中にはそれだけでは済ませませんでしたから、私個人の我を通した人事もありました。それは、なんと言ふかな、いまだから言つてもいいと思ふが、官房長官の下半身だけは十分に調べておかなければいかん。一番いいのは、と思つておつたけれど、官房長官にも、みんなが「われこそは、われこそは」という自薦・他薦組がいっぱいおるんだから。

伊藤 自薦もあるんですか。

海部 「やらしてください、ぜひお願いします。私はやらせてもらわんと落ちちやう」といつて、選挙の話だ。「おまえ、選挙のためをやっているんじゃないよ」と言つたんだけれど。

伊藤 やはり官房長官は本当の腹心でなければ駄目でしょう。

海部 腹心でなければ困りますよ。

伊藤 それを選ぶことは自分としてできるんですか。

海部 だから、「そこだけは聖域だぞ。官房長官を誰にするかということは聖域であつて、よその人が自薦・他薦してきても、それはお任せいただきたい」と言つた。

伊藤 それが山下「徳夫」さんですか。その山下さんはすぐにやられちやうじゃないですか。

楠 見事に外れたんですね。

海部 すぐに出ちやつたけれどね。あれは驚いた。だってそれは直前に週刊誌に出たんだな。ところが、あんな天下の一大事の中で、週刊誌を買つてきて、そういうゴシップ種を読んでおる余裕や心のゆとりもなかつたから、週刊誌に出たことも、あとからひとに言われて、ああそうかと思つた。かの有名になつた三本指か二本指の話が出たというんだ。

楠 よく組閣のときに、組閣参謀というのがあるという話がありま

すね。先生の場合は、そういう存在があったんですか。

伊藤 やつぱり、金丸さんと相談しないわけにはいかないでしょう。

海部 金丸、竹下、安倍、この三人はいろいろ協力してもらわなければならぬし、人材も出してもらわなければいかんから。

伊藤 生みの親でもあるわけだから。

海部 けれど竹下は、自分があれをした余韻がまだ冷め切っておらんから、二度目をつくった宇野がまた失敗したからということ、あまり表向きのあれはなかった。だから「海部さん、うんと気をつけなければいかんよ。そういったことを調べ上げるのはやつぱり後藤田「正晴」と川島「広守」、この二人の話を聞いておけば間違いないだろうな」という。

伊藤 それでも山下さんは引つかからなかったんですか。

海部 引つかからなかったんだ、ヤマトクは。僕は後藤田さんともまり受けが良くないんですよ。向こうもおれの顔を見ると、三木武夫のことを思い出してね。最初の選挙のときに叩きに行つたんだもの。

楠 久次米健太郎さんですね。

海部 こっちが出したのは久次米健太郎でしょう。だからその後藤田のところに行つて、しかも田中角さんの直系の家来だと思つたけれど。川島広守を呼んで、おまえは官房副長官を続けてやつてもらうから、そのつもりで、と言つたことがあるんですけれどね。

「※竹下内閣のときから、事務の官房副長官は石原信雄氏」

楠 そうすると、金丸、竹下、安倍というのは、組閣参謀というよりは、事前に相談をする（伊藤 組閣顧問ですよ）組閣顧問ですね。それで官房長官だけは聖域だとすると、山下さんを官房長官に選んで、山下さんと詰めていつたわけですか。

海部 山下を選んだのは、大きな声で言えんけれど、あれは金丸邸の奥座敷にも入れる関係があったし、あのとき政権を安定させるためには、党内の両巨頭、竹下登と安倍の両方をちゃんと押さえておかなければいかん。

伊藤 それができるんですね。

海部 「黙つて頷く」僕は僕なりに、議運、国対でそういうところを押さえておけば、国会もうまく行くだろう。だから自分の我が通せる面は、通させてくれと頼めばそれでいいだろう。金丸さんというのは面白い人で、事前に頼みにいって、「これを今度言うし、こういうことをやるから頼みますよ」と言つたら、「よし、わかつた」ということで、あまり文句を言わなかつたですからね。

伊藤 「わかつた」と言うと、本当にわかるんですか。

海部 本心にわかる。

伊藤 あとで、「いや」と言うようなことはない。

海部 あれは、そういう二心、二言はなかつたですね。

伊藤 やはり然諾を重んじるというのが大事なことだと思ひますが、よく変わる人がいますからね。前はこう言つたけれど、実は、と言う人が。

海部 あの人は、そういう点はなかつたな。

伊藤 各派閥から候補者が出てくるというのはどういう形で来るんですか。

海部 それは各派の中に、われこそは派のあれだという自薦他薦の窓口がおつて。

伊藤 どの窓口を信じていいか、わからないじゃないですか。

海部 わからぬ。だから、名前は言うのをやめますが、僕のところまでわざわざ来る。まだ組閣をする前だが、こつちがホテルオークラに隠れておつたら、ちよつとお目にかかりたいと言つて、自薦する人がそこに入つてきた。「私はこういうことで今日まで苦労して、今度なんとかしてもらわんと落選しちゃうから」と当落に引つけて言うのが一番いい物言いだな、ああいうときは。

それから、「自分の派をまとめた」と言つて持つてくる人もあるから。それは本当か嘘かは、悪いけれどもその派閥の親分に電話して、直接尋ねるわけです。

楠 そもそも派閥の親分が名簿を提出するという話をよく聞きます

が、そういうことはなかったんですか。各派閥から、派閥のボスを経由して名簿が出てくるということですが。

伊藤 よくそういうふうに言われていますね。

海部 それはあつたんですよ、過去形で言うよ。

伊藤 このときはどうですか。

海部 僕のときですか、なかったとは言えないよな。密封した手紙が来て。

伊藤 何人が名前が書いてあるんですか。

海部 複数だ。だから僕は、「はっきり言うと、あなたのほうからは複数のご推薦は受けませんから」と言う。

伊藤 決まった数でくれ、ということですか。三人なら三人、二人なら二人と。

海部 うん。

伊藤 そうですよ。こつちに責任をおつかぶせられても大変だ。

海部 そうそう。みんなそんなことで、書いたらそれを自分の家来にこそつと見せて、「君らを推薦しておくから、入らなかつたら、君の力が足りないのか、総理の海部が悪いのか、どつちかだ」というわけだ。

楠 「この通り、ここに名前が載っているじゃないか」と、複数だつたら言えるわけですね。

海部 そう。だから「複数では駄目だ」と言つたんだな。そういうことの注文で、やんわりと嫌味を込めて、ようあんなことを言ってきたな、と思うのが宮澤さんですよ。「宏池会はいろいろ事情がありますから」といつて、たくさんの名簿を持ってくるから、これはやばいと思つた。

佐道 ご本人が持つてくるんですか。

海部 いや、お使いが来ます。

伊藤 そのお使いかが信用できるかどうか問題だけれど。

■海部内閣組閣2（女性入閣）

佐道 女性が二人入られましたね。森山さん「環境庁長官」と高原「須美子」さん「経済企画庁長官」。しかも高原さんは民間ですね。これは内閣の特色を出そうということで、先生がお考えになったんですか。

海部 はい、あときは物価の問題が非常にありましたね。そして物価が上がるのはよくない、「悪性インフレ」というような言葉もたしかあつたと思う。それからいまとちよつと事情が違つたかもしれないが、僕はやっぱり有権者は男女と分けていいぐらいある。だから女性の声を大切にしなければならんということで、初めから女性を採りたい、採ります、と言つていた。そしてそういう一般から女性を選ぶとなると、よそから推薦してくる人はあまりいい人がおらんです。そこで、自分で考えて、自分で電話した。それは当たるも八卦、当たらぬも八卦かもしれないが。

そうしたら、どうして高原と森山ということになったのか。そのときほかに候補者はありませんでしたよ。断わるんだよ。僕は例えば曾野綾子さんなんかをぜひ入れたいと思つただけれど、あの旦那「三浦朱門」が断わりに来たんだよ。まあそれは、奥さんが断わつてこいと言つたんだらうな。「そんなこと言わずに、ぜひなつてもらつてくださいよ」と言つたんだけれど。

伊藤 理由は何かですか。

海部 駄目だったな。

伊藤 高原さんは民間ですね。だけど森山真弓さんのほうは議員でしよう。森山さんはどこの派だつて。

楠 河本派。

伊藤 やつぱり河本派からの推薦ということですか。

海部 まあ、そういうことですよ。

楠 でも当選回数少ないですね。このときは参議院だったんじゃないですか。

海部 いや、あその旦那さん、ご主人「森山欽司」をあんた知つとるでしょう。あれがまあ、河本さんのところに行つてゴマをすつて、ひらごまのようになって、ただでさえ頭の上からない、美人で、これを一つぜひと強い自薦があつた。

だから、婦人も入れるということは僕も初めから決めていました。そうすると、それに恥ずかしくない婦人ということになる。あの人も労働省の婦人少年局長の頃は、僕は政務次官で初めて行つて、仕事ぶりを見ておつたんだ。そんな頃、パリのOEC Dの総会に私が政務次官で日本国代表だ。そのとき、楠なんとかという人も一緒に行つてくれたことがあるんだよな。このあいだ写真ブックを見ておつたら、頭の毛が黒い人が写つておつたよ。

楠 そうですか。すっかり白くなつちやいました（笑い）。

伊藤 そのとき森山さんもいたんですか。

海部 その担任の局長だもの。労働省の婦人少年局長といつてね。なかなか物怖じしないで国際会議でも物を言うなあ、というのが、僕の第一印象にあるわけです。同時に、世論に支持される内閣でなければ、このときは駄目だと思つたから。

伊藤 もたないですよ。

海部 世論の支持を訴えるにはどういふことがいいんだろうか、といろいろ考えてみると、僕はやっぱりご家庭のお台所のことをよくわかつた女性が必要だと思つた。そうすると、政治家でありながら家庭の主婦の立場もわかり、子育てもやり、子供の弁当もつくつたことのある女性というのは、国民のお台所の苦勞も苦しみもわかる。物価が上がる頃でしたから、物価に対する敏感な反応もあるという理由で、森山さんなんかは選んだつもりだった。

伊藤 実際、さつきお話になつたように、山下徳夫さんの代わりに官房長官にされるわけですね。

海部 それは一言で言えば、「女を選んでおけば、海部さん、女性

問題は全部すつ飛んじやうからいいよ」ということをわが友が言つてきたからね。

伊藤 男性問題ということはないか（笑い）。それはわかりませんが、今度は自分の腹心でなくてもいいんですか。

海部 もうしかたがないね。そんなに腹心がたくさんおるわけじゃないから。

楠 じゃあ、もつぱら対外的な顔として選んだということですね。

海部 もうそれ以外、ないです。しかも選挙に勝たなければならんという至上命題が僕にはあつたから。

伊藤 そうすると、実際の官房長官の役割をしてくれる官房副長官がいればいいわけです。

海部 いいわけです。

楠 このときの副長官は、政務のほうはどなただったんですか。

海部 これがまた曰く因縁付きで、志賀節というんだ。

楠 ああ志賀節さん、面白い方ですね。私が本を書くとき必ず読んでいて、あとでいろいろ書評をしてくださるんですよ。なかなかの文人なんです。

海部 あの妹を知っている？ 脱線するようだけれど、志賀節の妹というのは、志賀かう子さんといつて、志賀健次郎が目の中に入れても痛くないほど可愛がり過ぎたがために、とうとう最後までお嫁に行かなかつたの。志賀健次郎の最期を看取つたのが、かう子さんという才女だ。そのかう子さんというのは大変文才があつて、本も三冊か四冊書いてるんだ。節はそれと比べると、ちよつと忘れてきたんじゃないか、あるいは公平に分けてもらつてこなかつたんじゃないかと思うぐらい、「指で頭を指す」堅かつたんだ。だからボツとした、爆発的な人気は沸かなかつたね。選挙区でも絶対大丈夫だという圧倒的な支持はなかつたけれども、だから、逆に言うとう、どうしてもやりたいと言つてきたんだ。

佐道 これも自薦ですか。

海部 自薦組だ。

伊藤 自薦組というのは結構多いんですね。

海部 多い、多い。

楠 このころは、政務の官房副長官は一人ですか。

海部 はい、政務は一人です。

楠 いまは二人ですけれどね。じゃあ、この志賀さんが――。

伊藤 いろいろ取り仕切らなければならぬ。

海部 そういうことですよ。

楠 長官が女性で、副長官が志賀さんですか。

佐道 森山さん自身も、官僚から政治家になられて、まだこの時点ではキャリアはそんなに長いわけではないですよ。ですから、できた方といっても、なかなか官房長官の役目というのは大変ですね。楠 だから、もっぱらスポークスマンだったんでしょね。

海部 素人の感覚を大事にして、女性票、お台所の票をとれという願いがあったものだから。そこでその官房長官で、ああやっぱり壁があつたな、と思つたのは、例のハイジャックがあつたときだ。羽田に緊急着陸させて、どうのこうのとやつたときに、お芝居も打てんし、度胸もないから、見事に赤っ恥をかきましたね。そういう限界はあつたけれど、あのとき自民党がつくつた不信感と、山下徳さんがやつたこれ「小指を立てる」の問題、それを吹っ飛ばすためには、女性のさわやかな人がさわやかにやってくれなければいけません、ということ、ああいうところに落としたんです。

ただ、国民の一人として眺めた場合、どうなんだろうか。そうすると、あとでみんながいろいろ言うには、「あの森山真弓さんという人は頭が非常に切れるいい人だ」ということだ。そうすると、なんというか、人の心を掴むような暖かい人間的な体験や経験に基づいて物が言えるかどうかという点にクエスチョンマークをつけた人がおる。その点から行くと経済企画庁長官に入れておいた高原さんのほうがうまく話ができた。だから地方を回る一日内閣のときには、私は主として高原さんを連れて行つたんだね。

■海部内閣組閣3（党三役人事）

伊藤 この内閣の人事は、いまおっしゃつたように各派閥から一応推薦を受けてつくりますね。それで党のほうはどうなるんですか。

海部 党の役員ですか。党の三役は、インナーのような三人と連絡をとつて――。ああ、そうすると面白い話があつたんだよな。三役をまず決めなければいけません。そして、どうしてもこの人だけにとりたくない、という人もあるじゃないですか。そうしたら直接組閣本部まで電話をかけてきて、文句を言われたことがあるね。これは名前を言わんけれど想像がつくと思うけれど、ある派閥の親分ですよ。「この人をどうしてもとつてくれ」というけれど、「それはいろいろなしがらみがあつて、どうしてもそれもそれはとれません」と言つた。そういういやなこと言わなければならなかつたんですな。

あのときは覚えていますか。そのために派閥を除名されたのが一人おるでしょう。党の三役にしたのために。西岡「武夫」ですよ。

佐道 西岡さんはこの次です。九〇年に選挙をやられて、替わつたときですね。

伊藤 小沢一郎幹事長というのは――。

海部 小沢一郎はとかく噂がある人だけれど、おれはできる人だと思つておつた。

伊藤 そうだと思いませんね。

海部 それで、「どうだ」と「小沢氏に言った」。そうしたら、「直接私からは言えませんが、総理からおやじに（おやじというのは金丸さんのことだ）了解をとつただけですか」と言つたな。伊藤 金丸さんは、小沢さんはいいわけでしょう。

海部 そうそう、表面切つて断わることはありません。

楠 じゃあ小沢幹事長というのは、もともとは先生の構想だったんですか。

海部 はい。

楠 金丸さんから推薦があつてした、ということではないんですか。海部 そういうことじゃないです。あのころ若手の中で、なんていうか、一所懸命真面目にいろいろな仕事をする。そして将来を期待されている人である。その直前に発売された「文藝春秋」か何かで、各社の政治部長クラスの座談会があつて、各派閥の将来伸びる可能性のある人をピックアップしていったんですね。そのときに田中派で真っ先に出ていたのが小沢一郎であり、もう一人は羽田孜だったんだ。小沢一郎と羽田孜が田中派の若手の両横綱だという評価があつたね。それから見ておつてもやっぱりそうでしょう。僕らも国会活動を見ておつて、これはやれる人だな、と思つた。

伊藤 でもいままでのお話の中で、小沢さんの名前はたぶんあまり出て来なかつたように思うんですが、小沢さんのおつき合いというのはいくらもありませんか。

海部 あまりないですね。むしろ田中派で、あの世代では小沢とのつき合いが長かつた。

楠 早稲田つながり、ということでもないですか。

海部 まあそういうことでもないけれど、いろいろながらみがあつて、今度私が自民党へ帰つて真っ先にやらされたのは、青年海外協力隊に関する小委員会の最高顧問として、小淵優子委員長を助けてやってくれませんか、という話が来たからね。

伊藤 相変わらず、万年青年だから(笑い)。

海部 だからおれは、よろしゅうございますよ、と言つて。

伊藤 いいですね。小沢さんが幹事長で、総務会長が唐沢俊二郎さん、これはどういうわけですか。

海部 たしかにそのときは、中曽根派、ということを描いたんだらうな。中曽根派も入れておいた方がいいよ、党内バランスのためには。中曽根派にどんなのがおるかといったら、あんまり床の間

に座らせるような行儀のいい、気品の高いのはおらんわけだ。総務会長といつたら誰がいいだろうと思つていろいろ考えましたけれど、実にたわいないことだが、唐沢俊二郎のお父さんというのは――。

伊藤 俊樹さん。

海部 うん、おれと名前が同じだね。内務官僚の権化だ。もつと言うなれば、僕が文部大臣のときに政務次官をやつたのが唐沢俊二郎だ。それで、だいたい気心もわかつてる。中曽根派をあまり疎外しておつてはいかんよという声等もあつたので、それで唐沢俊二郎にした。あの人はあまり敵がいませんからね。いや、という引き技は入つてこないんだ。

伊藤 まとめ役としてはいいということですか。

海部 はい。

佐道 この人事のときでも中曽根派は比較のおとなしなかつたわけですか。もう、よろしゅうございます、という感じですか。

海部 ええ。

伊藤 もちろん大臣ポストもいくつか配分しているわけでしょう。

海部 そうです。

伊藤 あと三塚「博」さんが政調会長ですね。これは推薦ですか。

海部 それはみんな安倍さんと相談しましたよ。安倍さん自身もあのとき志を持つておつて、やれるんじゃないかという思いはいくらあつたはずだし、また世間の評価も、竹下と安倍は同格に見ておつたわけですからね。

伊藤 竹下さんが「総理に」なるときは、竹下さんと安倍さんと宮澤さん「が争つたん」でしょう。宮澤さんなんかの立場から見たら、何が海部だ、という感じなんでしょうね。

海部 そうそう。だから、僕はよう忘れんけれど、「あの人は一所懸命やつていらつしやいますよ、しかし高校野球のピッチャーですね」と言つた。プロじゃない、ということなんだ。あつたまに來ることを言うからね、あれは平気で。

伊藤 そうですよ、批評家ですから。評論家です。

海部 ほんと。

伊藤 なかなか嫌味なことをたくさんおっしゃる方です。

佐道 本当にそうですね。

■海部内閣組閣4（官房長官辞任、各派閥の動き）

伊藤 そういうことで、いちおう党のほうも役員が決まり、内閣もスタートする。だけど先ほどのお話にあった山下さんの問題で、最初にけつまずくわけですね。せつかく女性問題で倒れた宇野さんの後、クリーンで行こうといったのに、すぐ引つかかってしまった。楠 それも半月後ですね。

佐道 約二週間で交替したということですね「組閣が八九年八月十日、官房長官の交替は八月二十五日」。

伊藤 これはびっくり仰天ですか。

海部 びっくりしたと同時に、こちらの最大の失敗だったと思った。もうちよつとしっかりと、いろいろなことを調べなければならぬ、と思いました。

伊藤 でも本当に腹心だったんでしょ。それでもわからないんですか。

佐道 山下さんご自身は何か弁明されなかったんですか。

海部 だって弁明のしようがないじゃない。男女の関係だ。僕はその前、長い間国民本部長というのをやったときに、山下も副本部長の一人にした。副本部長というのは五人ぐらいおいて、各派から一人ずつ出す。それで全国遊説とか街頭演説と一緒に歩いたんですよ。だから気心もよくわかっておった。けれども小指の話があるとは知らなかったね。むしろ、あれは豪傑肌だから、小指のほうじゃないと思っただ。けれどもそんなから、この人はここで、気の毒だけれど辞めてもらわなければならぬ。

伊藤 本人もそうなら納得するわけですか。

海部 はい。

伊藤 それでもう、すぐに替える。

海部 このときは、たしかアメリカ行きの話が近づいておったんですね。

佐道 そうですね、すぐにアメリカにいらつしやいますね。

海部 すぐにアメリカに行つたんです。アメリカに行くと、アメリカでは男女の問題とか、それに対するけじめの付け方が大事だろう。だから、まあしようがない、替えるとしても女性に替えれば、女性問題は関係ないから。

伊藤 アメリカはそれほど厳しいかどうか知りませんが、クリントンのこともあるし。

海部 いや、当時はなかったんだな。

佐道 当時はブッシュですからね。

海部 クリントンのことがあれば別だけれど、まさかと思っっているからね、こっちは。

佐道 国内的なイメージもありますからね。

海部 それから、初めて私が選挙をやるときに、いつまでもあれを引きずっておつたら困るから。ということと替えて、そこで幹事長代理というポストに就ける。橋本が当時党のほうにおつて、いろいろ協力的にやってくれたから、頼むよ、根回ししてくれといったんだ。山下徳夫が自民党に帰ったときは、恥をかかせないように、幹事長代理ということとやってくれんか、ということにした。

伊藤 橋本さんは何だったんですか。

佐道 大蔵大臣ですね。

伊藤 閣内にいるんですね。

海部 要するに、竹下さんがあれを「橋本氏を蔵相として」とり、安倍さんは外務省のほうをやらせるということで、推薦してもらつて中山太郎をとつたわけですね。この二人は海部内閣が続く限り、置いておきましょうということと、やっていたんですから。その代わりその二人には、各役所のことを乗り越えて、派閥の準代貸しに

なつたつもりで、それぞれの派閥の親分とは大なり小なり連絡を密にして、ツーといえはカーのような感じにしておいてくれよ」「といった」。

佐道 中山太郎さんは安倍さんの信頼がそれだけ厚かったということになるわけですか。

海部 それはね、複数の名前を出して、例えば誰と誰と誰ぐらいだったら、僕の気持ちをすぐ伝えに行くか、というようなことを聞いたときに、やっぱり中山太郎の名前も入っておった。安倍さんからまずその名前を吐かせるように（吐かせるといったら悪いな）しゃべってもらうようにしたのは、そういうことです。

伊藤 それは向こうから言ってくれないと困るんですね。

海部 例えは、これとこれとこれならいいよ、と。自薦組がいつばいおつたんだね、悪い話だが。いまも現存しておる人だから言いくいけれど、「安倍ちゃんならおれに決まっておるから、頼むよ」と言つて僕のところへ直接来るんだよ、昔の仲間が。それで、そういう話をチラツとしたら、あときは加藤六月が俺のところになつちゅう出入りしておつて、「それはちよつと、とつちゃん、待ちなさいよ、私がすぐ行つて調べてくるから」という。当時こんな

「電話機の子機を示す」ような格好の携帯電話が初めて出て来た頃だから、それを持って、「新兵器を持っていつてくるから」といつて、順天堂だったか、安倍が入院している病院に走つていつて、その携帯電話でかけて、「私はこれであれしますから、聞いてちょうだいよ、さっきの話を」といつて、六月は自分が言いくいことは安倍さんには——。それで渡して話して、それはいかんからやめておけといつて、完全に消えた候補者が一人おるんだ。安倍が「そいつはやめておいてくれ」と言えは、それは仕方がないでしょう。

伊藤 それはそうですね。日本人というのはあまり自己推薦をやらないうち一般的な感じがありますが。

海部 そういうことは言われておりますが、この場合も自己推薦に来たんですよ。

伊藤 それはストレートに言うわけですか、遠回しに言うわけではなくて。

海部 いや、それは遠回しに言つておつたんじゃないやあ時間がかかるだけで、勘違いされてはいかんから。「総理、この次はひとつ私をぜひ」といつて、単刀直入のほうが印象に残るし、電話が入つたりお客さんが来たりで、「じゃあ今日はこれまでだ」といつてやられることは、みんなそれぞれ知つていよう。そこでそれを止めるためには、難しいんだけど——。そんなことがありましたよ。

伊藤 やっぱり自薦ということをやらんのだな。

楠 永田町は違う世界ですから。

伊藤 大学にもあるんじゃないかな。

海部 大学には、そんなにおいしいことがないですから。これは封印しておいて、まだしゃべつていけないけれど、死ぬ前にはその本人には言つてやらなければならぬ。えらい誤解して、ひねくれておるやつがおるんですね。あるときあんなは私を拾つて大臣にしてくれなかつた、ということをいまでも根に持つておるやつがいます。そいつがこともあろうに慶應大学の教授にあるところではやべつたんです。その慶應大学の教授は、おれとはツーカードだから、おれのところに飛んできて、「あいつがこんなことを言つておるよ」といつう。「あんた、中間省略の話を聞いてきて、つまみ食いの結論だけを言つても駄目だよ。そこではこういうことがあつたんだ」といつたんだ。

そういう人は、われこそはわが派の名簿の一番に載つておる、と思つておるんですね。みんな自薦するぐらいの厚かましいやつだから。けれども、あにはからんや、調べてみたら、推薦の中に入つていない。そういうときはまた、「携帯電話で直接話をしてください」といつうから、「よし」といつて話すと、極めて明瞭に、「海部さん、それは駄目だ。今度は駄目。うちの中の秩序が乱れる」といつられるので、「じゃあやめておきましょう」といつてやめるでしょ

う。やめるのは、おれとその人との話し合いでやめたんだけれど、おれのところに来て、その書類選考で落ちたと誤解しちゃうんだけれどそれはしょうがないからね。みんな背負わなければならんけれど、いつか話してやらなければいかな、と思っているんだ、そいつが間違えるといかんから。

伊藤 しかしそんなに自分を高く評価している人が多いのかな。とにかく先生は、体制をつくって、自民党はどん底だから、この次の選挙に勝つということが最大の優先課題だということですね。

海部 そうですよ、放っておいたら、自由民主党はこれで終わりますからね。

伊藤 最後の総裁になるかもしれない。

海部 そのつもりでこつちもやり始めたことだし。

■海部内閣組閣5（各省次官、官房副長官、秘書官）

伊藤 それで、八月の終わりから九月にかけて、アメリカ、メキシコ、カナダに行かれますが、総理になられますとだいたい外務次官が毎週ブリーフィングに来るんですか。

海部 毎週、次官が来ます。

伊藤 このときはどなたでしたか。

海部 大河原「良雄」。

佐道 村田「良平」さんじゃないですか。

海部 いやいや、村田はもっと後ですよ。僕が総理になったときは、次官は大河原だった。

佐道 大河原さんは駐米大使を終わって、八五年に松永「信雄」さんが駐米大使になるんですね。

海部 ちょっと資料を見てよ。

佐道 海部内閣のときは「外務次官は」村田さんで、そのあと栗山「尚一」さんに替わるんです。

海部 村田の前は誰がおった。

佐道 村田さんの前は柳谷「謙介」さんです。松永、柳谷、村田、栗山です。

海部 僕のところの説明に来た背の大きいのは大河原だろう。いつもえらそうに腕をつけて、資料をペラペラ見ながらやって。

佐道 大河原さんはこの頃、経団連の顧問になってますね。

海部 何かの場面とこんがらかっているかな。村田さんだとしたら、ドイツ大使になっただろう。

佐道 そうです、駐米大使のあとにドイツ大使になりました。湾岸戦争の頃は駐米大使ですね。

海部 そうそう、あれは電話をしてきて、「協力してもらおうのもいいけれど、あれには使わせん、これには使わせんとは一切言ってくださるな」と言っていた。

佐道 それで湾岸戦争の頃は、栗山さんが次官です。

伊藤 最初は村田さんが次官で――。

佐道 すぐに栗山さんに替わるんですね。

海部 両方とも思えばあります。大河原というのはどこで現われてきたんだろう。あれがブリーフィングに来るんだよ。

佐道 それはもっとずっと前で、三木内閣のときではないでしょうか。

海部 わかった、わかった、ごめんなさい。三木内閣のときも、おれはブリーフは全部聞いたわけだから。

佐道 そのときに「大河原さんは」官房長ですから。

海部 そうそう。三木さんは話がつまらなくなると居眠りをしちゃうから、代わりに聞いておいて、ちょいちょいとメモをしておいた。三木内閣のときに来たのが大河原だ。ごめんなさい。

伊藤 それ「大河原氏」が週に一回来て、そのとき海部先生は――。

海部 副長官。

伊藤 副長官として同席していたわけですか。そうですね。このアメリカにいらっしやる前には、ブリーフィングはカチツとやるわけ

ですね。

海部 やりますよ。

伊藤 これは外務次官だけですか。

海部 僕一人でやるときは、外務次官だけが、一人メモ取りを連れて入ってきます。

伊藤 ほかの省庁はありますか。

海部 ほかの省庁も、例えば農林省とか通産省とか、ブリーフィングに来ます。

伊藤 それは定期的ではないんでしょう。

海部 定期的ではないんです。

伊藤 定期的なのは外務省だけですか。

海部 定期的でないのは農林省と通産省。あのころ通商問題がテーマでしたからね。それと警察がときどき報告に来ます。

伊藤 それから秘書官がいますね。秘書官は、防衛、大蔵、(楠警察)、外務と、何人かいるわけですね。

海部 四人。

伊藤 そういふ人たちも、絶えず報告を上げてくるわけですか。

海部 はい、上げてきます。

伊藤 そうすると、情報としては総理大臣というのは非常に――。

海部 ピンからキリまで上がってきます。それを全部自分で考えて背負い込んでしまおうとせずに、これはそこに任せたらいいとか、これは返しておいたらいいとか、きちんと整理していかんと、とてもじゃないが、上がってくる話をみんな聞いて、みんなやっておつて、お願いしますといつて任せられたら、たまったものじゃない。

「もうちょっと粗ごなししてから持つてこい」と言ったりさ。

楠 定期的なブリーフィングというのは、外務次官のほかに、内調の室長なども来るんですか。

海部 内調室長は外務次官より回数は少ないです。毎週一回来るのは外務次官ですね。内調の室長は、例の森田「雄二」君なんているのも好きなほうだったけれど、いろいろ報告に来てくれましたね。

とても毎週一回ずつはつきあつておれんから。

伊藤 そういうことの交通整理は、秘書官がやるわけですか。

海部 そう。

伊藤 いまおっしゃつた四人の秘書官のほかに、交通整理の秘書官もいるんですか。

海部 いや、交通整理の秘書官というよりも、むしろそういうときには副長官を使いますね。事務の副長官ですね。

伊藤 事務の副長官が有能でないと、これは大変なことになりますね。

海部 そうです、務まりません。

楠 このころは川島さんですね「※竹下内閣のときから事務の官房副長官は石原信雄氏」。

海部 川島さんというのは有能な方なんでしょう。

伊藤 と、僕は思っています。

楠 かなり長い間されていますね。

海部 それから以後は、長くなるのが慣例みたいになってきましたね。

伊藤 長くなる慣例の最初は川島さんなんですか。

海部 川島さん。

佐道 その前は、一年とか二年とか、そんなものですね。

海部 だからああいうポストは、一年やそこらで替わられたのでは駄目ですからね。あのときどうしたんだ、とか。

楠 そこで辛うじて内閣の継続性が保てるんでしょうね。

伊藤 そうですね。あの事務の副長官というのは非常に大事なポストですね。政務ももちろん大事ですけど。

佐道 役所から来る秘書官のほかに、先生ご自身の政務の秘書官もいらつしやるわけですね。

海部 はい、いました。

伊藤 それはどなたですか。

海部 最初のときの秘書官は、秘書官という名前はもらえなかった

な、内閣調査員だ。

伊藤 じゃあ秘書官のポストがなかったのかな。

海部 政務秘書官を総理任命で連れてこられるという制度は、あつたんでしようが、それをやるかやらんかは決まっていなかったものだから、調査員という仕事だった。それで日本航空の金石「清禅」君が、燃料部長でいろいろ細かいこともよく知っておったから、それを呼んだ。これは早稲田の雄弁会の後輩ですわ。こいつを連れてきたのは、雄弁会の後輩ですから、例えば、「おい」と言えば、僕の親しい各派の代貸し級のところに行けるわけだ。例えば小淵恵三なんていうのもよく知っておるし、森喜朗もよく知っておるし、三塚もよく知っておる。金石さんのところには早稲田はおらんかったけれど、金石さんの外遊のときにお供をしたこともあったりして、日本航空の秘書室長まで上がったから、来いや、と行って助けてもらった。あれはずいぶん便利に使いましたね。

楠 その金石さんは秘書官に――。

海部 最後は秘書官になりました。僕が秘書官にせえ、と言ったから。

楠 最初は調査員だったんですね。

海部 調査員。

伊藤 この方は、いまでも元気ですか。

海部 いまでも元気でおります。

伊藤 議員になったりはなさらなかったんですか。

海部 いや、議員にもちよつとしたんだけれど、「楠氏に向かつて」覚えているだろう、ほんのちよつとだけ。

楠 ええ。

佐道 それは日航を完全に退いて移ってこられたんですか。

海部 そうそう。

■訪米1（ブッシュ大統領とのテータ・テート）

伊藤 さてそれで、時間はあと五分余りですが、アメリカに行かれた話を、できる限りでお話しいただきたいんですが。このときはブッシュ・パパとの会談ですね。ブッシュとお会いになるのは初めてですか。

海部 初めてです。

伊藤 印象はいかがでしたか。

海部 初めて会うんだから、ずいぶんこちらもいろいろなことを考えて、まず初対面でどう言ったらいいのかということまで勉強会をやった。総理はどういうおつもりですか、という。外務省は大舅みたいなやつばかりだから。

伊藤 大舅ですか（笑い）。

海部 そうですよ、だって、「外交のことはわれわれに聞いてください。われわれの言う通りにやってもらえば間違いありませんですよ」というような思いで、みんなおるわけですから。

伊藤 「私たちが振り付けますから、そう踊ってください」と。

海部 「その通りお願いします」ということですね。僕が振り付け通りにやらないものだから、それで困っちゃうんだ。

それで、「ブッシュに会ったときに最初にどう言ったらいいのか」という話を聞いたんです。そうしたら、「非常に国内の政治情勢の難しいときに自分はみんなに支持された。党内の各派で先輩方、実力者が協力してくれる。その人たちはみんな、日米関係は大切だから、日米関係をまず大事にしろという。そこで総理としては、最初にあなたにお目にかかって、いろいろ忌憚のない意見の交換をしたいと思うし、今後のことがあったら、何か言ってもらいたい」というような、低姿勢に出る丁寧なものを用意しましたよ。そういうのがいいんだという。

「それならわかった。けれど俺のことだから何を言ひ出すかわからん。最初に会ったときに、どう言ったらいいんだ」と聞いたたら、

「Mr. Presidentです。アメリカは全部ミスターでいいんです。Mr. Presidentと言つてくださる。Your Excellencyとかなんとか

言う必要はまったくありません」という。

ところが、実際に会ったときには、そんなブリーフは全く役に立たなかったんですよ。向こうはいきなり、「Toshiki」という。だいたい違いな、と思った。それで何のかんの言うから、

「Mr. President、なんかかんとか」と言ったら、

「No, no, no. My name is George. Say George (おれの名前はジョージだから、ジョージと言えよ)」という。だいたい教わっていったのと違う。じゃあそれで行くか、ということになりますな。

伊藤 向こうも調べているんですね、徹底的に。

海部 それでテータ・テート「tete-a-tete (二人だけの差し向かい)」というのがあるんですね。そのときに、ちよつと待たしておけと、テータ・テートは十五分とつてあるんだけど、三十分になっても四十分になっても終わらない。待たしておけという。そのテータ・テートでなんとという話をしたかと思ったら、あのころは相当行き詰まった貿易摩擦の問題がありましたからね。

「きょう初対面の君と話をするのに、いきなりこういうインパルスは正の問題はふさわしくないかもしれないけれど、しかし君の話を聞いて安心したけれど、日米関係の中で一番大きなブロックはこれだから、取り除いてもらわないとうまくないよ」というようなことをやんわりと向こうが言うわけだね。

僕が「George, my speech at Los Angeles」といって、ロサンゼルスに降りて、そこで日本人をみんな集めて、一時間ぶつたという話をした。

「その中で主なことはみんなしゃべった。というのは、あなたに会って話をするときに、負けちゃって何もしゃべれないとかんから、言いたいことだけ、昨日着いてすぐしゃべってきたんだ」と言ったら、

「読んだよ (I have read already)」とかいって、カバンから出してきた。「けれども、こういう関係でやりたいと思ってるんだから、けつこうだ、なんでも言うてくれ」という。

そして「相手が言うのは」「トシキ」ばかりだから、「ミスター・プレジデント」はもう通らなくなった。「ジョージと言え」というから、「ジョージ」と言ったんだ。「日本では年上の先輩のしかも経験を積んだ人に呼び捨てにするという礼儀も作法もないんだ。しかし僕は、二度も文部大臣をやっているんだから、日本の教育では初対面の先輩は敬意を表して、せめてジョージさんとか言わせてもらわなければ困るんだ」と言ったら、「ブッシュがしたというように、首を横に振る」。

伊藤 アメリカ流でやれ、ということですね。

海部 アメリカ流でやれということだ。こつちも、こうなったらアメリカ流でやれということだね。そうしたら、「何か言いたいことがあるか」という。

「ある。あなたのほうがいま言おうとしておる構造協議というのは、日本にとっては大変な問題なんだ。トシキはアメリカに行つて、あなたに言いくるめられちゃうんじゃないか、全部イエスと言つて飲んでしまうのではないか、イエスマンになつてはいかん、というのが、いま日本の国内の大きな世論だから、私はイエスとは言えんぞ。あなたのほうは、たしかあのとき百六十何項目出してきたんだ。わがほうもできるだけ知恵を絞つて、その数に負けないだけのものを、これもある、これもあるといつていま集めておるところだ。集まったらそれを持ってきて、下の方で話が始まる。けれどもこれは、結論を出そうと言うけれど、そんな簡単に結論を出せません。(あのころは選挙がすぐ目の前に予定されておったときですから) 僕最初の選挙は、そんな問題でアメリカに行つてまけてきましたということでは、すつ飛んでしまう。それは日米関係のためにならんし、アジア太平洋のためにならない」。

「どうしたらいいんだ」。

「ここは一番、時間を少しいただきたい。日本の政治はいろいろ話をして、しかも業界がいっぱい絡んでおるんだ。その業界には、票でも資金でも世話になつてきた関係がいろいろある。けれども今

度日米関係のことを説くときは、私はそんな次元ではなくて、もっと高い次元で説きたいんだ。しかし今度の選挙で負けたら——。あなたのところの駐日大使（アマコストだよ、あのころは）はずでに野党へ行つて、土井たか子のところに行つて、『野党が政権を取る可能性もある、アメリカだってそういうことの繰り返しだったんだ』というようなことを言いながら、いろいろ話に行っているというところも百も承知だ。だから今度の選挙は——」と言つたら、ブッシュが、

「トシキ、おまえ勝てるのか」という。自民党は勝てないというような報告が行っているんだな。だから、

「勝ちますよ、勝つから、勝つためには、勝てるような協力をしてもらわんと。おれは知らんぞ、勝手にやっこい、勝て、ではいから、勝たせようと思つたら、国内で社会党に一番叩かれておる日米構造協議が問題だ。われわれからみても、ピンと理解する国民はそんなにたくさんいないよ」。

「おまえはどう言っておるんだ」。

「とにかくわれわれは消費者の立場で物を考えれば、物価は安い方がいい。あなたの国と比べると、ずいぶん差がある。だからその努力をしようというて説得はできるけれど、まあ時間もかかるし、そんな言い訳ばかりしておると、選挙というのは投票日になったらそれで終わっちゃうんだから。今日は最初の表敬訪問で、テータ・テートで率直な話をする。私はこれから自分の生い立ちや、私の置かれておる現状について率直に話す。なぜ私がアメリカが好きなのになつたのかも話す。全部素直に話すから、それを聞いて理解してほしい」。

アメリカは非常に大きな国で、心も大きな国で、物も豊かで、一九五〇年、当選したばかりで最初に国会議員になった私をアメリカは招待してくれた。アメリカ中どこでも好きなところに行つて、何を見てもいいし、何を買つてもいい、何を食べてもいいという。そして、アメリカ中を見せてもらった。アメリカは広い国だ、大

きい国だということが心の底からわかった。けれどもそんな大きさや、見えるものだけではない。私が感じ取つたのは、あなたの国の国民の皆さんは、みんな心が温かい人だ、ハートが非常に温かいということだ。よくこんな国と事を構えたものだな、という反省がいまにしている。

ところが、黒人問題というのがある。私はこの黒人問題もある程度調べてきて、それに触れないほうがいいよと言われてきたが、プレジデント、あんたがおれになんでもいいから包み隠さず率直に話し合える中になろうと言われたから、敢えて言うけれど、僕の最初のアメリカ旅行で、ひとつだけこれは忘れられないと思うのは、カラード問題だ。そして僕があるところでそれを話した。そうしたら僕のところのすぐに反応が来た。あれはよほどの馬鹿か、本当のアメリカの実情を知らずに物を言っているんだという批判が國務省にも来て、その手紙も僕は見せてもらった。自分で自分から利口だとは言わんけれど、黒人問題だけはなんとかしてもらわないと、*Leader of free camp in the world* というならば、皮膚の色が違うからといって電車乗り口も違う、これも違うでは納得できんじやないですか」というような話をしたんだね。そうしたら、

「まあそういう話は、ユーからは初めて聞くけれど、前半に言ったことについては、よく話そう。それからテータ・テートが終わると全体会議になる。そこに通商代表もおれば、商務長官もおれば、みんなおる。そこに行つて、もう一回やつてくれ」。

「僕は思った通り、言いますよ」。

「ああ、さっきの話でいいんだ。やつてくれ。そして、それがいやらないと日本の国内における選挙の問題は厳しいんだということとをみんなに言ってくれよ。何を言つてもいいんですよ」。

「じゃあ僕も言おう」ということになった。

■訪米2（全体会議）

海部 あのころアメリカには、女性でなんとかさんといったな、えらい日本語の上手な通訳さんがおつて、そこで予行演習をしておいてから、全体会議に行った。三十七、八分、約四十分ぐらい、ブッシュと二人だけでそういう話をしたんですが、ブッシュは「待たせておけ」というんだから。

そしてあのころ、僕はスピッツというあだ名を付けてやったけれど、商務長官でキャンキャンとしゃべる女性がおつたな（佐道 カーラ・ヒルズ）。そう、ヒルズ。ヒルズ以下がみんな待っておつて（伊藤 よけいカツカ来ていたんじゃないかな）、そこでブッシュが、「いまトシキといろいろ話をしたけれど、彼はいま非常にシビアな立場（と言ったかな）に立たされておる。それはよくわかる。お互いに選挙をやったことがあるものはよくわかるんだけれど、いまや日本の中では、この問題について大変な誤解がある。トシキはそこで消費者の利益になるからやるんだ、ということをや、相当勇気が要つたらうけれど、自分にも言つてくれた。だから今日ここで片を付けようとは思わん。（ヒルズに）いいか、選挙が済むまでは黙って待っている、お互いに理解はしておる」と言つた。

初めのところで、そういうやり取りがありました。それで肩の荷がまずひとつ下りて、やれやれ、だ。「ブッシュは」

「昨日、私の前に来て言う前に、これだけ言いたいことがあるんだということをおサンゼルスでやってきた。あれを読んでみたけれど、あとからまたみんなも手に入れて読んでもらうから」ということで、最初の会合は非常に和気藹々と、*mutual understanding* は深まったけれど、一致しない点があるということもはっきりわかつたわけですね。けれどもそれだけ言つてしまえば、こちらも肩の荷が下りるから、どうするんだという話をしたときに、私は、

「日本の総理大臣官邸の中にこの問題のタスクフォースをつくる。官房副長官を長にして、各省の専門家を全部入れる。今日も実はそのへんに来ておるけれど、よろしかったらここに紹介させてもらつてもいいけれど」と言つたら、

「まあまあ、そこまでやつてもらわんでもいいや」というので、「待たせてあります。話の内容は全部伝えて、帰るや否ややらなければならぬ。私の乏しい英語の知識で言えば、*as soon as* であるから」と言つたら、みんなワーツと笑つて、「頼むよ」というようなことでした。

伊藤 またそのときのアメリカ行きの話は、続けてお伺いしなければならぬらうと思ひます。いまの全体会議の話も伺わなければなりませんし、カナダとメキシコも行かれたことですので、それがどういうことであつたのかということも伺わなければなりません。それで恐れ入りますが、次回を決めさせていただきます。今日は実に面白いお話でした。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 26 回

海部内閣Ⅱ（1989～1990）

【2004年2月2日（月）14:00～16:10】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学元助教授）

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2004年2月2日)

1. 今回は先生の総理時代のお話をお願いします。前回は、89年8月30日から9月10日まで、アメリカ・メキシコ・カナダを訪問されたときのお話を途中までうかがいました。その続きからお願いします。ブッシュ大統領にお会いになったときの印象などはお聞きしましたが、その他で印象に残られた方などおられますか。
2. 前回のお話でも少し出ましたが、9月4日から日米構造協議が始まりました。貿易不均衡をもたらす構造要因の改善を一年間にわたって協議しようというものです。大店法改正、公共投資拡大、独禁法強化などが課題になっていくわけですが、いずれも国内的には対処の難しい問題でした。日米構造協議について先生はどのような見通しをもっておられたのでしょうか。
3. 首脳会談や構造協議に関する会談等以外で、このときの訪米で印象に残っておられることは何でしょうか。
4. アメリカの後、メキシコ、カナダも行かれています、それぞれのご印象などお願いします。
5. 10月1日、初の政府招待でPLOのアラファト議長が来日し、先生と会談しています。日本としても積極的に中東和平に関わっていく姿勢を明確にしたわけですが、このときの中東和平への取り組み方などについてお願いします。
6. 同じく10月1日に参議院茨城補選で自民党新人が当選し、自民党への逆風を止めることができました。その後、同月6日に先生は無投票で自民党総裁に再任され、所見発表で「政治改革」の必要性を強調されます。無投票再任の経緯および当時先生がお考えになっていた「政治改革」の方針などについてお聞かせ下さい。
7. 11月8日、梅原猛氏を座長に、総理の諮問機関である「21世紀へ向けて目指すべき社会を考える懇談会」の初会合が開かれました。21世紀における政治・地球環境のあり方、日本の伝統文化などを検討する委員会ですが、これを発足される経緯等についてお願いします。
8. 11月10日、ベルリンの壁の取り壊しが始まりました。東欧諸国は一気に民主化に向かい、冷戦も12月の米ソ・マルタ会談で終了ということになりました。戦後の国際秩序が大きく変化を始めたわけですが、先生はこの問題をどのように見ておられたのでしょうか。また、外務省などの分析はどうだったのでしょうか。
9. 12月1日、自民党は消費税見直しを決定します。そもそも10月2日の第116臨時国会の所信表明演説でも消費税見直しについては触れておられました。12月に決まったのは、食料品小売り非課税、家賃・教育・出産費なども非課税にし、福祉目的ということです。消費税問題について先生はどのようにお考えでしたか。また、この見直し問題で中心的な役割を果たしたのは誰でしょうか。
10. 同じく12月1日、フィリピンで国軍約2000人の反乱がありました。マニラ市内で銃撃戦もあったわけですが、フィリピンは日本との関係も深く、在留邦人も多いわけですから情報収集や邦人保護体制をどうするかといった問題がすぐに生じてきたと

思います。総理として日本の体制についてはどのように見ておられますか。

- 1 1. 年明けそろそろの 90 年 1 月 8 日から 18 日、先生は欧州歴訪に行かれます（西独・ベルギー・フランス・イタリア・イギリス・パチカン・ポーランド・ハンガリー）。このときの訪問の主目的および印象に残っておられることなどお願いします。
- 1 2. 1 月 24 日衆議院が解散され、2 月 18 日投票、275 議席（最終は 286）を獲得します。海部内閣として最初の選挙であったわけですが、先生は「体制選択の選挙」を掲げて戦われました。このときは史上初めて「党首公開討論会」が行われたのをはじめ、全国 1 万 4500 キロを移動して応援されるなど大変な選挙だったと思いますが、この選挙について、取り組み方、とくに力を入れられた点などお願いします。

※今回は以上のような質問についてお願いします。

■現在の政局から（自衛隊イラク派遣）

伊藤 ……このあいだのイラク派遣のときは、先生は国会にご出席でしたか。強行採決をしましたね。

海部 いました。

伊藤 まさか先頭に立ってやったわけではないでしょうね。

海部 先頭に立ってはやりませんが、事、ここに至って、日本の今日の立場を見ると、どちらに与するか、応援するか、ということになってくる。僕の場合、特に前回の湾岸のときの経験がありますから、それなりの手当や配慮は十分しなければならんけれど、やっぱりやらない、というわけにはいかんだろうと思います。

伊藤 それはそうです、当然です。

海部 それで、そういうことを言ってやりました。

伊藤 何か、盛りを過ぎたような三人のリーダーが欠席したりしましたね。あれは何の意味だ、と思ったんですが、よく意味がわからない。

海部 野党が少し変わったということは別にして、与党と政府のほうも、つまらん議論をしたでしょう、機関銃一丁はいいが、二丁はいけないとかね。それはそういう問題じゃないんですよ。

楠 仮に犠牲者がでたときに、どう対応するかが大変ですね。引き揚げるわけにはいかないでしょうし。

海部 それから、正当防衛のとき以外銃を使ってはいけないという、そんな判断は、現場で音がし始めたり、ピシピシ弾が飛んでくる状況になったら、理性はあまり働かないと思うんだな。そういうときに何も訓練していない自衛隊に、隊長の指揮に従えといっても、そこで指揮をしたことがない隊長がどういう指揮をしたらいいか、最後は人間一人ひとりの良心の判断になるわけでしょう。

伊藤 そうですね。それはしょうがないですよ。

■訪米3（日米構造協議）

伊藤 前回総理の時代のお話を伺いまして、最後は一九八九年の、アメリカ、メキシコ、カナダご訪問でございました。そこでブッシュ・パパと会ったというところまでお話を伺ったと思います。

海部 首脳会談の初めまでですな。ブッシュと会ったまですから、ブッシュの執務室の前に運動場があつて、そこでホースシューという、馬の馬蹄を投げる輪投げみたいなものがあるのさ。それを私もやりました。

伊藤 お二人で、ですか。

海部 ええ、二人で。そうしたら時間が長くなりすぎたので、「そろそろ行っていただけませんか」という連絡が来たけれど、ブッシュが「いや、いや、いや、いや。待たしとけ」と言ったことがありました。

伊藤 「いや、いや、いや」というのは、日米構造協議の話ですか。

海部 そうです。ヒルズなんかが腕まくりして来ておるから。あのスピッツが。スピッツと言ったら侮蔑語になるな。

伊藤 いや、別に、可愛いじゃないですか。

海部 かまわんですか。キャンキャン言うから。

楠 スピッツは侮蔑的ですか。

佐道 スピッツは可愛いですね。

海部 ただ、ブッシュ自身も、ヒルズを手に負えないように思っておったことは事実ですね。だから、「トシ、ここで二人でやればいいいいんだ」とか言つて、一所懸命輪投げをやっていましたよ。

伊藤 やつぱりアメリカ人も女性に弱いんですかね。それで、ブッシュさんにお会いになって、すぐ構造協議になるわけですか。

海部 初めから向こうは構造協議のことを頭に描いておったことは間違いありません。

伊藤 時間的にはどうですか。

海部 時間的に、ほかの雑談もしておりました。

伊藤 首脳会談が終わったところで、「早く」というのは、どこに行かれるんですか。

海部 「早く」と言われたけれど、あのときは、「それは駄目だ、そんなに早くはできっこないし、選挙が済むまでは時間を稼がせろ」といった。

伊藤 いや、そうではなくて、首脳会談が終わって、輪投げをやつて――。

海部 輪投げをやつて時間がなくなつた。

伊藤 何のための時間がなくなつたんですか。その後の予定は何なんでしょうか。

海部 ブッシュに会つた後は、反省と情報交換を日本側だけでやることでした。あのときは日米構造協議の問題が、その前のサミットで約束されているんですね。けれどその約束を受けて、すぐにやってくれ、早くやろうというので、あるいはあのときこちらが人生意気を感じてもらおうと思って、選挙が済んだ直後に電話をもらつて、そこで約束して、飛んでいったんです。けれども、あいつたことも後から考えると、それで日本側は逃がっている……わけではないけれど、言うべきことは言いに来たんだという姿勢を示したつもりではおりました。

当時の新聞の政治漫画にも、ブッシュが前を行く、ポケットからスーパードーナツ一なんていうテープが出ています。おれが「ちよつとそれはしまつておいてくれ、そんなものはちつつかせないでくれ」という。そうしたらブッシュが「若えの、いろいろ言うじゃないか、黙つとれ」という。漫画ですよ。あのときは、あれがとにかく最大の問題でしたから、なるべく早く逃げなければいけません。けれど黙つて逃げたのでは、何のために選挙直後――。帰つたらすぐ国会があったはずですから、そこでは言うだけのことは言わなければならぬ。言うだけのことを言うためには、ブッシュと一対一になつたらと

ても言い切れない問題もあるうし、時間の関係で、今日はこれまでも、なんて言われると駄目だから、僕の言いたいことは全部言つておこうと思つて、アメリカに上陸したら直ちに、日本人会に頼んで講演をやつたんですね。そのときに僕がどういうところで注意されて使つたのか知らんが、「これは日本の消費者のためになる、という気持ちで私は取り組んでいくつもりだ」といった。

そしてアメリカに対しても、出すなら問題を出してくれ、こちらも問題はいつばいある、だからすぐに成果を見せる（ゲット・リザルトと言つたかな）、結果をすぐ寄せ、というのは無理だ。来年までかかっても無理だ。

そして、あのとき官邸に石原信雄という官房副長官がいました。その下にタスクフォースを作つて、各省からこの問題に行き届いた、少なくとも局長級以上を出せ、その場で返事ができるように、というので、アメリカから来る問題を全部そこで受け止めて、どこまでが解決できるか、ということをやつたわけですね。

伊藤 それはお帰りになつてからですか。

海部 いや、向こう「アメリカ」から電話で連絡したりして、なるほど早い方がいいから、さあといったときには、そういうものが全部集められるようにしておいてくれ、こちらがやるんだから。

伊藤 それはアメリカに出かける前ですか。

海部 いや、出かけてから、向こうの話で、どうも早く結論が欲しいようだ、ゲット・リザルトと言つている。結論が欲しいなら、こちらも対応しなければならぬ、だから中間報告に書くことをとりあえずやろう、ということにした。ただ中間報告までも、黙つて腕を組んで考えているだけではなくて、やれるだけのことがどうしたらできるかを考えてみる、そのための準備委員会もつくる。それは私の内閣の官房副長官をヘッドにして、各省の担当局長、少なくともそれ以上の、政策に発言力があるものが集まれ。あの頃は問題も絞られてきておりましたからね。

伊藤 まず、アメリカにいる間の話を伺いたいと思いますが。

海部 そういうことを考えながら、終わってからみんなが集まったときには、そこで何も台本も種本もなかったけれど、これはうかうかしておられないから、帰ったらすぐやるよ、少なくとも姿勢だけは見せないよ、日本は口だけだと言われたら困る。

伊藤 その日本側というのは、随員がたぐさんいたわけですか。

海部 各省庁からみんな来ていました。だから、そんなにたくさんぞろぞろついて歩かれてもしょうがないから、問題になっているところだけにしてくれと言った。

伊藤 でも全部問題になっていたんじゃないですか。

海部 全部問題だった。二百何十項目あった、こんなに厚い書類があったんですが、主として日程に上りそうな大問題は、例の大法と言われたものと、スーパーコンピュータの問題。特に大学が狙い打ちされたけれど、大学の研究所はあのと、たしか一台も買わなかったはずですよ。それに関するタスクフォースだけは早く作って、発言力があるのが出て来い、ということ、アメリカにおるうちにいろいろ相談を始めて、それを刻々毎晩東京に連絡を入れて、石原副長官に準備だけは始めてくれ、といった。おれが帰ったらすぐ報告するけれど、アメリカとはだいぶ温度差があるよ、こっちは選挙で勝った勝ったと喜んで、「あれは春まで持つていけばいいや」というのが当時の言葉にはあつたけれど、そうはいかない。終わったらずぐに着手して片付けなければならぬ。

なぜならば日米関係は非常に大切だということだ。私は三木内閣のときから言われ続けてきましたからね。そしてアメリカがああ頃、直接は関係ないのに、「日本はわれわれをもっと助ける、知らん顔をしてこんなことをやっておつたらいかん。われわれも議会と戦つておるんだから、議会と戦うその目指すところは、日本と同じじゃないか。だからわれわれに少し、議会の説得するだけの武器やいろいろなものを与える、助ける」という。「本当に助けると言ったのか」と聞いたたら、そうだという。通訳に聴き直しても、そう言いましたからね。

伊藤 それはギブ・アンド・テイクということですね。

海部 はい。

伊藤 ブッシュさんのほかに、どういう人たちにお会いになりましたか。

海部 そのときですか。いまから思えば、副大統領になっている Cheney が国防長官か何かでした。Cheney と会いました。それから、このあいだも行って会ってきたけれど、国務副長官（佐道アーミテージ）、あの頃からアーミテージは威張っていましたよ。まだ副長官でもなんでもないので、「日本担当で日本のことが一番わかるのはこれだから、トシキ、遠慮なくこれに言つてやってくれ」ということでした。それからもちろんのこと、ヒルズ。

伊藤 ヒルズの印象はどうでした。

海部 ヒルズは、僕がスピッツというあだ名をつけたぐらいでキャンキャン言うから、通訳に、「もっとゆっくりしゃべれと言つてやいなよ」と言つたんだ。ルックス・ライク神経質そうな細い女性で、女性としての魅力はあまりないんだよ。

伊藤 そうですか。それは残念だ。

海部 非常に冷たい感じで、キャンキャンと言ってくる感じでしたね。だからこの人はとても一筋縄では行かん、と思った。それでも真面目に受け答えはしてきました。

伊藤 そのへんが一番印象的な人たちですか。

海部 はい。

佐道 ベイカー国務長官はいかがでしたか。

海部 ベイカーは大人物ですから、あまり細かいことをキャンキャン言わないんですよ。体も大きいし、のっさりしておる。ベイカーは竹下の頃の財務長官のカウンターパートなんだ。竹下さんからいろいろなことを聞かされていたものだから、ベイカーさんとは初めから、「あなたのお友達のマスター竹下が私に注意したことがあるけれど、一番気をつけて物を言わなければならんのは、ベイカーさん、あんだだよ」と言つたら、それが彼にとっては満足であつたの

かどうなのか知らんけれど、あまり厳しいことも、いやなことも言わずに、対応してくれましたね。ベイカーの家というのは大変な財閥なんですよ。そして、テキサス大学だったか、そこに講座も寄付しておるし、基金も出しておる。だからいま流行のカリフォルニア大学バークレー校だとかなんとかというように、ベイカー校というような学校もあるわけだ。

■訪米4（カイクフ？フー？の払拭）

伊藤 八月三十日から九月十日までですからかなり長い期間ですが、アメリカにいらつしやつたのは数日間ですか。

海部 数日間です。それからボストンへも飛んだ。ボストンでハーバード大学に行つて、スピーチをやつた。「おれを見る、日本は民主主義の国になつたんだ。おれでも当選できるんだ。当選して一所懸命頑張れば、いまはこうやつて来られるんだ。一昔前のあなた方がイメージしているような日本では、こんなことはなかったでしょう。われわれは長い間アメリカン・ドリームに憧れてきたけれど、やればできるんだ、ということをアメリカが教えてくれたんだ」というようなことで、ちよつとヨイショもしたけれど。

ボストンでは、ヤング・リパブリカンもヤング・デモクラットも両方の政党の代表みんな集まつていいから、そこでしゃべると言つて、そこでしゃべつた。だから両方のメンバーになつて、赤いルビの入った指輪をくれるでしょう。どっちをはめるかという。アメリカ人だな。「リパブリカンのやつたのをはめるか、デモクラットのやつたのをはめるか、どっちだ」というから、「両方ともよろしい。ただし両方はめると日本ではバカではないかと言われるから、大事に両方ともとおきます」と言つて、その場でははめなかつた。

伊藤 両方とも赤いわけですか。

海部 はい、本物のルビーじゃないだろうけれど、ルックス・ライク・ルビーのような指輪ですね。そしてハーバード大学という字が刻んであるところまでは同じです。

伊藤 ボストン以外にはどこかに行かれたんですか。

海部 あれはどこで始球式をやつたんだろう。アメリカのレッドソックスと、どこだったか、試合の始球式をやつた。

伊藤 公式試合ですか。

海部 公式試合。大リーグの公式試合があると言われて、そこに行つてやつたんです。

伊藤 それは日本から行くときから、スケジュールが組まれているわけですか。

海部 行く前から、「PRのために何かないか」と大使館に言つていた。アメリカでは、「Kaifu? Who?」といふことですからね。

それで僕の経歴をくれとか、僕がどういう政治的なあれ「経歴」をもつていたか、全部取材されました。

そしてテレビでも早朝の番組に出されて、頑張つた。そこで「家内と一緒に出る」と言われた。「これは政治的訓練がまだされていないから駄目だ」と言つただけれど、「いや、そういう方が知りたい」と言われて、とにかく二人並べられて、朝の三十分番組の中で、「何しに来たんだ、どう思つておるか、アメリカに何を感じたか」と、いろいろなことを聞かれた。率直に言つていいというから、率直にいろいろ言つたんです。

伊藤 奥さんはどうでした。

海部 家内は、「私はそんな訓練をされていないから駄目だ。主人とは違うから、主人が言うように助けて、この人が選挙で落ちないように家庭を守つておるんだ」というようなことを言っていましたね。

伊藤 総理になるなど忠言した、とか言わなかつたですか（笑い）。

海部 「全然、総理になるなんて思つてもいないんだから、私は何も訓練を受けていません。その気も何もないのに、あれよあれよと

いううちにここまで連れて来られた」というようなことだった。
楠 細かいことですが、ブッシュ大統領にはどういうお土産を持って行かれたんですか。政治的な意味ではなくて、文字通りのお土産のことです。日本人形とかをよく持って行きますね。何か持っていないらっしゃったんですか。

海部 人形は持っていきませんでしたけれど、ちょうど私のキャンペーン・ディストリクト（選挙区）の中に、七宝村という村があるんです。昔は七宝焼きの元祖で、そこには古い窯があるんです。どうせ持っていくのなら、自分の選挙区の物を持って行ってやろうと思つて、七宝焼きのお皿を持っていきました。

伊藤 七宝焼きはあの辺なんですか。

海部 はい、愛知県「海部郡」と書いて「あまぐん」の七宝村というんです。いまは七宝町ですが、そこでずつつくっておったんです。

伊藤 あれは「あまぐん」と読むんですか。

海部 そうです。「かいふぐん」とは読まないんです。「かいふぐん」と読めば、僕の票ももうちよつと伸びたかな（笑い）。

伊藤 じゃあ、海部さんのほうが「あま」にすればよかった（笑い）。

海部 僕は結局、先祖が海で暮らした海部族ですから。『日本の苗字』という古い時代の本には、海岸端で働くのを「磯部」といい、沖でワルをやるのが「海部」であるというように書いてありましたが、そんなことよりも、四国の伊予水軍の時によく助けた。だから徳島県に海部郡（かいふぐん）がある。

伊藤 そこは「かいふぐん」なんですか。

海部 「かいふ」と読むんです。なぜそうなっておるのか。「徳島県」海部郡に森下元晴という大変な山持ちがおつて、ヒトサメ何百万という山持ちだったんです。その森下があるとき僕のところにも刀を持ってきた。刀といつてもこんな刀ですよ「六〇〇七〇センチぐらい」。弦で巻いた小刀です。「何だこれ？」と言ったら、「海の

中のいくさで使うときは、普通の刀では駄目だ。藁で巻いてあれば、湿つても濡れてもますます締まる。手も滑らない。これで昔の海部水軍は働いたんだ」というようなことを言った。代々の本家で、いま日本に海賊はありませんが、阿波しじらというしじら織、着物の原料をつくっている海部（かいふ）さんという家があるんです。このお祖母さんが「この刀は家に置いておくよりも、きつとあの今度当選しておる海部代議士はうちの一族だ」と言つて、それは総理になるちよつと前でしたが、もらつて、森下君が持つてきてくれた。それで四国のほうとはこういう関係があるかな、と思つて見ておつたら、それが流れてきて尾張に来て、尾張に仕えて、いくさで功労があつたというんです。そして、当時の徳川に、「もうおまえは四国に帰らずに、尾張で仕官しろ、禄はうんと高くするぞ」といつて誘惑されたけれど、いや、当時の古い二君に仕えずという武士道の教えをいつて、「わが子をここに置いておくから、ここで育ててもらいたい」と言つて、置いて帰つてきたという。そういうことがあつたんですね。以来、おじいさんに言わせると、僕が三代目、おじいさんが九代目で、「その人以来ずっと、俊樹君、続いているんだぞ」といつて教えてくれた。大変残念ながら、空襲で全部焼けちゃつたんですけれどね。

伊藤 そのときはもう武士ではなかつたわけですね。

海部 もう武士じゃないです。武士をやめさせられて、生き延びなければならぬでしょう。そこでやったことが、豚と鶏を飼うことでした。豚は失敗したけれど、鶏は続いて、海部種という鶏がいまあるわけですね。これは養鶏の親分の丹羽兵助さんが、「海部さん、調べてみれや。おまえさんの先祖はえれえ人だぜ」と言つていた。本ももつたことがある。愛知県の農務部にはいまでもそれがあるわけですね。

伊藤 まあ、鳥インフルエンザにならないように（笑い）。それでは、アメリカにいる間は、直接に日米構造協議をやつていたわけではないんですね。

海部 アメリカにいる間は、ブッシュさんと最初に会ってテータ・テートをやって、個人的な信頼関係が大事だと言われて、「Kaifufu? Who?」というのを払拭しなければならんから。いろいろなこと、を思い切っちゃべつちまえ、と言われたので、選挙のやり方とか、「アメリカというのは、僕が始めて来たときは、非常に大きな、とてつもなく広い想像を絶する豊かな国で、もう一つ、これが大事なことで、アメリカ人はピンからキリまで全部善意に満ちておる」というようなことを話して、「あなたの国の政策のフォーリン・ヤング・リーダー・エクステンジ・プログラムは、ここに生きた見本があるんだから、いかに成果を上げたかということだ」という話をしてきたら、非常に興味を持って、「そのときにどこに行つて、どんな物を見たのか」とか、いろいろなことを聞きました。

海部 かなりスケジュールとしては混んでいるわけですか。

伊藤 混んでいます。それは朝出たら、晩までスケジュールは混んでいました。

伊藤 じゃあ始球式でちよつと投げたら、またどこかに行くということですか。

海部 始球式で投げたら、そこから近いところに、アメリカに最初にピルグリムといったかな、海を渡ってきた入植者が上陸したところがあつて、そこにも行つてくれというので、そこに行つたんです。そしてアメリカ最初の上陸者が非常に苦労した話とか、いろいろなことを聞いた。ケネディの先祖も、そのとき流れてきたアイルランドの一族の一人だとか、アメリカの当時の関係の中にも、アメリカ人以外の人もいますね。例えばキッシンジャーがユダヤ系のドイツ人だ。そんな話を聞きながら、そこをずっと見て回つた。そして、翌日が始球式だったかな。

伊藤 けっこう混んでいるんですね。

海部 すごく混んでいます。

伊藤 人と懇談することもずいぶんあつたんですか。

海部 今度は大学の教授などが七、八人来て、その質問の中でお話

をする。仲を取り持ったのはライシャワーさんでした。「大学の、日本を知っている学者にいろいろなことを言わせて、少々耳の痛いこともあるかもしれないが、そこは素直に、日本の柔道だと言って受け止める。技をかけられたら、投げ飛ばされないよ、受け身を知っているんだよ、ということでもやり取りすると、非常にいい印象を与えますよ」という話もあつた。

伊藤 一種のパブリシティですね。

海部 はい。そして、「Kaifufu? Who?」を少しでも変えていけという。

伊藤 それは向こうの新聞とかにどんどん載るわけですね。

海部 載るわけです。そして教育の問題になったときに、向こうはあまり言わなかつたけれど、僕は中国の大弁護をやつたわけです。「中国は絶対民主主義の国になる。アメリカで思われている中国とは違うんだ」と言つたら、ブッシュが「具体的にいうとどういふことだ」と言うから、「改革開放をいまやっているんじゃないですか。改革開放を続けていつたら、あれは自由と民主主義に最終的には行き着かなくてはならんと僕は隣の国から見ておるんだ。だから中国は、われわれと同じ価値観を持った民主主義の国に必ずなるだろうと、おれはそう見ているんだ」というようなことを話したんだ。

伊藤 時間はかかりそうですけれどね。

海部 かかりますよ、それはかかります。向こう側のライシャワーさんをはじめ、集まっている知日派の学者は、中国についても一応の知識を持っているわけだ。

伊藤 東洋学者ですから。

海部 それでずいぶん長時間、その学者たちと話をしましたね。

佐道 中国に関しては、先生が行かれたすぐ前に例の天安門の事件があつた頃ですから、アメリカとしてはかなり見方が厳しい頃ですね。

海部 だから、「そんな厳しいことを言っていたら駄目だ。あんた方、中国を孤立させて、アメリカが言う通り、あれも駄目、これも

駄目で締め付けたら（いまでいうネオコンみたいなのがおつたんだね）、それでは駄目だ。東洋の理想というのは、近隣の人とは心を通わせてやっていかなければならない」「中国はどうしたらよくなるか」と言うから、「改革開放路線を支持して、改革開放路線を続けて行かせれば、中国は自由と民主主義のわかる国にきつとなる」、アイ・ビリーブ・ザットと言つてやつた。それはみんなが耳を傾けてくれた。

■訪米5（メキシコ、カナダ訪問）

伊藤 アメリカのあと、メキシコ、カナダに行かれますが、これは何か懸案があったんですか。

海部 懸案はなかったんですが、ブッシュのほうから、初めアメリカの大使と向こうのスコークロフトが誰かと会つて話をしたときに、「日程に余裕があったら、飛んできてすぐに帰らないで、メキシコに降りて、メキシコを見てからカナダにも寄つて帰ってくることはならんか」という要請が来た。僕はあのときは、ご承知のように選挙が済んだ直後ですから、国会もあるし、おれはいやだな、と思つたけれど、飛んで帰ればまだ国会開会までには間に合うというところで、メキシコに確か二泊三日、カナダに行つて二泊三日しました。行つてよかつたと思うんですよ。

伊藤 アメリカに行つて、南に行つて、また飛び越して北へ行ったんですか。

海部 はい。それはタイムテーブルを引かなくても、特別機というやつですから、明日は南へ、明後日は北へ、と言つても、すぐに飛んで行くんです。

それはいいけれど、なぜあんなかというのと、当時メキシコの大統領のサリーナスという人が、大変な知日派でしかも親日派で、自分の子供を日本人学校に半分通わせていたんですね。現地校にも

もちろん行つていますけれど、日本人学校にも週の半分行かせていた。そしてサリーナス大統領のプライベートハウスに呼ばれたときには、すぐに、「あなたに会つてもらいたいのがおる。日本語のできるやつだ」と言つて、呼んだら、こういうの「小さな子供」が二人出て来たわけだ。サリーナスの子供だ。日本語がすでに片言でできるようなつていました。だから日本人学校というのは、予想以上にメキシコでは大事にしておつてくれたので、来てよかつたな、と思つたんです。

伊藤 このあいだ（二〇〇三年）自由貿易協定ができて、非常に残念ですけれどね。メキシコは大事な国だと思います。それで大統領に会つて、いろいろ話されたわけですね。

海部 大統領の家で、初めは全くプライベートな接遇をしてくれた。その晩は大統領の家族と一緒に食事をして、翌日朝、向こうの要人と対談があつて、公式の晩餐会がその晩あつた、ということですよ。

伊藤 それで次の日に飛んでいくということですか。

海部 はい。

伊藤 けっこう体力的には大変ですね。

海部 体力的にはボタンキューですよ。飛行機に乗つてボタンキューです。緊張してきますから、全く未経験のことを朝からずつとやっていますからね、頭の芯が疲れてくるわけだ。冷凍食品の解け残りがあるような感じで飛行機に乗るからね。だからご進講も講義もなし。「ちよつと総理、聞いていただきたい」「それは向こうに近づいてからにしろ」といつてまず寝るんです。ぐっすり寝ると、いくらか取り戻しますからね。そこで詰め込んで、やるわけです。あれはしんどい旅行でした。

伊藤 カナダはいかがでした。

海部 カナダのマルルーニというのは、そのちよつと前にいろいろな情報をとつたことがあるんですね。どんな人だという話です。日本に対しては非常に好意を持っておるし、日本に来たこともあるというふうな話を全部聞いておりました。それからもう一つは、日加

漁業協定がこじれているさなかで、しかも鯨を捕るとか捕らないとかいろいろの問題がカナダとはありました。そこで当時は、日本の捕鯨船がそんなに悪くて、カナダの沿岸まで行って違法行為をやっているとは思えないがな、と思っていたら、そこにはこの近くの某国の漁船が行って荒らしているという事実もわかったんです。そこで、「われわれも誤解を解くような努力をするけれど、あなたのほうも、怒るときは十把一絡げで怒らずに、静かによく話し合いましよう」といった。それと材木があった。特に三枚合わせの合板。あれがカナダでは大変な目玉商品で、日本はたくさん買っておったんです。

伊藤 もっと買え、ということですか。

海部 もっと買え、ということですよ。こちらにも計画通り、「日本の経済がもっと力を持ってきて、ゆとりができてきたら、もう売るものがない、なんて言うな」と言うのと、笑っておるわけですね。マルルーニという人は、ざっくりばらんに話し合ったほうが、受け答えも早いです。「トシ、わかった」という。

終わり頃になったら、「おれは今度選挙があるんだ」と向こうから言い出したんですよ。「君は勝ったからいいけれど、おれは今度あるんだ。どうやったら選挙というものは勝てるんだ」と言うから、「それは日本とカナダは違うから、そんなこと一概には言えないけれど、僕の範囲では、あなたのところは奥さんが美人だから（ミラーさんというんだ）、奥さんと一緒に歩いて、みんなあんたはニコニコ笑って全部握手してやれ。そうするとその地域の評判だけはよくなるだろう。これはおれの経験だから」と言って大笑いしたんですけれどね。

伊藤 そうですか。海部さんも奥さんが美人なんだ（笑い）。

海部 向こうも調べているから、「それはそうだろう、おれはまだ選挙というのは三回か四回しかやったことがない」というんだ。僕に、「おまえはもう二桁やっているから、十回以上当選した人の話は、なるほどと思う。家族と信念だと自分でも最後は思っておる」

と言いましたからね。「信念を曲げずに、少々言われても説得するんだ」という。家族連れて歩けというのは、いいことを言ったな、と思うんだけど、結果的には、「家族にも協力してもらってやるんだ」と、マルルーニは言いました。けれどもかわいそうに、あれは一敗地にまみれたな、その選挙で。

■日米構造協議1（大店法関連）

伊藤 それでお帰りになって、早速日米構造協議の問題で、大店法の問題がありますね。

海部 まず大店法です。大店法の問題が一番頭が痛かった。わかりやすい例、あるいは象徴的なものとして大店法を突かれて、アメリカも非常に関心を持っているんです。

話はちよつとズレますが、ブッシュが政権を離れたときか、いやまだ政権におるうちだ、ブッシュが日本に来たことがあったでしょう。私のほうがもうギブアップして、しばらく経ったときです。

「トシキに会いたい」というものだから、「どこで会いたいんだ」といったら、「奈良で会いたい」という。「奈良は何だ」といったら、トイザラスの第一号店を出したんだ。「トイザラスの第一号店に行つて、トシキと一緒に成果を誇りたい」、それは何だ、自分の選挙に使っているわけだ。一緒だな、と思つて、「はい、よろしい」と言った。「トイザラス西日本地域第一号となる橿原店オープンの際、当時大統領のブッシュ来日。一九九二年一月」。

佐道 それは効果がありますね。

海部 それじゃあ協力しましょうということだ。バーバラさんも一緒に来ておつたが、一緒にヘリコプターに乗つて大阪から奈良まで行つて、トイザラスの前に降りて、そこでずっとトイザラスの店を見て、またヘリコプターで大阪まで帰つて、大阪から飛行機で東京に戻つた。

伊藤 しかし大店法は、日本の側で相当抵抗があったでしょう。

海部 日本の側は大変抵抗があつて、通産省の局長連中が夜な夜なご説得に来るわけです。当時自民党の商工部会に仲間たちがいっぱいおるわけでしょう。僕のスタートは政調会の商工部会副部長というのから始まっているんですから。頭の上がらんような人がよく来て、いろいろ「それは駄目だぞ」と言いに来る。「駄目だぞと言つたつて、向こうはその氣になつて鍋に入れてあるんだから、ここまでやつたらいいとか、ここまでだつたらどうだとか、話を教えてくださいよ」と言つたんです。

当時の細かいことですから、いささか間違ふかもしれないけれど、大規模な店舗を作るときには、三十ぐらいの事前の協議をやらせたんです。住民の意見を聞き、その地域の通産産業局の主催する公聴会をやる。そういう手続をずっと踏んでからでないといふ、いいか悪いかの判断すらない。だから申請してから判断が降りるまで、私の記憶に間違いがなければ一年半、ややもすると二年かかる。それを早くしてくれんか、というのも一つの言い分でした。それを早くしろといつても、向こうには、「あなたのほうが申請したものを、全部日本がOKというだろうと思つていたら大間違いだよ。これはこの地域にこういう影響があるから、残念ながらノーだということも言わなければならぬ。ただ時間を早めるだけというのなら、それはいろいろ手続を早めさせればいいけれど、そうばかりもいかな」とかいろいろ言つておつたんですが、陰でブッシュ・ホンと言われるように、表を使わずにブッシュが直接電話してくるんですよ。それで、日本語の通訳のおばさんが、「トシキさん、ブッシュ・オンライン、どうぞお願いします」なんて突然電話してくるんだから。それは困るね、とも言えないから、話を聞くと、「頼む」と、それだけです。それで早めることにしました。

中間報告にできるだけ盛り込め。中間報告は春までに出せ。例えば本場の取り決めは、春にはとても回答できない。そんな無茶を言つたら駄目だ。拙速は駄目だ。というのは、多くの人の理解と納得

を得なければならぬし、有権者のみんなには、なるほど、消費者の利益にはなるけれど、それを言うと、非消費者、消費者以外のものがすぐに徒党を組んで、ワーワー言ってきたら、そこでまた力関係の綱引きが始まるから、そのへんは静かに説得しながら進んでいかなければならぬのだ、それが日本のいまの政治の実態だ、と言つて、春までに結論をくれというように言いますし。

最後に僕が本音を言うけれど、「次の選挙に、あんた方は、自由民主党のわれわれを勝たせたいと思つていいのか。あるいはこの頃東京あたりでは、大使がちよろちよると野党の党首のところに出かけていって、ご機嫌を取つたり打診したりしておるが、あの土井たか子を総理にしたいのか。われわれは非常に不信感を持つている」「いや、そんな社会党や土井たか子にやらせようとは思つておらん。誰がそんなことをやっているんだらう」と言うから、「いや、そこまでおしやるのなら、はつきり申し上げるけれど、アメリカ合衆国の駐日大使だ。駐日大使がそこまでやれば、われわれだつて、これはいかんじやないかといつて、アメリカ大使館に抗議を申し込むことだつてあるんだ」と言いました。

あの頃、調べてごらんさい、秘かに土井たか子とアマモストが会つてゐるんです。会つた話のウラが新聞にちよいちよい出るわけだ。土井たか子はその頃から「駄目だつたら駄目よ」というおばさんだから、「この次の選挙で必ず勝つ」とかなんとか勝手なことを言うものだから、向こう「アメリカ」は両天秤をかけた。「両天秤をかけるのなら、わがほうもタスクフォースをつくつて全力を挙げてやるけれど、そんな信頼関係の持てないことじゃ駄目じやないか」というようなきわどいことまで言う。「じゃあトシキ、おまえは自信があるのか」というから、「自信があるから言つてゐるんです。必ず勝つ。日本国民はそんなに変わつてはいないんだ。まず日米安保条約反対だとかなんとか言つてゐるような政党が天下を取つていいはずがないんだ」というようなことをいろいろと言つて、相

伊藤 大店法の問題は、アメリカが大規模な小売業を日本の郊外に
どんどん投資しようという話でしょう。日本の小売業も同じように
競争して郊外店を出す。いまその点ではずいぶん変わりましたね。
その代わり、駅前がシャッター街になった、という結果ですね。

海部 そういうことです。そして、党内でも商工部会の先輩たちが
みんなこぞつて揃って、「海部、これは蹴つ飛ばせ。アメリカに対
しても、いいことはいいい、良くないことは良くないと言え。消費者
の利益だと言うけれど、生産者だって日本国民だ。それだけが利益
をとつてはいけない。生産者も利益を持たなければならんし、今日
まで日本の裾野を支えてきた中小小工業者の立場も考えていかなけ
ればならん」という。

じゃあどこで接点をつくるかということでも考えたのが、例の大店
法の中で、許可するときには、一定の範囲（確か二分の一だったと
思います）、その地域の零細商店街とか、商工会とかいろいろいな
ものに明け渡す。同じところに集まってやってくれ。そうすると、
町の中に空き地が出るかもしれない。それはそれで、集めて、いろ
いろなものを作ろうじゃないか。そんな案まで出したら、「それな
ら飲めそうだ」「それなら、あんたのほうの意見としていってくれ
よ」と言つて、商工部会のボスに球を投げたら、いろいろなこと
を言い出してくれたので、それにガボツと乗つかつて、言いなりだ。
それなら説得できるだろう。全国の商工会でも商店会連合会でもね。

あの頃商店会連合会の会長というのは、ややもすると、こちらの
系統の人「腕まくりをする」もだいたいおつたものだから、話があま
りわからないんですよ、世界の流れだとか、なんだとかいっても。
だから「頼む、抑えてくれ」ということで、「理屈抜きでこれは大
切だ」と言つた。むかし大野伴睦さんが使つたセリフだそうだけ
れど、「いいか悪いかはわからんけれど、これはお国のために必要で
あることは間違いない。だから日本のみなさん、わかってくれ」と、
全部中間省略で、むちゃくちゃな理屈だったけれど、最後はこうし
たほうがみんなの利益になるんだよということをお互いながらやっ

てきましたね。だから商工部会のボスたちが集まつては、いろいろ
作つてくる案は、だいたい飲んだんです。

楠 その頃の商工部会のボスというと、具体的にはどなたですか。

海部 固有名詞を出すのはかわいそうだな、まだいるから。

楠 ボスというか、中心でその問題を仕切つていた方は。

海部 まだいるから気の毒だけれど、例えば武藤嘉文、それからそ
の問題について非常に心強い仲間は金丸信。

伊藤 金丸信は応援してくれたわけですか。

海部 そのときは、「何も海部君、そんなこと言つたらんでもいい
よ。おれがひとつ、政府与党の場で言つてやる」といつて、政府与
党連絡会議の時に、「間違えるなよ、おまえらは、日本あつてのア
メリカじゃないか。アメリカがあつて、日本があるんだから、その
アメリカに向かつて弓を引いたり、小細工をしてプラスになると思
つていいのか。向こうの言うことは全部飲んじまえ」。コメの自由
化の話と、この大店法の話が、同時並行的に進んできたんです。金
丸さんは「コメはいいから、言うようにしてやれ」という。みんな
が「とつとつあん、無茶だよ、それは」という。金丸さんにアバウト
というあだ名が付けられたのはその頃ですね。

コメをみんな飲んじまえ、買つちまえといつたら日本の農家は駄
目になる。それよりも大店法のほうで飲んでやれというのなら、面
積制限だとか、審議会のスピードを速めるとか、いろいろ問題にな
つていことが日本側の努力によつて解決されて、アメリカ側にも
納得させられるようなことになっていく。そういうことですね。

■日米構造協議2（独禁法の強化）

伊藤 金丸さんは、海部政権の生みの親だと思つていいるから、応援
してくるんですね。

海部 ある意味では本当の生みの親でもあつたわけだから、「何を

ゴトゴト言っておるんだ、選挙に勝たにやあならんだろう。選挙に勝つためっていうのを考えろ」と言ってくれたのも金丸さんであった。

伊藤 あと独禁法の強化とか、構造協議の中で重点的な問題があるわけですね。

海部 そう言われてみれば、衛星の問題とか、さつきちよつと言ったスーパーコンピュータの問題とか、独禁法の問題もあった。独禁法の問題は、私の内閣になる前に遡ること十年ぐらい、三木内閣ができたときに、独禁法で、椎名さんとの間で三木さんと喧嘩になった。椎名さんは「わしは三木内閣を生んだけれど、育てる責任までは負っておらん」という、いやらしい捨てゼリフを残して、喧嘩別れをしたことがあったんだ。

そのとき、男・山村新治郎が椎名派の走り使いだったから、おれのところに入ってきて、「俊ちゃん、困ったことになった。じいさんが、『おれは生みの親ではあるが、育ての親まで約束したらん』と言うけれど、どうするんだ。おれとこれから一緒に行こう。じいさんに、『そんなことを言っておつてもらっちゃあ、一番大事なことが駄目になる』といっておれが話すから、俊ちゃん、おまえは横で、『三木もそう言っております』と、それだけ言ってくれ。そうすればうまくやっちゃうから。じいさんも、誰かから言われて言っているんだ」という。けれども、聞いたらそうでもなかったんだ。椎名さんは元商工省で、大ボスだから、よく知っているわけだ。だから言われてやっているのではない。「これは日本のためにならんから、三木君によくそう言っておけ」というので、難しかったんですが、最後はやっぱ飲んでもらいました。

伊藤 ご自分の内閣のときはもつと大変でしたか。

海部 独禁法の時こそ、例えば田中六助とか、山中貞則とか、あれらが抵抗勢力の大將みたいなものですから。おれが運転して迎えに行つて、新聞記者にバレないように、三木さんの息子の家が隣にあるから、その裏口に車をつけて、「先生、早く降りてくれ」と言っ

て降ろして、そこで三木さんと会わせて、いろいろ話をした。あれを作るときは大変苦労しましたが、独禁法をあまり言ったものだから、財界の評判が悪くなったんでしような。椎名さんが最後まで三木を支持しなかったのも、そのへんに原因があるような気がいたします。

伊藤 巡り巡つて、また自分の内閣でその強化をやらなければならぬということになりましたね。

海部 そうです。あのとき中途半端であったという反省があるんです。けれど時代も変わったし、それを言わなければ、選挙に負けてもいいのか、国民の信を失う。だから消費者に対する立場で物を言った。あの頃の新聞の切り抜きを読み返してみると、「消費者保護とか消費者優先というのは、アメリカが最も喜ぶ言葉であった。それを言い出した内閣は今日までなかった」ということまで書いてくれた新聞の社説もありました。

伊藤 たしかにそうですね。だいたいそのあたりでいいですか。

■ P L O アラファート議長来日

伊藤 その年の十月、帰つて来られてすぐあとですが、政府の招待で P L O のアラファート議長が日本にやってきました、お会いになっています。中東問題というのは日本にとつてきわめて重大な問題だと思えますが、これはもともと先生の発意ですか。それとも向こうが来たいということですか。

海部 「あの辺の平和と安定を確保するためには、あれを国として認めてやらなければならぬ。けれどもいろいろあるから、せつかくアラファートが日本に來たい、会いたいといったときは、来たら会つてやってくださいよ」「いいよ、それは」。

伊藤 そういうことは誰が言ってくるんですか。外務省ですか。

海部 外務省。要するに外務省というのも八方美人だから、たとえ

ばいま北朝鮮に深入りしているなんとかという審議官がおるでしょう。同じように、あちらに深入りしてどうにもならんような出先の大使がおるんですね。そういうのを通じて、いろいろなことを言ってきたんですね。けれども僕は、「アラファトという人は非常に魅力的な人だし、リーダーシップもちゃんと持っているから、来たら会ってもいいですよ。それから日本の立場で、アラファトを準国賓待遇で迎えて、いろいろしてあげてもいいじゃないか」といった。アラファトは、たしか天皇陛下にもお目にかかったはずだよ。そうすると大変立場が良くなる、というようなことを言っておったんだな。

けれども、拳銃だけは持って来ちゃいかんよ。はじめ官邸に来たときに拳銃を持ってきたんだから。「それは取れ、平和的な話をしておるときだから。しかもあなたの国とはわれわれは争ったことはないじゃないか」と言ったら、その一言で喜んじやった。「あなたの国とは」と言ったけれど、そのときは国がないんだ。こっちはそんなこと何も考えないで、思ったことをパツパツと言っておったんだけれど、そうか、あなたの国と言ったのは、国家としてまだ認めておらんに、認めちゃったから、アラファトとしては喜んでわけだな。

そのときは、今度はバーツと立ち上がって、執務室に並べてあった各国首脳の写真の中で、「これが一番悪い女だ、これが一番悪い女だ」とワーワー言い出すんだ。サッチャーさんだ。だから相当感情的なものも素直に言う人だと思った。

伊藤 政府招待ということは、国賓という意味ですか。

海部 準国賓。国賓並みのことはしませんでしたが、ご挨拶だけには行ったはずですよ。

伊藤 今度はイスラエルのほうは、どういう反応になったんですか。
海部 外務省がガードしておってくれたんじゃないですか。あの頃は犬と猿ですからね。

伊藤 いまでもそうです。

海部 イスラエルのほうも、来ればみんな会ってましたよ。イスラエルは歴史と伝統のある国家ですから、これはアラファトとはちよつと違うけれど、しかしあの頃、たしか国連決議だったと思うんですが、パレスチナの生存権を認めるということが大前提で、そのためにパレスチナのほうも、イスラエル国家の存在を肯定する。

伊藤 かなり関係がよかったですね。

海部 ええ、そういうことまで言っていたんです。

伊藤 その前は、お互いに絶対に生存権を認めないと言っていたわけですからね。

海部 蹴落とすとかつぶすとか言っていたのが、お互いに生存権を認めるようになった。それを公式の場で言ったんですから。

伊藤 アラファトというのは、実際に会ってみて、どんな印象でございましたか。

海部 ちよつと申し上げたように、感情に激する人ですから、見つけたら立ち上がって、「総理大臣、これが一番悪い、これが一番悪い」とワーワー言う。あれはマナーやルールに反しますね。こんなところでこんなことを言う人は、欧米では認められんはずだな、と思った。ところが、パレスチナ国家としては認めていなかったけれど、パレスチナの生存権は認めましょう、その代わりイスラエルも認めますといって、両方とも認め合ったかたまりですから。たしか日本にパレスチナの代表部の駐在を、そのとき許可したはずですよ。アラファトの来た手土産に。

伊藤 それは代表部なんですか。

海部 PLO代表部です。

伊藤 外交特権があるのかどうかわかりませんが。

海部 そのあたりはもやもやになっているけれど、いくらかあるんじゃないですか。

伊藤 それはいまでも続いているわけでしょうね。まだ代表部ですかね。

海部 いまでも続いております。PLOの代表部です。

伊藤 国家として認められたわけではないのかな。認めたんじゃなかったかな。

佐道 暫定自治政府ですからね。

伊藤 そうか、じゃあ大使館じゃないんですね。

楠 アラファトに、「あなたの国は」といって、それは何か影響はなかったんですか。アメリカの中の親イスラエル派とか、イスラエルとか。

海部 あったかもしれないが、僕のところまでは直接来なかったですね。どこかの入口でガードしておったのか、想像するといろいろあったでしょう。アラファトなんか呼んじやいかんとか、そういうクレームは表立っては来ていませんでしたね。僕のところまでは来なかった。むしろそれよりも、アラファトもこの際、譲れるものだけ譲って抱き込んで、情報源の一つにしたらしい、ぐらいい思っただけだったんじゃないですか。

佐道 アラファトさんがいらっしやるというのは、かなり前から決まっていたことですか。

海部 約三ヶ月前には、いろいろ煮詰まった話ができていた。それまでは呼んでもいかんという時期でしたからね。来てもらえない、来る資格もない、国交正常化の問題もあれだ。しかし中東和平の中で、当時どこかでアラファトがイスラエル国家の生存を認めなければ中東の永遠の和平はないんだと言ったことを僕は読んで、それは一歩前進ではないか。それなら日本はそれをエンカレッジするために、来たいというのなら来たらいいじゃないか。来るものを拒んではいかんよ。その代わり、何を言うか聞いて、それこそできることとできないことは言っただけでいいじゃないか、という気持ちで呼びなさいとゴーストを出したということです。

伊藤 何か向こうから要求がありましたか。

海部 ありません、具体的には。

伊藤 親善友好だけですか。

海部 当時まだ無償援助という言葉はまだなかった頃だと思っ

すね。一国に五千万ドルとか、一万ドル以下のところのものを、三十とか五十とか大使がポケットに入れておる無償の協力資金は、当時はまだなかったわけです。だからちよつと脱線しますが、マンデラがその前後に来て手を出したときにも、「そんな金はないよ」といって断わった経緯があります。「来年の予算を作って、その中にあなたのところの分も組み込んであげる。日本の大使館があなたの国にはあるはずだから、そこでやってくれ」と言っただけね。

伊藤 パレスチナはどうなったんですか。

海部 パレスチナは駄目です。要するにまだ正式の国交がない。国家とは認めない。一部の實力集団としての存在を認めるといふような扱いでしたから。

伊藤 これに経済援助をしたらエライことだ。

海部 そしてイスラエルの問題もあるから、あまり深入りしたらあかん、という迷惑も、一部の人にはあったんでしようね。

伊藤 でもアラファトとしては、日本政府に招待されたということだけでも――。

海部 そのことだけでいい、というんです。

伊藤 大きな効果ですね。

佐道 実際にパイプがあったんですね。

海部 あったんでしようね。僕のところには、アラファトがこちらに来たいという意志を持つていてくれど、呼んでもいいですか、と。伊藤 外務省でも、外務次官か何かが同意しなければ、それはできないでしょう。

海部 それはできません。向こうは国家じゃないんですから。正式の国交を持った国ではない。けれどもいろいろな意味で、お呼びになるとおっしゃるなら、向こうの要求を聞いておいてやれば、長い目で見た一つの布石になります。あの男はそう簡単に消える男ではない、という評価も少しは影響していると思いますね。

佐道 先生はアメリカに行かれる前に、アラファトを呼ぶというこ

とを決めておられたわけですね。

海部 アラファトが来たいというのを聞いたのは、そんな頃でしようね。

佐道 じゃあ、アメリカも、先生がこのあとアラファトさんに会われるという事はわかっていたわけですね。

海部 それは大使館を通じて、大使が然るべき筋にいつて、ジョージ・ブッシュの耳には入れておいてくださいと。隠し事なしにやるうということになっているから。

佐道 あれはどういうことなんだ、という話は、アメリカからはないですね。

海部 来ません。こちらが先手を打って伝えてありますから。それから、特にかようなことをするという手厚いことまでやったり言ったりするわけではありませんから。あのときも、中国かどこかからの帰り道に寄ったんじゃないですか。日本だけに寄ったんじゃないんです。あるいは日本が終わってから「中国に」行ったのかな。

■参院補選勝利と総裁再選、政治改革

伊藤 お帰りになって、十月一日に茨城で「参議院の」補選があった、自民党が勝ちました。これで、選挙でも痛めつけられて自民党はどうなるか、最後の総裁になるのではないか、ということが少し和らいだわけですね。

海部 反転上昇のきっかけになったという評価をあとからもらいました。あのときはもうなりふり構わず、これは勝たなければならぬと心に決めて、行きましたね。

伊藤 総理自身が行ったんですね。

海部 ええ。そして、「補欠選挙に三回も行ったというのは異例」と新聞に書かれた。「異例だと言われるが、それで自信があるんですか」というから、「いや、異例であろうがなかるうが、自信があ

ろうがなかるうが、ここはやらなければならぬことだから、そう確信してやるんだから、見ておってくれ。負けると思つて行く人はいないよ」と言った。そして三回行きました。当時、これは誰か助さん格さんが要ると思つたから、ご婦人票を標的にして、お台所の経済に直結した話をしなければ婦人票はもらえないということ、前々からそれに目をつけて入れてあつた高原「須美子」さんを口説いて、「これは大事な選挙だから来てくれ」といった。それから森山「真弓」さんにも、「いらっしやい」と言った。女二人を並べたことが、あとになってみると、どうもいやだったらしいんだけど。

伊藤 まあ、そうでしょうね（笑い）。

海部 それは片方に拍手が多いとか、片方が受けるとか——。あのころは、知名度は高原さんのほうが高かつたんだから。これ「しゃべり」が上手だったから。

伊藤 新聞でもよく取り上げられていましたからね。海部さんも両手に花で——。

海部 「いろいろなことを言われているけれど、これ以上ないんだ。全力を挙げてきた。大変失礼な言い分だけれど、一家のお父さんと一家のお母さんと、どっちがお母さんだかわからんけれど」というと大笑いする。二人置いておいて、「そして娘までついてきたんだから。そしていまやここで戦っているのは息子なんだ。だから息子の選挙を、おやじおふくろみんな揃ってきているんだから、この力の入れ方をわかつてください」というと、みんなワーツと喜んだわけだ。三回行きました。だからあの頃の新聞には異例だとか例外だとか書かれたけれど、それで勝つたんです。事前に勝つとは言われていなかった候補者が勝つたんです。

伊藤 これはラッキーなことですね。これで風がちよつと変わった。

海部 風がちよつと変わりましたね。そしてその終わった直後に自民党の全国研修会があつたので、「茨城の選挙も、新聞であれだけ騒がれて、たぶん負けるだろうなんていう予想もあつたが、勝つたんですよ、みなさん」と言った。「みなさんの友達で茨城の人がお

ったら、私が心から喜んでおったと言ってください。その代わり、今後の選挙はみんな力を合わせれば必ず勝てるんだ、ということここでみんなで約束しましょう」と言って、やったんですね。

伊藤 その数日後に、自民党の総裁選挙で、海部先生は対抗馬なしで無風で当選されることになりましたね。

海部 あのとときは、これも金丸さんが、「海部君を替えるといつて誰に替えるんだ。支持率だって悪くないし、どこを替えなければいいかんだ。しかも選挙の玉としては、立派な海部君だから、それではみんなやれ」と言って、鶴の一声で決まったようなものですね。

伊藤 対抗馬を立てないということですね。

海部 立てない。だから二期目は無投票当選でしたね。

伊藤 だけど、その前に立候補した二人はやめたんですか。

海部 林義郎と石原慎太郎ですよ。これは二人ともやめました。いままら思えばゾツとするような話だけれど、林義郎はまだまだとしても、石原慎太郎のあの人気でやられて、選挙にはどっちがいい、とか言われたら、それはいい勝負になっていたと思うんですよ。

伊藤 ましては、茨城で負けていたりしたらそうですね。その意味でも勝ったのは大きいんじゃないですか。

海部 勝ったのが大きかった。そういう補選はみんな勝たせてもらって、ありがたかったと思うんですね。

伊藤 再任されて所見発表ということで、「政治改革」ということを謳われるわけですが、この場合の政治改革というのは具体的に何をお考えだったんですか。

海部 大きく分けると、たしか五本だったと思いますが、柱を作った。世に言われるのと違って、第一は政治倫理の確立、これをやらないと自民党の永遠の生命は保てない。

伊藤 それはずっといろいろありますからね。

海部 いろいろありましたからね。「信なくば立たず」と私は教わってきたけれど、まさに第一はそれでありました。政治倫理の確立を、まずみんなで約束しよう。それから二つ目は、自民党の力をお互い

に割いておるのは（あの頃は「抵抗勢力」なんていういい言葉は僕には知らなかったけれど）、必ず足を引っ張る反主流派が出て来ることだ。「同じ自民党でありながら、どうしてそんなに違うんですか」ということを、第三者からよく言われた。けれども、それらの人々と話し合ってみると、例えばどんな法律の問題でも、どんな外交の問題でも、話せばわかるというのが私の実感であって、みんなが角突き合わさずに話し合えるような、対話と改革の党風をつくるう。

三つ目は、選挙のたびにこんなに醜い争いが続くのはどこに原因があるのか、選挙区の制度に問題があるのではないだろうか。同じ党の候補者が同じ選挙区で争うときは、政策は一緒ですから、政策論争にはならないだろう。だからあのとときは利益誘導が行なわれ、お金が裏で動くことが指摘されていた。だからそれらのことをなくして、本当に行くためには、選挙区の制度を少し変えなければいけません。だから同じ党に属するもの同士が批判し合ったり（建設的な批判ならいいけれど）、叩き合ったり、足を引っ張り合ったりするようでは、力を殺ぐだけだから、もっと背中と背中を合わせて、対決するような党を作ろう。選挙の最中に真ん中を向いて、ああだこうだといって足の引っ張り合いをするのは、よくない。

それからあのとときの政治改革のもう一つは、「楠氏のほうを向いて」思い出してよ。何かもう一つ、いいことを言ったはずだ。足の引っ張り合いをやめるといふことはいいし、最初の政治倫理の確立もいいけれど、もう一つは、そうだ、地方自治。地方自治といながら、ちやうど今日の議論のように、全部中央に金を持ってきて、中央の金をばらまいて、地方のどこか来いといっている。しかし地方自治というものの本旨はそんなところにあるんじゃない。だから今度の政治改革にはそれも入れますと言って、それも入れたんです。だから柱の一つには地方自治もある。一番最初が政治倫理の確立で、二番目はお金のかからない選挙がどうやってできるか。政党本位、政策本位の選挙はどうやってできるか。

伊藤 当時は「マニフェスト」という言葉はなかったですからね。

海部 それを考えたんです。それを発表したんです。そうしたら、当時後藤田さんと伊東正義さんが、「それはいいことだから、大いにやってください。応援しますから、しっかりやって」ということだった。それで、それをつくってやろうと思っただが、さて抵抗勢力、反対派がすぐできた。

だからいま、ちゃんちゃらおかしいのは、石破茂なんていうのも、当時は一年生か何かで、二年生ぐらいになっておったかな、抵抗勢力だよ。それから——、まあ固有名詞を出すのはやめておこう。

伊藤 いいですよ、出したって。あとで消せばいいんですから。具体的イメージがないと駄目ですから。

佐道 そうですね。

海部 両院議員総会でやられたんだからね。

伊藤 石破さんに、ですか。

海部 うん、石破に。「やるか、やらないかというのが大前提で、それではよく理解できない」なんていうことから始まって、ちやうど橋本龍太郎が参議院選挙に負けたときと同じように、ねちっこい理論を振りまいて、上目遣いでしゃべるんだな。

佐道 「いまと」全然変わらないですね。

伊藤 ねちっこいですよ。

海部 そうだろう、ねちっこくとトリモチでくつついたように、ねばーとくくる。

佐道 瞬きしないような感じで。

海部 そして、人を内心小馬鹿にしてさ、こんなことがわからないんですか、というニュアンスを持ちながらしゃべるから。同じ派閥は親分に似るものだな、と思った。

伊藤 そうですか、あれは橋本派なんだ（笑い）。

海部 橋本派だ。

伊藤 いまは橋本派のような感じがしませんけれどね。

海部 あれはお父さんの血を受け継いでいるのかも知れん。

■二十一世紀に向けて目指すべき社会を考える懇談会

伊藤 それで政治改革と関連があるもう少し政策的な話ですが、梅原「猛」さんを座長にして、諮問機関「二十一世紀に向けて目指すべき社会を考える懇談会」というものをおつくりになりますか、これは、きっかけは何ですか。

海部 「梅原は」中学の先輩で、同窓会なんかでよく話をして、この人はちよつと学者でも骨つぽいところがあるな、時の党に尻尾を振ってこない、というような想いが、僕の印象の中にあつたんだ。

それは後日大変な逆転を食つたんですけれどね。生命倫理の問題で、臓器移植法案の時も梅原さんに頼んだら、一人だけの少数意見で、そんなことは間違いがあつたらどうするんだ、というようなことでやられたけれど、それは、ことは直接関係ありません。

二十一世紀の委員会の中には、当時売り出しておつた変わり者なるべく入れようと思つた。だから残間里江子なんていう女の評論家でしょう。

伊藤 この人選は誰がやるんですか。

海部 これは総理大臣がやりました。これとこれとこれ、ということだ。

伊藤 相談相手は誰ですか。梅原さんですか。

海部 いや梅原にも相談しなかった。決めてから梅原のところへ電話した。ちやうどアメリカかどこかに旅行しておったんですよ。電話で追いかけて、「先輩、ここまでおれが追いかけたんだから、いやと言わずに聞いてくれよ」「なんですか」と言うから、「こういうこと、二十一年の委員をつくるから、座長になってまとめてもらいたい」と頼んだ。「あとは誰だ」というから、当時『サラダ記念日』なんていう変わった本が売れておつたから、このサラダ記念日の女の子もいいな（佐道 俵万智ですね）。それも委

員に入れました。残間里江子は、テレビの討論会や座談会で、粗大ゴミだとか濡れ落ち葉とか言いながら、男性社会に対して痛烈なことを言っておったから、こういうのも入れておけ。二十一世紀はこういうふうになるよ、と思いつながら。そして、いまはちよつと、これはどうだったかなと思つけれど、角川春樹も入れて、総勢十一人か何かにしたんだ。偶数ではなくて奇数にした。

そうしたら梅原さんはエライ張り切つてやつてくれたわけさ。自分で筆を持つといつて、官邸に朝八時にみんな集合をかけて、そこである話した。

伊藤 八時ですか、早いなあ。

海部 八時に集合をかけておかないと、十時になると次のものが始まつたり、お客さんとの約束があつたりするから。八時に集まつて朝食を食べて、九時半頃までやつた。

伊藤 海部先生は自分が出てやつていらるんですか。

海部 ああ。僕は全部出ましたよ。そこで一問一答、ぜんぶやりました。

伊藤 普通懇談会というのは、そういうものではなくて、答申が出るのを待っているんですよ。

海部 答申が出るのを待っている、では遅すぎるから、みんなで議論して決めたんだ。決めるときは「梅原さん頼むよ」ということでやつてきたんです。

伊藤 どれぐらい続いたんですか。

海部 月に二回ずつやりました。テンポが早いでしょう。角川春樹は半分ぐらいしか出なかつた。

楠 それで何か方針が決まつたんですか。

海部 はい。当時の梅原さんが書いた懇談会の結論を、僕はまだ持っているはずですから、家に帰つていっぺん調べてみます。

伊藤 その結果として何かやつたということはあるんですか。

海部 ありません。やれなかつた。やれるような話ではなかつたんだ。

伊藤 かなり高邁なことだったんですか。

海部 大変高邁な、大きな話でした。

伊藤 とても政治に乗つかうような話ではない。

海部 はい。そしてああいう政治条理の中で、党派を超えて議論できるような話には、なかなかならなかつたですね。

伊藤 これは海部先生の教養を高める懇談会だ（笑い）。

海部 そういふようなことですよ（笑い）。

佐道 事務局は総理府か何かを受け持ったんですか。

海部 総理府の青少年問題協議会というのがありましたね。そこから腕利きを出せといつた。メモをとらせなければならんし。梅原さんが最後は書いたんですけれどね。

伊藤 具体的な提案もあつたんですか。

海部 あまり具体的な、ここぞ、と思つようなことはありませんでした。

伊藤 何か一つでも取れるようなものがあればよかつたですね。

海部 取つて、スツとやればいいけれど、なかなかそうは行かなかつたように思います。

佐道 なかなか議論が噛み合わなかつたということですか。いろいろなタイプの方がいらつしやいましたから。

海部 それは天上天下唯我独尊みたいな人もいるから。それと、お姉様たちはキャンキャンと言う人だし。

伊藤 じゃあ、とてもじゃない、まとまる話ではないですね。

海部 言いつ放しで、こういう意見もあるなということがわかつたということでしょうね。

伊藤 異才の方々のご意見を承つたということですね。

海部 ただ、教育が大事だということはそのとき言いましたね。さすがに学者だから。それは言つても、別に反論が出る話でもない。ただその教育の中に、愛国心を入れるとか、いろいろなことを言い出すと、完全に教育基本法もできなくなつた。そうでしょう。大政党が一致結束して反対するから。何がいかんですか、と聞いても、

具体的な反対はないけれど、全体として駄目だというでしょう。

■ベルリンの壁崩壊1（冷戦の終焉）

伊藤 それで「一九八九年」十一月に入ってから、十一月十日にかの有名なベルリンの壁の取り壊しが始まるということになりました。これで本当に急速に、東ヨーロッパの諸国が共産主義、ソ連のくびきから離脱していく。これはいつか終わると思っていたんですが、十二月に入りますと、米ソのマルタ会談で冷戦終結宣言が出るということ、あれよあれよという間に事態が進展する。僕もいつかソ連は崩壊するだろうと思っていましたけれど、まさかここから引き続き起ころうと思いませんでした。先生はどういうふうにごらんになっていましたか。

海部 あの年の一月元旦の発売の「タイム」という雑誌の表紙に、上半身はきちんとした服を着ているけれど、下半身はズボンを脱いで、まさに海に沈まんとする船の上に爪先立っておるゴルバチョフと、下半身はきちんとして「やあやあ」と言っているブツシュが並んでいた。非常に象徴的な表紙でしたね。そのときは、これで勝負があったんだ、ということでした。だから、よし、これを利用してやってみようということ、体制の問題を選挙に取り上げるのはどうかという意見もあったんですが、体制の問題を説いて、「日本は正しかったではないか。社会党や共産党のみなさんにお尋ねするけれど、あなた方の理想郷や桃源郷は何だったんですか」というような大見得を切れたのは、あの大変動があったということですね。

伊藤 いいですね。先生を後ろから押してくる風のようにですね。

海部 あれは大きなプレゼントですね。それで見に行く前からだいたいストーリーもわかっておったんですが、しかしこれは現地に行つて壁を実際触つてみたらああだったとか、こうだったとか「演説で言うためには」、知らなければならんから、無理して日程を組ん

で行ったんです。

伊藤 そうですか。それは選挙対策ですか。

海部 もちろん選挙対策。党全体の、自由民主主義が勝つたんだということをなんといつて全国に広めたいか。できたら、土井たか子でも連れて行って、一緒にその場でどうだ、と言いたいんだけど（一同笑い）、そんなことはとても当時はできません話ですからね。行つて見てきた。

伊藤 しかしいまおっしゃったような、君らの理想郷としてのあれはどうなったんだ、ということですが、感じた人はあまりいないんじゃないですか。少なくとも間違っていましたと言った人はいないですね。

海部 以前、例の大野伴睦さんがベルリンに行つて、「ベルリンの西も東も春の風」という俳句を詠んだんですね。だからそのことを例にとつて、「ベルリンは西も東も平和の万歳」とか言葉だけくつつけた句を作つて発表したら、みんな新聞が取り上げてくれた。ベルリンの事件は本当に象徴的であつて、あの頃、東ドイツの総理大臣をやつておつたハンス・モドロウというのがおるんです。向こうに行つたら一回モドロウに会つて、「おまえが言っていたことはだいぶ違つていたじゃないか。お気の毒様とは言うけれど、これからどうするんだ」と聞いてみようと思つて、ハンス・モドロウにぜひぶん連絡をとらせたいんですが、日本の大使館を通じての返事は、「モドロウはそのときどこかに出張して出かけておるので、残念ながらあなたとはお目にかかることはできませんけれど、いろいろなことはいよく聞いているので、またいずれ」というようなものだった。僕は壁の下でモドロウと会つて話ができたらいいと思つた。

ただモドロウがそのとき僕に寄越した手紙だったと思うんですが、「これは東ドイツの国民が西ドイツの国民より劣るわけではない。私が東ドイツの総理として反省するのは、国づくりのために選んだ教科書が間違つておつたんだ」ということだった。よくそんなこと言うなあと思つただけけれど、事実それを言つてもいい時代になつ

たんだね。それは選挙の時に、ずいぶん演説で使わせてもらいました。「選んだ教科書が間違っておったんだと、当の東ドイツのハンス・モドローが認めているんだ」と。

伊藤 体制の選択というのは、いいですね。これでもう少し向こうを押しつぶせばよかったですね。

海部 迫力不足かな。

佐道 いえいえ、ちよつと時間が足りなかった。

伊藤 向こうは無感覚な人たちですから。

■ベルリンの壁崩壊2（体制の選択）

楠 そうすると先生は、総理大臣に就任されてから、補選で勝って、ベルリンの壁が崩壊して、そのあとで衆議院の総選挙になる。総選挙までずいぶん僥倖が続いたということになりますね。それはご自身の努力もいろいろおありでしょうけれど、補選で勝つ、ベルリンの壁が崩壊するという集積の上に総選挙の勝利があったということでしょうか。

海部 あの頃は、知恵を出してくれる人や協力してくれる人がいる。いろいろあったものだから、ヨーロッパからの帰国報告というのをやりました。日比谷公会堂でもやりました。けれども、当時の自民党批判になって申し訳ないけれど、仲間内ばかり集めておるわけで、いわゆるオピニオンリーダーを集めていないものだから、初めからみんな「いいぞー」ということで拍手は多いけれど、燃えるようなものが湧いてこないんですね。大勢おるし、反対派がシュンとなるような話もいろいろあるんだけれど。

伊藤 身内だけになっちゃったんですね。

楠 体制の選択というのは、直接、選挙には影響がなかったということですか。

伊藤 あったんでしょう。

海部 本当にそうです。体制の選択ということで選挙を戦ったつもりだし、この体制だからこそ、いまの日本はあるんじゃないか。

楠 でも反対派があまりクシュンとしなかった、ということでしょうか。

海部 反対派といつても、国会でもそれは間違いだ、という人は一人もいなかったし、街頭演説でもこの話はそんなにひどい反発はなかったですね。

楠 仲間は元気づけられたということでしょうか。

伊藤 相手だつて、体制の選択だといわれて、少しはクシュンときたでしょう。

佐道 でも自己否定はできませんからね。

海部 こちらの方がよかったですよ、という駄目押しをするわけです。

楠 選挙中、そのことに大きな反響はありましたか。

海部 説明し始めるとずいぶん長くかかるけれど、ちようど今日、僕らが大概の人の前で質問されて、「海部先生、あなたはブツシュと手紙のやり取りをしたり、電話をかけたなり、アメリカまでわざわざ行って励ましておるけれど、どうしてだ」といつて聞かれる。それはいま町に出ている書籍のたぐいで、僕に言わせれば明らかに一つの目的意識を持った人の作品が多すぎる。例えば名前を出して悪いけれど、読んで本当に腹の立つものがある。ある女性の俳優が、「私が舞台に立っていたら目の前にいる人がみんなイラクの子供の姿に見えてきた。手が吹っ飛んで倒れて、苦しんでいる。やめさせなければいけません、あれは」というと、そちらのほうの組の人はホツとするね。けれども日本の劇場で、自分が演劇をやっているときに、目の前がみんなイラクの子供に見えて、みんなそこで殺されていくのを見て、私はアメリカは許せないと思つたというんですよ。これが朝日新聞に顔写真入りで大きく出ていた。特に渡辺えり子というの、そういうことをそういうトーンで書きますね。池沢なんとか「↓夏樹」という男性の執筆家も、全く片一方の発言だけです。

から。そういうのを聞くと僕らは「どうしてだ」と質問されるけれど、「どっちがいいかといって選んだ場合、いろいろ内部に批判もあり、告発があっても、まだまだアメリカのほうイラクよりはいいし、われわれのつき合う友達としては上等だと思っっているから、それだからですよ」と言うんだ。

伊藤 だから反対している人はフセインと手を握っているか、ですよ。

楠 伺いたかったことですが、冷戦の終結あるいはベルリンの壁の崩壊というのは、世界的に見て非常に大きな出来事ですね。一方、北朝鮮の拉致問題で金正日が拉致を認めただのは、日本人にとってみれば非常に大きいけれど、世界的に見たら、冷戦の崩壊と匹敵するぐらいのものか、それはわからないし、もうちよつと小さいと思うんですね。しかし選挙に対する影響は、途方もなく拉致問題のほうが大きかったと思うんです。ベルリンの壁崩壊、冷戦体制の崩壊というのは、それほど選挙には直接影響を与えなかったんじゃないかという気がして、そのときの先生の印象を伺いたかったです。

海部 そのちよつと前に、ハンガリーとオーストリアの国境で、二十世紀に向けてのピクニックという試みが行なわれた。そのときハンガリーの当時の首相はネーメトといいましたが、ネーメトが鉄条網を切って開けるんですね。そうすると、人が雪崩を打って、国境をフリーパスで通っていくわけだ。「ヨーロッパ・ピクニック計画」一九八九年八月。行く人はみんなそれぞれ腕に技術を持った人で、過去の経歴も立派なものを持った人たちです。だから共産圏としてはそんなことは許してはならんことであつただけで、どんどん出て行った。それがオーストリアに入つて、そしてドイツに入っていくわけですね。だからベルリンの壁というのは、その前のハンガリーのピクニックで、人の流れを止めることができなくなったんだ、ということを目の当たりに見ていた。それはゴルバチョフも言ったことだけれど、やらなければならなかった歴史の必然であつた。

楠 日本人に対するこの問題の影響ということで、先生の感想をお

伺いたかったです。例えば日本人というのは、世界中で何か事件があると、そこに日本人の犠牲者がいるかどうかということにまず関心をもちますね。いないとホッとして、自分のこととは思わない。この冷戦の崩壊というのは、考えてみると日本人とは直接関係のない話であつて、東アジアではまだ冷戦体制が続いているわけですね。そういう意味では世界的には大きな出来事なだけけれど、選挙に作用するような大きな力とはならなかったんじゃないかと私は思つたんです。

海部 それは選挙で利用するときは、「自由と共産主義の戦いは、ベルリンの壁の崩壊で明らかに決着がついたんだ」と、短絡的に言わなければ街頭演説は響かないから。

楠 それで、相当反響はありましたか。

海部 ありましたよ。「そうだ！」ということ、拍手もよくもらった。そしてもう一つ言つたことは、「それはヨーロッパだけで起こつた話であつて、アジアを見なさい。まだお隣の朝鮮半島には国境線があつて、そこで対立が続いておる。それからちよつと性格は違つて、台湾と中国大陸の関係も同じようなものがある。そういうことを考えると、アジアはまだ複雑骨折で、ヨーロッパと比べて手術の見通しも立つておらん」というようなことも言いました。

「だから日本は、ますます今日までの路線を守つてやらせてもらいたい」と言うのと、「頑張れえ！」というヤジが出てくるわけさ。

楠 要するに、冷戦の崩壊と一連の出来事は、二月の総選挙には大きく影響した、と先生はお考えになつておられますか。

海部 うん。

伊藤 それまで汚職にまみれた自民党というイメージを変えていくということでは、非常に大きく役立ったんじゃないですか。

楠 選挙の勝因というのは複合的だから、一つだけ取り出して、それが影響があるかどうかを論じてあまり意味がないと思ひますが、

海部 しかしヨーロッパにおける共産主義陣営の崩壊というのは、日本国民に与えた心理的な影響は大きかつたと思ひますよ。社会党

や共産党が言っているようなことにはならんのだ。

楠 ただ、タイムラグはあるんじゃないかと思うんですけどね。起こった直後は、その大きさを実感できないということがあって、だんだん時間が経つにつれて、それが影響してくるということは当然あるだろうと思いますが。

■ベルリンの壁崩壊3（東西ドイツの統一）

海部 当のヨーロッパでも、ベルリンの壁がなくなった後、そんなに時間が経っていないときに、僕はコール首相と飯を食いながらいろいろ話をして、「どうなんだ」と言ったら、「これはまだまだ時間がかかる。そしてわれわれは今世紀中に片が付けばいい問題だと終着駅を置いている」という。だから十年はかかるということをコール自身が言っているんだね。そして隣に、当時の小和田「恒」審議官が一人だけ陪席してメモをとっておったけれど、「それでどうするんだ」と言ってさらに聞いたら、「ドイツはやがて連邦国家になるんだけれど、まずできることから条約を結んで、緩やかな条約連合体になるんだ」という。通訳は「条約連合体」と言いましたからね。

伊藤 コールさんの予想をはるかに超えて時代は進んだ、ということですね。

海部 コールが十年はかかると言っておったのが、あれよあれよといううちに転がってきたわけでしょう。そしてその次にコールに会ったときに、「このあいだのお話よりも、スピードもテンポもずいぶん違うじゃないですか。しかしそれはいいことだから、あなたの指導力によってそこまで行ったということを、私は日本国民と共に高く評価する。さらに進めてもらいたい」と言ったら、あの人は冗談の好きな人なのか、冗談か本気かわからんけれど、「きれいな娘に会ったら、ドイツだって日本だってそうだろう、早く結婚しよう

と思う。結婚するまでは両方ともめくらになっただけから、喜んで結婚する。そしてしばらくいい思いをしたあとで、ああ、これも出さなきゃならん、あれも出さなきゃならん、こちらでこの自由がなくなるんだ、というようにことに気がついて、それはもう遅いんだ。ずいぶんお金が要るんだ。また要ったんだ」という。とにかく西のほうの収入の中から、国家予算と同じぐらいの補助金を東へ出したんです。要するにイコール・フィッティングというか、両方平等にならなければいけないということで、ずいぶんお金を出した。

伊藤 マルクを同じにしましたからね。

海部 同じにしたんです。「けれども、それに耐えても乗り越えられなかったものがある。内なる心の闘争である。内なる心の問題はまだ完全に片が付いておらんのだ」という。そこで僕が、「コールさん、あなたのところの仲間から話をいろいろ聞いたけれど、いま統一ドイツの政府は、人を募集するときは西ドイツのほうが有利で、東ドイツから来る人はほとんど採用されないというが、それでは内なる統一はできないから」と言ったら、「いや、そういうこともたしかに一つの問題点だ」ぐらいにしかコールは答えなかったけれど、現実はずっと厳しいらしいんだ。

後から東ドイツに入っていくって、いろいろ聞いてみると、最初に言うことは、大学を卒業して試験を受けても、こっちのほうが「成績は」いいんだけれど、向こうのやつらが合格するとかね。一緒に入ると、何年以内に向こうのやつらは課長になるけれど、こちらはまだヒラだとか。ちようど日本の学歴社会と同じようなことで、差し障りがあったらごめんさいよ、あいつは国家公務員試験を受けて、東大だからもう課長になつたけれど、おれのほうは早稲田大学だから駄目だ、局長にもなれんのか、ということがひところ言われたでしょう。もっと深刻で、もっと惨めな話をしておったな。

だから内なる統一というのはできたのか、といって最近も聞いてみたの。パイロイト出身の国会議員がいま日独友好議員連盟の会長になって、僕に「あなたもオペラが好きなようだから、パイロイト

に来てください、ご招待します、議員連盟の幹部何人いらっしやるか、連絡してください「たら用意しますよ」という。ただし、そういうことができるということは、ごく一部の人のらしいんだ。バイロイトの切符なんていうのはドイツ人だって高くてあまり手に入らないんだ。だから内なる統一というのは、私はそうは進んでおらん、という感じがしますね。対外的には数字を挙げて、公務員の格差はこれだけは正したとか、こちらの医者のはだいたい一緒になつたとか、いろいろ言いますよ、調子のいいところだけつまみ食いしている。けれども一般の話を聞いてみると、非常に厳しい声があります。今度東ドイツにもういっぺん行って、意地悪質問をしてこようと思うんだ。

僕はワイマールに行ったときに、終わってから、ワイマールの芸術家とか市民団体の代表とこちらから行った人が集まって、いろいろな話をしたんです。そういうときに一緒に行くのは、E U ジヤパン・フェスティバルの日本側の企画委員です。ご承知ですか、ネモトさんとか、NHKにおった森本哲郎だとか、ああいう人が数名行くんです。それらが芸術的な話はパシパシやってくる。おれはもっぱら政治的な話をしているんだ。

伊藤 まあ、分離していた時間に以上に、統合するのに時間がかかるでしょうね。

■ベルリンの壁崩壊4（日本外交への影響）

佐道 このベルリンの壁崩壊から一連の話を、ちよつと違う角度から伺いたいんですが、先生がアメリカにいらっしやる前ぐらいからハンガリーから東独の人が出て行くとかいうことが少しずつ問題になってきていたと思うんです。それが十月ぐらいになったら一気に加速して、十一月にベルリンの壁が崩壊する。そしてあれよあれよという間に、ハンガリーから、ルーマニアから、ずっと全部に波及

していくことになったと思うんですね。政治日程からすると、翌年一月に総選挙があるんですが、その一方で、国政の最高責任者として、これまで日本が前提としていた国際環境が大きく変わろうというところですから、外務省の情勢分析も頻繁に届けられて、これからこうなります、こうなる可能性があります、というようなことがあつたと思うんです。変転が劇的であつたあの時期について、そういう情勢分析、情報の集まり方、分析の角度は、先生はどういうふうに見ておられましたか。

海部 これはまさに本当に劇的なものであつて、僕はコールというのは優れた政治家の一人だと思つて、十年かかると思つていたんだ。統一がそう簡単にはできると思わなかつたわけだ。ですから、そういうすべての人の主観を乗り越えて、歴史というものが動いていったんだな、という感じがしますよ。

伊藤 日本の安保政策も何もかも、日米同盟もそうですが、冷戦を前提にして組み立てられているわけですね。でも米ソで冷戦終結宣言をやつたんですね。これは日本がそもそもこれからどうするんだ、ということと非常に深い関係があるわけですね。日米安保はどうなるか。そういう大きな変化に対してどう対処していくのかということについて、外務省あたりからいろいろレクチャーもあるだろうと思つて、そのへんはいかがですか。

海部 僕の本当に率直な感じですが、あれはヨーロッパで起こつたことであつて、「見ろ、朝鮮半島でも台湾・中国でもアジアにはまだそれは来ていないんだ」ということだ。逆に言うと、たいへんいやな、恥ずかしい話ですが、アジアはまだワントンペン遅れている。アジアに来るためには何をしなければならんのだろうかということも考えて、なかなかいい知恵は出て来なかつた。

だから中国に行くたびに「台湾とのことをどういうふうと考えているんだ。われわれが心配するのは、あんなところでやれ金門島だとか何とかいって、年中行事をやつてもしょうがない」と言う

ただけれど、原則論しか中国は言いませんからね。台湾のほうは、このあいだ宋楚瑜が日本にきた。今度の総統候補ですよ。宋楚瑜は、この前は世論調査でも一番であった。宋楚瑜が当選するだろうと思つてみておいたら、当選できなかった。けれども票はかなりいいところまで取つたんだ。

それで宋楚瑜と会つていろいろ話を聞いてみると、「昔は二言目には台湾の指導者はフアングンダール、フーコーウオーと、『反攻復国宣言』を高らかに言つていないと、とてもじゃないが政治家としての立場がさらわれてしまう人が多かった。それがだんだん変わつてきて、いまや下の方では、大陸と台湾との往復がさかんにできるから、もうちよつと上のところまで行きたい」「行きたいというだけでなしに、行けるようにしたらどうか。われわれから見るとあなた方には共通点があるよ。ところが一つの中国論というのにあまりこだわつてゐる。そこところは柔軟に調子よく解釈をしていかないといかんから、そこらは柔軟にならんのか」というと、「まだいまはとても難しいです」という。

僕は、やるならばまず台湾のほうから球を投げて、大陸のほうの懐の深いところを見せてバツと受け止めて、それから入つていかないと。だつていま経済関係だけでも、香港経由の貿易や投資は全部台湾資本ですからね。そんなことは中央の連中は百も承知ですよ。中連部というのがありますね、中国対外連絡部。あの中連部長は、一回は必ず飯を食つて話をするんです。「また増えたじゃないか」というと、「それはよく承知しておりますし、この趨勢を駄目だといつたことはありません。だから両方で、原則さえ守つておれば、全部受け容れるんです。だからさういふん増えているんですよ」という。

伊藤 増えているのは、ミサイルも増えているんですね（笑い）。本当に、アジアとヨーロッパでねじれていることはたしかなんです。たしかにおっしゃる通り、冷戦の影響が、ストレートに日本に広がつたという感じではないと思うんです。だから割り引かなければな

らない。だけど世界の体制として、ソ連が駄目になってきた、共産党は駄目だということが非常につきりしてきた。それに追隨した社会党に対する評価も少し落ちたということとは間違いないと思うんですね。

■消費税の見直し論議

伊藤 この時点では、「一九九〇年」一月二十四日の解散、そして二月の総選挙というところに照準が向いているわけですね。そもそも海部内閣そのものの目的は、ある程度そこに設定されているわけですね。

海部 そうです。初めからその演説の材料を仕込み、説得力のある演説ができるためには現場を触つてこなければならぬということをやつてきたんです。

伊藤 そうすると、消費税の見直しというのも、その一環だと考えてよろしいわけですか。

海部 はい。消費税の見直しというのは、大きな歴史の渦の中では、日本だけの国内的な問題である。しかも銭金問題である。

伊藤 でもこれは大事な問題ですね。

海部 だから思い切つて、変えます。どこまで変えられるか、人間の基本的な尊厳に属する部分は、消費税をかけてはいかんというようになことを言いながら、例えば、お産の手当には消費税はかけませんとか、いろいろなことを言つたんです。

伊藤 教育とか、食料品もそうですね。

楠 何に税金をかけて、何に税金をかけないというのは難しいんじゃないですか。例えば食料品の中だつて、嗜好品と日常的なものがありますね。それを区別するというのは、政府が価値観をある程度決めることになりかねない。例えば高いお酒はかかるけれど、安いお酒はかからないとなると、人によっては高くも何ともないと思う

人もいるでしょうから。品物によって税金をかけたリかけなかったりという選択は、非常に難しいんじゃないかと思いましたが、いかがですか。

海部 それを日本は物品税という名前ですつとやってきた。毛皮のコートは高くかける、書面骨董は基準があるわけではないのに高くかける。物品税は高いものには高くかける。そんな頃に、物品税は非常に不公平だということで、「物品税をやめて消費税にしたほうが広く全体のために行くじゃないか」というと、「消費税というのは貧乏人にこそ痛く感じられるんだ。金持ち優遇の最たるものだ」と野党はよく言いました。あのときの委員会の委員長は金丸信で、アバウトだから、おれが理事の一人だった。ときどき委員長席を交替しながらやり取りを聞いておると、そういうところに与野党の論戦のまじり合い合わないところがあったんですね。その頃どうしたらいいか知恵を出してこいと言ったら、大蔵省の連中は、「物品税がこれだけ批判を受けておるときだから、物品税をやめて、広く浅く薄くすべての人からいただくのが消費税であります。ものは売るときにかかる税金と消費するときにかかる税金とあるわけです。逆に言うと、お酒なんかの蔵出し税は好むと好まざるに関わらず、全部蔵元にかかるんです。消費税というのは、一人ひとりの消費者に、独立自尊の精神、決定権があつて、よしこれは買おうと思つたら、そこで初めて債務が発生するわけです。高いからいやだと本人が思えば、それは消費税に関係ない話になります。わかりやすく言うとそういうことです。物品税よりもこちらのほうが、国民のみなさん一人ひとりのお気持ちをお大切にしたい税です」というようなことだ、さかんに教育された。これは忘れません、街頭演説をやつたんだから。

伊藤 それはその通りなんです。だけど今度は、例外を作りますと物品税にだんだん近づいてくるわけですね。要するに食料品といつたときに、何を非課税にするか。

海部 それはどこで線引きするかということでしょう。食料品は全

部非課税にしろというのは、サッチャーさんから教わつたんです。イギリスの成功例ですよ。けれどもそれを言つたら、それは駄目だ、ということになつたんです。あの頃、どうせやるなら、初めから五%とれと言つたのが、宮澤さんです。だから先見の明があつたといえはあつたわけだけれど、しかしそれはただ単なる学者としてのいろいなる意見をまとめて、おつしやつたのではないだろうか。野口悠紀雄さんなんていう人は、「初めから消費税は一〇%のものです。そんな三%や五%なんていつたつて、そのうちに一〇%になるから、まずそう思つていなさい。世界の趨勢はこんなです」といつて出したのが、一五%の国があり、二〇%の国もあつたんじゃないかな。

伊藤 ありますよ。だからこれは、一部例外をはつきり作つたということ、言つてみれば選挙対策ですね。

海部 それは選挙対策ですよ。

伊藤 だから、いずれまた消費税は上げなければ財政的にはやつていけないということは、政治家のみなさんはみんなご承知のことです。自分の時にやつてもらいたくないというだけの話であつて。

海部 だから小泉なんてずるいのは、私の内閣では上げませんといまだに言つておるでしょう。あとは野となれ山となれで、これほど無責任な話もないじゃないかというのが、いま党内にみなぎつておる不満の一つです。

伊藤 やめる前にやつておけということですか。

海部 やらしちゃえ、やらせてからやめさせろ、という議論も出てくるんじゃないですか。

伊藤 たぶんそうなるでしょうね。

さて、十二月にフィリピンで反乱があつて、かなり大きなもので、マニラ市で銃撃戦が行なわれるという事態になりました。フィリピンというのは、日本がかなり援助している国ですね。日本は最大の援助国ではないですか。日本人もたくさんいますし、総理としては、これは大変だ、ということにはなりませんでしたか。

海部 それは大変なことだと思いましたが、さりとて、いまのよう

に、フィリピンまで出て行って、お力添え、ご協力ができるような環境も雰囲気もない。

伊藤 これは大して大きくならなかったのでよかったです、いよいよ激戦になって、日本人を引き揚げさせなければならぬ、というようなことになったら大変でしたね。

海部 それともう一つ、そのとき心配したのは、内部的な問題もありますが、通商航海の重要な位置でありますから、あのへんにそういうのが出沒してきたら、日本の経済のものがやられるのではないかと。そちらのほうはどんな様子になっているのかということ、絶えずいろいろなところで議論しておりました。

伊藤 日本の通商路ですからね。そうでなくても、フィリピンの南のほうとか、インドネシアの近くには海賊がいろいろ出ますからね。これは大した影響はなかったんですが、こういうときはほとんど情報が入ってくるものですか。

海部 はい、当時は内調、内閣調査室といいましたが、内調の情報でした。だいたい月に一回、内調室長がこちらの都合に合わせて官邸まで説明に来る。

伊藤 こういう事態になったら、もうしよっちゅう来るんでしょう。

海部 もうしよっちゅう、こういう事態ですから、と言ってくる。

佐道 外務省ではないんですか。

海部 外務省ももちろん来て、いろいろしますけれど、内調のほう詳しくです。

■ヨーロッパ歴訪（ポーランド、ハンガリー）

伊藤 それで翌年、先ほどお話にありましたヨーロッパ歴訪にお出かけになるわけですね。さつきおっしゃったように、総選挙対策という意味合いも兼ねて、この目で見えておこうということだろうと思いますが、ずいぶんたくさんさんの国に行っていますね。西ドイツ、ベ

ルギー、フランス、イタリア、イギリス、パチカン、ポーランド、ハンガリー。

海部 ポーランド、ハンガリーは初めから計画には入っていませんでしたが、どうせやるならば、広く日本の夢を語らなければならぬ、ということと共に、ポーランドという国では、その頃からワレサというのが出て来て、グダニスクで「連帯」という組織を作って、まさに破竹の勢いであった頃です。できたらそいつらにも会ってやろうと思った。なぜそう思ったかというところ、ポーランドが国づくりの目標としておくのは日本だと言っておったという話が伝わってくるから、それでは行こうと思った。いままで行ったことのない東欧諸国ですから、そこに手を伸ばすということ、向こうにも日本に対する理解や協力がなければいかんから、どこがいいかといって探らせたんですね。そうしたら――。

伊藤 ポーランドとハンガリーというわけですね。

楠 それでワレサにはお会いになったんですか。

海部 ワレサはわざわざ日本大使館までグダニスクから出て来たよ。そして「日本にわれわれは非常に憧れておる。第二の日本になりたい」「そのために何をしたらいいんだ」というと、向こうの話も大きいけれど、「初めに日本銀行を持ってきてくれ」という。日本銀行を持つてくるわけにはいかんから。日本銀行というのはたまたま日本だからそう言うだけで、中央銀行としての日本銀行をイメージしているのかどうかわからんけれど、そういう大きなものがない国ですから。「日本には銀行があるから、それがよくしたんじゃないか」という。

佐道 通貨制度が全然違いますからね。体制が違いますから、銀行についての理解ができないかもしれませんね。

伊藤 結局は、投資しろ、ということなんですしょうね。

海部 そのとき、マルクス・レーニン大学というところがあつて、そこで、日本から来たのなら話に来てくれというので行って、いろいろな話をしたわけです。そうしたら質問の第一は、「どういう目

的意識を持って、われわれのところに来て、われわれに援助してやる、協力してやると言ってくれるんだ。どういう大家さんになってコントロールしようと思ってるのか」という学生の質問でした。

「そんなことは、少なくとも、日本はいま毛頭考えておらんし、こんなところまで出て来てそんなことはできない。あなた方がみずからの力で、こういうものになりたいという自主努力を助けるんだ」

「具体的にどんなことがありますか」というから、「それは帰ってから相談しないと、あなた方もまだその程度だろうけれど。例えば青年海外協力隊というのがある。これは本当に目盛りが長いけれど、国づくりのために一番必要な青少年に、技術と技能を身につけてもらう係だから、出しますよ。その前に、最初にあんた方が言ったように、われわれは日本になりたいんだ、日本が好きなんだ、と語ってくれるなら、日本の柔道と合気道を持ってきてやろう。青少年に柔道と合気道を教えれば、日本の礼に始まり礼に終わる武道の真髓が必ずこの国の将来に役立つんだ」という話をしてきたんです。

それで、約束を置いてきたんですよ。それでイニシャルした青年がその後入り込んでいて、いまでは大変な数の向こうの青年が取り組んでおる。特にポーランドは、外務省の官房長という立場の人がその道場で少し教えてもらって、日本に行つてもうちよつと高度なものを身につけたいといって、僕のところに来たから、よし、おれが紹介してやるからいらっしゃいといって、いまでも頑張つてやっていますよ。だからポーランドというのはそういう意味で非常に民主主義国家になっていけるような精神状態を持っていると思うな。

伊藤 何かポーランドの人に聞くと、ソ連の支配でカバーを掛けてあったけれど、中味は別に赤くなつたわけではなくて、赤蕪だという(笑い)。

佐道 切れば中身は白い(笑い)。

海部 ポーランドの真ん中に広場があるでしょう。あの広場の前にある国営ホテルに泊まつて、広場からずつと見たら、銅像が一つあ

るんだ。馬に乗った銅像ですね。小さい声で通訳が、「先生、あの馬が見ているのはみんな国境線だ。ドイツや何かがまた来るといけないから。けれども剣の先の方向はロシアですよ」という。本当にそうなんだな。あの気持ちだけはみんなにあるんだ、ということを書いておつたな。あれは忘れられん話ですよ。

楠 日露戦争のおかげですかね。

海部 ビールだつてなんだつて、トウゴウビールというのをつくつたり、いろいろしていますからね。

伊藤 ポーランドとハンガリーとに行かれましたが、ポーランドとハンガリーは違つた感じでしたか。

海部 全く違つた感じだね。ポーランドはひとことと言うと、非常に苦労してきた泥臭い田舎のおじいさんたちだ。

伊藤 基本的に農業国家ですからね。

海部 ハンガリーのほうは、ルツクス・ライク、これがハンガリーかと思うようだ。特に首都ブタペストはそうだ。すごく西洋風で、洗練されていた。王宮・王族のあつた国というのは料理も違うな、ということをやまず感じました。それよりも何よりも、ハンガリーという国は、ネーメトが首相のとき、時の大統領は何という名前だったかな「シュトラウブ↓ゲンツ大統領」。ちよつと措きますが、日本文学を訳して出版したことがある国はハンガリーだけです。それがわれわれでも難解だと思ふ『少将滋幹の母』〔谷崎潤一郎〕とか、『源氏物語』とかも、向こうの言葉に訳して売っているんです。だから非常に親日的であつて、日本に対して親近感を持っているのは間違いないと思うな。

伊藤 この二ヶ国に対しては、そのあとで援助をしていますね。

海部 はい、援助します。

伊藤 それで、解散総選挙というところは、次の回の頭にしますか。

海部 ああ、年内解散をはね飛ばして、二月解散に持つていかなければならんというので、こつちもあときは本当に歯を食いしばつ

て努力しました。

伊藤 その、年内解散云々というのは何ですか。

海部 これはまた妙な話だけれど、自民党の中から年内にやっちゃえという声が出て来たんです。

伊藤 それはどういう意味ですか。

海部 どういう意味がよくわからない。

伊藤 それではそのあたりから、この次お伺いします。どうもありがとうございます。今日もたいへん面白いお話でした。いつ伺っても、ちよつと予期していたことと違うので、面白いですね。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 27 回

海部内閣Ⅲ (1990)

【2004年3月8日 (月) 14:00~16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

楠 精一郎 (東洋英和女学院大学教授)

佐道 明広 (政策研究大学院大学元助教授)

[記録、編集] 丹羽 清隆

(2004年3月8日)

1. 今回も先生の総理時代のお話をお願いします。前回、年内(89年)解散説と1月解散説があったというお話しでした。新聞等によりますと、年内解散を主張する竹下元首相と1月解散を主張する金丸氏との間に確執があったと伝えられていますが、この点はいかがでしょうか。
2. 当時の新聞等によりますと、選挙の「みそぎ」で早く復権したい竹下、安倍、渡辺、宮澤の各氏が年内解散を唱え、選挙の結果によっては安倍氏が後継となる可能性まで語られていたことが伝えられています。これに対して金丸・小沢といった方々が海部政権存続のために年明け解散を主張していくという構図が語られているのですが、先生ご自身は解散をめぐるさまざまな議論についてどのように見ておられたのでしょうか。
3. 結局1月24日衆議院が解散されました。このときは史上初めて「党首公開討論会」が行われましたが、この党首討論が実現した経緯や、実際に討論されてのご感想はいかがでしょうか。
4. 2月18日に投票が行われ、275議席(最終は286)を獲得します。海部内閣として最初の選挙であり、先生は「体制選択の選挙」を掲げて全国1万4500キロを移動して応援されるなど大変な選挙だったと思いますが、この選挙について、取り組み方、とくに力を入れられた点などお願いします。
5. 選挙の結果をうけて2月28日に第二次海部内閣が発足します。内閣では中山外相、橋本蔵相は留任ですが、官房長官は森山真弓氏から坂本三十次氏に替わり、党の方も小沢幹事長は留任ですが総務会長は唐沢俊二郎氏から西岡武夫氏へ、政調会長が三塚博氏から加藤六月氏に替わりました。これはどういったお考えからでしょうか。
6. 総選挙がからんで「平成元年度補正予算」の扱いが政治問題になっていました。中小企業特別対策費や国鉄精算事業団補助金、芸術文化振興基金創設費、公務員給与改善費などを内容に五兆九千億にのぼる「平成元年度補正予算」に野党は露骨な選挙対策だと批判しました。選挙後も与野党は対立し、二週間国会が空転するという事態にもなりました。結局、野党優位の参院で否決されたものの衆院優位の原則で成立することになったわけですが、この時の補正予算審議について先生はどのような姿勢で臨まれたのでしょうか。
7. 選挙後の3月2日、ブッシュ大統領との首脳会談のため訪米されます。日米構造協議問題が最重要課題だったと思います、4月の(日米構造協議に関する)「中間報告」を控えて、このときの首脳会談はどのように進められたのでしょうか。
8. 6月28日に日米構造協議が決着します。91年度から公共投資10カ年計画(総額430兆円)、特許の審査期間短縮、大店法・独禁法改正など米国の主張をかなりとり入れていたわけですが、これの実現は国内のかなり強い抵抗が予想されました。先生ご自身はこれにどのように臨むお考えでしたか。
9. 4月18日、臨時行政改革推進審議会(新行革審)の最終答申が出ました。公的規制の実質半減、国民負担率の上昇抑制、土地活用に私権制限などを内容としていましたが、これについてはどのような姿勢で臨むお考えでしたか。

10. 4月26日、選挙制度審議会の第一次答申が出ます。衆議院に小選挙区比例代表並立制を導入しようというのですが、これについてはどのようなお考えでしたか。
11. 同月28日から南西アジア諸国歴訪に出られます。インド、バングラデシュ、パキスタン、スリランカ、インドネシアを回られました。30日にはインド議会で演説もされています。このときの外遊で印象に残っておられることなどお願いします。
12. 5月24日、韓国の盧泰愚大統領が来日します。海部先生は不幸な過去を朝鮮半島の人々に謝罪され、天皇も「痛惜の念」を「お言葉」で述べられました。この時のお言葉の内容などはどのようにしてお決めになったのでしょうか。また、盧泰愚大統領のご印象などもお願いします。
13. 6月4日、カンボジア和平東京会議が開催されました。日本が紛争解決のための国際会議のホストになるのはこれが初めてだったわけですが、ベトナムや中国が深く関係し、米国も大きな位置をしめているカンボジア和平問題に対して、このときどのような姿勢で臨まれたのでしょうか。
14. 7月9日、米国のヒューストンで第16回のサミットがありました。このときのサミットで特に問題となったのはどういったことでしょうか。また、先生はサミット初参加になるわけですが、各国首脳の影響などもお願いします。

※今回は以上のような質問についてお願いします。

■九〇年総選挙1（年内解散か翌年解散か）

伊藤 今日は二十七回目、総理大臣時代のお話の続きでございます。この前のお話で、「一九八九九年暮れに」年内解散か、翌年解散か、という問題がございました。どうも年内解散を主張しているのが竹下さんたちで、翌年解散を主張しているのが金丸さんたち、その先の思いがちよっと違うのではないかと、ということが当時言われておりました。この、いつ解散するかということは首相の専権事項でございますね。それを外野からいろいろなことを言っているわけですが、その人たちをどういうふうにごらんになっていましたか。

海部 竹下さんと金丸さんの考えが違つて、いちいち両方に意見を聞いたりしなければならんということは本当に二重手間になるわけだから、どっちかに一本にしてくれ「と思つていた」。それからちよっと脱線しますが、橋本龍太郎に、「おまえはこういうことがあるが、どうか」と言つて、証券疑獄の問題とかいろいろなことを話したときにも、橋本も「両方に話してください」というようなことだ。あの頃は、二つに分かれていたことに非常に苦労した、ということを思い出しますね。

伊藤 竹下さんと金丸さんは盟友じゃないですか。

海部 盟友どころか、一緒になつて共通の利害もあつたらうし、ご親戚関係にもなつておるし。

伊藤 それで、それぞれ違つた意見になるんですね。

海部 それでも違うんですよ。だから金丸さんのことをみんなが、「あれはアバウトスキイだから駄目だ」と言つていた。というのは、その時その時で、金丸さんのおっしゃることが変わるんだな。

伊藤 年内解散をやるのと翌年解散をやるのとで、自民党にとつてあるいは海部先生にとつては、どちらが好ましい事態なんですか。

海部 それはやつぱり、お正月を過ぎして気分を一新して選挙をや

つたほうが、訴えやすい。年末のいろいろなことがあるときにやられても、雑然たる中からは何物も生まれてこない。暮れはみんながそれぞれやつて、そして新年になつたら選挙をやるう、僕はそう思つていました。また、そうあるべきだと思つていました。

伊藤 でも竹下さんたちは、一刻も早くやりたいということだったんですね。

海部 それはいろいろな複雑な理由があつて、自分の命を賭けてでもロシアまで行こうと思つた人がおつたくらいですからね。それからあの頃、変な話ですが、パットというのは肩にだけ入れるものだと僕は思つておつたが、背広の胸やら腹やら全部パットを入れた洋服をつくらせた人もおるし。

伊藤 それは何ですか。

海部 それは見た目で、痩せていないよ、立派だよ、というところを見せるためですな。その一人も、名前は言わんが、いろいろな絡みの中で登場する人であるし、それと併せて、早くやらないとそちらのほうも駄目になるんじゃないかという思いがあつて、早く年内に選挙なんかやつて片を付けて、それによつてひよつとしたら変わるかも知れん、政局に持つていけるかも知れん、持つていけたら、あれの命も間に合うだろう、というような――。

伊藤 名前を言わなくてもわかりますけれどね。

海部 そういう生臭い話だけです。天下国家じゃないんだ。たまたま安倍さんが入つておつた病院は、僕の仲間が中におつたから、病状とかあれらの動きを刻々と聞いておつた。

伊藤 あれは秘していたわけでしょう。

海部 そうですよ。

伊藤 でもわかっているわけですね。

海部 それで、とにかく早くやるかやらんかということとは、年を越してからやつたほうがいい。僕も学問的な理由はないけれど、気分が一新して、さあという気持ちになる。今年こそしつかりやるうということを、誰でも新年は決意を新たにす。国民がみんな気を新

たにするときだ。暮れの忙しいときに選挙なんかやっても、雑然たる中からは冷静な判断は何物も生まれなと思う。というようなことで、年内の選挙だけはやりたくない。そして年を越してからやろう。二、三の人は、それでいいと言っておったんです。

伊藤 年内の解散というのは、どういうきっかけを作って、やるんですか。

海部 それは、結果は馬車であとからやって来るということで、本当にやりたかったら、いろいろな理由をつければいい。

伊藤 でも政局にするということになると、自民党は負けないとまじいんじゃないですか。

海部 いや、自民党が負けなくても、自民党の中で替わればいいということでしょう。自民党は党そのものが与党から野党に変わった経験なんて、それまではなかったわけでしょう。だから、自民党の想定の中には、自民党というのは広い大きな融通無碍な政党だから、東西線と南北線を引いてパツと分けると、大きく四つぐらいの考え方があつた。その境界線を越えれば、それで政局だと。

伊藤 でも数が減らないで、選挙に勝てば、これは政局にはなりにくいじゃないですか。

海部 そうですよ。

伊藤 だからやはり政局にするためには、負けないとまじいんじゃないですか。

海部 負けないといかんけれど、あのときの選挙では負けることを願っておった人もおつたんじゃないかな。

伊藤 負ける可能性もあつたということですか。

海部 いやこつちは負けるとは思っていなかつたけれど、そのための準備もおさおさ怠りなした。

伊藤 今までの話は全部それですからね。海部内閣の使命というのは、まさにそこにあつたわけですね。

海部 そうです。そして、「天の時、地の利、人の和」と言うけれど、天の時は東欧の崩壊で十分にわれに味方をしておる。だからこ

の前正直に申し上げたように、自分の頭の中では訴えるストーリーはできておつたけれど、やはりベルリンの壁に手で触れて——。

伊藤 あれですか「部屋にかけられた額を指し示す。崩されたベルリンの壁の前に立つ海部氏の写真」。

海部 あれです。それでコールさんとかみんなと話をした。「選挙では」体制の選択ということでは間違ひなかつたんだ、ということころに持つていけ。各社の論説委員との話をやったときも、それだけの話をする、これはいい方向ですよ、それで戦つたら勝てるし、われわれもそれは支持するという。そういったものをひっくり返していこうと思えば、準備が整わないうちに、そしてそういう世の中が騒然としているうちに、パーツとやってしまった方がいいのではないか。

■九〇年総選挙2（党首公開討論）

伊藤 結局、解散は海部先生がおつしやつた通りになつたわけですね。それで「一九九〇年」一月二十四日解散。このときに党首公開討論をおやりになりましたね。

海部 党首討論というのを初めてやつたんです、選挙を控えて。国会ではなく——。

伊藤 それはどこでやつたんですか。

海部 記者会館。記者クラブが主催した。

伊藤 それは放映したわけですか。

海部 放映しました。始めから終わりまで全国放送しました。

伊藤 評判はいかがでございましたか。

海部 評判は、あの頃は選挙前だからあまり偏つた報道もないけれど、あの頃のものとはたくさんとつてあります。もうちよつと厳しく叩いてくれたらいいじゃないかというような評価もあつた。相手はなにしろ土井たか子さんですからね。僕はあまり女性を追い詰める

と、かえって有権者から反発を食っていかんから、「土井さんのおっしゃることも、それはその通りだけれど」と言って一步譲ってやっておいたら、途中から、「あんなことではいかんから、もつと激しくやれ」と言われた。その時、あとで大笑いになったんだけど、メモというのもしけませんね。メモを書いて持ってきてポツと渡すでしょう。「もつときつねめでやれ」と書いてある。「キツネ目という、目つきが悪いということか」と聞いたら、それはきつめにやれ、強めにやれということだった。もつと退路を断て、ということだった。

伊藤 追い詰める、ということですね。

海部 そういうことです。戦いの前だから、という。もちろんそれは戦いの前ですからね。

伊藤 これは効果ありでしたか。

海部 僕は効果があったと思いますよ。というのは、その後街頭演説に行ったり、応援に行ったりした。あのときは解散をして、新橋で街頭演説をやって、真っ先に北海道に飛んだんです。雪が降っていましたね。そこで大勢の人が集まったが、終わってから、「このあいだのテレビのあれ」「党首討論」は良かったよ」と言われましたから。

伊藤 どうしてそういうことになったんですか。いままでなかったことでしょうか。

海部 なかった。初めてやったんです。

伊藤 仕掛けたのは新聞ですか。

海部 新聞が仕掛けたんじゃないか、と思うな。要するに、そういうことをやった場合、受けるかどうかという問い合わせが内閣記者会からあって、受けますよ、と言った。ただ、公平に言うけれど、党の数だけでやると――。

僕はNHKには、長いことそのことで恨み骨髄だから。特にスト権ストのとき、官房副長官として出たときは、僕の発言も一回二分なら二分。それから、あの当時は五つの党があって、同席した五つ

の党もみんな二分ずつしゃべるわけです。こんな不公平なことはいじやないか、というようなことで、最後はとちめた。あのとき司会をしておいたのは、たしか磯村「尚徳」さんだと思ふな。おとなしい磯村さんだから気の毒だったと思うけれど、「磯村さん、これは駄目だ」と怒ったんだ。「あんたさつきから不公平極まりないやられるのは僕一人だ。五人が入れ替わり立ち替わり勝手なことばかり言って、なんですか、これは。僕が「話し始めてから」二分経ったら、「そちらは制限時間だ」という意味で」ポカポカとライトをつけたけれど、こんなものはつけたって駄目だ。僕は僕の主張はどこまでもしますから、それでないと聞いてらっしゃる人はそんな裏の話はわからんから。僕はもつと言いたいことがある。本当は、一人ひとりに二分ずつ反論したいんですよ。それが本当の公平ということに對しては、ワーツと支持が来るんですよ。「あの調子でやってくれ」と言う。

だから党首討論というのは、特に選挙前ですから、もつと厳しくやらねばいかんということがあった。それから土井さんはあの頃、「駄目ったら駄目よ」と言う人で、いろいろ言いますね。それに対して、「あなたのほうのあれはどうなつたんですか」というようなおとなしい優しい言い方しておったのではないから、もつと對等に、「駄目ったら駄目」と言われたら、「何言ってるんだ」ぐらいにやり返せ、というようなことがあったと思うんですね。

政策の内容については、あのときは政治改革がテーマに出て来た。政治改革の問題も、小選挙区の話ではないんです。今日と全く同じで、政治姿勢、政治とカネの問題、ロッキード、リクルートなどからの問題に對して、どう改めていくのかということだ。「政治改革大綱」というのを党でつくって、それを持って行って、これをやります、と言った。伊東正義さんとか後藤田さんというのがそちらのほうの専門家で、中心になつていろいろ書いてくれた案がありましたから、この政治改革をやるのが今度の選挙だ、ということ

で、第一義はそれで私のほうはやりました。

そしていいところに行ったら、「この自民党が生まれ変わって、自由と民主主義というものは体制の選択の中でも世界的に認められたじゃないか」と言うんだ。共産主義・社会主義というのは、あのころ調子よく次々と連鎖反応「で崩壊するということ」もありました。しかも私自身は行って、それを見た。「大野伴睦さんがむかし『ベルリンの西も東も春の風』と歌ったけれど、ベルリンに行けば、壁の西も東もみんな同じドイツの人で平和です」というようなことを言っていて、「こういう時代が来ているんだから、さあアジアでもやろう」と言った。あのころ、もう一つえらそうなことを言ったのは、「ヨーロッパではそういうふうになって行きつつあるけれど、ユーラシア大陸の一番こちらの端のアジアでは、いまだに複雑骨折をしたところがたくさんある」と言った。あの頃はまだ、たしか朝鮮問題と南北ベトナムと台湾問題があつて、アジアでは東西の片が付いていない問題がいろいろあると言った。

■九〇年総選挙3（選挙戦、応援演説）

伊藤 この選挙では、体制の選択というのが、この前からおっしゃっているようにメインのテーマなんですね。そして全国一万四千五百キロ飛び回ったということですが、このときの感触はいかがでしたか。これは行けるな、という感じでございますか。

海部 勝てるということはだいたい序盤戦でわかった。人が集まってきた、ワーワーと燃えてくれるし。

伊藤 違うのですか。

海部 違います。「そら、頑張ってくださいよ」「頑張るなさいよ」と言ってくれるから、これは行けそうだと思う。「しつかりしてくださいよ」なんていうのもだいたいあった。第一声の新橋の駅前から良かった。それから飛んでいった札幌の大通りも、雪が降り出

したのに聴衆が帰らないでワーツという。

伊藤 寒いでしょうね。真冬ですからね。

海部 そうですよ。雪に降られて、頭に積もった雪も払わないでやったものだから。傘をさしかけても、「傘なんかいらん」とか言つてね。そのへんは、ああいうところに行つたら目にも訴えなければならんから。傘を差してもらつて、寒そうにやつておつてはいかんから、傘はいらんと言つて、こうする「胸を張つて演説する」。結局、それぐらい本人も燃えていなければいかん。

佐道 総理大臣の選挙応援演説というのはどんな感じなんですか。例えば前に、ある選挙で、応援に行つた代議士が「誰の応援に来たのかわからないけれど」とか言つて、あとで批判されたことがありますね。「先生、次はこつちに行つてください」「こつちに来てください」という形で、着いたら、誰それです、という感じでやられるんですか。

海部 それはあのときでも、党の公認候補は、派閥に囚われずにみんな公平に平等に応援してくださいという。それは当然そうだな、総裁が行く以上は。行くと、仲のいいやつやよほど嫌いなやつは覚えていますが、ポツと立候補した人は、正直言うと（これは書かれると具合が悪いかもしれんが）、フツとど忘れすることがあるんだね。それは一日に二人やれとか三人やれとかいうことで、今日はこの県、ということであるでしょう。誰だったかな、ということになる。そんな迷いがあったのでは迫力がなくなりますからね。「演壇に」上がっていく前に、紙に書いたものを持っていく。僕は自民党の「政治改革要綱」というのを一冊必ず持っていたんです。それでここから「ポケットから候補者の名前などを書いた紙を」サツと出して、そこに日程も同じ大きさに切っておけば、手に握つて、「この政治改革の云々」と言っているときに、ちよつと見れば、誰と誰とがおつて、これは何派かということも全部わかる。そう頭に入るわけがありませんからね。

楠 総理の遊説は官邸が仕切るんですか。それとも党本部ですか。

海部 党の遊説局というのがあって、その中に総裁班というのがあるんです。ひとところは、神様みたいのがおった。小安「英峯」君とか、全国のことを知っていましたな。しかも私の前の宇野さんはそう長くなかったけれど、竹下なんていう人は「選挙の神様」と言われて、選挙が生き甲斐みたいな人だから、全部レクチャーを受けて一覽表をつくって、ああだ、こうだ、誰は何派だ、とそこまではよくわかるけれど、生まれは明治何年で、趣味は何で、ということまでみんな知っているんだ。知っているのか、書いてあるのか、とにかくそういうことまで全部インプットしておかないといけないわけでしょう。

伊藤 そうでないかと迫力がなくなりますね。「ええと」、とか言っていたらね（笑い）。

海部 田中角栄という人が、そういう点は、選挙に直接関係ないことでもよく覚えておって、応援に来ていた人や聴衆をみんな喜ばせる術に長けておったな。僕は三木先生の家来であつたから、角さんとは一番仲が悪かつたんだ。親分同士は犬猿の間柄だけれど、こっちは立場上遊説局長になつたからしようがない。佐藤栄作さんのときも、佐藤総裁の演説というとおれが行かされたんだ。「おれはいやだから、竹さん、あんた行ってよ」と言うのと、「わてはもうやつたから、あんた行ってらっしゃいや」なんて言われて、行くでしょう。そういうことをみんな覚えておるわけですな。

それで田中角栄という人は、街頭演説でみんなをずっとほめるときに、「この選挙区には誰と誰がおる。みんなそれぞれ、なくてはならぬ人だが、中でもここにおるこの人は」と言つて、「応援する候補が」たすきを掛けているから、それを見ればいいわけだ。娘のほうは正直だから、「あんた誰だったの」と正面切つて聞くからいかんけれど、おやじは、「その中でもこの候補は」と言つてたすきをチラッと見て、「だから今日は忙しいところを差し置いて、この私が来たんです、わかるでしょう。この人を当選させれば」と言つて、地元の案件を頭に入れておるから、「どこどこからこま

での道路が、みなさんに迷惑をかけているでしょう、日頃不自由でしょう。あれをよくします。必ずよくするから、見ていてください」なんていうと、ワーツと「拍手が」来る。ああ、こうやってやるんだな、と思つて聞いていた。

伊藤 海部先生は、そういう利益誘導はあまりできないでしょう。海部 できないです。できないし、僕の趣味じゃないんだな（笑い）。

伊藤 でもそれで、「この選挙では」とにかく二七五議席をとつた。海部 ずっと回つて、日本中ほとんど飛び回つて、帰ってくる。「行つた場所に」ピンが押してある。これだけ行つた、今度はこっちだ、今度はこっちだ、と言う。

佐道 「一九九〇年一月」二十四日に解散して、「二月」十八日に投票ですから、たしかにそうですね。

海部 その十八日というのも、縁起を担いで、僕が決めたんです。二×九^{じゅう}二^に八^{はち}だもの。僕のラッキーパーティナンバーは二十九ですから。二と九を分けてかけると二×九^{じゅう}二^に八^{はち}になるから、十八日で行けと言つた。そんなことは外には言わずに、「うん、十八日だな」と僕が言つたら、誰か政治家の中で気がついたやつがおつて、「二十九に引つかけたな」と言われた。「その通りですよ」と言つた。そういうほんわかとしたものが、全然理屈なしに支えにあると、これはおれが強い日だからこれで行けばいい、という自信みたいなものになるじゃないですか。あれはよう忘れません。

伊藤 二七五議席というのは大勝ですか。

海部 大勝です。

伊藤 いろいろながことがあつた後ですからね。

海部 だからそこで、当分はべた凧になつちやつたんです。

■九〇年総選挙4（選挙期間中の総理職、花押）

佐道 その前に、重要な問題はこの時期には起こっていないと思いますが、選挙期間中といえども総理大臣という職務でいらっしやることは間違いないわけですね。総理がなんらかの判断をしなければならぬことは多々あると思うんですが、それは秘書官が随時随行して、執務の情報を上げて、ということになるんですか。

海部 それはもちろん、「秘書官は」いつも随行してましたし、「情報も」上げていますけれど、私が総理在任中は、演説をやつても、原則日帰りで帰ってきました。帰つてこれんことありますよ。例えば沖繩に行ったときなんかは帰れないでしょう。北海道に行つたときは、最終便で必ず帰ってきました。そして職住接近で、僕は公邸住まいですから、官邸のほうにみんな待たせておけばいい。帰つてからも、番記者が旗を振つてついてくるけれど、「よし、もう今日はこれで終わりだ。今日は疲れたから、まあまあ」と言うと、みんな帰るでしょう。帰つた後で公邸のほうにみんなを呼んで、いろいろな説明を聞いたり、話をしたりしたことはありました。

伊藤 それで署名しなければならぬものもたくさんあるでしょう。

海部 はい、それはみんな署名します。署名といつても、簡単な花押ですからね。

伊藤 花押を書くようになるのは、大臣になつてからですか。

海部 大臣になつてから。

佐道 先生は文部大臣になつたときに作られたわけですか。

海部 はい。ここだけで告白すると、もちろんこっちは花押なんてないから、どうするかといつたら——。おれのお師匠の河野金昇先生という人が、まだ大臣になつていなかったけれど、三木先生のほうから「もう順番は来ておるんだから、そのつもりでおれ」なんていうお内示があつたことがあつたんだらうな。そうすると、なかにはいろいろの人がおつて、花押というのはそれこそ「東西南北、天をなんとか」といつているいろいろな字面があるじゃないですか。それで河野金昇さんの花押があつたんだ。文部大臣ではなくて、官房副

長官になつたときだ。官房副長官も閣議の稟議書は花押を書かなければならぬわけですよ。判では済まんわけですよ。その時に花押なんてえらい難しいし、みんな初めてなつた副長官は、「ちよつと」花押は「ありませんから、私は判で」といつてお願いすると、官房長官が「ほう、よかるう」といつて許可すると、判でよかつた。けれどこっちは、どうせあれだからやつてやれといつて、河野金昇先生がつくつてもらつた花押をお被いしてもらつておれの花押にして、それを練習して、その花押でやつたんだ。

伊藤 同じ花押なんですか。

海部 そうですよ。だつてあれは決まりがないんだもの。三木さんの花押なんて——、やめておこうかな。

佐道 いやいや、ぜひ。

海部 お団子、串団子ですよ。三木だから、丸を三つ描いてスツと一本棒を引くと串団子の格好になる。

楠 花押というのは、名前を変化させたものではないんですか。

海部 そうですよ。だつてどうにでも言えるじゃないですか。主観は客観に否定されるけれど。

楠 よく永田町の出入りの業者で、そういうものを作る人がいるようですよ。

海部 しょつちゅう来るがね。五十万円だとかいつて。「これは四書五経を全部繙いて、画数をなんとか」といつて、「あなたの今日までの経歴を教えてください」とか、「合う方向、合はん方向みんなある」とえらいもつともらしいこと言つて、五十万とか三十万とか、みんな取られておつたんだ。

楠 ご自分でおつくりになつたんですか。

海部 だから河野金昇さんがつくつてもらつた花押を、おれがちよつと練習して、これで行くといつて、官房副長官の時からそれにしたんです。

楠 うちの父は、出入りの業者みたいところで作つてもらつたようですよ。それで大臣にならなかつたんだから（笑い）。

海部 いくらか取られているんだ、みんな。
楠 いまのは削除しておいてください(笑い)。
伊藤 そうはいかない(笑い)。

佐道 今のはゴチックにしておいて(笑い)。

海部 ただ、花押を練習するようになると、そろそろわが世の春が来るなどということ、みんな内部でホルモン分泌がよくなって、人知れずニヤツとしながら「机の」下で練習しておる。あれは花押の練習をしておるんですよ、本会議場なんかでもまじめにやっていますね。

楠 早く使いたいな、と思いつながら(笑い)。

海部 冗談は横に置いて、そういうことですよ。

伊藤 それで「このときの選挙では」最終的に、無所属で当選してきた人も含めて、二八六議席というたいへん大きな勢力になりますね。

海部 それは無所属を含めてでしょう。

伊藤 無所属の人を入党させて、ですね。

海部 はい。それは自由民主党の昔からの常套手段です。

■第二次海部内閣発足1 (西岡武夫と加藤六月)

伊藤 それで「一九九〇年」二月二十八日に第二次海部内閣が発足することになるわけですね。中山「太郎」外務大臣、橋本大蔵大臣は留任。そのほかいろいろ替わりますが、官房長官が森山真弓さんから坂元三十次さんに替わる。党は、小沢「一郎」幹事長が留任、総務会長が唐沢俊二郎さんから西岡武夫さんになりますね。

海部 ああ、西岡を総務会長にした。あのとき官澤さんと一戦があったんだから。

伊藤 西岡さんは、新自由クラブを出て、自民党に戻ってきてきて官澤派に入ったんですか。

海部 官澤派に形式的には入ったんですが、あまり可愛がられておらなかったんだ。僕はしよっちゅう会っておった。あれは早稲田の雄弁会の直系の後輩なもの、それで「僕が」文部大臣の時は、しよっちゅういろいろな情報を持ってきた。

伊藤 「西岡さんは」文教族ですね。

海部 文教族です。

伊藤 あの人のほうが文教族としては――。

海部 古い。文教族としてはうんと古い。初めから文教ばかりやっているんだ。こっちはほかをいろいろ浮気して回っているからね。だから「僕が」文部大臣になったときなんかは、あいつがおらんと日教組征伐ができない。だから「西岡を」文教委員会の理事にして、一番前の席に座らせておく。何か質問されるでしょう。僕は僕の信念でいろいろ答えるね。それがやばいときは、西岡がこういう格好をする。「一番前の席で指で×印をつくる」。「ああそうか、そういう考えもあるけれど、しかしよく考えるところだ」とかいつて訂正したことがだいぶあります。だから文教委員会の理事に置いておいた。彼は党の文教部長も長かったですから。新自由クラブに出て行っても、自民党のことは一所懸命取り組んだ。あの人はどちらかというところ、やや右寄りだな。教育基本法とか憲法の話の話を聞くとね。けれども、それでやるということだ。

伊藤 先生は西岡さんは非常に親しいというか、派閥が違おうと何しよう、切っても切れない関係なんですね。

海部 派閥が違おうと何をしよう。彼が落選しておるときなんか、僕は長崎まで応援に飛んでいったんですから。それは人間と人間の、早稲田大学雄弁会の頃から一緒に酒を飲んだり、ワーワー騒いだりした間柄ですから。つき合いは長いです。

伊藤 先生がごらんになって、西岡さんというのは一言で言うところ、どういふタイプの政治家ですか。

海部 彼が非常にかわいそうだったのは、ぜんそく持ちで体が弱いことだ。だから健康者、心身共に健全な者としての行動がときどき

阻害されたんだ。

楠 一時期、ヒゲを生やして引きこもりみたいになっていましたね。海部 彼が福々しく太ったところって、見たことないでしょう。しかし考えていることは厳しいことだった。いつか文部省の局長の答弁が気に食わんといつて、結局辞めさせちゃったな。それから全国の教育委員会がなつとらんといい、僕が文部大臣の時などは、教育委員会をぶつぶつぶしましよとかいって、そういう激しいところがあつたな。

伊藤 党の中で実力があつたわけですか。

海部 最も勉強したのが当時は西岡武夫だ。教育以外のことをいうと、加藤六月とか、ああいうのが一所懸命勉強していた。

伊藤 総務会長に西岡さんをということは、海部先生が考えて、ということですか。

海部 そうです。僕は西岡君をいっぺん——。彼は不遇でしたからね。だからこちらは、双六でいえば、いいところまで上がったんだから、西岡は不遇であつたので、西岡を一つ盛り立てようと思つた。そうしたら、あの頃宮澤さんは、いいにくい話だが、西岡を買つていないわけだ。西岡にしておいたほうがよかつたと思うんだけど、ほかの名前を出してくるんだ。僕もそんな人だけ出されたんではないから、そこで「推薦は複数にしてください」と宮澤に頼んだんだ。「宏池会を足蹴になさるんですか」と直接電話してきた。あの人はそういう執念深いところがある。「足蹴にするんじゃないけれど、ちよつといろいろながあつて」と言つて——。

伊藤 政調会長も、三塚「博」さんから加藤六月さんへと交替しました。いま加藤六月さんの名前が出ましたね。

海部 加藤六月もしよちゆう連絡をしてきておつたし、あれは細かいことまで知つておるんです。それは同じ選挙区に橋本龍太郎とかがおつたものだから、それと張り合つて、各省の係長級が知つておるようなことまでみんな勉強したんですね。

伊藤 勉強家なんですか。

海部 勉強家は勉強家だよ。ときどき、「田舎芝居の煙草盆」と言われて、批判されたけれどね。

伊藤 それはどういう意味ですか。

海部 田舎芝居というのは、何をやっても煙草盆が置いてあるじゃない。間を持たせるために、キセルに詰めて吸うでしょう。田舎芝居の煙草盆のように、ストーリーは何でもいい、どんな場面にも出てくる。それぐらい各省のどんな話にも首を突っ込んで勉強した。そういう意味です。渡海元三郎もそうだった。

伊藤 それで加藤さんを政調会長にした。うつつけのわけですね。海部 万事、いろいろ細かいことまで知つている。各省の局長や課長なんかみんな出入りしている。おれが「これを調べて」と言う、「はい」と言つて、すぐにやる。そういう意味では気軽に動いたし、フットワークもよかつたですね。

佐道 三塚さんから加藤さんという、安倍派の後継で、三塚加藤の争いがありました。安倍さんはご存知のような体調の状況になつていて、安倍さんの跡という話になるわけですね。三塚か加藤かといわれるときに、先生が加藤さんという、安倍派の中にもいろいろ波紋を生むのではないかと思うんですが、そのへんはいかがでしょうか。

海部 三塚も、早稲田大学雄弁会の先輩なんだ。それから、協力者の一人だつたわけだ。だからそこら辺のところは、いいにくい、やりにくい点がたくさんある。しかし日頃見ておつて、僕は国対委員長の時も加藤を副委員長で使つたことがあるし、そのころから、まことに人脈とか政策、情報に通じている。そうしたことで政調会長には、これが向く。あの頃の新聞の切り抜きを見てごらん、あのおとつあも相当なサムライだから。「私は海部内閣に呼ばれて、今度三役の一人になるかもしれんが、それは次に安倍晋太郎総理にするために、その尖兵として入っていくわけであつて、さあとなつたら塹壕を掘つて、いつでもガタガタにひっくり返す」なんて、えらそんなことを新聞に書くわけだ。

「こら、六月」と言うと、「そう言われるだろうと思つた。怒られることを承知の上で、ああ言つておかんと、三塚その他を抑えきれん」と言うんだ。だからあれも大政治家だ。誰に知恵をつけられたか知らんけれど。

■第二次海部内閣発足2（竹下氏と金丸氏）

伊藤 こういう組閣、党人事というのは、前から海部政権をバックアップしている金丸さんとか小沢さんと相談するわけですね。

海部 それはもちろん相談しますよ。だって、時間もずいぶんあるわけですからね。あの頃、だいたい、金丸さんというのはあまり細かいことは言わん人だけれど、これだけは駄目だ、というほうの注文が来る。金丸さんが「これだけはやっちゃいかん」と言われたのをいまでも覚えておる。そんなのを入れて、その気になつていびられたり暴れられたりしたら厄介だから。

伊藤 そうですか、金丸さんはあまり言わないけれど――。

海部 決まりそうになると、「あいつだけは駄目だよ」という。

伊藤 拒否権のほうなんですね。

海部 拒否権のほうだ。「あとはどうでも、思った通り、うまいことやれや」というようなことだけれど、「あれはいかん」という。

伊藤 金丸さんは系統的に好き嫌いがあるんですか。

海部 金丸さんのところへは、各省からこの人だけはどうしても来てもらつては困るといふ人を言つてくるんだよ。それで、僕の時に外された候補者も二、三人おつたわけだ。

伊藤 小沢さんのほうはどうですか。

海部 小沢はそういうことは何も言いません。初め三役のときにいろいろあつても、「最後は総理が決めることだから、それはそれで結構です」という。

伊藤 幹事長ということ、総務会長や政調会長と組になつて仕事

をしなければならぬわけですね。そうすると総務会長や政調会長は、仲間としてやつていける人でないと困るんじゃないですか。

海部 まあそうだけれど、その中で一番指導力が発揮できるのは幹事長じゃないですか。

伊藤 そうでしようね。だからいい、ということですかね。

海部 はい。

伊藤 小沢さんという人は非常に自信のある人なんですか。

海部 初めの頃は金丸さんのカーボンペーパーだったから、だから金丸さんの意見をみんな聞いてきて、やつている。あれがおかしくなつたのは、例の金丸さんのトラブルがあつたときに、あれをどうしたこうしたで激怒しておかしくなつたんだ。それまでは、竹下さんと金丸さんがちよつとハダハダになつたときに、竹下のほうには行かずに、金丸のところに入り込んで、情報を持つていつたり、金丸の言われた通りにやつたりしていた。だから小沢に、「この点を金丸さんに聞いてきておいてくれ」というと、きちんと聞いてきて、「お任せしますと言つておきます」とか、「どうしてもこういうことだからいかんと言つています」とか言つてきた。あの人「金丸氏か」は、自分の長い間の体験と勘で物を言う人だから。

伊藤 そうですか、竹下さんとの関係よりも、金丸さんとの関係なんですかね。そうすると党運営としては、先生としてはやりにくいというか――。

海部 だから「なるべく二人は、話を一緒にしてもらわんと困るよ」と言つたことが僕もあるんですね。それから小沢幹事長にも、「おまえ、竹さんと金丸さんとは、両方とも顔を出して、意思の疎通を風通しよくしておいてくれよ」と言つた。

そうしたら金丸さんは、「若い人がなつて一所懸命やつておるときは、任しておかんとね。年寄りが出て行つて、ガチャガチャ言つたらやりにくいわい」なんていうことで、こちらが頼みに行くと、比較的すんなり聞いてくれたことがありましたね。どうしても困るときに頼みに行くと、ちよつとお出まし願いたいという。

例えばこのあいだお亡くなりになった山中貞則さんが一言居士で、税のほうはある人が何としても首を振らんと駄目だという時期が、私の内閣になった頃からあつたんです。それで、あることを諦めてくれと言わなければならぬ。そうしたら「金丸さんが」、「あれにはおれが上手に話すから、海部君、おまえもいっぺん山中を官邸に呼べ。呼べば新聞が何をしに来たかと見ておる。総理にこういうことを言ってくるという言うだろうから、そういう場をいっぺんつくれ。おれがきちんとそれまでに話をしてみる」という。どこのことだったか、何か一つ、山中さんがどうしても譲らん。一時期、しばらく委員長を替わってもらつたことがあるんだな、三塚か誰かに。

伊藤 党の税調ですね。

海部 そんな話だつたと思ひますね。党の税調の人事だつたと思ふ。その通り言うことを聞いてもらつて、そうなつたんですからね。その点は私は大変感謝しておるんです。それで、国会もうまく行く。

伊藤 先生は前から竹下さんとの關係を大事にしておられましたね。

海部 あの人は一番近いし、やつて来たことも、平和部隊から始まつて、青年局長をずっとやつた。

伊藤 ただ、自分の内閣の庇護者である金丸さんと竹下さんの意見が齟齬するとまじいじゃないですか。

海部 だから、「竹さんにはみんな本当のことを話すわ。竹さん、ちよつと来てくれ」といつて呼んで、こうなつておる、ああなつておるといふことを言つて、「けれどこれは私としては譲れんから、そういうふうにさせてもらう」と言つと、竹さんがいつも言つたことは、「よしわかつた」といふことだ。あの人が、よしわかつたといふと、金丸さんのところにも話に行つてくれるわけだ。解散の問題も実はそうだつたんです。金丸さんは、「海部君、総理大臣の権限というのは君だけが持つてゐる特権だから、あとの野郎が何を言おうと、決めたら、ダーンと行つちやえ」といふ。そのとき僕は言ひかけた。「そんなことを言つたつて、あんたが新聞に、年内

だ、年内だ、早くやる、なんておつしやるから、ワーツと火がつくだけで、おやじさんが黙つて静かにしてくれれば、それでいいですよ」と言つたこともあるんだね。

伊藤 それは誰に對してですか。

海部 金丸さんに。

伊藤 金丸さんは年明け解散ではなかつたんですか。

海部 違ふ、違ふ。あの人はときどき変わるんだ。そして、最後のところは、だんだん安倍さんの病状がおかしくなつてきたという状況から、できたら安倍の目の黒いうちに——。といつても、選挙に負けなければいけませんからね。負けるわけにはいきませんからね。それもなくなつた。解散はさつき言つたように、二×九〇一八で十八日に決めた。そういう縁起のいい日にやつていかないといかんから、そこは頼みますよと言つた。竹下さんは「わかつた」と言つてくれたな。金丸さんも頼みに言つたら、「そうか、どうしてもそうか、じゃあしようがねえな、そうしろや」なんていつて、こんなことをしている「左右の手を握手するように握り合はせたり離したりする」。

伊藤 それは癖ですか。

海部 これが癖だ。じゃあもうこれで行くか、という、手を握ろう、合意しよう、ということなんだ。そこまで総理がここに来て頭を下げて言われれば、これだな」といつて、自分の両手を握手させるポーズをとる」。その代わり、「解散前の本会議で施政演説をやらせろ」と言つたら、「それだけは海部君、やらんほうがいいぞ」といふ。「解散の演説はどうせろくなことがない。野党はああだこうだと理屈をつけるだけだから、格好いいことをワウワウ次から次へと言われたら、かかる時間がだいたい違ふ。そんなものは一発でぶっこましてしまえ」といふ。

伊藤 じゃあ、冒頭解散ですか。

海部 冒頭解散。ぶっこわしてしまえという。その底流にあるものは、田中派全体の意見だつたと思ひますよ。「何も野党の言ひたい

ことを聞くことはない。どうせ、言いたいことを言うだろう。知恵をつけるのは決まっておる。(某学者の名前も出して) こいつらが演説原稿を書いて持っていて、それを読むだけのことだから、駄目だったら駄目よと、代わりにそう言っておくれ」ということでやめたのも事実ですね。だからあのときは「施政方針演説」なしで「解散を」やったんです。

伊藤 施政方針演説もなし、質問もなし、ということですか。
海部 はい。

伊藤 何かやっても、どうせろくなことはないようなことですね。
海部 あの頃はこつちもいくらかしやべりたい。言うだけのことは言いたい。そのために言うべきことも用意してきたわけですからね。けれどそんなことがあって、さあ選挙が始まってみたら、意外や意外、良かった。

それから税金の話、消費税のことはずいぶん聴衆が関心を持ちますね。だから体制を守った、体制の選択を間違えなかったということ、それはもちろん拍手もしてくれるし、耳を傾けてくれるが、しかし「今度はみなさんの毎日毎日の、特にご家庭の奥様の買物のために、あら、またこれだけ払わなければならぬという問題は私の心を痛める。けれど、誰がなってもお願いしなければならぬ問題だと思えます」と言いながら、その話もしましたね。そして街頭演説のときなんかは、労働組合の代表やよその人もわかるわけですから、そのへんから不穏な風があるなと思うと、「あなたがなっても要るものは要るんだから」といって、わざと指さして挑発してさ。

そしてあの頃、年金の通知書を早く出させたんです。「みんなそろそろ届いた頃ですよ。年金の通知も行っているはずですよ。あいつは出したものも、これだけ上がったんです。だから、オールトータルで、オール政府対オール国民のみなさまという目で算盤をはじいて結論を出すと、ご協力願わなければならぬことは願うけれど、そんなにひどいことにはならんはずだ」といった。同時にあのときは物品税をなくしましたからね。「消費税は出たけれど、物品税をなくしま

したから、そういう意味で差引勘定は、国民のみなさんのためになるようにやったわけですから、よく見てください。もうじき通知が行くから、破って捨てないで、いくら安く買ったか、ちよつと見てください」というようなことで、一所懸命を街頭をつくるったことを思い出します。

伊藤 それで選挙が終わって内閣ができて、いよいよ国会だ、ということになりますね。

■第二次海部内閣発足3 (官房長官・坂本三十次)

佐道 官房長官に坂本三十次というのは女房役としてどうなのかな、と思えますが。

海部 あれはウラを言うと、あれがなんとかやらしてもらわんと、という。要するにあいつは三木派の中ではおれより上だと思ってるんだから、腹の中では。

佐道 先生からしたらちよつとやりにくいのではないかと。

海部 当たり前の話じゃないですか。しかも相手が土井たか子だったからね。女性を置いておいたほうがいいとおれは思っていた。しかし森山さんが、ここだけの話だけれど、慣れていないから。議運、国対をやっていないから。「おいっ」という顔が利かない。それから金丸さんの不満の一つも、「官房長官というのがおれのところからちよつと挨拶に来ないじゃないか」ということだった。あとからわかったことだけれど、竹下に聞いたら、「ちよつとずつ持っていかなければいかんよ、おとつあんのところへは。あることを知っているんだから」と言う。「田中派のときにはやっておったのか」と言ったら、「そうだ」という。

そういう背景の話のほかに、森山官房長官も気の毒だったと思うのは、例えば防衛庁との間で日頃の人間関係もないから、電話一本で、というわけにもなかなかないかんし、本音は言わない。それから

あの人は頭がいい人だから、ちよつと冷たい感じもあるから、紋切り型にツツと構えてあれだから、報告に行ったり、座り込んであまり細かいことを話してこないわけですね。それで、何かのハイジャックのときに赤っ恥を掻かされた。官房長官が会見場で、「まだ何々だから、飛行機は福岡（だったかな）にまだ止めてあって」と言っておいたら、その官房長官の話を中継している真つ最中に、「ここでちよつとニュース速報をいたします」といってパツと切り換わったら、飛行機が映って、そこからぞろぞろ人質が降りてくるころだった。それは日本中、テレビを見ていけばわかる。それで官房長官は赤っ恥だ。そんなことがわからないのか、ということになるでしょう。

すぐに、これはと行って、うちに警察から来ている秘書官を使って、「あれはどうなっているんだ」と確かめた。そうしたら、「申し訳ありません、会見が始まって訂正が利かなかった」というんだな、言い訳は。そんなようなことなどがあって、金丸さんにしてみれば、「もうそろそろ、ちよつとあれせんと、官房長官があれでは、海部君、君が困るよ」ということだ。

伊藤 まあ、坂本さんに替わっても、困ることは同じなんですな。

海部 同じだ。自分のほうがえらいと思っているんだから、どうしようもないんだな。

伊藤 それは大変ですね。

海部 年もおれより上だったし、おいしいことを言う人もおるから。君が行くと、これでもう万々歳だな、なんて言われると喜んじやって、「うん」なんて言っているからね。けれども、「やることはやってもらうよ、わかったか」と言った。

彼も歴史には詳しいから、そういう話でいってやるといいけれど、剣道の達人なんです。「正眼の構えというのは手は卵を握るように剣を握り、眼（まなこ）は遠く遠山を眺めるような気持ちで対応しなければいかん」とかなんとか、剣道の理屈を言うんだ。「わかった、そんなことは。けれども、卵のつもりで切っておいたら、卵は

潰れちゃうぞ」とおれが言ったら、「まったくまあ、そうじゃねえんだよ」とか言いながら、いろいろなことをやっておった。ただあの人は間違った、悪いことだけはしないでろうと思っておったんだけれど、案の定リクルートのときに裏のあれが来ておったことがバレたからいけなかった。もともとが山持ちですからね。一晩雨が降ると何百万と儲かるというんだから、悪いことはしないと断つていたけれどな。

伊藤 人間、わからんものですね。

海部 そしてこちらの方「小指を立てる」の心配も全くなかった人だ。

伊藤 やっぱりこつちのほうの心配というのは大きいですね。

海部 大きいですよ。それは宇野さんのあとだもの。

佐道 宇野さんというのは、そういう意味ではあととあとまで大きいですね。

海部 おかげで、その後私はどんなチャンスがあっても、どんないいときがあっても、据え膳もつままなかったし（笑い）、これ見よがしにアピールされても、それはいかんわ。人生を狭くしたようなものだな。

伊藤 つまらない人生になりましたね（笑い）。

■第二次海部内閣発足4（国会との関係）

伊藤 平成元年度の補正予算というのはかなりもめた予算だと思うんですが、これはいかがでしたか。中小企業特別対策費、国鉄清算事業団補助金、芸術文化振興基金創設費、公務員給与改善費などを含めて、五兆九千億円。

海部 あの頃は中小企業を救うことが一番大切な政治課題でした。それから当時、野党はみんな、大企業中心の政治はいかん、と言いつつおった。事実中小企業は、数からいっても八〇%以上、これ

が日本の底辺の底板である。私の選挙区も、申し上げれば、一〇〇%が繊維の中小企業ばかりです。それで、党のほうで山中さんがいくらウンと言わんでも、要求はいくらしてもいいとか、中小企業には特別配慮しなさい、マル特という制度でやってくれ、政調会長にもそれを言い、党も一緒になってやりました。相当な成果が上がったはずですよ。

伊藤 この対策費というのは補助金なんですか。

海部 補助金がほとんどです。いくらかは融資です。それからもう一つ僕は、銭金だけではなくて、心と文化を大事にしるということで、このとき芸術文化振興基金を五百億、予算に入れたわけです。

伊藤 それは何に使ったんですか。

海部 何に使ってもいいんです。芸術文化振興基金ですから、芸術文化が振興されればいい。ただそれを、いまになって思うと、文化庁の役人たちに細分化されちゃった。

伊藤 どこに行ったかわからない。

海部 わからない。そしてまことに零細なばらまき資金にした。

伊藤 これぞ、というものに使わなかったんですね。

海部 そうしたら今度は斎藤栄三郎というおじさんが、「芸術文化も大事だけれど、スポーツ振興も頼みます」といつてきた。あれがスポーツ方面の財界の親分だったわけですね。それじゃあスポーツ振興基金も作るうじやないか。というのは、あの頃はお金が余っていたから、何かに使いたかったんだ。そこでスポーツ振興基金と芸術文化振興基金をつくった。もう一つは安倍晋太郎対策で、日米友好基金だ。この三つを作って、日米の議員会議にこれを使っていいという基金を作った。それはみんなそれぞれ補正予算でやることになったんですね。

補正予算というのは、予期せざる支出が急に出たときに必要と認めたらやるんだ、というような法律の規則があったんですけれど、まあまあゴトゴト言うなといった。逆に、陳情に来るあれには、社会党や共産党を黙らせてこい、といった。そうしたら、共産党には

芸術文化のほうに左で入っていたやつがいっぱいおる。だから共産党には、これは大事な政策ですからといえ、打てば響く。土井たか子なんてさっぱりわからない人だけれど、社会党にも芸術文化がいろいろおったんだ。オペラの好きなやつとか、踊りの師匠さんに惚れておったとか、いろいろおって、その筋を全部伝ってやったら、みんな通ったんです。芸術文化がいいと言ったら、スポーツもいいと言え、といって通ったんですね。

伊藤 だけど、二週間も国会が空転する騒ぎになったのは、そもそも何がもめたんですか。もめるようなタネがあったんですか。

佐道 選挙の前にこの予算はかかっているわけですね。これは選挙対策だ、ということですね。

海部 「当時の新聞の切り抜きを見る」なんでもめたんだらう。

伊藤 予算は参議院で否決されるという事態にまでなっているの、なんでだろうと思っただんですが。ではこの次に補充しましょう。当時は、参議院では野党優位ですね。

海部 そうですよ。だって総理大臣指名も、野党優位で、「参議院では」土井たか子になったんだから。

伊藤 国会運営はやりにくいですね。

海部 それはやりにくいです。

伊藤 衆議院は多数ですから問題はないですが。このころは、国対はどなたがおやりになつていたんですか。

海部 国対委員長は――。

伊藤 先生はずいぶん長く国対をおやりになっていました。あとはどういう人たちが受け継いでいったんですか。あとは見えないものですか。

海部 誰だったかな。

伊藤 やはりあの国対委員長になった人たちは「海部先生に」、

「あのときはどうでしたか」と聞きに来るんじゃないですか。

佐道 質問を作ったときの資料によりますと、先生がさつきおっしゃったベタ風の状況になって、自民党が大勝したものですから、野

党も最初は予算で攻めていたのが、やむを得ないだろうという感じになっていったのが、小沢さんが強引に、このままで行け、通せる、ということであまりに強引にやったものだから、野党がそれに反発して審議を拒否するという状況になった、という話が出ていました。どうせ参議院で否決されても、いざれ通るから妥協はしないという形になっていった、ということが書いてある資料があったんですが、伊藤 野党ともめるような事柄はここだけではわからないので、この次にしましょう。

■日米構造協議1（日米首脳会談）

伊藤 それで選挙が終わって、首脳会談のために訪米ということになりますね「三月二日」。それでブッシュ・パパとお会いになりましたが、これは前から問題になっている日米構造協議が一番大きな問題だったと思います。四月に中間報告があるということですが、このときの首脳会談は、どういうきつかけで、どういうふうに進んで、どういう会談があったんでしようか。

海部 向こうの国会を押さえるためには、日本との約束を取りつけて――。

伊藤 要するに成果が欲しいということですね。

海部 ゲット・リザルト、結果を持ってこい、ということだったんだね。「結果を持ってこい」と言ったって、そのときまではおれは選挙があるから選挙に負けられないんだ。土井内閣なんか作る気持ちがあるからアメリカにはあるのか、駄目だったら駄目と言うよ、あれは」と言った。あの頃アマコストがしよっちゅう両天秤をかけていた。当時は僕以外でも、名前は出してはいかんかもしれないけれど、中曽根さんなんか「アマコストもちよつと越権だ、あんなことが新聞に載って、何だ、土井のところにもちよつと越権だ、あんなことが新聞に載って怒っておった。なるほどアメリカは、両方を天秤にかけてき

たことは間違いないかと思えます。けれども、「そんなことをしたって、こちらは負けやしないんだから、こちらも勝つものだと思つて応援してやってくれなければ困る」ということを言っておった。

「構造協議のことは、選挙が済むまでは言ってくれな」と僕が言った。言うよ、言い訳をしななければならん。そうしたらアメリカが言ってきた殺し文句は、「トシキ、日本の総理の中で、君はちよつと違うよ。消費者の利益ということと言ったのは、日本の歴代総理の中で初めてではないか」ということだ。確かにそれは言い出した。当時の新聞を見ると、消費者の利益を言い出したということが「書かれている」。それは、構造協議をやれば消費者の利益になるんだということはどこかで言ったし、本当に僕もそう思っておりましたから、街頭演説等でもそういう説得をしました。

けれども、それがこういうふうにできるかどうかということは、各省と各経済団体が、生きるの死ぬのどにいに言う。官邸の中に石原信雄という生え抜きの副長官がおったから、彼に「シンクタンクみたいに各省の本場に知っている者を集めて、やってくれんか」と言つて、そこでいろいろな作業をしました。

伊藤 だけどブッシュ大統領に会いに行くときには、まだそれはまとまっていけないわけでしょう。

海部 まとまっていけないから、もうちよつと待て、と言うんです。「選挙はたしかに終わったけれど、いまこういうことをやっていて、必ずやる。必ずやるから、ちよつと時間をもらいたい」ということを言いに行つたんです。向こうは待っていたんだから。

伊藤 何もお土産はないわけですか。

海部 何もなしです。

伊藤 それは行きにくいですね。

海部 行きにくいけれど、ぶつつけ本番だけれど、そういうときであればあるほど、打てば響くように行かないと、酢だのこんにやくだの、行くことすらもたまたましておたらいかんから、おれは行く。それで公邸において電話がかかってくることも、「こちらには」通

訳も誰もおらんわけだ。向こうのホワイトハウスにいる女性のあの通訳だな、と思った。それが「いま総理、あなたのところにお喜びのお電話をかけたところですよ」という。そしてジョージ・ブッシュが何かうわわと言うね。そうすると、「おれも出て行くから（出ていくと行っても東海岸までということだ）、君も出て来てくれんか。本当に国会で議論が始まるまでちよつと余裕があるだろう」という。その電話がかかってきたのは、投票が終わって、まだ組閣もしていないときですからね。だから、それからいろいろな諸手続があつて、済ませて、国会を開くまでの間にトンボ返りをやれば一泊はできる。じゃあ太平洋側に行こう、ということだ。「アメンバークさんという人の別荘を用意して、そこで待っているから」という。「よろしい」と言った。

よろしいと言つたはいいけれど、そのときそばに誰もいないわけですから、その場ですぐ「秘書官とアメリカ局長、来い」と呼んだんだ。そうしたらしばらく経つて、息せき切つて走つてきた。「おまえらもこれぐらいのことはな、ちゃんと用意しておいてくれなければ困るよ。突然電話に出ると何を言われるかわからせん。通訳だつて、向こうの通訳一人に勝手なことを言われたら、それで終わりだから」と言つた。

楠 その電話は通常の公邸の電話なんですか。私用に使うようなものですか。

海部 いや、前からそのためのホットラインというか、特別な機械があつて、特別のラインを通じてくるわけだ。

楠 じゃあその電話が鳴れば、ああ「アメリカ大統領からだ」というふうになるわけですか。

海部 そうです。

伊藤 常時通訳がいるわけではないんですか。

海部 だつて、こつちもまさにそんな真夜中に電話がかかってくるとは思わんから、もう帰つていいよ、と言つた。

楠 こつちは夜中でも、向こうは違いますからね。

海部 そう。そこが後日になつてから僕はわかつたことだけれど、ずいぶん時差があるんだな。

楠 だからむしろ、夜中に通訳を待機させておいたほうが――。

佐道 いつ、かかつてもいいようにホットラインがあるわけですか。事前に何日の何時に電話がありますというだけではないですか。困りますね。

海部 ただ向こうは礼儀上、六時間前かな、電話をしてきて、「六時間後にはどこにいらつしやいますか。それではそこにおかけしますから」という予告はいつもしてきましたね。

伊藤 このときはないんですか。

海部 ないんだ。こちら選挙が済んだところで、国会もあのときは、始まる前にどうするかということだ、いろいろあつたけれど、勝つたから、やれやれ、ということだ。もつと正確に言つて、そのときかかつてきたのは、公邸にかかつてきたんじゃないんだね。探し回られて、電話をしたと言つてから戻つてくたさいと言われて、何時間か経つてから公邸に戻つてそこに帰つたよ、といつてからかかつてきたんですね。普通の商業電話みたいにいかないわけだ。それでは記録が残らんから。

本当にあのときの判断というのは、アメリカ局長も秘書官もおらんところでの電話ですからね。ただ僕は、行かなければいかんと思つた。選挙が済むまでは待つてくれと言つたんだ。それは向こうのイシューはわかっているわけですから。これを早くやつてくれということですからね。

伊藤 訪米して、お会いになつて、いまやっている最中だという以外に言いようがないわけですか。

■日米構造協議2（コメ問題など）

海部 あのとときは正直に言つて、三つぐらいありました。スーパー

コンピュータと大店法があつて、コメの問題があつた。コメの問題は難しいけれど、行く前に、「コメはひよつとしたらやってくるかもしれないぞ」と言つたら、その点、金丸さんというのはアバウトで、「海部君、間違えずにやつて来いよ、日本あつてのアメリカじゃないんだ。アメリカあつての日本だから、コメのことぐらいだつたら、胸を叩いちやえ」という。胸を叩いちやえと言つたつて、おれが胸を叩いて、あと責任を持って始末していかなければならない。農林省とかなんとか、それができるやつを選んでいかなければいけない。でもあの人は、大局的に見る目は正しかつたと思うな。「コメはいつまでいくらやつても駄目だから、これはあるところでやろう」という。その代わり、田中派は昔からそうだけれど、何をどれぐらい出したら収まるか。繊維のときでも、「二千億で古い織機を買い上げるから、海部君、おまえらの選挙区も全部買ってやれ」という。そうすると商売が厳しくなつてくると、一台二十万円で買つてくれると言え、じゃあうちはおも働手もおらんから出そうか、とかいつて、ばたばたと片が付いたんです。そういう解決方法をどこでどうやって捻り出すかというのが政治なんだな、やっぱり。

伊藤 しかしコメの場合はそうはいかんでしょう。

海部 いやそれが、翌年か何かに冷夏があつたでしょう。輸入しなければならんようになったんです。それで二五〇万トンか三〇〇万トンしか見通しが立たんということで、アジアの国々から買ったんですよ。

楠 タイ米を買いましたね。

海部 そうしたら、タイ米はどうのこうの、と言つたけれど。それで、「コメというものは一粒も入れないなんてえらそうなことを言つておると、こつちがさあというときに干上がつちやうよ。そういうときのための、食料の安全保障というものだ」と言つた。当時からだんだん作付制限も続いてきておつたから、ほかの代替作物をどうするかということだ。農業の問題というのは、コメも難しいけれど。

アメリカに行ったときはそれをやってくれと言われたが、それは冗談でかわさなければいかなからね。「この会場の名前が悪い。これはライス大学というんだ。ライスというのは日本語で言うところのコメということだ」といつてね。テキサスのライス大学、あれがそうだよ。「部屋にかかつている写真を指し示す。ライス大学前でブッシュ夫妻と海部氏が写っている」。「それはそのうちに説得して、必ずやるから。長い目で見れば（そこで使つたんだと思うが）消費者の利益にも反する。すべての消費者だ。コメを食う人はそうだが、生産者も消費者だ。その利益をみんな考えてやるように、閣内で官房副長官をヘッドにして、私は直ちに各省の実力者を集めて、ノット・オンリー・ライス、バット・オールソー・大型コンピュータ、通信衛星からみんな一つの土台にまとめてきちんとやるから、もうちよつと時間をもらいたい」といつて、問題の先送りをやつたわけです。けれどもそれは、あてもなく、口先でごまかしたわけではなくて、本気になつてやるから頼む、と言つたんですね。

しかも選挙に勝つて、これだけ議席が増えたとき、いまやらなかつたらまたできなくなつてしまうから、きちんとやる。そこでとりあえずやりあげたのは、公共事業にアメリカの企業を参入させるという話だね。これはいまおつしやつた農業とは違うから、土建屋にちよつと協力させて泣かせればいいわけだから、それは金丸さんに頼めばお手の物だから、「頼む」と言つたら、「よしやれ」という。どれぐらいやつたらいいか、そこで経済企画庁を呼んだら、経済企画庁は流れ弾が飛んできて困つたわけだ。一体いくらやつたらいいか、どこまでやつたらいいか、ということ、国民を説得できるよりに考えてくれといつたんだ。たしかあのとき、あとで資料を調べますが、四千億円か。目玉になつたのが関西空港の事業にアメリカの企業を入れるという話で、それがシンボルになつたんです。それをやれ、と石原信雄さんに言つて、石原が各省の腕利きを集めて、やつたんですね。

伊藤 石原さんのグループでやつた作業によって、六月になつて日

米構造協議がある程度決着するというところに行くんですか。

海部 中間報告の前に、それらのあらこなし、荒削りをやっておいで、トイザラスのオープンをやらせた。奈良の第一店のオープンのときは、ジョージ・ブッシュは大統領をやめておったけれど、飛んできたんです。僕が歓迎委員長になって迎えに行つて、ヘリコプターで一緒に行つた。それで大店法の突破口もできたわけだな。

伊藤 それは大店法ができてからではないんですか。

海部 突破口だ。ゲット・リザルトというから、どういう方法で、どうやったら結果が出るのか、おまえらやるやるといっても駄目じゃないか。

伊藤 ということは大店法がまだ成立していない段階ですか。

海部 はい。地方通産局が、公聴会と称して利害関係者の意見を全部聞いて、そこが全会一致にならないと翌年回し、ということをやつてきたんです。そういうことも、やめる。議論だけは十分するけれど、国民の前で公聴会もやるけれど、決まったものはOKを出す。そして、あのトイザラスをなんとかオープンさせなければ日米関係がおかしくなるといふことで、いろいろやりました。そういうときも対話集会に行くと、「みなさんだつて安い物を買えるようになるんだから、消費者の利益になるんですよ」と言っていた。伊藤 結局、九一年から公共投資を十ヶ年計画で総額四三〇兆円ということ、アメリカとのあいだで、だいたいこういうふうにしますよ、と言つたわけですか。

海部 この四三〇兆という数字は、思いつきで出すわけには行きませんから。それから細川じゃないけれど、腰だめの数字だと言つておつたらまた馬鹿にされることになる。その数字は、どれだけなら出せるかということを経済企画庁にいつて、これだけなら普遍的妥当性もあります、能力においてもできますというふうなことを、わかりやすく国民とアメリカの両方に言う。四〇〇兆を超えればいい、という大まかな線も出て来たんじゃないですか。

伊藤 結局このときは予算状態が非常にいいわけですね。

海部 いいわけです。だつて自然増収がいと違つていつぱいある。三〇〇億、五〇〇億という事業団を作つても、まだあつた。それならば、まだほかに知恵があつたら持つてこいと各省に言つたら、文部省が「おそれながら」というから、「なんだ」といつたら、「マウナケア」「ハワイ島」の上に天文台をつくつてください。あそこはアメリカです。アメリカに対してもひとつのあれになります」「よろしい」といふことで、それも持つてきたんです。

■日米構造協議3（国内での反発）

伊藤 大店法の問題とか独禁法の改正は、国内での反発がかなりあつたんですか。

海部 国内では、独禁法のこととは三木内閣のときに大変な反発を受けて、僕も骨身に染みていますから。けれども独禁法は、それをやらなければならぬものだ。そこで僕が頭を下げに行つたのが山中貞則のところだ。山中貞則と田中六助と、もう一人誰だったか、金子一平かな。大蔵出身の、当時の自由党の先輩の三人だ。そうしたら、なかでも一番、あれは山中貞則さんだ、ということだ。

伊藤 独禁法の問題と税制の問題は関係があるんですか。

海部 あるんですよ、いろいろなところで絡んでくる。あの人はその両方の神様みたいなものだから。

楠 なんで山中貞則さんは党税調でそんなに力があるんですか。

海部 知らない。みんながそういうふうにしちやつたんだから、しようがない。要するに、稲葉修流に言うのと、法王の衣の袖に隠れて悪いことをやっているやつがおるといふことだ。族議員の集まりでは、「あれは山中がウンと言わんからいかん」とか、「山中会長がウンというように、おまえらもつとあれをしる」とか、いろいろなことやるんだ。

伊藤 神話ができるんですね。

佐道 山中さんもその神話をいろいろ利用されるわけですね。

海部 そうなんだ。また山中さんはそういう場を作らないとなかなか難しかった人だけれど、場さえ作れば、言いなりになってくれる人だった。

楠 案外、融通無碍な人なんですか。

海部 そうなんだよ。ただ事前にこういうことだよ、といって耳に入れておかなければいかん。それから格好をつける人だから、わざわざ来てもらって、総理大臣官邸でお話をする。新聞記者が取り囲んでいると、「うん、あの馬鹿がなんとかで」という。

伊藤 格好が必要なんですね。

海部 格好が必要なんです。それで「ここまでお世話になったから、先生、どうもありがとう、おかげでいろいろできました」と言う。よう忘れんことは、「海部君、そんなに君、礼を言わんでもいいんだよ。おれはあの頃から中曽根内閣を支えて作った人だという評判であつたけれど、中曽根康弘よりもなあ、君とのほうが物が言いやすいし、君のほうをおれは高く買っておるんだよ」「先生、そんなこと言われたら困る、困る」ということだ。

伊藤 それはリップサービスなんですかね。

海部 僕はリップサービスではないかと思うけれどね。しかし官邸まで来てもらって、絵になってもらって、そこで頼むと、「わかるとる、引き受けた」という。金丸さんともちよつと似たところがあるんだな。その代わり、つんぼ棧敷にしておくともう大変なことになったんだね。

伊藤 やはり官邸に呼ばれて、総理に頭を下げられると――。

海部 「総理がそこまでおっしゃるなら」という、宮澤さんのこのあいだの最後のセリフと一緒に。「総理がおっしゃるんだから、恥を掻かせるわけにはまいりません」とか言つたけれど、そうじゃない。立候補したら自分が恥を掻くわけだ。自分の甥か何かを後継者にして、小選挙区のポストは譲っておいて、今度出るというてももう出られんし、名簿で続いて二度も三度も「比例一位になるの」は

もう結構です、というのが地元の声でしたから、宮澤さんは立候補したって落選ですよ。また立候補できるような状況じゃないんだな。中曽根さんは別ですよ。彼が強引にやれば、息子にちよつと、つてこうやればね。逆だわな。

伊藤 それぞれ違うんですね。

海部 ええ、それぞれ違います。

伊藤 とにかくそれで六月が一応の決着になるわけですか。

海部 だいたい各方面ともやつと押さえたわけですよ。通産省も初めは、辞表を懐に入れるような局長もおつたんです。とにかく通産省というところ、大企業のことばかり考えておるといふ評判もあつたけれど、今度は消費者・国民の利益を考えて、消費者のためにもいろいろやらなければならぬ。あの農林省でさえ何かをさせてやつていくんだから。「スーパーコンピュータなんか売れても売れなくてもそう痛くも痒くもないだろう」と言つたんだ。アカデミック・デイスカウントなんていうのをメーカーはやっていたんですからね。だから、儲けをうんと上積みしておつたわけでしょう。「それはないよ、日本とアメリカとの関係が変わつていくというならば別じゃないか」と言つた。

あの頃は今日の問題と違つて、まだまだ完全に米ソの対立が終わったとは言えない。アジアに来るとまだ複雑骨折が残つておつて、北朝鮮との問題をどうするかとか、台湾問題をどうするかということもあつたし、ラオスとかカンボジアからもいろいろな人が来て、首脳会談のたびに厳しいことを言われておつた。今度は、私が選挙前に行つてやつてきたというので、「日本は東欧諸国に援助の手を差し伸べるんだそうですね。あれをわれわれは非常に心配しておるから、条件を聞いてくれ。今日までの延長線上の経済協力は絶対に減らさない、まずそれが第一だ」という。「いや、あなたのほうのあれまで減らそうとは思つておらん」というようなことをその場では答えておりましたが、とことんまではできんけれど、アジアの国々が一番気にしたのはそのことですね。

そんなことでお荷物が大きくなってきたんだけど、なんとか風呂敷を閉じて進めていかなければならん。そのために党内のいろいろな人の意見を聞いてみると、うるさい人たちも「それはそろそろやれ。コメの自由化もよろしい。けれどもすぐに掌を返すようにはできませんから、みんながびびくりせんように。ただ、その方向だけは認めておかないと。いつまでもよその国に行つて、これを買つてくれ、あれを買つてくれ、売るのは売る、と言つて大売り出しに行つて、コメだけは一粒も買いませんなんて言つておつたんじや、それは通らんぞ」という意見があつた。竹下流に言つと、「そのときには代わりに何か、もつとびびくりするような補償を出せ。みんながそつちにパット目を向けて、ワツと取り合ひでも始めている間に、それが終わるようにしなさい」ということだつた。

伊藤 とにかくこれで、一応日米構造協議に一つの段落がついたということですね。

海部 はい。そして、日米構造協議が一段落すれば、角突き合わせでおつた日米関係もなくなつていくし、カーラ・ヒルズなんていうおばさんが出て来てキャンキャン食いつくことも終わつてくる、ということになりますね。そうしたら、あれが片づけばこれが、ということ自動車の問題が出て来て、まあ、タネは尽きんなど実際さう思いましたね。

佐道 コメの問題が出てきましたが、長老の人も「コメもいつまでも「入れないと言つているわけにはいかない」というお話でしたが、この時期、コメは一粒もだめだ、と頑張つている農林族の有力な人はどういった方でしょうか。

海部 この時期は渡辺美智雄とか中川一郎とか――。

佐道 このときは中川さんはお亡くなりになつていますね。

海部 このときはもう中川はいないな。あのときに農林でガチャガチャ言つていたのは、まだまだ鈴木宗男は出て来ておらんし、松岡利勝ももちろんおらんしね。いま農林のうるさいやつの前だな。ときどき三木内閣の頃と錯覚するけれど、三木内閣で農林問題を片付

けようと思つと、渡辺美智雄と中川一郎と湊徹郎、これと呼んで根回しすると、だいたい党内は収まつたね。

佐道 八〇年代の前半ぐらゐまでは、そういう大物の農林族の方がいらつしやつて、いまは先ほどの松岡さんとか、よくテレビに出ていらつしやる方々がいいますが、この時期はいつたいう方なのか。あまり顔が見えないんですね。農林族が強いのはわかるんですが、どなたが一番リーダーシップをもつてやつていらしたのか。

海部 誰だつたか。田中派では、竹下さんというより金丸さんに頼んだ方が、そういうのは抑えられる。その下請けを小沢一郎がやつておつた。あの頃は田中派をきちんと抑えておけば、あと安倍派のほうは、安倍のお父さんがああいう状況になつておつたものだから、そんなに目立つて「コメの問題を言うものはいなかつた」。それで加藤六月はこつちに来ておつてくれるから。

佐道 加藤さんも農林族ですね。

海部 そうだよ、思い出した。加藤六月はアメリカのヤイターと顔見知りであつたので、いろいろな話ができただな。

佐道 渡辺美智雄さんはまだお元気な頃ですね。

海部 もちろん元気な頃で、これも農林省には影響があるつもりでおつたけれど、そんな頃、片足は大蔵族のほうに踏み込み始めておつた。大平さんからおいしいことを言われたというので、あとは自分、といつて、大蔵に足を突つ込んでおつたみたいだな。

伊藤 大蔵大臣もやりましたからね。

話は元に戻りますが、臨時行政改革推進審議会の最終答申が四月十八日に出て、公的規制の実質半減とか、国民負担率の上昇抑制とか、土地活用の私権制限などを内容とする答申を出すんですね。これは特にどれが目玉ということはないんでしょうが、ご記憶でしょうか。

海部 行革審の中では、あのときは土地がいちばん不平不満のもつたんだですね。働く人たちが、自分たちの給料では生涯買えないような大変な暴騰で、持てるものと持たざるものとの差がものすこ

くできた。それから土地というものは、哲学理念からいったら、利用してこそ国が良くなっていくものだけれど、利用ではなくて土地を転がして儲ける。それがいけないのだということで、行革審に頼んで、私権を制限したり、値上げを抑える監視区域だとか登録制度とか、いろいろなものがあるんだんできたりにして、国民の持っている不公平感をなんとか是正していこうということが一つだった。それからいまのような公社公団の問題はあまり出て来ていなかったように思いますね。国鉄はこのときはもう済んでいますしね。

伊藤 規制緩和ということがかなり大きかったと思います。これはいまでも何百項目がどうのこうのといつて大騒ぎをしていますが、なかなか規制を外すのは難しいようですね。それぞれの役所の権限と結びついていきますからね。

海部 役所もまた利口だから。役所のみならず、規制によってうまみを味わっておる業界のリーダーは、外れません。そういったことが一番上手だったのは、僕は通産省だと思えますよ。

伊藤 業界と役所のつながりですね。

■政治改革1（小選挙区比例代表並立制）

伊藤 その問題はちよつとあとにします。そのあとに選挙制度審議会の第一次答申が出て、衆議院に小選挙区の比例代表並立制を導入するということが出されるんですが、小選挙区制という考え方について、そもそも先生はどうお考えですか。

海部 僕は小選挙区制というのは、あのとき聞いた見たりして、わかりやすくしてよろしいねと思った。その代わり、余計な提灯や風鈴はあまりつけないで、わかりやすくバサツとやろうと。

伊藤 全部小選挙区にすることですね。

海部 全部小選挙区にする。そうしたらあるとき、おれが三木さん

にその意見を言いに行ったら、「海部君ね、君はまだ青いと言われるよ。二大政党で黒か白かで分けることができるのがこの世の中だ。一日は二十四時間だ。君らは、うち十二時間が昼で、十二時間が夜だとか、きちんと分けてやりたいだろうけれど、夕方とか、朝の曙というときのほんのりと明るくなるとき、そこが大事なんだ。ということは、そういうすれすれの境界線のところに、何があるかというのを見なければならぬ。民意というものは、代表選手ができて、勝った組と負けた組ができたなら、負けが組はこの次は勝つた方を負かすといつてやればいけれど、そればかりではない。朝や夕暮れの人たちもおるんだから、それは小選挙区だけではないかん」と言っていた。

あのときは、比例代表併用性と並立制で、野党は併用性ならいいと言ってきたんですよ。いま話題になっているサトカン「佐藤観樹」は、おれと選挙区が一緒だったんだな。新聞の見出しで、「海部さんがいじめるからああいふことになったんだ。選挙区をお国替えさせられて、お金がなくなつて」というけれど、それは嘘ですよ。まあ、他人の懐のことだから言わないけれど。

その佐藤が当時社会党の選挙対策委員会の委員長だったんです。それでしょつちゅう僕と会っておつた。そこで「カンちゃん、おまえな、銅像ができるから頑張れ。そしてこの小選挙区に賛成しろ」「海部先生、そんな無茶言つたつて、そんなことはいかんで。どこかにちよつとゆとりを残しておいてもらわなければいかん。ハンドルのあそびがある」といって併用性を持ってきたんです。併用性というのはドイツ方式ですね。

海部 比例代表そのものですね。

海部 そう。比例代表の併用性というのと、小選挙区の勝ち負けはあまり最後は関係なくなつてくるんだね。けれども並立制というのは、小選挙区制の勝ち負けをやらせてから、こちら「比例代表」にくる。けれどもあの頃僕は、やっぱり小選挙区比例代表にしたほうがいいし、本当なら小選挙区だけでやったほうがいいと思つた。「日本人

の心情としたら、負けたか勝ったか「はつきりさせて」、負けたやつはこの次勝とうと思ってもう一回頑張ればいい」と言ったんですが、何か夕暮れだか暁だかわからんような、グレーの部分がたくさん出て来た。

でもこのごろはそうでしょう。小選挙区で勝ったって、だいたい二人区になっている。一人が当選して、もう一人がいつのまにか、「なんだ、おまえ当選したのか」ということになっている。「比例のほうでおかげさまで」なんて言うでしょう。だから僕は、やがていつかは比例はもつと少なくていかなければならないと思う。いっぺん思い切って小選挙区だけに見てみるかね。これだけやったんだからね。「小選挙区・比例代表で総選挙を」三回やっただからからね。いまは一人一区じゃないですよ。二人一区になっていますよ。「小選挙区で」落選しても、比例で出てくる。比例の出方もおかしい話だ。

今日の新聞なんかを読むと、まさに愛知県の話だよ、都築「護」の選挙違反が起こって、連座制で都築が失脚すると、この次に出てくるやつは有罪判決を受けている被告人だ。それが順番から行くこと当選するんです。そんな無茶なことはあるものじゃないです。裁判をもつと早く結審するという話だったものが、裁判も遅くなつておる。何か比例の繰り上げ当選というのはもやもやしたものを残していると思います。言つては悪いが、サトカンもそうです。比例当選だもの。「元秘書の名義借りで議員辞職した佐藤親樹氏に代わって、民主党の比例東海ブロックで惜敗率次点だった津川祥吾氏が繰り上げ当選。同じ東海ブロックの都築護氏（愛知十五区で落選、比例区東海ブロックで復活）は秘書・選対事務局長が公選法違反に問われており、有罪となると連座制が適用され失職する。そうすると繰り上がるのは惜敗率次点の浅野真氏（岐阜一区で落選）となるが、選挙違反で公判中」

楠 このときの選挙制度審議会には、国会議員は入っていないですね。

海部 入っていないんです。国会議員は勝手なことを言うから入らな、ということだ。

楠 かつて鳩山内閣の時代ときは、国会議員が入っていたと思います。やはり鳩山内閣のときの小選挙区制の失敗に学んでいるところがあつたんですか。

伊藤 やっぱリハトマンダーなんて言われたらかなわん、ということでしょう。

海部 区割表で、国会議員が入って「おれは、おれは」とやると、それはいかん。鳩山内閣のときだったと思うな、国会議員みんなに「おまえの理想とする区割を持つてこい」と言つて、みんなが勝手な区割を作つたんだ。それを持つていつて、重ねるように合わせてみて、三分の二以上が合うところは原案に入れてやるう、どうしても合わないところはもういっぺん考え直せ、ということだった。

楠 自分で質問しておいて答えるのも変ですが、たしか最後に実現した選挙制度は、小選挙区比例代表にするということだけを決めて、付表の各選挙区の区割は、あとから作つた。まず法案を通してから区割を通したんですね。

海部 それは形から入れという日本仏教の考え方があるでしょう。形を作つて、袈裟、衣を全部身につけさせると、ああやっばりと思つて、みんな威儀を正す。そこから議論を始めていくと、だんだんよくなつてくる。だから小選挙区にするんだぞ、という法案だけ通せということになつたんでしょう。肝心の区割が全然できていないんだもの。

伊藤 海部先生のとときは、選挙制度の改正はないわけですね。議論だけでしたね。

海部 議論だけでなしに、諮問もしたんですよ。そして、忘れもしませんが、読売の小林与三次という人が各新聞の論説委員を集めて、そこが決めたものはマスコミはだいたい反対はないんだ。マスコミを賛成に持つていけば、これはできると思うから、それがいいんだ、未必の故意みたいなものがあるから、やっちやえと思つた。そして、小選挙区にしたら、今日いろいろの弊害が出て来た。それはあのとくに妙な比例区というものを幅広く残したがために、二百議席がお

かしくなったわけですね。

楠 ただしあれは、比例区をくつつけなければ、とても野党の賛成は得られなかったでしょうね。

海部 それはそうです。共産党とか——。当時の民社党とかは、なくなつちやうわけだから。僕はわかりやすくきれいな政治をやるうといつたんだから、それならば一人一区だ。比例なんていうものは一回落選した人がまた当選したなんて、そんなおかしなことはないじゃないか。そうしたらこのあいだ、どこかの新聞が来て、「そのときは欠員のままで置くんですか」というから、「そうだよ」と言った。比例区の当選候補者が罪を犯したり辞表を出してやめたときは、そのポストは次の選挙まで空白にする。次の選挙でまとめて選べばいいではないか。だから現職の議員が自ら辞めるというときは、そういう世の批判も受けるということを知ってやってみたらどうが、むしろわかりやすいのではないか。だから今度何かで議論があったときは、僕はそれは言うつもりです。

だってあれが落ちたらこれが出てくる、これが落ちたらあれが出てくる。そのうちに愛知県なんかでは、落ちて、もし百日裁判で百日で片が付くと、いまほかのほうで罪になっている人が順番が来て当選しちゃうから、これもおかしな話だ。あれは本当におかしいです。

伊藤 一人一区で、三位で落選した人が比例で当選する、ということも起こっていますからね。

海部 東京なんかもひどいものじゃないですか。各政党ごとに割り振る。比例の制度でよくわからんけれど、東京何区で五番か何かで二万票ぐらい得票したのが、社民党の比例で救われるんだな。

楠 最初はありましたね。いまは制限ができましたね。

海部 何票以上なければいかん、ということですか。

伊藤 選挙区で何割以上取らないと駄目、というものです。海部 しかし何割以上選挙区で取ったとしても、相対的な問題ですからね。だから、「小選挙区で」三〇四万票なのに、比例で救われ

るなんていうのは、僕はおかしいと思うんだよな。いまそれが何票になったのか、それは一回確認してみますわ「小選挙区で有効投票総数の十分の一以上の得票を得られなかった重複候補者は、比例区名簿から削除される」。

■政治改革2（小選挙区の区割）

伊藤 さつき、小林与三次さんに云々という話は、結局どうなったんですか。区割を作ったわけですか。

海部 区割審議会をつくって、区割をしてくださいと言った。それから国会議員は、それに嘴を絶対に容れません。もしそこに行つて自分のあれ「選挙区」のことを聞いたり考えたりすると、これは許さない。許さないといつても、立候補禁止ぐらいまでかけますかというから、それはちよつと、こそつと秘かに見に行つたから立候補禁止するということはいかんけれど、見に行かないようにしなければならん。小林さんのほうには、「区割を作ったときには絶対に誰にも言わんでくれ」と言った。その代わり、私も見ませんでしたからね。みんな、「嘘だろう、見ただろう、おまえは。教えてくれよ、ちよつと」と言われたけれど、見なかった。

伊藤 それ「区割表」は、できたんですか。

海部 できたんです。全国できちんと作ったんですよ。

伊藤 全部一人一区で、ですか。

海部 一人一区で三百に分けた。そこは当選した人が、一人一区。あと二百が比例代表に回るわけだ。比例は各県ごとにまた何議席、といつて決めたんです。

楠 県ごとですか。ブロックじゃないですか。

海部 ブロックごとか。全国で決めると言ったのを、各県ごとにしると思った。僕は議論しておつたときは各県のほうがわかりやすいと思つただけけれど、そうそう、ブロックになったんだ。東北プロ

ツクとか四国ブロックとか。

伊藤 あれは重複を認めなければ、さつきおっしゃったようなことではないわけですね。

海部 重複を認めるからいかんわけです。僕も初めの選挙のとき、三回前は重複だったんです。そして、こちらは新進党の党首だから、私がトップ。東海ブロックだな、愛知県ではなかったですね。その地域のトップだった。当選確実だという。そうすると今度は、「海部さんは放っておいても必ず当選する、比例のトップだから」ということになる。そうすると、小選挙区に出るやつが、「私も当選させて欲しいから、私を応援してください」という。

伊藤 海部さんのところの小選挙区は、あまり熱心ではなくなるということになるんですね。

海部 やらなくなっちゃう。それはいかん、というので、僕は記者会見をやつて、「いろいろあつたけれど、私は小選挙区の立候補だけにします。橋は焼き切つて、退路は断つてやりますから、どうかみなさん私に投票してください。票が集まれば当選できるが、比例の一番だから必ず当選するなんて言われたのでは、心の慢心が出たり、歪みができるからこれは駄目です」と、声涙ともにくだる演説をやつて、「比例区への重複立候補を」やめたら、新聞なんかも、そのことは茶化さないで好意的に、選挙というのはそうですよ、と書いた。

伊藤 やつぱり選挙というのは自分の名前を書いてもらつて、当選ですね。

海部 そうなんです。そのときも十五万票ぐらいのあれ「得票」が落ちなかったので、サトカンは当時までいろいろやつてきたけれど、いよいよ「小選挙区ではあんたとは一緒にやれん」ということになつて、お国替えしたんです。お国替えされたほうが、今度は隣「愛知十区」の、江崎真澄の息子の鉄磨のところに行った。鉄磨はそこで、油断したのだから、落とされちゃつて、サトカンは当選したんだね。それで僕は鉄磨には恨まれて、「あんたがあれを手元に置

いておいて押さえつけてくれんから、変なのが入つてきて、私はやられちゃつた」といって、泣かれたり口説かれたりした。そうしたら今度の選挙は二人とも当選したんです。サトカンは比例で上がってきた。あれもおかしいな。二人だもの。しかもこのあいだの選挙では、最後の最後に決まったのが、愛知県の十区です。江崎か佐藤か、という争いだった。三百票ぐらいの差で江崎が競り勝つたけれどね。あんなのは地元の人も、小選挙区のとくに落としておいたらよかつた、そうしたらいまごろ恥を掻かなくてもいいんだから、人助けになつたんだ、というのが、僕のところにいるいろいろ言ってくる人のもつぱらの話だな。

伊藤 最近あまり大きな出来事がないので、サトカン問題は新聞に連日出て来ますね。

海部 新聞からテレビから、またか、これでもかと言うぐらい、どんどん出る。けれどもサトカンのところは、いかにもお金がなく清貧で真面目にやつておつたみたいなことばかり言つておつたでしょう。そうしたらよく聞いてみたら、彼は彼なりに中小企業者を集めて、もらつておるわけだ。その証拠に、きのうの夕刊か何かに、選挙の前に民主党の愛知県連はカネがないから、二千万円立替えて寄付したというんだ。「そんな人がどうしてお金がないというんだ。こつちは自民党ではなかった、当時は保守新党だから、お金もつとなかつたけれど、二千万円も党へは出してないわ」と新聞記者には言つてやつたんだ。おれに負けたから窮乏して、ああいうことをやらなければならなくなつたと、新聞にはもつぱらそう書いてありますよ。けれどもそうではない。新聞も、「サトカンは」二千万円も自分のカネをどんどん寄付していることがわかつているんだから、それも書かなければいかん、不公平だよ。

伊藤 あれは社会党以来の伝統ではないですか。

海部 そしていろいろな中小企業を集めて、そこから献金を取つておつたんだから。

伊藤 いまごろになつて、民主党の佐藤観樹なんていつているから

ね。僕らは、社会党じゃないの、と思うけれど。

楠 おやし以来の社会党ですからね。

海部 社会党というのは組合が昔から集まって、献金する体質、癖があるからね。おれの後援者でも、繊維産業のおやじたちは、「まあサトカンにやられて取られとるけど、しゃあねえわな、あれは。保険だわ。保険をやっておかんと、サトカンとか赤松とか、ああいうのが乗り込んで来ては、労働組合をつくれ、ストライキをやってもっとようけ給金もらわにやいかん、といって煽動するから、しようがないで。あんだけ払っておけば入ってこんから、払わしておくだ」といって、月二十万だとか、何か用心棒代を払っているようなものだ。労働組合の宣伝車が来てガーガーやられたら営業妨害で、いやでしょう。

伊藤 保険ですね。時間になりました。次は外遊があつて、盧泰愚の来日があつて、カンボジアの和平東京会議があつて、サミットがあるということ、先生の総理大臣の時代は盛り沢山なんですね。

佐道 そのすぐあとに湾岸「戦争」になるんですね。

海部 そうでした。

伊藤 また、よろしくお願いいたします。今日はどうもありがとうございました。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 28 回

海部内閣Ⅳ (1990)

【2004年4月23日 (金) 15:00~17:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】 (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

佐道 明広 (中京大学助教授)

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2004年4月23日)

1. 1990年4月28日から、先生は南西アジア諸国歴訪に出られます。インド、バングラデシュ、スリランカ、インドネシアを回られました。30日にはインド議会で演説もされています。このときの外遊で印象に残っておられることなどお願いします。
2. 5月24日、韓国の盧泰愚大統領が来日します。海部先生は不幸な過去を朝鮮半島の人々に謝罪され、天皇も「痛惜の念」を「お言葉」で述べられました。このときのお言葉の内容などはどのようにしてお決めになったのでしょうか。また、盧泰愚大統領の印象などもお願いします。
3. 6月4日、カンボジア和平東京会議が開催されました。日本が紛争解決のための国際会議のホストになるのはこれが初めてだったわけですが、ベトナムや中国が深く関係し、米国も大きな位置を占めているカンボジア和平問題に対して、このときどのような姿勢で臨まれたのでしょうか。
4. 7月9日、米国のヒューストンで第16回のサミットがありました。このときのサミットで日本に特に関係がある問題としては対中借款再開問題と北方領土問題がありました。各国の反応などいかがだったのでしょうか。
5. ヒューストン・サミットで、上記の問題のほかで特に課題とされた問題にはどのようなことがございますか。また、先生はサミットに首脳としては初めての参加となります。各国首脳の印象などもお願いします。
6. 8月2日、イラク軍がクウェートを武力制圧します。この一報はどこでどのようにお聞きになりましたか。またお聞きになった直後の印象などはいかがでしたか。事前情報などはなかったのでしょうか。
7. 日本政府はいち早くイラクに対する経済制裁を決定するなど、かなり早い対応を示しました。この問題について内閣では当初どのような見通しにたって、どのような議論が行われたのでしょうか。
8. 8月18日、イラクは同国内の外国人を拘束するとともに、24日には在クウェートの日・米・英の大使館を包囲しました。在留邦人保護・大使館保護という戦後の日本が経験したことのない事態が生じたわけですが、これにはどのように対応しようとされたのでしょうか。

※このあとの湾岸情勢に対する対応には、財政的支援問題と国連平和協力法という二つの重要な問題がありますので、この点は次回にお聞きしたいと思います。

■南西アジア諸国歴訪1（外交課題として）

伊藤 それでは始めさせていただきます。平成二「一九九〇」年ですから、もう第二次海部内閣になっていきますが、「四月二十八日から」南西アジア諸国の歴訪に出かけられますね。インド、バングラデシュ、スリランカ、インドネシアと回られます。インドでは議会で演説されるということもございました。こういう外遊は、ご自分の希望なんですか、それとも外務省が、いまここに行くことが大事だ、という判断で決まってくるものなんですか。

海部 結局、「外務省が」いろいろな素材を提供して、これをフレイにするとおもしろいとか、煮物にしてもおもしろいとか、新鮮だからお刺身になりますよ、というような選択の幅を残してのご進講というのには確かにありました。私のときは、もう少し幅広く議論しますと、忘れもしませんが、それまで行くという約束をしてあったところに、いろいろなきことがあまりにもあったので、旅行していません。私の前任者までが、ですね。竹下さんが一回だけ、退陣を決めてから行きました。宇野さんに至っては、行きようもなかった。けれども約束だけはしてあった。それで手形を落としてくれんか、という話がだいぶ外務省に来ておったことは間違いないんです。

そしてそれぞれの相手国にも、言っていないか悪いか知らんが、事情がありまして、この方は任期がいつまでだから、それまでに一度日本に行きたいとかいう。天皇陛下というのは、南西アジアとか東南アジアの国々の政治家にとっては、やはり一つの象徴的な会いたい相手なんですね。だから迎賓館に泊まって、天皇陛下に会って、というようなことを条件にして呼んでもらえませんか、ということを書いてくる人が多い。呼んでもらう前には、日本から来てもらわなければいかん、という事情を、向こうもよく調べ上げて知っていますから。

伊藤 向こうの事情もあるわけですね。

海部 はい。向こうの事情というのは、とにかく向こうのリーダーになった人で有資格者がいろいろありますね。有資格者はなるべくたくさん日本に來たい。日本にいる大使の腕は、そういうときにいかにしてウエルカムするかということにある。それが本国とのあいだでいろいろある。そういう話を、あの頃ほうぼうから聞きました。それまで、約束しても呼ばなかったところがずいぶんあったんです。こちらの国内事情がそうでしたからね。竹下さんの終わり頃から宇野さんの時代というのは、ほとんどそういうことが途絶えてしまいましたから、ずいぶん溜まっていたんです。いままでなら、常識的には東南アジアに行くのがアジア旅行のイロハのイですが、いきなり南西アジアに行くって下さいという。「どうして南西アジアだ」といって聞いたら、さっき話したように、それは日本の政府は替わるとまず東南アジアに行ってもらうけれど、それもだいたい途絶えておる。そして南西アジアのほうには、特にあの頃S A A R C

「South Asian Association for Regional Cooperation 南アジア地域協力連合」というインドを中心にした連合があった。そこへは少し顔を出して、親密にしてやるのが大事です、というわけだ。

伊藤 日本と比較的疎遠だったわけですね。

海部 はい、比較的疎遠ですし、東南アジアはしょっちゅういろいろなところで顔を合わせたり、往ったり来たりしていきまして、親戚づきあいみたいなところもいくらかありましたね。けれども南西アジアのほうには、本当に距離がありました。ですから、私が行ったら、「日本の総理大臣に初めて来てもらいました」と喜んでおる国や、「この前池田勇人様という方がおいでになってから、もう三十年以上どなたも来ていただけません。ご招待だけは、一昨年もオファーしたんだけど、それはみな日本の事情でキャンセルになりました」というところもあって、だいたい溜まっておったことも事実なんです。

伊藤 じゃあ、手形を落とさなければならぬわけですね。

海部 はい。そのために、これはこの前お話ししたと思いますが、アメリカに行ったときも本当はアメリカだけで帰ってくるものを、メキシコを回り、カナダに回る。それはアメリカのブッシュから頼まれて、「トシキ、あそこらもちよつとやっておいてもらわないとうまくいかん。日本のためにもなるからやってくれ」と言われて、行きましました。ノット・オンリー・アメリカ、バット・オールソー・エイシャン・カントリー。そのみならず、ヨーロッパのほうでは、いままではEU加盟国しか行きませんでした。初めて鉄のカーテンの「東側の」ほうに入っていったんです。私の在任中です。

海部内閣というのは、いままでやらなかったことにずいぶん手足を伸ばさなければならぬのだな、と思っただんですが、いろいろ話を聞いてみると、それが日本の新しい時代の立場であり、役割だということがあつて、いろいろ出て来ましたが、「まず南西アジアには行きましよう。だから案を作つて至急持つてきてもらいたい」と言いました。

伊藤 これは外務省、官房長官あたりでいろいろやるわけですか。

海部 外務次官が官房長官にご説明して、官房長官が私のところに報告に来て、これでどうですか、というわけです。

伊藤 このときは栗山「尚一」さんが事務次官ですが、事務次官は定期的に――。

海部 定期的に「週に」一回ずつ説明があります。その定例の説明が終わると、「今度いかがでしょうか、だいぶ溜まつておりますから」ということで、順番を話して、最初に申し上げたように、「これは池田勇人さん以来ずっと行つておりません。ここは、竹下さんにオファーがあつたときは、すでに駄目になつて、やめました」とか、いろいろなことを言うわけです。

伊藤 総理としてはお若い先生ですから、この際おおいに動いてもらおう、ということですね。

海部 そういうところに行つて話をしてくるのは、いやなほうではありませんからね。心臓で、何でも片言でやつて、それで意志が通

ればやつて来ましたから。

■南西アジア諸国歴訪2（大国インド）

伊藤 インドは大変人口の多い国ですが、いま選挙をやっていますね。人口構成も複雑で、人種、宗教、言語、バラバラな国ですね。ただ、南西アジアの大国であることは間違いありませんね。

海部 いまやそうですね。あの頃もS A A R C諸国、南西アジア諸国のリーダーであることは、自他共に認めておるわけです。それは人口のみならず、資金の面でも、知的レベルの面でも、いろいろな面で、きわめて誇り高き国であつたわけです。ですから、インドを中心に行つておけば間違いのないだろう。あまりにも今日まで疎遠であつたということですね。

インドのほうも、もうちよつと日本と仲良くしたいという気持ちは持つたでしょうけれども、なかなかそこまで順番が回らなかったというと言ひ方が悪いんですが、いきなり日本、ということにはならなかつたんですね。こちらから行くぞ、とオファーしてやったので、インドは真つ先にウエルカム、歓迎しますといった。

その背景には、僕の直感の印象ですが、外務省の説明からの印象でも、インドという国はいろいろな意味で親近感もあるし、よく知つておる国ではあるけれど、ちよつとよそよそしいところがある。ですから訪ねていくときは、玄関を開けて「こんにちは。ごめんださい。誰かおられませんか」と言つて、入つていかなければならぬ国なんですね。あれぐらいの国になると、連絡がしてあつたら、「こんにちは、ちよつと裏から入つていくよ」といつて裏口から上がり込めば、そう形式張つた話し合いをしなくても、スツと家族の居間に入つて、そこに座り込んで、やあよく来たね、という日本流のつき合いができるんだけど、インドとはそれができなかつたんです。なんとかその突破口を開きたい。あまり肩肘張つた難しい話を

するよりも、これからひとつインドと日本とは友好的に提携して仲良くやっつていこうという結論を出しながら、そのためにどうするかということと事前の検討会で話し合つて、材料があつたらいろいろ出しなさい、とやつたんです。

私はそのときに、「それじゃあインドに対して、青年協力隊のこともおれはテーマに出すから」と言つたら、「それは喜ぶことでしよう。ただインドは誇り高き国ですから、技術協力ということで話を持っていくと非常にいいと思います」という。それから私が文部大臣の頃に始めて、ちよつと中途半端になつておつたアジア拠点大学制度というのがあるんですね。それは東南アジアが中心で、インドまで行つていないんです。だからそういつたことも、ひとつ今度は始めようか、というようなことを考えました。

そのときに、インドというのが非常に誇り高き国だということもわかりましたが、やつぱり行つて良かったと思ひます。いろいろなことがわかりましたからね。

伊藤 パキスタンには行かないんですね。

海部 行かなかつたんです。

伊藤 インドからこちら側「東側」ですね。

海部 竹下さんのときは、お気の毒に退陣が決まつたあとだから、いろいろな国を回られたけれど、お詫びと顔見せ程度の話しかできなかつた。本人が、「本当ならやめようかと思つたけれど、あれだけ約束もしてあるし、行つてくるよ。あまり楽しい旅じゃないけれど、針の筵だけれどな」と言つてらつしやつたことを私は思ひ出します。

伊藤 インドでは議会で演説をされますね。その原稿はどうするんですか。

海部 あれは、叩き台を書いて出してもらう。

伊藤 それは外務省ですか。

海部 外務省です。それで私が、「自分の言葉を入れたいし、日頃使つておる言葉もあるから、それを入れる余地をきちんと残して。

失礼だけど誰が書くか知らんけれど、あまり難しい話や堅い話はバツバツサとやりますよ」と言つて、出してもらった。そしてそれはそれなりにいろいろ利用する。

伊藤 それは英語でやるんですか、それとも日本語でやるんですか。

海部 日本語でやります。インドに行つたときは日本語でやりました。

伊藤 反響はいかがでございましたか。

海部 あの頃はインドでは珍しいから、みんな議場をいっぱいにして真剣に聴いてくれたし、インドの首相が一番前に来て座る。日本でもそうですけどね。われわれも一番前に座つて、事前に配られたテキストを見ながら一所懸命に聴いて拍手をする。なにしろ、池田勇人様以来初めての総理訪問ですし、池田勇人様はインドの国会に行つて演説をおやりにならなかつたわけですからね。

伊藤 じゃあ、初めてのことなんですね。

海部 初めてのことでしたので、向こうも期待をしたし、わがほうも一所懸命やつたということです。

それでインドは、驚くなかれ、あの暑い国であるにかかわらず、儀仗兵がずつと出て、馬で先導するんです。私は馬はちよつと苦手だから、馬鹿にするなどは言わなかつたけれど、車に乗るといつて車に乗つてそろりそろりと、馬の足に合わせて、馬並みに行つたんですが、相当長時間かかりました。それでもちゃんと儀仗兵が先に行つた。一番ひどいというか、ものすごかつたのはバングラデシュでしたが、インドでも人は相当、両側に出ましたね。

そしてご承知かと思いますが、王宮前の大広場まで行くと、ドーン、ドーンと空砲を撃ち始めて、ずつと進んでいって、あるところで降りると、取り囲んで歓迎式典を始める。だから非常に向こうも気を遣つて熱心にやってくれたことは事実です。

伊藤 当時インドとのあいだに懸案はございましたか。

海部 まあ、経済協力をもつとやってくれませんか、ということですね。

伊藤 でもインドは自力でやる、という考え方ではありませんか。
海部 いや、誇り高き国ではあるけれど、「よそとばかりやっておらずに、インドもそれは少しやってくれたらいいではないか」という話はする。

伊藤 ODAですか。

海部 そうです。

伊藤 インドとのあいだには、トラブルになるようなことはないです。
海部 インドとのあいだには、向こうがつくってくれと言ったダムをつくることによつて、反対運動が起こつて、帰つてくれということももうちよつとあとで表面化して、国会なんかでやられましたけれどね。そのことは当時の総理事会では出てきませんでした。むしろそれよりも私が言ったことは、もうちよつと普通のおつき合いがでんか、ということですよ。最初に言ったように、玄關を開けてごめんくださいと言つて名刺を見せて入つていかなければならぬのはいかんから、裏口を開けておいてもらつて、裏口から入つてきて、お座敷にちよつと上がり込んで、直ちに話ができるような間柄になりたい。日本とインドとはそれぐらいのことはしなければならぬと思つております、というようなことも言いました。

海部 インドとのあいだでは、向こうがつくってくれと言ったダムをつくることによつて、反対運動が起こつて、帰つてくれということももうちよつとあとで表面化して、国会なんかでやられましたけれどね。そのことは当時の総理事会では出てきませんでした。むしろそれよりも私が言ったことは、もうちよつと普通のおつき合いがでんか、ということですよ。最初に言ったように、玄關を開けてごめんくださいと言つて名刺を見せて入つていかなければならぬのはいかんから、裏口を開けておいてもらつて、裏口から入つてきて、お座敷にちよつと上がり込んで、直ちに話ができるような間柄になりたい。日本とインドとはそれぐらいのことはしなければならぬと思つております、というようなことも言いました。

伊藤 それは当然です。

海部 そこで、インドは中立第三世界のリーダーだということだ。

「けれどインドと事を構えようとしているわけではないし、日本とアメリカとの安全保障条約は、ここだけのコンフィデンシャルな話にして欲しいけれど、相手は、インドのほうを見て物を言っているわけでは決してない。もつともつとあるでしょう。北のほうを見て

ごらん、北のほうを」というようなことを言つて、一所懸命そういう方向につくつた。「それは理解できる」というので、「理解できたらそれでいいから、仲良くつき合えよ」というようなことを言つて、そのへんのことにはよく成功したと思うんですね。向こうもちよつと心を開いてきた。また、つき合つたほうがいいんだというようなことを考えてくれることになったと思ひます。そのほうが得だということもわかつてきたと思ひます。

■南西アジア諸国歴訪3（インドの印象）

伊藤 インドには何日ぐらいおいででしたか。

海部 迎賓館には三泊しました。そこで最大の歓迎、心配りをしてくれたなと思つたことがあるんです。ちよつと話が脱線しますが、私の健康管理法は水泳なんです。いまでもしよつちゅうやつていて、ところがインドでは、「海部先生は水泳がお好きだということをお聞きしておりましたので、プールには水を入れ換えた」ぐらいだと思つたら、そうじゃない、「プールを真っ白に塗り直して、水を貯めてお待ちしておりますから、明日の朝からどうぞ、何時からでもできるようにお待ちしております」という。

佐道 それはすごいですね。

海部 けれども、バット、しかしながら、行く前に言われたことは、「インドでは水に気をつけてください。水道の水だと思つて安心してたら大間違い」ということです。その前に、三十年ぶりだといつて古い話ですが、総理大臣が行つたときには全員がお腹をやられた。何故そうなたかという、暑いからみんな飲むわけですね。ビールやウイスキーにアイスキューブを入れる。そのアイスキューブ自体がいけないんだ。それを気をつけてください、と言つてきたわけだよ。

プールで泳ぐときにはどうしても水が入ってくる。「せつかく僕

の趣味嗜好を調べて、きちんとやったというんだ。明日の朝は入ってくれと言われて入らないわけにはいかんから、おれは入るから、おまえらも明日の朝六時半に起きて、ここに来いや」と、一緒に行った外務省の連中に言った。それから不思議なことに、僕の東海中学の頃の同級生で、名前を出してもどうかと思うが、M君というのが当時インド勤務をしていたんです。インドの専門家で、任地はボンベイの総領事館だったんだけど、僕のおるうちはニューデリーに来て、一緒に行動を共にしなさいと言われたという。それは外務省の配慮なんでしょうな。そういう身近なやつを集めて、どうだと聞いた。「明日ここで水泳をするのは、先生、やめたほうがいいと思うが、しかしそれでは成り立たなかつたら」といって、いろいろ言うから、「いや任せておけ。おれも準備してきた物がある。梅肉エキス、酸っぱいやつだ。あれを持ってきているから、朝プールに行く前に、それを二倍入れていくけれど、一緒に行く人にはまだあるから、あげるから、全部口に入れて、それから行こう。あまりバカみたいに口を開いて泳がずに、口をつむつてやるう」と言った。とにかく使わなければ気分を害したと思われるからね。それで泳いできました。

伊藤 大丈夫でしたか。

海部 大丈夫でした、幸いにも。

佐道 梅肉エキスがよかつたのかもしれないね。

海部 梅肉エキスがよかつたのか、いつも日本でも泳いでいますから、少々の雑菌、ばい菌には、こちらに免疫ができておつたのか。どっちでもいいんですが、それをやつた。それが一つです。

それからも一つは、なにしろ使つたことがあまりない迎賓館ですから、こんな「大きな」ヤモリがいっぱい出てくる。

佐道 迎賓館にいるんですか（笑い）。

海部 迎賓館にいるんだ。それで黴くさい。暑くてしょうがないから、ちよつと風を入れ換えようといつて「窓を」開けると、フライがいっぱい来る。困っていたら、「ノープロブレム、ノープロブレ

ム」といつて黒いのが入つてきて、シャーシャーと薬を撒くけれど、その薬はわれわれにとつても、すごい。「虫は確かにこれで落ちるかもしれないが、人間がやられちゃうよ」と言つて大笑いした。それでもしようがないですから、環境に慣れようと言つて、「ありがとう、ありがとう」と言いながら入つた。それで第一夜は収まつたが、強烈な印象でした。翌朝六時半に起きて、来いといつたやつは来たから、梅肉エキスを飲んで泳いで、お腹も大丈夫だった。

伊藤 みんな大丈夫だったんですか。

海部 はい。またみんなといつても、僕の友人で同級生で長いことインドに勤務していたんだから。

伊藤 それは慣れているかもしれないね。

海部 慣れているんだ。そこであのときは、日本に対して、「日本はこのごろ海の向こうのヨーロッパ（東欧のことですが）に手を伸ばして、いろいろなさつていゝる。日本が援助されることは、われわれとしては非常に結構なことだから、援助されてはいかんとは思わんけれど、ただし、それによつてわがほうが鍋に入れて当てにしている分を削られるようなことになつては大変だから」と、そこまで言うんです。

伊藤 かなりはつきり物を言うんですね。

海部 総理大臣が言うんだ。シンさんといったよ。「だから海部先生、それだけは見えてわかるように、ご承知ご配慮を賜りたい」という。「日本はよその国への援助をけちつて、ほかの国へ出そうなんというそんなみみっちい気持ちは持つておらんから、仲良く一緒にやつていきましよう。何かあつたら、ここに大使がおるから、大使とお話しをして回してください。とにかく今日は、まず来て、いつも玄関を開けて名刺を出して、手みやげを持つてこなければ来られんようなインドではいやだから、アジア的に、われわれはお勝手口を開けて入つて来るから、ときには手土産なしで来るかもしれないが、サツと上がった上がつた部屋にあんた方もおつて、そこでお茶を飲んだり食事をしたりできるような、アットホームなおつき合いを

したいんだ」というようなことをズバリ言ったら、「それは非常にいいことだ」と言っていた。

伊藤 インドではその三日間でいろいろな指導者にお会いしたんですね。

海部 それがメインでした。そして、仕上げに、国会に行つて演説をやつたんです。たしかいまから思い出すと、ガンジーさんという若い青年政治家でした。

佐道 息子のほうですね。

海部 賢そうな顔をしておつたな。目がぱっちりしていた。

■南西アジア諸国歴訪4（バングラデシュ）

伊藤 それでインドがおしまいで、次がバングラデシュですね。

海部 バングラデシュです。

伊藤 これはずいぶん違うという感じですか。

海部 インドは池田勇人さんの次だから、日本の総理大臣が行つたのは二度目ですが、バングラデシュは初めてです。インドと違って、またちよつと一段落ちます。これは丁重には扱ってくれるけれど、慇懃無礼だ。

そのときバングラデシュの首相は歓迎晩餐会をやってくれたんだけれど、びっくりしたことに、最初の晩餐会で、歓迎の挨拶が始まつて数分経つたら電気が切れて真っ暗になった。そのとき彼らは少しもあわてない。日本なら始まつてすぐに電気が来なくなつて真っ暗になつたら大変な騒ぎになるでしょうが、二、三人ちよつと動いただけで、そのうちにつきますから、という。

伊藤 インドとは相当格差があるような感じですか。

海部 あります、あります。あのころバングラデシュは、インドと比べてもずいぶん下であつて、インドから経済協力をもたらつておつた国だつたね。食うや食わずみたいないところもあつた。そういう国

でありながら、不思議なことに軍備だけは持つておるんですね。さつきちよつと申し上げたように、インドの歓迎よりもバングラデシュの歓迎のほうが、人が出て盛大で派手であつた。飛行場から迎賓館まで両側に全部並べたんですよ。それは兵隊だけではなくて、兵隊が終わつたと思つたら、着飾つた女の子やご婦人だ。それに参加すると、ペラペラのシャツみたいな物を一枚ずつもらえたというんだ。だから近郷近在からみんな集まつてきた。

伊藤 動員費ですね。

佐道 その人たちにとっては大変な物でしょうね。

伊藤 バングラデシュとのあいだではやつぱりODAの問題になるんですね。

海部 もちろんそうです。バングラデシュはあの頃、パーヘッドが低かつたんですね。そして最貧国に数えられておつたわけです。だから何でもいから手を出して、ちようだい、ちようだい、サンキュー・ベリ・マッチという感じであつた。

伊藤 バングラデシュはムスリムの国ですね。

海部 はい。だけど、イスラムの関係はこれっぽちも出しませんでした。バングラデシュというのはかわいそうな国で、水害が起こるんですね。水害が起こることがわかつておるのに、毎年水害が起こるんです。だからなんとかしてもらえないか、という強い気持ちで述べられた。驚いたな、ヘリコプターに乗せられて上にあがつて下を見たんですが、あのへんが全部駄目になるところは非常に入り組んだ水路がいっぱいあるんです。堤防の補強や治水事業の専門家を送れば、仕事がいっぱいあるではないか。さすがにバングラデシュの生活を中から見ると、ここに青年協力隊を送つてどれだけ仕事ができるだろうか。ただ闇雲に青年が行つて、堤防をつくるだけでは治りませんからね。その前に専門家を出して、どういう手の打ち方で、こういう洪水が直るのだろうか調べなければならぬ。だからインドには青年協力隊を送りますが、バングラデシュには専門家を送つて、専門家の診察をしてもらう、ということに

したわけですよ。

そして晩餐会で停電したという話をしましたが、プレマサーダというのがあるときの大統領です。ああいう国の大統領というのはよほど心臓が強くなっておるといふか、傲慢になつていふか、恥知らずになつていふか、バングラデシュで驚いたことがある。イスラムですから、夕食にアルコール類は一切ご法度なんです。それで甘いオレンジジュースが出てくるんだ。暑いから「飲む」と思つたら、アイスキューブがいっぱい入つていふ。これはいかに思つたので、僕は飲まんようにしようと思つておつたら、向こうの大統領がボーイ長を呼んで、「チェンジ」といふ。キューブの入つていないのを持ってこいと云つたんだと思ふ、あの身振り手振りです。そしておれのほうを向いて、ウンと言ふから、おれもウンと言つたら、「これも」と言つて、僕のと二つを持っていつて、またそこにオレンジジュースをなみなみと注いできた。ジュースだけになつたら安心して、おれも飲んだし、プレマサーダも飲んでおつた。

それでちよつと横を見たら、小和田「恒」君、将来の皇后様のお父様、彼は飲んでいふんだ。「おいおい、飲まんほうがいいよ」と言つたら、「いやいや、大丈夫です」と言ふので、「大丈夫です」といつて、わかつていふのか、これは何だか」と言つたら、「よくわかつてます」と言ふ。彼らはみんな免疫ができていふわけだ。あるいは事前に予防薬を飲んできたのか、そのどちらかですよ。それではんしやんしておつた。

それは脱線話ですが、そうやつてプレマサーダ大統領は自分のと僕のだけ、換えて来いと言ひましたね。出した料理は、見た目、ルックス・ライクは非常に悪いけれど、食べてみると、お腹が空いておつたせい、あるいは暑い氣候に適應するために必要な物なのか、いささか香辛料が利いて、ピリツとした、日本人の許容範囲に入つていふ辛さでした。だからそれは僕には大丈夫でした。

伊藤 バングラデシュではODAのことを約束するんですか。
海部 ODAを約束して、向こうがファースト・オブ・オール、最

初に言ひたいことは、「エブリイヤー」「水害がある」、日本は、歴史を調べると、水をコントロールする技術が非常に優れた国だ」といふことだ。こちらでも愛知県では濃尾の大災害があつて、そのとき堤防を直して以来ちゃんと治つていふ。そういう経験もあるから、「一回そういう専門家を派遣して、専門家に調査をさせる。お国の将来そういうことをやろうとする人も一緒にいふて、生活と労働を共にする。(あの頃流行になつた技術移転で)教えただけ、ものをあげるだけではよくないから、あなたの国が今後未来永劫にいい国であるように技術移転をするから、そういう準備をいふなさい。まず日本から学者が見に来ます。見終わつたら、どういふ方法があるか、その方法を伝授しよう」といふことで、めでたし、めでたしでした。

伊藤 バングラデシュは何日もいふなかつたわけですか。

海部 バングラデシュは二泊三日だつたと思ひます。その二泊三日の終わり頃に、みんながお腹が痛くなつた。

佐道 先生は大丈夫だつたんですか。

海部 僕は大丈夫だつた。インドから始まつた梅肉エキスがある。あれも効く人と効かない人、合う人と合わない人があるんだ。

■南西アジア諸国歴訪5 (スリランカ)

伊藤 スリランカまでは大丈夫だつたんですね。スリランカでは当時内戦が始まつていふましたね。

海部 始まつて、島の西北部が大変なところでした。ところが飛行場から都まで行く間、その内戦のところを通らなければならんといふ。通ると危ないから上から行きますよといふて、軍のヘリコプターを出してもらつて、それで行つた。「下からドンパチ撃たないだろうな」と言つたら、「それはもうちゃんと云つて、やつております」と言つておりました。下を走ると六時間半かかるんです。上

を飛ぶと三十分なので、私は上を走る組に入って行きました。

伊藤 飛行場で降りて、ヘリコプターに乗り換えて、首都に行くわけですね。

海部 乗り換えていくわけです。

佐道 随員の中には、下を行かれた方もいらつしやるわけですね。

海部 後続部隊は下を自動車で行った。これ「武装した護衛」がついて、あまり気持ちのいいものじゃないだろうけれど、「襲撃者が」出てきたことはありません。

伊藤 ここも当然ODAですね。

海部 もちろんODAです。

伊藤 スリランカのほうがバングラデシュよりはましなんでしょう。

海部 すこしはましです。道路事情とか、家の事情とか、いろいろなもの詳細に見てみると、スリランカのほうが、まあ上ですね。人間的に生活もしておる。

伊藤 仏教国でもありますしね。宗教が紛争のもとではあるんですけどね。

海部 北と南で宗教戦争ですね。

伊藤 そういうことは、公式の会談ではあまり出て来ないだろうと思います。

海部 「平和的に片が付くように努力してください。われわれも大変心を痛める話がよく外電で入ってきますから」「もちろん、そういうふうにはやっていきます」という。

伊藤 決まり文句で言う以外にしようがないですね。

佐道 だいたい総理が行かれるときには、どういう案件に援助を実施供与するかとか、かなり具体的なことまで「決まっているんですか」。

海部 はい、具体的なことまで積み上げて、各省ごとに何ができるか、今日まで何をどれくらいやったか、向こうに喜ばれるニーズはあるか、調べてある。こちらがやってあげようと思う枠の中のこと、これだけはいいいから、そちらから言いなさいという根回し

も、外務省がちゃんとやるんだな。口頭のお話要領の中には、先方から発言があった場合は、こういうふうには答えていただいて結構です」と書いてある」。

伊藤 芝居の筋書きみたいなものですね。

海部 振り付けだ。

佐道 予算折衝のときに、大蔵原案があつて、最後に大臣が行かれて大臣折衝でちよつと積み増しをしたりしますね。こういう場合は、それがあつてですか。総理が行かれて、向こうの方に会われたときに。

海部 最後に腹を決めて、やらなければならぬときは、それはやりますね。

大臣折衝の話が出たので脱線しますが、主計官が入って、ご発言要領というのをつくって持ってきて、「これだけ言ってくれ、これは言ってくれな、これはいけません」といって、事前に決めたことを全部書いてある。それに従って、こつちは「これがいい、これはこうしてくれ」と言うと、それでシャンシャンで終わることになっておつたんです。でも僕が最初の文部大臣のときに、そんなこと、あまり詳しく言われたつて、その通りやる必要ないと思つたから、僕の特論を少し述べて、「教員の定数削減をするならば、こういうふうにしたらい。今日の合意事項では署名できない、もうちよつと数を増やせ」と言つたんだ。そうしたら走つてきて、「せっかくなかなか積み重なつたものが全部音を立てて崩れちゃいますから」という。

佐道 お役人さんたちは慌てるでしょうね。

海部 慌てて、当時の主計局長が、やっているさなかに走つてきた。大蔵大臣は、最初のときだから竹下大蔵大臣が横に陪席しているわけだな「最初の文相のときは福田内閣で蔵相は坊秀男、二度目の中曾根内閣が竹下登」。

「おれは小人数学級をやるなら、もう少しあれしたらどうだ」と言つたが、それはもう話し合いの外のことだ。竹下も大蔵省の味方

になるから、「海部さん、よくわかっているしな、あんたが言っただけのことだ」とも思っているけれど、それを言っちゃったらかんわな。今日まで積み重ねてきて、みんなが努力して、全国の教育委員会から入れて上げてきた話だから、このところはここでお手打ちをしておいて、軌道に乗せて、それからやっつけたいよ。あなた方、自信を持ちなさい。あんた方はえらい人ばかりだ。四十人学級を実際に身を以てやったら、あんた方みたいな利口な人ばかり出てくる。六十人学級で育つてくると、竹下登みたいなのばかりが出てくる」「まあまあ、竹さん、それ以上言わんほうがいい、ようわかった」といってね。そんなやり取りをしながら、そこで署名して終わった、ということもありましたね。

伊藤 外遊も同じようなものなんですか。

海部 ああ。外国は、竹下の作文じゃないけれど、外務省と大蔵省の作文だからね。

伊藤 でもそれをオーバーするような約束をしたらまずいわけでしょう。

海部 まずいわけです。そういうときは、「お気持ちをよく理解しましたので、持ち帰って、実現するように前向きに努力をいたします。後刻大使を通じて、担当の局長と話を詰めてくれ」というようなことを言って、間をもたせて、切らない。向こうは向こうで、一所懸命話を続けていけばいいと思う。一年遅れても、できればそれでありがたい、ということになるでしょう。

佐道 外国のほうからしましたら、ODAがたくさん欲しくてたまらないわけですね。外務省と先方の外務省とで積み上げてきた話以上に、総理が行かれたら、直訴ではないですが、なんとかお願いしますよ、という話はけっこう出て来たりするんですか。

海部 けっこう出て来たと思うのは、こちらの筋書きに書いてないのに、例えば給水事業が、インドではないけれど、よその国で出てきたことがあった。

伊藤 ほかの国は、そういう官僚制がきちんとしていないというところもあるでしょうし、トップが独裁でものできる国もかなりありますからね。

海部 それに、おれが厳しい顔をせずににこにこ笑って、さあなんでもしゃべれという感じで話を引つ張り出したたりしゃべったりする向こうも、そういう友好的な雰囲気があるならば、ここで一番、と悪ノリをするわけだ。

伊藤 それはそうですね。

海部 そうすると、小和田君なんていうのが非常に冷たいムードで、「総理、これは約束が違いますから、お任せください。私がきちんと固めますから」という。

佐道 厳しいですね。

海部 だから、「事前に話し合っていると約束したことだけ話し合ってくれ。その中でそれを半年早めるとか、もうちよつと上積みすることかというようなことについては、その場の雰囲気とかお人柄で進めることでしょうか、全然話さなかったこと、お断わり申し上げたことをここでまた蒸し返すのは、いけません、約束が違えます」という。そういうことが二度ほどあったな。

伊藤 お話を伺っていると、日本が官僚国家だということがよくわかります(笑い)。

■南西アジア諸国歴訪6 (インドネシア)

伊藤 それでスリランカは特に懸案があったというわけではなくて、次にインドネシアにお回りになるわけですね。インドネシアは、日本がODAを一番たくさん出している国ですね。

海部 一番たくさん、出し過ぎていくぐらい出しているんです。そして言い訳になるが、癒着だとかがたくさんあって、デヴィさんとかいうわけのわからん女性も行っておった。いろいろ筋の、まさに戦国時代の人身御供のような話だな、デヴィさんなんていうのは。

伊藤 だけど、あれだけ注ぎ込んだのに、なかなか経済成長もせず

海部 どうしてなのかな、あれは。ただ、こういうことは言っていました。「石油資源を豊富に持つておるから、石油産業開発中心にお金を使って努力もしてきた。けれども、石油だけでこの国の国民生活が豊かになるものではないから、どうやったら国民生活を潤していけるかということに頭を使って、今日までやって来た。だから日本があれもしてくれ、これもしてくれただけで、そういうことを今後もさらにやってくれるといい」と言っていました。例えば、あの国は内陸部で橋が欲しかったんです。バングラデシユなどを見ると、非常によくするように橋の協力をしている。ああいうものをわがほうにもと言うので、「テーマとして出さない。政府間交渉の事前の話に乗ってこない」と、それはこういうところで一発で決めるように思っても難しい話になるから、事前の積み重ねと調査が必要だから、それをやられたらどうか」と言う。

伊藤 インドネシアは日本とは非常に友好的な関係でしょうから、気は楽でしょうね。

海部 びっくりするような歓迎をして度肝を抜きますからね。インドネシアあたりへ初めて行くと、へええ、と思うね。行くところ行くところ、国旗を掲げて歓迎するのは当たり前なこと、バングラデシユみたいにペラペラの目立つ色のユニフォームをつくって、みんなにタダでやって、その代わり並んでおれ、というようなことは、インドネシアではとてもじゃないがやらんけれど、道という道に、恥ずかしくなるぐらい大きなこっちの油絵が掛かっているわけだ。しかも僕だけではない、家内の分もあって、その向こうにはインドネシアの「大統領夫妻の肖像もある」。だから四枚、主なところにダアツとあるわけです。

街角だけにあるというのなら別だけれど、泊まる迎賓館の中にもいろいろある。ああいうもので歓迎の意を現わさなければいかんと思っているんでしょ。宿舎にも掛けてあるし、「やっぱり喜ん

でやらなければいかんので、ご所望しておいてください」という。せっかくこんなものを、帰ったらそれっきりで、またお蔵に入っちゃうと次いつくるかわからんから。それで、「一枚お土産にもらつていって、お国のみなさんのホットな心温まる歓迎を思い出すすがにしたい」と言ったら、喜んで、くれました。喜んで、くれたけれど、こっちはそれはあまり嬉しくないな（笑い）。

佐道 あとの処理に困りますね。

海部 だから、考えてみれば、いまでも引き続き倉庫代を払っているな。もらつてきた絵とか、何ともならんようなお土産品がいっぱいあるでしょう。捨てるわけにはいかんし、向こうのいろいろなものも書いてある。貸倉庫を借りて、入れてある。

伊藤 それは個人で、ですか。

海部 もちろん個人で、ですよ。

伊藤 そういふのは政府の話ではないんですか。

海部 いやいや、政府にやらせてもいいのかもしれないけれど、私の場合は個人でやったんですよ。

伊藤 普通はそういうのは政府ですね。

海部 政府が共同して保管してくれればいいな。そこまで知恵が回らなかつたんですよ、あのときは（笑い）。

伊藤 インドネシアはそんなに長く逗留したわけではないんですか。

海部 インドネシアはそんなに長く逗留しませんでした。これも二泊三日ぐらいじゃないですか。

伊藤 じゃあ、あちこち回るといふわけではないんですね。

海部 首都の周辺だけです。一つ二つ、施設を見たと思います。

伊藤 それはODAでつくった施設ですね。

海部 そういふことです。

伊藤 これらの国々を見た感想というのは、いままでお話を伺ったようなことで、だいたいよろしいですか。そのほかにはございませんか。

海部 行つて見てくれば、なるほど格差があることは間違いない

せん。おかげさまで日本がここまで立ち直ってこられたのは、アジアの国々があつたからで、言うならばアジアが日本という国の選挙区でもあるわけですからね。選挙区が立派になってくれば選挙も強くなれる、ということに、われわれの言葉で言うとなるわけです。だからアジアの国々、向こう三軒両隣とはきちんと仲良くやっていくべきだと思う。そういうことで、私がずっとやってきたアジアに対する青年協力隊の仕事は、これはいいことだと思いますし、いまでもたくさんやっておる。

アジア全体が、このごろはややもすると日本を追い抜くような力を持ったところもある。例えば自動車産業だって、いまはスズキとこのものもだいぶ大きくなりましたが、スズキが出て行って、マレーシアとかインドとか、いろいろなところで小型車を作り始めたときは、まさにそれらの国々にとつては憧れの的であつた。

マハティールが、「ちよつとお話がしたいから」といって、首脳会談が始まる前に私一人だけを別室に連れて行って、そこで話したことは、「日本の真似をして、第二国民車をもつと競争させて作りたい（あのときプロトンというのだけあつたんですね）。プロトンはおかげさまで進んできておるから、もう一種類、競争車をつくつて、日本の社会のように切磋琢磨して競争させるとよくなる。それでダイハツだったか、どこかがいいと思うがどうだろうか、話をしてくれんか」という。「あなたがそれを本当にご希望ならば、それは慎重にその意向を伝える。直ちにすぐに援助ベースに乗るか乗らんかは別に、ちよつと目盛りを長くすればコマースに乗るか乗らんかで考えてもらわなければならんことになる話だから」と言つて、掘られた穴にボコンと落ち込まないように、いろいろ考えながら話して、それでもちよつとその続きはやりましたね。

■盧泰愚・韓国大統領の来日1（盧泰愚大統領）

伊藤 南西アジア諸国歴訪のあと一ヶ月ぐらいで、韓国の盧泰愚大統領が来日するということがございました。「一九九〇年五月二十四日」。これは、韓国の大統領の日本訪問としては――。

佐道 二回目です。中曽根さんのときに全斗煥が来ています。伊藤 それで日韓関係は行きつ戻りつ、複雑なことですが、盧泰愚さんが来るといふのはあらかじめわかっているわけですね。

海部 盧泰愚さんはいへんな希望を持っておつた。あのときは指紋押捺の問題がありまして、なんとかそれを片付けなければならぬ。幸か不幸か、韓国の人は指紋を残していったがために、いろいろな事件が表に出たとか出ないとか、不幸な話がありました。でも盧泰愚さんは、あのとき初めて「未来志向」という言葉を使いました。

「未来志向の日韓関係」と言いました。「盧泰愚さん、あなたが本気なら、それは私も賛成することだ。両方で障害がたくさんあるけれど、取り除きながらやっていこうじゃないか」という話をした。

あの人は日本とは仲良くしなければならぬという、腹の中では親日だ。親日でないとしたらせいぜい知日だ。というのは夜、晩餐会で横におると、「私は海部さん、日本の歌をよく知っています」といって、どうしてあんな歌を覚えてるか知らんが、「山の淋しい湖に、一人来たのも悲しい心♪」「湖畔の宿」と歌う。こっちはメロディと歌詞を全部知っているなんて思わなかったけれど、それを歌うんだ。「いい歌ですね。けれどこれをいま国に帰って歌ったら、私は袋叩きです」と、そういうことまで話せる人でした。

伊藤 あの人は日本語世代ですね。

海部 だから話が難しくなると、日本語でやるんです。そしてこの問題さえ片付いたら、未来志向の日韓関係をつくり、日韓が未来志向でやっていけるようになります。新時代が始まる。それは僕も同感だったから意気投合して、「あなたの国へ、私はこの話の火照りが残っているあいだに一回行きますよ」という話をして、引き続き第二幕は韓国でしょうという話までできました。

伊藤 このとき海部総理として、不幸な過去について朝鮮半島の人

々に謝罪をする、天皇も「痛惜の念」ということをおっしゃって、いよいよ清算して未来志向で、という話なんです、人が替わると、また元に戻ってしまうわけですね。

海部 僕は「従軍慰安婦の問題など、過去の歴史に立脚した不幸な話は今日でもって終わりにしましょう。お互いに二人で踏み固めた良い日韓関係の中にみんな埋め込んで、これからは未来志向で行こう。歴史に起因した問題で角突き合わせることは両国にとつては不幸であるし、喜ぶのは北だけです」という話までして、なかなかこのおじさんは話のわかる人だなと思ったことを思い出します。

伊藤 繰り返しですね。

海部 そうしたらまた出てきたから、僕はびっくりしたんだ。

伊藤 こういうときに、総理として盧泰愚大統領に対して話すことは、外務省とか官邸で振り付けをするわけでしょう。

海部 それは、はっきり言って、過去の曰く因縁や故事来歴、そのときどきのエピソードというのは、聞かなければわからんですよ。もちろん街の専門家で、われわれに耳学問をさせたいという先輩方はいらつしやいますよ。「おまえ、日韓で大事なものはこれだ」とか、いろいろ話に来る人がおりますわ。なるほど、という意見もあるけれど、全く違う意見を持つてくる人もあるし、判断に苦しむんですね。これがいい、これがよくない、と分けるだけの経験や知識が足りないから、そういうことについて一つずつ積み上げて、こうだという理詰めの説明ができるのは、あの頃は外務省が一番だったと私は思います。それから官邸の中にあるいろいろな資料室の親分なんかも、外務省から日頃いろいろ聞いていますね。

伊藤 外交問題だったら外務省が取り仕切る。そしてもちろん官邸ですね。

海部 官邸ですが、官邸の中の誰の某ではない。差し障りはあるかもしれないが、韓国との問題については、特に瀬島「龍三」さんの意見を聞いてあげてくれという。

伊藤 それは誰が言うんですか。

海部 まあ、おれの身边にいる物知り博士たちだな。

伊藤 それで瀬島さんはまたいろいろと――。

海部 瀬島さんだけではなくて、瀬島さんが「これの意見も聞いてやつてもらいたい」といつて、一人二人連れていらつしやつたことも正直言うとおつた。特に韓国の問題のときには、はっきり言うところ瀬島さんという人の過去からあれから読んでみて、この人に頼んだらこの人の意見を聞いてみても――。なんといつても一時期、国士だったことは間違いないけれど、その後経済界に身を置かれたわけですから、いろいろな意見で変わった色眼鏡をかけられることもあるかもしれない。僕が韓国に総理の密使を一人出して、腹を割つたこちらの気持ちを伝えて話を聞いてくるのは、いつも一緒に首脳会談について回つておつた小和田君がいいだろう。小和田君を行かせる。それをこつちが決めて物を言ったものだから、「こういふときは瀬島さんを使つておいたほうが無難だよ。悪いことは言わんから、そうしなさい」といふような、いろいろな話があるわけですね。

だけれども、それじゃあといつて瀬島さんだけに乗り換えるのもいかんで、参考意見として聞くけれど、こちらは腹を決めてあるんだ。天皇陛下の「お言葉」のすり合わせです。それで、小和田君がまず行つたんです。行つたあとで、瀬島さんも行つて、そんなことは済んだあとですから、そう害はなからうと思つて、やつたんです。

伊藤 官邸というか、外務省と瀬島さんとの関係はどうなんです。

海部 ちよつと一時期まではずつと瀬島さんにお世話になつていたんだけれど、どこかでちよつと瀬島さんの指さす方向と、外務省の指さす方向が、着地点が違つておつたことがあるのではないかと、というような印象を私は受けました。特に韓国の場合、瀬島さんが向こうで持つていらつしやる人脈と、いまの韓国とのあいだで、日本にとつてプラスかマイナスか、外務省の持つておりノウハウとか情報から分析して、ちよつと違うんじゃないか、という気がしました。けれども僕は瀬島さんを信頼して何回も話も聞いてきました。最

初に「瀬島と飯を食ってみろ」と言ったのは三木さんですからね。三木さんも交えて、寿司屋に行つて、いろいろ話を聞いた。瀬島さんはちよつと話がくどいけれどさ。二時間ぐらい話を聞かなければならんから。

伊藤 それは大変ですね。

海部 「ああなりまして、こうなつて、あの時はああでこうで、雨が降る日は天気が悪いと申しますが、日本だけの話ではないのであつて」というようなことから始めるものだから、忍耐も要るんです。けれども、なるほどな、と納得させるような話を、あの人は経験がいろいろあるものですから、されるわけですね。

伊藤 中曾根さんとは非常に親しいようですが。

海部 それは意気投合しておられるから。

伊藤 でもやつぱり、基本的に総理としては外務省、官邸の振り付けに従わないわけにはいかんでしょう。

海部 それが僕は一番信頼できると思つたんです。またそれ以外に信頼できるような情報を正確に全部集めて持つておつて、説明ができるような部署はなかつたと思うな。内閣調査室、内調の室長からも長時間にわたつていろいろ説明を聞きます。あの頃は森田「雄二」君とか、いろいろ室長がおりましたが、いまいちでした。

特に僕が瀬島さんの話を聞いたときに、湾岸の最後の見通しを、彼の経験の中からきちんと当てた。「必ず来ます。月で明るくなつた日に上陸作戦がある」と言つていたのを覚えています。

■盧泰愚・韓国大統領の来日2（天皇のお言葉問題）

佐道 小和田さんを派遣されたのは、天皇陛下のお言葉のすり合わせだとおっしゃいましたが、お言葉は外務省主導で練つていくということになるのでしょうか。

海部 いやそれは、外務省は外務省でちゃんと練つておるけれど、

その前に外交上の裏の話をやつたほうがより親切だということだ。こちらが持つていった案を、それではいけないなんて失礼なことは、おそらくこの国でも言わんと思ふんです。けれども、持つていつてそういう話をしてくることが、最後まで円滑に事が運んでいくためのすり合わせですね。だから、どこでどうしたとか、どちらの案がどうだったとかいうことを外に出したことは一度もありませんが、それをやらせるには、僕は小和田が一番いいと思つておつたんです。僕の周辺で、そういう話が一番できる。

はつきり言う瀬島さんの場合はあまりにも歴代に深入りしすぎていますからね。いまちよつと名前が出たように、中曾根さんのところにもいろいろ言いに行く、竹下さんにもいろいろ言いに行く。

その両方の当事者から僕は聞いておりますから。竹さんの如きは、「総理大臣というのは一人になつて静かに考えて、自分で本心に納得できないことは言つたりやつたりしてはいかんよ。そして自分がこれだ、と思つたことは、やれば総理大臣はできるんだ。だからみんなの意見は聞きなさい。偏つた意見はいかんけれど、いろいろなことをみんなが言うけれどな」と言つていた。

佐道 そういふふうにしり合わせをされて、最終的に文言を仕上げるときには、官邸と外務省で決めるのですか。つまり宮内庁は、あまりそういう問題には参加しないものなんですか。

海部 宮内庁を参加させるとろくなことがないから、おまえらは黙つとれ、と僕らは言いたかつた。

このことも話したと思うけれど、宮内庁ほど旧態依然のところはない。僕にも衣冠束帯でやつてくれと言つてきたんだから。皇族まで動員して、皇族もおれにいろいろなことを頼むから、おれは「閣下、お言葉を返すように申し訳ありませんが、いまは民主主義の世の中です。新憲法の日本がそんなことをやつておつて、世界中にお披露目したら笑われますよ、駄目です。ここは一つわれわれの責任でやらせていただきたい。これをやれと言われてもとてもできません」と言つた。それから刀を下げる、あれが衣冠束帯の制服なんで

す。それでこれ「笏を持つ」ですからね。

伊藤 当時は小和田さんは外務審議官でいらっしやいますね。それでさつき申しましたように、次官が栗山さんで、大臣が中山「太郎」さんでしょう。そういう場合の中山さんの役割というのは、どういうことになるんですか。

海部 あの人は秩序を重んずるほうだ。最終的に「それは総理のご命令ですか」と言うから、「命令だ」というと、「ああそうですか、わかりました」と、それで終わるんだ。あの人は簡単だ。

伊藤 じゃあ初めから事務方がやって、総理のところまで最終的な決着がついて、それから外務大臣も納得するという形ですか。

海部 そうです。

伊藤 それは人柄にもよるといふことですか。

海部 人柄ですよ。そこが最後は従いますが、「総理、自分で腹に入らんことは、誰に頼まれても誰に言われても、おやりになつてはいけませんよ」というようなことまで言った。「それはありがたいことだから、よく覚えておくけれど」と言つてね。

伊藤 昔のように総理大臣が外国に行つて直接首脳と話をすることがない時代でしたら、外務大臣が相当決断したりしなければならんといふことでしょうか、総理が自分で外交をやるようになって、外務大臣としての立場がないと言いますか、奇妙な立場になりますね。自分よりも、情報としても総理に早く来るわけですからね。

海部 その立場も尊重しながら、私の場合は外務大臣と大蔵大臣を呼んでは、用があるうがなかるうが、風通しをよくしておかなければならんから、ここ「海部事務所」で話そうと言つて、昼飯に呼んで話をしましたね。

伊藤 大蔵大臣は橋本「龍太郎」さんですね。

海部 橋本だ。あれはちよつと斜に構えて、「そこは総理、ちよつと違ふんじゃないですか」なんて言う。

伊藤 目に見えるような感じですね。

海部 「いや、違わない。おれはそう思うんだ」「そうですか、どうしてもそうお考えになるんだつたら、それそれで総裁の権限ですが、それはアメリカがどう受け止めるでしょうかね」。だから最後のお金を決めるときだったか、橋本が、「私が言ったことが、それでは食言になるから、発表を一日延ばしてくれ」という。

佐道 湾岸のときですね。

海部 湾岸のときだ。「こういつて決めて、これぐらいを限度にしてくれなければいけませんし、私は総理のためを思つて、最悪の場合私は泥をかぶるつもりで決めてきたことですから」「ええい、おれは泥をかぶつてもらおうと思つておらんから、おれが最後の責任を負うわけだから。おれが腹を切れば済むことと、あんたが腹を切れば済むこととは質が違うんだから、心配するな」と言つた。

あれは酒が入るとくどくなるからね。なるべく酒が入らなときに話をしたんだ。また強いんだ。みんな逃げちやつて、秘書官も局長も、ちよつと廊下まで行つて、中を気にしながら待つていたりする。ほかの議員たちはみんな帰つていける。飲みながら、ねちちり来るからね。だからよほど気力、体力のある人じゃないと、噛み合つてできないんだ。だから中山太郎なんか、いろいろ意見は述べ議論はしただらうけれど、終わり頃になると、やっぱ大蔵省のほうが一枚上だなど思うような決め方にされるからね。そして帰り際にはおれに、「腹に入らんことはおやりになつてはいけませんよ」と勝手なことを言つて、首を振つて帰つて行くんだ。だけど、そういうことを経ながら、物事は決まつていくわけですからね。そこでブレたらいかんですね。

伊藤 そうですね。

■カンボジア和平東京会議1（タイ首相チャチャイ）

伊藤 外交案件ばかり続きますが、翌月「六月四日」、今度はカン

ボジアと和平東京会議ということでございます。これは日本がホスト国を引き受けるということは、かなり前に決めてあるんですか。

海部 いや、何か日本の存在を明らかにしなければならんし、日本

としてもそろそろ、そういうことは考えるべきではないだろうか。

それで何か知恵があったら出してみる、ということをおこなう人数会議で

は言っておいたんです。そうしたら、その中で出てきたことで、日

本が取り組む一番いい政治的テーマはカンボジアと和平の問題でした。

あの頃、チャチャイさんというのがタイの首相なんですね。チャ

チャイさんとは政策の話はしなかったけれど、仲良くできたし、い

い友好関係ができておいた。そうしたらチャチャイが僕を呼んで、

「差し出がましいことを言うようだが、今度は日本の出番だとわれ

われは思っている。タイ国の地続きのカンボジアと和平は、タイ国に

とっては最優先の外交課題だから、これは成功させておきたい」。

そのとき、「時の氏神」と言ったかどうかは別にして、そんな意味

のことを言つて、「日本が出て、受けてやってくれる気はないか、

やればできますよ」という。チャチャイが今日まで築き上げてきた

いろいろな経験やノウハウを全部これに注ぎ込むという。

そう言われれば、日本も外交的にそういうことはあまり得意とし

なかつたわけだから、何かできるならひとつやってみたい。特にカ

ンボジアと和平については、チャチャイさんのみならず、いろいろな

人が情勢を教えてください、協力してくれる。チャワリットという

タイの元軍人で最後は首相になった人が来て会ったときも、「いま

や熟した柿が、ひと揺すりしてもらったら、落ちてくるような状況

になっておるはずだ。日本はひとつ揺すつて、あれを落としてほし

い」「落としただけではいかんじゃないか」「そうだ、落としたら

バシヤツとつぶれて終わりだけれど、それを理由にまとめなければ

ならん」。要するに、クメール・ルージュのことが一番心配だった

んだらうな。「そのクメール・ルージュを抑えるのに一番いいのは

中国である」。

伊藤 まあ中国が支持していたわけですからね。

海部 「だから中国からきちんとやれば、あとは熟し柿が落ちるよ

うなもので、誰かが出てきて言うことを待つておるんだ」「けれど

もチャチャイさん、そうしたら、あんたがやったらどうだ」と言っ

たが、チャチャイは今日までいろいろなことをやり過ぎたし、チャ

ワリットがしょっちゅう行つては、どっちの味方かわからんような

ことを言つたりやつたりしてきた経緯もあった。ちやうど話を思い

出すと、いまアメリカが怒られておるように、ラムズフェルドがサ

ダム・フセインの手を握つて、こちらの手では武器を工作してひそ

ひそ知恵をつけたような役もチャワリットはやつておったわけだか

ら、その比較における直感と反省もあつて、「われわれが出て行っ

たのでは片が付かない」というのは、かなり正直な言い分だつたと

思います。

伊藤 要するに向こうは当事者なんですね。

海部 さてそこで困つたことは、「日本がやってくればよいよう

に根回しはします、協力する。日本はまず座敷を貸す決心をしても

らうと共に、さあとなつたら日本の立場で中国を引きずり出して、

『おまえが出て来ないとうまくいかんよ』と言つてやつてくれ」と

いうようなことを話しておつたんです。

そして、東京会議に呼ぶときには席順でもめたんだ。そこにクメ

ール・ルージュが出て来ない。さあ、ここがいよいよ中国に頼む番

だと思つたので、裏からやつたらいいのか悪いのか、よくわからん

二、三の人に相談して、中国にものを頼むときはどうしたらいいん

だ、正直に日本の立場はこうで、これは中国の利益にもなる、中国

が力を貸したことによって和平を成立できるんだ、というのか。

クメール・ルージュは、逆に言う中国の言うことしか聞かない

わけです。そのことは、会議を招集してみてもわかつてきたんです。

キュー・サンファンともう一人来ていたな。二人の代表が来ている

ことまではわかつていて、呼んでも、予備会合にも出て来ないん

です。「出て来い」と言つても出て来ない。「出てきてくれなければ

成り立たんじやないか。なんとかこの際、和平を成立させたい、ぜ

ひやって欲しい」と言ったんだけど。

「中国に頼んで、中国に使いを出して引きずり出しなさい、出てくるはずだ」という話も来たので、おれのことだから、これは頭越しでやるよりしようがない、アジア局長なんか頼んだら、「そんなことまで頭を下げてはいかん」と言うから。それでおれが中国の大使、楊振亜とは個人的に仲が良かったから、「楊振亜さん、ちょっとお目にかかりたい」と言ったわけだ。

伊藤 大丈夫ですか、アジア局長を飛び越えて。谷野「作太郎」さんでしよう。

海部 そう。来てくれと呼んだ。そういう工作をしていることは、谷野もよく知っているから。カンボジアと平和でやるよ、ということだから。

伊藤 そのカンボジア問題には、谷野さんもかなり関わっているわけでしょう。

海部 もちろん関わっている。谷野のみならず、谷野君の家来で河野「雅治」君という人が非常に深入りしておった。

佐道 南東アジア課長ですね。

海部 はい。彼らがいろいろ情報を取ってきて、一所懸命やっております。それは間違いないことです。

■カンボジアと和平東京会議2（ポルポト派の出席）

海部 かししいよいよとなつて呼んでも、キュー・サンファンともう一人が、日本まで来ておりながら、クメール・ルージュの代表は来ない。引つ張り出さなければならぬ。

いよいよこういうときに奥の手を使って中国を呼び出そうということ、楊振亜さんに、「大使、日本として頼むというより、アジアのことを、あんた本当に考えてくれるなら、一肌脱いでください。せつかくここまで来たという事情はあなたもわかっております。

けれど噂によれば、これ以上強引に出て来い、出て来い、池の鯉とやっていたんじやあ、飛び跳ねて跳ね上がってどうかかなるといから、あなたが連絡をして呼び出してください。それ以外に助かる道はない。それは、この仕事を成し遂げるためにお願ひするんだ、頼む」といつて、余人を交えずに一对一で頼んだ。

あの人の奥さんは、愛知県立第一高等女学校の卒業生です。そういう人脈があるんです。楊振亜の奥さんは、僕の叔母に当たる者と県立第一高等女学校の同級生なんです。楊振亜の奥さんは、そういう意味でうちに好意的だったから、中国の大使館の何かに私が家内と一緒にいくと、奥さんは日本語がべらべらですから、出て来ていろいろいいことを言ってくれる。そういう筋を使わん手はないと思つて、「頼む」と言つたんだ。あそこもパータイタイですから、奥さんをきちんとやつておけばうまく行く。これはアジアの鉄則ですよ。特に楊振亜の家はそうだ。

そのことは終わつてから僕が中国に行つたときに、中国で両方と會つて、「あの時はえらい世話になつたけれど、奥様、ありがどうね」と言つたら、楊振亜大使は笑つて、「海部先生、いいところで馬を射ましたね」という（笑い）。そんな裏話もあつたんですが、それは取つ掛かりをつけるために、甘えた気持ちで、本音の話ができる人だということ、頼んだんです。そうしたら効き目はあらたかでした。大使がキュー・サンファンに、「あんたここまで来て、そんなへそを曲げておつたら、罪一身に背負うから、出てきて、言うべきことを言いなさい」といつたら、席順が気に入らないとか、いろいろなことを言つたんだな。「よし、そうならばこちらの判断で、キュー・サンファンを一番いいところに座らせる。おまえのところは一番力が強いと言っているんだらう」「いやそこまでしてもらわなくてもいいけれど」。あの時の代表の中で、クメール・ルージュのほかにまだ出てきているのがあつたでしょう。

佐道 三派のほうですね。

海部 そう、そのアナザー一派の下ではメンツが立たない。キュー

・サンフランが座つたら、その対面には日本の私が座って、あなたにお願いをする。それで話が始まつたら、それぞれの人に任せてやっっていく。ようやく出てきてくれたんだな。そして、ホッとしました。うまく行つたと思います。

その後、東南アジアに行つたときには、いずれもチャチャイがインシアチブを発揮して、チャワリットを間に上げて、四派とも出て来いという根回しまでやってくれたんですから。それがチャチャイさんの手柄にもなつたらうけれど、そんなことより日本の外交としては初めてアジアの安定のためにあの辺の長い間の懸案事項を一つ片付けたということになるわけです。あのことに感謝しながら、中国の楊振亜大使にもありがたかつたということで、敬意を表しました。国のためにね。

伊藤 これは中国とかタイが関わっているわけでしょうが、アメリカも非常に強い関心を持っていたのではないのでしょうか。

海部 それは全部知らせてあります、「こういうことをするよ、あなたのほうが嫌いだと言おうがなんと言おうが、キュー・サンフランを呼ぶ」と。アメリカはクメール・ルージュが嫌いなんですから。「トシキ、あれはここ「頭」がおかしいぞ」というようなことだけ

れどね。「けれど、そんなことを言っておつたら片付くものも片付かん。あなたが出てきてそれを言ってくれというんじゃない。日本がやるんだから、ご連絡しておく。簡単に言うと、お任せ願つたらうまく行くように、タイのチャチャイ首相もその気になつておるし、中国の大使も出てきて協力してくれる。大使が協力しておること、これは、中南海のほうにも連絡がついているはずだ。ああいう会合まで出てきて、彼らが泊まっているホテルに相手を呼び出しにまで行つたんだから。そこまでできたんだから、もう少し様子を見ておつてくれ。結果がよければそれでいいわけだから」ということは、ちゃんと言つてあります。

伊藤 これはある程度うまく行つたということ、アメリカとしてもよかつたわけですね。

海部 そう思います。

■ヒューストン・サミット1（サッチャーについて）

伊藤 次に伺いましたことも外交ですから、何か全部外交案件みたいな感じですね。

佐道 この時期はそれがかたまつていたんですね。

海部 というのは、それまであまり外交がなかったんですから。

伊藤 選挙優先でしたからね。自民党が勝たなければ沈没する。

佐道 自民党自体が沈没寸前でしたから、日本の政治は外交どころではなかつたわけですね。

海部 そこにもつてきて、あれやこれやの手違いがあつて、ストップしていた。だからいろいろなことがずつと溜まつておりましたので、外交が続いたんだと思います。

佐道 選挙で安定政権もつくられたし、ちよつと残っていた外交をいまのうちにやるうかということですね。

海部 ちよつと一息ついた、というところでしょうね。

伊藤 今度はサミットです。七月九日からヒューストンサミットです。海部内閣としては、初めてのサミットですね。

海部 それまで二度、随行で、三木内閣のときにスポークスマンもやらせてもらった。しかし全然、重さも迫力も違いますからね。

伊藤 違うでしょうね。でも全く未知の場に行くというわけではないんですね。

海部 みんなそれまでに顔見知りになつておつたし、テータ・テートのときには、特にジョージ・ブッシュとサッチャーさんは、僕に非常に好意を持ってくれた。サッチャーさんが書いた回顧録では僕を非常にべた褒めにしてあった。そうしたらフジテレビの安藤優子というキャスターが、「海部先生、これ読んだ？ いいことが書いてあるよ。お葉書を一筆出してやると、サッチャーさん、こんなに

なつちやう「喜ぶ」わよ」と言う。

佐道 出されたんですか。

海部 出したよ。「アイ・サンキュー・ベリ・マッチ」といつて、いろいろ書かせた。それからサツチャーの家に訪ねて行ったんだ。あれはいいことを書いてくれた。

要するに初対面のときに、彼女はイギリスの証券会社を日本の証券市場に入れると言ったんだ。「私がこの問題を頼むのは、あなたで四人目だ」といったんだな。「日本の総理の四人目がトシキさんあなたですよ」と言った。おれは「よしわかった。おれは四人目で終わりにする。五人目は絶対につくらんから、任せておけ。その代わり、ちよつと時間がかかるから、明日、明後日にできたかどうか言ってくれるな。日本流の手を打って、必ずあなたのところのなんとかという証券会社を入れる。必ず入れるから、ちよつと根回しの時間がある。あなた方はすぐにゲット・リザルトと言うけれど、いまここで手の内の一端を出しておくから。これはトツブシュークレットだよ、他人に言うんじゃないよ」と言つて、目の前で電話をかけたんだ。「この問題はもう片を付けろ」。

あのとき証券取引所の所長は山口光秀かな。長岡か山口かどちらかだ。とにかく国会対策でしよつちゆう来ておつた連中だ。それがそこに座っているわけだ。「あなたも気がついておるだろうけれど、サツチャーさんがここまで目を据えて、『トシキさん、あんたで四人目だ。もうちよつと日本はイギリスのことを考えてくれんか』という。僕は『わかった』と言つたから、やってくれよ」と言つた。そうしたら、「『わかった』とおつしやつたんですか」と言うから、「そうだよ、もう言つちやつたんだ。言つて自縄自縛しないと、こんな仕事は天下国家の問題でもないし、はつきり言うよと長岡さん、銭金問題じゃないか、日本がああのはまだのるかそるか、認められるかどうか、一緒につき合えるかどうかの大きな分かれ道だから、頼む、やつてくれ。職を賭してでもやつてくれ。あんたも、なつたばかりで悪いけれどな」と言つてさ。

それは議運国対で長かったから、ああいう人たちとも法案を通すときに裏の話もよくしてきたんだ。「これはお国のためです」ということで向こうも説得に来た。「だから今度」。「これはお国のためだからやつてくれ」と言つたんだ。「それにはいろいろな手続で二ヶ月かかる」と言うんです。「よし、じゃあ二ヶ月半待つてあげる。『半』はのりしろだ。二ヶ月半といつて二ヶ月でできれば、のりしろを切り落として、さすがに長岡さんはえらいなことだ、おれも地方で言つてやれる。これは国を挙げての仕事だから、二ヶ月半経つてもできなかったら、やつぱり官僚は駄目だ、ということになる。頼むよ」と言つて、脅したりすかしたり。それで秘書官に走つて行かせた。

サツチャーさんはサミットの時でも、事前に会つて、「今日はトシキさん、どういふことをしゃべるんですか」「こうこうこういふことだ、これをよろしく頼む。ジョージ・ブッシュはこうだから頼む」と、いろいろなことを話せる人なんだ。サツチャーさんは頼めばきつと助けてくれると思つて、乗り込んでいって、いろいろなことを頼んださ。

ですから、調べてごらんさい、イギリスの証券会社が止められて、僕で四人目の総理大臣だそうだけれど、それでもつて終わりにするといふ約束を守つて、そして二ヶ月ちよつとかかつたけれど――。

佐道 入つたんですね。

海部 後日談を言つと、そこがこのあいだ撤退した。「一同笑い」あれだけ苦労して入れてあげたイギリスの証券会社が、日本のあれが悪いと言つて。だから英国の大使館でも、当時からおつた古いホワイトヘッド大使も、サー・フレデリック・ウォーナーとか、ああいう連中はあ頃の経緯をみんな覚えておる。サツチャーさんから聞いて、それで大事にしてくれたんだな。その代わり、その後いろいろな要求も来るから、それはそうは簡単に行かんと言いなながら、防戦したり、嫌味を言つたりしたことあつたけれど、なにしろサツチャーさんとのあいだの心の通い路がぼつとできたのは、イギリ

スの証券会社を日本の証券市場に乗せたからです。

伊藤 サッチャーさんとブッシュと懇意であれば、サミットはいいですね。

海部 そうすると、アンドレオツティがちよつとごちやごちや言おうと思つても、サッチャーさんが「なに言つてんですか！」とビシヤツとやる「机を叩く」。「あんた、そんなこと言つたつて、日本から見ていたらヨーロッパのことなんかよくわからんわよ。あんた方、四の五の言うけれど、それよりも、どのぐらい本当に困つておるのか、ソ連のために金出せ、金出せ、だけではそれは駄目だ。もっと具体的にいろいろなことを言わなければいかん」という。だからあのおばさんはきついよ。

伊藤 タフ・ネゴシエーターですね。

■ヒューストン・サミット2（冷戦後のヨーロッパ事情）

佐道 当時は、ドイツの首相はコールですね。

海部 コールは、サッチャーさんやジョージ・ブッシュとやったように、あまりウマが合う相手ではなかったな。大きいだけだ。

伊藤 ちよつと暗いですか。

海部 暗いというよりも、ここまで言うのは僕のコンプレックスかと思うけれど、日本に対して、「日本はそもそも、いつもダブルスタンダードではないか。ユーのポケットの中には、二つのメジャーが入っているだろう」と言う。というのは、EBRD「欧州復興開発銀行」の問題で、ロシアに対してEBRDを使って、どんどんいろいろなることをやろう、もつと資金も増やせ、と思つておつたんだ。いまでこそ範囲を広くしてきましたけれど、あの頃は、EBRDは東欧の復興基金ですから、あの時の状況で遠いヨーロッパの東欧諸国の復興のために、日本が出資するというだけでも大変なことなのに、それを、やれ少ないの、もつと増やせの、ダブルスタンダ

ードは駄目だの、アジアの近い国に出しているぐらい出せとかいうことを、コールはあの大きな体で言うわけだ。おれは「それは駄目だ。ヨーロッパのことも、こつちはできる限りのことでやる」といった。

あの頃は「グローバリズム」という言葉がはやつたけれど、ジョージが「世界的規模でいろいろなことをしていこう、日本もできるだけのことをしろ」という。できるだけのことをしろと言われて、われわれがよく考えてみても、あの頃の日本の予備費というのはいと違つて、そんなに底抜けにたくさんあつたわけではないんです。湾岸の最初の協力金でも、二十億ドル出したら予備費はなくなつた。だから二、三十億しか予備費を持っていないところで、EBRDに出せと言つても、それ以上のことは無理だ。

はじめは十億ドルで済まんかと思つたけれど、いろいろなところのいろいろなき意見もあつて、「じゃあ日本は二十億ドル出そう。

その代わり、日本も二十億ドル出すんだから、あんた方の国も全部もつと協力しなさい。事はヨーロッパのことではないか」と言つたら、それが余分なことだつたんだけれどね。「事はヨーロッパのことではないかとは、何事であるか」と言われた（笑い）。

伊藤 世界の中心のヨーロッパを何と思うか（笑い）。

佐道 ヨーロッパのことが世界のことである（笑い）。

伊藤 ドイツ人というのはそういうところがあるんですね。

海部 しつこいんです。そしてあの大きな体で抱きしめて、ちよつと力を緩めてくれよと言いたくなる。そして「EBRDのことはちやんとやつてくれよ、頼むよ」と言うと同時に、あの頃彼も本音のことを言つたのは、「日本の投資は東独のほうへ落としてくれんか。ヨーロッパの人たちは、東独の実態・実情を知っておるから、出せと言つても出さないんだ。西ドイツの人たちも、東ドイツを入れたことによつて、えらい経済的に困っているんだ」と言う。

コールが僕に話したたとえ話で、なるほどこれはうまいなと思つたけれど、「東と西が分けられてから、もう一回早く一緒になろう、

平和的に統一しようという、燃えるような願いがあった。ちようど結婚前の若い男女みたいなものだ。いっぺん見合いたら気に入った。いいわ、ドーンと合意したけれど、さあ家庭を持ってみたら、あれもない、これもない、これも知らん、あれも知らん。新しい家庭を作るといふことは、こんなに金が要るものだとはわからなかったと言いながら、年間百億マルクに近い金を旧西から集めて——日本の平衡交付金みたいな格好だな——、それをやってきた。けれども表面的な話で、内なる統一はまだできておらん。これから苦難の道が始まるんだ」といって、コールさんは相当正直なことを言っておりましたけれどね。

佐道 ミツテランはどうですか。

海部 あれは冷たい男だよ。あまりそういうことを露骨に言ったらいけないな。好き嫌いの順番で並べると、ジョージ・ブッシュとサッチャーさんがおつて、その隣にアンドレオッティが終わり頃は協力的になつてきたんだ。一番左端にミツテラン、ピリ前がコールだろうな。僕の採点簿では。

というのはサミットの場合で、ジョージが何を言つてもいいよというから、僕が北方領土問題で、「ユーラシア大陸の西で成功されたことを、東で片付けなければならぬ問題が北方領土の四島問題だ。あの領土問題が片付かない限り、日本の場合、ちよつと凍ったような心境があるから、これを解きほぐしてくれないとうまく行かんだ」と言つた。そのときミツテランは第一声でなんと言つたと思う。「海部さん、日本は戦争に負けたんだらう」と言つたよ。「だから何だ」と言つたんだ、「戦争に負けたものは、自分の国の固有の領土を力で現状変更されても黙っているということですか。ヨーロッパの新しい感覚は、八月十五日以降の現状を力でもつて変更しない、現状凍結平和共存というのが、第二次世界大戦後の世界秩序をきちんと守つてきたヨーロッパの知恵だと私は見ておつたけれど、戦争に負けたんだらうとは何ですか。それを否定はしません、戦争は勝てば何をやったもよかつたんですか。ちよつとそれはひどすぎや

せんですか」と言つたんだ。

そうしたらジョージ・ブッシュが、「まあトシキ、そう言うな。遠いところの人はその程度にしか知らんのだ。しかもそれは、ドイツにしてみれば自分の国のことではないんだ。況んやフランスにしてみれば、そのドイツにもどこかを取られて、返ってくるのにどんな苦勞をしたか。第一次世界大戦が終わったときに、コンピエヌの森の郊外の列車の中に引きずり込まれて降伏文書に署名捺印させられて、本当に悔しい思いをした血で血を洗うような歴史がある。戦争に負けたんだらうという言葉は言い過ぎかもしれないけれど、そういう思いがあるんだ。戦争に負けたところはみんな取られるんだ。悔しかつたら力で取り返せというんだ。それを言つたのでは、世界の秩序が乱れるからね」というようなことで宥めてくれた。

ミツテランはそのときは悪そうな顔で、最後まで物を言わずに黙つておつたけれど、彼は自分がいつたん言つたことを変える気はないだろうな。

佐道 フランスだつて第二次大戦で完全に勝つたわけではないですよね（笑い）。

伊藤 アメリカとイギリスに救つてもらつた。

佐道 助けてもらったただけですね（笑い）。

海部 そういうことは平気ですよ。助けてもらおうが、場面が変われば掌を返して、ああだこうだと言う。その証拠に今度、世界ポリテイカル・フォーラムをトリノでやつたときに、僕が行つて演説をぶつてきた。「あんた方冷たいじゃないか。もうちよつとアメリカの役割を認めてやらないと。暴れん坊がおつたときに、おまえちよつとどいてくれよと言って、ひとまず現状を押さえて、いい方向に持つていく血を流す努力は、アメリカ以外の国はあまりやらんじやないか。それからヨーロッパ戦線を守るために、アメリカがかつてどれだけ努力したかということも思つてもらいたい。アメリカにもいろいろスピード違反のような、人の理解も得ずに走つていくところがあるから、私はいつもアメリカはもう一回考えて、止まつて、

考え直して、ストップ・アンド・シンキングで前進しなければいかんよ、とは言っているけれど。それにしてもドイツとフランスはお互いに味方だから、最後になれば協力してくれると思うっておつたのを、冷たく扱っておるドイツとフランスは、これからどうやって責任を持っていくんですか。代わりを出すんですか。代わりを出して守ってやるんですか」と言ったら、ほとんど誰も拍手しない。

こっちはそんなに拍手してもらおうと思っていたわけではない。アメリカの耳に入ったかどうかともわからんぐらいで、ああいう場所だからね。でも世界政治フォーラムにはあのとき五十ヶ国は集まっていたよ。

そうしたら一昨日ですが、ドイツからいま国会の副議長が来います。緑の党だ。それがそのフォーラムに出たおつたというんだ。それで「あなたのお話をトリノのフォーラムでお聞きしました」という。「あなたは緑の党だから、拍手しなかつただろう」と言ったら、「それはアメリカをあまりああいふところではめるわけにはいかんから。けれど、押えているところは押えていらつしやいましたね」なんて調子のいいことを言っているんだ。

■ヒューストン・サミット3 (対中借款再開問題)

伊藤 このヒューストンのサミットはいかがでございましたか。

海部 ヒューストンのサミットは、こちらも緊張して、ただただ一所懸命果たしていかなければならないということです。ヒューストンサミットのときは非常に暑い日が続いた。あの写真「壁に掛かっている写真を示す」がヒューストンです。会場がライス大学だ。それで暑いときだったから、サッチャーさんが「トシキさん、ここは暑すぎるわね。倒れていくよ」と言うから、「倒れるならこっちに倒れたら駄目だから、そっちに倒れてくれ」と言った。そしてまたあそこはライス大学という名前の大学ですからね。コメの市場開放が

このサミットでは大変な問題で、「ブッシュさん、この会場の名前はライス大学だ。ライス・イコール・ジャパニーズ・コメ、頭が痛いな」と言っていたんだ。

伊藤 このとき中国の対する借款の再開問題もありましたね。

海部 ありました。「あれ「中国への借款再開」はやるよ。やるから、やったときに駄目だ、駄目だと言わんでくれよ。なぜならば、日本は隣の国だ。あなた方ヨーロッパの大国は隣じゃない。日本には向こう三軒両隣と言うけれど、日本のイニシアチブで中国を孤立させないようにしなければならん。中国を孤立させるということは、アジア地域の平和と安定にはプラスにならないと私は思っているから、みなさんのご理解とご協力を求めておく」と言ったんだ。

意外とそれをすんなりと受けてくれたのはブッシュだ。「自分は中国を知っておる。駐在しておつたことがある。むしろトシキより細い道まで知っておる。自転車で朝晩北京の街を歩いておつた。そんなことがあって、ただやるなら日本だけでやってくれ。このグルーブの意志は決まったばかりだから、いま直ちに変えるわけにはいかん。中国は、もっと人権問題、人間の自由に目覚めて、共通のテーブルができて、価値観を共に話し合い、政策協調ができるようにならなければいかん。ボイス・オブ・アメリカの放送をごちやごちやしたのはどういうことだ。方励之といったか、政治犯を捕まえたということもあるし、いろいろ目に余ることもある。けれども隣の国として見るに忍びないから、アジアの安定のためにやるといふなら、日本だけでやれ、その代わりあまり急激に、滞っていたものを一挙にやってはいかんから、徐々に、消化不良を起こさないようにやってくれ」ということだった。

伊藤 黙認しよう、ということですね。

海部 そうです。結局、結論はそうなんですが、僕が帰っていくと大蔵省が喜ぶから、「おい、あれは全部出さんでもいいぞ。三回に分けて、三・二・五ぐらいの割合で出せよ」と言ったら、「三・三・三では駄目ですか」と言うから、「そんなことはどっちでも

いいけれど、とにかく第一回目は半分以下で、急激にやっつけてはいかんというから、出して、その代わり、条件を厳しくつけようじゃないか」と言った。あの頃、たしか中国は近隣のいろいろな国に援助しておった。

伊藤　そうです。あれは援助国なんです。

海部　だから、それが目に余るときは、こちらは考えさせてもらう。

伊藤　直接日本がそこに出したらいいんですからね。

海部　やったらいいんだ。それから中国の国内では、あの頃まだ環境問題はこんなにひどく厳しくなかつたけれど、しかしサミットの場でも、「地球から緑がなくなる」とコールはワーワー言うし、地球環境を守らなければならん、人類の未来はそれが要るんだ、ということを見ながら言うときでした。だから、「環境案件に絞って出してもらったら、それは世界の目指す方向とも近いように思うから、それでやっていこうと思う。だから始めるけれど、アメリカが言うように、一挙に全部出して消化不良を起こしてもらうようなことはしない。けれども再開しないで中国を孤立させるとアジアと太平洋のためによくないとわれわれはみんな思っておるから、日本の立場に対しては理解を示して欲しい」と言ったわけだ。

伊藤　そしていよいよ、イラク軍がクウェートに侵攻するのが八月二日なんですね。

海部　八月はちょうど軽井沢に研修会の講師に呼ばれて行っていました。

伊藤　そこから湾岸問題までこれからワツとあるので、そこはまとめて次回お話しいただくことにしたいと思います。先生もお忙しいと思いますが、よろしく願います。ありがとうございます。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 29 回

海部内閣V (1990~1991)

【2004年5月21日 (金) 15:30~17:30】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

楠 精一郎 (東洋英和女学院大学教授)

佐道 明広 (中京大学助教授)

[記録、編集] 丹羽 清隆

(2004年5月21日)

今回は、湾岸戦争時のお話を中心にお願います。

1. 1990年8月2日、イラク軍がクウェートを武力制圧します。先生は軽井沢におられたとのことですが、この一報はどのようにお聞きになりましたか。またお聞きになった直後の印象などはいかがでしたか。事前情報などはなかったのでしょうか。
2. 日本政府はいち早くイラクに対する経済制裁を決定するなど、かなり早い対応を示しました。この問題について内閣では当初どのような見通しにたって、どのような議論が行われたのでしょうか。
3. 8月18日、イラクは同国内の外国人を拘束するとともに、24日には在クウェートの日・米・英の大使館を包囲しました。在留邦人保護・大使館保護という戦後の日本が経験したことがない事態が生じたわけですが、これにはどのように対応しようとされたのでしょうか。
4. こうした中で日本政府もイラク問題への支援策を打ち出します。8月29日には民間航空機、船舶の借り上げによる食料、医療品等の輸送の決定。翌30日には多国籍軍への10億ドルの資金協力を決定します。民間航空機、船舶を使用することに決定した経緯、それから資金協力10億ドル決定の経緯についてお願いします。
5. 上の決定をした直後、9月7日に米国のブレイディ財務長官が来日し、先生はじめ中山外相、橋本蔵相と会談します。その後、日本は多国籍軍への10億ドルの追加支援と、紛争周辺国への20億ドルの経済支援を決定します。この間の米国との調整と追加支援決定の経緯などお願いします。
6. 結局、9月段階で40億ドルという巨額の支援を行うことになったわけですが、40億ドルという金額の根拠、ならびにイラク支援をめぐる当時の党内や政府の意見はどのようなものだったのでしょうか。党内では積極貢献を主張する小沢幹事長や西岡総務会長と、ハト派の河野外交調査会長などはかなり意見の相違があったと伝えられています。
7. このころには、資金協力だけでなく人的貢献の問題も本格的に検討されています。それには米国からの強い要請もあったと伝えられていますが、先生とブッシュ大統領は頻りに電話会談もしておられますがこの点についてブッシュ大統領はどのようなことを言っておられたのでしょうか。
8. 上の質問と関連しますが、先生は9月29日、ニューヨークでブッシュ大統領と会談されました。このあと自衛隊の海外出動に先生も肯定的になられたという見方もありますが、この点はいかがですか。
9. 自衛隊の派遣を前提とした国連平和協力が立案されます。しかし、自衛隊員の身分をどうするかで、一時自衛隊の籍をはなれるべきだとする外務省と、身分をのこしたままでという防衛庁で意見が対立します。さらに法制局の工藤長官も厳格な法解釈であったようです。先生はどのようなご意見でしたか。

10. 国連平和協力法案は10月16日に国会に提出され、審議に入りました。法案作成をめぐる政府内での意見対立も影響し、野党の厳しい反対にあつて法案は結局11月8日に廃案になりました。法案提出前は自民党内にも反発があつたようですが、法案提出から廃案にいたる経緯についてお願いします。
11. 国連平和協力法案の廃案で、当面、人的貢献の道は閉ざされたわけですが、政府、そして先生はこの点についてはどのような打開策を考えておられたのでしょうか。また、米国の反応はいかがだったのでしょうか。
12. 91年1月17日、多国籍軍はイラクを攻撃し、湾岸戦争が始まりました。戦争状態に入るかどうか、あるいはいつ入るかについての情報はどの程度入っていたのでしょうか。また、戦闘開始3時間後に先生は記者会見され、被災民の移送を民間航空会社に要請するとともに自衛隊機の使用も検討すると述べられました。自衛隊機派遣をこのタイミングで述べられたということは、事前に検討されていた結果だと思えますが、この問題はいつごろから、どのように検討されていたのでしょうか。
13. 自衛隊機派遣については、自衛隊法の改正という正攻法でいくか、政令の新設でおこなうかという問題がおき、結局自衛隊機の派遣は行われませんでした。この問題でも、自民党内、法制局、防衛庁などで意見が割れたようですが、先生はどのようなお考えだったのでしょうか。
14. 戦闘開始後の24日、多国籍軍に対する90億ドルの追加資金協力を発表されました。これまで40億ドルだったのが90億ドルですから、相当な金額です。なぜ、どのように90億ドルは決定されたのでしょうか。

※今回は以上のような点についてお願いします。

■現在の政局から（国民年金未納問題）

伊藤 ……いまもお国の一大事ですね。

海部 大掃除をやりますか、徹底的な大掃除を。愛知県も大変なんですよ、今度「七月の参議院選挙には自民党候補を」二人立てますからね。僕は議論としては、「選択の自由を選挙民、有権者に与えたほうがいいし、いつまでも与党でありたいと思っっているいろいろな勉強、政策をやっているなら、三人定員があるところだから、三人区では二人当選を目指して頑張るべきだ」と言っているんだ。結果は有権者が決めることだけれどね。

伊藤 いまのところ、勢いがいいでしょう。

海部 いまは勢いがいいんですよ。しかも私の愛知県は、西の空を眺むれば妖雲あり、ですからね。敵に虚あるときは乗じて討つべし、というのが古来中国の作戦の基本です。

伊藤 このあいだじゅうの民主党のゴタゴタは、ずいぶん利するところがあるんじゃないですか。

海部 あるんですね。もともと、こちらにも同じような同類がちらほらおるけれど、特に愛知県に関していっても、佐藤観樹なんていう「旧社会党」副委員長は、俺とやれないから選挙区まで替わって、江崎鉄磨を落としておいて、それがああいうことでしょう。

それから自由党のほうは、新進党で私どもと一緒にやっておって「自由党↓民主党と」替わっていった都築謙というのが、連座制の可能性が非常に強い。最高責任者二人が有罪を食いましたからね。手続を取るなあ、といつてやったら、もうよくないことはやりませうという。そういうときは敵に虚ありですからね。

伊藤 党首がああいうふうになる「菅直人に年金未納が発覚」ということは、その党にとって大変なことですね。

海部 「だんご三兄弟」をもじって「未納三兄弟」なんて言っ

「中川、麻生、石破の三閣僚の年金未納をとらえて、菅直人がそう呼んでいた」、はしゃいでおいたら、なに、自分がその未納の一人であったなんていうのは、笑い話にもなりませんね。菅さんはいかんわ。

伊藤 あんなことを言わなければよかったのに。ああいうところは脇が甘いというのか。

海部 そういうことでしょうね。

伊藤 市民運動上がり、というところがあるんでしょうね。

海部 市民運動のリーダーは、ああいったことでは、そう脇を締めていなくても、相手のあらを探して上手に攻撃していればそれでよかったですね。

伊藤 自分が狙撃されるほうになるとは思わないで、やるでしょう。

海部 攻めること専門の力士は防衛が弱いんですよ。朝青龍と同じことで、ガチッと食い止められたら、もうそれで負けちゃうでしょう。そんなことを言っておって、また選挙の結果がどうなるか、油断は禁物です（笑い）。

伊藤 そうですね。油断したときが一番危ないですから。

海部 危ないんです。しかも攻める材料のあるときだから、よけい謙虚になつてやれよ、といっておる。

伊藤 しかし実際にはどんだん攻めないといけないでしょう。謙虚は謙虚だけれど、攻めなければならぬ（笑い）。

■湾岸戦争1（イラクのクウェート侵攻）

伊藤 一九九〇年八月二日に、イラク軍がクウェートを武力制圧するという事態が起こります。この前の先生のお話では、軽井沢におられたということでしたが。

海部 それは「手帳を」見たんですが、日本商工会議所だな。

伊藤 それはその年の手帳ですか。

海部 そう、僕は全部とってあるんだ。これは平成二年の手帳です。それでイラクのクウェート侵攻が八月二日。私は軽井沢・鹿島ノ森の商工会議所全国研修会の会場に、前から行く約束をしてあったものですからね。全国から人が集まりますから、そこに行つて演説をやつて、また質問を聞いておつたんです。このころ、わがほうとしてもいろいろあつたものですから、四日間いちおう許可をもらつて行つていたんですが、休みを切り上げて、三日に帰つてきたわけがあります。

伊藤 ということは、その前からそういう動きがあつたんですか。

海部 事前にいろいろなことを聞いておりましたが、必ずしもこの二日に起こるということではなかった。「近く」という言い方だった。向こうの動きをいろいろキャッチしている人たちから、サウジアラビアの北の方の動きがおかしいとか、イラクの軍が動いておるとか、いろいろな話がありました。

そしてもう一つは、直接サウジの皇太子から聞いた話です。サウジに対してサダム・フセインは、「わかつておる、武力でクウェートを攻略することはしない、クウェートは侵さない」ということを言葉の上では約束しておつた。ところが、さあとなつたら、やり出した。犬でも三日飼えば恩を忘れないし、鶏だつて一声鳴けばしばらくは黙っているのに、そういうことを言つていたから、「サウジの皇太子はサダムを」すぐに電話で探したんです。『おまえはこのあいだここに来て、そういうことを言つたばかりじゃないか』と言おうと思つて探したが、電話にはとうとう出なかつた。だからやるんだな、と思つたというのが、私と対談したサウジの皇太子の言い分です。

伊藤 軽井沢に行つておられるときに、情報は誰がどうやつてもたらずんですか。

海部 電話です。

伊藤 どこからですか。

海部 外務大臣からです。中山太郎。

伊藤 「そういう事態が起きましたので、すぐお帰りください」ということですか。

海部 いや、そんな言い方ではないけれど、内閣の情報調査室も、非常に風雲急を告げておると言っている。イラクの情報はあるし、ブッシュのほうからもアメリカの情報をいろいろ言つてきたんですね。聞いてみると、これは差し止めようがない、それでできるだけ協力して圧力をかけて欲しい、というようなことだったんですね。伊藤 攻めてこないように、ですか。

海部 いやいや、手を出すと損するよということをわかりやすくいつて抑えてくれんか、ということだ。その頃はまだ収まると思つておつたんでしょうね。サウジアラビアらの情報でも、「ここに来たサダム本人に、『クウェート「侵攻」をやるな』と言つたら、『やりません』と言つていつた。だからそういうふうになれわれは理解しておる」と言つていたわけですからね。サウジは日本とは逆の、イラクに対する湾岸協力基金の大スポンサーですから。だからそこに行つて、まさか嘘は言わんだらう。嘘を言つても、すぐに絞められちゃうぞというニュアンスで、「サウジは」相当自信を持つておりましたね。

伊藤 そうですか。サウジはお金持ちの国ですからね。

海部 それでずいぶん出しておつたんです。それで侵攻はないと言つておつたのに、侵攻したんですね。その前、アメリカやいろいろなどころの情報を取ると、イラクは石油のパイプラインを下から掘つていつて、クウェートの地下油田から吸い上げておつた。サウジとクウェートの国境のところに入れて、吸い上げておつたことがわかつておつた。だから相当やつておつたな、という話もありました。だからやらない、というのは本当だと思つていたら、やつたわけです。さあ、これはいけないから、わがほうも考えろといった。

ブッシュから四日に僕のところへ電話が入つて「いろいろやるから、イラクに対する措置で日本も協力して欲しい」という。「協力とは何だ」といつたら、「対イラクの経済制裁だ。石油については、

こちらは喉から手が出るぐらい欲しいけれど、あれはストップしてくれ」というような具体的な話がありましたね。

「だからそのときは、こちらとしては、事ここに至ったら、いやしくも「クウェートは」国連加盟の独立国ですから、そしてあのころ、民主主義国かどうかは別にして、一応民主的な国だとわれわれは理解していましたから、それを力でつぶすのはけしからんことだということ、国連決議もあのころは簡単にできました。アメリカも、こんなにちほど、おれがやるんだ、黙ってみんな応援してくれ、ということではなくて、国連決議があればあったほうがいいので、決議をとるよう努力をしておったことも間違いない。当時、日本の国連駐在大使が、朝も昼も夜もホットラインみたいなもので、こうです、ああですと各国の情勢を報告してきました。」

佐道 先生に直接ですか。

海部 「僕が出られる限り出るから、おれに直接つなげ」と言った。なぜそういうことを言ったかという、そのちよつと前に、サダム・フセインの意を受けて、ラマダンという副首相が中国か香港かどこかに来て、「用が済んだから日本に寄りた、海部総理に直接お目にかかって話したい大事な案件があるんだ」と外務省に頼んできたんです。それを外務省がおれに取り次がなかったんだ。取り次がないことが、しばらく経つてからわかってきた。というのは、ラマダンのほうは、三木さんが行ったときに向こうで知り合った顔つなぎができておる。そこで三木先生に頼めば海部総理にはすぐ通じるであろうということ、三木夫人を呼び出したんだ。向こうもツボを心得ておるわ。そして三木夫人から僕のところへすぐ電話がかかってきて、「海部さん、こういう電話がかかってきたけれど、外務省からあなた、話を聞いていますか」と言うから、「いや、おれは外務省どころか、どこからも聞いてないし、ラマダンが来ておるといふことも知らないけれど、来て会いたがったら、おれに直接言えばいいじゃないか」と言ったら、いや直接は言う方法がないから、外務省を通じてやったんだけど、どうも外務省はそれをつな

がなかった。

伊藤 その話は聞いていないですね。

海部 それは言わないほうがいいと思つて、あの時は言わなかったんだらう。すぐに電話をかけた。あの頃は、さる貴きお方のお父様にあたる高官が僕について回つて歩く係だった。当時はもう外務審議官になっていましたね。外務次官になる前だ。「こういう話を僕のところにしてきた人があるけれど、どうなんだ。そのルートは信頼できるルートだ。向こうにいる、あなたの家来の、向こうの大使の奥さんが、三木夫人のところへ昔からの顔つなぎだから、直接電話して、泣きついてきたんだ。『いま「日本に」おつて、もうじき帰るんだけど、帰る前にちよつとでもいいからお目にかかりたい」と言つてきたんですが、ご存知ですか』という電話が三木さんから来たんだから、これは間違いないと思う。」

おれのほうからはすぐに、現地調査しろ、と外務次官を呼んで怒つたら、外務次官は「たしかにそういうことはありましたけれど、そんなことを出先から行きがけの駄賃のように言われて、すぐに総理大臣が官邸で会つていただくというのは、僭越な、外交ルートを外れた話です。出先の大使なり、こちらだったら審議官クラスが会つて、まず粗ごなしをしなければいけません」と言うんだね。「そんなことをゴトゴト言つておらずに、官邸に寄越したらどうだ」と言つたら、「いや、それは新聞記者もうるさいし、外交交渉というものもあるし、アメリカやほかの国々が、裏で日本がこそこそ会つているのかと思う」と言うんだ。

むかしいつぱん、そういつたことで日本の外交が絞られたことがあるんだ。どこかの国と経済制裁の約束をしたときに、日本だけ秘かに、ほかのなんとかという石油の買ひ方で買ったことがわかつて、アメリカやイギリスから、それは同盟破りだというようなことで大変怒られたことがあった。怒られたというよりも、国際的不信を招いたんでしようね。それで、「そういつたことはなるべくお控えたいだきたいと思うし、来ても官邸は中に入れないでしょう」と

言う。

それで、外務省から来ている秘書官もおりますからね。だから折田「正樹」秘書官を呼んで、「白状しろ、おれは裏の裏のまで泥を吐かせて、みんな証拠を持っておるんだから、おまえまで一緒になつて嘘を言ったらいかんよ」と言ったら、「いや、私は知っておりませぬけれど、もし会っていただくと大変なことになります」という。「何が大変なんだ」と言ったら、「まあまあ大変なことですよ」という(笑い)。それは官僚流の発想だったんだな。

楠 そのラマダン副首相は、いったい何を求めて、先生にお会いになろうとしたんでしょうか。

海部 それはわからない。

伊藤 結局お会いにならなかつたんですか。

海部 会わなかつた。結局、そういうことをあれこれやっておるうちに、時間切れになって、飛んで帰って行っちゃつた。会ってやつたらよかつたと思ふだけだね。そのラマダンは、その後私が中東に行ったときに会つたんです。それは後日の話だけれどね。

楠 そのラマダンが来る来ないというのは、いつごろの話ですか。

海部 攻撃が始まるちよつと前です。

佐道 八月二日に攻撃が始まるわけですね。

海部 そうすると七月だな。僕が万座に行くちよつと前ですからね。夏休みをもらったのが「八月」一日で、前の日の「七月」三十一日に選挙制度の答申を小林「与三次」会長からもらった。「小選挙区にしる」という答申です。区割はやらんけれど、方針はこれがいい、という答申をもらつて、よしやろう、という約束もした。

伊藤 それはクウェート侵攻の前ですね。

海部 ええ、直前ですね。クウェート侵攻は日本時間の八月二日です。

伊藤 その二日に軽井沢にいらつしやつて、その日は泊まられたんですか。

海部 電話でいろいろ聞いたが、午後講演する約束をしてあつたわ

けです。商工会議所が全国から人を集めているんだし、僕も一日に向こうに着いたところですから。四日までは何もないうという見通しで、みんなと相談して行つておるわけで、よもや二日に侵攻があるとは思わなかつたが、やはり情報が甘かつたのか。誰もが、「それまではありません」と言つていたんだからね。

伊藤 それで翌日お帰りになつてきたんですか。

海部 はい、帰つてきました。スピーチを済ませて、夕方帰つてきました。

佐道 特別に先生に、いつもと違う連絡員がついてるとか、そういうことはなかつたわけですか。

海部 ありません。

佐道 通常のメンバーで行かれていたわけですね。

海部 電話で向こう「東京」から言ってくる。それを聞いて僕に伝える。

伊藤 軽井沢のようなところに行くときには、秘書官は連れて行くんですか。

海部 全部連れて行きます。秘書官は各省から出ているのを連れて行きます。外務、通産、大蔵。あの頃は審議官も来ました。

佐道 小和田「恒」審議官と一緒に行かれていたんですか。

海部 はい。そして絶えず電話連絡をとりながら。情勢は相当に煮え詰まつておつたものですからね。

■湾岸戦争2 (経済制裁の決定)

伊藤 結局、日本政府の一番最初の行動は、経済制裁になるわけですか。

海部 はい、そうです。対イラク経済制裁を五日の日曜日に決定したんです。

伊藤 日曜日に閣議をやつたんですか。

海部 はい。だからそれまで大変だった。みんなにだいぶ恨まれましたね。三日の金曜日、しかも決心したのは夜でしょう。翌日は土曜日ですから、ブツシュから電話がある予告が大使館からあったので、飛んで帰ろうと思う。

それから通産次官ほか局長級が揃って来ておつて、「イラクに対する混合借款の期限が来ておつて、取れるお金もとれんじゃないか」というような泣き言を言ったから、「ここは銭金問題じゃないんだ。封鎖をやると決めたんだから、それに従ってもらいたい。国際信用というものもあるんだよ」と言った。そのときは言わなくてもよかつたかもしれないが、「だいたい通産省、おまえらの考えが甘いから、この前のときは、約束しておきながら抜け駆けみたいにくソツと行つては油を入れておつたじゃないか」と言つたんだ。それはイラク以外の国ですよ。それで国際的に問題になつたこともある。国連加盟国を武力で侵攻するような国はいかん。もうじき国連の経済制裁は決定するから、それに従つてやつてしまおう。

それで「閣僚を」全部呼び戻して、日曜日ではありましたが、朝の閣議をやつて、そこで決めたんです。朝やつて決めておかないと、当日は飛行機に乗つて広島に行かなければならん用事があつたものですから。

佐道 原爆記念日ですね。

海部 八月五日、羽田発午後五時広島行きが決まつておつたものだから、早いところ呼んで、決定をして、そして行きました。次の日（八月六日）は帰つてきて、また話が始まつたんですが、やつぱりそれを決定しておいたのは、時差の関係もあつて、国連の経済制裁決定の一日前になつたんです。

佐道 そうですね。

海部 国連でまだ決定できないうちに決めたから、あの時は駐国連大使も喜んだんだよ。「ああ、私が初めていいニュースを持ってみんなに面目を通すことができました。早々とご決定いただいてありがとうございます。どうせ決めるものなら、こうして早く決めてい

ただけると、われわれは助かるんです」ということでした。

佐道 従来だいたい日本は、少し決定が遅れがちになりますからね。海部 そう、国連ではまず最初の情報を取りにくいんですね。どうなるか。波多野「敬雄」君は比較的入り込んでおつたか、いつ決まりますよ、ということをおぼえておつた。それで連絡も来ておつた。その前日にこつちはやつてやろうということで、時差の関係もあつたが、日曜日といえども全閣僚を集めたわけだ。みんな来ましたね。中にはブツブツ文句を言う者もいた。武藤嘉文「通産大臣」なんていうのは、向こうに着いたらすぐ帰れという話で、時計を見たら、夜を徹して走らなければ間に合わんという。「おまえ、よう帰つてきたな」といった。そういうこともあつたけれど、それをして、経済制裁を決めた。

後日これが、日本がイラクに対して駄目じゃないか、同時にアメリカに対しても遅すぎるし少なすぎるではないか、という土井演説の導入部分で、「イラクに対する決定も遅かつたんじゃないか、もつと率先してやりなさい」と言う。「いや、ちよつと待つてください。あの日は確か時差の関係があつただけけれど、国連できちんと決める前に、同じ内容に近いものをこちらはやつたんだ。しかも日曜日の朝ですよ。出先に行つてホツとしておる閣僚に、みんな帰つてこいといつて、前日に緊急連絡をして、みんな呼び戻したんです。何があんたが言うように、政府はたるんでおるんですか」と言つて胸を張ることができたんですけれどね。

伊藤 それはおたかさんですか。

海部 おたかさんです。ちよつとそんな頃、人事院の勧告が朝出る、七日は人事院勧告をやらなければならんし、その事前の閣議をやらなければならん。それが済むと、貿易会議をやつて、安全保障会議をやつて、いろいろなことを決めなければ対外的な発表もできん。これは一日忙しい日でしたね。

伊藤 それは月曜ですか。

海部 はい。日曜日は五時に羽田から広島に行くんですから、四時

には官邸を出ています。朝集めて、経済制裁をきちんと決定するまでが日曜日の仕事だったんです。

伊藤 それを具体化していくということですね。

海部 はい。意外や通産省が渋いことを言いました、「せっかくの混合借款の期限が来てるのに、みんな結局制裁をかけるとパーになる」という。「そんな銭金の話じゃないから、そこはグツと頑張つて踏みこたえろ」と言ったんだけど、局長どもがみんな揃つて来て、「なんとか思い返してもらいたい、逆に国益に反します」というようなことを、経済官庁らしくいろいろ言つて、大議論になったことを覚えております。

このときは小沢「一郎」が幹事長で、西岡「武夫」が総務会長でございましたから、その二人も呼んでつき合わせておいて、小沢と西岡に、「通産がゴトゴト言つておるが、あれを抑えてこい。もうこれ以上ガタガタ言つたつて駄目だ」といった。そうやって、党のほうも初めから共同謀議の一員に加えてありますから、事はうまくトントンと行つたわけです。間違えても「自民党をぶつぶす」なんて言いませんでしたから。党のご協力がなければ何事もできませんから（笑い）。

伊藤 ご協力する党であればいいんです（笑い）。

■湾岸戦争3（陛下への内奏）

海部 それで広島が済んだら、長崎にも行つてくれというので、九日の長崎の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典にも初めて行きました。総理大臣として初めて長崎にも行きました。

伊藤 日々、結構忙しいですね。

海部 ずいぶん忙しいんです。そして十二日は日曜日でしたが、ヤイター農林大臣がアメリカから飛んでくるので、ぜひ会ったほうがいいという。

十三日の月曜日は天皇陛下に内奏ということで、陛下が十時から空けて待つておりますということだから、それじゃあ行きましようというので、行つた。自身はあまりここでは言いませんが、いろいろなことに關心をお持ちだから、それにわかるように答えると、いつもどうしても十二時を過ぎるんです。

楠 それは定例のものなんですか、それともイラクの件があつたらですか。

海部 イラクの件があつたからですが、それがなくても、月に一回か、少なくとも二ヶ月に一回は、ぜひ世界の情勢と国内の問題について総理の話を直接聞きたい、ということでしたから、それで行つたんです。

伊藤 そういうことは誰が連絡してくるんですか。

海部 宮内庁です。

楠 そういうとき、陛下に内奏されるときには直立不動でやるんですか。

伊藤 椅子を賜るんでしょう？

海部 そうです。失礼しますとか言つて、座り込んじゃつてさ。

伊藤 場所はどこですか。

海部 忘れたな。皇居の中であることは間違いありません。入つていつて左側に池が見える部屋だ。親任式なんかの閣僚待合室に使われる部屋ですね。

伊藤 かなり熱心にいろいろなことをお聞きになるんですか。

海部 いろいろなお聞きになる。一言で言うと、日頃お暇な時間もずいぶんあるから、内外の目に着けられるものは全部目を通して、疑問に思つたことは、これはどうだろうか、というようなことを思われるんですね。

伊藤 そうすると、必ずしも総理だけではなくて、いろいろな大臣にお聞きになることもあるんですか。

海部 一般の大臣が行くことはあまりないですね。陛下が直接そういうことを聞かれるのは、政治のことに関しては――。僕は議院

運営委員長の時に議長と一緒に呼ばれて行ったことが何回かあるんです。そういうときに議長は、「副議長と議運委員長の国会の三役でおじやましたいと思ひますが」ということを逆に問い合はせると、「かまわん、どうぞ」ということになつて、何回か行ったことがあります。

佐道 総理として行かれるときは、陛下と総理の対一になるわけですか。

海部 原則としてそうです。

伊藤 侍従か何かはいませんか。

海部 侍従もいない。その代わり、こちらでも守らなければならんことあるので、陛下のほうもそれは意識して、失言はせんように話されるけれど、危ない質問もときどきはあるんだ。けれどそれは、ちよつとね。いま世をにぎわしているような種類のことではないんです。皇太子はもつと氣をつける、立場をわきまえろ、なんていうことはまったくあの頃はありせんからね。

佐道 質問の内容は、事前に知らされないわけですね。

海部 知らされません。何が飛び出してくるかわからない。

佐道 国会と違つて――。

海部 何もないんだ。

伊藤 国会の答弁よりも面倒だな、これは（笑い）。

海部 それから、陛下のお耳に内外の諸問題を入れているのは、宮内庁の長官か、外務省から入っている侍従長だ。侍従長というのは、だいたい各省の局長を終わつたのが行つておりますから、さうとう細かいことまでご下問には答えられる。だから「陛下は」いろいろなことを知つていらつしやるわ。

■湾岸戦争4（貢献策第一弾・十億ドル提出）

伊藤 まだイラクでの動きはそれほどではないですね。

海部 まだそこまでは緊迫していない。

伊藤 クウェートの武力制圧は、あつと言う間にやつたわけですね。

海部 あつと言う間にやつてしまいましたし、そんなにあれだとは思ひませんでした。あつと言う間に終わつて、死傷者も少なく済んでよかつたなと思つて、ブッシュに電話して、「あなたの指導力で米側の犠牲は最小限でほとんど出ていない」と言つた。被弾した飛行機が一機か二機あつたんじやないですか。

そして、ブッシュから金を出してもらいたいという具体的な話があつたのは「いつだったか」。電話の時間までは「手帳に」書いてないからな。マルタの首相が来たときかな、その前後ですから、月曜日か火曜日頃です。

伊藤 それはホットラインですか。

海部 はい。そして、「いま一番困つている問題はシーリフトとエアリフトだ」というようなことを最初に言ひましたが、「それにはいろいろこちらもあるんだ」と答えました。それからとりあえず、八月二十九日に十億ドルの第一次の拠出金の決定をしたんですね。大蔵大臣がどうと言ひました。橋本龍太郎だ。「総理、いま予備費がないんです」という。「いくらある？」と聞いたら、

「二十億ドルですけれど、全部出せと言われたら困る。ぎりぎりの限度、十億ドルならすぐにもお出しできます」という。

伊藤 それをどこに拠出するわけですか。

海部 これは、湾岸協力基金というのをつくつたんだ。あの時サウジの大使をやつていた恩田「宗」君を議長にして、産油国の関係国も入れて、湾岸協力基金をつくつて、そこに出す。拠出国として日本の意向も十分踏まえて欲しいということ、日本の大使を議長にしたんですね。この恩田君に言つておいたことは、「武器弾薬にはなるべく使つてもらつたら困るんだ」ということだった。しかし向こうは使ひ道は言わないだろう。だから僕も国会で答えるときには「協力基金の議長を通じて、拠出国日本の意向は具体的に希望を述べさせるようにする。だから直接の武力行使に影響すると言われた

ようなことには使わんようにしたい」といった。日本の意志は認められるわけですね。抛出国は日本ですから。

そうしたら今度はブッシュから「トシキ、ありがとう。まず十億ドル出してもらったことは聞いたけれど、周辺国の援助に資金が少し要るんだ。アメリカはちよつとそれはやりにくいから、日本で引き受けてくれんか」と言ってくる。「周辺国援助といっても、それはどこどこの話をしておるんですか」と言ったら、「エジプトとヨルダンとトルコの三ヶ国、これが協力国だけれど、制裁をかけたがために、イラクから油も来ないし、窮乏しておる。この窮乏の度合をできるだけ日本として協力してやってもらいたい」というきわめて率直な要請がありました。それで結局、湾岸周辺国支援という名目を立てた。「九月七日にブレイデイを行かせるから、ブレイデイに詳しいことは説明させる」と言って、そして来たんですね。そしてそこで決定をして、出している。

伊藤 いくら出したんですか。

海部 二十億ドル。

伊藤 さっきの話だと、そもそも二十億ドルしか予備費がないわけですね。

海部 最初の予備費はないから出せんと言っておったんだけど、そこで二十億ドル出すとともに、「それでは戦争が長引くと一日いくら要る」とか何とかいって計算して、もう一声頼むというやつで、そこで結局、一声十億ドルの追加を決めて、三十億ドルにしたんです。

伊藤 予備費はもうないじゃないですか。

海部 けれど周辺国に渡すのは、この二十億ドルを三つの国に分けるということ、ブレイデイには言って、帰したんです。そしていまのお話の通り、お金がないから補正予算で手当をしなければならぬ。だから「日本は予算を議決しなければ出せないから」と言っていて、議会にそれを諮ったわけです。

もうその頃になると、社会党のほうもそんなに横になってガタガ

タゴトゴト言わずに、いいにくい話だが、「やるならばそっちの責任で、音を立てないように静かに出せ。その代わり議場では絵になるように反対だ」と言うので、「それは仕方がない」というような裏のやり取りまでやった。そのころ山口鶴男とか昔の議運の仲間が中に入って一所懸命、「それはそうだな」とかいつて、「これをやらんと、せつかく努力しておることが元も子もなくなるぞ」ということを話して、そして決めたんですね。

それと同時に大事なことは、それだけでは済みませんから、ほかに九十億ドルもあります。そこで補正予算を出すときには、いくらの規模で出すかというときに、ドルで百三十億ドルになるように計算して出したんだ。あれは当時のお金で円換算すると、十一兆二千億円ちよつとですね。

これが後日、足らんといい出されたんだ。「われわれは日本が国際的に公約してくれた百三十億ドルをもらっておらん」という。三十億ドルは周辺国援助ということでもらってある。そうすると、九十億ドル分も出ておらんじゃないか。円高差益が六、七億ドルになったんですね。アメリカが足りないと言ったんだ。それは知恵を絞って出してやらなければいかんけれど、一事不再議とかいう難しい屁理屈が法制局にあつて、「いったんお決めになったことはいけませんから、ほかの項目にしてください」という。何に使うかという使途の根拠を明らかにせよという議論がたくさんありましたから、周辺国支援というふうな項目を分けてあつたし、九十億ドルのほうについてはこうだとなつていた。

結局その差額に匹敵するような等しい分を、日々変動がありませんから、「この日現在で固定するから、この分だけ追加で予算を取って支出するが、それ以上はたとえどう変わつても言わんで欲しい。逆に日本がプラスになるように為替差損がアメリカに行くようになって、損は甘受しなければいかんよ。けれど今日決めた今日の日程でこれを払うから」という約束をした。平和維持活動に対する協力ではもう出せませんから、何か知恵を絞って、湾岸周辺国の被害

復旧とかいう名目をつけて、別立ての予算を組んで、足りなかった分をアメリカ側が納得するように出したんですね。

そうすると、湾岸協力基金を通じてやっていきますから、すぐに世界中が知るわけです。こつちももらいたい、こつちももらいたいという国が出てくるわけです。その最たるものが、今度アメリカと争ったフランスと、一緒になってやったイギリスです。フランスもイギリスも、「湾岸開戦の時にすぐに空軍を出動させて参加した。わがほうも国連の平和回復活動に具体的に協力した。アメリカだけと違うのではなくて、あの湾岸基金はイギリスにもフランスにも払うようにして欲しい」という。これはいちいち、ここにおる大使が、「出してくれ」と言つて両方とも来るわけです。「じゃあ、あんなのところは具体的に何にどれぐらい使ったんだ」と聞くと、「それは通告されておらんから言わないけれど、そういう金額の要求ではなくて、われわれも仲間に入れて欲しい」という。

フランスとイギリスの場合は、実際に参加して爆撃機や戦闘機も出していますし、それがわかっているからいいんだけど、どこだったかな、バングラデシュとか、人材、兵隊を出してお金を使った国が途上国の中にあるんですね。そこもくれという。けれどもそれは話をつけた。「何に要るんだ？」と言つたら、「引き揚げるお金がかかる、船賃だ」と言うから、「それは別で数えた方が処理しやすいから、ちよつと待つておれ、ちゃんと請求書をもつてらっしゃい」といった。

そうして二手に分けて、やりました。いくら出したか正確に覚えておらんけれど、両国とも一桁の億ドルです。それでもいいかと言つたら、いいという。もう分けちゃつて、ないからと言つてね。それまではだいたいアメリカだけに出した、という取られ方をしておるし、またそうでないと、日本の国民にも、政府が今日まで説明してきたことが嘘になるといかん。しかもこの九十億ドルというのは、当時たしか記憶に誤りがなければ、法人税を二%加算して集めたお金だ。ガソリン税を四〇%臨時にプラスして集めたお金だ。「日本

国民のあらゆる階層が協力したお金だから、これはそう簡単にはいかなないから理解して欲しい」といった。「だからわれわれも、これだけでもらなければ、なんていうことはこれっぽっちも言つておらん」ということだ。本来ならば、国連が決めて、国連の決議に従つて行くんだから、そういうお金は国連が払うべきなんです。そのためにPKOの活動資金も別口で出しているわけです。けれども直接来て、直接出せというから。

だからこのあいだうち、湾岸の終わりの頃に、世界政治フォーラムのときにあまりアメリカがかわいそうだったから、「いま大きな声を出しておるフランスだつて、いまは一緒になつてやって来てときどき迷惑を受けておる友軍、同盟軍のイギリスだつて、あの時は一緒にやつて、われわれは感謝しているんだ。感謝しているところだ。言うだけではなくて、あの時も両国の大使閣下にはそのことのお礼も言つて、アメリカ並みとは言わんけれど、額は少なかつたが、日本は国民にそうやつて税金で集めたお金を回しておるんだ。あのとき、税金で集めたお金で国連決議に協力した国が一つでもありませんか。国民のガソリン税を上げてまで払った国がありましたか。なかつたでしょう。それをもつてわかつてもらいたい」というようなことを言つたんだ。そうしたらアメリカは喜んで「よく言つてくれました、ありがとう」と言つていた。

そんなことがあつて、九十億ドル問題について外務省は、「大蔵省はサインをする前に、円建てかドル建てか、ぐらいは明確に話をつけて、その日の値段でどれだけ支援するんだということをきちんと書き込んで決めるのが常識じゃないですか。そんな、常に変わるものを基礎に計算して胸を叩いて、終わつてから数えてみたら足りなくなつた、今日のあれがおいしいというのは大蔵省が悪いんです」と言い出した。それで大蔵大臣と外務大臣を呼んで、官邸で昼飯を一緒に食べながら、「そういつた言い合ひはやめろ、みつともない」といった。あの時はだいたい仲が悪くて、両方とも一歩も退か

伊藤 その補正予算を組んだのはいつなんですか。

佐道 九十億ドルは翌年の話ですね。

海部 そうです。予算が通ったらという条件だけれど、予算は必ず通すし、また通るから、といった。

佐道 戦闘が始まったあとの話ですね。

海部 それはそうです。

伊藤 最初の十億ドルの後、周辺国への、というのは約束しただけですか。

佐道 九月で合計三十億ドルですね。

海部 約束しただけです。

伊藤 現実には出してないわけですね。

海部 現金がない、というんだもの。ない袖は振れません。けれどもお約束した以上、われわれは国民を説得して出してもらいます。

伊藤 それは議会で補正予算が通った後でやったんですね。

海部 通ったら処置します、と言いました。

■湾岸戦争5 (在留邦人の保護)

伊藤 外国人を拘束するとか、日本の大使館も含めて、クウェートの大使館を包囲するというをやったでしょう。イラク及びクウェートにいた日本人たちの安否の問題というのが出てきたんじゃないですか。

海部 そうです、人質に取られたところもある。「人間の盾」作戦というのをやられてね。

伊藤 在留邦人の保護というのは初めてのことですね。

海部 そうです。そんなときには、ウルトラ・コンサバティブのほうが出てきて、「それならば在留邦人の生命財産の保護という大義名分があるから、それこそ堂々と自衛隊が出て行っていいじゃないか」という極端な意見を言った人もある。それは無理だ、無茶だと

いうような話だ。アメリカに、そういうことにならんように、早くそのへんの確保をしるといっても、なかなかうまく行きませんでした。しかしあの時はどういうわけか、一人も犠牲者が出なかったんだ。

そしてあの頃、例の中曽根さんが、「わしはサダム・フセインとは口がきけるから、行って取り返してくる」ぐらいのことを言ってお出かけるんです。そしてどこかの商社の駐在員が、調子のいいことを言ったりやったりしたんだ。そしてその商社の駐在員だけ早い時期に釈放されたんです。そんなことになるかと右へ倣えだから、

「各商社とも向こうの甘い話には乗ってくれない。それが国のためだ、毅然たる姿勢で、君ら「イラク」のやっていることは間違っておるから、早く兵を退きなさいというべきだ」ということをいろいろ言っておりまして。あのころ、片倉「邦雄」君という大使がイラクにおって、これが相当のサムライであった。

佐道 イラクの大使館との連絡は大丈夫だったわけですか。

海部 いや、そのときは不幸な話だけれど、駐クウェート大使の黒川「剛」君がいなかったんだ。休暇をとってどこかに行っておって、ヨーロッパにいたんだ。だからヨーロッパを通じて電話をかけて、おまえのところをどうしろと言っても駄目だから、片倉大使が一手に引き受けたわけです。

伊藤 連絡はついているわけですね。

海部 はい。

伊藤 ただ、包囲されているわけですね。

海部 包囲されているといっても、侵入するぞという包囲ではないし、恐怖を与えるような包囲ではなかったと思います。だからあの時の安全だけは、われわれは確信しておった。ただ、「人間の盾」作戦というのはもうちよつと後ですね。

佐道 在留邦人が一箇所にまとめられたんですね。クウェートには大使がいらっしゃらないわけですね。

海部 だから代理大使なんだ。

伊藤 一応クウェートの大使館とも連絡はついているわけですか。
海部 はい、連絡はついております。そして人が何十人か来てお
るから、という。

伊藤 そういうときも、大使館にはお金を送らなければならないで
しょう。

海部 そうです。そういうことは、先ほど申し上げた湾岸協力基金
の議長をサウジ大使の恩田君にやらせてありますから。サウジはイ
ラクに対する最大のスポンサーですから、お小遣いをくれる近所
のおじさんの言うことはいちばん聞くだろうということで、実際それ
はそうでした。

伊藤 このときはサウジは非常に協力的だったわけですね。

海部 協力的でした。協力的ではあつたけれど、サウジというのも
面白い国で、現地に行つて、さあ今日は皇太子と会谈するといつて
も、時間が何時からになるのかわかりません。それで、ここで待つ
ているわいといつてホテルで待っていると、向こうからご連絡しま
すといいながら、待てど暮らせど連絡がないから催促してみると、
いやいや今日中に必ずご連絡しますという。真夜中の十一時近くな
つてから、ようやくお目にかかりたいからという。それで向こうの
宮殿まで行つたんです。サウジはそういうことがへいちやらなどこ
ろですから。むしろそのほうが涼しくなつて、会つて話すのはいい
らしいですね。

■湾岸戦争6 (貢献策第二弾・物資輸送)

伊藤 八月二十九日のところは「手帳では」どうなっていますか。

海部 世界子供サミットが始まる。だからニューヨークに飛んでい
た。その前日にニューヨーク大学でスピーチをやつて、ニューヨー
ク大学の法学博士になつたんです。そのときに、何を言つてもいい
かといつたら、何を言つてもいいというから、「いまはサダム・フ

セインのことでみんな手を焼いているけれど、誰がいつたいあんな
サダムを育てたのか。言いにくいことを言うけれど、アメリカもイ
ギリスもフランスも、国連のP5の国は、寄つてたかつてサダム・
フセインを育てることによつて、バランス・オブ・パワーの力関係
の中で、アメリカや民主主義国の利益になる政体を守つていこうと
育てたのではないか。だから必要以上に武器が集まつているんじや
ないか。だからサダム・フセインが手が着けられんような鬼子に育
つてしまつたのではないか。私はそのことをここで率直に申し上げ
ておく」と言つたんです。

伊藤 イランとの対抗ということもあつたんでしようね。

海部 イラクを強くしておかないと、イランにやられちゃうし、そ
れのみならず、リビアなんかの睨みも利かせておく必要があつたん
じやないですか。

佐道 先生がアメリカにいらつしやつたのは、八月ではなく、九月
二十九日ではないですか。

海部 アメリカに行つたのは、九月二十八日だ。

伊藤 八月二十八日はいかがですか。

海部 八月二十八日は閣議を開いて、直後に安全保障会議をやつて、
十億ドル支出の予備費取崩しを内閣権限で決定して、政府・与党首
脳会議に報告して了承をとつて、翌日朝、記者会見前にブッシュに
連絡して、「あんたも何回も催促してきたけれど、やるぞ」と言つ
たら、そこで「周辺国も頼むよ」と言われて、電話が高く付いたん
だな。

伊藤 呼び水になつたんですね(笑い)。

海部 余計高くなつたんだけど、それは仕方がない。翌三十日は、
朝七時に外務省と大蔵省の事務方を全部集めて、「こういうわけだ
から、周辺国援助を言われたつて困るから」と言つたら、予算をつ
くることを義務づけるというのかな。あのとき、予備費がないとき
には、予備費と同じように内閣の決定・判断で自由に使えるお金が
何かあるんだな。閣議で決定しなくてもいい。大蔵省が政令事項と

同じぐらいのことで決めて、その代わりそれは義務を負うから、きちんと予算をつくって出す義務を国が負うわけです。確かそういう手続だったと思います。細かいことや正式の名前は忘れたけれど、そういうやり取りがあつて、本当にそれをするならば、それはいいじゃないかということでした。

「どうせ出さなければならんものだから、気持ちよく出そう」と言ったら、「予算が通つてからだ。予算が通るまではあかん」と言つたほうがいい」というのがおつた。加藤六月政調会長だ。

伊藤 八月二十九日に、民間航空機と船舶を借り上げて、食料、医薬品、医療品などを輸送するということが決まつたという記録がありますが、そうでしょうか。

海部 それを決めたのはもうちよつと前ですね。それはたしか貢献策の第二弾、追加として発表したんだ。

伊藤 経済制裁が第一弾なんですか。

海部 貢献策の第一弾は、いまの十億ドルです。そしてしばらく経つてから、第二次の貢献策を立てた。その中に民間航空機や民間船舶を借りて物資を輸送するということがあつた。向こうにどんな物資が必要なのか聞いて、物資の調達をする。例えば四輪駆動車なんかが入っていましたね。

伊藤 それはどこに渡すものですか。

海部 それは現地における多国籍軍です。

伊藤 周辺諸国に集まつてきていた多国籍軍ですね。

海部 それは司令部がどこにあつたのか、いまは定かではないけれど。

伊藤 もうそのころ、多国籍軍は入っていたんですね。

佐道 多国籍軍はサウジを中心に入っていましたね。

海部 サウジだったね。あの頃サウジがえらく協力的だったから。

伊藤 結局、これはできたんですか。

海部 できました。そしてある程度は運びました。そのときに、運ぶからちよつと協力しろといつても、結局は日本航空とか全日空と

か、日本の国内のナショナル・フラッグは、乗員組合がうるさいから「できない」という。それで僕は運輸次官を通じて両会社に、

「物資輸送だから、爆撃して来いというんじゃないから、日常のルーティンワークの業務だと思つてやってくれんか」と言させたんだけれど、駄目なんですな。

伊藤 乗務員組合はたしか左翼組合なんだな。共産系だったかもしれない。

海部 それは共産系がおつたと思います。物資輸送すら駄目だ、医療品や食料の輸送すら駄目だという。

伊藤 結局外国の飛行機を使つたわけですか。

海部 それで飛行機は、アメリカの（佐道 エバーグリーン）エバーグリーンだ。野武士みたいな連中が操縦しておるんだ。それから、船のほうだけはそういうわけにいかないので、日本の船舶会社に、

「おまえのところもいろいろやつておるじゃないか」と言つたんだ。あの頃幸いなことに、アメリカからもらつた情報では、一日に二十隻近く、一万トンを超える船がペルシヤ湾の中にいって油を積んで出てきているんだ。「油の商売はできるのに、こちらが頼む平和回復活動はできないのか」という、写真を持って説明するやり取りがあつて、逆にそれらの資料を使って説明しました。

伊藤 船会社は協力したわけですか。

海部 会社は協力しました。船員組合が協力しなかつた。ただそれは、いまの民社系の中に船員組合出身の和田春生という議員がおつたので、和田春生を呼んで、「君は日頃から国土のようなことを言つて、自民党の右派よりもつと右寄りの話をする。春日のおやじに言つてこい、『いや、それは沮喪、沮喪』と言うに決まつておる」と言つたんだ。そうしたら最終的には、和田春生が海員組合といろいろ話をしてきて、「すまんけれど、総理からこれに電話を一本してもらつたら、いい結果が出るから」ということだった。

楠 和田春生さんは、ご自身が海員組合出身ですからね。

海部 それで海員組合の和田が指名する人のところに電話をしてい

ろいろ頼んだら、「よくわかりました、協力します」と言った。海員組合が協力しますと言わないと、船会社も労使関係がつまらんことになる。

伊藤 あそこはたしかクローズド・ショップですね。

海部 それでホツとして、第二弾の援助もできることになったんです。

■湾岸戦争7 (アメリカの要請)

伊藤 先生の手帳では、九月七日はどうなっていますか。

海部 官邸で六時からブレイデイに会いました。そしてトルコ、ヨルダン、エジプトへの周辺国支援として二十億ドル、プラス十億ドル、合計三十億ドルの追加をブレイデイに言って、ブレイデイはすぐブッシュと連絡をとって、「大変感謝しております、そういうご協力をいただいて助かります」ということだった。

伊藤 これは手形だけですね。

海部 手形だけ、口約束だけです。けれど必ずこの手形は落としますよ、という約束ですからね。官邸でブレイデイにそれを言ってから、党の全国党員研修会というのが川奈ホテルであったので、またすぐそこに飛んで行って、八日の土曜日にはそこで講演をして、講演が終わってからパーティにつき合って、帰ってきました。月曜日が内外情勢調査会でした。

伊藤 内外情勢調査会というのは、どんな会なんですか。

海部 内外情勢調査会というのは、時事通信が、毎月いくらという会費を企業人から取ってやっています。その調査会の夏の全国大会だから、人を集めてありますのでお願いしますと言われて、行っていろいろ話をしてきました。

伊藤 かなりいろいろな人がそこで講演する団体ですね。

海部 そうです。

佐道 やはりこのときは、みなさんの関心は湾岸のことに集まっているわけですね。

海部 もちろんそうです。そして最終的には協力の要請をしたわけですね。

伊藤 あれはたしか活字になっていますね。

楠 小冊子があります。

佐道 ブレイデイさんがいらっしやったときは、たしか韓国かどこから日本に連れて、日本には六時間か七時間しかないという短期間の滞在で、中山外務大臣、橋本大蔵大臣、総理にお会いになって帰るといふ日程だったと思うんですが、先ほどのお話ですと、こういう目的で、こういうことを依頼に来るといふことが、前もってわかっていたわけですか。

海部 議題まではわからないけれど、ブッシュから電話があった後で、そのブッシュの電話の背景説明のためにアメリカ大使館から来て、お願い事がございますよ、ということはある。

伊藤 じゃあ、内容はあらかじめわかっていたわけですね。

海部 わかっていた。こちらが聞きたいのは、「じゃあいつまでに終わるんだ。いくらぐらいかかっているんだ」ということだ。ブッシュもきわめて正直に、「トシキ、助けてもらわなければならぬ。軍資金が枯渇したら戦いにならない。腹が減っては戦(いくさ)ができません」という。できるだけそういう協力はする。その代わり、変な話だが、その前後にはカール・ジャクソンという補佐官、おれと顔知りでよく飛んでくるおじさんが飛んできて、「お金のことはアメリカもそう豊かではないから、日本が出してくれ。その代わり、武器弾薬とか、軍隊が出てくれという話はしないから」というような、ブッシュが直接言えないようなことを、背景説明を兼ねて、いろいろ言っていた。そして「お金をもらえば、あとはアメリカはストロング・イナフだ。まだテストしていない武器弾薬がいっぱいあるから、早く使いたいんだ。使うためにはお金も要るんだ、そのお金が残念なならない。ブッシュがあなたのところにもちよいちょ

い電話してきたのもそういうことですよ」という話でした。

佐道 具体的な金額の提示というのはどうなんでしょう。いくらぐらい欲しい、ということですが。

海部 ブレイディは初めに「周辺国支援のためには二十億ドル以上のもを出して助けてやって欲しい」といった。それはあの国が、クウェートとおかしなことになるなければ得たであろう利益をアメリカ流に大雑把に計算すると、それぐらいになるんだという。それを穴埋めしてやらないと、アメリカに協力したがためにこんな損をして、わが国は成り立たなくなるといういかんから、それはやってくれよ、ということなんです。

佐道 ブレイディさんが来るときには、アメリカの大使も一緒に来るんですか。

海部 はい、アメリカの大使がいつもついて案内してきましたね。

佐道 アマコスト大使はあちこち動き回ることでも話題になっていた方ですが、どうでしょうか。先生のところだけではなくて、いろいろなところに顔を出していたり、いろいろなことをしていたという話がありますが、そのへんの動きはどうでしたか。

海部 アマコストは本当にちよこちよこ歩いていました。おれがいちばん腹を立てたのは、土井たか子のところに行つて話し込んでおつたことだ。「何を話してきたんだ、あんたは。日本は友達だとか友人だとか言いながら、日本の総理大臣は土井たか子じゃないよ。最初の投票はたしかにあれが一番たくさん取つたかもしれないが、いまはこちらなんだから。選挙の結果私は支持されて、国会できちんと指名を受けてやっているんだ。何を勘違いしているんだ」と言ったら、「いや、そういうわけではありませんが、向こうもあれですから」と言つて、二、三回会っているんだ。

「土井たか子は駄目つたら駄目という人であつて、湾岸の協力基金へも一銭も出しちゃ駄目といつてきわめて非協力だ。アメリカ帝國主義は日本の敵だといった佐々木更三の流れを受けた正統派の社会党左派ですからね。だから氣をつけてくださいよ、そんなところ

にあんた方が喜んで行つて、耳あたりのいいことを言われたり言つたりしたらいかん。おれはそれによつてどれだけ苦労しているか」と言つてやつたんだ。

■湾岸戦争8（党内情勢と人的貢献問題）

伊藤 さつき、経済支援の問題で、党のほうをちゃんと抑えたというお話でしたが、異論はだいぶあつたんでしょうか。

海部 あつたんでしようね。あつたんだろが、直接僕のところまで、そういうことをやってはいかんと言つてきた人はほとんどいなかったですね。むしろ僕のところにいるいろいろなことを言つてきたのは、右派の強硬派のほうで、「早く自衛隊を出せよ」ということだった。あの頃からショウ・ザ・フラッグだからね。「日の丸をつけた輸送機でものを運んだらいいじゃないか、まずそこから始める」と言う人があつた。

それからもう一つは、「出すなら気前よく、もつと早く、びつくりするぐらい多く出したらどうか」というんだ。それは田中角栄の国対戦略に似通つたものですから、田中派でいちばん教育を受けた体質を持つた人々はそう言うんだ。「びつくりするぐらい出せ」と言うんだ。

金は、「おつ、重いな」といって、「札束が」立つほどでなければいかんという。代議士を呼んで、「おまえも選挙でいろいろ苦しんだらうから、持つていけ」とやるでしょう。「ありがとうございました」と言つてポケットにスツと入るようでは駄目なんだ。感謝させるためには立つほどでなければいかん。立つほどということは、少なくとも五百万はなければ立たないな。

伊藤 ポケットにスツと入れるわけにはいきませんね（笑い）。

海部 百万だったらスツと入っちゃう。それではありがたみが出ない、と言うんだ。

伊藤 小沢さんとか西岡さんはいいでしょうが、河野さんなんかはどうなんですか。

海部 河野洋平は、ちよつと変わっておりませうからね。小沢とか西岡とか、加藤六月まで入れていい。加藤六月も来て、協力的に物を言う。河野洋平は、ちよつとそれらとは肌合いが違っていましたね。伊藤 いわゆるハト派ということですね。

海部 大きく分ければそうですね。そして、「アメリカの言うことだけを聞いておつてはいけない」という。彼は親中派だと言われませんが、中国とまだ自由往来がなかった時代、ワンス・アポン・ア・タイム、はるか昔、彼が喜んで報告に来たことの第一回目は、「海部先生、中国への入り方がよくわかりました。深圳まで行って、いったん列車を降りて、歩いてなんとか橋を渡つて、向こうに入らなければならぬ」ということだった。入り方だけ覚えてきた。田川誠一なんていう良くない家庭教師がいますからね。それで意気投合して、ちよつと全体の中では変わったところがありますね。

話が飛んで申し訳ないけれど、僕らまでは、ブッシュとの特別な関係があるからかもしれないが、アメリカに「早まるな」とか、「もう一呼吸置いてから考えろ」とか、いろいろな見出しを使われるインタビューに答えたことがありました。河野洋平はそうではなくて、「アメリカは間違つておる」と言うんですね。

楠 このときの話ですか。

海部 いや、最近の話です。最近のアメリカの話です。そのときはアメリカが間違つておるとは言わないけれど、「自衛隊を出すのは反対ですよ」ということははっきり言ったな。

伊藤 人的貢献の問題は、ずいぶんいろいろ言われたんでしようね。海部 自衛隊が部隊の単位で出て行った最初が、湾岸ですからね。

しかも掃海艇ですから。それに対して、自衛隊を海外に出してはいかんというのは、後藤田「正晴」がそうだし、伊東正義がそうだ。後藤田、伊東という二人は、ちよつと角度が違うけれど、政治改革のほうの両ボスで、自民党の表紙を換えただけで本が同じでは国民

は認めないよ、ということから始まっていますからね。本当に心の底から反省したら、態度で示さない。物を言う以上、言行一致でやってくれなければ困る。治定至誠心で動いてくれなければ困るという非常にストイックな突き詰めた考えを持つ人でしよう。河野洋平さんもそれにいくらか近いんじゃないかな。

伊藤 さっきの話だと、アメリカは人的な貢献は要求しないということですね。

海部 「力の要求はしない。アメリカがいまいちばん困っているものを助けて欲しい。また日本の憲法の制約があることはわれわれも理解しておるから」という。

伊藤 自衛隊の中ではどうだったんですか。

海部 自衛隊はそのとき黙っていました。

伊藤 そうですか。へたな形で出されたら危ないですからね。

海部 呼ばれたらいやなもの。

伊藤 いまと雰囲気がまったく違いますからね。

海部 違います。いまは国民世論もずいぶん変わりました。それは度重なる災害の救助に自衛隊が出て行って、泥にまみれて堤防を修復したり、いろいろと汗をかいている。そういうのを国民が目当たりで見えておつて、ああ自衛隊にもいろいろ側面があるんだ、災害対策を通じて広い意味での国土防衛をしている、とわかるんだ。伊藤 だから同じことを海外でやってもいいじゃないか、という雰囲気になってきているわけですね。

海部 それ一点張りで説得をしたら、通りました。

■愛知参院補選（一九九〇年十一月）など

海部 このころに、愛知県で参議院の補欠選挙があつたんですね。「一九九〇年十一月四日」。そのとき、歯医者の大島慶久というのを立候補させたんです。そのときは湾岸で集中攻撃を受けているさ

なかでしたが、やれといって、私は三日間行って街頭演説をやりたかったけれど、きわめて厳しい選挙でした。いまで言うとな変な話ですが、三河のほうではみな負けたんです。名古屋市内でも、選挙区の数ではおおよそ負けたんです。ただ尾張地方といって、私の家や事務所がある選挙区では、それを埋め合わせてなお少しだけ勝てるだけの票を取ったんですね。だから選挙区の数で言うはずいぶんあつたけれど、私の三区と、隣の江崎さんのお父さんがずっと培ってきた選挙区をあわせて勝つたものだから、トータルとして自民党が当選した。それが大島慶久という歯医者者の代表です。

それがこのあいだここに来て、「県連の公認だけでも私は断じてやりますから、お願いしますよ」「よしわかった」ということだったが、別のことから、「あんたやるならば、これになりますよ」という。歯科医師会の中に入ってごそごそやつたんだ。衆議院では吉田幸弘もしょっちゅう、そこ「佐道氏の席を指す」に座っていた。思い出すね。大島慶久はその先輩だから威張つて来るけれど、今度の参議院は両方ともやりたいと言つたね。

けれどまず吉田が落ちた。どういうことかといって検察庁に連絡した。「これは政治をきれいにするために聞いているんだから教えてくれ、何かあるのか」といつたら、ある。日歯（日本歯科医師会）の贈収賄事件の中に入って、忠実な運び屋をやつた。呼び出しては一緒に飲んだり食つたり、入れたりしたというんですね。これは駄目だ。そして吉田が抜けたら、やるといつた大島までおとなしくなつた。「おまえ、脅かされたな。おまえは白田「貞夫」系だつたらう」といつたら、「そうです」と言うわけだ。それで、予備選をやらせた二番「大島氏」と三番「寺西睦氏」が降りたんだ。それで自民党は戦わずに一人だけでやりたい。浅野「勝人」という、この前の衆議院で落選した何ともならん、田舎のおじいさんだ。それは、世の中変わってきたんだから公募をやれといつたら、幸い若い三十九歳の弁護士が手を挙げたから、「よし、おまえ気に入つた、応援してやる」といって、強引に尾張・三河の仕分けをした。

「浅野君は代々三河だ、君は端っこであるけれど尾張だ。尾張と三河で頑張り」と言つた。そうして切磋琢磨させれば、敵に虚があり、乗じて討つべしでしょう。

僕らの隣の選挙区で、直前までは僕に刃向かつておつた佐藤観樹が消えたものですから、うちの足元ではみんな喜んで、なめているんですよ。だから「駄目だよ、なめていると、おれの選挙のこの次のときにまたしつぺ返しを食うから、今度は締まって行け。候補者が決まっていなかったが、おれは若いほうの生きのいいのを連れてくるから、それをみんなやれ」と言つて、うちの県会議員たちが応援できる人をつくつたわけだ。それまでは、大島慶久は予備選の二番ですから、三番が県の大ボスの寺西という議長の息子なんです。ところが、二番も三番も勝てないと見て、降りちゃつた。それなら公募して選んで、これをやればいい、と言つた。

伊藤 この前も埼玉で公募して、勝つたんですね。
海部 そのほうがいいんじゃないですか。「これだけ千々に乱れて絡まっているときは、物事に迷つたら原理原則に還れというのが政治の原点ですから、公募して、国民のみんなの意見で選んでもらつて、それにこちらが乗つた人は、一つ有権者のみなさんの審判をいただく。言にくい話だが、民主党のおやりになったことはいいことでしたか。ああいう社会をもう一回つくろうという方は、どうぞ、応援してください」言つたんだ。

愛知県の尾西市の市会議長、もともと労働組合の委員長だったんですが、その奥さんの名前を借りて、サトカンが給料の丸取りをやつておつた。黙つておればバレないはずなんです。どこからどうしてバレたんだ、と聞いてみたら、サトカンがその事件が始まった頃から、「あの議長は、もともとどっちの味方だったかわからん人だ」というようなことを言つてはさかんに自分の火の粉を払つたわけです。

そうしたら議長も、自分の奥さんの名前を貸してくれと言つて出したんですから、「そこまでおっしゃるなら言うけれど、全部持っ

ていったお金はどうしたんですか」といって、とうとう暴露した。検察庁は喜んで、「先生、あれをやらせてもらいます」という。おれがやっていい、と言ったわけではないんだよ。「きみのほうで証拠を持っていたらやりなさい、癖が悪いからいかん」と言った（笑い）。

そうしているうちに、もう一人おった都築議という労働省上がりの若い代議士。われわれの党が分かれたときに、私は自民党のほうに将来は一緒になろうということで、初めから民主党と一緒になろうという気はなかったけれど、小沢のほうは民主党と一緒になろうという。そのとき小沢の方についていったのが都築議だ。これも、このあいだの衆議院選挙のときに——。むしろ同情があります。八百円の日当を約束して電話で投票依頼をしたんです。それが御用になった。そうしたら投票依頼をやった組の組長や選挙の事務長がこのあいだ有罪になった。当然連座制に引つかかる。サトカンはもう落ちたから、僕が演説をやらんでも、みんな知っておるわけです。そうすると、「尾張で一人、三河で一人、民主党の現職の先生はこういうことをやって恥じない人です。私もはみずから戒めて、絶対そういうことはやりません」ということです。

伊藤 しかし三人区に二人ですか。あと一人は？

海部 共産党の指定席みたいなものです、愛知県は。

伊藤 共産党ですか。前議員もいるわけですか。

海部 前議員はいますよ。これが六年前の愛知県「の参院選の結果」です。一番が五〇万票の木俣「佳丈・民主新」、二番が四五万票の佐藤泰介「民主新」、四番が自民党の大木浩「自民現」、それから五番が浦野休興「自民新」、六番の都築議というのはいま言った自由党に行つて、小沢の由来になった。

伊藤 三番目が共産党ですね。

海部 だから共産党候補が強いというんです。放っておくとまた当選しそうです。二人公認したら、安倍「晋三」がまだ若いな、飛んできて、名古屋で浅野一人の勝利を最優先に、「浅野、浅野」とぶ

つたわけですよ。けれど僕らが理解してるのは、浅野は三河の人だから、三河は浅野で結構だ、ただもう一人の古井戸というのは尾張の代表だから、尾張は古井戸でやる、二人とも当選させてください、というのが大政の幹事長の言う言葉だ。その二人が切磋琢磨すれば、少なくとも一人は勝てるだろう。この前のゼロになったときが大木浩と浦野の争いですから。そして今度、わがほうは公認しないんです。古井戸康雄三十九歳という弁護士は公認しないんです。一人でなければ当選できないなんて敗北主義になってきた。

伊藤 本部が公認しないんですか、県連ですか。

海部 県連は二人出したくてしょうがないんだ。

伊藤 じゃあ県連の公認みたいなものですね。

海部 県連の公認でいいです、という。

伊藤 なかなかそういうところは、自民党は融通無碍にできていますね。

海部 今日までそういうことをお互いにやってきたんだから。

伊藤 あと一つが共産党の指定席とは知らなかった。

海部 この票の分かれ方を見ておると、共産党の四五万票というのはまたおそらく出ると思うんです。

伊藤 共産党はそんなに人気がありますかね。

海部 愛知は昔は伝統的に民社が強かったですね。だからその関係で、民主が強そうな気がするけれど。

海部 とところが、いまの選挙違反で婦人の部隊を一日八百円で集めて電話作戦をやらせて、それがバレて御用になって、その責任者と連座制になると旧民主の都築君は失格です。

■湾岸戦争⑨（国連平和協力法案1—意図）

伊藤 元に戻ります。ブッシュさんは自衛隊を出さなくてもいいと申したけれど、先生としては、なんらかの形で自衛隊を活用したい

というお気持ちはありませんか。

海部 それは、自衛隊でなければ自己完結力がないですから。民間のNPOという怒られますが、あれらがこのとき現地まで持っていつても、「おいでなさい」でも「ご苦労さん」でもないんだ。邪魔者扱いなんです。「邪魔だから、頼むから来てくれるな」といわれる。

有名な内閣調査室長をやった（佐道 佐々さんですね）佐々淳行がここに来た。佐々も民間ボランティアの代表で、医療品を持って行ったんだけど、ご苦労さんでもなく、そのへんに置いて帰ってくれという話だった。というのは一緒に行った連中が、今日はどこに泊まるんですかと聞きにいったけれど、そんなことは戦争をやっている最中の国がとことん面倒を見るはずはないし、飯はどこで食べるんですかと食堂を尋ねるに至っては、自己完結力がないわけでああいうところは物の言い様で嬉しいとも思われん。

僕はいろいろそういう話を聞いておつたし、瀬島龍三さんにも話をいろいろ聞くけれど、民間のボランティアや、さあ応援してやるぞ、やってやるぞ、というだけでの人では、軍の戦闘力を阻害するわけですから、むしろ行かずに、お金と物だけだったら送って届けてやったほうが実質的な応援になりますよ。

もつとひどいことも言われるという。「自衛隊をもしお出しになったとしても、飛んできたスカッドミサイルがどつちからどつちへ向かって飛んでいるか、着弾が近いか遠いかの音の聞き分けも、実戦の経験がなければできません。それを説明するのにも、ときどきは通訳をきちんと入れないといけない。日本の自衛隊の第一線の人たちがみんな英語ができるとは限らない。そこまでやっておると、やたら時間がかかって、戦力がそれだけ阻害されるから、ありがた迷惑とは言わんけれど、ご厚意だけ、お気持ちだけちようだいしておきます」と言われるというんです。それは佐々淳行が、自分が行って体験してきた話です。物だけ置いてくればいいんだということ

伊藤 本当に戦える軍隊でなければ意味がないということですね。
海部 そういうことです。自己完結力がどうしても要る。それがないと、行っても意味がない。

伊藤 国連平和協力法案が十月十六日に国会に提出されますが、これはいまのお話との関係で言うと、どういうことになるわけですか。
海部 これは、お金や物だけの協力ではよくないから、人的協力ももつとして欲しいという話があったんですね。日本は血を流さない国だ、人的協力をしない国だということが、あの頃よく言われた。私は、「そんなことはない」というんだ。例えば戦場になっている地域をはじめ、アジア・アフリカの途上国には、いまは二万人行っています。あの頃でも一万人近いオーダーで青年海外協力隊が平和協力で行っている。そのうち五十二名が血を流している、命を捧げておるんですよ。けれどもそれは毎年予算が通って、その都度命がけで反対する人はいなかった。というのは、その犠牲があっても、それを償って余りあるいい影響を近隣諸国に与え続けてきたということがあって、握手をする。帰ってきた人は皇居に招いて、茶話会を開いたりするんですね。

僕はその発足のときから参画しておつた。「本当はこの海外協力隊というの、もつとあらゆる立場の人たちを広く入れたい。消防とか地方の役場の人とか警防団とか、現地からの報道や報告が間違っていると困るから、新聞記者のみなさんも参加してください。僕はここでみなさんに言いますよ」と、内閣記者会で会見のときに、きちんとそういうことも何回も言ったんだけど、残念ながらそういうことは記事にはならないし、応募者もおらん。そういうことをつくった協力隊ならば、第一線で武力行使をしたり、憲法で禁止されているようなことをするのはなくて、平和協力活動の一環として頑張れる。

伊藤 それは自己完結力があるんですか。

海部 自己完結力がありますよ。というのは、地方から集めるのは

消防隊とか、地方の警防団とか、みんな自己完結力を持っていきますから。要するに緊急避難対策とか緊急避難訓練を受けていない集団は、言葉は悪いけれど、ありがた迷惑だというんですね。

伊藤 まあ、烏合の衆ですね。

海部 それは佐々淳行が自分で行って、そういう扱いをされたんだ。

伊藤 佐々さんは、そういう海外協力に非常に熱心ですからね。

海部 熱心だ。だから、「海部先生、それでやりなさい」という。

■湾岸戦争10（国連平和協力法案2―起案）

楠 この国連平和協力法案ですが、防衛庁と外務省にまたがるような法案は、どこが最初は起案するんですか。

海部 内閣官房です。当時は石原「信雄」副長官のところへ、各省の局長、審議官、あるときは次官までも集めて、審議、議論したんですね。

楠 内閣官房が法案の最初の起案をしたりするんですか。

海部 やるんです。それは緊急の臨時の異例の措置だと言えませんが、いよいよ国会に付託するときには、どこの省庁に責任を持たせ、どこの委員会に付託させるかまで考えて、人材が足らんとときには交流して出向させたりする。そこらは官房がその気になれば、いろいろできる手があるんです。

楠 内閣官房の外政審議室とか、そういうところですか。

海部 外政審議室長も、当時は有馬「龍夫」君といって外務省出身でしたし、内政審議室長はたしか大蔵出身の人がやっておったな。

楠 その審議室の課長補佐ぐらいの人たちが起案するわけですか。

海部 そうです。ところが、審議室といっても結局は各省から使えるやつを引っ張ってくるわけですからね。いままでも非常に悪かった横の連絡、縦割りだけしかぎらつかなかった日本の官僚組織の中で、各省みんなが共通の認識を持って、共通の理解まで達しなければ、

こういう問題は中央突破はとてできないということ、そういうタスクフォースみたいなものをつくって、やったんですね。だから初めのときは、僕は全会議に出て聞いて、最初は僕の意見を述べました。

佐道 それでその方針に従って、石原副長官が実質的な責任者としてやられたわけですね。

海部 そう、とりまとめて下に降ろす。そういう点については、彼は能吏ですからね。

伊藤 これはどこが担当になったんですか、

海部 内閣官房の担当にして、法案を作るまでは内閣官房で石原君のタスクフォースでやった。できたら、外務省が窓口になってそれを国会に提出する。防衛庁が窓口になってやるんじゃない。当時まだ防衛庁が、ということになると、防衛庁の内部にすら異論があった。防衛庁の主流からちよつと離れて、最後は防衛施設庁長官に出されて不遇をかこつたある人、まだ生きているから名前を言ったらかわいそうだが、ここまで来て、「そういう仕組みには絶対に反対だ」と言うんだね。

それからいま有名になったけれど、小淵、小泉内閣時代にちよつとこうされて「持ち上げられて」、手先になった岡本北米一課「行夫」、あれはまったく時の政権にびつたりだ。都合のいいことを立案する。あれも能吏というのかな。彼も「断固やたらいいです」という。「たとえいま輸送船や護衛艦を現地に出しても、憲法的には大丈夫です。国民の持つておる国有財産を守るために行くんですから、大砲があるうが、鉄砲があるうが、それは全く関係ありません」というような、きわめて時の政権が喜びそうな話を、いつも立案する。

けれども石原君は、もともと自治省ですから、そこまでは熟語として到達していなかったという面もあるといって、よく私にも相談しながらやっている。片方では、小沢一郎に「断固やれ、やたらいいんだ。何をグズグズしているんだ」と怒られる。加藤六月は加藤

六月で、「行ってもいい、行きなさい、やりなさい」というところまでは一緒でも、ちよつと違ふ。「いろいろな手続なんか踏んどつたら、あきまへんで。そんなものは、時間がとてあらんから」とか言つて、まあ気が短い。「六（むつ）ちゃん、それは駄目だ。手続だけはきちんと踏んで、国会があるんだから」「あつたつて、総理、それはね、いまは緊急・非常・異例の事態ですから」という。「それは緊急非常異例の事態だということはわかるけれど、であればこそ、より必要以上に手続は踏んだほうが、むつちゃん、いいと思うから、やれ」と言つてね。

佐道 先ほどの岡本さんの意見は、外務省の首脳とも意見が違ひますね。

海部 違ふ。だからあれば、そういう意味で、外務省という水ではいつまでも育てられなかつたんだ。これは言うべきことかどうか知らんが、外務省としてまとめて、総理のスピーチをいろいろ書くでしょう、アメリカに行つたときに、「右のポツケにはチューインガム、左のポツケには夢がある。アメリカの進駐軍の兵士は日本に民主主義という夢とチューインガムを多くの国民に与えてくれた」。そういうことを言つて、それが美空ひばりのなんとかとスピーチの中で使つたことがあるんだ。それを書き加えたのは岡本行夫さ。外務省の首脳は、「あんなことは言わんほうがいいですよ、総理の演説では」と言うけれど、岡本君は「いや、断固これを言うよとアメリカには受けますから。今日までこういうことを言わんから、心が開かれなかつたんです。これを言つてください。結果は必ずいいです。アメリカ人の琴線に触れる」と言うんだな。「北米」一課長が確かにそういう一面もあつた。あとから新聞にぼろんちよに書かれたけれど、それは決しておれの発想でおれの書き加えた部分だと言ひましたけれどね。

そういう鋭いというか、変わったというか、もつと碎いて言うよ、本流とちよつと離れた考えの人だから、国連平和協力隊の頃の話をしてるときも、身分を少し変えたらどうかとか、それは姑息な手

段だと言われたらそれつきりだとか、そういう姑息なことをやつても、化けの皮はすぐに剥がれますと言つておつたが、その説を出したのは岡本行夫なんだ。あれは北米一課長なんだから。それにコロツと乗つておつたのが、小沢一郎幹事長だ。それがいま亡霊となつて出てきたのが国連待機軍というものです。あれとまったく同じです。

伊藤 ずつとつながっているんだ。

海部 だから僕は、ああ、これは小沢の言いそうなことで、岡本が知恵袋だ。それは岡本が、と言うと気の毒だから、もう一人、二人名前を出さなければいかんけれど、当時外務省の中にも、それに近い賛同者がおつたんです。あと二人ばかりいた。それらが、そういうことをいつも主張しておつたんですね。けれども少数意見だから表に出なかつた。ところが相手がおれだから、これはうまいこと言つてもらえば出るかもしれん。出ればアメリカに行つて、このスピーチはアメリカ人の琴線を揺さぶることになる、という発想があつたことも間違ひない。

伊藤 それで琴線に触れましたか。

海部 触れた。そのことを覚えておつた人がずいぶんおるんだ。それで新聞によつては、「当時のことを率直に、いいも悪いも分け隔てて話しながら日米関係の友好を説いたのは、日本の総理としては珍しい。率直に物が言えた人だ」と書いた。

しかもその話の中で、これから日本は消費者の利益を大事にする。生産者といつても、生産者だつて消費者だ。消費者の利益を大切にしたいんだ。そういう面から言うと、大店法は間違つておるから、アメリカの言い分でも良いことは聞こう。私は帰つて、運用上の問題で解決する。ただブッシュの言う、日米構造協議（SII）というのは、あのまま押しはめられたら、日本がまだそこまで成熟しておらんから、アメリカとはまだ温度差があるんだ。だから消費者の利益だよといつても、日本にはまだ消費者の中になりたての労働者も、なりたての生産者もいっぱいおるんだ。だから安ければいいと

いうだけで押していくと、やがては日本経済全体にも取り返しのかんひびが入ると思うから、そのことについてはちよつと時間をかけて話したい、というような説は、通産省からだいが教育されたんだけれど、なるほどと思うことがあるから、それを受け止めた。

特に繊維産業なんかで見れば、安ければいいなんていったら、ちよつと今日、それが実現しておるじゃないですか。中国の繊維でつぶされた。だから安ければいいというだけではないから、生産者の立場も考えなければいけない。消費者の利益は安ければいいということだけではない。それは僕も率直にそう思っておったから、それも言いました。

このごろますます繊維が落ち込んでいく現状を見ておると、安ければいい、やりたい放題やればいい、と言うだけでは、歴史や伝統を持ったところや、スケール・メリットを追求してようやく生き残ってきた企業、あるいは個人のベンチャー、そういうものが成り立っていないのではないか。そういうことばかり考えるから、自民党の本流の言っている経済政策と合わなくなってくるんだけれど、それは仕方がないと思うんですね。それを消費者の利益ではなくて、国民の利益だと言い換えたわけです。

■湾岸戦争11（国連平和協力法案3―廃案）

伊藤 この国連平和協力法案は、最終的に廃案になってしまいますね。

海部 これはただ単なる廃案ということではなくて、今回はまとまりがつかんから、一回退こう、その代わり、三党合意で出し直すというところで、三党で協議機関もつくったんですよ。だからあの時は、私もちつとも落胆しておらんし、むしろ将来に明るい希望ができて、三党のみなさんがこれでやろう、やってくれというんだから、この次は必ず成立すると思うよ、というぐらいのことで喜んでおっ

たことは事実です。

佐道 ということは、出されたときに審議過程を見て、これは無理だとかかなり早い段階から思ったわけですか。

海部 それは答弁をもう少し統一してうまくやっていけば、中央突破もできたらうけれど、狙っている目標は正しいんだが、答弁がバラバラでしょう。片方では実力行使はできない、武力行使はいけないという。要するに運んできた弁当を土民に襲われて取られるときには、仲間がみんな腹を減らして飢え死にするといけないから、その土民とは戦わなければならぬ。戦うために、土民が持っている程度の武器は持っていつて応戦してもいいんだ。それが基本的人権の一つである個別的自衛権の問題ではないか、とこちらは屁理屈をつけた。だから刑法でも、最後の最後の緊急避難というのもあるでしょう。その程度のことはやってもいいし、またやらなければいけません。みんな世の中、聖人君子ばかりではない。私自身善意を信じるように、あなた方の善意を信じますよといって歩いていつて、キリストと一緒に、右の頬を打たれたら左の頬を黙って出せとなったら、とてもではないが、こういう大きな仕事はできない。それなら、そういうことまでできるとできるようにしようではないか、そのために出し直す。出す直すためにはいっぺん廃案になっても仕方がない。

というのは、あの頃委員会の出先の中で、名前を出しては言いにくいですが、理事会を開くと、どうも委員長以下も、ここらでいっぺん廃案にして、出直しをしたほうがいいということを言い出したんですね。そしてそこへ持ってきて、国会の階段から落っこちて、打ち所が悪くて、お隠れになった。小此木八郎のおやじの彦三郎が委員長だったんですよ。

この委員会は法案を出した頃から、どうも法案の扱いが厳しい。本当ならば、どんな法案を出しても、本会議に趣旨説明を要求するのは、一つの党が一回限りですね。政府のほうは一日、本会議の趣旨説明をやれば、だいたいそれでスツと通って、委員会に行くんで

すよ。いまでもそうです。この法案の時だけは違ふんです。委員長がみんな聞いてやってくれというから、どんどん言い出して、十九人の質問通告が来た。十九人が本会議で、趣旨説明に対して質問するとうんです。しかも賛成する演説をやらなければならんはずの自民党から出てきた三人も、それは自民党のことだから賛成するけれど、こういうところに疑問があるとか言う。どこがああいうことを言い出したかわからんが、判で捺したように同じことを言う。それから駄目ったら駄目というおたかさんのほうは、みんな総反対なんでしょう。

その前、理事の一覧表を見た途端に、これはいかんと思ったのは、自民党のほうは反主流派、非主流派みたいな、おかしなのがないぶ入り込んでおる。これはやられるな、覚悟しておけよと言ったんだ。そうしたら小沢は、「そんなのはやっちゃいましょう、ねじ伏せてやっちゃいますから」と言っておったんだけど、残念ながらそのころから、小沢は少し体調を崩してきた。体調を崩すと人間の精神は弱くなりますね。そして、小此木委員長自身が、大出「俊」とやっておったのかな、同じ選挙区で仲が良かった。とにかく山口や大出や、ああいう連中が、「海部さん、これは諦めなさい。出しておいても絶対にできっこないし、みんな体を張って不信任案の連発をする。内閣の総理大臣の不信任案を出して争いたくないから、これは引いてください。しかもあなたのほうも不十分なところがあるよ」といろいろ言ってくるんだ。

というのは、答弁の統一ができていない。例えば第一線におる部隊が携行武器は小火器の小銃だけだけれど、小銃を持ってバーン、バーンと撃つのではなくて、いまの小銃は連射ができる。それが一個分隊と言えば、分隊単位でも二十人近くいる。「二十丁の自動小銃が立ち上がって同じ目的に向かってダン、ダンと連射したら、これは武力にならんですか。自己または他人の生命を守るためにやむを得ない必要最小限の行為だとは言えないだろう」という。

そう言われると、法制局長官を呼んで、「野党がこういつて質問

してくるが、どういうふうに君らは答えるんだ」と言ったら、「それは一対一の場合、バラバラの場合を想定して、小銃一丁の応戦火力というのはこの程度ですから、武器対武器のなんとかの原則というのが戦時国際法上あるんだけど、その範囲内です」という。そういうことでは常識的に通らんな、そういうことも考え直さなければならぬか、というようなこともありました。

そういうことになると、言いくい話だが、後藤田さんや伊東正義さんの組も、それには大賛成。これは強行採決する問題ではないから引いておめよう。その代わり、黙って引いておめるわけにはいかんから、そういったところを良くしようじゃないかということ、三党の協議機関をつくったわけです。廃案と取り替えだ。当時はもう小沢幹事長ではなくて、小淵に替わったんじゃないかな。

伊藤 小沢さんが体調を崩して、ですか。
海部 そうじゃないか、まだ小沢か。とにかく、国連待機軍みたいなものを将来はつくるという約束にした。そのときは予算措置をとって、「総裁、出せませうね」というから、「それはそういうものができるならばいいよ」といった。そうすると国連協力法案を引いておめても、同じ目的、同じ趣旨のものが代わってできるならば、そのほうが一歩前進、二歩改革だ、

それで宮澤さんが反対するならちよつと呼んで、宮澤さんに「これは一歩前進、二歩改革ですから、理解してください」と言ったら、「ああ、さすがに早稲田大学雄弁会はおつしやるのが違いますねえ」といつて馬鹿にされてさ。「一歩前進、二歩改革ねえ。そういつたことは——、うくん」なんていつて、本当に馬鹿にされたな。高校野球だと言つてひとを馬鹿にしたから、それを忘れられんが、あの人の手だな。本当に面白い人だ（笑い）。

伊藤 何か目に見えるような感じですね。

海部 首を歪めながら言うんだ、薄笑いを浮かべてね。脱線しますが、見ておると宮澤という政治家はラムズフェルドに似ておると思ふんです。ラムズフェルドを見てご覧なさい、記者会見のたびに、

言いにくい、いやなことを言うと、ニタツと薄笑いをするでしょう。あの気持ちの悪い薄笑いが、どれだけ世界に対してアメリカの立場を損にしたか、と思うな。あの薄笑いだけは、ラムズフェルドさんはアメリカのためにおやめになったほうがいい。ア・ピース・オブ・グッド・アドバイスです。

伊藤 さて、この法案の問題のところまで終わりにしたいと思いますが、最後にこれが廃案になるということ、アメリカ側の反応はどうでしたか。

海部 ブッシュは直接は何も言いませんでした。こちらが「こういうわけで、次なるものを目指して三党合意に受け継いで、荷物の荷崩れを直して、できるようにやるから、わかつてくれ」という言い方をすると、「トシキ、よく努力してください。わかつております。四の五の評価はしないから、頑張ってくださいよ」というようなことで終わったと思う。それから外務省の局長に、「アメリカに行つて、それまでの人脈をみな回つて解説、説明して来い。こういうわけで今回は通らなかつたけれど、三党合意に受け取つて、必ず通すから」といつて説得してきてくれ」と言つたんですね。

佐道 アマコストはそれまで小沢さんのところに行つたりして、裏でバックアップをしていたわけですね。彼は何か言つていませんでしたか。

海部 僕に直接そういうことを言うと、またバンバンと言ひ返されるから。アマコストに言ひ返すのは、アマコスト周辺から聞くと、総理大臣自身と大蔵大臣だという。橋本だ。ねちっこくやられるから、あれには。

伊藤 今日は少し先に行きましたが、さつき九月二十九日の訪米の話が、世界子供サミットの話になりました。そのときブッシュ大統領と会つておられますね。そのへんの話から、もう一回、手帳を見ていただいて思い出したところで、この次にお話ししてください。

ここから手帳を覗いてみますと、先生、ずいぶんいろいろなこと

をお書きですね。ありありと思ひ出されるのではないかと思ひます。

海部 これを読んでいると思ひ出すんです。

伊藤 それではまた来月、よろしくお願ひします。

海部 はい、どうも失礼しました。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 30 回

海部内閣VI (1990~1991)

【2004年6月11日 (金) 15:30~17:30】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

楠 精一郎 (東洋英和女学院大学教授)

佐道 明広 (中京大学助教授)

[記録、編集] 丹羽 清隆

(2004年6月11日)

今回は、湾岸戦争時のお話の続きからお願いします。

1. 先生は「子供のための世界サミット」出席のため訪米し、1990年9月29日、ニューヨークでブッシュ大統領と会談されました。このあと自衛隊の海外出動に先生も肯定的になられたという見方もありますが、このブッシュ大統領との会談のお話からお願いします。
2. 先生は訪米の後、エジプト、ジョルダン、トルコ、サウジアラビア、オマーンという中東5カ国歴訪に出られます。湾岸危機の関係国ですが、訪問された諸国の状況および各国の日本への期待などはいかがでしたか。
3. 91年1月17日、多国籍軍はイラクを攻撃し、湾岸戦争が始まりました。戦争状態に入るかどうか、あるいはいつ入るかについての情報はどの程度入っていたのでしょうか。
4. 戦争勃発にともない、官邸に「湾岸危機対策本部」を設置されます。旧官邸ですから、通信設備などをはじめ様々な不備もあったと思いますが、対策本部は先生が期待された活動をなされたのでしょうか。
5. 戦闘開始3時間後に先生は記者会見され、被災民の移送を民間航空会社に要請するとともに自衛隊機の使用も検討すると述べられました。自衛隊機派遣をこのタイミングで述べられたということは、事前に検討されていた結果だと思いましたが、この問題はいつごろから、どのように検討されていたのでしょうか。
6. 自衛隊機派遣については、自衛隊法の改正という正攻法でいくか、政令の新設でおこなうかという問題がおきます。「湾岸危機に伴う避難民の輸送に関する暫定措置に関する政令」は決定されますが、結局自衛隊機の派遣は行われませんでした。この問題でも、自民党内、法制局、防衛庁などで意見が割れたようですが、先生はどのようなお考えだったのでしょうか。
7. 戦闘開始後の24日、多国籍軍に対する90億ドルの追加資金協力を発表されました。これまで40億ドルだったのが90億ドルですから、相当な金額です。なぜ、どのように90億ドルは決定されたのでしょうか。
8. 4月3日、先生は日米首脳会談のため訪米されます（ニューポートビーチ）。そこで湾岸危機に対し日米間の協力関係を再確認されることになるわけですが、具体的にはブッシュ大統領とどのような話をされたのでしょうか。次にお聞きする掃海艇の問題なども議題にあがったのでしょうか。
9. 4月11日に湾岸戦争は正式に停戦が成立します。それを受けて、ペルシャ湾の機雷除去のために、海上自衛隊の掃海艇が派遣されることが同月24日に決定されました（26日に出航）。自衛隊が訓練以外で外国に派遣された最初になるわけですが、この問題についての議論もかなり意見が分かれたと思います。いつごろから派遣問題が議論され、またその内容や決定までの経緯についてお願いします。

10. 湾岸戦争の問題はこれでひとまず終えさせていただきます。同じ時期のほかの問題についてお願いします。国連平和協力法案が廃案になった直後の11月12日、「即位の礼」が行われました。世界158カ国、2機関から国賓などをお迎えし、来日した多数の首脳と会談されたわけですが、危機のさなかのこの国家行事については、どのようなことが印象に残っておりますか。
11. 翌年(91年)1月9日、韓国を訪問されます。「未来志向の日韓新時代」を首脳会談で確認されるわけですが、このときの訪韓のご印象などをお願いします。

※今回は以上のような点についてお願いします。

■子供のための世界サミット（ニューヨーク）

伊藤 だんだん「参議院」選挙が近づいてまいりましたね。先生、この前は手帳をもとにしているいろいろお話しくださいましたが、あれをまたお願いします。「一九九〇年」九月二十九日のニューヨークの話ですから。

海部 子供サミットですね。

伊藤 子供サミットでアメリカに行かれたということですが、子供サミットというのは何ですか。

海部 「子供のための「世界」サミット」というものをなぜやったかという、識字率を上げなければならんということがテーマだったんですね。これは世界中で関心があったと見えて、これだけ集まったんです。これがそのときの記念写真です「子供サミットに集まった首脳の集合写真を示す、七十〜八十人が並んでいる」。

伊藤 日本の問題ではありませんね。

海部 むしろ途上国の、識字率が低い国の子供のためにどうしたらいいか、ということですね。当時餓死していくのはアフリカの最貧国の子供たちだから、それを助けてあげるためにはどうすべきかというの、子供のためのサミットのメインテーマだったんです。

伊藤 「集合写真を見て」サッチャーさんもいますね。先進国の首脳も結構いますね。

海部 先進国が入って協力してやらなければ、途上国の子供たちは救われない。子供サミットという子供のサミットみたいだけれど、そうじゃないんだ。解釈が悪いんだ。結局、子供に焦点を置いてもしようがないから、食料の援助は先進国の大人、むしろわれわれ自身が解決しなければならん問題だ。このとき、ネリカ米の話がありました。ネリカ米というのは、何かの枕詞だけを集めた名前ですが、ネリカ米がアフリカで栽培するには最も適しているということ

でした「New Rice for Africaの頭文字をとってNERICA」。

伊藤 識字率とコメですか。

海部 腹を減らして餓死するのを防ぐと共に、識字率を上げていかなければならない。むしろ識字率という、当時は家庭の主婦やお母さんを集めなければならぬ。

伊藤 子供だけ読めてもしようがないですね。親が読めなければならぬ。

海部 そういうことです。

伊藤 そのときにブッシュ大統領に会うわけですか。

海部 はい。

伊藤 それはサミットが終わってからお会いになったわけですか。

海部 子供のためのサミットにはそれこそたくさん来ていますから、二国間のことはなかなかやっておれんから、そのときに会うといっても、サミットの会議とは離れて、会って話をしたわけです。

伊藤 サッチャーさんとか、各国の首脳が来るわけですね。

海部 それぞれ、バイの話し合いはやりました。それからのこのときは、僕の記憶に間違いがなければ、湾岸戦争のことがまだ終わっておりませんから、中東の上空を飛ぶこと自体どうのこうのと言っておったときです。

伊藤 でも中東に行くわけではないですね。

海部 ないけれど、あの辺を飛ぶのもよくないとか、どうかかこうとかいって、いろいろあったんです。

■湾岸戦争12（ブッシュ大統領との会談）

伊藤 それでブッシュ大統領との会談はいかがでしたか。このときに資金援助の話とか、兵を出せ、というようなこともあったわけですか。

海部 兵を出せというところまでは、このときはいっていなかった

と思います。兵は出せと言われても出せるわけがない。面白い話をブッシュさんもしたし、僕もしたのは、正直言って、当時の自衛隊の成熟度から行くと直ちに合同協議を始めるわけにもいかないし、みんな英会話ができる自衛隊員ばかりではないから、通訳をつけてもらわなければならぬ。通訳をつけての戦争なんてまどろっこしくていかにから、ごく限られてくる。ごく一部の人間しかできないだろう。それよりも何よりも、スカッドミサイルというのがだんだん改良されて、使われる可能性が出て来たんだけれど、音を聞いて、これはスカッドミサイルの音か、方向はどちらかというようなことは、よほど訓練をしていないとわからないはずだ。高度の軍事機密に属する問題でもある。「だから自衛隊にいきなりそれをやれと言われても無理だし、わがほうも初めからそんなことでお役に立てるとは思っておらぬので、そこはわかかって欲しい。その代わり、なし得る限りのことはする」と言ったんですが、やはり物的な貢献だけでは満足しないような人が多い。ショウ・ザ・フラッグとか、ショウ・ザ・ブーツとか、考えてみればアーミテージが言い出したことですからね。

伊藤 でも、とにかく何らかの形で自衛隊を活用するということが話題になったのか、先生がお考えになつていたのか。

海部 自衛隊を活用するということは、当時は全然タブーでした。そこで、いま民主党がガタガタ言っているけれど、あれは小沢一郎が当時われわれと議論している中で、第二予備軍みたいなものを自衛隊の中に別組織としてつくろうということだ。そのモデルになつていたのは、北欧のデンマークかスウェーデンのどちらかです。デンマークかスウェーデンのどちらかに、そういう軍隊があるわけです。それは日頃からPKF専門のトレーニングを受けている。さあとなつたらすぐに出て行けるように、一個師団、二個師団ぐらいの単位で軍隊をもっておつたんですね。

それに刺激を受けて、そういうものでもいいから出せないか、という話があつて、そこで石原「信雄」副長官を呼んで命令して、

「事務的にそれができるのであればやってみる」と言った。自衛隊を本当は出したいんだけど、自己完結能力を持っておるんだけれど、自衛隊だけを出すというのはいかにもアレルギーが強い。

こういうときの応援の仕方というのは、僕の頭の中にはむしろ自衛隊よりも、プラスα、新しいものを加えて薄めていく。どんなところをモデルに見ておつたかというのと、青年海外協力隊というのがあつて、あらゆる立場の人があらゆる途上国に行つて、汗を流して、その国の開発にいろいろ協力しておる。けれども犠牲者もずいぶん出て来て、いまは五十九名になつたそうですが、当時は五十二名の犠牲者が出ていたんです。五十二名犠牲者があつても、その犠牲を乗り越えて、この制度は続けていこう、それに余りある成果も上げてきたし、世界から期待もされている。だから僕は、それを第二自衛隊とは言わなかつたけれど、新しい組織をつくつて、それが出ていけばいいと思つておつた。記者会見のときに、「今日聞いていらつしやる記者のみなさんも参加してくれませんか。そうすれば現地の報道とかその他がより本質に近いものになつてくるはずだ」と言つたんです。

伊藤 戦闘地域には行けないですね。戦後復興というか、戦争が終わった後方で何かをやる以外にないわけですね。

海部 武力による威嚇、武力の行使を目的に行くわけではない。あのころ僕らが描いておつたことは、停戦が成立して、その後の戦後復興という段階になるときが日本の出番であると思つていたので、そういうときにはすぐ行つたらいい。できたら、自衛隊の医務官とか、そういうものが行けるならば、日頃いろいろなトレーニングも受けているではないか、と言つたんですが、そんなものが行けるよくななまやさしい状況ではなかつたわけです。

伊藤 まだ始まつていませんからね。ただ海上自衛隊のことはあり得ますね。

海部 船を動かすときは、一艦ごとに動かなければならぬわけです。一艦には千何百人という単位の人が乗つて動かしておる。その中に

はいろいろな係もある。そうするとそれは部隊としての海外派遣になる。そんな言葉尻を捕まえて禅問答をやるくらいならば、身分を変えたらどうか。あの時いろいろ考えたのは協力隊だったんですね。けれど最終的には、党内の反発もあって、名前だけ変えて中味が同じでは駄目だという。あの頃、「本の表紙だけ換えて中味が一緒では世を欺くことになる」とか、「手段として姑息である」というような反対論があった。もう一つは後藤田さん一派の「それは絶対駄目だ、蟻の一穴になる」という反対論があつて、「やるならば堂々とやれ」ということになってきたわけです。そこで回り道をして何でもやろうという話のご破算になったと思うんです。

伊藤 この訪米で、ブッシュ大統領との会談はそれほど長い会談ではなくて、突っ込んだ話でもなかつたんですか。

海部 ブッシュ大統領とは、はじめからできるだけのことはすると「いう話をした」。

伊藤 前から話をしていくわけですね。

海部 前から話してあるけれど、ブッシュ大統領自身は、「軍事的なことまでアメリカは期待をしておらん」。

伊藤 期待できるような自衛隊ではありませんからね。

海部 「自分も思っていないから、トシキ、それは心配せんできれ」という。それから補佐官が一人飛んできて、「そういったことを大統領はこう思っていますから」という説明をして、「弾を撃つてくれとか、出てきてくれとかいうようなことはありません。ただシンボリックに日本も協力しておつてくれるんだということで、シヨウ・ザ・フラッグで旗が見えるような協力をしてもらえたらありがたい」という。そこで具体的になつてきたのがシーリフト、エアリフトで、飛行機輸送、海上輸送をまず助けてもらえんדרるか、ということになつてきたわけです。

伊藤 だんだん、それになつてくるわけですね。この会談のときは、まだそんなに突っ込んだ話ではないですね。

海部 そのまで行つていません。とにかく大雑把に、「まず政治的

な支持を強く打ち出してくれ」ということでしたね。

■湾岸戦争13（中東歴訪）

伊藤 アメリカに行かれたあと、エジプト、ヨルダン、トルコ、サウジアラビア、オマーンと中東歴訪に行かれますね。

海部 それは周辺国のそれらの国々は、アメリカから見ると非常に友好関係、信頼関係のある国だけれど、今度の一連の問題で非常に経済的にも苦しくなる。特にヨルダンとかエジプト、あるいはトルコは、イラクとの石油パイプラインが詰まってしまうと経済的に大変である。

伊藤 主に石油なんですね。

海部 石油です。「そこで、その穴埋めというか補償をしてやつてくれんか。そうすると非常に助かる」ということを懇々と頼まれました。

伊藤 そこに対する経済援助のことはすでに話がついている段階ですか。

海部 まだついていないですね。ついているというのはちよつと言い過ぎだと思つていますが、言われたらやりましょうというようなことは決心しておつたから、アメリカの大使あたりが、そういう情勢を連絡をして伝えておつたかもしれない。

伊藤 じゃあ行かれたときに、それぞれの国から要望を聞くわけですか。聞くことがこの訪問の仕事なんですか。

海部 はい。

伊藤 これらの国々の中で、印象に残つたところはございますか。

海部 一番正直であつたのはヨルダンですね。「イラクと」国境を接しておるから。ご承知のようにサダム・フセインというのは、性格の悪いと言つたが、リーダーだから、隣国で国境線を持つておつ

て、非常に警戒しなければならん。けれども、おつき合いもしていかなければならん。だからすべて禁輸だ、すべて止めろと言われても、それはできないとは言わなかったが、クワイト・インポシブルといったかな、ほとんど不可能に近い。それは陸路で直接行けるわけだけれども、あの陸路の国境のゲートを見ると、東西ベルリンのゲートのように厳しく鉄で閉じていない。それが中東なんですか。まあまあ、ある程度はということ、出したり入れたりしておつたんですね。

■対北朝鮮交渉1（仲介者）

楠 ちよつとよろしいでしょうか。事前にお渡しした質問の文脈から少し離れて申し訳ないんですが、話も少し戻りますが、子供サミットのときに先生は記者会見で、北朝鮮との日朝国交正常化交渉を早期に開催する意向を表明しておられます。この時期に日朝交渉の早期開始を表明されたというのはどういう事情なんでしょうか。そのあと、翌年の一月九日に韓国を訪問されますが、ここでも盧泰愚大統領に対して、そのことに理解を求めているわけですね。中東情勢が不安定になって、戦争の兆しが見えてきた中で、北朝鮮との話を出されたのは、どういうふう理解したらよろしいのでしょうか。

海部 それはあの時は、日本の周辺を眺めて、複雑骨折しておる日本の外交から見ると、その一番近い焦点は北朝鮮である。当時は拉致問題がこんなに具体的にテーマにもなっていないときでしたが、核の問題だけはいろいろな情報が入ってきておつて、心配もしておつた。北と日本とのあいだの関係は、将来のアジア太平洋の平和と安定にも欠くべからざる要素になる。そこで、できたら北朝鮮とのあいだは国交を正常化したい。国交正常化するにはどうしたらいいだろうか。

これはこの前もお話し申し上げたと思うが、当時自由民主党には「北朝鮮との国交正常化を考える議員連盟」があったんです。その会長が久野忠治という人さ。これは愛知県のおじさんだ。僕のところに来て、「海部さん、いまええチャンスだからやりなされ。北は待つとるんです」という。「何を待つておるんですか」と言ったら、「国交正常化だ」と言うんだな。そのときに、「向こうも国家だから、苦しい、厳しい、物をくれ、金をくれとはいきなり言えないから、そこは日本のほうで眼光紙背に徹して、どうだ、こういうことがないか、といって投げてやれば、向こうも応えてくるだろう。けれどそういう話し合いをして北の本国が素直に受け取るようにするために、日本が北に対して敵視政策をしておると北はとつておるから、北の国民、北の学者や政治家を、なるほど日本も変わつてくれたな、と安心させなければならぬ。そのためには、国名を正確に日本は言うようにしてもらいたい、それが一番わかりやすい」と言つたんだな。

楠 それは誰が言つたんですか。

海部 久野忠治のところに言つてきたのは、日本にある総連の責任副議長だな。

楠 そこから国名を正確に言つてくれと言つてきたんですか。

海部 責任副議長というのは、帰つて行くといつても必ず会えるんだそう。許宗萬だ。久野さんが、それに会つておることもわかつておるし、ここでだけ言いますが、その許宗萬がいつペン僕にも、「正直申し上げて、話を聞いていただきたい」ということだ。「けれども訪問してもらつても困るよ、官邸に入れるわけにはいかんから」。そこでズバリ言えば、「僕はホテルではかのお客さんと会う約束がある日程、マスコミにすでに発表してある日程の前後のところで、ホテルに連れてきておれ。久野さん、あんたがついてくると目立つから、また北朝鮮だという札付きだから、それはいかん。だから許宗萬一人で来られるようにしなさい」と言つて、帝国ホテルだったか、ある会合をやったときに、僕が部屋を押えておいて、そ

の部屋に行つて、そこで会つてあげましょう、ということにしたわけです。

そうしたら、全国紙の五大紙の一つで、許宗萬としようつちゅう連絡をしておつた、政治部の責任ある立場の人が僕のところに来て、「今度、あの許宗萬と会つていただくそうで。しかしそれは、向こうにもきちんとさせなければいかん」という。「それにはどうしたらいいんだ」と言つたら、「クノチュウ（と新聞社の人は呼び捨てにしますが）の手柄にしてもなんにもならん。日本の問題だから、それは一回消しましょう。そしてわれわれが中に入つてきちんとやります。そのほうがマスコミだから信用がある」という売り込みがあつたわけです。

両方とも前から知つた人で、両方とも顔を立てるわけにはいかんけれど、半分ずつ顔を立ててやろう。「君がそんなに連絡できるならば、いっぺん許宗萬のところに行つて話をしてくれませんか。ただ官邸で会うわけにはいかないし、新聞社の人の目につくようなところで会うわけにもいかん」と言つた。どこで会つたか忘れたけれど、「ある料亭でほかのお客さんを接待しておるときに、そこへ来ておれ。そうしたら席を外して、話をしてお客さんをまた先に帰せば新聞社はまけるから、そこで話を聞こう。そこへ連れてこい」と言つたら、本当に連れてきましたよ。

伊藤 それは新聞社の人が、ですか。

海部 新聞社の人が。

伊藤 ということは、当然新聞社にキャッチされるといふことですね。

海部 けれどそれは信頼関係のある新聞社だから。「お前、いいか、命を賭けるな」と言つたら、「命、賭けます」と言う。それぐらいのことをやらなければ、この問題は打開できませんから。それは前からよく知つているやつで、信頼関係のある人ですから。

楠 じゃあ、それは当時の新聞にはまったく出なかつたんですか。

海部 出なかつた。まったく出なかつたから、よけい信頼している

んだ。

楠 先生、どうも私からわからないのは、北朝鮮のような国と国交を回復しても、自由に往き来もできなければ、何も状況は変わらないんじゃないかという気がするんですが、国交を正常化することによる具体的なメリットはあるんでしょうか。

海部 あの国と国交正常化して、物のメリットがあるとか、貿易のメリットがあるとかいうことではなくて、一つだけ、当時のパスポートには「Without North Korea」と書いてあつたんだ。だから日本の外務省が、政治的に国民の保護を要請することのできる相手国の中から北朝鮮だけ除かれておる、ということ、関係としてはいびつである。だからそれは、できたら直したい。そのためには、一切の条件をつけずに話し合いを始めなければならん。その中で国交正常化の問題をやらなければならん、というように、大きな筋書きはあるんです。

けれどそんな頃から、ちらちらとではあるが、問題はあつたわけだ。北朝鮮は危ない国だとか、連れて行かれた人がおるとか、いろいろ話がありました。当時すでに警察が僕のところへ飛んできて、「拉致されたのがこれだけありますから、どうぞ言つてください」という。それは当時、警視庁も相当な資料、材料を用意しておつて、何年前にどこの海岸で誘惑されてどうなつた、そのときの前後の事情から何から、証人から何から全部持つていて、「拉致されたことは間違いないから、言つていただいて結構です、恥はかかせません」という。

だから僕が許宗萬と会つたときも、「身元がおかしくなつたことを日本の国内では調べて、どうもあんなの国に連れて行かれていたみたいだ。確認はされていないけれど、情報がある。それを出しますよ。それに対して納得の行くような答えができますか」と言つたら、「そんなことはしておりません」と言う。もちろんそうだろうな、あの時は。

ちやうど当時、ラングーンの爆破事件が起きたでしょう。「ラン

グーリーの爆破事件などは、われわれは全部おかしいと思っておるんですよ。それから李恩恵さんの問題があったな、あれは日本人じゃないかという正確な情報もあって、そういったことを全部俎上に乗せて、国交は正常化しなければならん」と言ったら、「その次までにご返事します」と言いながら、すぐに彼は「いっぺん北朝鮮と連絡をとるから、数日暇をください」と言ったんだ。それはいいですよ。けれど中に入った人に言わせると、北にいっぺん、いろいろな話を持って、行って来たんだそうですね。ところがそのときにはまだ、これは秘密警察や軍部がやった行き過ぎたことであつた、というようなどころまで踏み切っておりませんから、「そんなころはありませぬ。ありませんし誰かがデマを言っておるんでしよう」ぐらいのことしか言わなかつた。

ただあのとき、非常に国内の食料事情も厳しくなつておつたんですね。だから言にくい話だが、言わなければわからんだろうが、加藤紘一に頼んで、いくらか食料援助を頼む。加藤紘一では限度がぎりぎりなので、と言つておつたら、なんとかいうお使いがいるな、加藤紘一のお使いだ。それはアメリカがみんな掴んで、僕のところに入れてくれたんだけれど、「こういう人物がおる。ただそれは食料援助だけみたいですから、日本が隣国のため食料援助を出すとおわかりでおやりになるのなら結構です。出してはいかんとはアメリカは決して言いません。アメリカだつて出さなければならんときは出すほうですから」という。

■対北朝鮮交渉2 (正式国名)

海部 そんなことまで話しておいて、やつただけけれど、残念ながらそこからは一歩も進まないわけだ。そうしたら向こうの出してきた条件は、「本国にも行ってきたし、本国では首を長くして待っておるから、略称だけはまずやめてもらいたい。日本が北朝鮮敵視政

策をやめて、本当に正常化を望んでいらつしやるならば、わが国の正式な国名を、それとわかるように公の場所で、できたら僕にあなたがこの次おやりになる国会の演説の中で、北朝鮮という言葉を使わずに朝鮮民主主義人民共和国と発言してください」という。

そこまで言われると、こつちもしょうがないから、もういっぺんクノチュウを呼んで、「久野さん、北朝鮮と言つてはいかん、朝鮮民主主義人民共和国と言えば、日本が心を開いたふうに向こうは受け取るのか。そんな重要なシグナルになつておるのか」と聞いたら、久野さんはあまりそのところは詳しくなかつたね。「ただ政治的に、そういうふうに言つてやれば、海部さん、世の中も変わったと思うだろうな」ぐらいのことだつた。

楠 公式の場で、総理大臣が北朝鮮の正式名称を言うということは、それまでなかつたんですか。

海部 なかつた。

楠 よくマスコミでは、一度だけ正式名称をいって、そのあとで北朝鮮と言つたりしますね。

海部 あれはマスコミの立場であつて。

楠 そうですか。総理大臣は北朝鮮としか言わなかつたんですか。

海部 言わなかつたんだ。「北朝鮮」とか、「北の朝鮮」といって「の」の字を入れた人はあつたけれどね。

伊藤 North Korea ですかね。

海部 だから直訳すれば北朝鮮で悪くないんだ。けれども向こうとしては、朝鮮民主主義人民共和国というのが正式な呼称だから、それすら知らん国民が日本には多いから、そういったことを正式な場所では総理自身の口から言つてもらおう。一番それがわかりやすいのは施政方針演説のときに言つてもらおうと、ああここでギアが変わつたんだな、と受け止めます、と言つたな。

楠 ちゃんと言つたんですか。

海部 言つたんだ。その速記録もちゃんと残してあります。しかも紙に書いて持つていって、朝鮮民主主義人民共和国と言いました。

間違えるといかんから、本会議の議場に上がっていくときに、原稿の一番上に一枚持つていって、間違えんように話しました。そのとき、その新聞の政治部の某実力者は来ておりましたよ。そして終わったらすぐ飛んできて、「言っていただけでよかった、あれで大きく変わりますよ」とかなんとか言っておったが、あまり変わらないんだな。

伊藤 アメリカに行ったときには、ブッシュさんともその話をされたわけですか。

海部 そこまで細かくは言いませんが、日本側としてもいろいろな筋を使って、敵視政策をやめてくれと言ってくるけれど、こちらは敵視しているわけでも何でもないの、国名ぐらいはきちんと呼んでもいいよ、といって、私の施政演説もそれで言ったけれど、そんなことがいくらマイクに乗ったって、それが理解できる北朝鮮の人はほとんどいないはずだけれど、上のほうの人には、確かに変わったんだということになるから、それは言いました。

ところが意外と、日本の新聞には、これが態度変更につながるんだという解説や見出しはあの頃つきませんでしたね。僕のところに行ってきたところは、総理大臣が初めて正式な名前を呼んだといって囲み記事で書いたけれど、けれどもそれはそれで後追いが無いし、忘れた人が多いと思う。けれども、そこで僕は「逆に打ち返してこい。君がそういうことを言ってきたから、おれはこのあいだ言っただけじゃないか。あんたは傍聴席から見とおって、にっこり笑って領いておったじゃないか。僕は君に言われたから言ったわけじゃないけれど、正式な名前があるのに、略称ばかり使われたら、それは言われたほうは気分が悪いだろうから、だから正式に言ったんだ、民主主義人民共和国と」。共和国でもいいというが、そんなことはいかん、ちゃんとそう言います。ただ、名は体を表わさなくなっちゃうから。そうでしょう。

伊藤 逆説みたいな話ですからね。

佐道 民主主義でも共和国でもないですからね（笑い）。

伊藤 王国だろう（笑い）。

海部 それで、そのときはそれをやったけれどいかなので、「君のところには、こちらが言われたようにイニシアチブをとっていい関係をつくりたいと思って、いくらシグナルをあげても、返事も反応も来ないじゃないか。いったい上まで届いておるのか。どうも許宗萬がいろいろ言うけれど、それから某新聞社の政治部の実力記者が言うけれど、あなた方のところで止まっているんじゃないか。最高幹部のところまで直接報告が届いていないんじゃないか」。日本が態度を変えると注目して見ているシグナルはそれです、と言ったなら、少なくともそれに対する反応ぐらいはなければいかなが、何も無いんですね。

■対北朝鮮交渉3（韓国の対応など）

伊藤 結局、海部内閣の時期には、それから全然前進せず、ですか。海部 前進せず、です。そこで金丸さんが行きたいと言ったときも、「こういうことがあったから、金丸さん、気をつけて行ってください」と言ったら、「よし、わかった」という。それであの頃一番問題になったのは、アメリカが非常にこのことを気にしておりますから、「細大漏らさずアメリカとよく連絡をとってからお話をしますので、外務省のアメリカ局長なり誰なりに、いろいろなことをレクを受けてから行ってください」と言った。あの人はようしゃべるものだから、「補償と償いの問題は、こういうことで少なくとも条約上は、前の日韓のときに片付いておるんだ。だからこれ以上はそこに出すわけにもいかな。しかも北朝鮮と日本とが戦争をやったというでもないし、だから性格、湿度が全然違うことだから」と言っただけ事前によく頼んだのに、「よしわかった、そこだけ気をつけてくれればいいんだな、よしわかった」なんて言っておったのに、行ってご馳走になったり飲んだりしているうちに、ワー

ツとなった。

楠 マスゲームを見せられて。

海部 「任せておけ」といって、四十五年の償いと謝罪をやっちゃったんだな。

伊藤 戦後まで含めて、ですな。

佐道 先生が朝鮮民主主義人民共和国という名前ですわとか、シグナルを送るといふような場合には、官邸の中では先生のほか、どの程度のレベルまでご存知なんですか。

海部 あの時は両副長官、それから外務次官を呼んで、外務次官のご報告の時間を利用して、そこで、「こういう連絡もあるけれど、おれはそれはやってやってもいいと僕の気持ちとして思う。自分が納得できないことはしないけれど、正式に名前を呼んでくれと言われたら、正式の名前があるんだから、呼んでやってもいいんじゃないか。ただし、施政方針演説の初めのところで一回だけ言うんだから、いつもいつもほかのところで言わんから、それはそのつもりでおれ。ただそれが、一つの大変なシグナルになるんだというから」と言った。

私はあの頃、委員会でも答弁したことは、「日本は平和外交だとか敵国はつくらないとかいろいろ言っておるけれど、一番近いところろに妙な関係の国がある。ここは喉に刺さった骨だから、この骨を抜いて、整理していくと初めてアジア全体とのあいだの等距離平和外交もできるようになるんだ」ということです。

楠 韓国からは何かクレームはつかなかつたんですか。

海部 韓国からクレームはついたけれど、それはクレームというより希望であつて、韓国というのは、そういうときには「やってください。韓国はいつの日か北とは仲良くしなければならんと思つているんです。日本が北とそういうふうによつていただくとしても、事前にこれだけアメリカと連絡をとられ、韓国とも話をしてもらうならば、よろしいからやってください。むしろやっていたことの方が、われわれにとつてはいい」という。ある程度外に漏れてもい

いような外交辞令かもしれませんが、盧泰愚もそう言った。

楠 それは施政方針演説で正式名称を言つてからの話ですか。

海部 それは言つてからの話だけれど。

楠 事前に韓国とは――。

海部 韓国の了解をとつてから、というわけではありません。アメリカには言つておいたけれどね。正式の名前を言うよ、と。それは正式な名前があるんだから。

伊藤 それに対しては別に何の反応もないですか。

海部 何の反応もなかった。

楠 同じ盧政権でも、いまの政権ならわかりますが、このときは盧泰愚政権ですから、何か文句が来るような気がしますが。

海部 盧泰愚という人はその点は、仲良くしようという基本が心の中にあつた。僕が驚いておるのは、指紋押捺の問題の片を付けたのも、盧泰愚と僕のとときですね。けれども盧泰愚は、「それは未来志向で行きましょう、今日まで日韓関係を阻害しおつたのは話が後ろ向きだからです。歴史に起因した問題は、ここで一切不問に付して、未来志向オンリーで行きましょう」と言ってくれたけれど、たちまちまた戻つて、やれ慰安婦の問題だとかなんて、盧泰愚が替わつたらすぐに歴史に起因した問題に戻つていったけれど、あれは間違いだったと思うな。

伊藤 僕らは韓国、韓国と言つていますが、あれも正式名称を言うんだつたら大韓民国と言わなければいけないでしょう。

海部 そうですよ。

伊藤 中国と言つていますが、中華人民共和国と言わなければいけないでしょう。普通の新聞でもみんな、北朝鮮は朝鮮民主主義人民共和国と書いて、中国は中国、韓国は韓国と書いていますね。

海部 それは相手の国の成熟度によつて、反応・反発がないとか、それでいいという了解があつたところと、そうじゃない、変わつていくところと分けてつき合わなければならん、という感じがしたことは事実です。

楠 北韓と言わないだけ、まだましじゃないかと言いたいですね。
伊藤 金丸さんの問題はまたあとで別に伺いたいと思いますが、北朝鮮問題は、海部内閣のときは、そういう接点はあったけれど、前進はなかったということですね。

海部 結局はなかったんです。こちらは大変に決心したけれど。
伊藤 久野さんという人は、まるで向こうの使者みたいな感じですよ。どうなっているんだろうと思うんですが。久野さんというのはだいたい少し右がかった人じゃないですか。

海部 佐藤栄作の家来ですね。それで新幹線ができた頃に、電車に乗ると、「海部さん、いらつしやい、こつちに」といってお尻「のポケット」から銀のウイスキー入れを出して、「飲みなさい。一杯飲むと、えりやあ元気が出るですから。これは焼酎に朝鮮人参が漬けてあるんだ」という。「おれは先生、弱いから飲まんぞ」「いやそんなことを言わずに、これを持っ歩いておった人ですからね。僕もいんだ」と言って、それを持って歩いておった人ですからね。僕もちよつと舐めてみたけれど、なるほど焼酎の人参漬けになっておるんです。その息子が、このあいだ辞めた統一郎だ。

■湾岸戦争14（戦端）

伊藤 北朝鮮問題はまたあとでお話したくことにして、さっきの湾岸諸国「歴訪」ですが、ここである程度具体的な約束などをなさったわけでございますか。

海部 お金の面は、はい。

伊藤 だいたい向こうの要求にある程度応じましょう、ということですね。

海部 応じましょうと。向こうが正直に告白するんだから。ただしそれまで、こちらもだいたいこあたりしてみなければ、日本の旗を見せてくれといわれても、日本の印の付いた飛行機で運んでくれと

いわれても、とてもできなかったんだ、あの頃は。ちよつと話したように、四輪駆動車を運ぶ船さえ、二日間知多半島沖で拘束されたぐらいですから。それぐらい組合の力も強かったし、野党の抵抗も強かったということです。だからアメリカのエバーグリーンという飛行機をチャーターして、そのチャーター機のお金を日本政府が払うということ、やったんです。

伊藤 そして九一年一月十七日に多国籍軍がイラクに入っていくわけですね。それで「湾岸戦争」（僕は第一次イラク戦争だと思ってるんだけれど）と呼ばれる戦争が始まります。アメリカがやるだろうということは、みんな予測しているわけですね。だけどこの日にやるということは、事前にはわかっていたんですか。

海部 これもまた、まことに奇妙な話ですが、だいたいその日になるだろうということは、気象学的に月が明るく照らす日だったので。

伊藤 月が明るい方がいいわけですか。

海部 明るくないと、何も見えんでは困る。

伊藤 しかし普通は、「夜陰に乗じて」というじゃないですか。

海部 それは裏をかくわけです。夜陰に乗じて暗い日に来るだろう、ぐらいに思っ待ちかまえているところに上がっていくやつは馬鹿の骨頂だ。その話は、大変な海軍の作戦将校から聞いた。言っているかどうか知らんが、瀬島龍三さんがおれに教えてくれた。

伊藤 じゃあ、陸軍じゃないですか。

楠 瀬島さんは陸軍ですね。

海部 海軍の話で、上陸作戦はこうですよということを、瀬島さんが教えてくれたんだ。だからだいたい、月明の日は十七日、当たらずといえども遠からずです、という。

伊藤 でもアメリカとのあいだで情報交換をやっているわけでしょう。

海部 やっている。

佐道 当時の日本の新聞は、かなりぎりぎりになるぐらいまで、本

当に武力行使があるのかないのか長い間議論していたという記憶があるんですが、政府としては、アメリカとの情報交換の中で、武力行使が必至だということは、かなり前からわかっておられたわけですか。

海部 日にちはまた手帳を調べなければいけません。

伊藤 だから手帳を見せてください（笑い）。

海部 キッシンジャーが来た（一九九〇年九月の来日時のこと）。そのときキッシンジャーが言ったことが、やっぱりやるんだ、ということですよ。やらないと、最後は五十五万になりましたが、あの頃は五十万近くの兵を動員して、すでに一部は戦闘の配置につけて、砂漠の盾作戦というのはたしかあの時の話で、一人当たり一日二リットル水分が要る。ペットボトルの大きいもので一人当たり二本だ。五十五万人行っておいたら、かける二でしょう。ものすごく膨大な量が要るし、第一線に配置して、ここで、さあやめた、兵を退けというタイミングはすでに過ぎ去っている。だから、いつ始めるかの問題だけで、やるかやらんかはもう決まっています。ただし、始めても、オーデル・ナイセを超えて進撃することは決してしません、という。

伊藤 それはキッシンジャーの話ですか。

海部 キッシンジャーの話です。キッシンジャーはあの頃アメリカのどこのシンクタンクに属しておったか知らんけれど、えらいいろいろ知っておって、自信ありげに物も言っておった。結果として、キッシンジャーが言っていたことが、あとから顧みると当たっていたということですね。

伊藤 それは多国籍軍の攻撃が始まるだいな前ですか。

海部 だから僕はだいな前から言っていたんだ。始まってもそういつまでも長引かんよ。なぜかといういとキッシンジャーはこの延びきった兵站線は兵の士気に関わる。兵の士気が衰えたら戦争にもならんし、犠牲者が出て本国に帰る「麻の袋」が増えると、本国の厭戦気分も出てくる。だからそんなに長期はやらないし、何よりも、

オーデル・ナイセを越えて行けとは言っていないから、だいたいわかるだろう。

■湾岸戦争15（開戦と支持表明）

伊藤 とにかくあの湾岸戦争で、いままでの戦争概念とすっかり違った戦争になったということですね。

海部 ピンポイントですからね。ピンポイント爆撃をやるわけですね。それが精度が落ちてきたのか、軍人の訓練が不足になってきたのか、ピンポイントを間違えて、ほかのところにも打ち込んだとかないかという話もありましたが。しかしあれだけきちんと結果までテレビに載せて、出せるものは世界に見せながらピンポイントでやっただから、相当自信があったんだと思う。ブッシュ自身の言葉の端々にも、「トシキ、心配してくれるな、武器弾薬を出せとは言わん」「というニュアンスが感じられた」。

あとから解説をしてくれた補佐官の話によると、「あります、テストもしていないような遊撃弾がいっぱいありますから、今度の湾岸戦争は、日本はもちろんのこと、外国から武器も弾薬も全然いらん。だからブッシュ大統領はああいう強気なことを言っておるんです」ということだ。「そうか」と言っておいたら、今度はアメリカの議会のほうから、ロス上院議員とか、こちらの大使の奥さん、ナンシー・カッセルブームという上院議員が、当時は新しかったけれど、右翼だったんだ。右翼の婦人議員の連絡というのは相当確度が高いはずだけれど、「やらなければならんし、やるし、やるけれども、あるところで一旦収まって退くから、とことん全部やりはしない」という。キッシンジャーに言わせると、「全部やると今度は力の空白を利用して、よけい悪いのが出てくる」ということだ。これはカダフィのことを言っていたんじゃないかと思うけれどね。そうしたら人によつては、それはイランの話ではないかという。

ちよつと脱線していいですか。このごろ新聞を読むと、「二〇〇三年に始まったイラク戦争のことを」大義なき戦争だとか、大量破壊兵器が見つからないという。それが今度の戦争の問題だ、ということがオールモーストの議論の根底になつていけるけれど、僕はもう一つ欠落している問題点があると思うんですよ。というのは、本当の核兵器は、そう簡単に持ち運びできるような軽いものでもないだろうけれど、大量破壊兵器のほうは、核だけではなくて生物兵器や化学兵器がある。しかもこのごろは、フセインは全然持っていないかつたんだ、というふうなフセイン善玉論まで書く人がおるけれど、あれはクルドなど自国の住民にも使つたという歴史的事実があるわけで、みんな知っているわけでしょう。

そうしたら、中東のわかりにくい国で、そういつたものをいつまでもフセインが持つておるとは思われん。入つてきたら、やがて見つかつて取られてしまう。それならいまからどこかに預けておけ。たまたま預かりましようといつて手を出したのが、隣のイランだつた、ということでしょうね。イラ・イラ戦争をやりながら何だと思つたら、あの国は裏では絶えずアンダー・テーブル・シェイク・ハズの国だから、そんなこちらの頭やこちらの良識で物を言つたら間違えますよ。現にこのあいだまた資料を調べ直したら、百を超える数の飛行機が飛び上がつて、対空砲火を受けないでイランに着陸して、地下壕に入つていつているんですね。

佐道 この湾岸戦争のときですね。

海部 そうです。それでアメリカが気づいて、追いかけて落としたのはせいぜい十数機、一割に満たないというんだね。それらが逃げていくときに、人間だけ積んで逃げていったのかな、と思えば、そうではない。人間は残つておつたわけだ。そうするといまごろ探したつて、残っているはずないじゃないか。あれが終わったときに、全部運んで隣に持つていったんじゃないか。あるいは隣を経由して、そこからどこに行つたかわからんよ。そこまで追跡調査をして、なるほど腹にストンと入るような説明や解説はいまだに一度も聞けな

い。なにかそこらへんに、もう一つ奥があるのではないか。伊藤 奥があるだろうと、誰だつて思いますよ。海部 けれど、それを明かした人もいないわけです。伊藤 ないんです。そんなことはわかるわけがないですね。本当に向こうの極秘中の極秘でしょうからね。

佐道 いまイランとかシリアが改めて問題になつているのは、あつちに流れたんじゃないかという話があるからですね。

伊藤 そうですね。だけどそれをアメリカがやり始めたら、どんどん広がつていきますからね。

佐道 それは大変なことになります。

海部 大変な広がりになる。だから僕はあの一点だけ。戦争の大義がない、大量破壊兵器が見つからないというが、見つからんのは当たり前で、どこかご親戚筋に持つていつちやつていけるわ。それは推測だけれど、推測にあまりある事実があつて、僕もあれつと思つて、もう一回今日資料を調べ直したり、僕のところはその話を持つて来てくれた防衛庁の某幹部も「それはそうです」と言つて、いまでも信じて疑わないわけだから。あのころ、サリンの問題が起こつた頃に、サリンというのは、元をただせば生物化学兵器の一種ですよ。なるほどね、と思つていろいろ聞いたことがありますから。

伊藤 あいつらが作れるぐらいですから、国家の力では作れますね。海部 サダム・フセインはいまは持つていないだろうけれど、逃げるときは、みんな運び出せ、運んでおけ、といつて持つていったと思ひますよ。だからいま、どこかでサリンの滓があつたとか影響が出たとか書いてありましたが、どこかに集め残した滓が残つておつたとしても、十何年経つておれば、その効力はガタツと落ちておるから、そう心配することはないというのが、このあいだ来た専門家の意見でした。だからこれから探しても見つからんということだと思つておいたほうが僕は正しいと思うが、しかしそれを除かなければ心配が取れないというので、日本はあれに踏み切つたわけですか

伊藤 それは当然ですね。湾岸戦争が始まるときに日本は政治的な支持をすぐするわけですね。だけど、それを予告されていたわけではない。「やりますよ、そのときは支持してくださいよ」ということを言われていたわけですか。

海部 「政治的な支持を明確に、トシキしてくれ」、これはブッシュから電話がかかってきて、言われておった。

伊藤 それは開戦の前ですか。

海部 前です。そして「いつ開戦するかについては、まだ腹を決めてないから言えない。だから必要なときは知らせるし」ということであつた。けどあの開戦のゴチャゴチャになったら、ブッシュから電話がかかってくるのを待つておるだけではないかにも受け身だから、それで中山外務大臣に「お前は行ってペイカーに会って、直接ペイカーの裏を取って報告せい」と言って出したんだ。「何月何日の何時とは言わなかったけれど、相応な決心をしております。だからもうあります」という電話が入った。さもありません、と思ったな。

伊藤 そして危機対策本部をつくるわけですが、それはあらかじめそうなった場合にこうするぞ、という準備をしていたわけですか。

海部 そうです。向こうはある程度事前に通告をしたつもりでありますよ。ただ一つ、あてが外れたのは、CNNの現場中継がNHKテレビで始まって、ペイカーから取った開戦時刻がまだ来ておらんに、もうやっておるではないか。あとから「外務大臣、何をやっておるんだ、おまえは」と言ったら、「いや、いや」と言っていた。それはCNNが現場でやり出して、アメリカの炸裂音が聞こえたのは、忘れもしませんが、日本時間で七時半です。通告を受けておつたのは日本時間で八時半頃に始まり、ということだった。ただそれは爆撃じゃないからね。攻撃が始まるということですよ。「攻撃が始まる」といってもよくわからんな。艦砲射撃でもやるのか」といったら、「そんな古いものではない」という。こっちはそう思うわな。そうしたら、パーシングIIを持っておる国だから、そういうものが使われるだろう。軍艦の上から撃ったんだね、あれは。それが

向こうから聞いておつた時間よりも一時間早く、CNNでいまいろいろ音がしてる。これは何だろうか、戦争の火ぶたが切つて落とされたんだ。それは僕らもみんな聞いておつた。もう始まっておるんじゃないか。外務省のアメリカ局長に、「外務大臣はどこにおるんだ」と言ったら、「まもなく現われます」とか言っておつたね。

佐道 それで八時半の時間に合わせてみなさん集合されていたんですね。

海部 そうそう。日本時間の八時半が危険ラインだよ。じゃあその前にみんな集まっておれ、と言つたので、七時前から集まっていた。そうしたらもうパラパラ音がした。現場からだね。CNNが一番早かつたけれど、その場で撮つて世界に流すんだから。

佐道 始まるときには一応、主要メンバーは待機して、それに備えようということだったんですね。

海部 そうそう。

伊藤 でも結局、「日本はアメリカから事前にちゃんとした情報を受けていなかったんじゃないか、何をやっているんだ」という声がありましたね。

海部 あつた。けれども、聞いておりました、内容はこうでした、なんていうことは言えんからね。だいたいそんな頃にあるだろうと思つて、外務大臣もあらかじめ派遣して、向こうの国務長官と前からの想像を超えた準備が進んでおりますし、いよいよあります。何月何日かは断言できないけれど、しかしできたら、そういった準備態勢をおさおさ怠りなきように。いずれにしても、今日明日が危ないと思ひます」ということだ。それは瀬島さんから聞いておつた、月が煌々としてくるのは何日の何時頃でということ、それなら未明なら大丈夫だなどというように、いろいろ合致したんだな。

■湾岸戦争16 (危機対策本部の設置)

伊藤 湾岸危機対策本部を設置するといつて、それはどういうものなんですか。

海部 官邸につくったんですね。

伊藤 各省から人を出させるんですか。

海部 もちろん各省から。中心になるのは警察と防衛、もちろん外務は窓口です。そこに、当時はいかなる加減か金もいろいろ要るだろうからといって、大蔵省も呼んだ。そうしたら党のほうは、むしろ入れておいてもらわんと困るぞと言いつつ出した。それはまた、大蔵大臣と政調会長が犬と猿だったから、「橋本」龍太郎と「加藤」六月だからね。六月も地獄耳で、「おとつちゃん」安倍ちゃんに、「ちゃんとやわんと。いいか、総理頼むよ。私もそばに置いておいてください」という。彼はそういう意味では、忠実な安倍の連絡係だった。

「加藤六月は」当時まだ珍しかった携帯電話というのを持っておった。黒いこれぐらいの大きいやつだ。そして、本当にあのころ安倍さんは、いまから思えば順天堂に入っておったんだ。「総理、そこに何時頃行つておりますから、ここにおつてくださいよ」と言つて、そこに行つて、その携帯電話から電話をしてきて、「いまここには誰もおりません。交換台を使つておりませんから、ばれることはありません。これから安倍に替わりますから、どうぞよろしく。私は席を外しますから」とか言つて、横で聞いておるに違いない。よく忠実にやつてくれた。それはその練習も前もつてあつたんだ。

伊藤 練習ですか。

海部 真意を伝える練習だ。それは携帯電話を使ってやるんだ。誰を閣僚に任命するかということで、自薦他薦が多い中から最後の判断は、「じゃあ安倍ちゃんに聞いてこい、安倍ちゃんが頼んだら入れるし、安倍ちゃんがいかにと言つたらその男はやめるよ」といつた。そうすると六月が「ちよつと待つてください。それはすぐ行つてきます」といつて走つていつて相談した。いまにして思えば、六つちゃんと仲が悪いやつだったものだから、ああ、こうなるように

事前にあれを入れたな、と思つた。病気になる、誰でも気力も衰えますからね。

楠 それは開戦直前の第二次海部内閣改造のときですか。

海部 あれは開戦直前だったかな。

楠 「一九九〇年」十二月二十九日です。

海部 じゃあその改造だ。それでえらい恨まれた人が出てきたといふことですけれどね。それはまあ仕方がない。おれの責任で駄目だと言つたんだから。それは安倍の意見を聞いたら、安倍があれは駄目だと言つたといつて、六月も「おれがしゃべると、総理も信用してくれんだらうけれど、わてがこの器械を持つていつて、安倍ちゃんからしゃべらせるんだから、これはわかつてちよつだいよ」と言つて、携帯電話を持つていつては、病人に説明して、「いま総理が聞いておりますから話してくださいと言います」といふ。それで安倍がそこで、「これは駄目だよ」とか、「これはこうだよ」と言つたら、その通りにしてあげた。

伊藤 いま「湾岸危機」対策本部に党も入れるという話がございますが、対策本部というのは何に基づいてつくるんですか。

海部 それは法令とかなんとなしです。例えば前例のあるような経済対策の閣僚会議とかは、党と内閣の両方が集まつて、そこで本部をつくつてやればいいんだ。けれどこういう緊急異例の非常事態の本部ですから、そこは融通無碍にという言い過ぎだけれど、入れるわけだ。

伊藤 必要な人を入れる。

海部 はい、必要な人を随時入れてやつていく。

伊藤 それは官邸の中の大きな部屋か何かをとるんですか。

海部 あまり大きな部屋はとらずに、小さい部屋を取つてね。小食堂とか、総理応接室とか、そういうところでやりました。

佐道 基本的に連絡調整の場所ということになるわけですか。

海部 まあ、そうですね。

伊藤 物事を決定するのは閣議でない駄目でしょう。

海部 もちろん閣議ですよ。閣議にかける前に、これに関する問題は安全保障会議にかけるんだ。けれども、安全保障会議とかにかけると、最初にちよつとお話したように、あのときの内閣の安全保障室長は自治省から連れてきておつたものだから、感度が悪いことおびたしい。おれが怒つて、「あんな者は替える」と言つたら、石原君が「官僚にとつてはこういうときに替えられたら——。何か次のときに必ず替えますから」と言つたが、「そんなこと言つたつて、待つておれんじやないか。なんなら石原君、君は副長官だから、内調室長の上の責任者だから、君が責任を持つてきちんとやれ」と言つたんだ。それで彼は最後まで、日本航空との裏の折衝とか防衛庁との裏の折衝とか、責任を持つてやつた。自治省上がりの地方のあれは、こういう切つた張つたの修羅場には向かんあ、悪い人じやないけれど、こういうときにはいかなあ、と僕は思つたな。

伊藤 対策本部の本部長はもちろん総理になるんでしようが、事務方の中心になつて動き回るのは副長官なんですか。

海部 本当は内閣の五室長の中でやるのが順当です。内政室長とか、安保室長とか、それから外政室長というのがおつたんだ。有馬「龍夫」君というのが、外政室長だ。

伊藤 外務省の人ですね。

海部 だから僕は、内政は本当は警察か防衛庁からとつたらいいだろうと思つたんだけど、いかにもギラギラする。だから自治省からとつておいて、全国の地方団体ともよく意志の疎通が取れる人が内政室長にはいいだろうと。

■湾岸戦争17 (被災民移送)

伊藤 それで、質問の五項目ですが、「戦闘開始三時間後に先生は記者会見をされて、被災民の移送を民間航空会社に要請する、特に自衛隊機を使用することも検討する」と述べられたわけですが、

被災民というのは具体的にはどういうことですか。

海部 あの頃は、幸か不幸か、最後にはあまり出てきませんでした。が、そういったことが想定されたんです。戦場になると、被災民が出てくるだろう。それから出稼ぎに行っている人もずいぶんおつたわけです。そういう人も出てくるであろう。そこで、すつたもんだの議論をしたんだけど、民間航空にそれをやつてもらおうと思つても、保険料を一気に高くしてくれんと保険会社がギャランティを出さないとかいう。

じゃあ結局、そこでぶつた屁理屈は、ずっと読んでみたら、「内閣総理大臣もしくはこれに準ずる者」を運んでもいいと書いてあるんだな。「内閣総理大臣もしくはこれに準ずる者」というのは、常識的に言うと、各省大臣だとかそういうものだろうけれど、一旦緩急あつた戦時国際法の中で、内閣総理大臣も人間だけれど、被災民も人間なんだ。人間という立場から考えたら、尊厳は同じじやないか。だから内閣総理大臣に準ずる人格者だということ、本当に困つている人は線を引いて運んでやつたらどうだろうか。僕は一所懸命そういう理屈を述べたんだけど、「総理、それは飛躍しすぎております。なかなか国会が通らんでしよう」という。ところが国会が通る通らんよりも、被災民が出てきて、本当に助けを求めているならば、それが緊急避難の状況にあたる時には、手を差し伸べるのがもつと高い次元の救済ではないか。自然法的な援助活動になるのではないか。

それから、あの頃国際なんか条約というのがあつて、被災民は助けなければならんとか、いろいろなことを書いてあるわけだ。だから、日本の飛行機にそういうところまで行つてくれといつても、日本航空も全日空も行つてくれないけれど、アメリカの命知らずの飛行機は行つてくれるわけだ。エバーグリーンというところだ。

そういうときに、いろいろなところで出た被災民を集めて拠点まで運んであげるために、想定したのはヘリコプターです。日本の持つていた大型ヘリコプターを持つていつて運んでやつたらいいじや

ないか、といったんだ。そうしたらそこで話がついて、そういう限定ならば、政令事項にしましょう、政令でそれを決めて、責任を持つならばよろしい、ということだ。これまた自衛隊法の一〇三条が何かに、オリンピックの応援団とか、まったく関係ないものが運べると書いてあるんだな。

そういうことも全部総合的に考えると、内閣総理大臣が人間の尊厳として、それに準ずるといふか、むしろ等しい人間だから、この際人間を助けるといふ意味で、戦場に架ける橋ではないけれど、戦場に出す救済のルートだということをやったらどうだ、ということ、政令を作ったんです。そして、そのへんでそういうことが起こったときは、大型機が発着できる拠点まで被災民を集めて回ることが出来る。政令は通りました。

伊藤 それは自衛隊のヘリコプターですか。

海部 はい。乗せて運んでくるのは、できればわれわれは日本航空に行ってもらいたかったんだけど、行けないときはエバーグリーンでやればいいじゃないか。輸送賃を払えばいいんだ。その前にバンングラデシュかどこかの傷病兵や帰還兵や交替のときに運ぶのも、エバーグリーンで運んで、金だけ払ったこともありすから、それはそれでいいではないか。

伊藤 このときは難民みたいな被災民はほとんど出なかったんですね。

海部 ほとんど出なかったんだ。出る、出ると言われておったけれど、幸か不幸か出なかったんです。

伊藤 イラク在住の日本人の救出問題というのはどうなるんですか。海部 それはちよつとこれとはテーマが別の問題で、人間の盾にされた人――。

伊藤 戦争開始のときには、南社の人たちはほとんど引き揚げているわけですか。

海部 いや商社の中の、言葉を気をつけて言わなければならぬけれど、調子のいいところは、何のかんの理屈をつけて引き揚げている

わけです。それから、引き揚げなかったところもあります。例えばアラビア石油とか。国境線のちよつと下「↓南」のところで、カフジの油田を最後まで操業を続けたんだね。そういうのも運んでやらなければならぬ、どうなんだ、という議論も確かにしました。

だから僕はあの時は、「議論をしておつてもしようがないから、できることはやろう。やった結果助かるなら助けよう。あとから責任をとれといわれたら、責任もとろう。謝れといわれたら謝りもしましょう。けれども見殺しにしたということだけはいかん」と言っただ。 「男子恬然を恥ず」――、それを決めたときに、ある友人が「君はいいことをやった。男子恬然を恥ず、何もやらなかったということを恥じる、よくやった」と言った。けれども何も運搬はしませんでした、そういうセイフティネットを張り巡らしたということがよかつたんだよ、ということに最後はなりますけれどね。

伊藤 結局、避難民が出なかつたから、さつきおつしやつた政令は、実際には発動しなかつたわけですか。

海部 発動しなかつたけれど、生きています。しばらく経つて、収まつてから、執行宣言もやりました。

伊藤 じゃあ生きてわけですね。

海部 生かさなければ、胸を叩いて大見得を切れません。任しとけ、といって、用意と準備だけはしたわけです。

佐道 自衛隊法を改正して正々堂々と行け、という議論もありましたね。

海部 そういう議論があつたんですよ。けれども僕は、自衛隊法を改正しているような時間も暇もないし、それからあの頃の議論というのは輻輳しておりましたからね。できたら政令で行こう。政令でやったって、いかんわけじゃないか。政令でやるということは、内閣が責任を持つということだから、それは責任を持たなきゃしょうがないじゃないか。

伊藤 このときは社会党はどういう態度だったんですか。海部 社会党はとにかく、「少な過ぎる、遅過ぎる」のおばさんが

まだ威張っておった頃ですから、「駄目ったら駄目よ」です。

伊藤 自衛隊は駄目、ということですね。

海部 はい、駄目。自衛隊と名の付くものはみんな駄目。

伊藤 前ほど勢力はなくなっていたわけですね。

海部 なくなっていた。もう一つは、たしか民間の援助団体が、向こうに行こうと思って、お金もどれだけあるのかなんとかかんとか言うから、「それじゃあエバグリーンという飛行機が一回行って帰ってくると、全部で二百五十万か三百万で、一機往復できるんだ。その金で雇って行ってくればいいじゃないか、やりなさい」といった。五百万集まったとか、六百万集まったとか、額は忘れましたが、そういうものの使い道がない。あまったもので援助物資を買って持っていくんだ。

そんな頃にいろいろな話があつて、実際に行つても、向こうでは「もう結構だ、来てもらわんでもいい」という。日本の民間団体の人が来たら、「今日は何人来ているんだから、何人分の飯はどこだ、食堂はどこだ、泊まる場所はどこだ」とか言う。自己完結力がない人が来てもらつても、はっきり言うところがた迷惑になる。だからああいうときにああいうところに応援に行くのは、自己完結力のあるものがない。

だから僕は、自衛隊を出さなければならんと思つたのは、せつかくそこまで訓練して、しかも入隊するときに、そういうことを顧みずやりますよ、という一筆を入れておる人たちだからだ。けれども自衛隊を出すことに対しては大変なアレルギーがあつたから、いまは新聞でよく言う民主党がしゃべつておる国連待機軍、名前はどうでもいいけれど、僕も自衛隊ではなくするために、服装も替えたらいいんじゃないか。それから自衛隊員のみならず、同じような自己完結力のある組織が日本国内にはたくさんあるはずだ。

伊藤 ありますかね。

海部 あるよ。例えば消防、警察。警察の機動隊、消防の特別隊。あるいは日本青年海外協力隊の帰国隊員。激しい外地に行つて生活

と労働に耐えてきておる。協力隊のことも僕は頭の中にくらかあつたものですから、答弁のときにああいう答弁がやれたと思うんですね。それが本当にできたら、いまからでも行けるんじゃないか、と思うぐらいた。

話は飛ぶようですが、いま自己責任の原則なんていることでちよつと脚光を浴びたけれど、民間のフリーライターといわれる人々が喜んで戦場に行つて捕まったり、泣き言を言つたりいろいろしておりますけれど、捕まるのはかわいそうだと思ふよ。けれども、ああいう戦場カメラマンになつて一旗揚げようとか、行つて向こうで記事を書いて自分のジャーナリストとしての出世の窓口にしようとか、そういう思惑もいくらかあるわけですよ。

伊藤 いや、いくらかどころか、ほとんどそれですよ。

海部 だから、外務省がここに来ては、「先生、あれはもう十回出している札付きです」とか、「何回も行つてはいかんと言つた札付きです」と言つて来るわけだ。けれどもあのとき、そういうようなことが実質的にできるならば、各界の代表が集まつて、それこそ自衛隊でない、日本の平和活動協力隊だとか、名前は何でもいよ、考えて、そして自衛隊が中心になつて、それに消防や警察や青年協力隊や、そういう自活自給能力を持つている人が行つたほうがいい。彼らも危なかつたんだろね。だから、報道したいとか、写真を撮つてきたいとか、そういう個人的な思惑のある人は従軍して、その訓練にもなるからいらつしやい。一緒に連れて行つて、寝たり起きたり薪割りをしたり、いろいろなこと手伝わせてしごけばいいわけだ。そういう気持ちがある、いまでもいくらありますね。

■湾岸戦争18（九十億ドル追加支援）

伊藤 戦闘が開始されて三週間ぐらい経つて、多国籍軍に対する九十億ドル追加資金協力を発表されるわけですが、この前もちよつと

お話を伺ったように思います。最初が四十億ドルでしたか。

海部 最初が十億ドル、それから周辺国援助という名目で二十億ドル、そしてさらに十億ドル追加した。アメリカの財務大臣、ブレイディがブッシュの伝言だといって飛んで来て、いろいろ話して窮状を訴えたから、「おれのほうも予算制度というのがあるんだ、真つ先に出せるお金は、どんなに橋本を脅かしても十億ドルしかありません。ない袖は振れないという諺が日本にはあるけれど、予算を通すまで待つておつてくれ。通したら、然るべきものをちゃんと応援するよ」といった。あの時はガソリン税の四〇%上乘せと、法人税の二%の上乗せを決めて、それを財源にして補正予算を組んだんですから。

伊藤 プラスした分は、どこから出てきたんですか。

海部 それはまったく別です。全体として、初め十億ドルといったのが少な過ぎる。本当にそうだと思うね。こつちもそう思った。もつと出してあげたい。そこで九十億ドルまでなつたわけです。もとは九十億ドルになって、枝葉の部分が周辺国援助で、トルコとかヨルダン、エジプトという友好的な国で影響を受けた国への支出が出てきた。それをやりましょう。そうすると、合わせてオール・トゥギャザーで百三十億ドルになるということです。四十億ドルと九十億ドルですからね。それをドルで決めてきたから、あとになつていろいろいろいろあつたということは申し上げた通りです。

伊藤 この九十億ドルも、当然追加予算で出さなければならぬわけですね。

海部 それは、財源は二%の特別法人税の加算と、四〇%のガソリン代のアップと、両方合わせて、九十億ドル・プラス・サムシング・モアをつくつたんです。それは為替差益分を出さなければならぬから。約七億ドルちよつとあつたと思ひますけれどね。それも全部耳を揃えて払うためには、そうなつたんだ。大蔵省は出す必要がないといつたけれど、「大蔵省が言つたつて、お前のところの親玉が行つて決めてきたことだから、禰の締め方が足りなかつたのはお前

のところの親方。よく相談してこい、腹を括れ」と言つたら、「はい」と言つていた。外務省はもつぱら、「それで結構ですよ、差益分は払う必要ありませんよ」と言つておつただけけれど。

伊藤 差益じゃなくて差損ですね。

海部 差損だ、損したんだから、わがほうは差損だ。七億ドルプラスαの差損でした。ああいう国際的な為替差益とか為替差損ということは、口では言つておつたけれど、実感したのは初めてですからね。

伊藤 そうですね。額がでかいですからね（笑い）。

佐道 額がでかいですからね。いまの銀行預金と違いますからね。九十億というのは、アメリカ側の要請の額ということになるわけですか。

海部 いや、九十億ドルといつたら駄目だと。言われた通り出すわけにはいかん。だから、阿吽の呼吸で、だいたいこれくらい出したらお前のほうは拒否しないな、日本国内で少な過ぎる、なんていうのが多いから、これだけ出したらいいよ。あの時は百億ドル出せと、タシマルクになる。丸く足して百と言つておけば、あと追加されたときに、全部出したからと言えりゃないか、という勇ましい意見もありました。それは加藤政調会長の意見さ。だからみんなが、龍ちゃんや九十で胸を叩いてきたから、加藤はそれが気に入らんから百にしろと言つたんだ、という裏話があつたくらいだ。こつちも出すならば、九十億ドルのほうがいやすい。あの頃はそんなことですよ。

というのは弾が何発使うのか、戦争がいつまで続くのか、どれぐらいどうなつていいのか、専門家でないからわかりません。だから例の作戦指導参謀さんたちは、「第二次、第三次が来ることを、総理、覚悟しておいてくださいよ」という。「ああいいですよ、しようがない」。ただ国民のみなさんが受けてくれるかどうかかわかんけれど、もうちよつとお願ひしますよという場面が来るかもしれない、そこまで覚悟はしておりました。正直にしやればわかつて

もらえるものだという気持ちでした。

佐道 一月十七日に戦闘が、ミサイル攻撃とか空爆とかで始まって、地上戦が始まったのは二月になるわけですね。十七日にアメリカの攻撃が始まった時点で、アメリカからの情報はいろいろあるんでしょうが、官邸でも湾岸戦争の推移、展開について、予測として、どういう展開になりそうかというシミュレーションはなさっていたわけですか。

海部 みんながそれぞれの筋道があつて、やっていますけれど、私は、いろいろブッシュさん本人の電話や、さつきちよつと言ったキッシンジャーが解説をしてくれた話や、瀬島さんが解説するいろいろな話を総合的に勘案してみると、ブッシュは、「トシキ、そんなにいつまでも長期間にはならない。（いまとまったく違うわ）。ちゃんと片付けるから、心配せんで見ておつてくれ」という。

佐道 いまのイラク問題も、こんな長引くとは思っていませんでした。

伊藤 いや、政権を残して、ここで線を引いて終わりにしたわけですから、後片付けをする必要はないからいいわけですね。今度は全部やっちゃったから、後始末もしなければならぬわけですね。

■日米構造協議（九一年四月訪米）

伊藤 このときは、だいたい四月十一日に停戦になるわけですが、海部先生がアメリカに行かれた四月三日あたりには、だいたい先が見えてきていたと思うんです。そんな状態でございましたか。

海部 だいたい先が見えてきていました。もつともアメリカは、初めから脚本通り済んだ戦争だと思つていますからね。いまから言えれば、力で行けば、全然大丈夫だ。

伊藤 あのとときも、行こうと思えばもつと行けたわけでしょう。

海部 行けたけれど、行くと、それはバランス・オブ・パワーの原

則が崩れて、もつと悪いやつが出てきて、もつと悪いことが起こる。サダム・フセインの力は温存しておいて、サダム・フセインを使つて。一番力が強いと向こうが言っておる本土防衛隊とかいう直轄部隊は、サダムの下に無傷で置いておけ、そうすると、近所の国からちよつかいをかけられても、独立自存ができるだろう。そういう判断だったと、僕は僕なりに解釈しておりますね。

伊藤 それを今度はぶつつぶしたわけですから、えらいことですね。その四月三日に、先生は首脳会談のために渡米されたわけですが、これは具体的にはどういうことが議題というかテーマだったんですか。

海部 あのとときアメリカは、これは終わったと見るわけですね。近くというようない方はしませんでした。もうこれは終わったんだから、先のことをひとつ考えようということ、なんとか言つたな。

伊藤 中東の新しい体制のことですか。

海部 そうです。世界の。当時はヨーロッパ諸国とも意見の対立はありませんでしたからね。

伊藤 まさに多国籍軍ですからね。

海部 そうです。そしてヨーロッパのほうも、アメリカに、よし頑張つてくれということですから、一番よかつたんじゃないですか。

そして、そのときは日本にはよくやつてくれたと感謝をして、それ以上のことは言いませんでした。

楠 私の資料には、「初めて公式にコメ市場開放をアメリカ大統領が要請」と書いてあるんですね。

海部 それはありました。

伊藤 なんだ、戦争が終わつたらすぐそれか。

海部 それはどこで言われたかという、彼の別荘に呼ばれていったときです。

伊藤 それがニューポートビーチなんですか。

海部 ニューポートビーチです。コメの開放のために、僕は事前に党内の調整は済ませて行きました。そしてそのときに有名なセリフ

は、「よし、海部君、何でもいいから決めてこい。アメリカあつての日本だから、日本あつてのアメリカじゃないから。アメリカがやってくれと言うときは、よほど困ったことじゃないと言わないから、コメだろう。胸を叩いてこい。あと党内がゴタゴタ言ったら、おれが責任を持つ」ということだ。

伊藤 誰がですか。

海部 金丸。

佐道 そういうことを言いそうですね（笑い）。

伊藤 あちちに行つて胸を叩いて、こつちでも胸を叩いて（笑い）。

海部 そういう点は、あのおじさんは本当に頼りがいがある人なんだ。政府与党の連絡会議でも、おれが「おとつちやん、このあいだ頼んだことを言つてちょうだいよ、ここで」と言つたら、「よし、わかつた。——何だつたつけ」という。「コメの話です」「コメぐらいはやらなければいかん。日本あつてのアメリカじゃないんだ。日本は、アメリカあつての日本だ。そこをみんな間違えるな。答えは、だから、やつてやれ」という。農林大臣が洗い顔をしておつても知らん顔している。あれでだいたいそういうふうに決めていったんですね。「基本的にコメ市場は開けよう」と、誰かが言つてくれなければ開かないような状況であつたし、アメリカとしてみても、日本とのあいだでちよつとやらないと、アメリカの農民もそれに頼つてきたわけですから。ありがたいことに、あのころ日本はアメリカから農産物を一番たくさん輸入しているんです。

伊藤 農産物は輸入しているんですが、コメは一粒たりとも入れない。

佐道 実際には開放というのは難しいですね。方向はその方向しかないといつても、ウルグアイ・ラウンドでも、まだそのあとでもゴタゴタしますからね。

海部 よその国と同時履行の抗弁権というのものもあるけれど、アメリカはアメリカで勝手に保護している面がたくさんあるんだから。

伊藤 そうですよ。

海部 そうでしょう。だからそれをよくしてくれなければ。あの頃はいろいろ想定問答をもらつていつて、ブッシュにも言つただけれど、「そういうことを言い出すと、トシキ、きりがなくなるから、まず日本がリーダーシップを發揮して、こうやれ、と言つてくれると、みんながそれについて行くから、ついて行きやすいんだ。それはアメリカを助けることになるんだ。おれを助けるよりも、おれが議会といろいろやるときに（あの時はファーストトラックとか言つたな）、それを通して全部OKをとるから、日本がまず率先して、それでやつてくれ」という。

金丸さんは「それでいい、やれ。おれが責任持つ」という。そういう話は、アマコストを通じて金丸さんは話し合いをして、もう伝えていふと思うから、「海部君、行つたら言うから、ブッシュのほうは受け口になつてやれよ。それが世界の大きな流れだ」というような大局論を、おじさんはアバウトにぶつわけだ。そうすると当時の農業関係の渡辺美智雄だとか中川一郎、農林族の田沢吉郎だつて、みんな金丸さんに「そうだろう！」、と言われたらそれつきりなんだ。あれはありがたいおやじだった。

伊藤 海部先生の庇護者としては最大ですね。

海部 最大の庇護者だったな。

伊藤 竹下さんはどうですか。竹ちゃんも大丈夫ですか。

海部 大丈夫。

伊藤 コメの問題はなんとかしましょう、ということをやつたわけですね。

海部 「なんとかしましょう」じゃなしに、「日本にとつて農業というのは非常に大切な問題だから、よほど手順手管を考えてやつていかなければならんから、そうせつかに掌を返すように、明日返事しろとか、明日やれとか、それは困る。激変を緩和していく期間が必要だから、それは任せておいてもらいたい。しかも選挙を前にしてそれをやつたら、アメリカは日本の敵だという社会党政権ができますよ」「わかつた」「わかつたらちよつと静かにしておつてく

「ださい」。あの頃はコメだけでなしに、日米構造協議というひどい問題があったから、「構造協議のほうは私が責任を持っていろいろやる」と言っているんだから、見ておってください」。

佐道 構造協議のほうは、湾岸戦争が始まる前に最終報告が出ていますね。八月二日にイラクのクウェート侵攻がある、その前の九月六月ですね。今度はその実行をどうするかということですね。

海部 実行は、アカデミック・ディスカウントなんていう制度をやるために、大型電子計算機が売れるような話をもうちよつとコマースシャルベースに乗せてくるとか、いろいろな努力はしましたよ。それから材木の話でも、合板をどうするかということ、中には、中に入って細かく実務者会議でやりました。そういうことは石原官房副長官が一所懸命やった。

佐道 その四月三日の日米首脳会談の一番大きな議題は、何になるわけですか。湾岸戦争が終わる直前に先生がアメリカに行かれて、ブッシュさんと会談されるときですね。

海部 アメリカとの間はやつぱり構造協議でしょう。

伊藤 戦争の話ではなくて。

海部 戦争はもうさつき申し上げたように、向こうはもう終わった、勝った、相手にならん、あとは時間の問題だということで、さあ次はこれだ、ということだった。

佐道 もう次の段階に行っているわけですね。

海部 新しい世界地図をどうやってつくっていくかというように、このポイントに行っているんだと思うな。

■湾岸戦争19 (掃海艇派遣)

伊藤 海上自衛隊の派遣問題は、そこでは議論にならなかったんですか。

海部 はい。海上自衛隊を派遣したのは戦争が終わってからです。

伊藤 もちろんそうですが、もうすぐ終わるじゃないですか。

海部 なんとかしなければならんな、と思い始めた頃に、もうちょっと調べてみなければわかんないが、ドイツが回す行ったでしょう。ドイツの憲法裁判所が、それはいいことだと認めたから、ドイツの掃海艇が回り始めたわけですね。だからあの頃、国会のやり取りでも、日本もそれぐらいのことはやれるし、また日本が胸を張ってお役に立てるのは、日本近海の掃海活動で今日まで実績を上げてきていることだ。だからペルシャ湾に行ったら、状況はほとんど変わりが無い。

伊藤 海上自衛隊の一番の得意技ですね。

海部 任せといてくれというところだ。だから落合たおさ「掃海部隊現地指揮官」なんていうのは喜び勇んで、参加したわけです。

伊藤 それは前からやっていたというのではなくて、停戦になってから考えたということですか。

海部 いや、考えは停戦になる前から考えておったし、せめてお役に立てるならば、ここまではやってもいいというような内々の腹は決まっておった。それは、「よくご決心なさいましたね。それをやると世界中に対するあれも変わりますよ。何もこちらから攻撃を仕掛けたり、機雷を敷設に行ったりするんじゃないやありません」という軍事専門家のいろいろな話もあった。

けれどその頃、防衛庁の内部に、前にも話したかもしれないが、調べればすぐわかるな、早稲田から防衛庁にエリートが入って、一番出世したやつが飛んできて、「これはとてもできません。訓練を受けていません。そんな長距離の航海をして、とてもできません。裏庭に行つて掃除をしてくるぐらいのことは、子供の頃から親に言われてやっておりますが、そんな知らん遠いところまで行ったことはありません」と言うんだね。

伊藤 あれは小さい船なんですね。

海部 五〇〇トンの船で、そんな荒波を越えて、向こうまで行けないというんです。しかも木造船でしょう。だからそんなころ僕は、

むかし大隈重信が南極観測船が行くときに、壮行会に行つて、ポケットマネーを五万円出して、これで鉄板を買つて木造船の横に打ち付けていけと言つたという話がある。だから開南丸というのは急遽一センチの鉄板を張つて行つた船です。その故事もあるから、そのぐらゐの金なら出せるし、日本の造船の力も残っているからいいじゃないか、僕はそのことから思つて「鉄板を張れ」と言つただけだけど、それは全く間違いであつた。それは機雷に早くはぜなさいという事だ。軍事的な無知をあの時ばさらけ出ししましたね。

佐道 好意で言つたのに（笑い）。

海部 本当に好意で、それぐらゐやるよ、それぐらゐの金ならそう大したことがないと言つたら、そうじゃない。

佐道 イラン・イラク戦争のときに強硬に反対された方がいらつしやいますね。そういう方はどうだつたんですか。

海部 「蟻の一穴だから駄目だ」という。

佐道 やつぱり駄目だと言うんですね。

海部 朝から晩までおれのところに電話してきて、「駄目だ」という。

佐道 戦争が終わつても駄目だというんですね。

海部 僕は「戦争が終わつた、停戦条約ができそうだ、アメリカは勝つことを確信しておる。ただ停戦になるまではやりません。国連の安保理で停戦決議が成立したら、平和の海に変わるわけだから、それから行きます。それでもいけませんか」と言つたら、「それは蟻の一穴になるから駄目だ」という。

佐道 掃海艇は実際に派遣されたわけですが、その前にアメリカの湾岸攻撃が始まつたときに、政令によつて、自衛隊のヘリコプターで避難民を運ぶということをお決めになりましたね。これはいろいろ戦闘状態が起こつている地域で出てきた避難民を運ぶということですから、より大変な問題ではないかと思つてますが、そのときの党内論議はどうなつていたんですか。

海部 党内論議が起きるといけないから、私は政令事項にして、内

閣の責任でやりますから、法案を通してくれなんて言つたら、また酔だの蒞弱だの、タカ派とハト派の神学論争が始まつて、いま言つたおじさんたちが出て来て、いろいろなことを言い出すから。中曾根さんなんかはそのときは、「海部君、むかしからそういうことがあつたんだから、君のやつていることは間違いないから、やつちやえ」というようなことで、応援してくれた。

けれどもあの時は、通信施設を寄附するということが問題になつたんだつて。要するにペルシャ湾が安全に航海できるように、どこかの船が使うかも別にして、通信施設をペルシャ湾に寄附して設置すること、それがイラ・イラク戦争で掃海艇を出すか出さんかで、出したらもう自分が、といつて神学的な反対論をぶたれたおじさんたちがケツをまくつて、さすがの康弘さんも降りちやつたわけだ。そのとき、竹下さんが大蔵大臣で、いくらかそのお金は出すといつたらしいんだけど、それは別に補正予算を組まなくても、予備費の中から出せる分で、ほんの二千万円ぐらいではなかつたな。それで出すという約束をして、その後どうなつたのか、僕も追跡調査をしていないけれど、そのことで、あの火は消えたんです。だから掃海艇は出て行かなくなつたわけだ。

伊藤 掃海艇の代わりにそれをやるということですか。

海部 代わりにそれをやるという。ところがこちらになつたら、掃海艇をドイツも出すと言ひ出したし、僕は掃海艇を出すことは、あそこが平和の海に質的な転換を遂げたあとならば、日本にとつての生命線であるから、すべての国民の生活を守ることになるでしょう。そのために、持てる技能、能力を發揮すれば、別に大砲の弾を撃たなくとも、何もしなくても、お役に立てるといふならば喜んでくれるではないか。だからやりましょう。

あの頃ご記憶にないかな、重油を流されて、ウミウが重油を吸つて死んでいったかわいそうな姿がずっと出ましたね。そしてダートと油田に火をつけられて燃え上がつておつた。あんなときに、船会社のほうが、少しご協力しますといつてきた。あそこを使つてい

船会社で、いまから思えば、自分たちの金儲けの航海用だからね。けれどもそこにオイルスキーマーというのを持っていつて、油をずつと吸い込んで、地上に上げて砂漠に埋める。それを二、三回繰り返せば、燃えている油だけ消せるわけです。それは民間の船会社と石油会社がやって、できたことです。

だから航海路を確保するために必要なことで、武力による威嚇でなかつたら掃海艇は行くべきだ、行った方がいい、と思つて、閣議でも決定をして、日を決めて、本会議で報告をしたときは、衆議院はよく間に合つたけれど、残念ながら参議院のときは二日ぐらい遅れた。だから演説をやり出して、こうこうこういう理由で掃海艇を出すことは政府は決心し、その所要の手續として、それも政令事項でやつちやつたんだけれど、「所要の手續が終わつて、ただいまペルシャ湾に向かつて走つております」と報告したんだ。そうしたら、また遅すぎると言われるんだけど、それは遅すぎるんだ。出発する前に報告しなければ、了承のしようもないじゃないか、という議論にもなりました。とにかくそれだけ手續をやつて、無事出て行つたということですよ。それすら蟻の一穴だと言つて、怒られたことも覚えております。

伊藤 たしかに自衛隊が部隊として遠方に行くのは初めての事態ですからね。蟻の一穴であることは間違いないですね(笑い)。

楠 「二〇〇四年になつて」ついに多国籍軍に参加することになりましたね(笑い)。

佐道 十年ちよつと経ちましたから(笑い)。

伊藤 非常にいまの問題を重なつてくる問題ですね。

海部 歴史は繰り返す、ですね。

伊藤 このときといまと違うのは、「いまは」社会党がほとんどないということですよ。

海部 それから社会党の中にも賛成派がおるということですよ。

伊藤 当時、ですね。

海部 はい。ですから記憶にないかな。「憲法違反だから反対だ」

という最後の結論を言つたよ。「掃海艇を出すことは、自衛隊が組織として出て行くことだから、いかにいろいろながあつても、自衛隊の存在が憲法違反だから、だから社会党は賛成できない、反対する」という。「お前、そんな結論だけ無理してゴチャゴチャ言うなよ」と言つてやつたことを思い出すけれど、そういつたことを支持するグループが、あの頃ほんの一部だつたけれど、社会党の中にもおつたんですよ。

伊藤 社会党は別にそのこと自体に猛烈に反対したというわけではないですね。

海部 ないんですよ。でも上の方が猛烈に反対したんですよ。当時国対委員長が村山富市だったから、あれが出て行つて、ガンガン反対だつたことをよう忘れません。村山内閣ができることに僕が本能的な反感を感じた直接の理由の一つは、そこにあつたんだ。目の前に出て来て、「こんなことは駄目だ、みんなここで下がれ、下がれ」という。「トミさん、それはやり過ぎじゃないか」と言つただけだね。

佐道 その問題はまた何回かあとの先生への質問になりますね(笑い)。

伊藤 本当にそうだ、先取りだ。ちよつと五時半になりましたので、ここで切ります。どうもありがとうございました。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 31 回

海部内閣Ⅶ (1990～1991)

【2004年7月26日 (火) 14:00～16:15】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

楠 精一郎 (東洋英和女学院大学教授)

[記録、編集] 丹羽 清隆

(2004年7月26日)

今回は、湾岸戦争以外のお話を中心にお願います。

1. 国連平和協力法案が廃案になった直後の90年11月12日、「即位の礼」が行われました。世界158カ国、2機関から国賓などをお迎えし、来日した多数の首脳と会談されたわけですが、危機のさなかのこの国家行事については、どのようなことが印象に残っておられますか。
 2. 翌年(91年)1月9日、韓国を訪問されます。「未来志向の日韓新時代」を首脳会談で確認されるわけですが、このときの訪韓のご印象などお願いします。
 3. 4月7日、第12回統一地方選挙がありました(13都道府県知事選挙と44道府県議選)。このときの結果は、地方選挙では自民党が圧勝したものの、東京都知事選挙では自民党公認候補の磯村氏が現職の鈴木俊一氏に敗れるという波乱がありました。磯村擁立を推進したのは公明党との関係を重視した小沢幹事長といわれ、磯村敗北の責任をとって小沢氏は幹事長を辞任します(後任:小淵恵三)。小沢氏の辞任は海部内閣にとってマイナスだったとか、竹下派とのパイプがよくなったなどさまざまな評価がありますが、実際はいかがでしたか。
 4. 同16日、ソ連のゴルバチョフ大統領が来日しました。6回、13時間を越す長時間の首脳会談の結果、択捉・国後・歯舞・色丹と千島を初めて明記した上での領土問題の解決と平和条約の締結を目指すことをと記した日ソ共同声明を発表しました。これは大変重要な成果であったと思いますが、ゴルバチョフ来日の経緯や北方四島明記にいたる交渉の状況などお願いします。
 5. 同じく4月、前回うかがった掃海艇派遣(24日)の直後、27日に先生はASEAN5カ国(マレーシア、タイ、シンガポール、ブルネイ、フィリピン)歴訪に出発されます。5月3日にはシンガポールで、日本とASEANとの熟成したパートナーシップを求めるといふ政策演説をなさいますが、このときのASEAN訪問の目的や現地での状況などはいかがでしたか。
 6. 同月25日、リクルート事件で離党していた中曽根元首相の復党がみとめられました。一部報道では先生も中曽根氏の復党をご存知でなかったと伝えていますが、この時期にどういった経緯で中曽根氏の復党は認められたのでしょうか。
 7. 5月15日、安倍晋太郎氏が死去しました。総裁候補といわれながら病気に倒れたわけですが、安倍氏死去について先生はどのようにお感じになりましたか。また、安倍派後継争いが三塚・加藤六月氏の間で展開されるわけですが、これについてはどのようにごらんになっておられたのでしょうか。
- ※ 統一地方選からこの時期、秋の総裁選挙に向けて各派の動きが活発化していきます。その問題と政治改革問題が連動しますので、それはまとめてお聞きすることにして、政治改革以外の重要問題について先にお聞きしておきたいと思います。
8. 5月27日、国連軍縮京都会議を主催されます。ここで、通常兵器の移転報告制度を提唱され参加国の同意を得られます。この制度は7月のロンドンサミットで国連総

会での提出を提案しておられるわけですが（12月9日可決）、軍縮会議主催の狙いや同制度提唱の意義などについてお願いします。

9. 6月3日、前年から噴火活動を続けていた雲仙普賢岳で大火砕流が発生し、多くの被害が出ました。翌4日、「雲仙普賢岳噴火非常対策本部」は設置され、先生も現地視察されます。普賢岳の噴火活動は前年からであり、このあと6月8日、9月15日にも大火砕流が発生するなど被害は拡大し長期化します。自然災害への対応はなかなか困難ではありますが、日本の場合、こうした緊急事態への対処問題でよく政府・自治体の初動や連絡などが問題とされます。このときの場合、政府の対応として先生がとくに気をつけられたのはどのような点でしょうか。
10. 7月10日、ブッシュ大統領と首脳会談のため訪米され（ケネバンクポート）、その後15日から第17回サミット（ロンドン）に参加されます。このとき、初めてソ連のゴルバチョフ大統領がオブザーバーとしてサミットに参加したわけですが、このときのサミットの印象などお願いします。
11. ロンドンサミットが終わるとそのまま欧州に滞在され、第一回日 EC 首脳会談を行われ日・EC 共同宣言が出されます。欧州統合の流れにのって、欧州との関係強化を進められたわけですが、このときの欧州訪問のご印象などお願いします。
12. 欧州訪問がおわったあと、8月10日に今度は中国・モンゴルを訪問されます。中国に関しては、天安門以来、西側首脳としてはじめての訪問になりますが、この時期の中国そしてモンゴル訪問を行われた経緯や訪問されたご印象などお願いします。
13. 8月19日、ソ連でクーデターが発生します。先生もサミットで顔を合わせたばかりのゴルバチョフ大統領はこれで失権していくわけですが、世界を驚かせたこのクーデター騒動では、米国との連絡や在留邦人の保護など、政府も大変だったと思います。このときのクーデターへの対応などお願いします。

※今回は以上のような点についてお願いします。

■現在の政局から（二〇〇四年参院選）

伊藤 このあいだの選挙「七月十一日の参議院選挙」はいかがでしたか。もう終わってしまいましたか。

海部 終わったことだけれど、まあ。

伊藤 まあまあ、というところですか。

海部 まあまあ、ですね。負けて諦めるならば、もうちょっと徹底的に負けないと。自覚症状が足りないわ、みんな。負けたと思っただけのもの。

伊藤 現状維持ぐらいに思っているんですか。

海部 そうそう。事実、議席の数にすると、一増一減ですね。

伊藤 それはそうですが、票数を考えるとね。

海部 それから、愛知県の地方の票数だけを見ると、これは負け惜しみみたいだけれど、この前の小泉ブームのときの得票数よりも今度二人立てた合計「得票」数のほうが多いんですよ。「せめてそれをもって瞑すべし。みんなよくやった」と言っただけで、最後はみんなを激励した。

けれど、隣の三重県なんかでは、非常に長いあいだ議長の下で、信用統治もいところですからね。それがああいう目に遭う。それから岐阜の松田岩男なんか、あの無風区でもうちよつと「票を」取っていないといかんと思うやつが、あそこまで追い詰められている。七千票ぐらいいしかならないんだな。

楠 ちよつと意外だったのは、意外と言っただけだけれど、先生と一緒に保守新党から自民党に移ってきた山谷えり子。あれは何か、宗教団体のバックがついたんですかね。比例区で、彼女自身も「当選するか、わかりませんけれどね」なんて、最初は言っていましたからね。

海部 そちらに送っておいたほうが当選の可能性が多いから。二階

グループにおつては駄目だから。あれは森派にカウントされるんだよ。ただ、宗教団体の票がついたわけだ。

伊藤 でもいぶん取りましたね。

海部 取りました。

楠 自民党の中では五位ぐらいだったんですね。

伊藤 そうですね。上の方でしたね。

楠 「伊藤」先生もご存知ですか。

伊藤 僕は名前だけ。

楠 お父さんが有名なコラムニストだったんですね。

海部 山谷親平といった。それで「朝までテレビ」の初めの頃は、僕らともよく相手をしたし、産経新聞の関連の婦人新聞の編集長を

しばらくやっておつた。

楠 彼女がまだバツをつけていたとき、衆議院を一期やっているんですよ。そのときにイラクに行つて、帰ってきたらご主人が交通

事故か何かで亡くなったという。

海部 交通事故の不慮の死です。

楠 だから家族会議を開いて、イラクなんかこの時期に行かないでくれと、お父さんも含めてみんな引き留めていたのが、お母さんは元気で帰ってきたのに、お父さんが亡くなったという悲劇があったそうです。

海部 そんなことがあったな。

楠 拉致議連副会長なんかもやったりしている。考えがよく合うな、と思ひまして。

伊藤 かなり活動していますね。

海部 活動家なんです。だから僕もそのことは信頼をして、彼女の家の近くとか、選挙事務所をつくる時とか、そんなときに行つては街頭の応援演説もよくやってあげた。けれども、こうなつたら大きな組織をつけないければならん。いろいろ話をしておつたら、そういうものがあるというから。

楠 霊友会か仏所護念会か何かですか。

海部 結局、仏所護念会ですよ。

伊藤 やはりそういうのが票になるんですかね。

海部 彼女の場合は票になりましたね。それがなければ当選できなかったはずだから。

楠 昔、父の頃は七十〜八十万票取らないと当選できませんでしたが、いまは場合によっては十数万で当選できますからね。そのぐらいだったら、はじき出せますね。

伊藤 党名を書きますからね。

■「即位の礼」と式典外交

伊藤 それではお願いします。今日は湾岸戦争以後の話なんです、国連平和協力法案が廃案になった直後の一九九〇年ですから、いまから十四年前、十一月十二日、「即位の礼」が行なわれました。即位の礼には世界各国から大勢の国賓が来られますね。そういう多数の首脳と会談されたわけですが、湾岸戦争という危機の直後にこういうことがありまして、いったい各国の首脳との間でどういう会談が行なわれたのかな、と思っただけですが。こういう場合は、相当お会いになるんでしょう。

海部 会います。

伊藤 挨拶だけではなくて。

海部 三十分、あるいは申し訳ないが十五分、という組に分けた。

伊藤 通訳が入るわけだから、実質そんなにないですね。

海部 実質そんなないし、事前に向こうも表敬だということも言うってくるんですが、各国ずっと、みないましたね。

伊藤 でもいちおう外務省が詰めて、こういう話をしますとか、いろいろあるんでしょう。

海部 あります。それから、「このことはこういう問題があります」という問題点と、「今度の話でいちおう触れておいてもらったほう

がいいと思います」というようなことがありまして、結局、三日間にわたったんですね。

伊藤 けっこう大変ですね。

海部 はい。そしてそのかん、こちらも迎賓館に行っておらなければならぬ。

楠 でもこれは、すべて百五十七ヶ国とやるわけではないでしょう。海部 そんなにはやりません。申し訳ないけれど、島嶼国といってまとめられるグループがあった。「気候温暖化で氷が溶けるから、それはわれわれの国の存続に関わるんです」というようなことを言いたいと島嶼国は事前に言ってきたから、そういうのは全部まとめて、九ヶ国全部に出て来てもらって、代表の意見を聞いた。「特にほかにありますか」というようなことで聞いたんですね。そしてそれが足かけ三日になったんですから、それは相当な努力でしたよ。

伊藤 それに式典もあるわけですね。即位の礼というのは、総理としてはけっこう大変でしょう。

海部 はい。あのととき本当にしみじみと竹下さんが言った言葉は、「やっぱり人間には運不運、向き不向きとかいろいろなことが言われるけれど、自分はお葬式のほうを取り仕切った。あんたは、ご即位のお祝いのほうだから、まさに天国と地獄だなあ」なんていう。

「皇室に失礼だから言えんけれど」なんて言っていた。

伊藤 竹下さんらしいですね。

海部 竹さんらしいんだ。あの人は、のちにも出て来るかと思うが、いろいろなことを、夜、気楽にスツと出て来て言ってくれた。僕はホテルオークラに泊まっていたから、一つおいて先の部屋を空けておいて、そこに通して、飯を食ったり飲んだり話したりすることがよく使いました。新聞記者の追跡はホテルの玄関でまくことができませんからね。そこでいろいろな話をする。早速飛んできて、竹さんらしい話をよくした。そこで、こんなにたくさん「の首脳に」会わなければならぬとなると、「どここの誰は、おれも本当は訪ねて行かなければならぬ」失礼しておるから、

そこはまあよろしく頭を下げておいてくれ」とか、いろいろな注文、やり取りもありましたね。

伊藤 一緒に会うということはなかったわけですか。

海部 なかったですね。

伊藤 やっぱりそういうことはきちんとしてやるわけですね。

海部 はい。

伊藤 特に問題になって、記憶に残るような会談はございましたか。

海部 この時ですか。この時には、問題を抱えて一番熱心だったのは島嶼国の連中でした。国がなくなるかどうかという話ですから、極めて真剣な話でした。

伊藤 水没するわけですからね。

海部 はい。といって、ああするこうするといって、簡単に変わるものでもありませんけれども。

伊藤 地球温暖化をどうやって防ぐかといっても、そう急にどうこうできるわけではないですからね。

海部 それから、井戸を掘ったりするという話も、当時途上国からはずいぶん出て来ましたね。要するに飲み水の問題で、あの頃からひどかった国がたくさんあったことを覚えております。

伊藤 そういふのは、ODAでやるわけですか。

海部 はい、ODAでやるわけです。あの時、アメリカは前大統領カーターが来たのかな。

伊藤 そういふのは全部、外務次官がブリーフをやるわけですか。

海部 そうです。そしてもちろん、ポイントしかやる時間はありません。

伊藤 でも大変な勉強をしなければなりませんね。

海部 そうです。スハルトさんなんか言ったことは、「インドネシアはこれまでは石油に頼ってきたけれど、石油に頼るのではなくて、近代国家としていろいろな製造業や産業をやって、石油以外の輸出、貿易その他でやっていくんだ、ということを特に申し上げておきたい」ということだ。それがあの頃、数字の上でも少しいい数

字が出て来つつあったと思いますね。

伊藤 続いてはいないと思います。

海部 チャチャイは、「いま自分が根を張っている周辺国は、日本からの弾が飛んでくるのをみんな待っている。これは絶好の機会だから、ひとつやってくれ」と言う。こちらにもインドシナ半島の平和のために努力したいと思っておったところですから、チャチャイに頼んだ。「ここではお願いだけにとどめておくけれど、できるだけやっていたかんと。特にカンボジアの中でもクメール・ルージュとは、日本には直接のあれ「パイプ」がない。それから、カンボジアでも『ありがたい、ありがたい』の殿下のほうはいいけれど、どうもその先の転換がないから」と言ったら、「この次あなたは、なるべく早い機会にタイへ来てくれ。そこに私が、話ができるようにそういうのを集めておく」という。

あのへんでは、当時タイというのはある程度力を持っておったし、チャチャイが自信を持っていたのも間違いありません。この時はチャチャイが首相ですが、チャワリットというあとから首相になる人が、チャチャイが信頼している実力者であって、そのチャワリットを使って、これとこれとこれだけは必ず説得してやらせる、やったほうがいいじゃないか、ということだった。それでその次に行くときには、ちよつと寄って、みんなにバンコクに集まってもらった。

伊藤 そうですね、翌年いらつしやいますね。

海部 その下地がこの時できたと思います。

■訪韓・盧泰愚大統領との会談

伊藤 翌「一九九一」年になりますが、一月に韓国を訪問されますね。「未来志向の日韓新時代」ということを首脳会談で確認されるわけですが、この訪韓問題は前からの懸案なんですか。

海部 これは前からの懸案というよりも――。今日は北朝鮮とどう

やって国交をきちんとつないで行こうかということだが、当時は北朝鮮とはまだ具体的な問題はなくて、北朝鮮のほうが、もうちよつと経済協力をきちんともらいたいとか、やって欲しいことがあるとかいうような裏の話を、新聞社を通じたり、日朝友好議員連盟を通じてさかんにボールを投げてきておった。私が踏まされた踏み絵だが、正確に共和国の名前を公の場でわかるように首相として発言してもらふことだ、ということを書いてきたことがあつた。それでずいぶん悩みました。

その前に、韓国のほうもきちんとしておかないといかん。日本は一衣帯水の両国を相手にしなければならんわけですからね。そうしたら盧泰愚さんは、首脳会談の時なんかは日本語でしゃべるんだね。こちらが「日本語でしゃべっていいか」と言うと、「どうぞ」と言う。通訳に「日本語でやれるようだから助かるよ」と言いながら、いろいろ話をした。そのときは、いまの拉致問題とはちよつと性質が違ふけれど、従軍慰安婦の問題とか、指紋押捺の問題が前提にあつたわけです。けれどもそれは、未来志向で考えていかなければいけない。「いま両方のマスコミが非常に目を向けている過去の歴史に起因する問題に、いつまでもこだわっておたのではないけないから、これからの日韓関係は未来志向の日韓関係にしよう」、これは向こうで話している最中に、盧泰愚が言ったことですよ。「こちらもまったくそれには賛成だ、ぜひそうしてもらいたい」というようなことを言っておりました。

そうしたら、それまでのあいだに韓国との問題をずつとやってきた日本の裏のパイプがあるんだ。「それを大事にして、声をかけてやらんといかん。協力する態勢になつてうずうずしているのに、官邸から弾が飛んでこない。飛んできたらこちらの筋も動かして、全面的に協力すると言っておる人がいるから、やらしたらどうか」という。そういう注意もあつたので、会つてご意見を聞いてみた。

「何を言ったらいいんだろうか」といったら、「天皇の訪韓ができるかどうか、できるならそのときのお言葉はぜひ相談させて欲しい。

それから従軍慰安婦の問題はたしかに喉に刺さつた骨であるけれど、そのことだけにこだわって、ほかの問題が全部ブロックされることにならないように努力をするから」というようなことだ。

こちらでも未来志向なら大賛成だから、そして、それなれば首脳会談をやつた意味もあるから、向こうが「先に来てください、そうすればこの問題について片が付きます」と言つたので、じゃあ指紋押捺の問題はわがほうもそれまでになんとか片が付くように持つていくから、その指紋押捺の問題も未来志向で考えて、やってくださいといった。

ただ、振り返るとあの時、形を変えた拉致問題のようなことも確かにあつた。一人だとか十人だとかいう規模じゃありませんね。ゴソツと工場に來たりしたことがあつたけれど、それがあつたからなかなか解決できなかった。それが、たしか、私の記憶に誤りがなければ、経済協力五億ドルの供与で解決する。「あれがこれがと云つて、個別のケースを挙げたり、個々の項目に割り振りすることは難しい。歴史の問題に対しては、われわれは深く反省もするし、二度と繰り返さないという決意も表明する。しかし口で表明するだけではいけない。お国の経済の問題については協力する」。

そのとき韓国が言つたことは、「日本の企業が進出してきて、いろいろと経済協力をしてくれるけれど、技術移転が非常にスローである。もつと技術移転もきちんとして欲しい」ということだつた。僕がそのことを経団連や日経連やいろいろいるところに確認したら、「言にくい話だが、韓国がそういうことを言うのなら、移転してもらつたらそれは協力だから、日本の奉仕じゃないんだから、特許料とは言わないが（伊藤 ライセンスですか）、お金を払う約束が国際的にあるものが多い。韓国が欲しがつておるものは、日本の企業としては努力として成果もあげておるものだから、それを持つて行けというのが技術移転だ。けれども持つていっても、特許料をあなたのほうはちつとも払わんじやないか」。だいたい溜まっていたんです。

外務省は「ぜひこのことは首脳会談で触れておいてもらわないといかん」というので、「払うものだけは払ってもらわないといかん。ギブ・アンド・テイクではないけれど、こちらは好意をもって協力しようということを出すんだが、それには国際的な約束事もある」と言った。払わんから、かなりの額になっていったんですね。

それは盧泰愚さん自身も「私のほうも、そのことは韓国側の企業にきちつと指示します。そういう問題が両国をブロックすることは辛い」というようなことも言う。こちらでも数字を出して、たしか今日までで総計すると、一説によると大変な額になっている、ということも調べて見せた。「それは事実だからどれだけ言っても払ってもらいたいし、取らなければいかん」と言うんですね。「けれどもそれを出したら、この次すぐに出すものがいろいろあるのか」と聞いた。出すものは、向こうがあらかじめリストを出しているわけです。

「ここまでは済んでおります。けれど特許料を払っていないから、あとは駄目だ」とは言わないけれど、出さないと企業に対していろいろなことと言えない。

両国の首脳が未来志向で、アジアのために協力してリードしている、こうというならば（まだ北との関係は全然曙も出ていなかったけれど）、そういうときに日韓の関係が緩い、弱いのは具合が悪いので、ぜひやって欲しい。そのときは、ぜひやります、という問題も決めました。

さらに、言っていないか悪いか知らんが、歴史に起因する問題についてまでもこだわっていると、両国の喉に刺さった骨は解決しない。従軍慰安婦の問題はもうこのへんであれするから、未来に向かっているいろいろなことは言わないから、できるだけ現段階であれをしてくれ。この前五億ドルを払うときは、それに包括した約束になっておいたけれど、そういうことなら、プラスαで何か知恵はないかというところで考えた。その結果、韓国に日本との関係で原爆症の被害者になった人たちがかなりいるから、それは日本にお招きして対応するなり、こちらから医師団を送るなりする。日本側も、そういう過

去のことについては、そちらのご厚意に依って出て行ってやるようにしますということ、出て行ったり、呼んだりしたことがあったと思います。

伊藤 でも政権が替わると、元に戻っちゃうんですね。

楠 全然継続性がないんですね。

海部 戻っちゃって、あの時こう言ったじゃないか、といつても、政権が替わると駄目なんですよ。

伊藤 そういふ点では普通の国とは違いますね。

楠 いまは、もっと前に戻っちゃったんですね。

伊藤 そうですよ、いまはもっと戻っているんですよ。

海部 あの時は盧泰愚さんのおかげで、いいところまで行ったんだ。そのとき夜の晩餐会などでは喜んで、新聞記者の公式取材が終わって帰ると、「日本の歌をご披露します」と言って、「ランブ引き寄せ故郷へ♪」と日本語で歌を歌う。

伊藤 日本語世代ですからね。

海部 だから、ああ、これは未来志向でやっていって、この人たちが話がついていけば、前向きに進んでいくと思っただんですが、全斗煥に対するいろいろな問題が起こったでしょう。それが盧泰愚にも波及してきたでしょう。これで全部ご破算になってしまおうという、非常に寂しい気持ちも衝撃的に起こりましたね。

■東京都知事選（鈴木 vs 磯村）

伊藤 先に進みますが、四月に第十二回の統一選挙があります。地方選挙では自民党が圧勝するんですが、一番の問題は東京都知事選です。この時自民党は磯村尚徳さんを公認候補にする。それで現職の鈴木「俊一」さんとぶつけるといふ奇妙なことがあります。

海部 顧みればあのとき、磯村さんを無理して立てるに至った理由は――。肝心の東京都連の主流が僕のところに来ては、「絶対に立

てもらっては困る、また立てないほうがいい」というようなことを言っておったんだな。

伊藤 鈴木さんでいいわけでしょう。

海部 そうなんです。そしてあの時は、鯨岡兵輔が長いあいだ都連の幹事長で、そういうことの窓口をやっておったので、僕らのところにもしよつちゅう来ておった。新聞記者にバレンように、夜宿舎に来てあいつとは話ができる。「海部さんね、よく考えてごらんよ。これでは駄目だ、こんな状態で。だから鈴木さんをみんなでお迎えしたら」ということを言っておったわけだ。

「磯村を」ということをビシツと言ったのは、天下周知の事実になつていなければならない。小沢一郎だ。創価学会のさる人とずっと長いあながあつたから、その線で話ができる。僕は創価学会のさる人もそのとき会いましたし、いろいろ話も聞きました。やっぱ「選挙で応援する、選挙の票も必ず回すようにするから」というような具体的な話まで、当時からそんな約束があつた。それじゃあ、といって僕は小沢に「勝てるか？ 勝てるならいいけれど」と言ったら、「鈴木さんに引導を渡してくれ」というから、僕は行つたんですよ、東京都庁に。格好だけつけなきゃいかんと思つて。あれはいつだったか、日にちが必要なら調べます。初めて東京都庁というところに行つたんです。鈴木さんのところに引導渡しです。

伊藤 引導どころじゃなかつたですね。

海部 そう「鈴木さんは」、「頑張つてやります。やりますし、やれます」と言う。そこは鯨岡なんかが入つて、「海部さんの立場もあるけれど、引導渡しに来るが、それは乗つたらいいけませんよ。乗らなければわれわれがその状況を受け止めて、また押し返すから」と言っているんだ。

意気が上がっているのは公明党だけだ。東京都というのは、創価学会出身の都会議員がいろいろ都政に協力しておる。そういうこともあるので、もうちよつとそこをよく整理して、やつてくれよ、ということをおいた。

ところが、そう言つておいても、自民党の中の創価学会嫌い（という言い方が悪いが）がいる。たしかあのとき、磯村さんの奥さんか何か創価学会と関係が深すぎるとか、甚だしきに至つては、創価学会の婦人部に入っているんじゃないかというようなことまで言つてきた人があつた。

けれども、それとこれとはこの際別で、どちらが勝てるのか。それで小沢を呼んで、「おまえさんは磯村、磯村と言うけれど、それは確実なあれ「↓勝機」があるのか」と言つたら、そのとき、「国会の情勢が自民党単独では行けない。へたをすると日米関係が根本的に狂うようなことになるかもしれない。予算を組むとき、湾岸の話が中心でなしにやろうということになっていきますが、湾岸で約束したお金が払えないと、総理、あんたも私も、日米関係で顔向けができなくなりませう」という。

伊藤 要するに公明党の協力がないと――。

海部 予算が通らない。予算が通らなければ九十億ドルも出せない、ということになるわけですね。だからそれは、議論の表には出て来なかつたけれど、腹の中でグツと踏みとどまつて考えたことは、そうだな、ということだ。

それであるとき、また別の面、アナザー・サイドに光を当てると、都庁が立派過ぎる、大き過ぎる、トゥ・ビッグ、トゥ・ゴージャスという批判があつた。それからいまと一緒に、鈴木さんはたしか八十歳に手が届くような人で、そんな人をなぜまた担ぐんだという意見もあつた。けれども鯨岡に言わせると、「いやそれでも、それが強いんだ。それで勝てばいいんだ」というようなことでありました。けれども、当時小沢の意見は、日米関係が最優先ですからね。

伊藤 やっぱ、そつちからですか。でも勝つ自信はあつたんですかね。

海部 いや、まあそれは、口では「勝てます、勝てます」と言うけれど。

楠 よくわからないのが、どうして公明党、創価学会が鈴木を嫌つ

て磯村を支援したかということなんです。それは都庁舎批判であるとか、高齢批判であるとかありますが、それは非常に表面的な理由にしか聞こえないんですけれどね。

海部 それはおっしゃる通り。現象面的な理由です。

楠 どうして鈴木を学会が嫌ったのか、真相はどうなんでしょうか。海部 公明党の都会議員の中の複数のボスが、いろいろ企画し、企んだことに対して、鈴木が拒否したという理由がありますね。特に霊園問題が絡んでいる。

伊藤 それはすぐに腑に落ちますね。わかります。認可の問題ですね。でも小沢さんは、勝てると思わなくても、やっぱりやらなければしょうがないという事態に落ち込んだんですかね。勝てると思っただかといって、あの当時の世論調査を見ても何をしても、磯村さんが勝てるという要素はない。

楠 だって、勝たなくてもいいんですよ。公明党の協力を取りつけることさえできればいい。

海部 公明党の協力を引っ張って取りつけておけば、参議院で劣勢でも、公明の協力があれば予算は通る。

楠 それは小沢さんにしてみれば責任問題にはなるだろうけれど、どっちに転んでも自民党系で、鈴木さんが当選しても、美濃部が勝つわけではないんですからね。

海部 あのと時の鈴木に対して、磯村がいろいろなパフォーマンスをやったけれども。

楠 お風呂屋に行ったりね（笑い）。

海部 お風呂屋に行って背中を洗ったりした（笑い）。

伊藤 こういふときはやはり幹事長に力があるわけですか。

海部 それは幹事長が横を向いて「いやだ」と言ったら、選挙はもちろんできないということは、大平幹事長の時にやろうと思っただけなかつた抵抗がありましたからね。あれは僕らもいやと言うほど感じさせられたけれど。また、幹事長はそれぐらいあれ「↓権限」をもらわないと、日頃の統率ができないんじゃないですか。

伊藤 まあ、そうですね。都連は結局分裂みたいな形になるわけですか。

海部 都連の主流というのが、あの頃は鯨岡兵輔、粕谷茂。議員も頭数を数えてみれば、そちらのほうが多かったですからね。そして半ば、分裂になったんじゃないかな。演説会や街頭にも立たないよ、という人もおった。

伊藤 結局自民党の票は、公認のほうに行かないで、鈴木さんのほうにも相当行ったわけですね。

海部 それはもちろんそうですね。特に、自民党の都会議員というのは今日までさんさん鈴木を利用してきたんですから。そしてポスターなんかもその前の選挙の時に貼らせてもらったから、今度掌を返すわけにはいかんとか、そういう理由を言ってくる都会議員もだいぶおったな。

楠 自民党支持層の判官贖罪みたいな気持ちを掻き立てちゃったんじゃないですか。

伊藤 そうですね。

■小沢一郎幹事長の辞任

海部 それはたしかに強引なやり方であったという批判も後日あった。だからそういうことをひしひしと感じながら、しかし小沢は辞任をいとも簡単に申し出たわけだ。

伊藤 それはいいですが、幹事長は海部内閣の要の一つでしょう。

「おう、辞めた」といって辞められたのでは、大変じゃないですか。海部 けれどもあのとき、小沢は僕のところへ来て長時間サシで話をしたんだ。小沢の口説きの一つは、「私は、もうちょっといろいろなことを考えておる。いまの国会を見ておって、放っておけない。結局アメリカとのいろいろな約束の中で、ただ単に金さえ出せばいいわけじゃない。人も出さなければならぬ」ということだ。彼が

言う、いわゆる「普通の国」論だ。「そこまで全部ひっくり返したら無理になるから、それはちよつと待ちなよ」と言つて、いろいろ話しておつたんです。PKO法案でも、あの頃から、できたら片足を突っ込んで、多国籍軍にはスムーズに入つていこう、というような気持ち、考えがあつたでしょうから。

伊藤 いま「の小沢氏」と全然違うじゃないですか。

海部 はい。あの人はその時その時に、いろいろ思うと、忠実にパツパツと変わるから。竹下さんに聞いてみても、そうだと言うしね。金丸さんもあの頃まではずっと、協力どころか、何でもやってくれたから。

伊藤 小沢さんが辞めるといふことは、海部内閣にとってはどんな影響があつたんですか。

海部 それは新聞ヅラを見てもわかるように、「私が」「こちらは政治改革をやることを第一義に考えた内閣だから」と言つたら、「そうでしょう、私もそうだと思います。だから私がここで幹事長を辞めたら、捨て身で特別委員会の委員長を引き受けさせてもらう。そうしたら体を張つて、あの法案が通るように、野党がゴトゴト言わんように、やっちゃう」と言う。それまでに全部、貯金もはたかつもりを持つていたんでしよう。それは大事なことだ。

金丸さんにいろいろ言つてみても、「あれはいろいろなことを考へておるだろうから、ここでいくらおれが翻意しろといつても、あれは翻意しねえよ。思い込んだら命がけ、一途な人間だから、しょうがねえなあ、ああいうのは」ということで、あまり慰留工作、説得工作を、金丸さんはやろうという気はなかつたな。

伊藤 それで小沢さんが幹事長になるわけですが、これも、同じ系統ですからね。

海部 竹下さんと呼んで、竹下さんと話して決めたときに「私は」、「小沢がこちらが期待しておるものを本当に引き受けて、党に行つたら特別委員会をつくらせて、その委員長になつてこれを必ず通せば、この法案を通すことも、政治改革を考え、日米関係を考へて

おつたわれわれの気持ちとしてはいいわけだから。ぜひそれをやつて欲しい」「と言うと竹下さんは」「わかつた。ただ、いまここで翻意して戻れと言うと、あれは恥をかくことになる」という。

伊藤 もう、いっぺん言つてゐるから、ですな。

海部 「格好良く言つたのに、戻つたら恥をかくから。しかも負けたんだから」「それはよくわかりました」。

それから党内の大多数を敵に回して、という言い方が悪いが、党内の大多数は、まあそんな無理無茶せんでも、鈴木でいいじゃないか、今日までの実績もあるし「という考えだ」。それから変な言い方だけれど、「高齢だから駄目だとは何事だ！」という批判も相当、高齢者のほうにあつた。そう思うと、どっちもどっちだな、ということだ。

ただ、勝てるのはどちらが勝てるだろうかということ、いろいろ考えましたが、公明がとにかく全力を挙げて磯村でやると言うんですからね。

伊藤 竹下さんはこの時はオーナーでしょうが、竹下派としても、もう小沢さんは辞めてもしようがない、小沢さんにしよう、という話ですか。

海部 そう。要するに、小沢が出てくれば、すぐにコントロールできるでしょう。隔意なく報告もできるし、話もする。小沢もそれまでいろいろなパイプ役をやつておつてくれたんだから。たなごころを返すようにわかるわけです。そのことによつてぎくしゃくしたもものにはなりませんよ。

伊藤 大丈夫です、ということですか。

海部 しかもその次、僕らも読めなかつただけけれど、あれが体がひっくり返つてということになるとは思わなかつた。「当然、委員長を引き受けて、そこでこの法案の成立のためにやつてくれるとなれば、それはそれとして大事なことのつじやないか。竹さん、それでいいんだな」と言つたら、「それがいいんだ」という。

■ゴルバチョフ大統領訪日1（末次一郎氏の役割）

伊藤 同じ九一年四月ですが、ソ連のゴルバチョフ大統領が来日します。ずいぶん回数を重ねて、長時間の首脳会談をやられたわけですね。それで北方四島の問題を明記した共同声明を発表されました。これは非常に画期的だと思うんですが。

海部 というふうに通つてくださる人も多い。最初にゴルバチョフが出した紙には、「小クリル列島」と書いてあったので、「小クリル列島ではわからんから、名前を、齒舞・色丹・択捉・国後と、日本国民みんなに説明するときに、言いやすいのに変えてくれ。小クリル列島なんていったら、また変わったのか、と思うことになる」。そうしたら、「しばらく待ってくれ」ということで、押したり引いたりがありました。

この時のこういうやり取りは、初めからこんなに長く続くとは思いませんでした。ところが、背景を説明すると、あのときは末次一郎君という人がいて、彼が毎晩連絡してくれるわけです。しかも相手側の相談が終わると、どういうことが話されて、どこをもうちょっとと押しとか、これはこのへんどか、手の内をよく聞いてきてくれるわけだ。

あのときはプリマコフだ。諜報関係の親分になった。それから、回想録を書いた当時の大使、日本語がよくできる。その中にもこの会談のことがよく出て来ます。

「ここをもう一踏ん張りして、こんなことは言わせないようにさせなければいかん」とか、「そういうことをロシア側は言っておるから、負けずに突っ張りなさい」とか、「ここで退いてはいけません」とか、そういうことまで、末次さんは両方に極めて信頼できるあれ「↓パイプ」を持っていったんだ。だから僕らも首脳会談が終わってすぐに帰らないで、しばらく時間が欲しいという。向こうも

首脳会談が終わると、ソ連大使館に戻って、そこで打ち合わせをやるわけです。迎賓館ではやらない。それが終わった頃に、どんな話だったか、何に気をつけたらいいのかということもいろいろ言ってくれるわけだ。

伊藤 すごい情報ですね。

楠 末次一郎さんというのは、「日本健青会」という一種の民間団体の代表に過ぎないですね。言ってみれば政治浪人みたいな人ですが、そういう人が総理大臣と話するときには、いったいどういう立場で話すんですか。

海部 個人的な友人ですよ。

伊藤 それは前からですか。

海部 前からです。僕は最初は自民党の青年学生部長だった。

伊藤 それが健青会と関係があるわけですね。

海部 そうですよ。そして健青会はどちらかといえば、青年団体の中では右寄りのほうだと思っていましたからね。

伊藤 もちろん右寄りでしょう。

海部 それで末次にズバツと聞いてみたら、「大丈夫です、ちゃんと正直に正確にやります」という。それまでも青年行動の問題ではつき合いが長いですから。「よし、わかった」ということでいろいろやってもらったし、やってくれた。

伊藤 末次さんというのはどんな感じの人ですか。

海部 あれはいろいろ言われるように、日本のために、天皇のためにといい、古い時代の右寄りのものが腹の中に一点ある。これは間違いない。それから私が総理になったときに、紫色の大型の色紙に金泥というのかな、それで「般若心経」をきちんと書いて、お祝いだと言って持ってきてくれた。それでだいたいご想像がつくと思うけれど、僕らも青年部長になった頃からずいぶんつき合いをしていました。

後日、三島の市長になった奥田吉郎なんていうのは、末次と並ぶ当時の青年の代表であって、東京オリンピックの時に世界の青少年

を集めて、オリンピック青少年キャンプをやるうというようなこともみんな奥田が提唱する、それをやってあげる。それから末次のほうは、そういうときには裏のほうで話をつけて、やってくれる。ところがたまたま出て行って、名前まで出してはいけないかもしれないが、北川石松君というのが外務政務次官か何をやっておった。そうしたらアフリカかどこかに行く飛行機で、席がガチャンコしちゃった。それで北川石松が外務政務次官だから、外務省のほうをふるっちゃったわけだ。「なんとかしてもらえませんか」と言っておたから、「ああ、末次さんならおれが話してやるから、どういう経緯があつたか言え」といつて、調整したわけです。外務省も一目置いておつたことは間違いありません。いろいろ情報をもたらしておつただけだから。

楠 引き揚げ者運動ですね。

伊藤 そこから始まるんですね。

海部 一番初めはね。だからどちらかというと、左翼の学生運動ではなしに、やや右寄りのグループを率いてやっていた人で、「国士」というと言い過ぎかもしれませんが、国士的な感じもあつたんだな。そう僕は思っています。

伊藤 あの人にくつつついている青年がたくさんいたわけですね。

海部 いまでもやっています。このあいだ、僕のところにも末次の跡継ぎでいま青年運動をリードしているのが来た。このごろ髭まで生やしているの、「おまえ、髭を剃れ」と言っただけだ。

楠 民間の人ですか。

海部 民間だ。

楠 日赤短大の教授じゃないですか。国旗にやたらと詳しい人。

海部 それが、青年海外協力隊のことを、僕が予算委員会のやり取りの中でプレイアップして、「汗も流さん、血も流さんとは何事であるか」と言った。たしかあのときは、もう五十二人も犠牲者が出ておつたんですからね。それを乗り越えてやっていくということは、大変な青年運動であつて、これを始まったときにリードしておつた

のが末次一郎である。あのころ、「末次さんには」東南アジアの調査として調査に行ってもらい、僕はアフリカを入れると言つてアフリカに行つて、協力隊をスタートさせたときの仲間でもあるわけですから。ちよつと友愛同志会の連中とは距離がある。いま言った奥田なんかは、友愛同志会のほうにも深い関係があつただな。

伊藤 友愛同志会というのは鳩山「一郎」さんのほうですか。

海部 そう。

伊藤 しかし面白い人ですね。

海部 面白い人です。

伊藤 でも、日本のためにはずいぶん役に立つたんですね。

海部 日本のためだと言つてやると、なんでもやりますから。しかも毎日そういうふうで、彼ら「ソ連訪日団」が迎賓館の会場から車を連れて出て行くと、「どこに行くから後をつけていけ」とやっていたら、「わかりますよ、自分の大使館しか行きません」という。当時、狸穴と言いましたね。狸穴に行つて、穴に入り込んでやっていると、というふうな話をする。そして終わると、電話で済まんから、メモを届けさせたり、重要なことの際には直接会いに来たり、毎日連絡してくれたから、それは助かつたわけですね。

楠 個人的な関係とおっしゃつても、総理大臣と一民間人ですから、例えば官邸に出入りするのも大変じゃないですか。そういう場合、入館証か何かがあらかじめ与えられているんですか。

海部 いや、あらかじめそんなものは与えてないけれど、うちの外務省担当の秘書官には全部本当のことを話してあるから、「おまえを迎えに行つて、入れてこい」という。それからお巡りたちも、うすうす知っていましたよ。公安関係には全部、面は割れているわけだ。これは決して敵ではない、広い意味で味方だと思つておるだろうから、それはいいんじゃないですか。それから僕がそれまでに当選する前からの顔知りですから。僕は末次のやつている研究会には、年に一回記念講演にも行つて、全国の青年の研修会の講師もやっていますから。

楠 「新樹会」ですね。

海部 その新樹会に行くと、新樹会を卒業した県議員どもがだいぶおつて、その中から国会議員になった者もいま数名います。このあいだ落ちたかな、九州の県議員上がりで、元気のいい、若い国会議員がおつた。

■ゴルバチョフ大統領訪日2（共同声明と北方四島）

伊藤 結局これは北方四島問題というのを明記したということ、非常に特筆すべきことですね。

海部 そしてそれが、齒舞・色丹・択捉・国後のことであるときちんと書かせた。もしご必要ならば、後から探して持ってきてますかね。僕はゴルバチョフに、そのことをきちんと書けといった。そうしたら、そういう書き方をどういうふうにしていいか、いつべん考えさせてもらうと、その日は別れたんです。その日また狸穴に帰って、そこでやっているんです。そして末次君からの報告によると、その四島の小クリル列島という表現をやめて、齒舞・色丹・択捉・国後とする。今日まで積み重ねてきた肯定的な問題を全部含めて、その上に立脚して平和条約構想を加速させる。

伊藤 それで行ければよかったですね。

海部 そう言ってきたから、末次が、「そのときはそれだけで帰してはいかんから、手を捕まえて、『ちよつと待ってくれ。これは本当かどうか、あとから知らんと言われるといかんから、肉筆でサインしなさい』と、あとから知らんと言われるといかんから、肉筆でサインしなさい」といって、サインも取っておきなさい」といふ。それで、サインを取ったものがあるわけだ。ミハイル・ゴルバチョフ。齒舞・色丹・択捉・国後で間違いないな、間違いない。そして今日まで積み重ねてきた肯定的な問題を全部置いて、法と正義に従ってやっていくということまできちんと言ったんです。その証拠書類は全部残っておりますから。

楠 それは継続されるものなんですか。ソ連が解体してロシアになったわけですからね。

海部 それは継続はされないけれど――。

伊藤 ですから、それはおかしいんですが、これも韓国と同じで、政権が交代したら駄目になる（笑い）。

海部 「それはスターリン時代の誤りであった」とか、ゴルバ自身がよく言ったんだもの。「君の国は信用できない」と言っていると、「どうしてだ」と言うから、「どこかのホテルでみんな盗聴器がついておつて、日本の大使館が解体修理をしようと思つたら、盗聴器がいつぱい出て来たじゃないか。そういう国でしょう、今日までは」と言った。

楠 「ゴルバチョフのサインのある書類は」何もないよりは、交渉のカードにはなりますね。過去にこういうことを言ったではないか、ということ。

伊藤 なんといつても共同声明ですからね。ゴルバチョフという人は、どういう感じでした。

海部 あれはサッチャーさんの表現を借りると、「共産主義は大嫌いだけれど、ゴルバチョフは別だ。彼は人間として信頼できるから、そういう意味でおつき合いしなさい」ということだ。

伊藤 その通りでしたか。

海部 それで、サッチャーさんにも、ゴルバにもよく言っておいてくれといった。最初のときにも、ソ連に行っている話したけれどそれはできないが、サミットの時にロンドンの宿舎がわかっておつたから、「君の宿舎に行つて、ちよつと一対一でお話したい」と言つたら、「ウエルカム、スパシーバ」。それで朝行つたんです。二人でいろいろ話をした。

サッチャーさんも、「氷が一番大事なのは溶けるときだ。氷の溶ける状況がわかるときは亀裂が入ってくる。いまロシアには亀裂が入っているんだから、そこに上手に楔を打ち込んでいって、人間としての信頼関係をつくる。こちらもある程度オープンにして、心の

通い路ができれば、あれは信頼できる人間だ」という。これはサッチャーさんのゴルバチョフ評です。

伊藤 これは成果の多い会談で、ようございましたね。

海部 これはそうです。だからこれが終わってから、いまでもゴルバチョフは日本に来るたびに連絡もしてくるし、彼がやろうとしておる「世界政治フォーラム」には必ず来てくれと言われる。だから行って、いろいろ言いたいことを言ってくる。いまゴルバと僕が共同議長になっていきます。ただあれが、どういう財閥と結びついて何をやっているのか。あの資金源がどうも豊かすぎるな、と思うんだけれど。

伊藤 ああいう社会ですからね。

海部 何か暗黒のルートもあるんだろう。これは僕一人の勝手な推測ですけどね。

伊藤 そういうものがなかったら、あそこでは生きていけないわけだから。

海部 そして年金なんか限られておるから、年金でいくら最高額をもらってやったとしても、そんなもので国際会議を維持して、人を集めてやっていけるはずがない。

伊藤 スポンサーがいつぱいっているんですね。

海部 ついてはいるんです。それがモスクワで開けないところがミソで、彼がああいうことを固めてリードしてやっていこうとすると、イタリアに行かなければならん。僕が行った去年のイタリアの会議の時も、前大統領のイタリアのコッシーガが出てきておるんです。それでいろいろ話しておる。だからこのおじさんは、まだまだ相当研究しなければならん分野がたくさん残っておるんだな、と思う。

■ASEAN歴訪1（マレーシア、シンガポール）

伊藤 前回、掃海艇派遣のお話を伺ったんですが、それが四月二十

四日に出て行きます。そして四月二十七日に、先生はASEAN五ヶ国歴訪に出発されることになりました。さつきもお話がありました。このときタイにも行かれるわけですが、日本とASEANとの成熟したパートナーシップを求めて政策演説をなさいます。この東南アジア歴訪の一番大きな目的はどういうことだったんでしょうか。海部 あのころ、東南アジアのみならず、南西アジアの国々からも「日本はどうも目がアメリカに向いておるじゃないか。アメリカだけを見ておられると、ますますわれわれは日本には本当のことも言えんことになる」「と思われていた」。そこで僕のほうからは、「いや何を言うか。あなたのほうも、いつも正面玄関には鍵がかかっておって、手土産を持っていつでも受け取りにも来ないじゃないか。裏から上がって一緒に飯でも食いながら話をする、そういう関係が近所づきあいなんだから」というようなことを冗談に任せて話をしながら、「もううちよつと心を開けよ」と言っておった。

はじめ、ひどかった頃は、行くといつても、インドなんかは第三世界の王者だから、位高き、誇り高き国でしょう。けれどもだんだんそれができるようになってきた。僕が心配したのは、掃海艇を派遣するときに反対が強いということを前からいろいろ言っておったからだ。近隣諸国によく言っておかなければならん。

しかもこのとき、忘れもしませんが、参議院に掃海艇派遣の報告をしたときには、日程の関係で、もう出て行ったあとなんだ。だから、あれぐらい恥ずかしいことはなかったけれど、もう一日早かったら、あんな黄色い声で前のほうの人に、「海部さん、あんた知らないの、もう出て行っているよ」と言われる。それはそうだ。でも出て行かなければ間に合わんから出て行ったんです。

それに対しても、これらの国々が反対するんじゃないか、反対しないまでも懸念を持たれてはいかんとお思って、一応それらの首脳には直接了解を求め、理解を求めておこうという気持ちがあったものですから、

伊藤 これらの国は、この前の戦争の時に日本にやられた。やられ

たといっても、実際にはそのおかげで独立したわけですね。

海部 独立した国もあるが、それを言うてはいけません。
楠 訪問国は、最初はマレーシアですね。マレーシアのマハティールさんは非常に親的な人として知られています。そういうことを意識して、最初にマレーシアを持ってきたりするような組み方をするんですか。

最後のほうはシンガポールで、「シンガポールの首相が日本の政治的な役割の拡大の懸念を表明した」という記録がありますが、それを一番最後に持ってきている。やはり戦略的に、訪問国を順序立てて選んでいるとか、そういうことはあるんですか。まさか、行きやすい順に選ぶということではないだろうと思うんですけど。

海部 結局、そういうことも全部勘案して選んだんでしょうが、あのときは正直に言うと、タイを入れたのは、チャチャイを利用する。チャチャイの表現を借りれば、「いまや椰子の木から実が熟して落ちてくる寸前だから、ちよつと一声かければよい。自分も協力をする」ということだ。そこで、タイに入る前にマレーシアをやるのが道順だから寄ったけれど、マレーシアというのはそのころは問題がずいぶんあって、アメリカから副大統領がすぐ飛んできた。なんといつたかな。

伊藤 マハティールが提唱していた、アメリカを除いたアジア諸国の機構ですね「九〇年十二月、マハティールはE A E Bを提案 (East Asia Economic Block)。その後E A E G (GはGrouping)として発表、九一年十月、E A E C (CはCaucus)に変更」。

海部 それをつくるということにアメリカは非常に神経を尖らせて、わざわざ副大統領が飛んできた。忙しいさなかつたけれど、別のホテルの部屋を取って、そこでいろいろ話を聞いたら、なぜアメリカをウイズアウトされているのかという。だから、閉鎖的なものにはさせないし、アメリカに対していろいろなことが出て来たときは、日本がそれを代わってカバーするから、ちよつと見ておってくれといった。

そして名前も、あのころEBRD「欧州復興開発銀行」のことは、非常にやり取りがあつて、ようやく解決したんだが、アジアでマハティールが言い出したのは、日本語に訳すと、なんとか機構というんです。それを覚えてもらわなければいけません。呼び方を変えるぐらいいいけれど、内容としてアメリカを初めから常置メンバーとして全部入れておくわけにはいかんと。

伊藤 アメリカはずいぶんこだわるんですね。

海部 こだわる、こだわる。こだわるから副大統領がわざわざ飛んできて、やってくれと言うんです。そこで副大統領を説得して帰ってもらうのにも、ずいぶん時間がかかったということです。

伊藤 アメリカはもう少し日本を信頼しておけばいいのにね。マハティールは日本に対しては非常に好意的だけれど、アメリカに対してはものすごい反米ですからね。

海部 ものすごく反米的です。そして彼は、「私のルック・イースト・ポリシーは、ルック・ジャパン・ポリシーだ。日本を見習い、日本の真似をしようという政策だから、信頼して最初の機構に入ってくれ」といったんですね。「東南アジア経済協力機構」だったかな。アメリカは、それは困るから壊してくれと言ってきたんだ。

しかしこつちも「シンガポールに」行って、頼むと言われたときに、いきなり頭からそれはいかんとは言えんから、お得意の方法だな。「まだ議論が煮詰まるまで時間がかかる。短兵急に掌を返したように、そこにすぐに入れといわれても、いろいろ問題がある」というと、向こうもうすうす感じていられるから、「いや、アメリカを敵視するわけではないけれど、アジアのためにはアメリカが入り込んでくることは、あらぬ摩擦を呼ぶかもしれない」という。

伊藤 そういう意見ですね。

海部 そして、アメリカはあのころ東南アジア諸国で金の問題があつた。アメリカのなんとかいう大金持ちが乗り込んで来て、金を吸い上げたりして、通貨の不安な状況をつくつたじゃないですか。
伊藤 それはもうちよつとあとの話じゃないですか。

海部 あの前からおかしくなってきた。その諸悪の根源のようなのはアメリカにあるんだという。マハティールにはそういう主張があったんですね。だから、それがもつとすっきりしなければ駄目だ。だから日本はいま入らないで、ちよつと慎重にいろいろな面を考えておるところだから、といった。それで「機構」という名前を変えて、「グループ」にしたのかな。

伊藤 そのグループに日本も入ったわけですか。

海部 入ったわけでは。それは「グループにしる」と言った以上、「グループに」する」と言われれば、入らなければならぬ。入る代わりに、それは排他的なものではないということに条件に取りつけて、それを対外的にも言うよ、といったんですね。

伊藤 ASEAN五ヶ国は、もつと遡って考えると、韓国、台湾、シンガポール、香港、そういうところがまず経済成長をして、それに引き続いてASEAN諸国が経済成長に入る。こんな形ですね。海部 たしかあのころは、フライング・ギース「雁行形態」と言われたんだな。いまは違うけれど、日本がトップで、ずっと下にASEANの国が連なっている。だから東南アジアのフライング・ギースの経済成長の枠組の中で、みんながやっていけばいいわけで、そこにアメリカが一人入ってきて、おかしなことをいろいろやると、それがまたバラバラにされると困る、というような懸念も言外にありました。そういう厳しい言い方ではなかったが。

日本はそうではない。アジアのみんなとこれからも協力してやっていくが、日本はアメリカとも安全保障の問題などいろいろ関係も深いんだから、それは理解しておいてください、というようなことも言った。そうしたら向こうは、それはわかったという。そしてマハティールさんが特に強調したことは、アメリカとだけで進んでいかないで、いろいろなことがあったときは、われわれとも相談してやってくれ、ということだった。

だから僕は、必要ないかと思つたが、サミットに行くときも、東南アジアから選ばれているのは僕だけだから、みなさんの意見も十

分聞いて、それが反映できるようにする。またそのことは、リーダーシップを取っているアメリカのブッシュ大統領にもよく言っておくし、ブッシュはそういうつもりで動くであろう。言い過ぎかもしれないが、中国のことを一番よく知って理解しておるアメリカの大統領だから、というようなことまで言つた。

中国がいま改革開放路線に入っていくと言つておるが、改革開放をやっていくには、そこに自由の背景がなければできない問題ではない。だからアメリカと僕が話をして、改革開放の問題をわれわれは隣の国としてブッシュする。協力する。それはアジア太平洋の平和と安定になるし、またアメリカが今日まで言い続けてきた自由と民主主義にも究極のところでは一緒になるんじゃないか。それを敵視してはいかんし、それはみんなで支えなければならぬ。日本が中国に対してそういう政策をとることはわかつてもらいたい。というようなことを言つておるときに、彼が「トシキ、おれもよく知つているんだ。北京は、自転車で裏町まで走つて知つているんだ」というようなことを言い出したこともあつたぐらいです。

伊藤 いま東南アジアは中国の影に入つてしまいましたね。

海部 影に入つちやうたね。だから東南アジアだけでまた一回しっかりして、その中で助けるものは助けていつてやらんと、踏みつぶされたり、一色にされたりしたらいけないから、その役目が新たにこちらには来ておるんだと思ひますよ。

伊藤 本当にそうですね。

■ASEAN歴訪2（ブルネイ）

伊藤 ブルネイにも行かれましたが、ブルネイはお金持ちの国ですね。

海部 行きました。なぜ行かなければならんかという、裏の裏まで言うけれど、ブルネイは初めは入つていなかったんですよ。そう

したら金丸さんがおれのところに飛んできて、「総理、頼みが一つあるんだ」という。「なんですか」といったら、あの人はアバウトだから、「どこかをちよつと一日減らして、そのぶんブルネイに行つてやつてくれ」という。「ブルネイというのは、おとつあん、何も関係ねえよ。外交的な問題は」と言つたら、「だから一日でいいから行つて、飯を食つてきてやつてくれ。一杯飲んで、飯を食つて、やあとやつてもらえばいいんだ」と言うんだね。

伊藤 石油だ、石油。

海部 こつちもそんなことだけでは「うん」と言えんから、竹下に、「金丸さんがこういうことを言ってきたけれど、あんたは何か裏を知っているかい」と聞いたたら、「おれは知らんけれどもな、おとつあん、何かそんなようなことがあるのかな」と言つていた。

ブルネイから特使が来るというんだ。王族ばかりだからね。第何番目の王位継承者が来る。その返礼という意味で寄つてくれれば、外交的におかしいことはない。当時ブルネイは喧嘩をしている国もありやしないし、経済協力をしてやると言つても、結構ですという。伊藤 向こうはお金が残っているんだから（笑い）。

海部 余っているんだ。「何のために何をしに行くんだ」と言つたら、「まあまあ、それはいつペン、ちよつと向こうも来てくれと言うから」という。というのは、当時の僕の推測ですが、湾岸諸国に對して、ブルネイは自分の国の存在感とか、自分の国の立場はもつと上だと思つておつたんですよ。それはお金の支配なんです。湾岸協力基金というところへ一番お金を出して、つくつたのもブルネイであるし、その周辺諸国で困つておるところが手を出してくると、それにちよつとやつては、面倒を見ていたんですね。

伊藤 援助国なんですね。

海部 援助国だ。

伊藤 あれは石油で、とにかくすごいんでしよう。

楠 あれは昔の蘭印に入りますか。

海部 蘭印の一部でしょう。

伊藤 蘭印ですか？ イギリス領のほうじゃないかな。楠 要するに、日本がかつて狙つていたところですね。

伊藤 狙つていたというか占領していたところですよ。

海部 そして桁外れのお金持ちであることは間違いないわけだよ。あの時計は、恥ずかしくて、してこられないけれど、宝石のいっばいちりばめた金の自動巻のものすごい時計を夫婦にますぐれた。

伊藤 それはお持ちですか。

海部 持っていますけれど。

伊藤 一度見せてください（笑い）。

海部 一度見せるわ。まだ捨てないである。人にやるといつても誰にやつていいかわからんしさ。

伊藤 それはいくらなんでも捨てられないでしょう。

海部 家内も一回も使っていない。「こんなのは選挙区にはめていつたら一発で評価が下がる」とかなんとか言つていた。それでブルネイという国は一夫多妻の国ですからね。正式の晩餐会でも、こちら側「例えは向かつて右」が第一夫人、正夫人、こちら側「向かつて左」が第二夫人、こちらが第三夫人「第二夫人の左」。第四夫人は今日は招いていないという。それで、第二夫人用、第三夫人用、第四夫人用といつてお土産を用意して、向こうも必ずお土産をくれる。それが家内のところに来るものは、大きさがちよつと違う。第二夫人は第二夫人のプライドがあるのかな。住んでいる王宮は、同じような規模、同じようなスタイルの王宮に住んでいるわけです。驚いたな、あれには。

金丸さんに言わせると、「海部君、そういうときはサービスはどういうふうにしてきたんだ」、「海部「サービスって？」、金丸「いやいや、国王は第四夫人までおつて、どうやってサービスしているんだ」、海部「そこまでは聞けませんよ」、金丸「そうだろうな」。

伊藤 金丸さんは大丈夫だったんですか、第何夫人だか知らないけれど。

海部 なぜブルネイと関係があつたかという謎が解けませんけれど

ね。

伊藤 何かあったんでしようね。金丸さんのことだから、端倪すべからざることがあるんでしよう。

海部 「ちよつと一日寄ってやってくれ。約束してあったどこかの国を一日減らせばいいじゃないか」というんですから。それはそうだけれどね（笑い）。ブルネイでは大した内容の話はありませんでした。

伊藤 そうでしようね。お互いに結構で。

海部 ハッピー、ハッピーで、ミューチュアル・アンダースタンディング。

■ASEAN歴訪3（フィリピン）

伊藤 フィリピンは、援助してちょうだい、ということでしょうね。

海部 はい、そしてあのころ、日本の援助が減るのではないかという心配をみんなが持つておった。

伊藤 ああ、湾岸でお金を出すからですね。

海部 はい。「それはそれ、これはこれだ。今日までお約束しているのは、ここでそのために少なくなるとか減額とかいうことは、しません。それを聞いて安心してくれ」といった。

楠 先生はフィリピンでは債務削減要請を事実上拒否したという記録があります。

海部 当時はフィリピンのみならず、いろいろな国が債務を削減してくれという要求をしてきた。

楠 フィリピンだけではないんですか。

海部 フィリピンだけではありません。それから、特にフィリピンではそれはできない。それをやると、新規借款もできない。全部駄目になる。

伊藤 その国だけ、というわけにもいかなくなるじゃないですか。

海部 そう。「それはそれ、約束は約束でやってください」と言いました。そんなころはフィリピンのみならず、いろいろな国でそういう要請が出たんです。同時に、あのころ日本は円高差益の問題かな。「あなたの国の経済のあれが変わってくるから、返さなければならん分もこれだけ増えてきておる。だから円高に見合う分だけ下げてください」というような話もあったんです。「では今度、円安になったら増やすか、ということにもなるわけで、約束は約束で守ってください。その代わり、それによって不都合が生じたいろいろな問題が起こったら、それに対する新規借款も、いま返しておいてもらえば出せるけれど、いまここでカットダウンとか無しにしてくれ、ということになると、あとが続きませんよ」ということを言っただけです。

驚いたことにはそんな頃、ドイツのシュミットから、「これはまあ、あまりメイクパブリックしたくない話だけれど」といって、「日本に円借款のあれを切り下げるように」といつてきた。

伊藤 利率ですか。

海部 ドイツも債権放棄をしようんです。ドイツもあの辺に相当借款を出しておるんだね。けれどもそれはそれ、これはこれで、ご説はよくわかるけれど、怒らせんように上手な断わり手紙を書いてくれといったら、知恵を絞って書いて、持つてきた。それでサインだけして放り込んでおいたから、どういうことになったか知らんけれど。

わざわざ公文書ではなく、「プライベートにお願いするけれど、向こうはこんなに困っておって、こうだから、日本とのいろいろな関係で毎年毎年、支えきれない負担になりつつあるようだから、こうやってやってくれ」という。そこから先が大事なんだ、「ノット・オンリー・フィリピン、バット・オールソー・ポーランド、ハンガリーという国もあるんだ」ということを手紙に書いてきたけれど、相手がどこであろうと、それは駄目だ。そういうことになっておるから。その代わり、新規借款を出すときに、あなたのご意見はいろ

いるな状況等を聞いておいて、対処するだろう、という返事を出しておきましたけれどね。

■中曽根康弘の自民党復党

伊藤 その次は中曽根さんの復党問題ですが、一部の報道では、中曽根さんの復党を先生がご存知なかった、と書かれているようですが。

海部 それは全く知らなかったわけではありませぬ。事前にコンソツと、もうそろそろ——。初め群馬県連で復党を認めて、公認申請も

自民党に出す。だから自民党のほうでも、という動きがあるよ、というのを、チラチラ言っておりました。

伊藤 あれは県連が申請するわけですか。

海部 県連が窓口になります。ところが正直に言うと、中曽根先生

という人は、この前も話したように、おれの結婚式の時もちゃんと来てやってくれるし、また総理になったときに皇居で会ったら、

「奥さん、あなたは結婚式の頃と比べて、ちっとも変わっていませんね」なんてお世辞を言ってます。

伊藤 お世辞かな（笑い）。

海部 お世辞だよ。うまいことこうやられて「持ち上げられて」な。中曽根さんとはいろいろあるわけだ。しかし、一人だけやると、ほかの人もみんな許さなければならんようになる。私のあのころの一貫した問題は、ただ中曽根復党の問題だけではなくて、リクルートの関係があった人に対しては、あまり門を開いてはいかんというこ

とだ。リクルート問題をきれいに片付けたところで、「自民党は、さあここで生まれ変わりました」と言えるわけですね。

伊藤 「政治改革、政治改革」と言っている最中ですからね。

海部 そう、そしてあのころ、大変誤解を受けたのは、後日リクルートの関係者になったことがはっきりした人だ。入閣するときに、

当時安倍派の連絡将校は加藤六月がやっておった。加藤六月がこんな大きな初期の携帯電話を持って走ってきて、「総理、ちよつと人払いをしてください、重要な話がここから出て来ます」と言つて、タタツとやって病室の安倍を呼び出すわけだ。もてきたときです。そうしたら、「私が代理で言っても総理は信用してくれんでしょうが」と言つて、安倍に代わってもらったら、「あれだけはちよつと待ってくれ、あれをいませるわけにはいかん」という。しかもリクルートのことで問題があるときは、派閥に対するものが向こうから伝わっておっただけで、安倍のところに入っていないかった。そんなようなことから大変な不信があつて、それを加藤六月は知っておるわけだ。それで、むつちゃんを知らなくていい触らして回っておった面もあったかもしれんが、どうしてもそれは駄目だから待ってくれという。

伊藤 それはリクルートと関わるんですか。

海部 リクルートの灰色で、結局もらったという発表になっている。加藤六月もそれで入閣は駄目だということでも抑えられてきたわけだ。

ある人をそれで抑えた。ある人と言わなくてもいいな、森が「運輸大臣にどうしてもなりたいから頼みます」と言つて来たわけだ。僕は彼とは雄弁会以来の関係もあるし、お父さんの選挙にも応援に行

ったりしておるので、できたらそうしてやろうと思つておっただけだけれどもそうしたら、加藤が安倍に聞いてきて、「安倍がどうしても

もそれだけは待ってくれと言おう」という。「しかしむつちゃん、おまえの言うことだけではあかんよ。といて、病院にまでそんなこと

と、おれが聞きに行くわけにはいかん」と言つたら、「待ってください、いい方法をやつてきます」と言つて、出始めの大きな携帯

電話を持ってきて、「みんなを人払いしてくれ」といって、やったんだ。

かなり重いものでしたよ、当初の携帯電話だから。忘れられん話だ。そしてそれを通じて安倍の真意を聞いて、「じゃあ、そうしま

しょう」と言つた。そして「橋本を留任させるならば、中山で続け

てやってくれ」と言うんだ。要するにそれだけ、安倍さんの外交を受け継がせてあげたいという気があったものだから、それで推薦させたら中山であったから、ずっと続けたということですよ。

伊藤 中曽根さんの復党は、この時は単独でしたか。

海部 単独です。しかも何かがあったときに、自民党の総務会か党規委員会は、定足数ぎりぎりぐらいいのところで開いて、開くや否や、異議なし、ということでも成立したという報告を受けたことを思い出します。そういう動きがあったことはほかの表現で報告があったけれど、何月何日にどうするということではなかった。

伊藤 これは総務会で決まれば、総裁は一応OKというふうにするわけですね。

海部 そう。

伊藤 でもせっかく政治改革、政治改革と言っているときに、先生としては好ましくないことですね。

海部 それは好ましくないわ。だから、正面切って聞くとあかんと言われるだろうから、お互いに恥をかかんようにしておこう、しかし責任は総務会が負おう、ということ、そこで短時間でパッパッと議論もなしにやっちゃったんだな。

伊藤 総務会が責任を負うといっても、結局は総裁が責任を負うんですよ。

海部 それはそうですよ。結局はそうですけれどね。だから僕はその場で、佐藤孝行のことも何遍も駄目だと言って抑えて、党内からはそのことではさんざん怒られた。それから灰色はとらん、駄目だ、といつて、加藤六月も灰色だから、おまえは駄目だといった。みんな、駄目だ駄目だといつて断わり続けておったものだから、だいたい欲求不満が出て来たことも百も承知でした。それで中曽根さんのことも、個人的には、言ったようにいろいろ関係がある人ですから、正面切って聞いてこられると、ちよつと待ってくださいと言わざるを得んから。

伊藤 そうでしょうね。そういうふうな形にしたわけですね。わか

りました。

■安倍晋太郎の死と安倍派の帰趨

伊藤 その安倍さんが翌月亡くなられるということになりますね。ガンで亡くなるであろうということは、だいたいみなさん予想していたんじゃないでしょうか。

海部 わかっておりました。

伊藤 安倍派としては、大変なことですね。安倍さんというのは総裁候補の筆頭みたいな感じでしたからね。

海部 最短距離におつたんだ。

伊藤 そうですね。その安倍さん個人とは、先生はどういうご関係でございましたか。

海部 安倍さん個人とは、選挙の応援に行つて来いと言われて、青年部の講習会に講師になつて行つたり、それからどここの応援に行つてやってくれ、じゃあ一緒に行きましょうかといつて行つたり、そういうことがありました。

それからこれはお読みになつてバレておるだろうけれど、料亭のおかしな下足番が資料を出して、うちは誰が来て、誰が来てと書くでしょう。あそこには竹下登、安倍晋太郎、ときどき海部俊樹、ちやんと出てきておつたな。それで、そのことはもう天下周知の事実ですから。

伊藤 ニューリーダーの集まりですね。

海部 ニューリーダーと言われた頃の話です。そしてゴルフの道具を一番最初にプレゼントしてくれたのも安倍さんだ。ゴルフの手ほどきを最初にしてくれたのも安倍さんだったな。それで、加藤六月もそのころゴルフを始めた。ところが向こうはみんな上手であるが、こっちは上手ではない。

伊藤 海部さんは駄目ですか。

海部 駄目。そうしたらあの頃は、派閥と派閥のゴルフづき合いというのが非常に流行った頃で、福田派と三木派でゴルフのコンペをよくやったんですね。ちやうど福田赳夫先生という人はあまり上手じゃないから、「ようようよう、海部君、こつちにいらっしやい。この人は僕のところと同じ組だ」という。僕を入れておけば、おれより必ず上でしよう。しばらく経って、こつちが計算できるぐらい打てるようになるよ、「ほうほうほう、今日はこういう風の吹き回しか」という。それでバンカーに入ったら、「海部、手の五番で行こう、ほうほう、手の五番だ」という（笑い）。福田先生が教えてくれたんだ。「先生、手の五番はいいですな」とやったけれど、それは福田派との親善ゴルフでしか使えないわけだ。よその派でそんなことをやったら、とてもじゃない。だから僕のゴルフはちつとも上手になっておらんわけです。ハハハ。

伊藤 「手の五番」はよかったですね（笑い）。

海部 福田さんに教わった。

伊藤 安倍さんが亡くなるということは、自民党としても相当な大きな痛手ですね。

海部 安倍派ならびに安倍一族にとっては大変な痛手だ。安倍さんがそうなったということを一所懸命情報を取って喜んでおったやつもおるんだから、それは非情な世界です。

伊藤 政治家の病氣というのは――。

海部 いけません。

伊藤 秘しておるわけですが、すぐ伝わるでしょう。

海部 すぐ伝わるし、また伝わるようにさせられるわね。特にこのごろみたいになってくると、みんなが鶴の目鷹の目でしょう。「あれ、顔色悪いな、どうした？」という。安倍さんのときも、かわいそうに、あれはワイシャツにパットを入れたんだね、最後は。そして何か公の席に出たでしょう。あのととき、ルックス・ライクちつとも貧相に見えなかった。ワイシャツにパットを入れて、その上に背広を着たんだから。

伊藤 こういうところ「頼のあたり」はちよつと化粧すればいいわけですからね。

海部 このへん「頼」はどうしても出るけれど、いまだったらシリコンでも入れてね。おっぱいを増やすやつ、あれはいまいいのができてくるそうさ。

伊藤 安倍派の後継争いは、三塚「博」さんと加藤六月さんがこんな「激しい争いに」なったじゃないですか。

海部 そうです。ものすごい争いだった。そこへ森喜朗まで入る。

伊藤 森さんはどっちですか。

楠 三塚でしょう。

海部 三塚の家来で、早いところ三塚を――。三塚のほうが森より当選回数少ないんですよ。

楠 三塚さんは県議か市議あがりですね。

海部 県議だ。

伊藤 待ってください、三塚さんはなんでそんなに力があつたんですか。

海部 あの人は、なんで力があつたんですか、と聞かれると、ちよつと答えようがないけれど、要するに細かく面倒を見ておった人でしょう。

伊藤 派の中で、ですね。

海部 派の中だ。

伊藤 じゃあ、森さんもそっちの側のわけですね。

海部 けれども、加藤六月もいろいろやっておったわけだ。

伊藤 とにかく、安倍さん生存の頃から跡目争いは激しくやっていったわけですね。

海部 激しくやってた。それで、なんていうかな、すぐに利権の問題が絡んでくるでしょう。だからあそここの役所はあれは駄目だとか。言いくい話だが、金丸さんから直接、「防衛庁長官はそれは駄目だよ」と言って、具体的に名指しで断わりが来たりさ。組閣最後のところだったので、「そんなこと言ったって、ほかがほとんど

決まっておるから、任しておいてもらわないと困るけれど、おとつあん駄目か」と言うのと、「いや、あんなのを防衛庁長官に入れたら、えれえことになるぞ」という。その人の名譽のために言いにくいけれど、海部内閣の組閣の頃の防衛庁長官として、あとから顧みれば、ああ、と思うような者だ。それだけ防衛庁というのは当時から、ご本人もそうだから、金づるになるところだったんだよね。

伊藤 金づるですか。

楠 大きなものを買いますからね。

海部 そう、それは金づるですよ。しかも巨大産業から――。

伊藤 でもだいたい防衛庁長官というのは、一番最初になる大臣ですよ。

海部 そうですよ。どうしてもあれになりたいと思ってるやつはあまりいないんだもの。けれども、その防衛庁長官にだいたい決めておったやつを、「あれだけは駄目だ。あんなのを防衛庁に入れちゃ駄目だ」と言われた。

楠 それで結局ならなかったんですか。

海部 結局ならなかった。その代わり、オールモースト決まったあとの泣きですから、それは防衛庁長官を外れて、横滑り。横滑りで行った先は無難な人だったから。

楠 じゃあそのあたりの新聞を一日、二日見ればわかりますね。

海部 わかつちやうが、名譽に属する問題だから言いません。

伊藤 この安倍派の後継争いは、安倍さんが亡くなったことで露わになるわけですね。これは党運営にいろいろな形で影響を与えることになりましたか。

海部 手間がかかるようになりました。要するに、安倍一人に聞いて、ああだこうだといつて決めていくわけにはいかなかった。

伊藤 両方に聞かなければいけないんですね。

海部 三塚と六月と。三塚は早稲田の雄弁会ではおれの先輩ですからね。彼の仙台市長選挙の最初のと時から応援に行つて協力はしておるけれど。当然自分のほうにあれをしてくれるものとみっちゃん

は信じておるわけだから。

伊藤 六月さんのほうはどうですか。

海部 六月のほうはリクルートのとき、ロッキードのとき、いつも虐げられていじめられてきたから反発力は強いし、野育ちだから、いろいろ勘所を知っているわけだ。

伊藤 勘所を知っているわりには、いつでも引つかかるじゃないですか。

海部 いつでも引つかかるけれど（笑い）、それは本人の自覚と立ち回りの問題だろうな。だから、僕が言ったんじゃないけれど、口の悪い人が、「加藤六月とかけてなんと解く。田舎芝居の煙草盆だ。どんな場面にもちゃんとお出で」という。言った人もだいたい想像すればわかるだろうけど、あの知恵者が言ったんだ。

伊藤 大変なことだ、これは。

■国連軍縮京都会議

伊藤 その同じ五月に、国連軍縮京都会議を先生が主宰されます。

これは通常兵器の移転報告制度ですか。

海部 あのころは核兵器をなんとかしろということよりも、通常兵器をなんとかしろということのほうが世界の平和と軍縮のためには役立つのではないかと、私はアイ・ビリーブ・ザットでした。けれども言うときには、核を廃絶しなければならぬという。究極の目的は核廃絶だけれど、その前に現実的にやらなければならぬことは何であるかということになれば、通常兵器だ。必要以上に強い国をその地域につくつてはいけなから、みんなが監視してみておつて、あそこにはどれぐらいあるか見ている。そうすると近所の国が、それは危ないからやめておけ、とみんなで包囲網をつくれば、戦争は未然に防止されるだろう。私はそういうことを教えられ、自分もそれがいいんだと思つて、信じておりました。

サダム・フセインがおだてられて、通常兵器をどんどんもらってあの辺の王者になれるようにやってやった。

伊藤 それはよく知られていることですね。

海部 兵器までどんどんもらっていたんだから。だから通常兵器の報告制度をもっとオープンにして、どれだけあります、売買は新たにこれだけやりました、ということを必ず報告する。そういう制度があれば、ああ、この国は必要以上に強くなりそうだなと思つたら、近隣の国々が警戒もするだろうし、それが無言のプレッシャーになるだろう。

当時は、日本が原子爆弾で被害を受けた最初の国だから、日本の軍縮では核兵器の軍縮から言わなければいかん、という意見がずいぶんあった。それを、お経じゃないが唱え続けておつてくださいますという意見もあった。が、僕はもうちよつと現実的に、ステップ・バイ・ステップで成果の上がるものは成果を取りながら進めていかないと、とてもできないことだと思つておつた。

伊藤 この時はまだ核保有国がそんなに多くはないし。

海部 五ヶ国。

伊藤 それが拡散するという可能性もあまりなかった。

海部 必要性も少なかった。

楠 ただこのときに海部先生は、核疑惑国に対するIAEA「国際原子力機関」特別査察を提唱するというように書かれていますから、通常兵器だけではなく核のこともあつたんですね。

海部 核のことももちろん触れなければならんし、核は最終的には完全廃棄、廃絶だと。

楠 IAEAの特別査察というのはそれまでなかったんですね。

海部 制度としてあつたんじゃないですか。制度としてあつたけれど、実際に行使されたことはなかったというところで、それはやるべきだ。あの頃、大使で派遣してあつたのが帰ってきて、いろいろ報告してくれたときに、それをやらねばいけませんよということを書いてきてくれたのがヒントになっておるんです。日本はまた自分の

国だけが核が、というのと、言いにくい話ですが、じゃあ誰が核を落としたんだ、ということを用意悪く反論されたり書き立てられたりする。結局アメリカじゃないか、ということになる。やつぱりそれだけじゃなくて、もっと現実的に身近な安心・安全のためには、通常兵器の廃棄が最優先だ。

伊藤 とにかく実態を明らかにしようということですね。

海部 そして売買を、もっと国連に報告するようになさいますということですね。

楠 ここで核疑惑国に対する特別査察を提唱されたというのは、何か北朝鮮のことがあつたんですか。

海部 正直に言つて、あつたんですけど、格好いいけれど、その時はまだ北朝鮮は持てるも持てんとも、わかつていなかった。

楠 じゃあ特に北朝鮮を意識して言つたわけではないんですね。

海部 頭にあつて意識して言つたのは、パキスタンとインドの関係です。それで私が南アジアに行つたときに、両国のトップに「お互いに核の問題はきれいさっぱりしなさい。ここで変なことに火を点けたら、取り返しがかんことになる」と言つたんだ。

パキスタンは、あのころ非常に頑なだと言われておつた。あのころ、やや美人だったけれど、ブットさんという女性首相に会つたら、「海部さん、間違えないでお願いくださいよ。悪いのはこっちじゃない、向こうだ」という。向こうというのはインドのことです。それで、「私はここでお約束しておきますが、インドが一步下がつたら、わがほうも一步下がります。インドが百歩下がつたら、私も直ちに百歩下がります。だから、インドがいろいろな挑発やちよつかいをやめなければならぬ。カシミール問題であくまで悪いのはインドです」というような一点張りだったのね。

僕が「必ず一步下がつたら下がるか」と言つたら、「いやもうそれは当然のことだ。わがほうもそうしたい」という。そこで「私は帰り道にインドに回つていく。インドで会つたときにそのことをメイク・パブリックしてもいいですか」「いい」「いいならば、私は

日本の記者にもそのことを詳しく伝える。さすがにブットさんは平和主義者であるということになるわけだから、その約束だけはきちんと守ってやってください」。

そうしたら、インドに行っても同じことだ。「わかりました。向こうがやめたら、インドも直ちにやめます」と言うんだ。結局あれは非難の応酬の仲立ちをしたようなもので、これ以上やっておつても——。けれども、言ったという言質は捕えておかなければいかんから、「私はあなたのお話を聞いて非常に感銘があつた」と言った。向こうが一步下がれば必ず一步下がる、百歩下がれば百歩下がる。

百歩下がるということは、一切ないということだからね。「カシミール問題の非難はいろいろあるうけれど、それを乗り越えて、南アジアの重要な地位を占める国だから、期待しておりますよ」と言ったが、結局それ以後、見えても、進展していないんだな。

伊藤 それで結局、核保有国になつちやつたんですね。

海部 なつちやつたんだ。

楠 既成事実化してしまいましたね。

海部 そんなころに、この二ヶ国を早く国際社会の権威ある機関に検証させて、情報をメイク・パブリックするように持つていって、危険ならば危険だということを引きちんと世界中に知らしめるには、そのためにIAEAという組織をつくつたんでしょう。そこで議論もされないというのもおかしなことだから、ぜひやつたらいいと思う、これは日本で言つておつたことです。

■雲仙・普賢岳の火砕流災害

伊藤 その次の雲仙・普賢岳の問題は、なんと言いますか、次々といろいろな問題が起こつて、総理としてはなんらかの形で関わらざるを得ない事態が連日のように起こるわけですね。

海部 普賢岳のことで忘れられんのは、あのときちょうどある首脳

が来ておつたんですよ。首脳会談をやっている真つ最中に、メモが入った。第一報だ。それは報道関係者が巻き込まれて、犠牲が出た。当世流に言えば、自己責任の原則をマスコミのみなさんにもよく守つてもらふように、一般国民に避難命令を出したり退避命令を出したりしたところに、マスコミだから入つていつてもいいというのは、ちよつといけませんよ。けれどもお亡くなりになつた方には、心からご同情申し上げる。談話をくれと言つてきたんです、被害を受けたマスコミから。そのメモで、首脳会談の最中だけれど、ちよつと緊急事態が起こつたから勘弁してくれ、といったわけです。

災害の時にはヨーロッパでも「トリアージ」という制度があつて、それは優先順位を決めるんですよ。ドツと犠牲者が運び込まれたら、この人は直ちに緊急の手術が必要か、この人は放つておいてもいいか、この人はどうするか、それは現場の判断だそうです。現場で判断して、緊急に手当することがその人の人命にとって必要なときには、純粹に人間を助けるという角度から何が大切かという判断で選んで、そしてやれ。

伊藤 もう明らかに死んだ人は後回しなんですね。

海部 そう、後回し。言つては悪いけれど、本当にお隠れになつてゐる方は後回し。助かるかもしれん、という人を助けるという優先順位は現場で判断しろ。基準も何もないんだから。そうしたらそれも現場が混乱すると言ふけれど、それは現場に責任を持たせなければならん、ということになりました。雲仙・普賢岳のときは、そういうことが起こつたときにまさにどうするか、ということを具体的に問題提起された場だつたと思います。その後アメリカから、トリアージ、緊急救済制度の専門官が日本にも来たことがありました。それから余談になりますが、雲仙・普賢岳のあつたところはむかし島原の乱で問題があつた地域なんですね。そして、すぐ行つてくれと言われた。でも済んだところに行つてもしょうがないじゃないかと思つたけれど、そんなことは口には出せませんから、最も早い機会に行く。ただしそれよりも、あそこの対応をどうしてあげるか、

法律改正までやって再生ができるようにしてあげるのか。あのときは、西岡武夫だとか、長崎県の選出議員には、久間「草生」もいるね。とにかく当時自民系で、こつちを支えてくれておる仲間がみんなおるわけです。

伊藤 長崎はほとんど自民党ですからね。

海部 そして、参議院には親分、最後は議長を長くやった人がいる。楠 息子が出ていますね。

海部 そういのがみんなおって、「補償をしろ、国家補償に切り換えてもらわないと、この惨状は救われぬ」という。それで日あまりおかずに、それらにせかされて現地に行きました。そうしたらみんな来ておった。あの頃はとにかくあの地域の生産手段が全部灰に埋まつてしまつて、どうにもならんことになっていたんですから。伊藤 鉄道も切れましたし、道路も切れた。

海部 そうです。それは非常に惨憺たる状態でした。しかしすぐに手を打ったのは、仮設住宅をつくるということでした。

伊藤 あれは激甚災害とか、そういう指定をするわけですか。

海部 それはすぐに指定しました。もちろん激甚災害です。そして仮設住宅のほかにあのときすぐに打てた手は、市町村長に対して、緊急の貸付金が出るようにすること、それは視察にいった現地で、「やります」と答えてきました。

伊藤 それはもちろん、こつちから出かけるときにもう根回しして行くわけでしょう。

海部 もちろん。方法は何かあるかといったら、こうこうだということから、じゃあそれは言うてくるからな、といった。それで党は、司司にみんなおるから。だから長崎出身の議員に逆に、党のほうはよく根回しをしておいてくれよ、行ってやってくるから、と言つて、行って来たんだね。

伊藤 まあ、最初に先生がおっしゃったように、危ない、そばに寄るな、というにも拘わらず、まあ大丈夫だろうということでマスクミの連中はずいぶん近づいたんですね。

海部 だって、逃げる暇がなくてやられちゃったんだから。火砕流のスピードを素人は甘く見ているわけです。けれどもあれがダーツと流れてくるときは早いスピードですからね。

伊藤 ものすごいスピードらしいですね。

海部 ええ。それで犠牲者になってしまった。

■ロンドン・サミット

伊藤 さて、その翌月ですが、ブッシュ大統領との首脳会談のためにアメリカに行かれます。これはサミットの前ということですね。ロンドンで行なわれるサミットの前に訪米される。これはサミットの前打ち合わせですね。

海部 前打ち合わせということですが、このとき一番議論になっておつて、ブッシュが快く思つていなかったのは、どうもコールがえらそうなことを言い過ぎるということだ。EBRD [The European Bank for Reconstruction and Development] のことだ。それで、何か枠の権限をもっと増やしてやらせるとコールがいうが、それは駄目だ。約束した通りやっ行って行けということだ。フランスのミッテランは、あの頃はコールにうまく言いくるめられて、EBRDに送り込まれたのがミッテランの家来です。

コールはとにかく首脳会議の最中に名指しで、「ミスター海部、あんたは二枚のペーパーを用意してきたんじゃないか。スケールがちよつと違うじゃないか。中国に対して君は、われわれの合意を無視してでもやれやれと言うけれど、EBRDの話になると、こちらの提案に一言も乗って来ないじゃないか」というようなことを言われた。だからそのとき、「いや中国は隣の国だから」と言ったのが、結局はまづかつたんですけれどね。そうしたらコールは、「だつたらおれだつて、隣の国だ。だからEBRDに日本ももつとお金を出せ」ということなんですよ、結論は。

伊藤 コール、ミッテランというのはときどき組んで、日米とやるわけですね。

海部 そう。ジョージ・ブッシュもそのことは百も承知だから、「トシキ、寄つていかないか」といって、ワシントンに初めに行つた。「君のことは、どうせECの連中は（当時はまだEUと言わなかったんじゃないかな）いろいろ言うだろうけれど、要は日本からもつと出させるということだ。日本とアメリカだ。日米に責任を持たせるぞ、というような共同戦線を張っているようだけれど、それはあかん。約束事、決めたことはきちんと守つてやっていこう。まず決めたことをきちんとやっていって、そしてやり終わったときに、それでも足りるか足りないかで、やらなければいかん」。

僕はそのとき、そういったことを聞いたから、「日本でもそう安易によろしいといつて増額の約束はしないし、何が必要かということがまだわかっていないじゃないか。病人がここにいる、それはわかる。たしかに当時のロシアは病人かもしれない。でも、どの薬を飲ませたら効くのか、どの注射を打つたら効くのか調査ができておらん。まずきちんとロシアに行つて、何を援助したり再建に役立つかということを決めようじゃないか」と言つた。それでサッチャーさんもアンドレオッチさんも、それはそうだという。僕はそういうことを言いますからね。それでたしかそのときの会議では、直ちに増額する、というコールの提案はみんな抑えたということになりましたね。

伊藤 当然カナダも賛成はしないわけですね。

海部 カナダも、対ECだったら、アメリカと一緒に進んで進む。ブッシュはそのとき、「そのセリフは日本に向かって言うはずだから、おれが答えるよりも君が直接答えてやったほうがいいよ」「言つてよろしければおれが言うよ。事実そうなんだから」と言つた。

伊藤 それでこのロンドンのサミットで、初めてゴルバチョフ大統領がオブザーバーとして出て来ます。これはそれまで少しづつサミットのメンバーが増えてきたのとはちよつと違う。つまり、当時の

ソ連を考えたなら金持ちの国ではありませんからね。

海部 それからもう一つ議論の中心は、ソ連は共産主義体制からまだ自由民主主義の体制に完全に変わっていないし、経済行動自身もわれわれとは共通のものが無いじゃないか、ということ、初めから正メンバーにはしなかった。「したい」と言ってきたのを、私どもが「それは駄目だ」と言つた。

伊藤 「したい」と言つたのは誰ですか。

楠 サミットのメンバーの中では誰が言つたんですか。

海部 コールですよ。

伊藤 自分たちの味方を増やそうということですね。

海部 そう。要するに、自分の恩を売つてだんだん増えていくことがいいと。けれどもそれをやってはいけません。何をやったら共通の議論をするための背景ができるのか。だから援助の内容とか援助の方法その他については、もつと話をして、このメンバーだけではなしに、世界のあれが集まる。世銀もそう。そうしたらコールがすぐに「EBRDも入れろ」というから、「わかった。代表を入れて、議論は地球規模でやったほうがいい」ということで、最終的には合意しました。

伊藤 ゴルバチョフはオブザーバーとしてサミットに参加したわけですが、これは政治問題のほうですね。

海部 政治問題が中心ですね。

伊藤 そうですね。経済問題というわけにはいかんわけだから。

■日本・EC首脳会談

伊藤 それでは次の話までお願いします。ロンドンサミットが終わつて、そのままヨーロッパに残られて、日本とECの首脳会談をされます。日本とECの首脳会談といいますが、ECの首脳というのは誰のことを指すんですか。

海部 あのとときはECの議会の議長です。それまでヨーロッパの国々とはバイの関係ではいろいろあった。私も当時から日独「議員連盟」の会長をやっておったり、日英の関係があると出て行ったりしていましたが、日本とECを一つにまとめたものにはなかつたんです。それで、やろうと決めて、いままで続けておるようです。

そしてこの時は、終わったその次に場所を新しく設営して、ルベルスが代表になって、ヨーロッパ側の意見を述べ、ヨーロッパの希望を言いました。

伊藤 日本とECの関係というのは、貿易関係、政治関係、さまざまに相当あるんですか。

海部 相当あるんですが、どちらかというところE.C.のほうは貿易関係には非常に関心を持っているけれど、それ以外の関係になるとちょっと、とんちんかんなことを言うやつがおつた。

伊藤 この当時は、日本とヨーロッパの貿易は、日本の黒字なんですか。

海部 日本の黒字で、それがけしからんという。けしからんと言われるほどひどいことにはなつておらんが、「それよりもつとけしからんと思つているのは、いったい日本は自由貿易のドアを開けるつもりか、もう一回閉じるつもりか。いま閉じているじゃないか」ということを言い出す。「例えばどういふことなんだ。こちらは約束したものはみな開いてきて、必要以上に入ってきているのがちょっと迷惑だと思つようなことも、率直に言うところ」と言つた。特にこの時は、自動車関係なんかをヨーロッパが言い出した。「日本の自動車はヨーロッパの自動車産業をつぶすつもりか。どうも、そんな気持ちが見て取れる。アメリカとばかり自動車交渉をやらなくて、ヨーロッパともきちんとそういつたことはやらなければいけません。だからドアは開けるのか閉じるのか、方針をしっかりと教えてもらいたい。開けるといふのなら、どうやって、こちらに対して同じような態度で臨んでくれなければならん」といふようなことをさかんに言いました。

そんな頃、一番調子が悪かつたのは、フランスの女性、僕はミセス・サラダと言つてやつたんだけど、クレッソン。クレッソンがあることないこと、いろいろつくつては物を言つて、マスコミにもどんどん書かれる。だから経済問題はそちらのほうで、ほかの問題はあまりなかつた。とにかく第一回目の宣言だからきちんと出さうじゃないかといつて、一所懸命努力作業をしているさなかに、クレッソンが「ちよつとこの宣言はこんな内容ではいけない。日本がヨーロッパへ上がつてきて、現地で生産する物は全部輸入品として認めて計算するんだから、組み立てても何もかも全部駄目だ」という。「そんなことを言つたら、それは雇用もずいぶんしているんじゃないか」。あの頃日本の電子機器の中で、よく忘れませんが、初めてヨーロッパの進んでおつた部門があつたでしょう。複写機だ。

伊藤 コピーの機械ですか。

海部 コピーの機械。日本がだんだんあの頃、安いいい機械をつくつて売らうになつた。そんなことがあるし、自動車だつて、ローカル・コンテナツといったかな、その地域の部品をどれだけ買つてくれるかといふことによつて、どれだけつくるかをあれするかとか非常に細かいことまで言い出す。「それをもつと納得の行くようにしてくれなければ駄目だ」と言つてきたんです。

駄目だと言われて、せつかく第一回をやるのに駄目かと思つて、ドロールを呼んだ。あのころはドロールが中心になって向こうをまとめていましたから、「もしそんなことを言うなら、こつちももういい、けれどもドロールさんと私がいろいろ相談して、せつかくやろうといふんだから、バイでやつておつたことを、ECにまとめてくれ。ECとの会議が行なわれないうちにはおかしけれど、それでやつたせつかくの最初の会議なのに。終わるや否やみなさんはここにきて、私も帰るのをやめて来ているんだから、これがまとまらんことはよくない。第一回会議だから。すまんけれど、あなた、今晚中に説得してください。ミセス・サラダはあなたのお仲間じゃないか。あしたの朝サラダを持つてきてくれたら、おれ食つちやうか

ら」と言って笑った。

ドロールは、「ミッテランがどう言おうがこう言おうが、おれが片を付ける」という。本当に翌日の朝までにドロールが片付けてくれたんです。そして朝一番にドロールの秘書官が連絡に来て、「昨日のお約束はうまく行きましたから、今日の調印式はやりましょう。発表できますよ」と言ってきました。だから最後にミッテランが

(「そうだ、言い出しつべがミッテランだもの」日本に来たときに、「いままでヨーロッパはヨーロッパだけでやっておった。日本はアメリカとだけやっておる。これではいかんから、ヨーロッパと日本がやらなければいかん。もちろんバイではフランスも日仏議員連盟とか日英とか、日独とかあるけれど、やはりいまやECになったんだから、ECの首脳との会議を行なわなければならん。ECの首脳というのは、合議体みたいなもので、ちゃんと相談して決めるから」「それで結構だ」ということになって始めたんですから。サラダが一晩で説得されたのか、背景はわからんけれど、とにかくゆべまではいかん、と言っていたのが、よくなった。

伊藤 先生は日独の関係で、コールさんともしばしば会っているわけでしょう。

海部 ちよぼちよぼ会っています。

伊藤 あの人はどうなんですか。いままでのお話を聞いてみると、日本に対して、あまりよくない感じがしますけれどね。

海部 そうですね。心を開いて飛び込んでいって、この人のためにという気にはならない。そしてあれを最初につくったときは、一九八四年だったか、中曽根さんがサミットに行つて、中曽根・コール会談をやつて、そしてそこで今後も日本とドイツが中心になって、ECをまとめてやつていかないか、そこで日独の間の定期協議をするために超党派の友好議員連盟をつくろうというのが、中曽根・コール会談でできた。その時中曽根さんが「私の名前はヤスだ。アメリカとはロン・ヤス関係をやっておる。あなたと私のあいだも、そういう隔意のない関係にしたい」と言った。そうしたらコールが、

「やあ、その通りでよろしい」とか言って、抱きしめて、抱き合つて、えらい感激的なシーンをやっておった。はあ、と思つたけれど、そのとき一緒に行った議員連中に、しようがないから受けようといつて、毎年、国会は国会同士で相互訪問して、往つたり来つたりやろうと約束したんですね。

それで決まったことが幸いずっと続いております。それでここ三年間、私もドイツに行つていなかったもので、今度は会長自身に来てもらわなければ困ると言われておるので、来月はドイツに行つてくるんです。

伊藤 まあ向こうもメンバーが替つたでしょうから。

海部 いままでの大將であつたのは、ドクター・ヨブストといって、日本にもしょっちゅう来たんだよ。それでヨブストには勲一等もあげました。今度は変わったのが、選挙区がワグナーの生まれたところ、バイロイト選出の国会議員で、「今度来てくれたら、いっぺんワグナーのオペラにご招待するから来てください」という。

「聞くところによれば、日本の首相はよくドイツオペラを見てくださる」といって。

伊藤 なんとなくドイツ人とはうまく波長が合わないところがありますね。

海部 どうしてなんだろうか。だから今度またいっぺん、いろいろなことを言つて話しても、ある程度向こうは優越感を持っているんだな。

伊藤 あるんですね。そうですね。

海部 おれがひしひし感ずるのは、ヨブストと仲良くなつてから、「おまえらはな、あんまりえらそうなことを言うなよ。どうのこうのと言うから」「いや私はちつともそんなことを言うなよ。どうのこうのけれど、コールなどには何か近寄りたいたい嫌なものがあるな。

伊藤 えらいんですね。やはりヨーロッパの中心の人種だと。

海部 そういふようなあれがあるんじゃないか。

伊藤 Deutschland über alles (笑い)。先生、そこで切りましよ

う。どうもありがとうございます。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 32 回

海部内閣Ⅷ (1991)

【2004年8月26日 (火) 10:00~12:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】 (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

楠 精一郎 (東洋英和女学院大学教授)

佐道 明広 (中京大学助教授)

【記録、編集】 丹羽 清隆

(2004年8月26日)

1. 欧州訪問がおわったあと、8月10日に今度は中国・モンゴルを訪問されます。中国に関しては、天安門以来、西側首脳としてはじめての訪問になりますが、この時期の中国そしてモンゴル訪問を行われた経緯や訪問されたご印象などお願いします。
2. 8月19日、ソ連でクーデターが発生します。先生もサミットで顔を合わせたばかりのゴルバチョフ大統領はこれで失権していくわけですが、世界を驚かせたこのクーデター騒動では、米国との連絡や在留邦人の保護など、政府も大変だったと思います。このときのクーデターへの対応などお願いします。
3. 5月ごろから政治改革問題および秋の自民党総裁選挙問題が大きく動き始めます。まず、5月31日、政治改革関連3法案要綱骨子案が党議決定され、その後6月28日に政治改革関連3法案党議決定(7月10日閣議決定)。政治改革は「小選挙区・比例代表並立制」の導入が中心になっていたわけですが、当時の党内の雰囲気などはいかがだったのでしょうか。
4. 上の質問にも関連しますが、先生は「政治改革国民対話集会」を北海道や神戸で開催されるなど、国民にも理解を得るべく対話活動を行っておられます。改革の中心となった「小選挙区・比例代表並立制」への国民の関心・理解などについて、先生はどのようにお感じになられていましたか。
5. 7月2日に政治改革関連法案の党議決定に対し、自民党総務会が反発します。さらに同4日には、三塚・宮沢・渡辺の三派所属総務が党議決定のやり直しを求めて総務の過半数の署名を集めます。三派は、秋の総裁選挙を目指して協調していたようですが、この動きに対して先生はどのように見ておられましたか。また、先生を支持する竹下派もこの当時一枚岩ではなかったという報道もありますがいかがでしたか。
6. 政治改革法案に対する前述のような自民党内の混乱で、7月6日の与野党党首会談で「政治改革国会」を野党に求め、政治改革の主導権を握ってほしいという先生のシナリオが狂ってしまったという見方もありますが、先生ご自身は政治改革法案の成立に向けてどのように考えておられたのでしょうか。
7. このころ証券・金融問題がありました。証券会社による損失補てん問題で証券市場が混乱し、あわせて富士銀行不正融資問題に橋本蔵相の秘書が関係していたとして国会で追及されました。橋本氏や竹下派にはダメージだったと思いますが、先生の政権運営上はこの問題の影響はいかがだったのでしょうか。
8. 7月11日、東京佐川急便の暴力団稲川会系企業への融資が発覚します。これが翌年、佐川急便事件としてさらに拡大し、最終的には金丸氏への献金問題・辞職・起訴へとつながっていくわけですが、問題の発端となったこの時点において、佐川急便事件についてはどのように認識されておられましたか。
9. 9月、衆議院において政治改革3法案の質疑が始まります。本会議は異例の三日間にわたり、与野党18人、計5時間15分にも及びました。特別委員会でも同様で、与党12人、野党13人、17時間50分に及んでいます。結局、野党のみならず与党の中にも反対グループが生じたことで審議未了の扱いになっていくわけですが、党

内の反対グループに対しては先生は具体的にはどのような対応をされていたのでしょうか。

10. 政治改革法案をめぐって国会は紛糾している一方で、世論調査によれば政権交代に関して、先生の続投を支持する意見が交代を支持する意見を上回って44%となりました(9月18日「朝日」)。3ヶ月前は39%でかなり上昇したことになります。ちょうど総裁選挙について、宮沢・渡辺・三塚の各氏が立候補を表明したわけですが、国会における改革法案の混乱と先生ご自身の続投問題と、どのように考えておられたのでしょうか。
11. 前の質問と関連しますが、9月25日には金丸氏が「海部続投」発言をする一方で、政治改革法案は廃案となっていきます。これをうけて先生が「重大な決意」という発言をされるわけです。このご発言の真意については解散をお考えになったなど、当時からいろんな解釈がなされてきておりますが、実際、先生のご本心・真意はどういったことだったのでしょうか。
12. 「重大な決意」発言後、先生は政治改革法案廃案の責任をとるということで総裁選挙出馬断念を表明されます。竹下派支持、世論調査でも高支持率(56%)という状況があったわけですが、なぜ出馬断念を決意されたのかについてお聞かせいただけますか。

※今回は以上のような点についてお願いします。

■中国・モンゴル訪問

伊藤 それでは、始めさせていただきます。この前、ヨーロッパに行っていたしゃつたお話がございましたが、帰ってきて今度は、中国、モンゴルに行かれます。たしか天安門事件のあと、しばらく西側や日本はあまり「中国に」行かないという時期に、率先して行かれたわけですが、何かそこに特別の経緯があったのでしょうか。海部 一言でいうと、お隣の国であるからです。ほかのサミットのメンバー国と違って、日本の場合は、いろいろな歴史上の問題もあるし、地理的な問題もある。だから中国を孤立させておいたのでは、アジア太平洋のためによくはないという思いを僕は強く持っていました。ただ、あの頃サミットとしては、中国との高官交流もやめるということもあったし、こちらから保利「耕輔」文部大臣が中国に行くということに關しても、いろいろ問題があるからどうのこうの、もうちょっと先にできないか、というようなことがありました。それから中国側からは、たしかスーカカという名前の人が日本に来たと言ったんだけど、それもサミットのあれ「申し合わせ」に反するから、もうちょっと先にしたほうがいだろう、というようなことがいろいろありました。

しかしいつまでも放っておいたのではない。サミットの場では、たしか一年間ほどにかくもつと締め上げなければいかんということで、制裁をみんな決めようということであつたんですが、私は「そうではなくて、隣国であるという特別の理由もあるし、とにかく日本はそれはそのまま守れないんだ」と言った。

というのは、円借款が停止になっていたんですね。それはアジアの安定のため、平和のためにはよくない。当時はたしか、環境問題はひどくなっておったけれど、そんなに政治的な話題にはなっていなかった。そこで、中国の国内の整備のために使うならば、円借を

再開したらいい。円借款を決めたのは竹下さんのときだったけれど、こんなことがあって、すぐ駄目だ、ということでも切ってしまったから、それは再開させなければならぬ。

サミットの場でもそういう議論がずいぶんありましたが、私は私なりに、ブツシュ大統領とサッチャーさんにはよく話をし、「日本はそれをやるよ、中国との関係を改善して進めていきますよ。あれを孤立させたらよくない」と言っておりました。ちょうどブツシュさんは北京のことをよく知っておる。中国の駐在をやっておったわけですからね。「自分は自転車で路地裏まで走って知っておる」ということでしたからね。このことに対しては私の主張について、「サミットとしては合意がまとまらなくても、アメリカとしてはいいよ」ということだった。

サッチャーさんのほうは香港返還問題があつたものですから、ここではあまり敵視しない。香港の民主化を考えるならば、日本がこれからそこに目を向け、存在を知らしてもらうことはためになる。イギリスのためにも、いまはそのほうがいい。要するに、「香港の民主化については、日英共通でそれを見守っていくことが一環になるから、自分としては反対しない」ということでした。

ただ、いろいろと理屈をつけて、「出すお金はないんだ」と言いながら、「もつと重要な問題があるではないか」といつてロシアの問題を必ず例に引いたのがコール首相だった。けれどもそこは言うべきことを言つて、「こちらはこれでやらせてもらうし、おおよそのメンバーのみなさんもいいという。ただこの場で、G7でそれを了承するとか、認めるというのではなく、日本がやるということに対しては、わかつたというところまで合意が欲しい」ということで話をして、結局そういうことになりました。

伊藤 それは表向きに出たわけではないんですね。

海部 ここでの議論をひっくり返すわけにはいかないから、そういうことは議題にしなかつたことにして欲しいということで、表向きに出たのは、もうちょっと民主化をみんなが確かめなければならぬ、

ということでした。あのころ、ボイス・オブ・アメリカの問題だとか、方励之さんという民主化運動家の問題もありましたから、アメリカも非常に厳しかったんだ。けれどもブッシュはよろしいと言った。だから私も外に向けて言うときには、G7がそれを了解したとか、G7全部でやるとは言わない。日本だけがやることを、みんながそこで認めた、ということだ。

伊藤 黙認したということですか。

海部 そういうことです。

伊藤 そのときにモンゴルにもいらっしやるわけですね。

海部 これはまったく別の話になつてきますが、当時モンゴルというのはソ連の影響が非常に強い国でありました。ところがモンゴルとしてみると、いろいろ調べてみると、近隣諸国との等距離外交をしたい。日本に対してはまた格別な親近感も持つておるし、歴史に起因する問題も逆の意味でいろいろあつて、日本とモンゴルとの関係を非常に大事にしていきたいと思つてゐる。そこへもつてきて、最近日本の復興がめざましい。できればもつと仲良くしたい。ぜひいっぺん来て欲しい。今日まで日本の首相が来てくれたことがないじゃないか、ということでした。

そこでアジア局長の谷野「作太郎」君に、秘かにその問題についてよく調査をして、日本とモンゴルがそういうことに足を踏み入れることについて中国はどう思うか、ソ連はどういうリアクションを起すか、そんなことも考えて、やらなければならぬと言つた。しかしモンゴルをいつまでも放つておいていいわけでもないから、ここで決心しよう。よければおれは行くということで、自分が行くということを決めて、谷野君に宿題を出して、行くとしたらどうするか、という話をしました。

伊藤 中国に行く問題については、外務省はどういう態度だったんですか。

海部 中国に行くことについては、外務省の中にも硬軟両派があつたようですが、外務省のいわゆるアジア・スクールというんですか、

その連中は「ぜひ行つてください」という。それから欧米派とか主流派のほうは、「もうちょっと待たらどうですか、もう一回待つて、少なくともサミット参加国の合意を得るようになってからのほうがいろいろいいではないですか」という。要するに国際派の連中は、明けても暮れても、「まだ、いまは早過ぎる、特に人権問題がある」というようなことをさかんに言つてきました。

伊藤 党内でもいろいろ議論があつたんでしょうね。

海部 ありましたよ。党内でもぜひやれと言うのは中国に近い一部の人で、やっぱり渡辺美智雄だとか、ああいう組は、「あんなものはもうちよつと干しておかなければいかん、絶対によくない」という意見と、二つ大きくありました。僕個人は、中国を敵視するのはうまくないから、ここで日本だけは独自の立場でパイプを太くしておいたほうがいい。あのとき、いろいろなのは停止しても、ちよつとクッションを置いて、人物交流や高官交流もやつておつたわけですから、断ち切つていいはずはない。ということ、中国には行きたい、行けるようにしなさい、その前にやらなければならぬ問題があつたら手を着けよう。それは谷野君が一所懸命やりました。

楠 訪中前にアメリカとの調整はしておいたんですか。

海部 それはここだけの話だけれど、「おれは中国に行くよ」と、ブッシュにサミットの時にも言つておいた。「日本は特別の関係があるから、アメリカがそれに対してどうの言う必要はないと思うけれど、日本としては了解だけはとつておきたい」といった。

伊藤 そうすると、外務省の中にも意見があり、党内にも意見があるという中で、総理として行く、と言え、そうなるということですか。

海部 はい、そういうことです。そしてあの頃は中国との関係を断つてしまふということは非常によくない状況ですし、円借款の問題のみならず、対中国貿易の問題についても、スーカカはたしかあの頃、中国側の民間貿易の窓口をやつていたと思うんですね。だから民間貿易の面でもうまくないから、それはやつておいたほうがいい。

伊藤 竹下さんとか金丸さんという、先生の内閣の支えになつて
る人たちは、行けというほうですか。
海部 いや、「行く気なら一向に構わんから、行ってきてもいい
や」ということです。

■ソ連邦解体の始まり

伊藤 ではその問題は終わりにします。本当に毎週のように次々と
いろいろな問題が出てくるんですが、「一九九一年八月十九日、」
ソ連でクーデターがございます。これでゴルバチョフが失脚するこ
とになるわけですが、ソ連の終わりの始めということになるわけ
ですね。このように、ソ連でクーデターが起こった、あまり状況がよ
くわからないという場合、官邸としてはどういふふうに対処するわ
けですか。

海部 これは初めは、本当に情勢がよくわからなかったな。そして
ゴルバチョフが生命を保っておるのかどうか、それもよくわからな
かった。クリミア半島だったかな、そっちのどこかにいるけれど、
という程度の情報があった。そしてテレビを見ておると、エリツイ
ンが戦車の上に飛び乗って意気軒昂に演説をぶっておるところがバ
ンバン入って来るわけです。これはおかしいじゃないか、ゴルバは
どうしたんだ。ちよつと無茶だったが、あの日、予算委員会か何か
のお昼休みに、「電話が通じたら電話をかける」と言ったんです。
そうしたら不思議なことに、電話が通じたんですね。

伊藤 ロシア大使館ですか。

海部 いや、モスクワに電話を入れた。まだ日本はお昼ですからね。
そのとき、もしエリツインが出たらエリツインに、「おまえの勇姿
を見たぞ」と言おうと思つたが、エリツインも電話には出ない。ゴ
ルバチョフがおつたらもちろんいいが、わからんということです。
そのとき電話に出たのは誰だと聞いたら、ハズブラートフだとい

んだ。ハズブラートフが「自分がこれから日本との窓口をやる」と
言う。「君はロシアの国会の議長じゃないか」と言ったら、「いや
いいんだ、やってくれ」という。それならば、この騒動がどうい
ふふうになるかという見通しをまずきちんと教えてもらわなければな
らん。それに従つてできるのかどうか。外務省を通じて来ている第
一報も、向こうに革命委員会か何かできて、それが言ってきたこ
とです。外務省の当時の説明では、「従来の方針通りやっていい
いいのか、材料がまだありません」ということだった。

それから臨時議会の議長になったのはヤナーエフといったかな、
副大統領か何かだ。日本に来たこともありまうから、私も会つて話
をしてる男だ。これがなつて、今後は自分のほうでやるから、と
いう長文の電報も外務省を通じて来たんです。しかし、まだこれは
外に出すのはちよつと待とうじゃないか。とにかく情勢が刻々と動
いておるし、ゴルバチョフの命が残つておるのか残つておらんのか
もわからん。何よりもエリツインが意気軒昂と戦車の上で演説をぶ
つておるのに、軍はそれを支持しているように見える。軍が支持し
しなかつたら、あそこで引きずり下ろされるはずだ。もうちよつと
様子を見なければならぬ。軍が革命みたいなことを支持している
というニュースも裏から入ってきている。

それで私はいまままでお話ししたと思うけれど、ロシアとは裏の深
いパイプを持つている末次一郎君という長年の友人に聞いたが、さ
すがの彼も、「よくわからん」と言う。「けれども君のあれ「パイ
プ」を通じて、全部探ってくれ。まず第一はゴルバチョフは生命を
保証されているのかどうか。それからヤナーエフの政権は進んでい
くのかどうか」と言った。

当時日本政府、外務省と官邸で一番考えたのは、これは通常の形
の政権移譲ではない、異常な形の政権移譲だ。政権移譲というより
もわれわれはクーデターだと見たい。けれどもクーデターと言いつ
つてしまうのは非常に冒険だから、注意深く様子を見たい。その日
は予算委員会もあるわけですから、予算委員会もまた流れに従つて、

その都度の報告を受けて、対応しましょう、ということだ。だからクーデターと断言はしませんでしたが、クーデターのような受け止め方も非常に強い。そういうことを言ったことを覚えています。

ただ、ゴルバチョフは、たしか二日後には健在であるということがわかったわけですね。一日でクーデターは失敗したわけだ。

伊藤 こういうときの情報は、末次さんもそうでしょうが、アメリカとか、それから日本に情報機関があるのかないのかわかりませんが、外政審議室とか、いろいろなところからほとんど情報が入らないんじゃないでしょうか。

海部 来ます。外政審議室からも来るし、米大の大使直接で、情報はもらってくる。

楠 先生はクーデターの発生の三日後、つまり八月二十二日には、エリツイン大統領と電話会談をしているんですね。これはどういう話ですか。三日後で、もう大統領になっているんですね。

佐道 エリツインはその前にロシア共和国の大統領になっているんですね。

伊藤 ソ連の大統領ではないんですね。ロシアの大統領とソ連の大統領がどういう関係になるか、ということでしたね。

海部 たしか外務大臣も、ロシア共和国の外務大臣が、「外交は私が命じられて取り仕切ります。今後の日ソ交渉関係は、ロシア共和国でやります。なぜならば、ロシア共和国の範囲内に北方領土も全部入るからだ」というようなことをわざわざ言ってきました。

伊藤 こういうときは、在留邦人の問題とかそういうこともすぐ考えなければならぬわけでしょう。そういうことは外務省にお任せですか。

海部 外務省はそのとき「在留邦人の身には危害は起こっていないし、起こり得る状況かどうかは、わかり次第連絡をしますが、一応いまは平静を保っています」と言っていました。一応出動した部隊も直ちに制圧したみたいですから、モスクワも平静が保たれた。ただ射撃されたのは、赤の広場のこちらにあるホワイトビルですか、

それだけです。内戦的な危機があったのは。

伊藤 本当にごく一部の場所だったわけですね。

海部 はい。二・二六事件みたいなものです。

伊藤 そうですね。二・二六事件よりもっと小さいかもしれませんが。

■政治改革の周辺1（政治改革法案の閣議決定）

伊藤 それで、先生の内閣の課題でありました政治改革の問題と、秋の自民党総裁選挙がだんだん動き始めるということになります。

五月二十一日に政治改革三法案の要綱骨子案が閣議決定されて、六月二十八日には三法案が党議決定され、七月十日に閣議決定になります。ここでは小選挙区比例代表並立制の導入が中心で、それ以外は大した議論にならない。なんとなく政治改革の焦点がそこに行ってしまったわけですね。

海部 そこに焦点を当てられてしまったがために、党内のいろいろな反対運動に火を点けた。例えば名前を言ったら悪いかもしれないが、全国紙で、一人の試案を引っ張り出して一面トップに載せて、金丸氏の選挙区はここに替わるとか、誰の選挙区はここに替わるとか、大して根拠のない一覧表を発表したところがある。そこで、「こんなところに替わらせられたらかなわん」と言い出したのが金丸さんだ。真つ先に反対を言い出した。「おとつあん、反対したら困る。これはわれわれが決めた案ではないし、私自身がそんなことは全然関知していないし、関知してはいけない。区割を決めるときには区割委員会でもっとわかりやすくして、基準を示して議論してもらってから発表しますから、いまそんな反対だと言われても困る。われわれも、その作業には直接間接タッチしないでやっているんですから」と言いました。小選挙区反対運動に火を点けたい勢力もたしかにありましたが、しかしそれはいけません。

それで僕らは小選挙区にするだけではないということを強調しました。あの頃、お金の問題と倫理の問題がちよつと霞んでおりましたから、第一は政治倫理の確立である、第二は必要以上のお金を用意しなければ選挙ができないという風潮はよくない、と言ったわけです。国民の信頼を取り戻すためには、必要にして十分な最小限度の資金はこれぐらいだということいっぺんみんな議論して決める。それを守らなかつた者は、将来の公民権を剥奪するというぐらいの厳しいものをやるうじやないか。

イギリスは一八八三年でしたか、オラクション・コラプションといったかな、そういう名前の厳しい法律があつた。三木さんあたりはその法律のことを日頃考えておつて、勉強にも行かせた。帰つてきた自治省と法制局の連中は、イギリス的な方法でやるならば、

「お金の枠を決めて、その枠内で使うお金は小切手にする。小切手を切つて、選挙運動の費用に使う。その代わり、ここで初めて公費というものを考へて、その小切手の落としては政府が責任を持つ」という案も出した。これを巡つて、党内でいろいろな反対論に火を点けたわけです。

伊藤 選挙法の改正ということになると、ハチの巢を突いたみたいなことになるわけですが、このときに小選挙区が政治改革の中心になつてしまつて、ほとんどほかのことは霞んで、このことだけに議論がなつてしまつていいですね。

海部 そうです。だからそれだけではない。政治改革で、あのときみんなが思つてゐるのはリクルート事件、ロッキード事件です。特にリクルートに関するいろいろな問題で世の中が騒然としてあつたことになつたわけですから、この機会に政治改革をやらなければいかん。それから私が、名前を出したら悪いが、渡辺美智雄とか、リクルートの灰色高官は党の要職には乗せないといいことを貫いてきた。いまでも覚えておりますが、組閣の度に出てくる名簿には必ずそういういやな予定者がおるが、「これはちよつと待つてくれ、これは党が政治改革をして、党が生まれ変わつてから入つてもらふ

人たちだから」ということで、組閣を貫いてきたつもりです。だいぶ厳しかったですけれどね。

伊藤 結局、小選挙区になつた場合、いまおつしやつたようなこともありますが、派閥の解消とリンクすることになりますね。

海部 はい。派閥解消は天の声だとあのころ言い続けた人があつたし、三木さんなんかも、「諸悪の根源は派閥にある」と言つてやつてきたわけです。われわれもそうだと思つたから、私が議連、国対に出て行つて、派閥次元ではないところで、国の運営のために一所懸命頑張つた。だが、派に帰ると、当選回数の上の議員や、年上の連中には相当痛めつけられましたね。三木さんと話をすると、三木さんは、「いいから、君の思つた通りやれよ」と言われるから、「やつてきます」と言つていた。それでも、こういういやなのが

おるからといつて、三、四人の該当者がおりました、威勢がいいのが、それでも、そういうことをなくすこと自体も政治改革になるんだと、私は上から下までの次元をみんな思い出しながら、これはやらなければならんと思つて取り組んだのが、小選挙区比例代表並立制であります。

伊藤 それは党内で孤立したわけではないんですね。

海部 孤立ではありません。

伊藤 支持する人もいたんですね。

海部 支持する組もあります。

伊藤 しかし本当に現実の区割まで行つたら、またちよつと違つてくるだろうと思ひますけれどね。

海部 区割の予想案を出されただけで、われわれの最大の後ろ盾であつた金丸さんが、「あんなことでは困るよ、おれは山梨以外では選挙はやらんから、あれなら反対だ」と言うから、「いや、あの案は政府がつくつたわけでも何でもありませんから。あれは間違つたガセネタですから、そんなことで天下の金丸先生が動いてもらつたら困る」と言つた。そうしたら、「そうか、けれどもあんなのはあかんぞ」といつて、金丸さんですらそう思つて、すぐ電話をしてくる

ぐらいですからね。ボンボン言い出した連中、小選挙区制反対だというやつらが、いまのように五人、六人集まっては、その代案をもとに、「小選挙区になるとわれわれは外される。われわれを落とすつもりでやっているのか」というようなことを言い出しておったのも事実でありました。

■政治改革の周辺2（宮澤派、YKKの動き）

伊藤 それで、先生としては、国民対話集会というのをずいぶん熱心におやりになって、あちらこちらで演説をなさったりしています。そういうときの反応はいかがでございましたか。

海部 聴衆は、その会場に入っている人たちの反応は、圧倒的に「やれ！やれ！」という支持が強いんです。

伊藤 逆に言えば、支持する人が来るわけですね。

海部 そう。でも街頭演説は支持する人だけではありませんよ、ヤジる人もおる。けれども、例えば札幌の街頭演説でも大阪の街頭演説でも、私は反応は悪くないと思えましたね。だからそれを重ねるたびに自信を持っていったのも事実です。

伊藤 でも結局、この関連法案の党議決定について、やり直しをしるという形で、三塚派、宮澤派、渡辺派の三派がなんとなくまとまって、これがまた総裁選挙に結びついていくというような格好になるわけですね。これは口実でしょうか。

海部 いや、背に腹は代えられんという本音の部分もだいぶあります。小選挙区にされたら派閥の力がなくなるし、せつかく耕してきた畑がこれだけになってしまふとかいうことで、当落を賭けることになる。誤解されたが、「小選挙区にして政権交代可能な民主主義をつくる」ということは、政治に緊張感が出てくることだ」と僕は言いました。そうしたら「それは利敵行為だ。総裁は初めから負けるつもりで考えておるのか」というようなことを言ってきた。「や

れるものならやってみろ」なんていうことを、えらい生意気に言ってきたのが、いま閣僚になって、いろいろなことを言っているから、噴飯物です。その頃のイメージから行くと、小泉純一郎は改革派でもなんでもないですよ。

楠 YKKが一番強く反対したんですね。

海部 改革派でもなんでもない、反対派だ。特にその急先鋒に立って、一番陰険に利用してやっていたのが加藤紘一です。こいつは許せないと思つて、宮澤さんにも直接そのことは言った、「あんたは駄目だ」と。

それからもう一つ、小泉はYKKの最後ですね。あれはほかのこととはあまり言わなかったけれど、小選挙区に関しては頭から反対だったんです。僕は「君はイギリスで勉強してきたのに、小選挙区に反対か」と言ったら、「いや、勉強してきたのはほかのことで、選挙制度、行政論の勉強はしてこなかった。あれ「小選挙区制」はぶつぶすから」という。

YKKができた大きな言い分は、「いくらわれわれが頑張っても、竹下支配に押さえられておる自民党では駄目だ。ここに重点があるんだから、総理、あんた勘違いせんでくれよ。倒閣運動でも何でもないんだ。反竹下派だ」ということだった。しかし表には出しにくいテーマだね。だからYKKの集まりは、小選挙区反対のところはどうしても行きますが、本当は竹下支配に対して反対だったんだと思う。それは何回も私に言いに来ましたし、また共通の友人、例えば牛尾治朗だとかと飯を食うと、「海部さん、あんたな、誤解して怒っておらずに、こうだよ」と言ってきた。それから堤義明は、「加藤紘一に反対運動ばかりするなと言った。けれども、反竹下なんだ」というようなことも言いましたね。

伊藤 しかし反竹下でやられたら、海部先生はつかえ棒を外されるようなことになりませぬ。

海部 それから、竹下派というのが数の上でも多いし、いわゆる政策のデパートと言いますか、それぞれの部会にポイントを置いてい

た。特に選挙では、資金の問題でも公認の問題でも、要所は全部押さえてやっていましたから、政権をつくるときは、これが応援してくれなければできない。けれどもそのとき、いかなる加減か、竹下派の方では、橋本人気というのは国民的にはあつたけれど、金丸さんは見通していたのかどうか知らんが、あれは駄目だという。なぜ駄目か、といろいろ聞いてみると、これ「左手の小指を立てる」とこれ「左手の親指と人差し指で丸をつくる」の二つだから、駄目だという。

伊藤 両方とも出ちゃったじゃないですか。

海部 それで宇野がやられた後だから、金丸さんだからああいうことを言うけれど、「こちらのほう「下半身を指す」は大丈夫か、この次のやつは。尾行をつけて、これ「小指を立てる」はおらんか調べ上げる」というようなことを言われたりした。冗談でしょうが、半分本気です。「また今度これ「小指」でやられたら、それで終わりになっちゃうから」と言っていた。脱線したようだけれど。

伊藤 だけど、その三派は、結局最終的には海部さんに対して、次の総裁選挙で候補を出していこうという形ですね。

海部 それはもちろんそうでしょう。

伊藤 その手がかりとして、小選挙区制の問題をやるわけですね。

海部 つぶそうというわけだ。はじめは、表面的には協力するような顔をしてずっとやっておいて、それが駄目になったときは、こんなこと一つできんようじゃ駄目だといってつぶそうとする。宮澤が中心になってそういう方針を作った、加藤紘一が先頭に立って、八つ当たりみたいになって悪いが、北海道の阿部文男、あとで御用になった人ですが、あれらが総務会に行つて、さかんにそれを仕掛け始めた。

あの頃、西岡「武夫」君は、別の意味で私とは信頼関係があつた。あれは早稲田の雄弁会で、選挙のたびに僕は長崎に応援に行つていくんだ。それで西岡が、「私はこれはやりませぬ。加藤紘一と宮澤はけしからんやつだ」というんだ。

その加藤紘一を敵に回した遠因は、宮澤さんがとれといったのに、私が「海部内閣に」とらなかつたからだ。それは私憤でとらなかつたのかというと、そうじゃない。もうちよつと挙党態勢をつくらなければならぬし、同時にあの頃加藤さんの問題がちらちらとお友達関係で、お金のほうの問題が出てきておつた。

伊藤 そういうことはよく聞かえてくるものですか。

海部 はい。不思議に聞かえてくるんですよ、「こういうことを知っていますか、こうですよ、ああですよ」ということが。

佐道 当時から、やはり噂があつたということですか。

海部 はい、お金のほうでは厳しい、細かいことがありました。そこで、もしそんなことで叩いて埃が出て来たら、そのこと自体そう大したことではなくても、「天の時、地の利、人の和」という大きな流れの中で出てくると、大変な責任を負わされる。もう一回選挙にきちんと勝てるようになるまで、その問題はきちんと蓋をしよう。「私の内閣のうちには消費税を上げませぬ」と言う小泉と一緒に、「私の内閣のうちにはリクルートの関係者は使ひませぬ」と言っちゃつたものだからね。

二度目の組閣の時か何かに、渡辺美智雄が、これを使え、あれを使えといろいろ言ってきたやつに、引つかかるやつが多いんですね。閣僚のほう、党役員の方々はそうやって目を光らせておつても、政務次官までは正直に言つてわかりませぬよ。各派で話をされて、上がってきたリストをずらつと見て、パツと決まるわけですからね。その政務次官の中に灰色さんが一人入つていたものだから、「これは公約だから、政務次官だからいい、大臣だからいかんということやっておると、蟻の一穴になって堤防が駄目になる。ここはすまんけれど、歯を食いしばつて党のため、日本の政治のために一期先延ばしするよ」といって、それは先延ばしをしました。そういつたことが、長い目で見ると、加藤紘一に恨まれるもつとつくつたんだろうと思うんです。個人的には、加藤紘一は当選した次の年に、「私はまだ外国へは行つたことはありません。一回連れ

て行ってください」と言うから、ドイツへ行くときに連れて行ったんですよ。「その代わり、おまえは日独友好議員連盟に入って会員になれ、なったら連れて行く」といったんですよ。それ以来、よく知った仲だったんだけど、お互いに立場が変わって派閥を背負うことになる、いけないですね。

伊藤 それは当然そうですね。

海部 そしてまた宮澤さんが電話してきて、「今度はいかがでしょう。複数の名簿をお届けしてありますが」と言う。けれども加藤紘一がいの一番に書いてあるから、それは駄目だというところが立つから、「先生、もうちよつと増やしてくれませんか。こちらに選択肢をもうちよつと与えてもらわんと、イエスカノーかで返事を迫られると、残念ながら答えが決まってくるんです」と言ったんだ。そうしたら、あの人を横に座らせておつたんでしような。「とおっしゃると、宮澤派を足蹴になさるといふことでございますか」、そういう言葉を使ったから、よく覚えていてね。

楠 ストレートな言い方をするんですね。

海部 ねえ。「足蹴になんか絶対にしませんよ。けれども、私のお願いしたいことは、もうちよつと幅を広げて複数で出してくれといふことです」。具体的にいうと西岡を入れるといふことですね。加藤一ひとりを出してくるから、加藤一では駄目だと言いたかつたけれど、それは言えない。いろいろな積もる理由もあるので、西岡を出してこいといつても、出してこないわけだな。そうしたら「宮澤」派内で、もし今度西岡が入ったら、彼を派から除名するといふように、加藤一が画策して、阿部文男が動いたわけです。

そういうことがわかったので、宮澤のところにもういっぺん電話を入れて、「先生、複数で出し直してくれましたか」と言ったら、「ああ、お届けさせました」という。それで見たら、一番最後に、三役候補に西岡武夫と書いてあったから、よし、これならこれでいい。もらった中から私がチョイスしたんだから。あのころ、人の懐に手を突っ込んだとか、そういういやな言い方をされたんです。党

内秩序が乱れるという。だからなんとかそこへ追い込まなければならんと思つてやつたわけですね。

伊藤 元来あまり宮澤さんとの仲はよくないわけですか。

海部 よくないです。だって海部内閣のときに、支持率が高かったでしょう。「ああ、一所懸命おやりになっていきますね。高校野球の試合を見ているようなものですよ。まことに一所懸命おやりになっていきます」といふことを宮澤さんは言うんだ。それがほめ言葉じゃないことは、聞けばわかりますよ。いくら一所懸命やつたって、汗を流したって、ということでしょう。

伊藤 たかが高校野球だ、ということですね（笑い）。

海部 ですから初めからボタンの掛け違いがあつたわけです。それからもう一つは、あの人とは三木内閣の頃にも遠因がある。会期延長を許可するかしないか、という差し迫つたときに、当時外務大臣だった宮澤さんは、北方領土視察のためにその閣議は休みますといふ欠席届を事前にポツと出してきたんです。三木さんが、「これはいかん、許可しない、呼び戻せ」と言われたから探したら、もう北海道に行つてしまつていて。時間的に無理なところに行つちやつてゐるわけだ。そんなことから、いろいろと私にはあれ「不信感」があつた。

それからもう一つはその後、河本「敏夫」さんの総裁選挙を巡つてのことだ。河本の総決起大会で、河本も日頃は、経済は積極経済でなければならんといふことで、宮澤さんの経済政策とは噛み合うところが多かった。そのころ宮澤さんは、三木さんの外交と噛み合はんことは私はよく知つていました。副長官の頃に、一緒になっていろいろなことをやりましたからね。けれども経済政策に関しては、河本さんがやつておる方針には賛成してくれるだろうと思つて、宏池会の事務所に、恥を忍んで頼みに行つたんです。「こういうわけで、河本のあれ「総決起大会」ですから来てください」と頼んだら、手帳を出して、見て、「はっはあ、あれですね。まことに残念ですが、私もこういうことになつておらなければお邪魔するんですが、

とても大事な先約がございまして」といって断わったわけだ。ああ、逃げられたなと思つた。帰つていって河本に、「こういうわけで先約があつて駄目みたいですよ」と言つたら、河本さんはさつぱりした人だ。「あ、そうですか。それは結構です」、それで終わりだ。

そんなようなことが積み積もつているところにもつてきて、さらに決定的になつたのは、竹下と宮澤が争つたときに、竹下はいかに金権で、金脈の汚いものをいっぱい使うかということ、宮澤は思つてもおつたけれど、そのことをおれにも言う。「三木さんとよく話して相談してくれ。三木さんもこの際は日本の政治改革のために、竹下ではなくて宮澤をとおしやるはずだと思ふ」。彼は妙に自分は三木さんに信じられておると思つておつたんだな。

それで、それはその通り三木さんに報告しましたよ。三木「そう言つておつたか」、海部「どういって返事をしておきましようか」、三木「うん、それはちよつと当分は誰にも言うなよ」、海部「それじゃあ放つておけばいいですね」、三木「うん、放つておけばいい」ということだ。

しようがないから宮澤さんには、「三木先生はもうしばらく駄目だ。放つておけ」ということですから、派内でもどつちの支持に一本化するとかいうことはしません」と言つたことを覚えていますね。あに図らんや、数で選ぶほうは、数で行けば竹下だと読んでおつて、宮澤の目はなかつたわけですね。

伊藤 そのときは宮澤さんはかなり本気だつたんですね。

海部 本気だつたから、身を低くして私まで呼び出して、「三木先生にひとつ、こういうことをおっしゃつてくれませんか」と言う。サミットの時も、総理に直接言いくいことは、おれを呼んで、「副長官、すみませんがこういうことを言つてくれませんか」という。「わかりました」と言つて、お取り次ぎしたことは何回もあるんです。だから、お考えもわかつておる。けれども、政治改革のときには彼は協力的ではなかつた。

伊藤 政治改革そのものには、宮澤さんという人はかなり熱心だつ

たんじやないですか。

海部 いやそれはお金に関する限りだけ。けれども協力的ではないですよ。協力的じやないからこそ、宮澤派の総務会の阿部文男が先頭に立つて署名運動を始めたんです。それでにんまりしておつたのが加藤紘一だ。あの宮澤派というのは、政治改革に関する限り、決して協力的ではないし、そこに加わつてきた小泉も、YKKは全部揃つて反対派だ。

ホテルオークラの玄関か何かで、小泉が歩いてくる、僕が行く。おれが、この野郎、と思つて、「言うことがだいぶ変わつてきたじやないか」と言つた。その前からいやなことを言つているものだから。そうしたら、「とことんやつて、総務会で駄目になります」とか、さかんに言つておつた。「まあ見ておれ。西岡が一所懸命やつておるから、おれは信じておるから。全国を回つてくると、国民の声は、自民党よ、しつかりやれよということだ。だからしつかりやる。君も将来ある人だから、ひとつ賛成に回つて、旗を振つてくれ。そんなYKKなんていうのは駄目だ。人を通じて、君はいろいろなことを言つてくる。あれは海部内閣を倒すためのYKKじやない、竹下支配を倒すためだと君が言つているということは聞いた」。そうしたら、「いやいや」なんとかかんとかと言いながら、そのときは別れたんだ。

政治改革の周辺3 (政治改革法案の廃案)

佐道 この政治改革の問題で、選挙制度ばかりに焦点が当たつてしまつたというところは問題だと思ふんですが、結果的に見ますと、小選挙区制の導入で自民党の派閥のあり方は大きく修正を迫られることになつて、一番大きな打撃を受けたのは、橋本派とか竹下派の流れでした。それは結果であつて、その当時どこまで見通せたかという問題はあつたと思ふんですが、派閥の問題が一番問題だとい

う流れの中から小選挙区制を導入しようというところが出てきた。そうだとすると、反対している人たちにとって、区割がどのようなのは全く個人の利害の問題であって、一般的にはあまり説得力がない話だと思ふんです。政治家自身にとつては問題かもしれませんが、そこはどういう論理だったんでしょうか。そもそも小選挙区制の導入がどういふ結果をもたらすとかいうことについては、きちんとした議論がなされにくかったということでしょうか。

海部 議論は、私の記憶に間違いなければ三百五十六回、いろいろな種類の会合をやりました。もうこれ以上聞くことはないというぐらゐら聞いた。各当選回数別、年齢別、地域別、それから地方にこちらが出て行って、北海道から九州まで行った。人を集めてやるのはいけないという批判もあるのです、こちらは街頭演説をやるということ、街頭演説をずっとやって、それらを含めて三百五十六回です。それだけやって、「反対する人は、言いたいことはウンとでもスンとでも言ってくれ。その都度答えるよ」と言っていたんだ。

それから、これも前にお話ししたと思うんですが、衆議院の本会議で全く稀有なことをやった。いかに重要法案といえども、衆議院の本会議でその提案の趣旨説明を求めるのは一日で終わっているんです。二日以上かかったことは決してなかったんです。三日間やったのは、施政方針演説に対する質疑ぐらいですね。けれども、これに関する質疑だけは議員運営委員会にかけて、十七人の質問者を決めて、時間制限なしでした。ですから、結局三日間かかりました。そしてその中で、一自民党から出て来た質問者も、反対の結論を言う人が過半数でしたね。

伊藤 とにかくこれは、党議決定としては推進することになったわけでしょう。

海部 そうです。党議決定は推進することになって、改革要綱もできました。自民党が本当に生まれ変わって、一切のあれ「腐敗」と訣別します、というようなことを言った。いまでいう国民の政治不信も高まっておるから、これを元に戻すためには、自民党自身が、誰が

見てもわかるようになるほど心を入れ換えているという枠組と内容を示さなければならぬという気持ちで始めた仕事ですから、やらなければならぬ、やりましょう。そういう議論だから、あまり表出つた反対もありませんでしたが、影へ回つてのボンボンはよくあつたということですよ。

それから、県連の会長とか幹事長とか婦人部長とか青年部長とか、そういう角度の人も東京に集めた。三百五十六回の中には、そういうことも全部入っているわけです。だから、各界、各層あらゆる意見も聞いてあるし、町の声も聞いてあるし、選出された人の意見も聞いてある。それは、各新聞社の論説委員で政治改革を担当して書いている人に全部集まってもらつて、小林与三次さんを会長にして、審議会をつくつてもらつたんですよ。

伊藤 推進するほうの会ですね。

海部 推進するほうです。政治改革はしなければいかん、いまが推進する時期だ、いまをおいてはない。それはそうでしょう。あそこまでやられたんだ。内閣総理大臣が総理大臣の指名を衆議院でもらえても、参議院ではもらえなかったんだ。そういう冷厳な現実の前で、放つておけば自民党はこれで終わりになるのではないかというもつぱらの話でしたからね。

伊藤 党議決定があつて、多数を持つていても、これは審議未了になつてしまふわけですね。この結末は一体どういう事態なんですか。海部 これはやっぱり面従腹背というか、本音と建前の使い分けをしなければならぬ人も出て来たからです。結局、委員会段階で廃案にされたわけですね。それは正式の機関では決議できないわけです。けれど国会に任せて、司法・行政・立法の三権の中で、立法府の中で採決をやつたら負けてしまった。その採決も、また予定日より前にやつたんですからね。ある日突然という感じで、言いにくい話ですが、それを決めてやることは私は直接事前には知りませんでした。やりますよ、という通告は来なかつたわけです。来たら、そうはいかんといつて、もつと粘つて交渉しろと言ふに決まつておりま

すから。

党のほうはどうだったんだと聞いたら、西岡も「いや、そんなことは総務会では認めておりません」という。けれど、国会運営の権限は総務会ではありませんからね。与野党の国会対策委員長会議で決まると、だいたいそれが国会運営のルールの上を走るわけですからね。

伊藤 結局自民党の側の国対の人が問題のわけですね。

海部 そうです。だから当時の自民党の国対関係の幹部、例えば政調会の中にある国対担当副委員長とか、幹事長室における国対担当副幹事長とか、そういう国対関係者が集まった合同会議なんかで、一年生の声なんかを聞くと、一年生も心配だということだ。そこで裏に回って一所懸命根回しをしたのは、私は宮澤派と加藤紘一だと、いまでも信じています。そういう話をみんなが聞かせるし、また事実そうだったろうと思います。

佐道 竹下派が多数で、幹事長は小淵「恵三」さんですね。そういう中でも宮澤さんとか加藤紘一さんの工作がうまく行ったというか、功を奏したということですか。

海部 結果としてね。それは竹下派の一年生、二年生といっても、背に腹は代えられん人もおったんじゃないかな。自分は賛成じゃないけれど、反対とは言えん、反対してくれたら反対してもらったほうが自分のことを思うといいな、と思っっている。要するに未必の故意です。自分からやることは差し控えるけれど、突撃と言われれば銃を持って走っていくけれど、声を出さずときはヤーツと言っておいて、退くほうに力を入れて、出すほうはおおるおおる出すという人がたくさんおったんですね。

佐道 竹下派というのは、田中派以来の「鉄の団結」と言われますが、なかなかそういう押さえは効いていなかったということですか。海部 それは最初に申し上げたように、入口のところ、竹下派のアバウトスキイの親分が、産経新聞の朝刊に載った「金丸、選挙区は〇〇」というガセネタを読まされたからだ。たしか、「山梨から

神奈川一区に」と書いてあったかな。何の理由も関連もないのに、こうだといってスッパ抜いたような記事で、それにはほかの人のこともいろいろ書いてあったんですね。あれはつぶすためのガセネタです。出所は、なんとかグループのなんとかによると、こういう試案もあるということでした。

伊藤 怪文書のたぐいだな（笑い）。

海部 それを新聞が使うからいかんですよ。

伊藤 竹下派優勢の中でもこれはできないんですね。

海部 それだけ背に腹は代えられん人が、竹下派の中にもたくさんおったのではないですか。

佐道 金丸さんは非常にアバウトで、金丸さんの名前はこの当時もよく出てくるんですが、幹事長を退いて以降の小沢「一郎」さんの動向はどうだったんでしょうか。

海部 わからん。とにかく、最近のあの「民主党内における小沢氏の」動きを見てみると、まだ持病が治ってないなと思う。

伊藤 あれは病のほうですか。

海部 あれは病です。だから死ぬまで治らん、ああいう性（さが）は。人間の業（ごう）でしょう。何か自分の思った通りにいかんときは、政策論争を吹っかけたりする。理論構成はなるほどと思うことを見つけておる。誰か知恵をつけるのがおるからだ。国連待機部隊もそうですね。それで岡田「克也・民主党党首」が憲法改正してどうのこうのと言ったことにガブツと食いついて、「できもしないことを言っただけだ、憲法を改正しなくてもやろうと思えばできる芸当はあるんだ」と言うわけだ。どっちが現実論として軍配を上げやすいかということになると、小沢は相当な作戦の経験者ですからね。

佐道 小沢さんはいま、トップになろうとは思っていないわけですね。

海部 というふうには思わせておるだけだ。

伊藤 そうですか。いろいろ解釈の仕方がありますね。

海部 ならなければ、彼の志は達せられなかっただろう。それが主題じゃないから、そのへんにしておいてください。

■政治改革の周辺4（損失補填、佐川急便事件）

伊藤 ちよつと別の問題になりますが、証券会社の損失補填問題ということでゴタゴタがございました。それで富士銀行の不正融資問題に橋本さんの秘書が関係していたということで、また政界のスキヤンダルが出てくるわけですね。これは、海部内閣にとっては非常に具合が悪い事態ですね。

海部 具合が悪い事態です。

伊藤 政治改革だといって、その内閣を支えている竹下派の橋本蔵相ですからね。この問題については、先生はどうお考えでしたか。

海部 あのとときは、大蔵大臣がここでこけると、海部内閣の最後の頃にいろいろな影響が起こるだろうから、「君自身が本場に疾しいことがないならば、とことん支えるから、あまり弱音を吐いたり、べらべらしゃべったりしない方がいいよ」と言ったんだ。だから僕の本心は、最後まで続けておってもらいたかった。そのために、ずっと連続して在任中三回の組閣にあたって同じポストで入れたわけですからね。それは内閣の三本柱だ。外務、大蔵はね。その一本がこけたらうまくない。けれども、よく裏の話を聞いてみると、捜査当局は相当な裏を持っている。

伊藤 やっぱりそういう情報は、総理には入れるわけですね。

海部 はい。

伊藤 証券会社の損失補填問題もかなり大問題になりました、これまたしか国会でいろいろやりましたね。

海部 はい、やりました。

伊藤 そういう問題は政権にとってはマイナスですね。

海部 それはマイナスですよ。要するに、一般国民から見れば、なんだ、あれらばっかりうまいことやるじゃないか、というところで、「うまいこと」と感じられるね。自分たちはこれだけ真面目に働いて、汗水垂らしておつて、報われるものは少ないではないか。あいつらは勝手に調子いいことをやって、よすぎる、と受け取られるわけですからね。しかもこのときは政治をきれいにすると言ってやっておる政治倫理内閣ですから。

伊藤 そして七月には佐川急便問題というのが発覚して、暴力団稲川会系の企業への融資をしたということで問題になり始めて、あとで佐川急便大事件に発展するわけですが、これも非常に具合の悪い事態に発展するな、ということが初めからわかっておられたんでしょうか。

海部 どの程度のこととつながりがあるんだらうかということ、ずっと聞いてみますと、これは自民党のきわめて伏せておきたい部分にまで陽が当たってくる。

伊藤 それは検察の側から、いろいろ話が聞かえますか。

海部 聞かえますね。

伊藤 最終的には金丸さんまで行ってしまわうわけですが、先生の内閣のときにはそこまで行かないですね。でもちよつと危ないという感じはあつたんでしょうか。

海部 金丸さんが狙われているな、という気はしました。

■首相の情報源

楠 こういろいろな出来事がマスコミを通じて社会に明らかになる前に、永田町の中ではすでにいろいろ囁かれたりすることがあると思うんですね。そういうときに、情報通がいますね。一つは新聞記者が耳打ちするんでしょうが、それ以外にも情報通と称する有象無象の人たちが永田町にはいると思うんですが、先生の周囲にも

そういう人がいますか。固定的な情報を入れるような人が——。誰とは言えないでしょうけれど（笑い）。

海部 いやそれは、僕も初めは不用心で、来るやつには「おう！おう！」と呼んでおった。国会議員の中にもそういう情報専門で、人の顔色を窺うようなやつがおるから、これは気をつけなければならんな、と思ったことが二、三ありましたね。新聞が「『首相の』動静欄」に書くでしょう。あんなことがそういう情報を取るときには、「よし、じゃあおれが今度会ったときに言っておいてやるよ」という裏書きに使えるわけですね。

伊藤 名刺になるわけですね。

海部 そう。だから、今日は何も大した用がないのに、と思うのに入ってきて、しばらくおつて、出がけに新聞記者にいろいろなことを聞かれて、嬉しそうにしゃべって帰っていく議員がおるわな。

伊藤 そうですか。議員じゃない人でもたくさんあるわけでしょう、有象無象が。

海部 それはあるよ。有象無象といったら悪いけれど。

伊藤 でも貴重な情報を持つてくる人もいるんですか。

海部 貴重な情報をくれる人もいるけれど、そういう人の数少なき一人が、お話ししたからいいと思うが、末次なんだ。末次は自分の足で、あまり身汚いお金に絡まらずに動いてくれた人でありますね。

それからすぐにお金に絡んでくる情報屋もおるわけです。「ちよつと目を開いてくれ」という。目を開いてくれというのはどういうことかという、情報を取ってくるにも資金がかかるから、そこをちよつと目を開いてもらえんか」というんです。

伊藤 そういう物の言い方なんですか。

海部 こつちはそんな者とは、初めからまともにつき合う気はありませんから。「目を開けとおっしゃるけれど、われわれのポケットに入っている金でいいのか」というと、「それはこちらからは言いませんが」と言うから、「じゃあどれくらいのことができるんだ」と探りを入れると、「それはそちらが提示してくれたら、百なら百、

二百なら二百、五百なら五百、それに合うような情報を開拓して、お届けに上がります」という。こういうのとは、つき合わないほうがいい。つき合っても、ろくな情報は来ないということですね。

伊藤 でも秘書官のところ、かなり選別されるんじゃないですか。海部 そうです。秘書官のところ、選別するけれど、秘書官がうまく言いくるめられて、「おれは特別、海部さんとはこういう仲だから」と言われる。甚だしい大物に至っては、先輩の総理経験者からちよつとしたメモが来て、「この男と会って、然るべくよろしく」と言われる。「然るべくよろしく」というのは何を意味するのか、初めの頃はわからなかったけれど、盆暮れになって行つたときには然るべくよろしくとか、そういう意味でした。そういうのは、はした金で済むわけです。いわゆる交通費というやつです。

伊藤 しかし交通費も毎年だつたら——（笑い）。

楠 そういうものを使つて、見えてくるものもありますか。

海部 いや、そういうことはいちいちこつちがやつておるわけにはいきませんから、それは担当に任せて、「これにはやつておいて、これにもちよつと」というリストをつくる。ちゃんと盆暮れには取りに来るようになるから。

伊藤 検察からの情報というのはどうやって入るんですか。面会に来るわけですか。

海部 面会に来て、首相執務室で人払いして、せいぜい一人、警察からの秘書官だけを残してやりますね。

伊藤 それは「動静欄」に出るわけですね。

海部 出ます。だから用があるうがなかるうが、外務次官と警察は、二ヶ月に一回とか呼んで、会つて話をして聞いたんです。

伊藤 検察ではなくて、警察ですか。

海部 警察です。検察と会つたりしたら、三木さんの電話と同じで、どんなことになるかわからんし、それは気をつけなければなりません。警察です。

伊藤 警察というのは情報を持つているものですか。

海部 はい、拉致問題なんかでも「もっと早くやりなさい」といって、一番最初に秘かに会いに来て勇気づけてくれたのは警察です。それは秘書官が警察の長官を連れてきて、「よろしかったら私も席を外します」といって、「ちよつと君は出ておれ」と言われて、秘書官も出て行って、長官が直接、「拉致問題ではどこまで言ってもらっても結構です。資料もこういうものが揃っております」と、えらい自信をもっていろいろ言っておりますからね。

伊藤 もうその段階で、そうなんです。

海部 だから、僕はまだいろいろあるんじゃないかと思っていますよ。

伊藤 それから何年も経っていますから、警察だってもっと情報を収集しているんじゃないでしょうか。

海部 調べて、修正しておると思う。

■海部内閣の最後1（「重大な決意」発言）

伊藤 結局、佐川急便の問題とか橋本さんの問題とか、いろいろゴタゴタがあつて、その中で総裁選挙という動きになってきます。

「宮澤・三塚・渡辺」三派はだいたい反竹下派なんです。ということは、反海部内閣という形でだんだんまとまってくるということになりますか。

海部 だいたいそんな感じでした。

佐道 中心は宮澤さんのところですか。

海部 うん。

佐道 三塚「博」さんのところは、最初はどうもふらふらしていたような感じもするんですが。

海部 いや、三塚と僕は、個人的には早稲田の雄弁会の仲間で、彼が一番不遇の時代、市長選挙に落選したり、苦しんだ頃には、「海部ちゃん、頼む、助けに来てくれよ」と言われて、街頭演説をやり

に行ったり、いろいろしてきた仲間でもある。そしてまた三塚は、ちよつと突っ込んで言うと、同じ派の中に森「喜朗」がおったでしょう。森がやや優勢で、三塚がやや落ち目だから、「派内の力関係で、ちよつとこつちを助けてくれよ」というようなことだった。

伊藤 もうこの時は、三塚さんは三派連合のほうに行ってしまうわけですね。

海部 それは仕方がないんだ。そんなこともあつて、ここまで言ったからみんな言わんとわからんだろうけれど、個人的な問題で言うと、僕にとつては三塚さんは先輩だし、森は後輩だから、どちらかといえば仲良くやってきたのは森だし、やれるのも森だし、いまでもそうだけれど、彼も気の毒なことに、リクルートでちよつと傷ができたわけですね。それで、彼が閣僚になりたいといつたときに、待たせた。待てという中に入った。加藤紘一もそうだ。それだから、変な筋だが、慶應大学の経済学部の教授で、名前は言わないが、僕がいろいろなところで接触しておる教授が、「先生、いっぺんあれを撫でておいたほうがいいですよ」と言つたんだ。「何を撫でておくんか」と聞いたたら、「森が誤解しております。政治家として海部さんに干されたと思つている」「いつの話をしておるんだ」といふたら、ああそうか、彼がなりたいたときに、運輸大臣にしなければならぬ。

そのときにはまた裏の裏があつて、安倍「晋太郎」さんがまだ病院におつて、古風な大きな携帯電話で言つてきた。ここまで言われればやつてやらなければならぬかということで、最後は安倍の判断に従つて、やめさせたんだ。そんなこと等もあつて、三塚は僕とはいろいろな面で相談してきたし、親しくやつてきたけれど、森君のほうは、そこでちよつと辛かつたんだらうな。おれにつぶされたと思つているんだ。おれがつぶしたんじゃない。背後霊というのもおかしいが。

伊藤 まあ、そうなんです。

海部 しかもその背後霊のほうはいろいろな関係があつて、ほかの

問題でも恨みを持つているから、リクルート事件の株の問題で、「あれは許せん、だからいかん」ということを病室で言うわけだ。そこまで言っているのに、よしと行ってやるわけにはいかんから、やらなかった。それで当分恨まれたり寂しがられたり。またそれは時間が解決すればいいのであって、と思っておった。

伊藤 結局、九月二十五日に金丸さんが「海部統投」と言いますが、しかし一方で政治改革法案は廃案になる。これは先生としては、「重大な決意」という発言をされるわけですが、このへんの心境はどういうものですか。

海部 政治改革については、三百五十六回、各界各層の前に顔を出して、「これをやらなければならん。自民党が本当に蘇生するのはこれだ」と言って、僕も全精力を注いでやって来た問題です。しかも党内は支持してくれるものだと思ひ込んでやってきた。

伊藤 それを期待されて総理になつたわけですからね。
海部 そうですよ。そしてなつたら、これにまさる名誉光栄はないから、おれはいつ辞めてもいい、名は残ると思つて全力投球したんですが、オリンピックの鉄棒と一緒に、最後の着地にちよつと失敗したのだから、ああいうことになつちやつた。それじゃあ、悔しいけれども、ということになつてくるわけだね。

けれども、そんなことは横に置いて、国会を通らなかつたという敗因を考えると、人を替えなければできない法律かな、と思つた。僕がやっていたらいろいろなしこりやしがらみが残る。例えば宮澤さんとか加藤紘一とか、山口敏夫にしてもそうだ。裏の話、影の話は、毎晩入つて来るわけです。誰がどこで誰と会つて、どう言つた、こう言つたという話が、各社の政治部の専門屋の評を集めて読んでみると、あれが何を言っているかはすぐわかる。そんなものを抱えてやり始めても、できっこない。むしろ人を替えて、政治改革だけとはにかくやり遂げなければならん。非常に生一本な気持ちでそう考えたものですから、退陣するときは本当にさわやかでした。

伊藤 ただ、退陣すると言つても、最初に「重大な決意」と言う

ときには、それはどつちを向いていたんですか。

海部 いやいや、もっと言うなれば、あんな「重大な決意」なんていう発言は私はしておりません。そして、誰かが外に出したんだ、終わつてから。ノートテイカーが悪いんだ。「重大な決意」という言い方をしなかつたかもしれないけれど、「重大な決意で臨むよ」とか、「重大な気持ちでやっていかなければいかんよ」とか、それと取られるようなことはいろいろ言っているし、事実あのときの心境はそうでしたからね。これがならなかつたら、誰かに託してやらせなければならん。

伊藤 むしろ退くほうに行つていくんですか、解散でやって、という感じがなんですか。

楠 巷間伝えられるところは、それは解散を意味する、ということですね。

海部 だから解散がやりたかつた。やりたかつたから、金丸にも竹下にも、出先まで追いかけて、「解散やるよ」と言つた。「総理がそう腹を決めたら、やつちやえや、それは」と金丸さんも了解をくれたし、竹下もそれは了解をくれた。そこは間違いありません。僕自身が確かめたんだから。

伊藤 じゃあその重大な云々はそつちの意味ですね。ここまで来たら、解散をしても、とにかくやると。

海部 政治改革を訴え続けていけば、国民は支持してくれる。金丸さん如きは、「君はまだ支持率が高いんだよ」という。

伊藤 そうなんですよ、この時は。

海部 「だから心配せんでもええよ」というような言葉まで出してくれたわけだ。それはそうだったんですが、しかし一人になって静かに考えてみると、いろいろな党内の動きでいくと、この尖りや歪みやガシャガシャは、みんなそれぞれ政治生命を賭けた本音の話がだいぶ出て来て反対になつていっているのではないか。それからもう一つ、そこを乗り越えようと、政治改革で私が取り組んだことは、言つたら叱られるけれど、政治とお金の関係をもつとわかりやすく、もつと

きれいにしないと救われんよ、ということだ。だからわかりやすくきれいな政治を確立するためには、やらなければならんことは全部やっつけていかなければならん。

おれはそう思っただけで、それに関連した人たちにも、いくら個人的に仲のいい友達であつても、「ちよつともう一期待つておつてくれよ」と言つて、組閣も党役員も先送りさせてもらつた。だんだん自民党も支持が戻つてきて、街頭演説をやつてもよくなつてきたな、と思ひ始めた頃だつたものだから、選挙をもう一回やつたら、それがガチツと固まるのではないか。これは確証ではないけれど、希望的観測はありましたね。

伊藤 それを断念されるというのは、どういうことですか。

海部 それを断念したのは、最後まで信じておつた連中、例えば小沢一郎というのは、最後の最後には身を翻して逃げたからね。小淵も、もういつペン考えさせてやるうところまでは行つたんだけれど、あそこまで行つたら——。これ以上突っ込んだら目に見える。政治改革の法案そのものが、あれだけトリモチを踏んだようになつたんですから。

伊藤 ただ総理に解散権があるわけですから。

海部 だから、それはいいですけど、それをやつたら独裁者になるよ、民主主義者じゃないよという。おれがこう思うから断固やる、それは非常にいいけれど、それをやつたら民主主義が死んじやうよという。

伊藤 政治改革のためにここは解散して、国民の民意を問うんだという。

海部 あくまで問題はそこですけどね。そのために自分は苦勞してきたんだし、そのためにここまで来たんだけれど、しかしどう見ても、「天の時、地の利、人の和」、いろいろ踏まえてみると——。あの三日間にわたる本会議場での趣旨説明の時の総理答弁、誰がヤジるかわかりますね。毎晩のように各新聞社からもらう報告を読むと、何派の誰と誰とがこう言つた、こう言つたという。そういう資

料を全部取つて読んでみると、ここをさらに中央突破してということには、なかなか「天の時、地の利、人の和」が掴めないということじゃないですか。

■海部内閣の最後2（竹下派の動向）

楠 いま伺つていると、選挙を指揮する幹事長が最後は態度を変えてしまったということが決定的に大きかつたということになりますか。

海部 前任幹事長ですか、そのときの幹事長ですか。

楠 そのときの幹事長は小淵さんですね。いまのお話だと、小淵さんも（伊藤 その前の幹事長も）逃げていったということですね。

伊藤 ということは要するに、竹下派が「逃げていったということですね」。

海部 一番最初は、小沢が逃げていったんだ。

楠 竹下派のボス二人が支持してくれても、結局、党を指揮する部隊長が戦線離脱したら、戦いにならないですね。

海部 それだけれど、その背景にあるものは、中堅、若手の一人ひとりの意見が小選挙区制には反対なんです。それは本音の部分で、おれが落選するかもしれないという危機感ですよ。そういうことを露骨にみんなに夜、酒を飲みながら話している連中の中には、こいつもかと思うような者までいるわけさ。表面では「小選挙区制の導入」賛成、みたいなことを言つていてもね。だからあいつたことには、縦横斜め、十分な情報を取つて説得して、出てこいといったときに出てくれん人も、あの会するときもいなかった、あのときもいなかったということになると、それは反対派の確信犯だな、ということになるわけです。だから、最後の最後は数が足りなかつたということじゃないですか。少数派閣だから。

しかもその少数派閣の中にも、当選回数が多いやつや、年の上の

連中の中には、面白くなかったのがおるでしょう。だから河本さんは最後まで、「やったらいいです、やりましょう。この機会はやりましょう。ここまで来たら後ろを見ておいたらいけません」と言つて支持して、激励してくれるけれど、しかし——、このへんにしておこう。

伊藤 でも金丸さんは一応やれ、という話だったんじゃないですか。

海部 初めは。

楠 金丸さんの力が落ちていたということですか。

海部 結局そういうことじゃないでしょうか。威令行なわれずということだ。ただ当時は、みんな面従腹背してましたけれどね。

伊藤 面従腹背になったら、もう力はないですね。

海部 そうだ。

佐道 この段階ですでに、小沢さんも金丸さんから距離を置き始めていた、ということですか。

海部 だって金丸さんの最後のところは、小沢によって引き金を引かれたんだ、と金丸さんも思い込んだんだ。そうでしょう。

楠 そうすると、自民党の分裂というのは、このあたりから——。

海部 もう決定的なものになりかけてきたんじゃないか。ビリビリッというひび割れだ。

佐道 竹下派の分裂ですが。

楠 それが結局は自民党の分裂になるわけですね。

伊藤 自民党の分裂といっても、具体的には竹下派ですね。

海部 しかもいまも余韻が残っておるけれど、政治改革を巡って、当時本心にひたむきになって頑張つて、影になり日向になつて表に立つてかばつてくれたのは、自民党選挙制度調査会長・羽田孜ですよ。あれが一所懸命支持をして、情報も持ってきて、やってくれた。九段下同志だったから、一緒に呼んで、飯を食つたり話を聞いたり、こつちから指図したりしておつた。

そして、変な話ですが、当時の社会党の選挙特別委員長は、かの有名になつた佐藤観樹ですよ。僕と同じ選挙区だ。長い間やり合っ

た相手だ。そのサトカンも呼んで、「おまえは賛成か反対か」と言つたら、「賛成するわけにはいかんじゃないか」と言うから、「けれど、おまえは小選挙区の数を少なくすれば賛成すると言っている。羽田君から聞いておるぞ。羽田と会つて、君はそういう話をいろいろしておるんだろう。決まつてしまえば、君の当選は保証するから」とえらそうなことを言つたな、こちらも。「小選挙区になれば、選挙区はどうせ分かれるんだから、保証するよ、おれのほうが出さなければいいんだから」と言つて。いや、本気になつてそう思ったことがあつたよ。二五〇にして、小選挙区は二五〇にするとか、サトカンが社会党の案の出した頃はね。

それは羽田が入つて一所懸命やつておつたんだ。金丸さんはわれわれと夜会つて、「羽田がまあ、本当に中毒者みたいにカッカして走り回つておるから、あれは少し水をかけて冷やしてやらんと、あれもどこまで行つちまうかわからん」という。それで、「金丸先生、小選挙区反対ですか」と言つたら、そのころまだ心の底に一点不信感があつたんだらうな、「選挙区を変えられたら、海部君おれはもう政治家を辞めなければならんよ」と言つていた。

佐道 羽田さんは、政治改革、小選挙区制の問題についてはブレなくずっとやつていたんですね。

海部 ブレなくずっとやるの一点張りだ。断じてやる、ということだ。

伊藤 そうか、あとまでそれはつながるわけだ。

海部 羽田さんはそういうところだけれど、小沢はもうちよつと、次のステージまで視野に入れて、やっちゃおうということでおつたんだけれど、おれが一番がっかりしたのは、「幹事長を」辞めてから入院したことだ。辞めるとき、「辞めちやいかん、続けておれ」と言つたけれど、幹事長は東京都「知事選」の責任を取つて辞めるという。金丸さんにも竹下さんにも、「辞めさしてくれ、あれに縛り付けて責任を持たせなければならんから、彼は小選挙区を一所懸命やつておつてくれたんだから」と言つたら、「まあ、海部君、

そういつても駄目だったから、替えちまえ。小淵だ」「小淵はしっかりやってくれますか」と言ったら、「それは君が仲間だから、直接やれと言やあ、あれはやるよ」というようなことでした。

そうして、結局「小淵は」幹事長を辞める。よししようがない、その代わり、これだけはやるんだぞといったのが、特別委員会の委員長だ。小淵は引き受けるといったんだ。それを新聞記者にも言つて、そのつもりでこちらはあったら、結局小淵はやらなかった、やれなかったんだ。

伊藤 やらなかつたんですか、やれなかつたんですか。

海部 やれなかつたんじゃないで、やらなかつたんだと思うんですよ。それは病院にいくら入つておつたと言つても、その後の悪態のつき方、動き方を見ておると、それはできませんよ。本当にできないのなら、いまごろ戒名に変わっているはずだ。あのとき言ったことが本当ならばね。「総理、とてもいけません。もう心臓がなんとかで」と言っていた。悪いことは事実悪いらしいけれど、ペースメーカーを入れたりしたことも事実だけれど、入れたつて十何年生きた人はいくらでもおるんだ。

伊藤 いまもお元氣のようですけれど。

海部 いまはまた昔に戻つちやつて、相変わらず、岡田克也を嘔んで、振って、いじめている。そうでしょう。また癪が出たな、とこっちは思つておるだけのことだ（笑い）。

■海部内閣の最後3（続投せず）

伊藤 だけど、最終的に「海部先生は」今度の総裁選挙にはもう出ませんということを公言なさるわけですね。

海部 そうですよ。

伊藤 これに対する反応はどうでございましたか。

海部 それはいろいろありますわ。

伊藤 いろいろな人が、いろいろな意見を言ってくるでしょう。

海部 やれ！やれ！という。その根拠は支持率だ。「五六%もあるじゃないか、やれ」という。それから各社の世論調査を分析して、「どこに替われという意見がありますか」ということを言ってきた人もあるけれど、それはこつちが心を決めてしまったあとですから、そんなことになってフラフラしておつたら、いつまで経つてもこつちも決心がつかんから、それはもういけない。それには記者会見でしゃべるのが一番わかりやすいと思つたので、内閣記者会で、この次のあれ「自民党総裁選」には立候補しませんと言つた。

伊藤 それは「総裁」選挙のどれぐらい前ですか。

楠 「海部先生が総裁選挙に」立候補しないという発表をしたのは、十月五日ですね。

佐道 それで党大会が二十九日なんですね。

伊藤 じゃあ、もうその「十月五日の」時点で、この内閣は死に体ですね。

海部 それはそうです。だから残務整理だけをやりました。

伊藤 残務整理というのはどういうものですか。

海部 勲章の宛名書き。あれは「海部俊樹」で書かなければならんから、たくさんあったものを公邸に座り込んで、全部書きました。

それから文化勲章の授与式、いまでも覚えておりますが、森繁久彌にあのとき文化勲章をやつた。彼は足がすでに弱つておつた。それで僕が「車椅子を用意してあげなさい」と言つたら、「いままで車椅子を用意して陛下の前に出たことは、畏れ多くもありませんでした。できたらご本人に歩いてもらつてくれ」なんて宮内庁が言う。それで僕は森繁さんを支えて歩きましたよ。そういうことを片付けると、総理がやらなければならんことは、勲章の勲一等の勲記に署名すること、文化勲章の授与に侍立すること、それが形式的にはどうしてもやらなければならんこととして残つたな、と思ひましたね。

伊藤 総裁選挙自体については、ご自分の考えはいかがでございましたか。つまり何人か候補が出るわけでしょう。自分はどうしよう

か、あるいは旧三木派、河本派としてはどうするのか、ということですが。

海部 まあ、やっぱり、敗軍の將、兵を語らずで、あまり個人の意見はこの際は言わずに、ただ一点、政治改革をきちんとやり通してくれる人にバトンをタッチしていきたい。個人的な心情からいって、宮澤さんというのはいろいろなことが積もり積もってあつたら、あの人に託したってできっこないんだから、いやだな、という気持ちがあつたけれど、しかしそういつたことを言っていると次元がうんと低くなつて駄目ですからね。渡す以上はしっかりやつてもらわなければならぬということだ。

佐道 先生が出馬を断念された時点で、次は宮澤さんだな、ということが見えていたものですか。

海部 いや、見えていなかったですよ。それはもうしばらく経つてからですね。

伊藤 でもそんなに時間はないですよ。

海部 だって、渡辺美智雄だつてある意味では野心満々で、大変やりたかつたんだな。

伊藤 支持する人も多かつたんですか。あれは党内の力学でしょう。海部 「私自身の」頭がそこまで行つていなかったですよ。その次の人を誰にして、どうのこうのということは、党内のいろいろな話し合いで、最後は投票で決めればいいじゃないか。民主主義というのはそういうものだ。

伊藤 でも自分だつて投票しなければならぬし、自分の属している河本派だつて、態度を決めなければならぬでしょう。

海部 そうですよ。

伊藤 このときは河本派は宮澤に投票したんですか。

海部 河本派は、派としては宮澤に投票したんじゃないですかね。長い間の経緯からいって、宮澤の経済政策というのは、河本さんが河本派の経済政策の中に活かしておつたんだという思いはありました。けれどもそれを宮澤のほうは評価しないで、乗つてこなかつた。

だから研修会をやつても、派閥の研修会に来て、ここで宮澤の話をしてくれと頼みにいつても、さつき言つたように、手帳を繰つて何やらかにやら、四の五の言つて、とうとう来なかつたわけです。それは遠因を辿れば、宮澤の持つておる三木批判にまで行き着きますからね。「それ以上言うのは」やめておきます。とにかく、いろいろあつたものだから、あのとときの選択としてはそれ以外ないんじゃないか。その代わり、きちんと責任を持つてやつてくれなければいかんよ、ということですね。

伊藤 もちろん宮澤さんも立候補したときには政治改革をやる言つたわけですね。

海部 言わざるを得んですから。言わなければ、すぐにこつちが、それは約束が違うと言ひ出しますからね。

伊藤 内閣が終わりになるということは、閣僚がみんな辞めるということでもありませんし、政務次官も含めて、みんなそうですね。それから秘書官その他、ずいぶんたくさんの人たちが動くことになりませぬ。内閣が終わりだということ、最後に何かやるんですか。

海部 セレモニーですか。いろいろやりましたね。秘書官とか、内閣から来ておつた連中とか、内閣関係者がみんな集まつてもらつて、どこかの中華料理屋でやつたな。

伊藤 お別れ会みたいなものですか。

海部 お別れ会でお礼を言うと共に、おれも消えるわけではないから、政治家として自分の言つたこと、やつたことをさらに高めていかなければならない。みんなもそれぞれどこかへ散つたら、それぞれのところでまた協力して欲しい、ということだ。

伊藤 ここで総理をお辞めになる。普通総理をお辞めになると、昔はそんなにあと長生きしませんので、だいたいお話が終わりになるんですが、海部先生の場合、このあとが長いわけですね。長いだけでなく、いろいろなことに関わつておられますね。だからしばらくまだおつき合いいただかなければならないということなんです。

それはよろしゅうございますね。

海部 ご迷惑だろうと思いますが、ぜひ私も残しておいてもらいたいことは、新進党というものをどうやってつくったかということですね。そして、新進党が第一回の衆議院の選挙で、いまの民主党と同じように、得票数は一位になったんだ。そのころのこともちよっと話すとともに――。

伊藤 この前「二〇〇四年の参院選で」民主党が、ずいぶん票を集めた。いよいよ政権交代云々と言いましたが、前の新進党の時もそうじゃないの、と思うんですね。そのことを新聞はほとんど書いていないじゃないですか。

海部 書いてない。事実、当時の新進党は多かったですよ。得票数では第一党になったんですよ。しかもそれは参議院選挙ではなくて、衆議院選挙でやったんですから。今日の状況とはちよっと違えますね。

伊藤 でもこの次の衆議院選挙で、民主党が第一党になるかどうかはちよっとわかりませんけれどね。

海部 わかりません。

伊藤 そのときの風がどういうふうに吹いているかわかりませんか。ね。

楠 でもあのとき新進党ができたからこそ、いまの二大政党制に近い状態ができたんじゃないでしょうか。あのときに初当選した連中が、いまや民主党の幹部になったりしていますからね。

伊藤 「新進党は」旧社会党を吸収して、大臣にして、それに消えていただいた、という感じですね。

海部 その中にサトカンがおった、ということだ（笑い）。

佐道 サトカンさんも、ちよっと違う意味ですが、政界から消えて行かれましたね（笑い）。

伊藤 そういうことも含めて、あと二、三回はぜひなんとかお願いしたいと思います。

海部 新進党のことまでは、私にも責任が若干ありますから。

伊藤 新進党の後始末のこともございますので。

海部 なぜあれが政権を取れることを目の前にしてついでにいったのか、公明党との問題もある。

伊藤 いったい何が起こったのか、非常に不明確なところがまだたくさんございます。

海部 あのときもう一踏ん張りしたら、政権が取れたんだ、という思いも、いまだにありますね。

伊藤 それはぜひお願いします。

楠 今日のこと、一点だけ確認させていただきたいんですが、有名な「重大な決意」という言葉は、先生はおっしゃっていないということですね。

海部 私は、それらしいことは――。

楠 それらしいことはおっしゃったけれど、それらしいことの中には、解散を決意したということが含まれているということですよ。いいんですね。

海部 含まれております。「そこまでいったら解散になる腹できておるんですか」と、西岡か誰かが言ったんだ。「いやそれは、そういう気持ちがあれば言えない。それからまた、最後に政治が判断を受けるのは国民の投票じゃないか」と言ったんだ。

伊藤 それでは今度は新進党のところまで、お話を伺います。

佐道 ポイントだけお聞きします。自民党分裂という大騒動がありますから、これはお聞きしたいと思います。

伊藤 そこからつながらないと新進党に行きませんね。

佐道 そしてまた首班指名という問題があります。羽田さんのお話が出たので、あれがつながるお話だと思いましたがね。

伊藤 伏線になりますね。それでは、どうもありがとうございます。

（以上）

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 33 回

宮沢内閣～五五年体制の崩壊（1991～1994）

【2004年9月27日（月） 14:00～16:00】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー]（肩書きはインタビューの時点）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

楠 精一郎（東洋英和女学院大学教授）

佐道 明広（中京大学助教授）

[記録、編集] 丹羽 清隆

(2004年9月27日)

1. 91年11月、先生の内閣は総辞職されます。先生は若くして総理の座に就かれたわけで、総理をおやめになってから後の政治活動については何を重点を置いて考えておられたのでしょうか。当時は、総理経験者が再び総理になるとか、閣僚になるとかはあまり考えられなかったと思います。出身派閥との関係も含めていかがでしょうか。
2. 91年11月、先生のとに宮沢内閣が成立します。宮沢内閣の成立について先生はどのようにご覧になっておられましたか。
3. 92年1月、金丸信氏が自民党副総裁になります。自民党内の金丸氏の勢力が相当強まっていたと思いますが、一方で前年以来の「佐川急便事件」が拡大し、9月には東京地検が略式起訴(罰金20万円)、10月に議員辞職という事態に追い込まれます。これに世論も反発するわけですが、佐川急便事件の拡大および金丸氏の問題については先生はおそらくご存知だったこともあるのではないかと思いますがいかがですか。
4. 9月22日には東京地検が、竹下内閣発足時の暴力団関与を冒頭陳述するなどといったこともあって竹下派は混乱し、12月18日、竹下派は分裂し羽田派(44人)が成立します。「鉄の団結」を誇った竹下派の分裂といった事態について、先生はどのようにご覧になっておられましたか。
5. カンボジアで、93年4月8日国連選挙監視ボランティアの中田厚仁氏が、そして5月4日文民警察官高田晴行警部補が相次いで亡くなるという事件がおきました。日本国内ではカンボジアからの撤退と言う話も出たわけですが、この件について先生はどのように見ておられましたか。
6. 先生の内閣の時代からの継続重要問題である政治改革問題が停滞し、宮沢内閣への内閣不信任案が自民党議員の賛成もあって6月18日に成立し、衆議院が解散されます。不信任案可決に至る過程について先生はどのように対応されていたのでしょうか。
7. 6月21日新党さきがけ(代表:武村正義)、23日新生党(代表:羽田孜、代表幹事:小沢一郎)が結成されます。こうした新党に関してはどのようにご覧になっておられましたか。また、それらとの関係はいかがでしたか。
8. 7月18日、第40回総選挙が実施され、自民223、社会70、新生55、公明51、日本新党35、共産15、民社15、さきがけ13といった結果になりました。自民党は過半数を維持できず宮沢内閣は総辞職します。このときはまだ自民党内におられたわけですが、長く続いた55年体制・自民政権が倒れたことについて、当時どのように見ておられたのでしょうか。また、自民党は総裁に河野洋平、幹事長に森喜朗氏を選出します。この人事についてはいかがでしょうか。

9. 8月6日、日本新党細川護熙氏が首相に指名され、9日非自民連立内閣が成立します。細川首相という人物への評価も含めて、この政権の発足についてはどのようにご覧になっていたのでしょうか。

10. 新政権は共産党以外の非自民政党のあいりりで、発足後早い段階から軋みが見えます。特に政権の立役者といわれた小沢氏の行動をめぐって社会党の反発も伝えられたりしました。こういったことは94年2月の消費税7%の「国民福祉税」への転換の首相発言など、政権内の不信感が外部にも相当伝わってきていたわけですが、先生はどう見ておられたのでしょうか。

11. 佐川急便からの借り入れ問題が浮上してくると、細川首相は4月8日辞意を表明します。その後、日本新党とさきがけの統一会派解消、社民連と日本新党の合流、羽田内閣の成立と新生・日本新党・民社・自由・改革の会の5党派による「改新」結成、それらを信義違反とした社会党の連立離脱とめまぐるしく事態は展開します。結局、少数与党でスタートした羽田内閣は6月5日に総辞職し、社会党村山党首をかついだ自民・社会・さきがけと、先生を首相候補とした非自民連立グループとの対決ということになります。自民党を離脱して非自民グループへの参加といった政治決断をされた経緯や背景などについてお聞かせください。

※今回は以上のような点についてお願いします。

■内閣総辞職以後

伊藤 前回で海部内閣の総辞職というところまで来たんですが、ここから先が実はいろいろございます。先生は総辞職をなさいましたが、まだお若いんですね。さてこれから先、一体どうしようとお考えでしたか。もういっぺん第二次海部内閣をつくらうとか――。

海部 そんな大言壮語をしたり、射程距離に狂いが生ずるようなことは考えないで、いまおるところでやり残したことや、やろうと思つて、まだ志半ばで中途半端な問題もありますからね。

伊藤 政治改革もそうでしょうか？

海部 政治改革も、実はそうですね。政治改革に本当に芯を入れようと思つたら、例えばいま目の前でわかりやすい話も起こつておる。だから政治改革はしばらく時間がかかるでしょうね。けれども、この前も言ったかもしれないが、「自性清浄心」というものを政治家みんなが持つて、世間に問うて、縦から見ても横から見てもこれで行くんだ「と言えるようにする」。もつと簡単にわかりやすく言えば、子どもに教えておるように、嘘は言いませんというあのきわめて単純明快かつ素朴なことを、政治家の中にきちっと入れていけば、それが政治改革になりますね。

伊藤 それはまあ、実際の大人の世界でも、「嘘も方便」ということはしよつちゆうあることですか。

海部 それは許容範囲はいくらかはあるでしょう。でも平気で堂々と嘘を言つて、それがまかり通つてはいけない、ということですね。伊藤 先生、総理をお辞めになるでしょう。そうすると、元の派閥のメンバーに戻るといふことになりませんか。

海部 もうあの派閥というものからは、私は離れるつもりです。もう離れておりますから。

伊藤 河本派ではない、ということですか。

楠 それはいつからですか。総理になられた時からですか。

海部 なつた時からです。それで総理を辞めた時に「派閥に」戻らなかつた。総会に顔を出したら、「またこれを機会を戻つてきてくれ」と言われたけれど、もうおれの立場も変わったし、戻つて行つて小姑みたいにああだこうだと言つてはいかん。またある意味では、派閥が自由民主党の党改革にマイナスになったこともあったし、国民の目から見たら、派閥というものが本来に必要なのかなと思つてもあるだろうから、僕はあのととき以来派閥には戻っておりません。伊藤 そうですか。派閥に属していれば毎週会合があつて云々ということだと思ひますが、自分の日常的な政治活動に、そういうものがなくなつたんですね。

海部 そういふものは、なしです。

伊藤 そのあと「一九九一年十月に」宮澤内閣ができるわけですが、宮澤内閣の成立についてはどんなふうにごらんになってましたか。だいたい先生はこの前、「宮澤さんはあまり好きじゃない、だけどもあつとを託すんだつたら宮澤以外にない」といふお話でしたが、内閣ができてみて、どんなご感想でしたか。

海部 「宮澤氏は」「政治改革なら政治改革を本気になつてやります」とおっしゃつたんだから、本気になつてやつてもらいたかつたし、そういったことを期待しておつたわけです。けれども、いろいろな面でその期待通り事が進まなかつた。それから宮澤さんに対しては、いろいろ「私の首相」在任中のことも申し上げたが、「宮澤さんが」どうしてもブッシュに会いたいかいろいろなことがあると、私はその環境整備や条件整備等もよくやりました。電話で話して、「こういうわけで宮澤が行くから、それは民社党系の議員も連れて行くから、国会運営には役に立つ」といふようなことをいろいろ言つて、言わんでもいいような手の内まで明かして、ブッシュに会えるように首席補佐官のスヌヌを言いくるめたりした。「日程には入つておらないし、それはもうお断わりすることになつておつたけれど、海部さんがそうおっしゃるならいっぺん大統領と相談して

みます」。「できたらやつてほしい」というようなことで、一所懸命協力したんです。それは日米関係というものは、誰になるうが彼になるうが大切だという大きな方向性があったものですから、やはりそれはやるべきだということですよ。

伊藤 宮澤内閣の時期は、先生は党でもどこでも無役ですか。

海部 無役です。

伊藤 事務所はやはりここ「TBRビル10階」ですか。

海部 事務所は、それから、ここにしました。

伊藤 そうですか。それまでは議員会館ですか。

海部 ええ、議員会館です。議員会館があるものだから。けれども議員会館におると、どうもあそこは銀座通りみたいで、話しているあいだにどの誰が入ってくるかわからんし、あまり門前払いもありません。そういうことを思っているあたりをずっと見渡すと、みんなこういうところを構えておるものですから、じゃあおれも探そうと探したら、たまたまあつた。初めは僕はよくホテル・オークラにおつたものだから、訪ねてくる人が、「それじゃあ、先生また」と言うから、「じゃあオークラへ来いよ」と言った。あそこは昼飯と一緒に食べるにもどうするにも使い勝手がよかつたんですけれどもね。ただ、ずっとパーマメントにあそこで開いておくと、金がかかってしょうがないんです。毎月いくらぐらいかかつたかな。だから、ちよつとあそこは事務所としては身分不相応に高い。というので、探せと言つて探させたら、ここがあつたんですね。

伊藤 ここはそれに比べればかなり安いんですか。

海部 安いんですよ。桁が一つ違う。

楠 ここも銀座通りとはいわないけれども、かなり出入りがありますね（笑い）。

海部 便利さは便利さで、ありますけれどもね。

■自民党分裂への序曲1（宮澤内閣の成立）

楠 宮澤政権の成立のところに戻って恐縮ですが、宮澤政権ができるときは、宮澤、渡辺「美智雄」、三塚「博」と三候補がいて、竹下派としては誰を推すかということ、例の悪名高い小沢「一郎」さんの面接というのがありましたね。そして金丸「信」さんによつて、竹下派は宮澤さんを推すと決定したわけですが、あのあたりで小沢会長代行の面接ということを近くで見聞きされて、どういうふうに思われましたか。

海部 はつきり言つて、ちよつと順序が逆だと思つたんだよね。順序が逆だと言ひ方が悪いけれど、特に宮澤さんなんか素直に頭を下げに行つて受けてきたから、それはおかしいじゃないか、と思ひました。

楠 意外な感じですか。

海部 意外な感じがしました。

伊藤 やはり、それだけ総理になりたいということなんですかね。

海部 と思ひますね。

伊藤 ということは、逆に言えば宮澤内閣は、あの竹下派の力を背景にできたと言つてもいいわけですか。

海部 結果としてそういうことになつたんでしようね。

伊藤 そうですよ。そうすると先生の内閣とあまり変わらない。

海部 そして宮澤さんは、金と政治の関係については、竹下派、竹下内閣のやつたことについて大変な批判を持つておつたはずなんです。僕は何回もこの耳で聞いておるから。

伊藤 その次の年「一九九二年」の一月に、金丸さんを自民党の副総裁にするわけですよ。これは、あとあとひどい目に遭うことになるわけですよ。

海部 結局、鈴木善幸という人と宮澤さんとはあまりしつくり行つていなかったはずだから、そういう人からの知恵もいろいろ聞いておつたのがあるんですよ。宮澤内閣のスタートとともに、うまくやつていくためには、やはり党内のいろいろな力関係をまず受け止めて、できるだけそれを利用しようよと――。

伊藤 結果的にはまずい人を利用した。

海部 と思いますね。

伊藤 もっとも金丸さんは、先生の庇護者でもあったわけですから、非常に奇妙な関係だと私は思います。

海部 だけど、同時に佐川急便問題がだんだん話題になってきて、東京地検が略式起訴で罰金二十万円で終わりにしてしまいました。それでまた騒然となつて、結局金丸さんが議員を辞めるということになりますね。これは竹下派といいますが、あのグループにとつても非常に大きな打撃になつたんじゃないでしょうか。金丸さんは、「金丸—小沢」ということで動いていたわけでしょう。それで金丸さんがやられた。

海部 だからあのときは、重石が外れるなら外したいということが深層心理というか潜在意識の中にある、そういう者がいくらもおつたんでしょう。

伊藤 佐川急便の問題というのは、前からちよつといろいろ噂になつていたようですが、先生だつてご存じなかつたわけではないでしょう。

海部 金丸さんの、ですか？

伊藤 金丸さんのと言わないまでも、佐川急便がいろいろやっていることですが「間」。言いくいことかもしれないが、佐川急便はなぜ、いろいろ動いていたんですか。先生のところにはアブローチはなかつたですか。

海部 ありません。そういうことについては、僕は自分自身でよくわかつておりますから、ここから踏み込んだらいかん、というようなどころへは絶対に踏み込みませんでしたね。だから変な話ですけど、いつもきわめてニコニコしていて、いろいろなことで心配しなくてもよかつたんです。僕も自性清浄心だつたとは言いませんが、少なくともそれに近いことをやっていこう。嘘だけは言わないようにしよう、そしてこれは踏み込んでいい線か、ここからはいけない線かはきちんと分けておかないといけない、と思つてやって

きましたからね。そうでなかつたら、政治改革なんていうことを、とても人前に立つて街頭に出て言えんですよ。

伊藤 でも政治改革を言っている人が、よく捕まつたりするじゃないですか。

海部 政治改革の一番のものは、選挙区を小さくすることではなくて、政治と金にまつわる関係をきれいにしていくということで、そこに本来の目標があつたわけですね。それが結局曲がりなりにもできて、僕は宮澤さんにも「半歩前進（一歩前進と本当は言いたいけれど）は間違ひなかつたんだから、これは後退させないようにやっていかなければいけませんよ」と言つたんです。

伊藤 それは申し継ぎですか。

海部 それはきちんと言いました。あの人も前からその点においては、私の考え方と一致しておつたんですから。「竹下さんがお辞めにならなければ、田中政治の方法を変えなければ、よくならないんだ」というようなことを盛んにおっしゃつていたので、そんな頃、「おかしいな、この人の言うことは」と思つたんです。それはお金との関係で、このあいだの長期信用銀行の問題をちよつと見てみると、あれは宮澤さんとはあえて言いたくないけれど、宮澤も含む大平の系統、それと大蔵省とのつるみで、助けなければならぬとかがどうだとかいうことがずっと続いて来ていた。もう本になつて出ていまして、半ばメイク・パブリックされたんだけど、ご本人もああいうことをやっておつたわけですね。

伊藤 だけど宏池会というのは、池田さん以来日本の財界の主流がだいたい応援していたじゃないですか。

海部 そうなんです。主流だ、保守本流だと言つて。

伊藤 そうでしょう。でも佐川急便は財界の主流でもあるまいし。田中派は危ないお金ももちろんいろいろあつたんでしょうけれども、副総裁になる前から金丸さんと佐川急便の話は出ていたように思います。

海部 噂話程度ですよ。確証をもつて、ああだから、こうだからと

いうようなところまではいっていなかったと思うが、金丸さんの場合は、ノット・オンリー・佐川急便、バット・オールソー・いろいろだ。だから「田舎芝居の煙草盆」だと言われたように、場面が変わっても演し物が変わっても、煙草盆だけは田舎芝居に出ておるんだと言われるぐらい、いろいろなところに関連があったと思いますよ。

■自民党分裂への序曲2（竹下派分裂、羽田派結成）

伊藤 一九九二（平成四）年に竹下派が分裂して羽田派ができます。これは小沢さんですよ。このときは先生は脇で見ているということだろうと思います。どんなふうに解釈しておられましたか。

海部 あのころから世の中で「壊し屋」という名前が流行りだした。例は必ずしも正確ではないかもしれないが、エジプトでナギブさんという人が革命をやりましたね。そしてナギブ時代というのはすぐに終わって、ナセルに替わったんですね。ああいうナギブ的なことを考えて、いっぺんやってみて、揺すってみて、壊してみても、そしてその次に安定するならば、その時変わる。それまでは、これでいい、やらせよう、というようなことがあるんじゃないかという気がした。これは率直にそう思った。だからどの場面がどうだったと言われると、ちよつと日記をつけてあるわけじゃないけれど、その片鱗はいまも残っているでしょう。

楠 小沢さんという人は、性格はどういう人ですか。私はある人から、非常に小心で猜疑心が強い人だと聞きましたが、先生はどんな人だと思いませんか。

海部 それは猜疑心は強いでしょうね。

伊藤 先生は直接おつき合いがあった場面もたくさんあるでしょう。海部 あります。僕は「小沢を」幹事長に」と金丸さんから頼まれて入れたわけだから、もうこれは飲み込んで腹の中に入れちゃっ

て、良くても悪くても一心同体でやっていくよりしようがないと思つた。だから小沢にも「包み隠しするなよ、おれもしないから。いいことはいいと言うから、二人で力を合わせて、できるだけやろう」と言った。それは政治改革をやることだ。政治改革をやることだといつてもなかなか抽象的だから、具体的には特別委員会をつつて、そこで法案をまずみんな力で合わせて強行突破してでも、わかりやすくやつちやいましょう。その時の委員長は私が引き受けると「小沢は」言つたんだよ。体の悪くなる前の話ですからね。だから最後はできると思っていた。

僕はあの消費税の時も、金丸さんに頼まれて、最後の採決は全部僕がやつたんですから。だから委員会できちんと誰かが泥をかぶつて法律をつくれれば、世の中は変わっていくものだということはその通りです。小沢に頼んでこれをやってみてもらつて、小選挙区制の法案が通れば、それによつて議席を失う人もかなり出るだろうけれども、世の中には、もし使つていいというならば、「necessary evil」という言葉がある。これは必要悪なんだ。これは乗り越えなければならんことなんだ。だから断行しよう。そこでいたずらに、あの人がああたとか、この人がこうだとか、個人の次元まで「考えてもしょうがない」。一覧表を持つてきて、ここで小選挙区をやるとこの人は落ちる、これは落ちる、これは拾いものをするとか、いろいろなことが言われていましたが、それは考えない。それを下手に考えておつたらおかしくなつちやいますからね。国会答弁もできなくなる。そのときは、もし僕がその中、淘汰されるほうに入つてもいいんだ。それは仕方がない。これだけ言つて、これだけみんなやらせるんだから。けれどもそういう場面に巡り会つた者がこの仕事は片付けなければならん、ということと割り切っていました。

伊藤 その時「羽田・小沢のグループに」四十四人ついていくわけですよ。だから、竹下派と羽田派に分かれるわけですが、羽田さんは担がれたわけですか。

海部 担がれたほうですね。

伊藤 でしょうね。いくらなんでも小沢さんが主役でしょうから。羽田さんとはご関係がありましたか。

海部 何回も話し合つて、いろいろあつて、あれもここ「海部事務所」へ来たことはしよつちゆうある。変な話ですが、国会議員の中で本当にオペラが好きで、前から聴いておつたのは羽田であつて、小泉よりも羽田のほうがはるかに歴史も古いし、来る回数も多かつた。それで僕が羽田と一緒にいるのは、そういうところでのなり方も多かつたわけです。ただ、金丸さんに言わせると、「羽田は熱病患者になつちやつたから、海部君、ちよつと熱をさましてやつてくれよ」と言うから、「どういうことですか」と聞いたら、「もう小選挙区、小選挙区と言いつづけている」ということだつた。

伊藤 熱というのはそつちのほうですか。熱の元は先生じゃないですか。

海部 そうなんだ。おれが口説いたんだから、「金丸氏の言いたいことは」おれに口説くなということなんでしようね。けれどあれは、かくすればかくなるということをお心に思つてするのも、やはりみんなそれぞれだ。

と同時に、いまこれは本気で言つていますが、派閥の領袖でもなく、何億というお金が右から左へ自由に動くわけでもなく、知恵を使つてそのお金を叩き出すことができるわけでもないのに、「天の時、地の利、人の和」というのがあつて、流れ弾が当たつて不幸な状態にのめり込んでしまった仲間が、あの時はだいぶおつたわけです。そして狙い打ちされたように、肉体的に駄目になつていった人が出てきました。例えば安倍晋太郎です。あれらがおつたら、世の中またどういふふうに変つて行つたかわからない、ということもありましょう。そんな大きな流れの中で、えいやあと決めて飛び込んだ以上は、それとことんやるんだ、という腹でした。

■環境問題への取り組み1（地球環境行動会議）

伊藤 総理をお辞めになつて、そんな事柄があるような時期は、先生は何をしておられたんですか。

海部 総理を辞めたあとですか。辞めた後は、それこそ議員会館へ行くのをやめた。あそこは誰が来て何を言うかわからんから。それで事務所の必要性を感じて、総理が終わつてからはここ「TBRビル」の海部事務所へ来た。そしていままでのことを一切あれにして、ここへ通うようにしたんですね。

伊藤 そうすると、やはりいろいろな人の出入りがあつたということですか。

海部 まあ、みんな来ましたね。けれども、来て、それがいかんことではないからね。どうぞ、と言つていた。

伊藤 それはそうですね。別に何かを求めても求められても困るわけでしょう。

海部 困るわけです。

伊藤 総理を終わつた人はいつたいう政治活動をするのかな、と思つたんですね。それがよくわからないんですね。

海部 それは前例がないから難しいでしょう。僕がそのとき思つたのは、「我をもつて古と作す」ということです。あの時、僕にそういう方面で救いの手を差し伸べてきた人がいろいろあつたけれども、そこでまたあまり急いでお金に飛びついて、お金をもらつて何かの役職についたりしてはいかんから、「そういうことはちよつと待つてください。もうちよつと僕も人生があるし、まだ足腰が立つわけですから。いまからここでご隠居さまになつてしまつてはいかんから」と言つた。幸いあの時、新たにスタートする働き場所として地球環境行動会議というのがあつたわけです。総理が終わつたら、すぐ来てくれんかと言われました。

伊藤 それはどういふ組織ですか。

海部 環境問題についてひとつ一緒になつて考えよう、考えるだけではないかんから行動もしようという組織です。それは啓蒙運動や国民運動的なこともあるから、議員だけでやるのではなくて、財界か

からも学界からもみんな集まってもらって、大きなグループができたわけです。

伊藤 それは財団か何かにしたんですか。そうではなくて任意団体みたいな感じですか。

海部 あれは任意団体です。

伊藤 それのトップに海部さんがおなりになったんですか。

海部 いや、それをつくったとき、初代はたしか竹下登だ。これからは環境が大事だから環境をやるうや、といって役所をみんな集めた。ああいうノウハウはやはり田中派だな。どの役を絞ったら何が出てきて、どうなる、ということになりますよという。そして財界も入れなければいけない。東京電力なんかにも話して、それも入ることになった。そうしたら、東京電力の平岩「外四」さんが、「海部さんもみんな暇になるはずだから、なったらすぐに入ってもらえ。野に放っておいたら人間はぼける。総理ボケになつてはいかんし、環境問題は国連にとつても大きな目的だ」という。そう言われてみると、僕はあのととき総裁に立候補して石原慎太郎や林義郎とやった時も、政策を環境で打ち出したんですからね。これからは環境問題が非常に大事だ、地球環境をよくするところと今後日本が世界の中で果たしていく役割があるはずだ、と言ったんだ。

あのころは公害問題をひしひしと感じましたよね。われわれの選挙区へ行っても、川が汚れておるし、あれも駄目だ、ここが駄目だ。そういう問題の中で、選挙の洗礼を受けてきたわれわれは、一度自分のふるさとへ帰って、ふるさとの山河を見てみよう。汚水問題や、エア・ポリューションの問題で、それぞれ汚れておるじゃないか。けれども、かくすればかくなるという解決策は、まだ出ておらないか。幸か不幸か、お隣に中国という国があつて、ここに途轍もない桁違いの国民がいる。だんだんその生活水準が上がるに従つて廃棄物を出すようになる。これは日本が中心に取り組むべきいい課題だから取り組もう、ということに私も賛成でした。

それではそれをやろうということで、みんな集まった。「いきな

り竹下ではいかんから、海部、お前はいつペン野党のほうも呼んで、超党派でもやれるな」と言うから、「ええ、共産党を入れてくれなければいいです。やりましょう」と言つてスタートしたのが地球環境行動会議です。その地球環境行動会議というのは、僕は第二代。

しかし竹下、海部と続いたのでは、みんな政治家ばかりになるから、第三代は財界から誰かやつてもらおう。環境問題というのは、いまでもそうかもしれないが、特に電力会社には厳しい内容だったんですね。けれども東電がそれを熱心にやると言うから、また平岩さんが「やらねばならん」と言うから、じゃあ一度平岩さんに会長をやつてもらおうということで、僕の次に第三代目の会長になったのは平岩さん。平岩さんにすれば、また民間の企業も多くなってくる。そうやつて独立採算性が取れるようにして、引つ張つていったんです。東京でその会議もやりました。

伊藤 それは東電なんかがお金を出したりしたわけですね。

海部 お金を出すといても、それは公になつている特別会費を出すということですよ。そして企業もたくさん入つて、独立採算ができるようになっておるんです。

伊藤 そういう仕掛けがうまくできるものですね。先ほど、初めての経験だとおっしゃいましたが、竹下さんみたいな方は、自分が総理を辞めても派閥のオーナーですね。みんな、前の総理はそうですよ。だけど先生の場合はちよつと違う。

海部 なる前からオーナーでもなんでもないんだから。

伊藤 まあ、そうですね（笑い）。

海部 そうでしょう。だから怖いものがないんです。何が何でも派閥を押さえていなければならんというような思い詰めた気持ちもない。それなしでも、いろいろ仲間はずれさんおつた。議連の仲間や国会対策の仲間、党派を超えて「仲間もおつた」。それから環境問題もあるし、僕は文教にも長いこといましたし、選挙区の関係で通商産業省の委員会もやつていましたから、それはそれで「人脈が」できるだろう。人的なつながりがある。

それから、そのころから問題になりかけておったのは、周辺が汚れておったのでは駄目だということだ。それからきわめて宗教的になるが、また自性清浄心ということに戻りますが、嘘を言わないでも済むような国にしていかなないと駄目だということです。国民が見ておつて、あれは嘘ばかり言つとるじゃないか、と思われたのではいから。

それは、党の役員とか閣僚とか政務次官のあいだでは、時には嘘も方便ということもあつたかもしれんが、そればかり言つとつたんではいから、せめて、ある意味で世の中で「功成り名遂ぐ」という言葉は自分で言うことでは決してないけれど、「我をもつて古と作す」であつて、自分から決心して自分から歩み出す。これは初めてのことだよ、ということがわかるようにできれば、それが何よりの政治改革だと僕はあのとき本当に決心した。あのころは、地球環境行動会議なんかに入ると、企業を敵に回すことになるわけですが――。

伊藤 企業も入っているじゃないですか。

海部 だから、それは入れなければならぬ。中へ入る人が二十一世紀に生き残る、先見性のある勇気のある企業なんだ、ということなので、いろいろ説得をしたり説いたりした。平岩さんはそれがわかる人でしたね。

伊藤 他にも財界人がいたわけでしょう。

海部 いました。まあ、そんなにたくさんではないけれど。

伊藤 でも、財界人がたくさんいなかったら困るじゃないですか。

その人たちが公害の元をつくつたりしているわけですから。

海部 本当はそうなんです。本当はそうなんだけれども、公害問題というのはみんなやっていかなないと、時代に逆流することになる。

■環境問題への取り組み2（公害対策の回顧）

海部 僕らが学校で習ったことだけれど、川に汚物を流してはいけないよ、ということ、農林業者とのあいだの諍いになる。ところが、工業用排水というものはどうしても汚れる。汚してはいかんから、排水と用水を分離する用排水分離という政策をわれわれは初めの頃やつたんです。大変な金をかけた。

伊藤 それはいつのころの話ですか。

海部 当選して五年ぐらいたつたころだ。足下からワーワーと、いろいろあつた。

伊藤 その排水はどうするんですか。

海部 用排水を分けて、天井をつくるんです。蓋です。そして川の水は川の水で木曾川へ流していく。それから排水で出てきたものは、終末処理場をつくつた。その時にまた問題が起こつたのは、終末処理場をつくるというと、そのへんの関連業者たちが、言つてはいかんかもしれんが、みんな目の色を変えて集まってくるんだ。そして名の知れた大企業がそのやり方を開発して、地元の業者に流して、この制度を使つてくれたらそれで行きますよという。すぐ金儲けの話につながっていくわけですね。

けれども、僕のそういうときの考え方の結論は、じゃあやらずに放つておいたらどうなるか。このウォーター・ポリューションの問題は片づかんじゃないか。やつたらどうなるか。やると、一部の業者が儲けすぎるとか、地元の業者がひがむとか、目をつぶらなきゃならんとか言いますが、そういうのは地元の業者にも半分仕事をやれ、仕事は中小企業にもちゃんと分けろというようなことで努力すればいいんだ。やらんよりもやつたほうがいい、やろう、ということ、第一号は愛知県中島郡祖父江町の工場。工場の名前を言うのも気の毒だし、つぶれてなくなつちやつたが、いつも汚水を垂れ流している工場があつたから、それをつかまえて、排水をきれいにしなさい、濾過浄化槽をつけろ、とやつた。そうすれば農業協同組合とも話さなければいかん。田んぼに田植えもできるようになるんだよ、というようなことにまず血道を上げたんです。

そうしたら水だけじゃない。水は目に見えるからいい。くさいにおいも、におうからいい。あのころ学者といる話して聞いた耳学問では、「先生、水は見たらわかる。おいでわかる。けれども見ても色も変わらないし、においはいくらかするかもしれないが、たいしてにおいもしないエア・ポリューション、空気の公害のほうに恐ろしいですよ。人間みな、それを無条件で吸い込むから、それもきちんと抑えていかなければならぬ。近く中国でそういった情勢が必ず起こる。人口が増えていけば必ずなるだろう。そんな頃、浦東開発区という計画が出て来た。あそこでは焚きつ放し、垂れ流しでしたからね。それがみんな偏西風に乗って日本へ来るわけです。それを何とかしなければならぬという問題で、「先生、水のことだけ話していらつしやるが、水だけ話しても片づかない。空気のことでも話さない」と言われて、ちよつとデータを取り寄せて調べてみたら、その通りであった。じゃあ、これもやらなければならぬ。そうすると、空気のことから水のことから、公害問題と取り組んでいかなければ、この国の将来は変なことになってしまう。そのうちに奇形児が生まれたり、川に泳いでいるハゼやモロコがいびつになつてきたりして、みんなそれがそういう公害の影響であることがわかったわけです。元はそこだから、そこへも手を着けなければならぬ。これは途轍もなく大変なことになつたな、ということ、水と空気は共によくしなければならぬ。そんな頃、世界に先駆けて公害対策基本法をつくつたのが日本だったんですね。そういう意味で、あのころの世の中の移り変わりの最先端の問題と取り組むことができた。

伊藤 日本は公害先進国だと言われたんですが、結局それをどうかするシステムをつくつて、それが産業になつた。つまり儲けにもなる。

海部 そうですよ。ものには光の面と陰の面がありますが、だからといって悪いほうばかり焚きつけて「いかん、いかん」ということには反対なんです。悪いこともあるけれど、いいこともある。比べ

てみたら差し引きゼロどころか、差し引きプラスαだったらやれ。万事それで行つて間違いない、と私は思つたので、そういうときには、「喜んでやりなさい。やるべきだ。やらなかつたらいまのままの状態がさらに続くだけのことですよ」と言い続けてきました。

伊藤 畜産なんかをやると、必ず汚水が出ますね。あれが川の汚染につながつてくる。

海部 悪臭とかね。けれども、悪臭とかなんとか言つても、それをまた利用して再生肥料に使つている農家もあのへんには多かつたんですね。だからお互いに光の面と陰の面、両面がありますから、持ちつ持たれつでやつて行くんじゃないだろうか。

その判断で間違いないと今日までの政治活動を通じて思ったことは、いつかもお話ししたと思うけれど、臓器移植の問題が議論になつたときです。名前を言つたほうばかりやすいと思つても、私は初め、あの臓器移植はやるべきかやらないべきかというところ、あれは人間の命の尊厳に関わるからやっちゃいかんという考えだった。そういう宗教的な関係から反対する人も多かつたし、私自身も宗教学校の卒業生であつたわけですから。

そこでつい先輩の中から一人、その時はヒマそうだったから、梅原猛を呼んで座長になつてもらつて、臓器移植の小委員会をつくつてもらつたんですね。

伊藤 それは総理の時ですか。

海部 総理の時です。そして十人ぐらいで、なるべく半年ぐらいで詰めた議論をして、結論を出してくれといった。「海部さん、あんたはどつちなんだ」と言うから、「いや、おれはやりたいんだ。けれども、やれば助かることもある、助からないこともあるというときは科学的な知見を集めて、助かる率はどれくらいになるのか。放つておいたら、みんな駄目になるんだから。そういうときには、助かる率があれば、近代医学を信頼して、そちらへ賭けるのが僕のやりたいことだから。方向はそれだ」と言つたんです。方向としてはやるほうに賭けておつて、僕は直感的にそれに賛成に回つておつ

たんです。やらずにおいたらみんな駄目になってしまふでしょう。やったら、そのうちのいくらかは必ず助かる。じゃあやるべきだ。

ところが、あのとき梅原さんたちが出した結論は、やっちゃいかんという結論だった。「あんな結論を出すならば、先輩、事前にちよつと俺に言ってくれたらよかつたのに。こつちも赤つ恥かくよ」と言つたんです。けれども、彼も京大でインド哲学なんかやつて難しいことを言うんです。「人間の命は大事だし重い。それをそんな医師のあれで死の宣告をしちやいかん」ということでした。

あのときは、脳幹がやられたらもう蘇らないということでした。「らくだの馬さん」という落語や笑い話があつたけれど、みんなが集まつて悲しんでおつたら、棺桶がコトコトと動いて、「おい、おれはまだ生きてゐるぞ」と言つて、お化けが出てきたという大笑いだが、そんなことには絶対ならんな、ということであらゆる立場から突つ込んで考えた。

私は総理であつても、名古屋に一日帰つて、名古屋大学あるいは愛知県の日赤病院、主な医療機関へ直接電話をかけて、「こうこう、こう思うがどうだ」と言つた。まあ医者だから、医者はどちらかといへば、半ば「臓器移植を」やりたいほうですよ。やつていいというほうへ賭けているわけです。だからそういうことを言うんです。じゃあ、絶対安全だというブロックをかける、あるいは二重三重のブロックを要るけれど、どこどこをどうしたらいいんだという専門語まで聞きながら、二日がかりで勉強して、自分の心の中に入れて、これはやつたらいい、と結論を出した。やらなければみんな駄目になるが、やればいくらかでも助かるなら、近代医学を信じてやつたらいい、そういうところへ僕は到達したんです。

それをやつて、結局いま一〇〇%とは言いませんが、手術例を見ていると助かる人もあるわけです。だからあれは決して間違ひでなかつたと僕はいまでも思つておる。梅原さんにはその後もときどき会う機会がありますから、そういうことを言つてやると、笑つてくれるけれどね。彼はいまでも反対なんですよ。「それは海部さん、そ

ういうところにメスを入れるのは間違ひだ」という。だからあの人はムツゴロウの問題にまで反対するわけです。「ムツゴロウには命と魂がある、それを捕まえて食つちやうのは間違ひだ」という。そこまでいくと、きりがありませんよね。ムツゴロウと人間の問題とは違ふから。

ものには光の面と陰の面がある。光の面のほうが少しでも人間にプラスになるならばやるべきだ、というのが僕の気持ちにあるんです。

■環境問題への取り組み3（地球規模の環境問題）

伊藤 やはり総理をお辞めになつてからそういう活動をなさつて、将来的にある結論が出れば、法律をつくるという方向に行くわけですね。

海部 そうです。

伊藤 そのグループで、その法案づくりや何かもやるということになるわけですか。

海部 そうです。

伊藤 総理をお辞めになつてからその会議でいろいろ議論して、一番大きな問題は何かでしょうか。

海部 それは環境問題ですね。というのは、私が最初に参加したサミットで、コールが初めて環境問題を持ち出したということを申し上げたことがあつたと思うんですが、彼がサミットの席で、いま一番大事な地球規模の問題はこれだと言つたんです。調べたら、ドイツでは森林が全滅し始めたんです。そこまで僕は直接見に行きました。シュバルツバルトというところだったかな。

伊藤 全滅というのは何ですか。

海部 全滅ではないけれど、目に見えて森林地帯がやられていくんです。

楠 砂漠化しているんですか。

伊藤 伐られてしまうということですか。

海部 枯れてしまうんです。

佐道 酸性雨ですね。

伊藤 ああ、酸性雨の問題か。それは日本でもいま起こっている。

海部 ですから、それはやはり大きな問題だから、国内のどぶ川をきれいにする。僕が田舎へ行つてえらそうに演説をやったのは、排水は全部木曾川へ持つていって導水して流したから、「昔からみんなの親も言ったでしょう、困ったことは水に流せと。だから、みんな木曾川へ流したら喜んで引き受けてくれた。ふるさとにはありませんもの」なんて、とんでもない結論を出して喜んでおったんだ。それは一次的な救いにはなつたでしょう。あのへんの農業協同組合が喜んでわけだから。

ただ、それだけで問題の根本解決ではなかつたんですね。そこでちよつと角度を変えて、「エア・ポリューションになつてくるとちよつと違う。昔、高いところへ立つて民の籠を眺めたら賑わつていない、これは民が可哀想だから租税を免じろといつて三年間にわたつて租税を免除した仁徳天皇という人が一番情け深い天皇陛下だつた。偉い人だな、あれは」と言つていた。

本当はそうやるといいんだけど、いま日本は金がないからそんなことをやる予算も組めんけれども、しかし、税を取るのをある程度やめようという気持ちがあつた。いままたちよつと怪しくなつてきたけれど、全体に均霑できるように減税を考えようと思つた。特定業種だけや、特定の法律に基づいてやる特例減税ではないものだ。特例減税というのは、どうしても裏で不公平が起こりますからね。そういう方向にずつと持つていこう、そうすればいいではないか、とあれこれ考えて議論した。

そんな頃、有名な、いまでもよく出てくる経済学の先生が、全部二〇％に消費税を上げれば、インカムはそう心配せんでも困らんはずだ、という。全部二〇％というが、あの頃は三％にするか二％で

やめておくかということ、金丸さんあたりは「二％がよかよ。三でいかなければ、二しかねえんじゃねえか」というような話であつた。官澤は「三％ぐらいでは、海部先生、行き詰まりますよ。いまから五にしなければいけません」とあのころ言つたんだから。ある意味では大変正直な意見を述べたなあとと思った。けれども僕らは、「いま五にしたらとても駄目だから、三だと言いつて三で行こう。」「それでうまく」行かなければ、その次に考える時にこうこうこうだから、あと少し足してくれと言つたらいいじゃないか」と言つていた。

だからあのとき、一％から五％までの数字が出たことも間違いない。片方は、あだ名の通り、グレート・アバウトですからアバウトで、「三でみんながあれだけ反対しているから、海部君、一％に全部まけちゃえ。そうすればいいだろう」と言う金丸さん。もう片方は、「総理せっかくおやりになるならば、三でなくて五にしないさい。五にしたほうが長持ちします」という宮澤さん。

伊藤 いまは一〇にしろとか二〇にしろとか言つていますけれどね。海部 だから、ある意味では先見の明があつたと言えばそれつきりだ。

伊藤 「地球環境行動会議は」そういう一種のボランティアみたいな活動なんです。

海部 そうです。

伊藤 そういうものは、ほかにもいろいろあるわけでしょう。議員連盟とか国際交流のいろいろな団体とか。

海部 いっぱいあります。

伊藤 そうすると、結構この事務所も賑わつたんですか。

海部 賑わつて、いろいろ連絡もあるし、人も来ます。それから変な話だが、議員連盟の会合でこのあいだ九年ぶりにドイツまで行つてきたら、ドイツのほうはまだ待っていて、また両国の政策協調をやらなければいかなんと言ひ出しましたから、「よし、それもやろう。定期協議も復活だ」と言つて復活しました。向こうもいろいろ覚え

ていますから、やらなければならない。

ただ僕が思っているのは、そのときドイツと合意した一項目は、もうちよつとドイツも世界政治に責任を持つ国になってくれということなんです。サミットのときにコールさんが、物差しの目盛りは日本とドイツと合わせてからやろうと言ったんです。それはEBRDに対する拠出金の問題で、日本の出し方が多いとか少ないとかいって、ドイツは日本にもっと出させたかったんだ。こっちはそんなに出してはいかんと思ってるから、アメリカと話して歩調を合わせて、二十億ドル以上は出せんからそれでいくが、どうしてもいけないときには、その先も考える余地をちよつと「のりしろ」として残しておこうというところまで行ったことも事実です。

ただそのドイツが、このごろごとくに、特にイラク問題を挟んで、アメリカを敵対視して、アメリカと対立的な立場に持っていく。それがあのシュレーダー政権の選挙公約に近づくわけだ。彼の最初の選挙というのは、こんな状態になると知らずに、いろいろなことをぶちまくったわけでしょう、緑の党のご機嫌を取るために。

ですから、僕はドイツに現実的な外交を「してもらいたい」。いまの立場でアメリカを懲らしめてアメリカを追い込んでしまつて、それで世界平和がうまくいくのかどうか。ドイツもそこまで言つて、フランスなんかと手を組んでアメリカを孤立させるのであれば、代わつてここはわれわれが引き受けると言えばいい。アメリカに対して、国連軍の決議も受けておらんのだからと言うのなら、われわれが出す国連決議に賛成しろ、どんな国連決議にしたらいいのか、というようなことを、世界にわかるようにもつと前へ出て来てくれ。

初めからアメリカが、「おれの国は強い。手間のかかるころには頼つておらん。われわれは一人でやるから見ておれ」というようなことでは、世の中はまるく収まりませんよ。それにはもうちよつとドイツが生まれ変わった気持ちで、アメリカに「そういつたことはいけない」と言うならば、じゃあ代わりにドイツが、せつかくこのあいだから戦線も拡張してNATOのあれでどんどん出てきてや

るようになったんだから、「じゃあドイツがそこを受け持とう、出てこよう」というべきだろう。アメリカに「お前はちよつとやりすぎだ」と言うならば、イラクの問題もドイツがもう少しやたらどうかと思うが、まだそこまでは踏み切つておらんわけですよ。「荒っぽいことを言わんでくれ」と言うが、今度もう一回行つたら、世界政治フォーラムでも、嫌われるかもしれんけれども、そのことをちよつと言つてこようと思う。

伊藤 そういう国際団体がいろいろあつて、そういうことをいろいろおやりになつてゐるわけですね。

■五五年体制の崩壊1（宮沢内閣不信任案可決）

伊藤 それはそれとして、平成五年にとつとう宮沢内閣に不信任案が出て、自民党議員の賛成もあつてそれが成立してしまう。あの不信任案が出た段階で、もしかしたら通るかもしれない、という感じだったわけでしょうか。

海部 通るかもしれないという感じはあつたよね。けれども、未必の故意もありましたからね。通つたつてしようがないじゃないか、てめえが勝手にいろいろなことを言つたりやつたりして、もつと責任をもつてそういうことを差し止めていくような努力をしてなかつたんじゃないか、というふうな気持ち等もあつた。通つた結果は厳しいものになるだろうけれど、それは甘んじて受けなければ、通つてもいいよなんて思うこともできませんからね。

伊藤 でも、この不信任案が通れば解散ですね。

海部 そこまで行き着くだろう。

伊藤 このときは、結局小沢さんたちのグループが反乱を起こしたということですね。

海部 そういうことですね。

伊藤 それは起こすだろうと思つておられましたか。

海部 起こす、起こすと、いろいろあらかじめ言っておった。いまの小泉と違って、予告が激しい人だから、手に取るようにわかっておった。

伊藤 でも、まさかとは思わなかったんですか。

海部 まさかとも、僕は思いませんでしたよ。

伊藤 そうですか。これはもう行っちゃうと――。

海部 行っても仕方ないじゃないか、その責めは日頃の平生往生だ。

伊藤 ああ、そうですか。それで結局選挙をやりましたが、この時の選挙は、先生はいかがでしたか。

海部 僕は、選挙は恐れず逃げずということですから、喜んで――。喜んでというのではないけれども、選挙になった以上は頑張つて勝たないといかんけれども、できるだけ応援する候補者を絞つて応援もし、僕自身もおかげさまで当選しました。

伊藤 あまり苦しいこともなかったですか。

海部 はい。

■五五年体制の崩壊2（新生党と新党さきがけ）

楠 先生は、そもそも自民党が分裂する時に、分裂したほうの新生党とかさきがけから、例えば党首になってくださいというような誘いかけはなかったんですか。

海部 それは西岡「武夫」君周辺の画策情報でしょうから、おれは西岡君に「そういうことをやると、それは世の中に最良の引き倒しという言葉があるが、二番煎じはあり得ない。こういうときは受けんから、それは駄目だ。おれは身の程を心得ておるよ。君がいろいろ言ってくれる友情はよくわかるけれども」と言いました。

楠 では西岡さんからは、そういう話があったということですね。

海部 うん。いやそれは西岡も、言われてこなければそんなことは言わないわ。小沢と話をして詰めてからでなければ、そんなことは

言わんもの。そして西岡がああいう思い詰めた顔をして来る時は、「この野郎、小沢とちゃんと話をして頼まれて来たな」と思うから、こちらも初めからガチつと鍵をかけて、少々のことでは駄目だよと言った。やったら終わりになっちゃうもの。

楠 でも、そのとき西岡さん自身は「自民党を」出ていないですよ。それはもうちよつとあとの話ですね。この時は、さきがけと羽田派は新生党ですから。

海部 さきがけとはしよつちゅう連絡があった。

伊藤 西岡さんですか。

海部 うん。

楠 さきがけも、結果的には小さな塊で出たけれども、もっと大きな塊で先生を担いで出ようというような動きはあったわけですね。

海部 うん。あったんだけど、それも名前まで言うのも気の毒だな。

伊藤 武村「正義」と先生は、関係があるんですか。

海部 武村と私は政治改革の頃、初めにいろいろ話をした。武村と私は関連もあったんですが、しかし武村と小沢一郎というのはものすごく仲が悪いんですよ。考え方が全然違う。僕のほうには、小沢の考えは西岡を通じて事細かに入ってきておる。それから武村がいろいろ言っても、それはあかんよ、ということだ。

佐道 世間的には羽田派とか小沢さんのグループが、竹下派の分裂以降は注目的だったわけですが、武村さんのグループも前から分派的な動きをしていたわけですか。

海部 していた。ですからみんなが、いくら使ったか金銭帳を出せとやったりしていた。あの頃、いろいろなところに噛んでおって、裏で軍師みたいな顔をしておったのが、まだ存命中だけれども、アナザー小沢ですよ。辰男のほうだ。

あのころ小沢辰男と武村と西岡といて、そこへ小沢が「海部、一回ぐらいお前も顔を出してくれんと俺の立場がねえや」と言うから、「よし、じゃあ、お前の顔を立てに行つてあげよう」と言つて、行

って話を聞いて、「小沢タツちゃんの言うことは正しいよ」というようなことを無責任に言いながら、こっちは取材に行ったつもりだったから、何をしゃべるか聞いてきたということですね。

伊藤 じゃあ、向こうは狙っていたわけですね。

海部 狙っていたわけですね。事があつたら、このグループで行動しようと思っておつたんですね。

伊藤 でも、ものすごい少数派でしょう。

海部 少数派だ、もちろん。そして田中秀征なんていうのがついて

いるからあかんだ。あれはちよつとインチキだから。

楠 だいたい武村さんも、もともとは革新知事でしたんですよね。

海部 そうですよ。社会党のあれだから。

楠 元は自治省だけね。

伊藤 武村さんとの接点は、どういうものですか。

海部 あれは政治改革に出てきて、初めの頃、わかつたようなきれ

い事を言つとつたよ。

楠 武村さんはいつの間にか消えてしまいましたね。

伊藤 いまは、声が聞こえないですね。

楠 もう現職じゃないですよ。一時は大蔵大臣をやりましたよね。

佐道 いまも滋賀県では武村さんの勢力が強いという話を聞きます

けれどね。

伊藤 そうですか。それで結局、新党さきがけができて、新進党が

できました。この両方とも、一応海部さんを狙ったことは狙っていたわ

けですね。

海部 さきがけの人からはいろいろ誘われたことがある。新進党と

いうのは小沢一郎と西岡が、あの頃ずつとくつついて動いていまし

たから、できたら一緒にやってくれということをやられたことも事

実です。ただ僕は、「二度と再びそう言われても、これ以上恥の上

塗りになるから」と言つて動かないと決めて、きちんと厳しく自分

を戒めました。

伊藤 でも選挙が終わつてみたら、自民党は過半数が維持できない。

このときどうなるか。つまり自民党は第一党ですから、第一党とほ

かの党が連立をつくつて政権を維持するかどうか。その可能性も

なきにしもあらずだったわけでしょう。

海部 そうですよ。それで、みんながそれぞれのお得意様のところ

に筋をかけて、一緒にされるかどうか、連立政権ができるかどうか、

という話を真剣にしたことは間違いありません。

伊藤 そのとき海部先生は動かなくなつたんですか。

海部 僕はあの時は動きませんでした。無理して連立政権をつくつ

て、水と油を一緒にして、またその中でやるよりも、いったん党に

迷惑をかけて党が壊れた責任の一端も負わなければならんし、有権

者の前で自分が言つてきたことがもし正しければ、いまごろそんな

ことを考えんでもいいような陣営ができていたはずですから。だか

らあのときは、僕は何も動きませんでした。だから、さつきちらつ

と言つたように、小沢辰男君が来たり、西岡が来たりするぐらいの

ことでした。

佐道 当時の世論の流れから言いますと、宮澤内閣不信任案が通つ

たことがかなり画期的なことですから、世論が沸いて、そのまま選

挙で自民党が負けた。これで非自民の内閣ができるかもしれないと

いう世論的な期待がかなりあつた。それで先生のおっしゃるように、

自民党は無理して連立を組まなくてもという話ですと、自民党は当

然下野する、ということになるわけですが、その場合はしようがな

いということですか。

海部 まあ、あのときはいろいろな動きがちやがちやめまぐるし

くありましたが、ずつと沈殿していく行き先がどうなるかといえ

やはり二大政党に収斂していくだろうし、そうさせるのが本場の姿

だという思いも一方にありました。

佐道 二大政党の方向ということですね。そうすると一つは自民党

ですが、もう一つのカウンターパートとして、先生はどこかに期待

されていたわけですか。

海部 うん。一時期はそれに情熱も燃やして新進党をつくつたり

(佐道 はい、ちょっとあとになります)、第一党ができたけれども、あの時は構成分子を間違えたがために、思わぬところで積み木くずしがあったんですね。だから、できたら二大政党になつていくためには、「自民」対「非自民」という二つの大きな流れにならなければならぬけれども、それにはやはりいろいろ条件とか環境が必要なんだ、という思いもありました。

伊藤 でもこのとき、自民党は河野「洋平」さんが総裁になつて、幹事長が森「喜朗」さんという体制ですね。先生はこのときは自民党の最高顧問という形でおいでになつたということですか。

海部 はい、そうでした。そして政治改革だけはどうしてもやらなければならぬという思いは断ち切れぬものがありましたから、政治改革議員連盟と言つたかな、それを自民党の中につくつて、選挙が始まると、総裁遊説と分かれて分派遊説もやつたんです。

伊藤 そうですか。それは自民党の中ですか。

海部 中で、です。

楠 河野さんは、どうしてこういうときに総裁に選ばれたのか。結果的には貧乏くじを引いてしまいましたね。唯一総理大臣になれない自民党総裁であるわけで、どう考えても、野党になつた直後の自民党総裁になるというのは分が悪いと思うんですが、その中でどうして彼が引き受けたのか。そのへん最高顧問でいらつしやつた先生としては――。

海部 それは洋平さん自身に聞くか、あるいは洋平さんの後におつた石川君に聞かなければわからんわ。時事通信の記者がおつたでしょう。

楠 石川。秘書をやっていた人ですよ。

海部 いまの飯島「勲」みたいな影響力を持っていましたな。

伊藤 とにかくみんな、河野さんでいい、ということになつたんです。ほかに選肢がなかったということですか。

海部 なかった。

佐道 過半数割れした自民党の中は、どうなつていたんでしょう。

海部 みんな自信喪失しちゃつて――。

佐道 小沢さんのところに流れていこうとか、ちょっと自民党は駄目だから、と考えるような人が――。

海部 そういう連中は、いち早く小沢のほうへ旗を立てようとしておつた。だからあのときにはだいたいぶ流れたでしょう。

■五五年体制の崩壊3 (細川内閣の成立)

伊藤 やがて日本新党の細川「護熙」さんが総理になるわけですね。そして細川内閣ができる。〔一九九三年八月九日、日本新党・日本社会党・新生

党・公明党・民社党・新党さきがけ・社会民主連合・民主改革連合の連立により細川内閣が誕生。できてしまうと、自民党の先生たちのところにはもう陳情もないし、情報も来ないし、実に寂しいものである、ということをおっしゃる方が結構たくさんいらつしやいますが、そんなものでございませうか。

海部 あのときは、そうなるんじゃないかという心配をみんながしておつた。だから、連立内閣でもなんでもいいから、なんとか自民党が中心になる大きな勢力をつくつて固めていかなければならぬという動きがありました。当時それを一番心配して動いていたのが、さつきも申し上げた小沢辰男ですね。

伊藤 小沢辰男さんはどういう立場だったんですか。

海部 このまま無茶をやつておつちやあいから、どこかと一緒にならなければいかんじゃないかということで、要するに吸収合併の話ですよ。自民党へ吸収する相手をどうするか、ということだ。

伊藤 そんなのはどこにいるんですか、自民党に吸収するような相手は。

海部 どことおつしやつても、小沢辰男が真剣になつて石田幸四郎を口説いておつたわ。

楠 それで小沢辰男さんが、一時公明党に接近してグループをつく

っていましたよね。なるほど。

海部 その場合も、「海部、お前も顔を出しておってくれよ」と言われて、僕が顔を出したこともある。そこには、いまから思えば大久保直彦がいた。いまはいないけれど、早稲田の頃からわれわれの仲間で、議運や国体の時も一緒にあって、日独議員連盟も彼が副会長になって一緒に旅行したこともあった。その大久保が来たり、坂口力が出てきたこともありましたよ。「小沢辰男は」「頼む、一緒にあって、われわれもこれから大きな政党になって頑張らにやならん」と言っていたんだ。

伊藤 そうですか。公明党がこの時当選したのが五十一ですから、かなり大きいですね。

佐道 そのまま一緒に統一会派を組んだら（伊藤 「政権が」できませんね）。

海部 あれは何かが原因で、そこまで行かなかったんだな。

楠 小沢さんは、たしか公明党にきわめて近い、創価学会がし向けた小さなグループ、院内会派をつくってしまいましたね。あれは何と言ったかな。それで先生、こういう時は、やはり後援会の人たちはかなり動揺するものですか。あるいは地方議員とか。

海部 いや、わかりませんが、僕に関する限りは後援会の動揺はなかったです。「ここは自民党でもなんでもない、海部党だから、思った通りやりやあ。どこまででもついて行くからいいよ」ということをみんなが言ってくれておるし。

佐道 海部先生の後援会は、ちよつと別格ですからね（笑い）。

楠 そうでしょうけれど、県議、地方議員などからすると、これはステップアップする一つのチャンスだといって飛びだそうとするような動きがあちこちにあったんじゃないかと思えますが、少なくとも先生の周辺にはなかったわけですね。

海部 うちの周辺で飛び出すやつがおつたら、みんな絞めちゃうから。次の選挙は絶対当選できないもの。

伊藤 このとき日本新党かなんかに入つて、ヒュツと出てきた人が

たくさんいるじゃないですか。もういまはあまり名前も残っていないけれど。

楠 いまだに生き残っている人もいますけれどね。

海部 そういうブームに乗ってしか出られない人もおるね。それはそうだろうと思えますね。

伊藤 先生は細川さんとはおつき合いがあつたですか。

海部 むかし彼が政務次官になった時は、私は内閣の官房副長官でしたから、政務次官会議の総取締がこちらでした。それから彼が熊本知事になる前に竹下さんに頼まれて「細川を知事に出すから、松野頼三さんと同じ熊本だから、松野頼三さんに少しいまいこと話しておいてくれんか」とかいろいろ話があつた。しかし細川があとでトントン拍子に総理になるとは見ていなかった。なつたら途端に一億ぐらいのはした金で、えらい金持ちみたいなことを言っておつたが、こつちでもやらんようなことをやってポケット入れて、それがもつと、ああいうふうに棒に振つたわけでしょう。だから結局あの人は、どちらかといえば、いい意味でも悪い意味でもお坊ちゃんなんだな。

伊藤 まあ殿様ですからね。

海部 そう思うんです。松野さんもそう言つておつた。

伊藤 細川内閣ができて、旧社会党の人たちも大臣になるといふことになりました。社会党は、このときはたしか右派の人たちが大臣になりましたね。

海部 左派もなつたんじゃないか。サトカン「佐藤観樹」もなつたんだもの。

楠 左派は、むしろ村山内閣になつてからじゃないですか。

■五五年度体制の崩壊4（自民党内の動き）

伊藤 細川内閣ができた時から、すぐにこれをひっくり返して、も

ういつペン政界再編成をやるうという動きはもう始まっていたわけですか。

海部 細川内閣ができた日からその通りですね。できたら、早くこの内閣はひっくり返さなければならぬ。そして陰に陽に資料集めが始まっていますね。

伊藤 資料集めというのは何ですか。

海部 何か、スキヤンダルになる「ネタだ」。

伊藤 ああ、そうですね。それが佐川急便になるんですか。

海部 佐川急便になるんですよ。

伊藤 そうですか。先生は、七つか八つの党派で「政権をつくっている」向こうの様子を見ているわけでしょう。向こうは中でガタガタやっている。これはつけ入るスキがある。

海部 あれだけの寄せ集め所帯であつたわけですから。腹に一物、背中に荷物という人もだいたいぶあつたので、それは揺さぶればそう長くはない。ただ自民党のほうでガタガタでは駄目だ。

伊藤 自民党だつてガタガタでしょう。

海部 ガタガタですよ。ガタガタにされちゃつたんだから。

伊藤 浮き足立っている人もいるし。

海部 だからあの頃は、「みんな自分自身の選挙だけは自分自身で責任を持って。党や上に頼らんでもいいように努力をしておけ」ということを言い合つて、足らんとところはみんなで助けてやるうということでしたよね。

伊藤 党の最高顧問というのは日常的に何か役割があるんですか。

海部 あるような、ないような。

楠 定例の会議はあるんですか。

海部 定例の会議はある。最高顧問会議というのは、いまはないみたいだけれど、あのころはちゃんとあつたんですよ。いまは、例えばイラクの問題が起こったり何かがあるときには、その都度ずつと回して招集して、総理経験者のご意見が聞きたいからおいでくださいと言つて呼び集めるわけです。昔はパーマネントで常設的な最高

顧問会議というのがあつたんですね。

伊藤 そこで何か意見を述べたりすることができたわけですね。

海部 はい。

伊藤 それで先生みたいな形になると、国会の中では委員会にお出になるとか、そういうことはどうなるんですか。

海部 それは、自分がこのテーマはちよつと任せておけんから言いたい、というときには、通告しておいて出て行けます。そうすると委員長は気を利かせて、「何かご発言があるならば、議事の中に入れますので」と言ってくれる。けれど、そういうところへ出て行って、いちいち手を挙げて質問して、局長の答弁に「この野郎」なんて怒つておつても逆にみつともないから。行くことは行きますけれどもね。

伊藤 見に行くということですか。

海部 よきに計らえ、ということ帰つてこんと「いかん」。小姑みたいな顔をしていちいち言つておつてはいけませんからね。だから、むしろそういうときは委員会に行く前に党の政調会なんかのそういう問題を扱うところに行く。むしろ文教関係の中で教育をやるというときには、歴代の文部大臣を集めたり、政調会の担当者の主なものだけを集めたりして、そういうところに行つてものが言えるように、いまはみんなが気を遣つておりますね。

佐道 相手がガタガタしているにつけ入るスキがある、というようなお話でしたが、例えば相手の弱いところを見つけて攻めていくとか、そういう指揮はどなたかがおとりになるわけですか。幹事長が政権奪回のための方針を立てるんですか。

海部 それは幹事長の大きな役割ですよ。

伊藤 森さんじゃないですか。

佐道 森さんは、そういうことはお得意の方なんです。

海部 お得意かどうかは知らんが、好きであることは間違いないな。だから、俺がここにおることがわかつておると、幹事長はここまで来んでもいいのに、ここへ走つて飛び込んできて、ああだこうだ、

ああだこうだといろいろ説明して、こうこうこういうふうにした
いから、これに協力してもらえませんかと言う。「君ももつと汗をか
いてやれよ」と言う、「いや、これだけ汗かいてやっておりまし
が」なんて、いろいろな言い訳をしながら説明して、比較的努力し
ておったね。

伊藤 森さんはフットワークがいいほうなんですか。

海部 フットワークはいいほうですよ。よすぎて脱線するんでは
う。フットワークがよくて、出ではいかんところに出て行くから、
運動しすぎになってしまう。ゴルフ場でもそうだ。

佐道 野党になってしまったときの総裁は何をされるんですか。与
党のときは、総裁イコール総理大臣でしたから、総理としての激務
がおありですが、野党になってくるときは、河野総裁は何をしてお
られたんですか。

海部 何をしておられたんですかといつても、出番は限られるでし
よう。いまのようにイラク問題みたいな激しいものがあれば、党首
討論なんていうのも脚光を浴びるし、政治改革なんかも脚光を浴び
たと思うんだ。河野が出ていって、最後はお手打ちをやらねばな
らんから、その前にどうするんだということである議論した。
ここは騒がずに押せ、取れるものは取ってこいと言ったが、彼は小
選挙区比例代表並立制に必ずしも一〇〇%賛成ではなかったんだか
らね。

■五五年体制の崩壊5 (羽田内閣の成立)

伊藤 「改新」というグループをつくるのは小沢さんでしたよね

海部 ハードルを高くしてね。
「新生党・民社党・日本新党・自由党・改革の会」で衆院統一会派「改新」がつくれる。

伊藤 それで「政権与党が」分裂というか、そういうことになって、
それで「一九九四年四月二十八日」、「羽田内閣が少数与党内部とし

て出発するということになりますね。そのへんのこととはどんなふう
にご覧になっていましたか。

海部 ここらへんは、小沢という人の本質が一番出ているところじ
やないかな。物事がまとまったら、存在価値がなくなっちゃうわけ
だ。志も果たせなくなるから、まとまる前にこれをつぶせというこ
とになる。ぶつつぶすためには、こういう改新のような、誰が見て
も横車だと思ふものをゴリゴリ押して、荒れるならば荒れたでよろ
しい。

伊藤 でも、そうしたら政権を失うもとじゃないですか。

海部 そちらがわからんところだね。例えば、具体的にいうと新進
党も議席はたくさん取って、得票も多かった。ここで文句を言わず
にみんなやっていけば政権がとれるというところまで行つたわけ
でしょう。そうしたら今度は、「逆改新」というか、新進党の中に
公明党がおるとどうのこうのと言って、酔だのこんやくだの言
って、いろいろな屁理屈が出てきて、そして比例区だけは分かれる。
全国区は公明は公明だけで新しい党をつくってやってくれという。
新進党で政権をとるといふ大義が目の前へ迫ってきて、いいところ
まで行つて、しかもあの日はみんなが小沢に党首の再選を認めてあ
げた日ですよ。その日にああいうことを言って、ああいうことをや
り出したから、「お前もおかしいな、またか」ということになるわ
けです。それで結局ぶち壊しちゃったわけだ。そのとき、創価学会
で今度引退するけれども、衆議院議員よりもそのほうにかけては長
けておる藤井「富雄」君というのが出てきた。おれも二回ぐらい夜
に一緒につき合わされたけれどね。

伊藤 最初に国民福祉税問題でぎくしゃくしますよね。なぜああい
う問題が出たのかよくわからないんですが。それで今度は改新の問
題。細川さんが佐川急便問題で「ああ、もう辞めた」といって辞め
て、それで羽田内閣になるんですね。

楠 とりあえずは、細川政権が最大の課題としていた選挙法案を成
立させますね。結局これが一つの求心力になって七党派だか八党派

がまとまっていたわけですが、それが成就したものだから求心力が急になくなってしまつて、そこでいろいろの問題が噴出してきたと見てよろしいんでしょうか。かつて護憲三派内閣が、普通選挙制度を成立させると途端にばらけたように、何か歴史が戻つたような印象をあるとき私は受けたんです。掲げたテーマが成就したものだから、求心力が急に下がつてしまつたんですね。

伊藤 要するに選挙法の改正でしょう。

楠 ええ。それが大義名分になつて七党派が集まつたわけですね。佐道 政治改革をする、ということですね。

伊藤 政治改革が、なんで選挙法の改正だけになつたのかよくわからないけれどね。

楠 それは結局、マスコミなんかがそういうふうの問題を絞り込んで宣伝したからじゃないですか。順序としては、結局それで七党派の細川内閣の求心力が失われて、それでばらけるんですよね。

伊藤 ちょうどそんなところで佐川急便問題があつて、それで細川さんは辞めてしまふ。

楠 そして羽田内閣ができるんだけど、社会党がそこから出て行つてしまふ。そして出て行つた社会党と自民党が手を結ぶ。それに反発して、先生が自民党をお出になつて、そこで新進党をつくる。海部 ああ、「自民党が」村山とくつついて、村山内閣をつくることがよくない。

■自民党離党と首班指名選挙1（引き金）

楠 ええ。実は質問をさせていたできたかたところではあるんですが、先回りして申し上げれば、なぜ先生が自民党から飛び出されたかということです。たぶん村山内閣ができるときに、それに反発して先生がお出になつたんじゃないかというふうには推測するんですが、そういうことでよろしいでしょうか。

海部 大きな流れはそういうことです。それから直接のトリガー、引き金になつたのは、あの前の何らかの法案の時に、村山富市が国会対策委員長で、いつも衆議院の本会議場で俺の目の前に現われては、「ここで社会党は退け」とか、「もっと頑張れ」とかなんとか言つて、余計に議場の中が騒乱するようなことをやつてきた。「おう、富市さん。あんた下がつておれよ、おまえは」と、つい声を荒げざるを得ないようなことがあつたわけです。だから村山さんが総理になるということは、ああいったことからのいろいろな思いがあつたものだから、これだけは許されなかつた。

伊藤 「村山氏は」社会党の国対でずいぶん長いことやつたわけですね。

海部 国対委員長を長いことやつたいわゆる実力者だったんだ。本会議をむちやくちやにして、約束は破る。「何だ、約束を破つちやいかん、何時になつたら引き揚げると言つたのに、引き揚げんじやないか」と富市さんに文句を言いかけると、出てきて「おう、みんな引き揚げろ、引き揚げろ」なんていう八百長を始めたり、調子のいいことばかりやつていたんだ。

楠 では、仮に社会党が担いだ首相候補が村山さんではなくて、ほかの社会党の議員だったら、飛び出すまでいかなかったということも考えられますか。

海部 いや、もうそこまでいくと僕の基本的な割り切り方だ。さつきちよつと例に引いたように、どっちがいいのか、この法案を通したほうが国民のために政治が少しは良くなるか悪くなるかという境です。村山富市以外の誰でもいいが、あのころ名前が出ておつたのは誰でしたか。

伊藤 村山さんぐらいじゃないですか。

海部 あまり出ていなかったですね。伊藤なんか「↓伊藤茂」というのもおつたでしょう。百歩譲つてそうであつたとしても、それは最後のところまで行つたときは、もうしようがないわけだ。

伊藤 社会党と連立をして政権を奪取しようということと本當に動

いたのは、自民党の中で誰なんですか。

海部 あの時は、心の奥底で何がどうなっていたかは別に、その一人は森喜朗じゃないですか。

伊藤 そうですか。森さんはしょっちゅう先生のところへ来て、ああだこうだと言っていたわけでしょう。

海部 そうよ。いろいろなことを聞かされておった。同時にあれもおそらく雄弁会の仲間の一人だ、ぐらいに思っておったから。けれどもあの頃は、彼にしてみればそれをやるのが自民党のために役に立つと思っておったんでしょね。僕は、「社会党と一緒にすることは自民党の役に立たん、ためにならんから、この際すっぱりきれいに——。河野君、あんたもやっけて野党になったら、そこであんたの得意な正論を吐いて、選挙の審判を受けると言つて国民に訴えたほうが筋ではないか。議会制民主主義というものは、そのほうがわかりやすく守られるんだよ」と言っただ。

「わかりやすく、きれいに」というのが、あのころの選挙になるとわれわれのスローガンの一つでもあったんだ。けれども、いろいろ説明しなければならん。こうすればこうだ、こうすればこうだ、というような裏の腹芸やいろいろなこと説明しなければわかってもらえんようなことは選挙の時には使っちゃいかんことなんだ、と僕は思っておりました。

楠 当然、最高顧問会議では、そうした激論があつたわけですか。

海部 そう。それは「いま社会党と組んで村山をやってみたってしようがない。トリモチを踏んだようになるからやっちゃいかんですよ。駄目だ」ということを僕は言った。

楠 中曽根さんはどうでしたか。

海部 中曽根さんも、それには賛成だったんだ。

楠 宮澤さんはどうですか。

海部 宮澤さんは、賛成だったか反対だったか、忘れちゃったぐらいだ。

楠 自分の内閣が崩れた直後だから、茫然自失ですか。

佐道 竹下さんなんかはどうなんですか。

伊藤 竹下さんは、やる気でしょう。

海部 やる気だけでも、竹下がぼろつと言ったことは、「村山もなあ……」ということですよ。

伊藤 あれも国対仲間ですからね。

海部 そして竹下が「村山に」最後に「どうなんだ、やらんか」と聞いたたら、「サミットというものがあるからなあ、竹ちゃん。それは難しいわ」と言ったという。そんなこと心配して行くものだから、オリブ油にあたりたりなんかして、サミットに予見通り出られなくなつただよ。

楠 竹下さんは、村山さんでやってもいいと——。

海部 迷っているというんだ。

楠 サミットが、あの人もつかという心配をしていたんですね。

海部 また本人もそこはよく知っていて、「竹ちゃんや、サミットがなければのう」と言うから、「書いてもらったものを読むだけじゃないか。労働組合ではそんなことはよく慣れているだろう、みんな社会党は」と言つても、「サミットがあるからのう」と言つたという。だから最後の最後まで一〇〇%村山でやれるんだという確信を竹下さんがしきれなかったのは、本人がまだ腹を決めかねておると見ておつたからじゃないですか。

伊藤 森さんは、だけどどういうパイプでそれ「社会党との連立への動き」をやっていたわけですか。

海部 森はとにかく自分が幹事長だから、舞台回しをきちんとやる責任者だと思つてやっておつたんでしょ。

佐道 森さんのほかに、いろいろと具体的に動いていた人がいる可能性は高いわけですか。

伊藤 そんな、個人プレーでできないでしょう。

海部 やはり党のある程度の機関がなければいけない。自民党の場合、ある程度幹事長のところへそういったものの考え方や権力が集中しますからね。

楠　そもそも河野総裁はどうだったんですか。外交姿勢なんかをみると、かなり社会党に近いんじゃないかという気がしますが（笑い）。

海部　河野総裁は、だって、このごろでこそ立場上ああいうことを言ったりやったりしているが、河野さんが最初の外務大臣の時には、常任理事国の問題でも、本会議場で「そこまで考えてはいかん」という非常に腰の退けた消極的な発言をしておるわけだから。

楠　だから、社会党といいわけですよ。

佐道　合っていますよ。政策的親和性は高い（笑い）。

楠　ただ、あまりフットワークがいいようには思えないですね。

伊藤　だんだんフットワークが悪くなってきたな。

海部　あの息子が批判するぐらいだから。

楠　もうその時から、お体の具合が悪かったんですかね。

佐道　先生のところには、そういう自民党と社会党の動きを見るなりなんなりして、誰かが使者に來られたわけですか。

海部　情勢はいろいろ聞いた。自民党の党内情勢を聞いたのは、変な話だが、森なんかがよく、ああだこうだと言ってくる。

伊藤　どうしても森さんになる。

■自民党離党と首班指名選挙2（擁立）

佐道　非自民グループで、先生に総理候補になってもらって村山に對抗しようとした人たちは、いつぐらいの時点で先生のところにお伺いに來られたんですか。

海部　それは、小沢が最終的にそういうことを西岡に話し、それで西岡が動き出して、そうかと言って聞いたら、小沢もその通りですという。

伊藤　やはり西岡さんなんですか。西岡さんというのは文教族のつながりでしょう。

海部　そう。早稲田大学雄弁会のつながりが早いし、あれが初めて立候補して落ちた頃は、僕は長崎まで応援に行ったんだから。そして長崎新聞の講堂で話そうと思ったら、労働組合が鍵をかけて帰ってしまったものだから、宣伝車だけ前へ止めて、そこで演説をぶつて、「お父さんにこれだけつくってもらった新聞社だ、これが新聞のやることか」と言つて、さんざん八つ当たりの演説をやったんです。

伊藤　でも、それだけ西岡さんの説得が効いたわけですか。

海部　西岡さんの説得が効いたかどうか、それはやはりいろいろな動きがあるものだから、西岡さん一人だけでもありません。

伊藤　三木派以来の政友もいるわけでしょう。

海部　います。

伊藤　そういう人たちは、「じゃあ、西岡さんの話に乗っかれ」ということになりましたか。

海部　そこまではみんなと腹を割って話はしなかったけれど、話をした連中は、「ついていくよ。ついていくからやってくれ」というそれは僕らもあのころ仲良く遊んでおった三木派の仲間たちですからね。腹を割って話もできたわけだ。例えばと言われたら、伊藤宗一郎だ。それから、絶対それに従わなくて、反対の立場でぎやあぎやあ言つておったのが、例の鯨岡兵助だ。「体を張って反対してください、駄目です」と言った。

伊藤　じゃあ、判断がなかなか大変ですね。

海部　それはそうですよ。だからそういうときは一人で決めるしかしょうがない。孤独ですよ。物事を決断するときには。

伊藤　その決断がよかったか悪かったかというのは、あとになってからしかわからないわけですね。

海部　そのとき自分がそれで満足し、納得したら、それでいいんじゃないですか。少なくともこちらのほうがいまの自分の気持ちには正直だと思つて決断したら、それに従つて、途中でもガタガタ変えたりしないことだ。

伊藤 やはり、一番のポイントは、社会党との連立、しかも村山を総理にするということが、許せないということですか。

海部 それは絶対許せなかった。

伊藤 絶対許せない、ですか。とにかく自民党が政権を回復するということであつても駄目ですか。

海部 政権を回復するかどうか、あのとこの情勢ではまだわからんわけですから。

伊藤 だって、自民党と社会党が組めば――。

海部 組めば、ですよ。政権をとるために組むというならば、もうちよっとほかの組み方、やり方があつたじゃないですか、あのとこでも。

伊藤 そうですか。社会党じゃなくて、ですか。

楠 でも、手っ取り早いのはやはり数合わせですね。

海部 数合わせなら数合わせらしく、もつと前にわかりやすくきれいに政策協定を両党で結んで国民に発表するとか、党内議論もやつてみて、いろいろな反対論も沸騰して、こういうわけだから反対だ、こういうわけだからいやだ、と言うだけ言わせて、そして、この場合はこれ以外に道がないだろうという、論を尽くしたあとの結論として国民に訴えなければならぬ。

伊藤 たぶん論を尽くしたら、できなかつたでしょうね。

海部 政策的にきちんとみんなに説明できるような話に持つていつたらね。

伊藤 村山さんのほうだって、社会党の説明はできなかつたでしょうね。

海部 できんですよ。それは一夜にしてあれだけ掌を返すような大転換だから、真面目に議論したらできないでしょうね。

伊藤 社会党だって、別に政策転換したわけじゃないですからね。

佐道 この時は、自・社・さきがけになつていくわけですが、さきがけはもともと自民党を出た人々ですね。この人たちについては、どういふ見方だつたんですか。やはり、それなりに役割を果たした

わけですか。自民党と社会党の接着剤になるとかならないとか、いろいろな議論がありました。ただ単純に戻つてくれればいいという話だけで、自民党の中ではあまり意識もされなかつたということですか。

海部 まあ、信頼のおける人があまりさきがけの中にはいなかった、ということじゃないですか。

伊藤 そうですか。お友達がいなかった。

海部 ああ、腹を割つた本当の話し相手はいない。みんな格好いい調子いいやつばかりだ。あの武村を筆頭にして(楠 菅直人)。田中秀征然りでしょう。あれは初め石田博英さんのところの走り使いで、ここへも資料を持ってきて、こうですが、どうですか、ああですと、そこからいろいろやつて面倒を見たんですから。

伊藤 もう海部さんは長いから(笑い)。

佐道 みんな昔から知っているから(笑い)。

海部 そう。そしてどこも行くところが無いからといって、三木事務所の政策研究所へ入り込んで、こんな厚い本が出るとその本を買つてきて読んで、そのダイジェスト版をつくつて配つて歩く。それがあれの仕事だつたわけですから。

伊藤 そうですか。あの三木さんの政策研究所ですか。

海部 そうですよ。あそこにおつたのが武部ですよ。今度幹事長になつた武部勤、あれも三木さんところの政策研究所におつたわけですから。

佐道 武部さんが幹事長ですよ、驚きましたね。

楠 BSEのときの農林水産大臣でしょう。サプライズです。

伊藤 サプライズといつても、明るいサプライズではないような気がしますけれどね(笑い)。社会党と自民党が連立政権をつくつて、村山さんを総理にする。それと海部先生が自民党を出て、反自民の側の候補になるといふのは本当のサプライズですね。ちよつと僕はえつ、という感じでしたが、いまの説明を聞いて、社会党のあの富市さんとは一緒にはやつていけないよという――。

海部 そういう気持ちで、ずっときておったことも間違いないわけですから。

伊藤 そうですか。だけど、竹下さんに聞いたたら、竹下さんは「いや、お互いにお互いにお金が無くて育って、片方は労働組合をやつて、片方は青年団をやつて、地方の議会をやつて、国会議員になつて、国対をやつて、ずっと長い間つき合つていて、気心の知れた相手だからやつていける」という説明でした。

海部 当たらずといえども遠からずで、竹下流の哲学だよな。

伊藤 ええ。だけどいまのお話だと、ずっと一緒に国対をやつていて、いやこいつだけは許せないということですね（笑い）。

海部 それは、あれのやつた一挙手一投足がみんな基本ルールに反していますからね。もうちよつとここでは――。

伊藤 じゃあ、竹さんは許せたんだ。

海部 うん。竹さんはそれだけ大人物だったんだ。腹が大きい。僕はやはりそうはいかなあ。自分で納得しないと。

■自民党離党と首班指名選挙3（決断）

伊藤 それで、これは勝ち目があると「思われましたか」。

海部 いや、それを言うと、みんなは、そんなことはないだろうと言ってくれるも、勝ち目があるうがなかるうが、やろうということだ。伊藤 やつて勝とう、ということですか。

海部 いや、勝てたらありがたいという気持ちは、それはあつたかもしれない。ないと言つたら嘘になるだろうと思う。

伊藤 それはそうですよ。必ず負ける戦争をするはずはないと僕は思う。

海部 しかし、あのときはどう考えても準備期間もないし、事前にも、私が納得するような多数派工作も何もしていませんよ。ですから僕は、三木さんがやつたように一軒一軒電話したり、一軒一軒

訪ねたりして票読みをやつて、というようなことはしていませんわ、全然。

伊藤 そういう役割は誰がやつたんですか。

海部 まあ、いける、いけるといつて、みんながいろいろ言つてきて――。

伊藤 小沢さんあたりがやつたんですかね。

海部 それは済んだことだから。結果がああいうことですからね。しかしあれでたくさん取つて当選したとしても、あのしこりは残つて、ギスギスして尾を引いたでしょうね。これはあとから考えた理屈ですけれどね。

楠 先生がお出になつたときには、自民党からほかに離党者がいましたか。そんなにいなかったですよ。

伊藤 先生についてあまりたくさんは出なかつたでしょう。

海部 誘わなかつたもの、誰も。

楠 つまり、誘いもされなかつたんですか。

海部 誘わなかつたもの、誰も。はっきりしておるのは、今津

「寛」と野呂「昭彦」、この二人が来て、「私たちは離党しますから」と言つた。「まあまあ、そう短気を起こすなよ」と言つたんだけれども、あれらは離党するという。それならばと言つて、見殺しにはできんなあ。そのほかにも離党すると言つておつたのが野田毅とか保岡興治とか、前から政治改革議員連盟におつた幹部たちだ。そのほかにも、やめる、やめると言つた人がおられますよ。けれどもそういう人を誘つて出て行つたつて、心底こころを一にして行動できるかどうかよくわからんというところもあつて、あのときは誘わなかつた。

楠 自民党議員の立場になれば、社会党をくつつければ確実に政権に戻れるということが見えてきたときですから、それでも立場や原則に殉じるか、それとも政権のほうを重視するかと判断して、政権のほうを重視する人が多かつた結果がこれだったんじゃないか、と私は思うんですが。

伊藤 そういふものですかね。

海部 結局そういうことじゃないですか。選挙の時に、また反対候補を立てられたり、意地悪されたりしたら、それを押しつけ押し切つてまで……。だから、あのとき一緒に行動できた連中は逆に言う選挙に自信がある人だ、という気がしますね。

伊藤 そうすると、やはりこの段階になると自民党は少しづつ固まつてきていたということですか。まだ内部混乱の最中ですか。

海部 混乱の最中だったんだけど、変な話だが、「まあまあ、しかたがないな、今度の選挙を考えると」ということで、選挙を考えるとどうかという次元まで問題が降りてきて、次の選挙を考えると、結局、先ほどお話にあつたように県会議員や市会議員や足下やあるいは後援会の集票能力を持つている大ボスたちがどう言つておるか――。

伊藤 最後に自分で決断するときには、やはりそれを考えないといけないということですね。

海部 結局、みんなそうじゃないですか。だから僕は、変な話だけど、日頃からいろいろな話をして、「これが国のためにならんと思つた時は、僕は一人で立つても反対するから、そのときは支えてくれよ」ということを、この問題だと言わずにときどき話しておりました。その時みんなが、「ああいいわ。こつちは海部党だと思つてやつているんだから」と言つてくれた。

これから先を言うとな人の悪口になるけれど、中選挙区でしょう。だから、それまでほとんどのあいだ、同じ自由民主党の人に私はいじめられたり虐げられたりしたということを、みんな選挙民は見ておるわけです。だから「自民党なんか、きつ々嫌いだから、ええよ、先生、何をやつても」と言つてくれる。そういう人の気持ちや声をいつも聞いておつたことが、こちらの潜在心理の中にあつたんでしような。

だから自由民主党の総裁になつた瞬間に、そのことはもう全然なくなつてはいるはずであるし、できれば保守二党論ができたほうが、

社会党なんかには政権を取られるよりはよっぽどいいんだという気持ちがあつたことも間違いない。それよりも何よりも、あの社会党というのは何でもかんでも反対の社会党で、いったいその馬の足になるのか、少なくとも国民の前に立つて話ができる立場がなくなるじゃないか、という思いのほうが強かつたんです。

伊藤 説明ができない、ということですね。

海部 はい。街頭演説でも説明ができない。その代わり、僕がこういう立場になつたときは、有権者みんなに説明して歩く。そして「皆さん、賛成の人はここへ残つて拍手してください」とやつた。

伊藤 羽田内閣が倒れたときは、総辞職であつて選挙ではないんですね。

海部 はい。そうですね。

伊藤 このときは離合集散ですね。だから非常に政界が流動化して、どうにでも動けるという感じですね。

海部 このときもそうだけれども、前後に小沢一郎の影がちらちらしておるでしょう。

伊藤 でも、信頼ならないその小沢さんに、先生は乗つかつたんじゃないですか。

海部 結局はね。

伊藤 それは失敗だったのか成功だったのか、長いスパンで見ればちよつとわかりませんがね。このあと新進党ができる。その新進党が、さつき先生が少し触れられたように雑多な政党で、いまの民主党みたいなものですね。民主党もちよつとそれに似たところがあると思ひますが、新進党も一回選挙を経ているでしょう。

海部 経ていますよ。選挙に出て、そのとき私も全国遊説を先頭に立つてやりました。

伊藤 民主党も一回選挙の洗礼を受けていますから、すごく似ているんですね。

海部 似ている。それから票が増えたことも似ている。

伊藤 でもこの前の選挙のときに、新進党のことを思い出して新聞

に書いたところはほとんどなかったように思うんですね。不思議ですね。

海部 あのときは、票も増えたし、得票率からいっても第一党になったんですよ。だから、あの勢いで頑張れば、この次は夢が現実的なものになるなあという気がしたことも間違いなかったですね。票が増えたという結果が出たわけだもの。

伊藤 民主党だって、いまそう思っているんですから。

海部 そう。そう思っているでしょう。

伊藤 だけど、また壊れるかもしれない。

海部 気をつけるよとは言えない、言いたくてもね。

佐道 壊し屋さんが入っていますしね。

伊藤 似たような構造ですからね。

海部 そして、ちよつと育つてくるとゴン、ちよつと育つてくるとゴン、とやるから。

伊藤 あの人はやはりトップになりたいんですか。

海部 そう。本音はそうですよ。

伊藤 本音はそうだといっても、なりたいたいような顔ではないじゃないですか。この前だって、するということのにならなかったじゃないですか。

海部 いや、「あげなぶり」はいやだと思っているんじゃないですか。あげなぶり、上げてやられることだ。なつたつて、結局上がこれだけおつたのではないびられる。

伊藤 上がいないじゃないですか。

海部 いまはね。けれども数が増えてきたでしょう。それで小沢を警戒する人が増えてくると、そうじゃないですか。

伊藤 そのへんのことから、この次に新進党の話を中心にもう一回お願いします。どうもありがとうございます。

海部 はい、どうも。失礼しました。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 34 回

新進党 (1994~1997)

【2004年10月29日 (金) 15:00~17:10】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

[インタビュアー] (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

楠 精一郎 (東洋英和女学院大学教授)

佐道 明広 (中京大学助教授)

[記録、編集] 丹羽 清隆

(2004年10月29日)

1. 今回は新進党のを中心にお願いたします。1994年12月10日、新進党の結党大会が横浜市みなとみらい21「パシフィコ横浜」で開かれました。海部先生が党首、小沢一郎氏が幹事長という体制です。小沢氏は新党準備会の段階から中心となって新進党結成に取り組んでいたわけですが、先生が党首をお引き受けになった経緯、新進党結成に関する基本的考え方など願いたします。
2. 95年は新進党にとって飛躍の年でした。3月の青森県知事選では前新進党議員の木村守男が当選、4月には党推薦の候補が岩手県、三重県という重点知事選挙で勝利します。その後も市長選・市議選、区議会選挙など地方選挙で勝利を収め、7月の参議院選挙では改選議席19を倍増する40議席を獲得しました。しかも比例区では自民党を上回る1250万票を獲得しています。この選挙は先生にとっても印象の深いものと思いますが、この選挙戦について願いたします。
3. 7月の参議院選挙は勝利したわけですが、このころから離党者も出始め、小沢氏をめぐる確執も伝えられてきます。12月に党首選が行なわれたわけですが、先生は当初立候補に前向きと伝えられていました。立候補をおやめになった経緯について聞かせください。また、鳩山氏、船田氏も立候補の姿勢を見せていたものの結局出馬しませんでした。その点についても願いたします。
4. 党首選の結果は、小沢氏が羽田氏に112万票対56万票の大差で勝ちました。このときの党首選は、18歳以上で1000円払ったものも投票権を得る公開選挙が注目されていましたが、羽田氏が不在の間に党首選に関する様々なことが決められたり、投票用紙が捨てられて一般参加の投票者に確認がとれなくなるなど「不明朗な選挙」であったという指摘もあります。この選挙の後、小沢氏は党務・選対に渡辺恒三氏、二階俊博氏、西岡武夫氏などご自分に近い人で固めていくわけですが、この党首選の結果についてはどのようにお考えでしょうか。
5. 96年の通常国会の最大の焦点は住専問題でした。6850億円の税金を投入しようという政府・与党に国民は反発します。これに乗じて新進党は3月4日から25日まで国会で22日間ピケをはる戦術に出ましたが、これは意外に不評でした。この戦術をめぐる党内の議論、先生のお考えなど願いたします。
6. 96年9月27日衆議院が解散し、10月20日に総選挙がありました。この選挙で新進党は4議席減らして156議席となるなど、事実上敗北します。この選挙では比例区の順位決定が執行部の独断に近い形で行なわれるなど、執行部に対する強い不満・批判が聞かれました。その後、羽田氏と小沢氏の確執はさらに深くなり、結局12月26日に羽田氏は離党し「太陽党」を結成します。この間の経緯などについて願いたします。
7. 97年1月にはいと、「新進党基本政策に関する全議員会議」が開かれるなど、外交・安保に関する党の基本的な政策に関する議論が行われます。1月16日党基本問題調査会のメンバーが発表され、海部先生はその会長に就任されています。この時期の党の基本政策に関する考え方や、党基本問題調査会が作られて先生が会長に就任される経緯など願いたします。

8. 97年は新進党にとってスキャンダルにゆれた年でもあります。友部議員のオレンジ共済の出資法違反・詐欺罪問題が細川元総理及び党関係者にも金が流れたのではないかという問題になり、あわせて細川氏の軽井沢別荘地が他人の借金の担保になっていたりなど、スキャンダル続きという情勢になってしまいました。こういった状況を先生はどのようにご覧になっていたのでしょうか。
9. 上記のようにスキャンダルに党が揺れる中、小沢党首は自民党との連携をにらんだ「保保路線」を模索するようになったと伝えられています。党内には「保保路線」に批判的な人々もいたと伝えられていますが、小沢氏のこういった動きについて先生はどのように見ておられましたか。また、党内の状況はどうでしたか。
10. 上の質問に関連しますが、7月の東京都議選で議席ゼロという惨敗を喫し、党の崩壊過程は早まったように見えます。8月には反保保の鹿野道彦元総務庁長官が勉強会という名目で「改革会議」を発足させますし、公明党も当時の神崎総務会長が反保保を言明し、小沢氏の党運営に疑義を呈します。この後、鹿野氏は党首選に出馬ということになるのですが、このときの先生はどのような立場でいらっしやったのでしょうか。
11. 12月18日党首選が行なわれ、小沢氏が鹿野氏を230対182で破りました。再選された小沢氏は新しい党体制作りに乗り出し、旧公明グループや旧民社グループと相次いで会談するなど党の結束固めに動いたと伝えられています。しかし、小沢氏は突然解党に動き出し、27日には両院議員総会を開き解党を正式決定します。この一連の経緯についてお聞かせください。

■新進党1（結成と党首就任）

伊藤 今日、新進党のお話を中心にお話してください。

海部 はい。新進党のころのことを思い出さねばいかんから、こういうものを引つ張り出していろいろ見ておっただすけれども「新聞の切り抜き帳を開く」。

伊藤 まあ、記憶されている範囲でお話してください。一九九四（平成六）年に「新進党の」結成大会が開かれますね。

海部 十二月十日。

伊藤 そして海部先生が党首、小沢さんが幹事長ですね。これはだいたい小沢さんが、その前から準備かをずっと進めていたわけですね。海部先生が党首になるということは初めから予定されていたんですか。

海部 大きな流れは、もうそういうふうになっておっただすね。そして、自民党に対決できるような数と能力と政策を持てる党にならなければならぬ。当時を思い出せば、わがほうは自民党から出てきた人がほとんどですからね。民社党や公明党の一部とも横の連携はあったけれど、自民党に前おった人たちが中心になって、第二保守党と言われんように、改革「のための政策」をきちんと立てて、われわれが努力してやろうとしてできなかった改革をやろう。

宮澤内閣がスタートしたときに、宮澤さんは最初の記者会見などでは、「政治改革は」と言って、まあ言葉ではうまいこと、「敬意を表して、海部内閣が敷いた路線を走る」とか、「それができるよいうにする」とかおっしゃった。けれどもそのおっしゃった舌の根も乾かんうちから、組閣なんかを見ておると、われわれの時にこれが自民党が政治改革をやるといふ証になるんだ、これをやらなければ国民も納得しないだろう、と言っておった線が次々と外されていく。伊藤 それは人事のことですね。

海部 人事のことで、ロッキードやリクルートの関係者を次々と復活させたり、差し障りが出るかもしれないが、中曽根さんが地元の手続きは不明瞭なまま最高顧問に戻っていらつしやるというようなことと併せると、これは宮澤さんには何も期待できないなというような思いをみんなが持った。われわれはそのところは違うんだ、われわれのほうは本当の改革をやるんだ、ということを見せなければならぬ。その改革に協力してくれる人を中心にして、まず党の幹部をつくらうとしました。

伊藤 結局新進党は、自民・社会・さきがけの連立内閣に対抗する連合体ですね。だから考え方としてはかなり違う人たちも合流していますね。

海部 それはそうですね。

伊藤 でも、いまおっしゃったように、小沢さんを中心にした自民党脱党組がだいたいコアということですね。そのコアが、なぜ海部先生を党首にしようということになったわけですか。

海部 なぜということとは、結局それまでの自民党の置かれた苦しい立場を反省するとともに、あの苦しい立場の中でも世論調査の支持率は高かった。だから、これをみんな支えていかなければならぬという話し合いが裏で行なわれたんだろう。そういつた話は、言っただけは悪いけれども、集まるたびにみんなが、こうなっておると教えてくれる。だから頭ごなしに、「俺はいやだ」とか、「もう俺は受けられないよ」というようなことは、初めのうちはちよいしました。それが、もうイコール・ノーは言わない。それでなければ、せつかくのものが船出ししないじゃないか。そしていまはいなくなつたけれど、小沢辰男さんとか経験豊かな人たちがいて、例えば公明党の同じ世代で意見を交換できる。良識派と言われた石田幸四郎とか、民社党は誰だったか、やや小沢路線に批判的などころがあった。それから一・一路線のやり方は、いつも壊し屋じゃないかと「言っていた」。伊藤 その時から言われているわけですか。

海部 その時から言われているわけです。だからそれは、言っただけ

悪いが、もうちよつと先になつて足腰が固まつてからならいいけれども、再スタートするその時からやっておる。その証拠に、現にポロポロと離党する人が出てきたが、呼んで話を聞いてみると、「本当に海部さんがやってくれるならいいけれども、小沢「一郎」さんがやるならばちよつと自分についていけん」と言うような人もおつた。小沢辰男が「まあ海部、お前も年貢の納め時だと思つて、最後のお役に立つように、国のために頑張れよ。どうせこの前、あれで振つちやつたんだから」ということになつて、こちらも、もちろん政界がきちんときれいになればいい。それが自分の夢だから。

伊藤 やはりこういうときは、党首になつてくださうという要請は小沢さんからあるんですか。

海部 小沢さんからと言うよりも、小沢さんを取り巻いておつた人たちが、みんないろんなところに網を張つて情報を取つてきて、小沢「一郎」に対して「接着剤として今度一番まとまりやすいのはお前ではない。あんたはもつと——」と言つたわけだ。小沢辰男さんが一番そういつたことを言つたと思うんだ。

それからもう一つは、公明のほうは、「一・一ラインのいままで通りの線で突つ走るならば、ちよつとそれはいかんよ」というようなことだった。また都議会議員で藤井「富雄」さんという、国会にもえらい強い影響力を持った人がいて、何度か話し合つてみたけれども、「やりなさい。やつて救わなければ、また社会党に思うようにされてはかなわなさい」というような声があつた。

あの時、最終的に言つと、選挙のことを考えて生き残らなければならぬので、「くたびれたからいやだ」とか、「もうここでは離れたい」とか言つと、それは個人のわがままになる。それは選挙を一回きちんとやつて、接着剤の役を果たしてからそういうことを言うのならいいけれど、いまはせっかくなままとまつてきた機運で、また海部でまとめようということでも本会議の投票でもみんなが脱落なしで固まつたという裏を見ておると、やはりそれで選挙を戦わなければならぬという話でしたね。

伊藤 党首と幹事長の関係はなかなか難しいところがあると思われませんが、実務は幹事長になるんでしょうね。

海部 実務は幹事長になる。それから僕も、小沢幹事長にして海部総裁でやつたことも自民党時代にもあつた。だから、知つてゐるんだ。

■新進党2（九五年地方選・参院選での躍進）

伊藤 海部党首・小沢幹事長ということでスタートなさいまして、その関係は前もそううまくいつたわけではなかつたと思ひますが、とてもうまくいつている時は、そうぎくしゃくすることはないわけですね。次の年「一九九五年」に入つてすぐ地方選挙があつて、バカスカ、バカスカ、とにかく連勝ですね。

海部 みんな勝つちやつたんだ。当初の新進党には期待も集まつてきた。そして知事選挙も、愛知の選挙が初めだったんですね。青森の知事選、三重の知事選、その順番はどつちが先だったかな。青森が先ですか。

佐道 三月が青森、四月が三重です。

海部 あのころはバカスカ勝てる。そのため一人ひとり議員が行くわけですが、それはお涙演説の材料に使えるわけです。「本当ならば、この木村「守男」君が知事の候補者として立候補されたら、わが党としては困る。ところが、こんなに優秀なピカピカのタマを、皆さんが知事選挙に担ぐとおっしゃつてくださるなら、そういうことを怖れてはいかん。要請には応えなければならぬ。出す限りは皆さんもうんと応援してくださいよ」と言つて出した。

それから三重県の時なんかはお隣ですからね。「皆さんもご承知のように、仲がいいけれど、身を切る思いだ」というようなことを言いながら、やつた。北川正恭ですよ。「これもせっかく「国会に」当選して、わが党の中堅幹部としてこれから育つてもらふ人な

のに、皆さんが知事によこせとおっしゃるから」と言つて応援した。伊藤 そうすると、こういう地方選挙もかなりたくさん党首として応援演説に行かれたわけですね。

海部 はい、行きました。小沢もどんどん一緒に行きました。

佐道 まだ党は前年の十二月に結党大会をしたばかりで、いわゆる地方支部とかの組織は、まだ全然ないわけですよ。

海部 はい、ないんです。だから個人後援会の類がある人ばかりだし、青森も三重も、私も何度か応援に行つているところですから、その人個人の人脈で、顔も知つていきますよ。だから青森へ行けば、北村正任といういまの毎日新聞の社長の親父「北村正哉」が副知事をやつておつて、それが知事に出るときも街頭演説を手伝つた。

それから三木派の一人の国会議員が出る時「一九六四年、八戸」は、「ちよつと助けて来い」と言われて三木さんの代わりに行つた。それが熊谷「義雄」という代議士です。だから、その熊谷代議士の後援会とか木村知事の後援会というのはみんな顔見知りばかりだから、海部さんが今度新進党という党の党首になつたというので、まあ動員だけは協力してくれる。けれど結果を見ると、動員だけではなかつた。みんな投票もしてくれたわけですよ。おやおやと思つて、ちよつと頬をひねつた。

佐道 従来、自民党の中ですと、組織で関連団体とかにローラー作戦をかけて動員する、ということをやつていふと思ふんですが、組織が全くできていない新進党でこういうふうになるということは、本当に個人のコネクションを中心に動いたということですか。

海部 それと街頭演説ですよ。とにかく街頭演説、街頭で訴えるという手を使つてやりましたね。

伊藤 新聞も、客観的には相当応援的な記事を書いていきますね。

海部 まあ好意的、応援的な記事を書いてくれたと思ひます。

伊藤 この勢いで、その年の七月の参議院選挙で、また勝つたわけですね。

海部 いや、あれは本当に結果が出ました。たしか一二五〇万票。

それで自民党が一〇〇万票台ですからね。

伊藤 このあいだ「二〇〇四年七月の参院選」の民主党と自民党の選挙と同じですよ。

海部 そう、非常に似ているんだ。それから獲得票数の差も非常に似ているんです。その時に、やはりここで油断してはいかんし、「勝つて兜の緒を締めろ」という言葉はこのためにあるんだと言つてみんな戒め合つた。あまり初めから楽に勝てると思わなかつたのに、票だけ見れば比較第一党になつたわけですから、あれは大変な励みになりました。

伊藤 それで、少しずつは県連とかそういうものができていくんですか。

海部 徐々にできていきました。なかなか難しいですよ、つくり上げるのは。

伊藤 難しいでしょう。それぞれまたちがつた出自の組織ですからね。

佐道 それは、例えば重点地域をつくつて広げていく、というようなことですか。

海部 いや、もう重点地域も非重点地域もないわ。行けるところ、取っ掛かりのあるところはみんな重点地域だ。そして動員してくれた人がおれば、その人をその地区の支部の支部長にしたりして、組織づくりをやりながらの選挙の応援、選挙演説だ。

伊藤 選挙が、同時に組織づくりにもなるわけですね。

海部 なります。大変な組織づくりになりました。そして新聞なんか好意的に書いてくれて、何か人の集まりがよさそうだと、ひよつとしたら行けそうだと。現に地元のアノ知事の場合でも勝つた、ということだ。だから伝え聞いたところでは、よしそれに乗つてやればひよつとしたら勝てるかもしれないという万年次点候補も出てくる。そういうのは「猫も杓子も」という言葉は悪いけれど、手を挙げて来たのはなんでも抱いてかかえてやろう。

ただ、あまり無駄金を使うほど金はないですからね。候補者選び

のチェックの仕方が悪かったので、次の参議院選挙の時にはえらいババをつかんでしまった。あの責任もやはり党首にあると言われれば、それは表見代理ですからね。言い訳もしたかったけれども、面接をやったのはたった二回だけです。二回の面接で、そんな腹の中までわからない。だから謙虚に謝りました、「すまなかつた」といつて。

伊藤 これは、公認料は出せたわけですか。

海部 公認料というほどのものは出せませんが、応援に行つたときに、党としての陣中見舞いだと言つて、百万、二百万、三百万、そんな単位で出しましたね。そんなにびつくりするようなお金はとてもしませんですよ。

伊藤 党の資金というものがだいぶ必要になるわけでしょう。本部を維持しなければならぬし、選挙もやらなければならぬ。

海部 そうです。

伊藤 資金集めというのは、やはり幹事長の仕事ですか。

海部 結局、幹事長の仕事になつて、「それはお任せください。代表は街頭演説で国民を束ねて、やってください」と言う。だから幹事長は、「党首が応援演説に」行くときに「ついて来い」と言う。ついてきますけれども、街頭演説なんかはやらない。「やつたら票が減るからいかん」とか言つて、業界とか団体とか会議所とか、人を集めたところへ行つて頭を下げて「金がないから出してくれ。そう詰めとつてはいけませんよ。ここは勝つんですから、強いですから」と言つて、ほうぼうでやつたことを思い出しますね。

佐道 組織づくりとかそういうことは、基本的に幹事長の仕事、ということになるわけですか。

海部 だいたい政党というのはそういうものです。自民党のころも、そして新進党になつたときも、それはそれでやらせました。ただ、あまり目を離しておると、頭越しに何をやらされるかわからん。だから二、三回、小沢幹事長には、「それは具合が悪いじゃないか」と、呼んでいろいろ厳しく言つたこともあるんです。

海部内閣の衆議院の選挙の時に、金がないからと言つて、財界を集めて割り当てをやつた。あれで評判がうんと悪くなつて、新聞にも一時スツパ抜かれて書かれたことがあつた。呼んで聞いたら、「はあ、この際だからというので、少し集めんといかんから言つたけれど、このごろ出しませんよ」とか言う。これはここだけの話ですが、小沢が身につけておつたのは、田中角栄のこれ「やり方」です。すから。「いいか、おまえ、そんなことを言つたら、この次はあれはしねえぞ」というようなことを言つて、ときどきやつたらしいですけれどもね。けれどもそれはそれ、これはこれ。

新進党になつてからは、そういうことは努めてやらないようにしてきたつもりであります。それは政治改革をやるとあれだけ偉そうにして村山がああいう政権をつくつて掌を返すように口だけで自民党とくつつく。

佐道 村山政権ですからね。

海部 村山は許せんという強い思いがありますからね。それを言うのと、「なるほどな、そうですな」と言つてくれる人もおつたですね。特に田舎へ行くと、「社会党では駄目じゃないですか」と言う。だから僕はそのころ、社会党と共産党のウイスキーの水割り論というのをやつたが、そうすると田舎の人はよくわかるんですよ。「どっちが水でどっちがウイスキーか見分けてから飲まないといかん。これは真水だと思つて飲んでおると、口当たりはいいけれども、ウイスキーを混ぜられると真つ赤になる。どっちがどつちだ。共産党に、世を忍ぶ仮の姿を与えるのが水割り論だ。だから水だけになつたら、くその役にも立たん」。

というのと、怒られるんだよな。終わりがろはそれをやめました。というのは、農村地帯であまりそれを言つと、「きれいな水が要らんと言つたら、農作業にも困るじゃないか、人間の生存もできないではないか」というようなことにもなる。それは確かにそうだ。ということ、それはもういつまでもやりませんでした。一時はそ

それが非常に受けて、効いたことも事実です。

だから、「わかりやすくきれいに」というのは、お金の面だけではありません。言葉でも、街頭演説で目の前でしゃべっていけば一番わかりやすいわけです。声だけ聞こえるとか、活字だけ読んでいるというのではいけません。顔を見ながらやって、終わったら中へ入っていつて握手する。難しい顔をしていたら、「おとつあん、どうしたんじや。何か意見があつたら聞かせてくれよ」と言うのと、いろいろ心が通うようになる。

ずっと新進党の初めのころは、そんな選挙戦をやったものです。それに、電通の若手の女性プロデューサーが集まって考えてくれたのが、これです。「新進党結党大会の新聞記事の写真を示す」。これはみんなの印象に残っているでしょう。大きな垂れ幕が舞台からサーツと出てきた。それからこの結党大会の時に、来賓の挨拶をやってもらったら加藤シヅエさんという人が来た。車椅子でも、しっかりとしゃべってくれるんだ。そして「このあいだまでは小沢さんは見ておると、みんなに『あなたはワンマン過ぎる』とか、『協調性がない』とか言われておった。政治的な能力も才能も頭脳もあるのに惜しいなと思っておったが、今度はあなたは幹事長だ。しっかりとやってください。海部さんもいままでのようなあれで、ひとつしつかりやってくれ」といろいろ言ってくれる。

それで僕は、これは上がっていかねばならんと思って、壇上へ駆け上がって行ってその場で握手をして、「ありがとうございました。おっしゃった通りにやります」と言って、車椅子を押しておった人をよけて、おれが押して行つた。そうしたら、そこも放送してくれたので、プラスになったんだ。

佐道 それはもともとの演出にはなかったんですね。

海部 いや、もともとの演出じゃあない。下「の座席」において、「加藤さんの演説が」済んだところで、これはと思つて「壇上に」行つた。瞬間の政治的な閃きで、いいと思つたことは実際やったほうがいいんですよ。

伊藤 それが筋書きにあつたら、そんなにスムーズにはいかないでしょう（笑い）。

海部 いきませんよ。それは筋書きなしです。ただ、経験は一回あつた。文化勲章授与式の時に森繁久弥が、足が弱くていかんのだけれども、宮内庁が車椅子はいけませんと抜かしたんだ。そんなこと言わずに持つてきて用意しろと言つて、車椅子で行つた。それで森繁さんを支えてやつたら、「いや、よかつた」という評価があつた。今後こういうことがあつたら、こういう経験は活かさなければいかなと思つておつたことを、なんの脈絡もなくそこでパツと思ひ出して、もう行動に移つておつた、ということですか（笑い）。

伊藤 いや、海部さんは行動派だな（笑い）。

海部 本当に万雷の拍手になりましたよ。

■新進党3（明日の内閣）

佐道 結党から選挙に至るまでのところでちよつと質問に入れられたことがあつたんですが、選挙の候補を選ぶときに新しい候補を公募するというのをやっていますね。それから、いまは民主党なんかもやっています。明日の内閣」という制度をお採りになっています。また、先生ご自身が党首ということで、代表質問ではなくて施政方針演説を翌年の国会でやりになっています。そういうことは、従来と全く違う党だ、全く違うやり方だ、ということが始められたと思うんですが、これは、みんながそういうものがないというところで議論がまとまつたわけですか。

海部 ずっと前に話したように、選挙法の改正の問題の時に、イギリスの議会へ人を派遣したり、僕自身も行つたり、いろいろやってきました。そんなとき、イギリスに「影の内閣（シャドウ・キャビネット）」というのがあるということを勉強してきました。「なぜ影の内閣と言うんだ」と聞いたたら、「いつの日か政権が替わつた時

に、なったばかりですからとか、不慣れですからとか、というようなことではいかん。それまでにちゃんと準備ができていますよ、おれのほうがこれだけやっているんだ、ということを示すんだ」と言われたんです。イギリスの議会でえらい勉強をさせられて、ほらを吹かれたことがあったんです。

それがきわめて染みついておったのと、三木さんがやはりそういう考えをもとにしていた。「若い政治家は在野の時代に、もし自分が官に付いたら何をしたいか、どうしたいかを考えるべきだ」とさうざん言われたことがある。だから、僕らもそういう立場で、野党として見るときは、与党のことを常に考えてみたほうがいいんだ。なるほど、そうすると、どこまでが反対していいのか、どこまで協力したらいのかわかる。国のため、という漠然とした大目標だけはあるわけですから、国のためというところでやって来いと言うためには、やはり野党に常々勉強してもらわなければいかん。そういうことを、与野党の間柄ということで政治改革の議論をした時にも考えたいです。いまでもそれはありますけれどね。

だから「影の内閣」をつくって、絶えずそのときどきの問題に取り組む。それから施政方針演説が終わったら、野党の「影の内閣」の首相が登壇して、自分だったらこう思うけれども、あなたの話のここはこうじゃないか、支離滅裂じゃないか、というような政策的な詰めを突くことができるような演説をやるよ、それは残るよ、ということになった。まだまだ全然経験も何もなかったけれども、よし、この際使うべきだ、ということになった。だからあれは反対討論でも何でもありません。所信表明に対する逆提案で、こちらの党の所信表明をやったわけですね。あの時はたしか、日本経済新聞と読売新聞が大変いい社説を書いてくれました。ですから、そういうことを引き続いてやっていかなければならぬということですね。

伊藤 実際にそのシャドウ・キャビネットをつくったわけですか。

海部 つくったんです、実際。

伊藤 それは人選が大変だったでしょう。

海部 人選ですか。それは幸いなことに、自民党から来ておる連中は、政務次官やら委員長の経験者が多いですからね。何を経験しているかをまず見る。それから公明党も民社も大事にしなければならぬものだからね。そうでしょう。そういうときはしようがないから、小沢辰男に頼んで、「これはどういう政策が向くか探ってきてくれ」と言って探ってもらった。そして呼び出して会った。

といて、赤坂の料亭で飯を食うわけにはいきませんからね。あれだけ毎日、テレビや新聞が出ておるから。だからホテルオータニの地下のヘルスクラブ、ゴルフデンスパーといったか、オークラよりもいいやつで、そこに小部屋があるんですが、軽食ぐらいは運んで来るわけです。それからウイスキーも運んで来る。そこをとっておいて、そこへ来てもらっているいろいろな話を聞く。

だから、石田幸四郎なんというのは総務長官ができるぞ、自分もそう思っている、というように、みんなそれぞれ一芸を持っているわけです。それから妙な話だけれども、市川雄一だけは推薦する声が多かったんだなあ。あれは小沢「一郎」と近すぎると思って、みんな警戒したのか。それから米沢隆、この人は人のええ、人間ええ太郎ですから、とにかく外してはいかん。副党首でもなんでも、えらくして奉っておけばいい人だ。

そして、当時はまだ労働組合のほうも、旧民社系が集まってなんとかグループをつくっておったんです。それも「党内に党中党をつくってはいかんけれども、せいぜい『友の会』ぐらいのことで集まって旧交を暖めていくことはええだろう」と言うから、「それはええから。その代わり、さあとなつて、もつともつと飛躍しなければならぬときには発展的解消でやってくれなければいかんよ」というようなことを話したり、相当そこらのところは詰めました。

あと一番困ったのは、羽田孜をどう処遇するかということだった。結局、最後は副党首ということにして、やってもらったけれども、なかなか初めはウンと言わなかったわけだ。けれども、「はあちゃん、お前がつき合わなければ、この党は壊れちゃうよ」ということ

を言つて、彼が入つてきて、それで四頭立ての馬車がようやくできたわけだ。

伊藤 四頭というのはどういう意味ですか。

海部 四頭立てということは、党首と三人の副党首です。

伊藤 じゃあ副党首は、それぞれのグループを代表するわけですか。

海部 それぞれの出身母体。公明と民社と、自民党の中の早めに分かれた組。

伊藤 新生党をつくった組ですね。

海部 そうです。そしてそれは、僕らは陰では「小沢グループ」と評しておつたんです。自民党の小沢組、自民党のそれ以外に残つたわれわれ。小沢とか鹿野「道彦」は出ていったのが早かつた。それから辰男も早めに出ていったほうだ。出ていっても、あの連中とは、その後もしよっちゅう会つたり話したりしてました。そこに西岡「武夫」もしよっちゅう来ていました。

佐道 細川「護熙」さんはどうだつたんですか。

海部 細川は、総理大臣経験者ということで、新党をつくらうといふときは、それぞれみんなシャツポになつてもらわなければならぬ。それで、羽田、細川、海部の三人で集まつて、今度つくる政党的な基本的な姿、基本的な綱領はどうするかというふうなことにいろいろいろな話をしたんです。だから、政策の中身詰めとは違つた世間向けのイメージですね。そのほうの会合もいぶん何回もやりました。そこには小沢辰男さんは入つていないし、小沢一郎もいろいろな雰囲気があつて、みんなそれぞれちよつとずつ差異があつたものだから、話がきちんと決まるまでは表へ出さないで、絶対あれ「内輪」でやつていこうということだつた。その初めの三頭立てのトロイカ方式は、結党までうまくいつたんです。

佐道 最後の段階になりますと、細川さんいなくなり、羽田さんいなくなり、結党の時は、羽田・小沢関係というのはどうだつたんですか。

海部 あの二人の関係はよくわからんけれど、長い曰く因縁がある。

田中角栄さんを巡つて寵愛合戦という悪いけれど、どっちが入り込んで長くいろいろなことを言つたりやつたりできるか。それから金丸さんという人がおつて、金丸さんは問答無用で小沢一郎なんだ。羽田なんかに言わせれば、それはちよつと面白くないわけだな。面と向かつていろいろなこと文句を言いに行く。

金丸さんがいまの消費税の委員長をやつたときに、僕らはみんな呼ばれて理事で固めて、強行採決の時だけ、おれは「委員長に」代わらされた。けれども、そのちよつと前に金銭問題で、リクルートの江副「浩正」が問題になつて、江副が身を隠すために長野県へ逃げておつた。「これは相当に近いなあ」なんて言うから何の話かと思つたら、「羽田に頼んで長野県の土地勘を得て、羽田にどこかに匿つてもらつているんじゃないか」と金丸さんは言つておつたんだ。羽田に「お前、長野県に隠しておるのか」と言つと、「いや、そうじゃない。全然そんなこと違ふよ」と言つておつたけれどね。

■新進党4（九五年党首選、小沢vs羽田）

伊藤 「選挙で」勝つて勢いがついて、順調に物事が進んで、ちよつと一年経つて党首選があるという段階までに少しガタガタし始めたわけですか。

海部 そうです。

伊藤 どこ震源地なんですか。

海部 どこが震源地かと言われると曰く言い難いこともいろいろありますが、結局、太陽光線とか水が行き届かない地面と、それが潤沢に行つておる地面とでは作物の出来が違うように、党に対する愛情とか愛着もだんだん変わつてくる。私のところへは、その両方の意見がピンピン入つてくるわけです。ところが、それを中へ入つて調整しておるといふような暇も余裕もなかつたものだから。

伊藤 党首選の時に、海部先生はどうなさるつもりだつたんですか。

海部 僕は正直言つて、そういつまでもいつまでも新進党の党首をやつていようという気はなかったので、適当なところで――。初めから、本当は替わつたほうがいいと思つた時期もあつたぐらいです。それから、そうしたら、「初めからそんなことを言い出されたのでは、せっかく求心力をもつてまとめて東ねていくことができるやつが、いけなくなつちやうから」と言われた。

それからもう一つは、あのとき、正直言つて、これで選挙をやつて勝てばまた保守二大政時代がつくれるなどという素朴な夢もあつたものだから、それに対して全国遊説を全力を挙げてやつたんです。しかしあれだけ出身母体や過去の生活態度の違いで、しがらみやしこりが残つておつたのでは、とても一筋縄ではいかないという思いも、だんだん出てきた。

伊藤 組織統合というのはそういうものだろうと思ひますけれどもね。

海部 政治改革ができないならば、しようがないけれど。

伊藤 でもわずか一年で、党首を辞めようか、ということになつたわけですか。

海部 ええ、そうです。その点は、なかなかこちらはあつさりしておるといふか、単純といふか。

伊藤 でも、どういう流れなんですか。先ほどいろいろなグループがあると言われましたが、例えば鳩山さんなんかは、どこにどうやつていたわけですか。

海部 鳩山さんは、ある意味で大変好意的であつた時期が多いし、それから小沢辰男君が鳩山の後見人みたいなつもりで、いろいろ分担してきた分野もあつたんです。それで、先ほどちよつと話した陰の話の時には、小沢辰男さんとはよく話が合うんだ。それは上が一緒だから。しかしどうして、そういうところまで鳩山兄弟の動きというのは――。まあ、弟「邦夫」が自民党へ戻りたくなつたのは初めからわかつておることでした。けれども、兄貴のほうは、ああいう頑ななところがあるし。

伊藤 由紀夫さんのほうですね。やはり鳩山さんのグループみたいなものもあつたんですか。

海部 あつたんです。それは自民党の中でも鳩山さん中心でやつてきたグループもあるし、小沢辰男さんのグループもあるし、小沢一郎さんが抑えておつた金丸直系と言われるようなグループもおる。伊藤 船田「元」さんは？

海部 船田さんは、ここまで言つちやあ悪いかもしれんが、あのころはまだ一人一派ではなかつたでしょう。鳩山と組んで「鳩船連合」とか、いろいろ言つた時期がありましたけれどもね。

伊藤 十二月に党首選が行なわれるということになつて、候補者としていろいろな人が浮かんたり消えたり、いろいろあつたと思ひますが、最終的には、先生はかなり早い段階で降りちやつたんですか。海部 降りました。

佐道 このあいだの民主党の党首選挙もそうですが、選挙で大勝したあとです。そうすると、選挙に勝つたんだからこの党首で、というふうの流れっていくのが通常で、このあいだも小沢さんがごちやごちや言つたから、それはおかしいんじゃないかという話になりましたが、今回も海部先生の下で、全く新しい組織で、地方選挙から参議院選挙で大勝利となると、この勢いでとにかく今回の党首選は先延ばしにして、とか、あるいは今回はしやんしやんにして、というふうになるのが普通かなと思つたんですが。

海部 まあ普通の常識通りいかなんところが複雑なところでした。ね。

伊藤 そうなる可能性も、ないわけではなかつたでしょうね。

海部 はい、それは。

伊藤 まあ、一般的に考えればね。だから僕らも不思議だなあと思つたんです。

海部 いや、ああいう時に後世の批判というか、世の歴史家の批判というものを常に考えると、あれ以上やつておつて、せっかくの新進党がもつと傷ついてもつと亀裂が生じたら大変なことになる、という思ひがあつた。

だから、「党大会で二度目の党首に推薦するから、おれも出ないから、心を入れ替えてみんなの意見を聞いてやれよ」と小沢辰男あたりが厳しく「小沢一郎に」言つて、「はい、そうします」と言つた時には、もう公明党とのあいだでこれ「確執」が始まっていたんだね。だから、藤井さんの話を聞いてみると、「小沢を替えてくれなければつき合つていけない」ということだった。

伊藤 でも、最終的に選挙は、小沢さんと羽田さんという対決になるわけですね。そうすると、いろいろなグループがどっちかについてたということですか。

海部 いろいろなグループがどっちについてと言われても、あの時は――。

伊藤 これは変な選挙ですよ。

海部 変な選挙です。党員を集めて。

伊藤 党費を千円払えばいいという、あまり聞いたことのないような選挙ですね。

海部 あれは田中派がお得意とする選挙じゃないですか。田中角栄さんが幹事長のところに編み出した方法は、一般の人から一口いくらの軽い会費を集めて、そして全部を有権者にして投票させたらどうだという方法で、発想したのは田中さんじゃないですか。それをやるためには、十分な資金と十分な準備期間と、動じない陣営を固めて進めていかなければ恥の上塗りをするだけだ、といったことをいろいろ考えたことも事実です。

佐道 一般選挙というのは、たしかに話題にはなりましたね。

伊藤 両方合わせて一七〇万票ぐらいですか。

佐道 そうですね。一一二万対五六万ですから。

伊藤 すごい投票ですね。

海部 党勢拡張には、あのやり方はみんなやればいいと思うんですがね。

伊藤 このとき小沢さんは、自分がとにかく党首になって、大いにやろうということだったわけでしょう。

海部 それがなければ出ないです。リスクを負担してまで――。

伊藤 海部先生は、羽田さんと小沢さんのどちら側についていたんですか。これは厄介な話じゃないですか。

海部 それは「語るには」時期がちょっとまだ早いなあ。

伊藤 そうですか。一般的にはあまり言われていないんですか。どのグループが誰を推したというようなことは新聞では報道されませんでしたか。

海部 ここからこちらが羽田の応援、とかなんとかいうのは「報道」されなかつたよね。これは「語るとしても」もうちょっと経つてからだ。

伊藤 党首選は一九九五（平成七）年の暮れですね。羽田さんは、小沢さんと対抗してやつていこう、勝てると思つていたんですか。

海部 もう、そんなころからそうだったですね。

伊藤 変な話ですが、羽田さんと海部先生はどういう関係になるんですか。もともと派閥は全然違つて、接点は――。

海部 九段の議員宿舎の部屋が近かつたから、ちよいちよい会つておつた。それから音楽文化同好会というのがあつて、オペラとかなかに行くと、むこうも二人で来ておる、こつちも二人で行つておる。それで家族同士も「やあ、やあ」と仲良くなつておる。腹が減ると真夜中に電話も来て、一緒になつて何か残り物を食べるとかというような人間的なつき合ひはあつた。ただ金権政治に対する批判で、「君も田中角さんの直系の弟子でありながら何を言つてるんだ。その反省から始めんと説得力はないぞ」というようなことを言つたことも覚えております。それから、また橋本「龍太郎」とも性格や態度が全然違ふんです。だから、小沢とも合うはずがない。奥深いところでは絶えず両方とも意識し合ひ、警戒し合ひ、対立し合つておつたんじゃないですか。

伊藤 結局、この二人は、元の竹下派同士の戦いということになりますね。

海部 そうですよ。

伊藤 そうすると、ほかのいろいろなグループが、結局その二人のどちらかに投票するという事になったわけですね。

海部 ですから、それぞれのグループが、あまり出身母体や過去のしがらみに従って党中党をつくるようなことはするなと言って、民社クラブも公明のほうも、いちおう形の上ではなくなつて、定期的に集まつておつた集まりもやらないようになって、こういうさわやかな選挙をやらなければと言って、やつたんですが。

伊藤 あまりさわやかではなかった。

海部 さわやかでないけれども、しようがないわな、あれは。そして、やはり起死回生の願いをかけておつたのは、公明党だ。この場合、小沢と市川が組んだ一・一ラインの作戦でしょうけれども、主流にのし上がつて、いろいろ問答無用、なしだというふうな地位を確保しなかったのが、確保されなかったわけです。党内で絶対安定多数にならなかった。

伊藤 でも得票を見る限りは、断然小沢有利ですね。

海部 それは一般の票の集め方だ。

伊藤 じゃあ、議員の票ではわからないわけですね。

海部 議員の中ではわかりません。わからないから、ひよつとしたらということ、羽田なんかもその気になつて頑張つておつたんだと思う。

佐道 羽田さんは、この党首選のやり方が自分が知らないところで決められてしまったとか、選挙が終わつて一般参加の投票者について確認しようにも、名前がきちんとされてないし、一部は捨てられてしまったとか、そういう批判をあつておられた。

海部 おれがおらんところで知らんうちに決まっちゃつたというのは、負け犬の遠吠えみたいなものだ。ああいう場になつて、党首選挙を争っている最中の党首としては、誰かちやんと出て物を言い、待ったをかける係も置いていなければ。それから、おれのおらんところで決まっちゃつたというのは、それはちよつと見苦しい聞き苦しい言い訳だという感じがしますね。

伊藤 まあ、これがきつかけで最終的には、羽田さんが出て行くという事になるわけですね。

海部 体質的に、もう小沢とは共に戦えないということになつたんですね、最後は。それは、その選挙戦の最中のことについて、くだくだとたくさん理由を持っていきますからね。あれに言わせると。

佐道 いままでのしがらみというか軋轢が、これでもう決定的になつてしまつたという形なんですかね。

海部 そうでしようね。

伊藤 結果として、党内で羽田派は干されちゃうということになるわけでしょう。

海部 そうでしようね。

■新進党5（住専問題に対するピケ戦術）

伊藤 そして、その翌年「一九九六年」の通常国会では、住専問題が大問題になりますね。新進党としては、これに反対して国会でピケを張るといふ戦術に出るわけですが、これは小沢さんのやり方なんですか。

海部 誰が一番あれかなあ。結局は小沢的だと思えますけれどね。

しかしあの時は、僕らもそうだったが、みんなが、税金をそんな私企業の失敗の穴埋めに使うのはけしからんじゃないか、と思つた。自己責任の原則ということを言うならば、商売を始めた企業が失敗したら、責任をとつて、分散して法の手続きに従つて自分のものを出すべきであつて、こうなつたから少し国が面倒を見てくれと言つてはいかん。そして私たちが体を張つても世論は認めてくれる、という判断に立つたんです。

ところが、いまにして思えば、世論の支持があつたのは一週間、二週間、三週間目まででした。三週間過ぎて、四週間目に入つたころから、ぼつぼつ、「もういい加減にやめんか、座り込みというの

はみつともないよ」と言われ始めた。テレビが顔を映すわけだから、「あんなみつともないことをやっておると、もうこの次は応援できない」とか、聞くに耐えんような電話攻撃をみんな受けるわけです。そうすると、そうかなあという動揺も入ってくる。そして三週間ぐらいやったところで、結局あの座り込みは駄目になりました。それまでは応援もあつたし、差し入れもあつて、これでいけば存在感が出て残ると思つてみんなやつただけけれど……。それで、全部集まつて「撃ち方やめ」。

ただ内容的には、われわれの言つたことは間違ひなかつたんだよ。そして大蔵大臣が委員会へ入れんようにピケを張つたのも、考えてみれば、古い昔の社会党の左派がやつた戦術を新しい保守に代わる政党がやるうというんだから、やはりちよつと厳しいことになつたな。けれどもあのころの新聞論調も、やはり住専の六八五〇億円でしたか、あれは無駄遣いだという説をみんな支持してくれた。そして住専の経営者はもつと自らの責任を取れ、情報公開しろ、情報公開して責任を取れということがマスコミの大きな流れになつてきて、「天はわれに利ある」というような気持ちになつて頑張つたんですが――。

伊藤 そういう戦術をやるときに、最初はどこで撃ち方やめにするか、どういう形で決着をするかということの見通しなしに突っ込んだら泥沼になりますよね。

海部 そうですね。だから、結局向こうが「まいつた」と言つて折れるだろうと思つた。それは、こちらが苦しいときは向こうも苦しいんだ、ということだ。内部の裏話をいま思えば、ひそひそとやつておつたパイプがどこかにあつたはずですが。

伊藤 あつたはずですよ。

海部 もうちよつと頑張れという。もうちよつと頑張れと言われるものだから、いい気になつて頑張つたわけです。頑張つておれば必ずあれになるから。ただ、いまここで何を決めても表に出るから決めるわけにはいかんけれど、頑張つておれば道はおのずから開ける

んだというような話を、小沢辰男君の線もどこから仕入れて持つてくるし。

伊藤 自社さ連立の側からのアプローチはなかつたんですか。

海部 もうそろそろやめよう、「撃ち方やめ」の話は、二週間目、三週間目はまだなかつたんです。議運・国対クラスがやっていたかもしれないけれど。

伊藤 それはやらないうちにはいかないでしょう。

海部 けれども僕らもそのころは、表で「撃て」とやっているうちには、「撃ち方やめ」なんて時期を間違えて言つたら、本当に烏合の衆になつてしましますからね。これはとことんやらねばならん。そのころ入つてきたニュースが「あと四、五日で敵は降参する。これ以上できつこない」というものだった。そうすると「敵に虚あり、乗じて撃つべし」ということになるから、そこまで持ちこたえる。「それにはわかりやすく座り込んでおれ」ということになつたんだね。

伊藤 これは結果としては、ちよつと失敗ということですか。

海部 正直に言うと、僕はそう思いますね。あんなようなことになると思いませんから。現に共立講堂とかいろいろなところで反対集会をやると、人はめちやくちや集まつたわけです。圧倒的な支援があつた。そして「これは失敗した人の自己責任です。自己責任というのほそういうものであつて、税金で穴埋めするものではないません」ということをバンバン言えたわけだよなあ。それは正論ですよ、演説をやつておつても。

けれども、だからといってピケを張つて、体を張つて委員会を開かせない、阻止するということ自体は、そう芳しいことでもなかつたし、そのことに世論の賛成はいつまでも続かなかつた。三週間しか続かなかつたということです。三週間でもよく続いたほうですよ。

伊藤 本当ですね。

海部 私があのときフツと思ひ出したのは、スト権ストの時に頑張

って十五日間ぶち抜きをやられた時です。あの時は「こちらが」攻めるほうですから、十五日目に勝ったんです。

伊藤 そうです。向こうが「撃ち方やめ」をやったんですからね。

海部 そうそう。歯を食いしばってもうちよつと正論を吐いていろうと言って、正論を吐いていたんですから。忘れもしませんが、十五日目に終わって、勝ったんです。けれども三週間もったということは、テーマがテーマだったし、新聞や学者も、まだそのころまでは掌は返さなかつたんです。それが正論だといっていた。

伊藤 結局、国会が何の機能もしないということについて批判が出てくるわけですね。

海部 そうですね。それはそんなに長くかからんから、もうちよつと頑張っておれというひそひそ話があつたので、われわれはそれを悪魔のささやきだと思つていた。

■新進党6（九六年総選挙での議席減）

伊藤 ちよつと先へ進んで、この年（一九九六年）九月の衆議院解散・総選挙という話に行きたいんですが、やはりこのころには熱が少し冷めたんですかね。

海部 冷めたと思えますよ。

伊藤 やはり国民の気持はそんなに長くはもたないんですね。だってこの選挙で議席を減らしたじゃないですか。

海部 議席は少し減りましたね。

伊藤 いままでの勢いでいけば、少し増やさなければならぬ。

海部 増やさなければならぬ。

伊藤 この選挙が実際のきつかけになって、羽田さんが出ていくことになりませぬ。この時の選挙のやり方について、比例区の順位決定の仕方などへの批判ですね。

海部 あれで相当内部の亀裂も起こつたんです。そして言いにくい

ことですが、寄合所帯の弱みが、全部あの比例の決定に出てきた。それから言いにくい話だが、例の友部「達夫」なんていうのがオレنجをかついできて、もつといいところへ入れるとさかんにゴテたのは殿様ですよ。「↑九五五年の参院選の話」。

伊藤 あとでそのことは大問題になつちやいますけれどもね。

海部 殿様が出てきてゴテるから。小沢も初めは、「あんなの駄目ですよ」なんて言つておつたけれども。

伊藤 この衆議院の選挙の時は、海部先生は、もちろん全然問題なく当選なさつたんでしようけれど、羽田さんの太陽党は大きな党じゃないですね。

海部 初めから太陽党というのは、そんなに大きな数はなかつた。

伊藤 まあ、珍しい名前の党ができたな、と思つてびつくりしましたけれども。

海部 万物のシンボルだ。

佐道 この住専問題から選挙に至る過程でも、やはり羽田さんが小沢さんの批判をやつたり、内部のゴタゴタがずいぶん出ていましたね。それまでも少しづつは出ていきましたが、このころになると新進党の中はかなりゴタゴタしているということが、それこそ新聞でも出るようになってきていましたね。

海部 出るようになったね。

伊藤 週刊誌なんかにはいっぱい出ていたからね。

佐道 そうですね。それは、結構新進党にとって影響が大きかつたということになるんでしょうね。

伊藤 この総選挙での敗北はどういうふうにお感じでしたか。まず第一に、いままでの勢いが止まつたことは確かですね。結党の時の現有勢力よりも減つたわけですね。これはかなり痛かつたのではないかと思います。新進党一五六議席ですからね。

海部 そして、橋本内閣が第二次をやつたんですね。

伊藤 そうですね。だから村山内閣から橋本に替わつて、社会党は自民党にくつついて、さきがけもくつついていた。

しかし、新しい党へのご祝儀というのは一年ぐらいいしか続かないものですかね。やはり、党執行部の独断、独裁とかいうような声が党内で起こってくるということですか。

佐道 このときは先ほども出た民社の問題として、たとえば米沢さんとかそういういわゆる大物が落選をされたりして、党としても打撃が大きかったと思いますが。

海部 そうですよ。米沢のところは、僕個人も応援に行っただ。

投票日の二日前だ。

佐道 それでも効かなかった。

海部 いいかいな、と思ったね。

伊藤 このとき海部先生自体は、党の役職には全然ついていないんですか。

海部 全然ついていません。このときはせいぜい最高顧問とか、そんなことでしょう。僕はそれ以外のことはやりませんでしたから。

伊藤 この羽田さんの離党の時は、話があったんですか。

海部 あった。

伊藤 出るよ、ということですか。

海部 「出ていきたい。とても一緒にやっていけない」と言って。

伊藤 一緒に出ないかという話はなかったですか。

海部 一緒に出ないかではなくて、「もう自分が出ていく。要するに小沢一郎とはとても一緒にやっていけない。あれがおるところにはおれん」と言った。「まあ、そう短気を起こすな」と言って、いろいろな話はしたんだけど、根が深かったですね。

伊藤 まあ、一応慰留はしたけれども、とても駄目だろうという感じですか。

海部 はい。

佐道 羽田さんがお辞めになるまでにも、いろいろな方がぼろぼろとお辞めになつていたわけですね。高市早苗さんもおやめになる、米田健三さんもやめる。いろいろな方がおやめになって、そういう流れがちよつと止められないという感じでもあったというになりま

すか。

伊藤 自民党のほうは、新進党の動揺している議員を引っ張り込もうと思つて、いろいろ手を打つていたんですか。

海部 手も打つて、話しかけて、あれ「引き抜き」をしておつたことは間違いないかと思つていますよ。

伊藤 海部さんのところにも。

海部 いや、僕のところへは「対立候補は立てませんから」と言つてきた。本当に立たなかつたんだ、私のところでは。「立てたかつたら立てろよ」と勝手なことを言っていましたけれどもね。

佐道 無駄なことですね(笑い)。

海部 だから対立候補なしというのを、たしか僕は二度やったんじゃないですか。

佐道 小選挙区で、先生お一人だけですか。

伊藤 無投票ではないでしょう。

海部 無投票にはならないわ。共産党が手を挙げているから。

佐道 どこでも出てくる共産党だから(笑い)。

海部 しかし公明党は、いち早く私のあれ「推薦」を決めるし、自民党からは「対立候補は立てませんから、そのつもりで今後もお願

いします」と言ってくる。

伊藤 なんとなく色目を使っている感じですね。

佐道 新進党の中を見て、「海部先生、そろそろお戻りになられませんか」というようなことではなかつたんですか。

伊藤 まあ、それに近いサインですね。

海部 うん。

■新進党7 (基本政策に関する全議員会議)

伊藤 では、少し先へ進んで、平成九年入つて、「新進党基本政策に関する全議員会議」というのが開かれて、外交・安保に関する党

の基本的な政策に関する議論が行なわれます。党の基本問題調査会というものができて、海部先生はその会長になられるんですね。

海部 はい。

伊藤 これは政治的に言うかどうかという意味合いなんでしょうか。この通りに受け取ってよろしいですか。

海部 初心に返って言えば、政治改革ということが、新進党をつかって、保守の二大勢力をつくるに至った大きな願いですから、それはいつまでも放してはいかん。また、それ以外に錦の御旗はない、というつもりですね。そういうことを言っておったんだと思うんです。それから基本問題調査会は、たしか僕が会長か何かにされたんだよな。そして週に一回か、みんなメンバーが集まって、いろいろな意見交換をしました。

佐道 活発にいろいろやっておられるような――。

海部 活発にやりました。

伊藤 これは、党の基本政策を策定するところまで行ったんですか。

海部 それはいつになつていきますか。

伊藤 これは九七年ですから、だいぶ先のほうです。あまりご記憶ないですか。

海部 そういう新しいものをつくらうというので、やっておったことは事実です。

伊藤 決着がついたかどうかよくわかりませんが。

海部 結果は、あまり出ていなかったんじゃないですか。

伊藤 とにかく海部先生にとっては、政治改革、クリーンな政治ということが一番の謳い文句であるし、また信念でもあったわけでしょうが、この年（一九九七年）に入つて、先ほどお話のありましたオレンジ共済の問題が出てきてしまいました。これはちよつと痛かつたんだらうと思うんですが。

海部 そうそう。オレンジ共済の友部を公認したときの公認証書は、海部俊樹になつていますから。党首ですから。

伊藤 参議院ですね。

海部 細川がさかんに推薦してきて、これは大きい組織がある、ということだった。一回だけ、僕は調査もしないで行つたのがミスだったと思うが、東京に人を集めるから、絶対にこれはいいからと言つたので、そこへ行つたわけです。行つてみると、「いま党首がおいでになつておるから、ご挨拶を」と言われた。オレンジ共済というのは、僕ははっきり言つてよく知らんわけです。だから、後日それが無責任だということになるわけです。ともかく公認候補にしたわけです。

伊藤 だけど党首が個々の議員候補者が何をやっているかまで調査はできないじゃないですか。そんなものは党の組織がやるべきことでしょう。

海部 けれども、残念ながらまだ足腰の弱い党では、そこまで調査能力がないんですよ。それから細川は、当時三人の総理経験者の一人で、新進党を結党する前から集まって相談しておつた一人ですから、これは大切にせざるを得ないわけです。そしてまた一般の中に、今度の候補者でこういう組織「オレンジ共済」を持つておつて、何万という同志もいる、党勢拡張には結果として役に立つ、各都道府県ごとに支部がある、そして候補者のどなたにも応援してつきまします。という。まあ、創価学会が選挙のときに使うような利益誘導で、「この指止まれ」といったようなことです。そして、みんなあのころ、少々眉唾だと思つても、いくらかでも票が来ればいいわ、というようなことで利用したんです。

伊藤 やはり細川さんがそれを推薦して、推進した。そしてその細川さん自身もそのスキヤンダルにはまってしまうわけでしょう。細川さんはやはりこのグループのある意味で象徴的な一人であるわけですね。それが政治スキヤンダルの主になつた。これは新進党のイメージとしては最悪ですね。

海部 あれは本当に辛い時期だったね。友部の息子にいい加減なやつがおつてね。

佐道 一緒に捕まつた人ですね。

海部 そうそう。

伊藤 友部という人は、全然それまでは知らなかったわけですか。
海部 僕は全く知りませんでした。最初に出てきた経歴表を見たら、海軍兵学校卒業、そしてなんとか組合だ。海軍兵学校卒業というのは、われわれの世代では比較的心も頭もある程度の賢い。しかも兵学校のあの訓練に耐え抜いて任官したというなら、これはひとかどの人物だろうと思ってしまうわけです。裏のことを知らないから。私がよかろうと言ったのは、たつたそれだけの理由です。それは候補者もあまりいませんでしたけれどね。だからそういう点が、私としては本当に国民に対して申し訳なかったということになるわけです。友部とは飯を食ったこともなければ、話し合ったこともないです。常に細川とやっていましたから。

佐道 細川さんはこの件に関して、党内ではどういう弁明をされていたんですか。

海部 この件に関しては、何と言っただろう。まあ、ありきたりの話をしておったと思うよ。

伊藤 友部という人は、ずいぶん細川さんに深く食い込んだんでしょね。

海部 そう。だから、資金とあれ「票」を出しますよ、ということ。で食い込んだんじゃないですか。

伊藤 やつぱり殿様なのかな。うまく細川さんは利用された。まあ、細川さんも利用したんでしようけれど。

海部 むしろ利用されたほうが大きいんじゃないかな。

■新進党8（小沢一郎党首の保保路線）

伊藤 そもそも新進党は、自社連立と対抗すべく結成されたにもかかわらず、何か小沢さんは「保保」のほうに行くでしょう。あれはどんなふうにご覧になっていましたか。「あれれっ？」という感じ

ですか。

海部 「あれっ？」といったような感じだよ。羽田に言わせれば、「そうでしょう。もう小沢はいつでもこうだから信用できない。ついていられない」という理由にする。それから小沢辰男にしても、あれは長年新潟と新潟で、角さんの側近の一部だったんだ。ところが彼も、「最近の一郎のやり方はよくない」と言って怒り出す。しかも公明党とのいろいろな関係やつながりが出てくるでしょう。

佐道 選挙は負けたとはいえ、九六年は「減らしたのは」四議席ぐらいですね。挽回しようと思えば、まだまだその先の可能性はいくらでもあるという状況ではなかったのでしょうか。結党の時の旧総理経験者、海部先生、羽田、細川に加えて小沢さんというところがキーパーソンだと思うんですが、羽田さんは辞めて別の党をつくる。細川さんはスキャンダルにまみれてしまう。先生は党の役職にはお就きにならなかったということですが、そうすると、ただでさえいろいろな審合の党なのに、凝集力と言いますか求心力と言いますか、そのあたりはいかがでしょうか。

海部 僕のところへよく通ってきていた若い議員の意見なんかを全部聴いてみると、「この党をこれ以上バラけさせたりしては、とても自分たちも選挙にならんから、先生、しっかり頼みますよ」と言うから、「先生しっかり頼みます」と言われても、おれはしっかりしておるからいいけれど、お前ら自身が自分の選挙区できちつとした土塁をつくれ。お役に立たんけれども、応援に來いというなら応援に行くよ」というようなことで、みんなを励ましておったのが精一杯だったね。その代わり、地方へはよく足を運びました。来てくれと言われれば、日程が空いておる限りは応援してあげた。

伊藤 小沢さんのこの「保保」というのは、どういふところから出てきたものですか。ご推測されるところで――。

海部 あの人も、そこが大政治家たる所以かもしれないけれども、人間の常識ではわからんことがときどきあるんだよ。（楠氏登場）
そして、特に公明の影響をそのころから深めたいと思っても、な

かなか公明は、旧自民党のグループのようなわけにはいかなかったところに一つの悲劇もあるでしょうな。引力が違うから。

佐道 保保路線のほうに歩んでいくというのは、党内的な議論というのか、少なくとも先生とかに相談をされるとか、そういうことはされないわけですか。

海部 いやいや、いろいろなことを聞いたり思ったりすると、「小沢一郎を」呼んでは、話をしました。それは別に新進党になってからではなくて、自民党のころからもよくやっただし、それはあのひときちんと詰めておかなければいけないことだから。だから前にも話したように「小沢一郎が」、「ソ連といろいろやるから、任しておいてくれ」と言うから、「任してはおくけれども、四島しか駄目だよ。すぐ二島、二島になって走ってはいかん」と言っても、結局駄目だったという前例もある。

だから保保の場合でも、「保保とは何だ」と言っておちらが問い詰めると、結局、公明をちゃんとできない。だから衆議院と参議院の公明を分けて、参議院の公明だけまずあれを名乗らせて取っちゃいましょう、という時期もあったな。そんな思うように行くものか。小沢辰男なんか、そのことになると眉唾であったと思います。

伊藤 「保保」ということは、つまり自民党と提携しようということですね。そうすると、自民党には社会党を追い出せという意味ですか。

海部 結局そういうことですね。けれども、そのころの自民党には、まだ社会党を追い出すだけの余裕やゆとりはなかったということですね。

伊藤 第一、なんだかんだ言いながら、自民党は社会党と連立をしてそんなに長く経っているわけではありませんよ。それをまた急に放つぽり出したら、評判は悪くなるでしょうね。

海部 それに、社会党のほうがあれば早く掌を返して、一晩で安保賛成、憲法も賛成「↓自衛隊合憲」と言い出したから、もう放つぽり出す理由がなくなってしまうんです。わかりやすい大義名分が

なくなつた。そして村山が頭がよかつたというよりは、僕は、あれは野坂浩賢が作文したんじゃないかと思うんです。あるいは伊藤「茂」というのがおつたですね、背があまり大きくない。彼らの日頃のあれ「やり方」からいくと、それぐらいの手は打つんじゃないだろうかと思う。

伊藤 あれは、社会党が党議決定したわけではないですからね。

海部 あれよあれよというまに、村山一人で答弁して、みんなそれに便乗した。あのときは、もうしばらくはしようがないからそうやっておいて、いかんときは、また村山を替えればいいじゃないかというようなつもりで、村山を利用できるのは政策的な歩み寄りではない。だから、海部さん、わかってくれよ、もうじき替わるからと言つた。

伊藤 だんだんその「保保」の話が出てきましたが、小沢さんは自民党のどこか話をしていたんですか。

海部 ですから、僕が小沢の話をおつたころ、保守系を集めなければならんという意味の「保保」は、僕は公明党の少なくとも参議院レベルで、びつたりと意見を一致してくれて、公明党というのはなくなつてもいい「というところを考えていた」。その代わりお前のほうも、自民党のほうのあるままとまったものをガバツと割つてこいと、そういう線だつたと思いますよ。それは小沢辰男なんか裏をとりについて、そういうことだといろいろなことを言ってくる。そんな動きがあつた時期もありました。

伊藤 しかし自民党はもう政権党になつていきますからね。自民党自体が動く可能性はあまりないですね。

海部 そのときはもうありません。ただ橋本が最後は政権をとつて、あのをいたらくだから、あんまりしつくりと接着剤を配つたり出したりして固めていかなかった。だからすぐ干上がって浮き上がったという気が、こつちから見ておるとしますけれどね。

伊藤 まあ、社会党との関係、さきがけとの関係も、そんなにしつくりはいつていないですね。

海部 いっていません。

伊藤 まあ、乗ずべき隙がないとは言えないとは思いますが、しかし政権についているところからどうかしようというのはちよつと無理じゃないかと思えますね。

海部 そうですね。

■新進党9（九七年党首選、小沢VS鹿野）

伊藤 そして七月の東京都議選で、議席ゼロという惨敗をする。これはやはり前代未聞のことですね。

楠 それは立候補している新進党の候補者も少なかったんじゃないですか。二、三人とか、その程度じゃなかったですか。

伊藤 まあ、そうです。だけどこれが一年前だったら、候補者もいっぱい出たでしょう。

楠 そもそも公明党は、地方では独自の政党だったわけですからね。伊藤 まあ、「保保」を巡って党内でもこんなに「ごちゃごちゃ

に」なって、元公明党もちよつと距離を置く。元公明党といっても、公明党の組織は、形がなくなろうが何をしようが、公明は公明なんですよ。

海部 公明は公明だと思えますが、しかし一時期は藤井何某を頂点にして、その下に都議会・橋本「辰二郎」幹事長とかいうのがおつた。公明の参議院の下請けに都議会がおつて、公明の都議会の連中が、一所懸命裏でのつるみややっておつたと思えますよ。

伊藤 その年の暮れの党首選で出てくる鹿野「道彦」さんは、どういう方なんですか。

海部 鹿野道彦さんは、ご存じだと思いますが、鹿野彦吉の息子で、そして彼は初めから「乃公出でずんば」という気宇広大な人ですよ。まだ自民党のころに、「一緒になってやりませんか」ということを僕に呼びかけたりした。

伊藤 何を一緒にやるんですか。

海部 「一緒になって何をやるんだ？」と言ったら、彼はその時から新党論者でも、保守新党をもう一つつくらんと駄目になっちゃやうという。中選挙区で彼の選挙区は、いまはいなくなつたからいいが、近藤鉄雄とか、ああいうすばしっこいのがたくさんおつて、自民同士にいじめられてかなわん。そこへもつてきて彼自身が、これもご承知のように、小なりといえども「新党みらい」というのを立ち上げてみたり、いろいろああいうことをやりたかつたんだ。そういう気持ちを持っておつた人であることは間違いないが、最近は、ようやくあそこへ収まり込んで落ち着いたと思えますけれどもね。

伊藤 三回目は小沢さん対鹿野さんという党首選になるんですね。佐道 鹿野さんは、小沢さんが「保保」を進めておられるので、

「反保保」を表明されて出られるわけですね。党内的にも、鹿野さんに流れて反保保でやろう、反保保だ、という流れが若手を中心にあつたというようなことが伝えられていますが、そういうことですか。

海部 鹿野グループの体制は、当選回数比較的小ない若手の人が多かつたというのは、その通りだと思います。それから僕は来てくれと言われたけれども、その会に呼ばれて行つたこともない。鹿野本人とは二、三回話し合つたこともありましたが、彼が何を考えておるかもわかるし、「間違つても自民党の補完勢力になつてはいかん」ということを絶えず言い続けておりましたからね。わかつたと言つた。

伊藤 これ「党首選」で小沢さんが、二三〇対一八二ということ

勝ちますが、この前の選挙とは選挙方式が全然違いますね。議員だけでやつたわけでしょう。この数の差は案外小さいですね。ということとは反小沢勢力もずいぶん強くあるということだと思えますが。海部 やはり新進党の中にある程度蓄積されておつたのは、そろそろ小沢の間答無用のやり方はいかんじゃないかということだ。要するに、会議に積極的に顔を出さないし、ちよつと時間をとつてこ

へ来い、なんて呼び出して来ない。というようなこと等があつて、だんだん接着剤の粘着力が弱くなつていったらどうと思ひます。それから鹿野君が、それに代わるだけのあれ「実力と人気」を持つておつたとは僕は思ひませんが、彼は非常に小まめに動きますからね。影の内閣ではいつでも、外交をやらせてくれとか、あれをやらせてくれとか、いろいろ言つてきたし、そういう仕事を与えれば彼は彼なりに一所懸命動いて、こちらに報告もする。

伊藤 この鹿野さんを支持した一八二ですが、鹿野グループだけでこんなに集まるわけはないですね。

海部 そうです。まあ記名投票ではありませんから、みんな投票用紙に向いたときに素直に書くだけです。

伊藤 ということは、反小沢的な空気がずいぶん強くなつてきたということですか。

海部 それは平生往生だと思ひます。

■新進党10（解党）

伊藤 でも、せっかく党首選に勝つたあと、解党だということですね。

海部 それは、みんなびつくりしたんだけれども。

伊藤 海部先生もびつくりでしょう。

海部 僕もびつくりなんだ。「せっかく、お前しつかりやれよ、と応援してやったのに、なんだ」と言つて小沢辰男と僕とで怒つたんです。そうしたら、「まあ、どうにもならんよ、それはもう、そう言われるのは間違いない」なんだ。しかも第二回の延長を決めてやつて、われわれも投票して、そして決まつたその日に、「ちよつと公明に対して物を言わなければならんから」と言つて、公明党とのあいだがそのへんでちよつとおかしくなつて、それが地震のひび割れを大きくしていったと思ひますね。

伊藤 旧民社グループとも、やはり駄目になつたんですか。

海部 民社グループと駄目になるのはその前ですよ。要するに純血主義といふのかな。

伊藤 純血主義と言つたら、小沢グループだけになつちやうじゃないですか。そして小沢グループは多数派ではないわけだから。

海部 それはそうですね。しかし、あの時は必要のない喧嘩を売つたものだと思ひました。特に公明に対して。

楠 何が面白くなくて、喧嘩を売つたんですか。

海部 そんなことは、「小沢一郎に」聞いたつて答ええないな。

伊藤 先生のご賢察ではどうでしょう。

海部 言うことを聞かんようになった、ということでしょう。思うようにならなくなつたということだ。

伊藤 何でもハイハイと聞いてくれないと駄目なんですね。

海部 小沢はどちらかというところがままところがあるから。問答無用で言うことを聞いてくれるのでないとあかんのだな。

伊藤 でも、そういう小沢さんは、海部さんに対してはどうだったんですか。ハイハイということ聞いてくれるわけでは必ずしもないでしょう。

海部 必ずしもないけれども、時間をかけて話すと、最後は向こうが諦めたのか折れたのか、「わかりました、じゃあそうしましょう」と言つて、そうしましよと言つたことはきちんとして守つてやつてゐる。そういう信義は厚かつたと思ひます。その代わりこちらも誠心誠意やる。本当のことを話しながら、こうしたいからこうしてくれ、ここはこうだ、と言わなければならんですね。

伊藤 これは、しかしわずか満三年ですよ。一時期ワツと勢いに乗つたのに、あつというまに解党というのも、なんともちよつと理解に苦しむところですが、なんと説明されますか。

海部 それは外から見られるとさうでしょうけれど——。新進党として選挙を戦つて、曲がりなりにもあれだけの支持がもたらえただから、背伸びして届くところの、そのうえさらに二議席取つたわけだ。だからあのときは、これを大事にしてやっつていけば、保守の二

大政党時代をつくることができるものだと思つて考へておりましたし、そういった夢を持つて頑張つたんだけれど、いかんせん、公明党を放すような、くさびを入れるようなことをした。なぜあのときくさびを入れて公明党を追い出したのか、理解に苦しむんだけど、公明党もきちんとしておけば、二度目のあれ「党首」で小沢を引き続きやらせるから、それでやりなさいと言つたのに。

それから民社のほう、米沢のほうも、可哀想に選挙に落ちたりしたけれど、あれも大事な勢力だからということと公明のほうに聞くと、民社とは一緒にやつていけると言うから、それじゃあ一緒にまたやつていこうということになつた。そんなころに鹿野なんかの離脱は、鹿野自身の腹の中で決まつてきたんでしような。

伊藤 鹿野さんの離脱ですか。そういうことを察知して、小沢さんはもう面倒くさいということですかね。

海部 面倒くさいという表現は僕はちよつと当たらんだろうと思つてます。これはいかに何をしても打開できない、このまま行つたらジリ貧になつてしまふという発想のほうが強かつたんじゃないかな。伊藤 しかし、ジリ貧にならない方法として解党というのも、スツとつながつてこないところがありますね。

佐道 ずいぶん極端に走つたものだなという感じがしますね。

海部 極端ですよ。

伊藤 極端なんですか。海部さんだつて驚くというんだから、どうにもならない。

佐道 負けたとはいへ、四議席負けただけですからね。まだ挽回しようと思えば、やりようがある。党首を投げ出すというならまだわかりますけれども。

伊藤 普通だつたら、こういうときは党首を辞めて、あとの人に託す。あの方が、あとでおつしやるような「一兵卒」としておやりになればよかつたんじゃないかと思ひますけれどもね。

海部 文字通り本当の一兵卒になつてやればね。

伊藤 これは、自民党が仕掛けてどうこうしたとか、そういうこと

ではなくて、やはり自壊ですか。

海部 そうでしょうね。僕はそう思う。

伊藤 外から揺さぶられて駄目になつたというものではなくて、ですか。

海部 原因は中にあると思つたな。

伊藤 そうですか。日本の政党史の中で、こういう動きはほかに類例がないですね。

海部 よそから外圧が来たり、何か揺さぶりが来て、それによつて結果こうなつたというほうが先生たちにはわかりやすいだろうけれど、そうじゃないんです。あれはやつぱり中が駄目だつた。十分な詰めをしていないうちに、個性も能力も経験も育ちも、氏素性も全く違う人たちが集まつた。言葉は悪いけれども、そこは訓練も調整もされておらなかつた。そこで個性を出して、純血主義で事を構える。そうするとみんながだんだんいやになつてきて、良質的な部分は離れていくということが始まつた。どちらがいいか悪いかは別ですよ。離れていったやつが悪いのか、放したやつが悪いのか。それは両方に理由はあるうけれど。ただ、僕がいまから思えば、せつかくあそこまで行つておりながら、なぜあそこでグツと我慢ができたんだらうか。

伊藤 そうですね。いま民主党が同じような様相を呈しかけています。ですが、やはり同じような事態だと見ていいんですかね。解党になるかどうかは知りませんが。

海部 あまり恐ろしくて他人の党のことまで言えないけれどなあ。考へてみればね。ただあの民主党は、当時の新進党と本当に似通つたところが多い。このあいだの選挙は勝ち過ぎましたね。

伊藤 でも民主党はまだ勢いがあるでしょう。けつこう地方選挙なんかでもまだ勝つていますよね。

■現在の政局から「名古屋市長選」

海部 名古屋の市長選挙のことをちよつと調べた人はありますか。まだないでしょう。いまあそこで民主党は大変なことになっておるんです。どうするか、ということですね。

楠 そうだ。河村たかしが出るんですね。

伊藤 出ると言っていますね。出るということは報道されましたが、それがどういう背景でどういう波紋を生むのかということは全然解説がないから、よくわからないですよ。

海部 本当にそうですよね。

伊藤 やはり、あれは大きな波紋を呼ぶものなんですか。

海部 というのは、民主党は、特に愛知県では、労働組合上がりとその他のものに分けられておるわけです。河村は労働組合関係じゃないんです。それと薄汚い言葉を使って、「おみやあさん、なにやつてりゃあ」ということだ。そして四年前の選挙でも、出る、出ると言っていた。八年前にも出たかった。ここへきて、「先輩、おれ出たいわ、今度は。もうあかんわ、あんなものは」と言つてさんざんこぼしておつたけれども、そう無責任に「お前も出る」とは言えん。あれも一時期新進党におつたんですからね。それから彼のお姉さんと僕のところは小学校のときの仲間でもあるし、家も近くに育つたことがありますからね。個人的にはよく知っているんだけど、なにしろ品が悪いな。彼は意識的にそれをやつておるんですよ。

伊藤 そういうふうに見えますね。

海部 名古屋弁を使つて。「ほんなこと言つたつて、なんぎや、そんなものはよう」と言う。ところが民主党の愛知県連は、河村が立候補すると言つても、いい顔をしておらんですよ。いまの松原

「武久」市長を引き続き今度も応援するという。党がそれを正式に機関決定したら、本当に惨めな戦いになるんじゃないか。燃えるようなところがない。そして政策をお読みになつたでしょう。新聞に載つたのがすべてではないだろうけれど、あの政策の幅はちよつとみみちちいですな。市長の報酬を三分の一にしてやる、八百万でよろしい。ほかに市政の上で予算をつけるところがあるかといつたら、

何も出てこないね。それから市会議員も多すぎる、これも三分の二にするという。それから職員も多すぎるから、みんなカットだという。そんなことをバツと出した。そうすればポピュリズムには通じるけれども、それでいいのかなという気が他人事ながらしますけれど、それが活字になつてずつと流れておるわけです。まあ、他人のことだからいいけれども。

伊藤 しかし愛知県のことでありますね。

海部 ただ、地元民はいろいろなこと言う。いま河村が立候補してくれば、あとで補欠選挙があるでしょう。自民党は、あの名古屋市内五つの選挙区ではいまゼロです。だから河村が辞めてくれれば、誰か一人こちらが橋頭堡を確保できるだろうと。

伊藤 民主党が名古屋を押さえているのは、海部先生のお陰であるという説ですけれど。

海部 そういう説はないわ。昔はそういう時期が――。河村の応援も僕はちよつとはしてやつたんですからね。けれども、このあいだ名古屋で市会議員の補欠選挙があつたときに、うちの秘書がひとり立候補して当選したんです。そうしたら今度は、河村のあとに出る後釜にも、僕の秘書は名古屋のどこの選挙区にもおりますから、

「それを出してもらえんか」と県連の会長曰くだ。「もう、うちの秘書ばかり出しておるとあかんから、もうちよつと広い視野で考えなさい、誰が出ても当選できるような候補者ではない」と言つただけでも。もう一人うちの秘書が県会議員で若いのがおるんです。いまは、若いということと地方議員だということが揃えば、それで行けるわけです。

伊藤 それがメリットになるわけですね。

海部 そうなんです。それで、政治の勉強や訓練は積んであります。ずぶの素人ではありません、衆議院議員海部俊樹事務所において十何年間働きました、というようなことで、一緒に写真なんかがあるとバツとばらまくから。それだけ見て、入れる人もいくらかはおるでしょう。補欠選挙をやると、そういう人がみんな当選しちゃう

わけだ。そうすると責任が重くなつてどうにもならない。あまり見え加減な人は出せない。河村の後釜にこんなのが出てきた、と言われても困る。

■新進党11（新進党の評価）

伊藤 新進党は、満三年で解党、バラバラになるわけですか。

海部 はい。本当に一半の責任は私も感じております。ああいうものをつくつて、それが保守二党論の中で一角を占領できる、そういう夢を持たなければ政治はできません。しかしこちらが微力だったから小さくなった。

このあいだ「二〇〇四年七月」の選挙では、「保守新党の議席が」わずか四人になつてしまつたから、もうこれはいけないということ、あれ「自民党に合流」しましたけれども。描いた夢や図が、ケバケバしくきれいに描いたから、それを有権者に演説をぶつてきたわけですが、この前の選挙は厳しかったし、辛かった。けれどもこれだけはやはり頑張らねばいかんと思つて応援して回つたんですが、応援に行つたやつがみな落ちてしまつたからしょうがない。自分の足下だけしっかり固めてやつていくよりない。ただ政治改革が、まだ志半ば、道半ばですから、それをもう少し実行できるようにしなければならん、ということですよ。

楠 先生、お立場上お答えにくいかもしれませんが、私は新進党ができた時から、いずれそう遠くないうちにこれは解党するだろうと思つていました。その理由は、やはり創価学会・公明党という非常に異質な集団をその内部に取り込んでいたからです。そこ、それ以外のところは、なかなか交流がないですよ。これは、長い時間をかけていけば融合するという性格では絶対ありませんから、それを抱えている以上はいつか新進党はバラけるんじゃないかと思つていたんです。先生は、結党された時点でそのへんはどう思つておら

れましたか。いずれ、それは融合すると思われていましたか。

海部 結党した時点では、人間だから誠意をもつて話せば、「至誠天に通ず」という言葉があるように、この人たちも一宗教政党で終わらずに、国民政党に脱皮しなさいというようなことで逆折伏をして一緒に融合できるものと信じておつたし、また僕に付き合つてきた人たちは創価学会の中でも良質な部分だつたんですね。だからときどき名前を出すけれど、石田幸四郎なんていうのは良質な一人だと思つてます。皆さんの評価はわからんけれども、それから一・一はよくない。だから、よくない組といい組と、僕は自分のほうでは始末しておつたんです。

けれども、こんなことを言うと叱られるかもしれないが、そちらとつるんでおる人や、こちらと仲良くしておつた人というのは、票が欲しいだけの人は別にして、やはり真面目に将来の二大政党を考えたら、いかに宗教政党であろうと、話をして抱きかかえて、一緒に心が通うような話ができれば、これは宗教政党だといつて拒否してはいけない。むしろ一緒にならなければいかん。そういう思いがありました。

それは例が悪いけれど、玉置「和郎」さんにしろ、この人のお父様「楠正俊氏」にしろ、僕らにこつちへ来いとか、こういうことをやれとかいうことは、一回も言つたことはないんだ。そして僕も来いと言われれば、あそこのまるいご本尊へ行つてね。

楠 立正佼成会ですね。だけど、創価学会というのはもともと日蓮正宗ですからね。日蓮正宗というのは非常に異質な宗派で、非常に排他性が強いですね。

海部 排他的、戦闘的ですね。

楠 これは教義から来るものだから、いくら抱きかかえようとしても無理じゃないかなと思つてます。まあ、立正佼成会や成長の家なんかとちよつと違う宗教ですから。

海部 違う。全然違う。ただし、異議があつたらちよつと答えてほしいけれど、そういうものがゴチゴチに出ている組と出ていない組

とが、はつきり言つて、長いあいだつき合っているとわかるんですよ。だから、ひどいのもおるよ。

楠 ついて行っちゃったんですね。「新進党が」分かれたときに、自由党についていった創価学会員がいるんです。

海部 それからも一つは、そういうことを抜きにして、私どもが小沢辰男なんかと一緒に飯を食つたり、本当に日本の政治を憂えたり、政治改革をやらなければならぬというのは、別に小選挙区にしなければならぬということではなかつたんです、僕らの本音は。汚職や腐敗をなくしていくことにあるということを言い続けてきたものだから、そちらのほうへ行くならば、みんな一緒になつてやつかれるだろう、またやつかないかなければならぬと思つてやつかれたい。宗教党だから駄目だ、と言つておつたのでは一体どうなのか。同じ日本人じゃないかと言われたらそれっきりで、そんなことで差別するのはけしからんと言われればそれっきりですからね。できるだけ謙虚な気持ちで、つき合つて仲良くしていこう。

そして、いまになつてもよく言われることですが、「自性清浄心」という言葉がありますね。僕はあれを聞いて守れる人は立派な人だと思つています。あれは理想論であつて、そこまではいきませんが、少なくともその方向に政治家がみんな足並みを揃えることができる、心を寄せることができるようになることが大事である。これは夢のような理想論かもしれんけれど、思いの中にあるんです。そういつたことができる人とできん人というは、おのずからあるじゃないですか。

伊藤 それは、公明党の中でもそうだといいことですね。

海部 そうです。だから良質な部分ほどの党にもある。けれども共産党の中には、残念ながら私の知る範囲では、ない。

伊藤 だいぶ時間も過ぎましたので。今日は新進党の問題で初めから終わりまでお話いただきました。この次は、新進党以後のことについてぎつとお伺いして、打ち止めにしたいと思います。冊子もそろそろまとめませんと間に合わなくなりますので、ご協力いた

きたいと思つてます。ですから、次回は、少しぎつとしたお話を伺いたいと思つてます。

佐道 一九九八年から現在までのところで、おおまかに質問をつくらせていただきます。

伊藤 保守新党が自民党に合流するところまでいけばいいのではないかと思つてます。

海部 一番恥ずかしい話をしなければならんけれども、まあ、それはこの次にしましょう。

伊藤 そうなんですか。

海部 だつてそうでしょう。大きな見通しを誤つたということですから。

伊藤 まあ、それはよくあることでしょう。

海部 そして理屈をつけるために一番よかつたのは、味方はおおかた撃たれたり、たつた四人の政党になつて、もうこれでは政党として成り立たない、それじゃあ、ということですから、最も恥ずかしいところですね。

伊藤 次回なんとか終わらせていただきたいと思つてます。どうもありがとうございます。

〈以上〉

海部 俊樹

オーラルヒストリー

第 35 回

現在まで (1998~2004)

【2004年11月26日 (金) 15:30~17:40】

於：TBRビル10F・海部俊樹事務所

【インタビュアー】 (肩書きはインタビューの時点)

伊藤 隆 (政策研究大学院大学教授)

楠 精一郎 (東洋英和女学院大学教授)

佐道 明広 (中京大学助教授)

【記録、編集】 丹羽 清隆

海部俊樹先生 第35回 オーラルヒストリー質問項目

(2004年11月26日)

1. 98年1月、前年の新進党分裂後、野党再結集の動きも見られる中で、先生は当面无所属で活動されると記者会見で述べられました。また、「改革派の結集に注目したい」という発言もされています。新進党分裂後の野党再結集の動向やご自身の今後について、どのように考えておられたのでしょうか。
2. 98年4月、先生と小沢辰男氏を中心に、旧公明党グループを含む保守中道勢力の結集を図る動きが表面化したとして注目されています。先生ご自身も、新進党分裂後笹木竜三氏と中田宏氏が作った会派「無所属の会」に合流され(4月17日)、同会を保守中道勢力の受け皿にしようとしていると報道されています。「無所属の会」合流の経緯等お願いします。
3. 98年7月、参議院選挙があり、自民党は改選61議席から45議席へ惨敗を喫し、橋本首相が辞任しました。先生が応援する候補も無所属で立候補するなど、このときはかなりご苦勞があったと思われますし、公示前に訪欧されたことが一部で批判されたりしておられます。このときの選挙についてはいかがでしたか。また、小淵内閣の成立についてはいかがですか。
4. 98年8月24日、参議院選挙の結果を受けて非自民の勉強会「新総合政策研究会」が発足し、小沢辰男氏が代表に、先生が顧問に就任されています。この経緯等お願いします。
5. 98年末、自民党と自由党が連立をすることが明らかになります。正式な連立内閣発足は政策合意に時間がかかったため99年1月14日になります。自自連立が明らかになったときはどのようにお考えになりましたか。
6. 前の質問も関連しますが、99年1月14日、先生は小沢一郎自由党党首と会談されて、自由党に合流して最高顧問となられました。自由党入党の経緯についてお願いします。
7. 連立内閣成立後、小沢自由党党首はしばしば連立離脱をほのめかします。また、99年10月には公明党も加わって自自公連立となります。先生はこの連立内閣をどのように評価しておられますか。
8. 2000年3月末、小沢氏は連立離脱の意思を固めたと伝えられました。自由党内には離脱反対のものも多く、先生も新党結成に動いておられると言う報道もあります。結局、野田毅氏を中心に保守党が結成され、先生は最高顧問に就任されます。この間の経緯についてお願いします。
9. 2000年6月総選挙が実施されました。先生は自民の推薦を受けたことで6年ぶりに自民県連を訪問されています。保守党については厳しい選挙であったと思いますが、このときの選挙はいかがでしたでしょうか。
10. 自由党連立離脱後に小淵首相が倒れて森内閣が成立。森内閣も短命で2001年4月に小泉内閣が成立します。森内閣、小泉内閣についてはどのように評価しておられますか。

- 1 1. 2002 年 12 月、民主党熊谷弘氏らの合流で保守新党が成立します。しかし野田党首らが参加せず、新党はわずか 1 名増加しただけにおわりました。自民党への合流路線と新党勢力拡大路線の対立もあったと伝えられていますが、この合流問題の経緯等お願いします。
- 1 2. 2003 年 11 月の総選挙の結果、保守新党は党首まで落選する惨敗を喫し、結局解党・自民党合流となりました。保守新党は成立時点でかなり厳しい状況にあったと思いますが、先生は保守新党についてはどのように評価しておられますか。
- 1 3. 先生が推進してこられた政治改革の結果、自民党派閥の力は相当減少し、自民党内にも変化が見られるように思います。復党されて、現在の自民党をどのように見ておられますか。

※今回は以上のような点についてお願いします。

■選挙区・支持者・後援会

伊藤 一九九八（平成十）年、大した前ではありませんが、前年の新進党分裂後、先生は当面無所属で活動されると述べています。新進党が分裂したのはもう昔のことのような感じになりますね。

海部 あれが最大の失敗ですよ。あそこで分裂するのはいかん。

伊藤 分裂して、バラバラになってしまえますね。

海部 バラバラになりました。

伊藤 一番大きいのは民主党ですか。

海部 バラけて行ったのは民主党だということに、結果としてはなっています。一番たくさん集めたのが、民主党を旗印にした組であって、そこには旧連合系も民社系も入る。それからあのときたしか一枚岩だと思っておった公明党にも小さな変動があつて、そちらに戻った人もあつたでしょう。

伊藤 そういうバラけた状態の中で、海部先生はどうしようと思われましたか。

海部 そのときは一番いたく、自分を含めて責任を感じました。というのは、新進党をつくることは、大きく言えば保守二党にして、その二党制の中で日本の政治が立ち直っていけばいい、また立て直すべきだ、と初めから思っておったものです。けれども結果を見ると、こと志と反したということになるんですかね。

伊藤 やはり二党があつて、二大政党の政権交代というのは昔から言われていますが、なかなか難しいですね。

海部 そうです。本当に難しかったです。

伊藤 政権を取っている方は凝集力があるでしょう。だから少々意見が違おうが何をしようが、これにくつついている。野党のほうは凝集力がないと難しいですね。

海部 それから人事で引く張ることも露骨にはできないし、さりと

て資金も豊富ではない。ではなんでやっていくのか。集まって心の通い路を大切にしていけ、疎外感を持たせないようにして、みんなのいいところを発掘して、希望を持って前進できるようにしよう。それには選挙に勝つことですが、勝つためにはどうするかということに落ちていくと、やはり政党の政策がしっかりしていなければいかんということだ。

伊藤 当面無所属で行くよということとは、どこにも属さないわけですね。いろいろなところからお誘いがあつたんじゃないかと思えますが。

海部 誘いは初めからいろいろあつたけれど、やはり選挙区の人に長いあいだ精神的に混乱させた。あのころ選挙区の中でも、僕の中学の同級生とか、青年会議所のメンバーとか、私を支持しておってくれる毛織物工業組合の幹部とかいうような人は会うたびに、「先生、もうそろそろ仲直りしてくれませんか」という。「なんだ？ 仲直りとは」といったら、「もう自民党と一緒にしてくれ」という。あのへんは自民党の金城湯池ですからね。だから毎日毎日がやりにくい、ということを盛んに言ってきた。「おまえら、そんなところで言つては駄目だ。こっちは歯を食いしばって頑張っているんだから、みんなそれを理解してくれるという約束じゃなかったか」と言つたんだ。「どうやってもいい。共産党以外なら何をやってもいい。われわれは海部党でやっているんだから。あんたの言っていること、考えていることを支持して、何を公約しようが、何を選挙公告に書こうが、そんなことはみんな白紙委任みたいなものであつて、任せっきりだ。だから身体に気をつけて頑張ってくれ」と言われたし、それだけしかなかったんですから。

考えてみれば、そういう非常に質のいい、良質な支持者グループを持ち得たことが、威張っておれた背景だと思えます。そういう支持者たちは、「何を言つても、なかなかうちの先生は節を曲げて歩いてこないから、まあ自分やりたいようにやらしておかなければしょうがないな」という。

伊藤 いい支持者ですね。

海部 はい、いい支持者です。お正月とか暮れに、大変な規模で集まります。それはいい後援会があったということで、支持者とそういう心の通い路があったということ、非常にありがたかったと思います。その上に立って、私の後援会には要するにお金がかからない後援会だったから、無理してガバツとお金をどこから取ってくるとか、卑屈になって頭を下げてもらいに行くという必要がなかったんですね。それは非常にありがたいことだと僕は思っています。

だから小選挙区に替わったときに、これでお金がかからない選挙ができるだろうと思つたら、ほかの人の話を聞いてみると、まずまずお金がかかるという。どうしてかといつたら、きめ細かく詰めたければならんから、元もたくさんかかるんだというんだね。お金がそんなにたくさんかかるようになるのは、われわれの志した政治改革とはまるつきり反対じゃないか。だから終わりの頃は、後援会の総会でも、青年部も婦人部は別々に総会をやっていました。そこで、「こういう後援会に支えられたことを私は非常に感謝している。このごろしみじみ、そのありがたさがわかる」というお札を言っておいたこともありました。

伊藤 それがいまでも続いているということですか。

海部 はい。

伊藤 バラけたけれど、再結集しようという志はおありになったわけですか。

海部 結局、再結集しなければならんと思つた。こと志と違つたからといって、一回や二回のことではないかん。僕はすでに新進党をつくるときに、新しい政策作りにも参加して、政治の基本を少し変えていかなければいかんと思つていました。自分は総理大臣も経験させてもらっている以上、あまりいろいろな細かいことまで口を容れることはできん、容れたら、「じゃあご自分の時にどうしてやらなかつたんですか」と言われることになるわけだな。だから僕は、もう済んだことに対して後ろ向きの話はしないし、死んだ子の歳を

数えるようなことも言わない。ただ素直に反省して、こんにちの時点に立ってこれをやらなければならんということには全力を挙げてやろうじゃないか、と言つたわけだ。

だからみなさんに一番わかりやすいのは、任専の問題のときに、六八五〇億の公金の注入は何が何でも阻止しないといかん。私企業にはそれぞれの自己責任があるんだという考え方から、なんでもかんでも国費で穴埋めすればいいというものではないけません。ということで、座り込みをやつてみたけれど、三週間ぐらいしかもたなかつた。四週間目にはみんな反省して、座り込みは解いたわけですか。徹底的に理屈と理想論だけで割り切つてやることは、潔しとしない。ほどほどに限度を心得て安心できるように解決してほしいという願いや思いがあつたんじゃないでしょうか。

■無所属の会

伊藤 先生はしばらくして、「無所属の会」に入られますね。この「無所属の会」というのは、笹木さんですか。

佐道 笹木竜三さんと中田宏ですね。

海部 あれらもみんな無所属の会に入りたいといつてきたから、じゃあ受け皿になつてやろうということで、僕は笹木竜三なんていうのは初めてだったけれど、応援に行きましたよ。応援に行ったものだから、笹木竜三の後援会でしゃべれば、そこに平泉渉というのがおる。あれは個人的にいろいろ僕とは関連もあるし、たしか、一番最初に科学技術庁長官にしてあげた人ですよ。彼の選挙区です。それに家内同士がまた仲良しときているから、「頼むから応援には来ないでください。あんなにやられたら大変だ」というけれど、さはさりながら、こちらも立つたばかりの党だから、「行くよ。行くけれど、誰か間者を入れておけ。正面切つて平泉渉の悪口は言わない

し、両方政労あわせて改革していくのが日本の政治だと言ってくるから、心配するな」といって行ったんですが、笹木というのも一回当選したきりで、その次の選挙の時には当選できなかったんですね。伊藤 小沢辰男さんたちの動きとはまた別なんです。この無所属の会というのは誰が中心なんですか。

海部 無所属でやりたい、色つきになるのはまだちょっと早い、というようなのが、あのころ無責任な話ですが、よその党の一期生や二期生にはたくさんおるわけです。それからまた自民党の中にも、こうなつたから言つてもいいと思うけれど、「先生、応援に来てくれ。うちの後援会は先生のお顔馴染みがいぶんおるから」とかなんとかいうと、俺も行ってやるわけだよ。

それから大島理森なんていうのは、いまでこそ閣僚経験もしたけれど、このころはまだちょっと弱かったんだ。郷里から後援者をダーンと連れてきて、励ます会、資金パーティーの小さいのを東京のホテルでやるわけだ。僕はあそこには初めから何回も行ってあげておるから、「来てくれ、いいでしょう？」と言われると、「よし、行ってやろう。ただ自民党は立派ない政党だと褒めちぎるわけにはいかんよ」と言ったら、「何をおっしゃつてもいいですよ」と言うから、「よしよし」と言つて、行ったことがあります。大島君のところは二度ほどあります。ほかの人のところも、名前はいろいろ出しますが、それまで行ったことのある人は、頼まれれば、原則として都合がつけば応援に行つてあげた。

伊藤 無所属の会の中心が海部先生だというわけではないんですね。海部 はい。無所属の会というのは、最後は誰か、つくらなければならんだらうということになつたので、「それなら小沢辰男、おまえが歳が一番上だから」。

伊藤 小沢辰男さんも、この会なんですか。

海部 ええ、無所属の会ですよ。小沢辰男は人畜無害だしね。小沢一郎は駄目だけれどね。それは本人もよく自覚しているんだ。

楠 小沢辰男さんは、無所属の会を經由して、「改革クラブ」とい

うグループに行きましたね。それで最後は公明党と院内会派が一緒になる。何か小沢辰男さんの行動はよくわからないんですけどね。海部 辰男さんは、ここまで書いてはいかんが、個人的な怨恨があつて、人間性において小沢一郎とは相許されないということだ。「あの野郎の顔は二度と立てない」ということを何回も言つておつた。

伊藤 最後は無所属の会で一緒なんですね。

海部 そうです。僕も、もうちょっと選挙区の様子をほぐしてからでないと、自分で納得できる大義名分がないと、いきなり自民党に帰るといふわけにもいかん。社会党がもうちょっと生まれ変わつて立派になつてくれれば、それも一つの道だろうけれど、自民党もこのへんで本当に反省して、わかりやすくきれいな政治ができるような政党になれば、これはせつかくできているんだから、ここでやれば間違いない。

伊藤 小沢一郎さんのほうに行くという選択肢は全然ないんですか。海部 あれは初めのころは、しよっちゅう誘いに来たけれど。行ってやってみても、新進党のときに、せつかくいいところまで行ったのに。「おまえ、もうちょっと腹を立てるなよ。もう一呼吸、二呼吸おいてから物を言え。公明党を切っちゃまおうとか、公明党は許せんとか、カリカリするな」と言つたけれど、彼が昔から「壊し屋」と言われる理由の一つは、そういうところにもあるわけだ。すぐにカーツとなる瞬間湯沸かし器的なところもあるんだ。

伊藤 昔からそうだったわけでもないんでしょう。

海部 あれは身体が弱つてきて、体力が衰えてきてから、手術なんか始めて、それから、小沢辰男に言わせると、「肉体の健康が精神の健全さを蝕んでおるな」というようなことだ。あの先輩はそういうことを言つておりましたね。

■小淵内閣時代1（小淵恵三の思い出1）

伊藤 それで、この「九八」年の七月に参議院選挙があります。それで自民党は負けて、橋本「龍太郎」さんが「首相を」辞任するということになりますね。この参議院選挙の時には、やはりあちこち応援して歩いたわけですか。

海部 はい。そのときは、放っておいて自民党だけが強くなつていってもいから、自民党でない、できたら、当選後は無所属の会ぐらいに入つて、と思つたんですが、そういうスケベ根性みたいな選挙はあまり強くないな。やっぱり、はつきりわかりやすく旗印を立てて、理屈を言わずに、本音の話を正直にしていかないと——。

伊藤 無所属の会のメンバーも、選挙に出たわけですか。

海部 出たものもおります。志に反して、当選できなかったものもおります。

伊藤 当選したのもいるんですか。

海部 当選したのは、小沢辰男がそうじゃなかったですか。

伊藤 それで小淵「恵三」さんが内閣を作られます。小淵さんとの関連はございましたか。

海部 ありました。長い間、あれは早稲田大学雄弁会の後輩で、初めに立候補したときは僕のところに来て、「あなたの最初の演説をこのテープに吹き込んでくれ」と言うから、「いや、テープじゃない、おまえ、そこでやってみろ」といって、やらせた。

玉沢徳一郎君というのは、そのとき海のものとも山のものともついていかなかったけれど、バンカラな早稲田の後輩で、竹刀をもつて、「こらっ、小淵」ということで、デーンと叩いて、「もつと真面目に性根を据えて覚えろ。演説で票を取らなければ、おまえなんか駄目だぞ」なんて、一所懸命そこでこけおどしをやりながら、僕がいろいろ話したんです。話したら、「わかった」と言つて、小淵は帰

つた。

次の日、今度は玉沢が来た。「すいませんが、昨日の話は小淵はみんな覚えておらんの、今日はテープをもつてきましたから、このテープにもう一回吹き込んでください」という。おれは「玉沢、おまえ、ええ加減にしとけよ。ひとの忙しいときに。ああいう話は真剣にならなきゃ、本当に真剣にならなきゃあ、あんな演説はできないのだ。こちらが本場に絞り出すようにいろいろなものを全部出して、なりきつてやつてやつたのに、もう一回とは何だ。けれども恵三がそこまで本気に頼んでおるといふならやつてやろう」といって、吹き込んであげた。それを持って帰つた。小淵の家には庭がある。あれは生糸問屋ですから、ガーツと機械が鳴つておつて喧しいところだから、そう少々の声でやつたつて近所迷惑ではないし、かなり広い家があるから、そこで教えて、覚えさせた。

そういうことから始まつた僕と小淵の関係ですから、ただ単に大学の先輩と後輩の関係だけではない。また小淵の頓知もあつて、ちよつと面白い発想をする。さあ、いよいよ後援会総会をやる。「誰か応援に来て、俺のことに提灯をつけてくれなければ、俺一人では全然駄目だから、やっぱり悪いけれど応援に来てちょうだい」と言うから、「よし行くよ」と言つたんだ。当日会場に行つたら、控え室にみんなおるじゃないか。「なんだ、おまえも来たのか」「私が行かなければ誰も来てくれんと恵ちゃんと言つたから」といって、西岡あたりもおるんだな。俺も行つたし、そこにはまだほかに、早稲田大学雄弁会のわれわれクラスの連中がおつたんだね。だから小淵は、なかなかの政治家であつたことは間違いないな。

そして当選してからは、早稲田の雄弁会はみんな仲良くやつてきました。勉強するために委員会に行つてはよく話しました。それでいつかも話したと思うけれど、小淵のところとは、奥さんとも息子とも娘とも、みんな家族ぐるみのつき合いをしようということ、ときどき集まつてはご馳走を食べたり、おいしいものをお互いにあげたりしていた。

そのうちにオリエント急行に一回乗ろうというので、イギリスまで行って、ロンドンからオリエント急行に乗って、ずっと旅行した。そして小淵もちよつとロマンティックなところがあつて、エーデルワイスの歌が好きなんだ。「海部さん、悪いけれど、汽車を途中下車してもいいんだ。調べてあるから、ちよつと降りて、あの尼さんのおったお寺に行ってこよう」と言うんだ。『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台になった修道院のことです。「おまえ、よう知っておるな」と言つたら、「あれはいい映画だぜ」という。ところが、そこを探しても、ちよつとも見つからなくて、一日だけそこをドライブして、「ないじゃないか」と言つたんだ。「あなた、もうちよつときちんと調べていらつしやいよ」とか奥さんにさんざん言われておつた。それでも、オリエント急行の旅を続けたというのは私にとつては大変な思い出です。

楠 それはご夫婦で行かれたわけですか。

海部 はい、夫婦で行きました。こつちも夫婦です。今から思えば、娘も息子もついてきています。

楠 いまだ代議士になつた娘ですか。

海部 代議士になつた娘じゃなくて、姉さんのほうだ。暁子ちゃんというのがおるんだ。

楠 いずれにしても、いまだ代議士になっているあのお嬢さんはよくご存じのわけですか。

海部 よく知っている、優子ちゃん。しよつちゆう遊びにも来た。それから剛君という息子は、「俺は政治家なんかには向かんから、なりたくない」と初めから言つておつた。「何になりたいか」と言つたら、「スキーのインストラクターになりたい」という。そして一時期はずつとスキースのツエルマツトにあるスキー学校の助手をやつておつたんです。「おまえ、それをおやじと話したのか」と言つたら、「言つたけれど、おやじはうんと言わん」という。「そのうちに、俺がおい頼むぞ、というときはあるから、その間やりたいことをやつておつて、その代わり帰つてこいと言つたら帰つて来

いよ」と言つたんだ。

小淵自身も、南米かどこかを無銭旅行しておる最中に「父死ス、スグ帰レ」なんていう電報を打たれて、どうしようかな、と思つて空を仰いで触つてみたら、ちよつと財布が空に近かつた。よし、帰ろう、そして政治家になろう、親の跡を継ごうと決心して、ブラジルかどこから帰つてきたというのが、彼の一つの話なんだね。選挙区でもずいぶんやつたよ。だから、「剛君はやりたくないと言つても、おとつあんでもそうだったから」といつて説得したんですが、結局小淵がああいうふうになつて、志半ばで亡くなつた。あの前には私は党は違つておりましたが、仲の良い個人的なつき合はずつと続いておりますから、手紙を出して、「いろいろ噂が流れておるけれど、今度一番頂点を目指すのに一番近い立場におるのは君だと思ふ。頑張れ」と書いたんだ。

■小淵内閣時代2（小淵恵三の思い出）

海部 あのころ、「何でもありの小淵さん」と言われて、政策的にもそうだった。本当の名前は「小淵派」だったんだ。「橋本派」と書かれたことはないんですよ。ところが、田中派がひっくり返つて、竹下が駄目になつたら、田中派「↓竹下派」と言わずに、橋本派と書きだした。それで小淵がこぼして、怒つておつた。ちよつどここ「『海部事務所』ですよ。木曜日の昼は、ここでカレーライスを食べるといふカレーの会があつたんだ。

伊藤 いろいろな会があるんだな（笑い）。

海部 その常連メンバーは、西岡「武夫」と小淵と僕だ。ともに一年生代議士だけれど、俺と西岡は家庭持ち、小淵は実際はそうじゃなかつただけけれど、ルックス・ライク・チョンガーだったんだ。俺と西岡がいたく同情して、「これ、恵ちゃん、おまえもそろそろ嫁さん候補者がなかつたら探してやるから、身を固めなければ駄目

だぞ」というような話をしておいたら、話が逆だと言うんだ。「俺はそう思っておるんだけれど、うちの彼女が、あんたはこの次当選できるかどうかからんから、この次当選したら結婚してあげましようといっているから、困っちゃったんだ」と言うんだね。それで俺と西岡で、「よし、そんなら俺が呼んで話をしてやるから、いっぺん連れて来いや」といったんだ。

西岡に、それをやるうといったら、西岡もああいふ男だから、やりましようというので、二人でどこだったか、たいして高い料理屋じゃなかったが呼び出して、時間だけはゆつくりかけて説明した。そうしたら、「小淵の彼女は」真剣に聞かずに、含み笑いたりしているんだ。おかしいな、と思つたら、「先生方、何を言われてきてんですか」「あんたがいい返事をしないから、いい返事をさせてくれと恵三が言ったんだ。なあ、西岡」と言つたら、西岡も「そうですよ」という。それも引っかけられておるわけですね。「逆ですから、よく言つてやつてください。うちのほうで、みんな心配している。とにかくきちんと結婚式をやつて籍を入れてもらつて。落選してもどうしても、それはそつちのことだけれど、とにかく結婚式を挙げてきちんとなしな」という。

あそこはお父さんも衆議院議員だったんですが、かわいそうに、最初の当選までに三回落選があつて、四回目に当選して、やつと当選したと思つたら、うーつとなつちやつたんだな。それでお隠れになつたわけです。あそこの気丈な小淵家のおばあさんは、「恵三が政治家になるまでは」ということで、一切のことを犠牲にして、戸別訪問から何からやつたわけです。そして小泉の米百俵じゃないけれど、「恵三、おまえがなるためには、お蔵の中のものはどうせお父さんがあれしたんだから、金に換えて、それで頑張れ」と言つて非常にみんなに期待されておつた。

恵三に言わせると、「そこで結婚なんかしちゃつたら、女の票がなくなつちゃうわ」と言うから、「いや、それはちよつと浅知恵だ。それをばらしたら本当になくなつちゃうよ。それよりも早く結婚し

たほうがいいんじゃないか」と言つたんだ。相手は中曾根さんの実家と同じような材木屋のお嬢さんだ。ところが、やつぱりそういうことにはならんと思つて、認めて許しておつたが、お父さんが亡くなつたら、帰つてきて途端に立候補して政治家になつた。なつちやつた以上はもうしようがないということで、許した。ところが許したら、今度はちつとも結婚が具体化しない。そうしたら在所のほうでは心配になるんだろうな。何をやつておるか。そこから先の表現は慎んでおきますけれど、すでに〇〇ものになつるとか、世間という言葉だ。「だから早くきちんとかやつてけじめをつけたほうがいいと思います」と向こうの家族も言うんだ。西岡も俺も「そうだな。われわれも初めから結婚して当選しているんだから、結婚しろ」と言つたんだ。

むしろ逆に、あのとき聞いた話では、毎日毎日恵三がラブレターを書いたというんだ。一押し、二押し、三押しでやつたらしいんだから、それならば結婚しなければいかんよ。奥さんのほうは、「先生方、何か勘違いしてらつしやるみたいですが、私がいやだとか、私の家が駄目だと言つて、結婚できないわけじゃありません」という。「いままでここで説得したことは、全部裏の裏まで打ち合わせ済みだ」と言つたら、「いや、ホホホ、打ち合わせ済みではございません。あの人はそんなことを打ち合わせるほどの人ではありませんから。たぶんそういうお話をなさつて、先生方が動いたんだろうと思ひます」と言つて、ちゃんと見通しておるわけだ。だから奥さんのほうが役者が上なんだね。そういうことがあつて、小淵君がいよいよ結婚することになつたわけです。

楠 それは二回目の当選の前ですか。

海部 はい。その結婚の式は、仲人を誰にするか、仲人なんかもういらんだらう。けれども、いるからというので、仲人を誰かに頼めと言つたら、橋本登美三郎さんか誰かに可愛がつてもらつておつたんだな。それで頼みに行つて、どこだったか、そのへんのホテルで結婚式をやつた。それで、僕らがその立会人みたいな格好です。面

白かったですよ。

伊藤 そうですか。それ以来の家族的なおつき合いなんですね。

海部 だから、語れば長い長いおつき合いがある。

■小渕内閣時代3（小渕内閣について）

楠 自民党のなかというのは、ある種非常に狭い村なんですね。人間関係が錯綜していますね。

海部 個人の人的関係です。そういう関係だから、真夜中でもいつでも、用ができる小渕も電話してくるし、俺も電話をして話し合おう。

伊藤 小渕さんの電話は有名じゃないですか。

海部 ああ、ブッチホンと聞いたな。すぐに電話で返事をする。それで一回彼があわてたのは、ブチが総理になってからですよ、竹下登に、「せっかくしてやったことはいいいけれど、あれはな、あんたらと違って頓知がないから、攻められると、ウウツと詰まっちゃから」と言われた。そんな頃、あれは「冷めたピザ」と言われた。冷めたピザということは、まずくて食えんという話でしょう。僕が言ったのも間違っていたんだけど、「そういうときは竹さん、今度言われたら答えさせなさい。記者団に、「冷めたピザは」チンすればすぐに食えるようになる」と「チンではパサパサになるから駄目だ、電熱器で温めなければいけないだ」という間違いもあった。けれども小渕は、それを上手に新聞記者にも言っ、ああいうことはすぐに乗り切るんですね。

佐道 小渕さんという方は総理になられたときも、いまの冷めたピザではないですが、一般の人間からすると、「小渕さんってどんな人？」という話になりましたね。竹下内閣の時の官房長官で、「平成」を掲げた「平成おじさん」という話で、どんなことをしてきた

人なんですか、という話が一時期流れたりしたぐらいです。竹下派を継いで、派閥のトップになつていけるけれど、あまり強い印象があった人ではありませんね。橋本さんと比べてもそうでした。

海部 知名度も低かったな。

伊藤 存在感がなかったですね。

海部 存在感もなかった。

伊藤 一般はそうなんです、政治の中で、小渕さんがいずれば総理というところまで注目されると言いますか、思われるようになったのはいつ頃からでしょうか。

海部 彼が総理大臣になるなんていうことは、初めから思っているわけではないから。あのころ、早稲田大学雄弁会の飯の会をやると、集まってくるのは渡部恒三とか三塚博とか深谷隆司とかだ。ちよつと森喜朗は、聞き流しておいてほしいけれど、彼は体力派であつて、つき合いもセンスも雄弁会じゃなかったんだよ。ラグビーの関係で、あれは体力派だということ、恒三あたりが、「ヨスロウを呼んだら、おまえ、この会の知性が下がるぞ」というようなことで笑つておつただけけれど。そんなころから、最初に話したように、「小渕は」自分の後援会総会には、主な仲間がだいたい来るように仕向けるとかね。

伊藤 結構やるじゃないですかね。

海部 そう。あのときわざわざ「誰も来んから、海部さん、頼む。あんただけは来てくれよ。来てくれんどうにもならんから」なんて言つて何回も電話をしてきた。行つてみたら、みんなおるじゃないですか。これが政治家だな、と思つた。そんなことがあつたので、ほかの人にもそういうことを言っているんじゃないかな。だから比較的、小渕恵三は、言つては悪いが、橋本よりも旧経世会の中で人氣があつて、会長にエボルブされたのは、そういうことなんだ。人間関係だ。だからよく恵三はここに来て、「俺が会長だぞ」と威張つておつたけれどね。だけど新聞は、総裁候補となると、橋本だと大売り出しがかけやすいから、書くでしょう。彼はそれが不平で不

満でしようがなかったの。

伊藤 でもとにかく内閣ができて総理になりましたからね。

海部 なったものだから、結局、なんでもありになっちゃったんだね。「なんでもありの小淵さん」になっちゃった。その代わり、

「何でもありでもいいだろう、景気が良くなったから」とか、そういうふうにスツと転換できる人ですね。

伊藤 自民党の総裁・総理だから、ちよつと無所属の会の先生としては、正面切つて応援したりはできないですね。

海部 正面切つて人前には立てませんが、あんなころ、もう小淵恵三の未来政治研究会という資金パーティーまでは行っていましたよ。

伊藤 じゃあ、ある程度距離をとりながら、つないではあったということですね。

海部 超えてならない一線というのがもしあるとするならば、超えていなかったと思います。それはノット・オンリー小淵恵三で、小淵だけではなくて、いまも言ったように大島だとか、西岡だとか、ああいう人々の会があれば行く。選挙区でも、長崎の知事選挙で何かあったな。県会議長でこんなのがおつて、西岡にほぼ困るかといつたら、困るといふ。「海部さん、来てくださいよ」と言うので、応援に行ったことはあります。「俺が応援に行つて票が減つては行かんぞ」と言つたら、「そんなことはありません」と言う。あそこも昔から行つていますから、みんなが知つていふわけです。行くと「やあ、やあ」という人が多いから。

伊藤 それは西岡さんの縁ですか。

海部 はい、初めから応援に行つていふ。

伊藤 「新総合政策研究会」、代表が小沢辰男、先生が顧問ですね。海部 それが無所属の会がいろいろ衣替えしておるさなかの一つで、

そのとき集まったメンバーが面白かつたのは、本当に無所属になるならば、海部俊樹と並びの待遇をしてやるといふて、鳩山由紀夫も鳩山邦夫も、二人とも参加したいと言つて来たんです。それは小沢辰男がどこかから聞いてきた情報だ。あれらも内心に不平不満があ

る。それから、あれらは、一同とはうまく行くはずがない。同時にあれは自由民主党をつくつた一郎先生の本当の血が流れているから、社会党のあつちに行くわけにはいかん。呼んだら来て、一緒に飯を食つたことがあるんですよ。けれども、それはその後発展して広がつていくことはありませんでしたね。

■自由党への合流と自連立1

伊藤 この年の暮れに、自由党と自民党が連立するという、思いもかけないことが発生するわけですが、これはごらんになつていて、「えっ」と思われたんですか。

海部 非常に言いにくい話ですが、もうそんな頃になると、小沢一郎のほうは先を見て、先を讀んで、何かできたら、この秩序は壊して、もうちよつと大きくなるような策を考えなければいかん。そういうことになつて、入つた。

ただ、あの小沢一郎が、ここ「海部事務所」の廊下まで来て、立つて待つていふわけだ。それでお使いが入つてきて、西岡が、「もうそろそろ呼び込んでいいですか」と言うから、「何を？」と言つたら、「小沢一郎が」と言うから、「小沢一郎が話をしたかつたら入つてくればいいじゃないか、わざわざ呼び込まんでも」といつて、ここに入れて話したこともあつた。そのときは、「もういっぺんご指導いただけませんかでしょうか」といつて非常に低姿勢で、彼にとつては煮えくりかえるものを冷やして、冷凍庫へ一晚入れてから頭を下げに来た。誰がついてきたおつたかな、二、三人連れてきておるのが、わかりやすく新聞記者にずつとしゃべつて、もうそろそろうまく行くよ、雪解けだよ、というように言つたと思う。

伊藤 自民党とのあいだですか。

海部 いや、自民党じゃない。こつちと自由党だ。

伊藤 自由党が無所属の会を取り込もうという話ですか。

海部 取り込もうというか、よかったら、無所属の会の人が自由党に力を貸してくれるならばありがたい、ということだ。

伊藤 そうしたらそのあと、自由党は自民党と連立するじゃないですか。

海部 それは小沢は先の読み方が早いやつだから、これはものになる、あるいはものにならない、どれぐらいまで行くか、ということを見抜いて、次の手をすぐ打ってくる。起承転結が早いもの、あの人は。

伊藤 自民党に入って、中で壊そうということですか。

海部 その解説をしてくれたのは小沢辰男のほうだったけれど。

伊藤 小沢辰男さんの解釈なんですね。やはりそういうものですか。自連立というのは、僕らも「ええっ」と思いましたけれどね。自民党を脱党して、自民党政権をつぶした当のご当人が、一転して自民党と連立を組もうというんですからね。

海部 一時は本気になってそういう気になっていましたよ。実らなかつただけの話です。

伊藤 自連立は実際に実現するわけですね。今度は、先生は小沢さんと会談されて、自由党に合流されるということになりますね。これも解説が必要ですね。

海部 それは目盛りの長い話じゃないですから。

伊藤 だんだん「現在に」近づいてくるから危ない話かもしれないませんが、小沢さんと共にできないという海部先生が、小沢さんの自由党に入る――。

海部 だから自由党に入るところまで、僕らは約束していませんね。その中を取り持って一所懸命走っておいたのは、小沢辰男と、いかなる加減か西岡だったんですから、西岡に、「おまえも前科一犯だからよく気をつけてやってくれよ。また今度一緒に壊れたら、それこそ駄目だよ」という話もしましたね。

伊藤 でも最終的に、先生は自由党に入られるわけでしょう。

海部 最終的にはね。

伊藤 それで自由党の最高顧問になられる。

海部 うん。

伊藤 今度は小沢さんと組んで、政権党のほうになるわけですね。

海部 あのころ、政権党であろうとか、政権党でないということよりも、新進党をやってみて、あれだけ情熱を込めてやって、弓折れ矢尽きたというところまで行って、極限まで行っていきますから、そういうことに対して、色気も思いもないけれど。しかしそんなことを言っておつたんじゃないやあ、政治家として無責任ですから、自分の立場、自分の持ち場で、できるだけのこととしてはあげましよう。

そしてずっと見ておると、そんなころからですね、考えてみれば、僕が地球環境問題に本気になって取り組んだり、アメリカとの日本の関係はいいけれど、ヨーロッパとの関係がよくないんじゃないかと思つて、日本とEUとの文化交流を毎年やるうという話を当時のEUの委員長であつたフランスの（佐道 ドロールですか）ドロールと話して、それをやつたので、EUと日本の橋渡しをやらなければいかんではないか、それには拠点もいる、それではということ、長いことやつておつた日独友好議員連盟の会長を引き続きみんながやれというからやつた。それで去年も、第三十九回になりましたが、定期交流でドイツまで行って、議員交流をやって帰ってきたということがあります。ヨーロッパのほうに第二目を置こう。

日米関係はきちんとうまく行っておるし、さあとなつたら、ブッシュ「父」のところ、電話をかければ、ブッシュは、「何でも言つてこいよ、いつでも言つてこいよ」ということになっておる。向こうからも遠慮会釈なく、用があつたら「カイフ、ちよつと来いや」という。「ちよつと来いやと言われても、あんたのところちよつと遠いからな」なんて冗談を言っておつたんだ。

そして最後は、いよいよ足元のアジアがいかにからということ、ヨーロッパとともに、アジアに対しても何かできないか、と思つたところで、手を広げていった。

伊藤 モンゴルへ行ったということですね。

海部 はい。モンゴルだとか、中国だとか、言われるままに行きました。脱線するが、モンゴルも今度建国八百年記念ですよ。

伊藤 ジンギスカンからですか。

海部 おう、ジンギスカンだ。義経がお隠れになって八百年ですから。

楠 やつぱりジンギスカンは義経ですか。

海部 それをくつつけるために、一番いいと思うんだね（笑い）。

■自由党への合流と自連立2

楠 ちょっとよろしいですか。先生が自由党に合流されて最高顧問になられるのが一九九九年一月十四日です。それで自由党と自民党の連立が同じ年の一月十四日です。このあいだには何か関係があると考えてよろしいんですか。自民党と自由党が合流するということを前提に、先生が自由党にお入りになったということでしょうか。

伊藤 どっちが先なんですか。

海部 あのとときは、もう自民党のほうが合流しますと。全部一緒になつてもらつて、要するに保守・革新の僕の理想に一步でも近づいて行くならば、やろう。それまでいろいろ自分の思いで、自分の判断でやってきて、こと志に反したわけだから。その責任を痛感しながらやっていこうと思つたんです。

おそらくあのときは、反自民じゃなくて、自民党を助けてやろう。「補完勢力になつてくれ」という本音の話も自民党のほうからもあったし、また現にこんにちまでやってみれば、まことにその通りですから。

伊藤 そのときに、自民党に戻るのではなくて、自由党に入られたわけですね。

海部 自民党に戻るんじゃないけれど、自民党をもつと支える。どうせ片方の中心の旗印として、自民党は残らなければならぬでしょ

う。何回選挙をやっても、何回わがほうが内部で画策しても、それは駄目なんだから。

楠 そうすると、この時点で先生は自民党にお帰りになることが視野に入っていたと考えてよろしいんでしょうか。

海部 視野に入っていなかったというところ、嘘になるかもしれんけれどもね。

伊藤 言い方としては、選択肢の中に入っていたということでしょう。

海部 そういうことですね。ということは、こと志と違つたけれど、それなりに自民党の体質改善をして、われわれの言つて来た「わかりやすくきれいな政治」にするための選挙制度の改革も、一人一区の小選挙区であるまで来た。まだ理由はありますよ。僕は比例区の制度は曖昧にしておつて悪いし、今度の愛知県でも、一人、都築「譲」なんていうのが駄目になると、その次に上がってくるのが、ほかの選挙違反でいま引つかかつておつて、こんなのを出したら、また駄目になる。

じゃあその下は、と言つたら、もういい加減なところまで、名簿の順で上げてくる。だから、ああいう点はきちんと変えていかなければならぬけれど、といつて、今すぐ変えるわけにもいきません。そういうことが続いておりますうちに、みんなに認識させておいて、変えていかなければならぬ。私は前の中選挙区制に戻すよりは、小選挙区のほうがよっぽどいいと思つていますからね。

伊藤 小沢さんとは、いちおう手打ちをされたということですね。

海部 向こうがここに来て、「一緒にやつてもらわなないとあれだから、頼む」と言つて来たときに、小沢辰男が仲人役で、西岡武夫も頼むよ、ということだった。けれども、その後格別そういうことについて話し合つたとか、飯を食おうといつて、昔のように親しく飯を食うことはなくなりました。

伊藤 でも自由党の党首と顧問ですからね。ふつう顧問というのは、あまり顧問業はないんですね（笑い）。

海部 はい、それはそうです。

伊藤 担がれているだけです。可笑しいですね。自自連立ができる、非常に安定したような感じですが、じきに小沢さんは連立を離脱するというようなことを言い出すんですね。

海部 それは、そう言わなければ存在感がなくなってしまうから。また言い出したな、というのが当時の感じ。三回目か四回目の離脱騒ぎをやったときには、「またやったな、あれは、やっぱり」という受け止め方でした。

伊藤 いつもそういうことを言っているんですね。

海部 「今度はそんなことを言わずに、あれしとつたらどうだ」と僕らが言っても、「そんなことをいっても、そうしないといけませんよ。なめられちゃう」と言う。

■自自公連立

伊藤 そして今度は「自自公連立」になるじゃないですか。これは公明党を誰がどういうふう引張りに引張ら込んでいますか。先生なんか全然関係なしですか。

海部 あのころは、石田幸四郎もそういったことをやる情熱も力もだんだん失っていました。あの人は創価学会のほうの大物ですからね。

伊藤 自自公の連立で、とにかく政権としては安定したな、ということでございますか。

海部 はい。逆に言うと、いまでも自自公の連立でいちおう安定しておるわけです。

佐道 数からいうと、自公が組んでいけば基本的に安定するわけですね。そうすると、自由党の存在感、価値は、相対的に下がってしまふということになるわけです。そうすると、自由党側としては、自自公と言われても面白くないということになりますね。

海部 それは面白くないですよ。

伊藤 特に小沢さんなんかは面白くないですね。

海部 そうです。存在感がなくなる。

伊藤 存在感がなくなるだけではなくて、もともと公明党とはやり合ったわけですからね。

楠 穿った見方かもしれませんが、最初に自民党が自由党と組んだというのは、いずれ公明党と組もうと思つてアテ馬に使われたということはないんですか。

海部 そういうことはないでしょうね。公明党との問題は永久に解決しないのかもしれないし、これをわかりやすくきちんと説明する理論家もまだいないんじゃないですか。

佐道 公明党の側も、小沢さんとは少なからぬ因縁があつて、一緒にと言われて、そう素直になれる人たちばかりではないと思うのです。そうすると、いま公明党の首脳になつておられる方々が、小沢さんとのことはあるけれど、やっぱり自民党と一緒にやっていくんだということ動かれて、積極的にやっていたということになるわけですか。神崎「武法」さん、冬柴「鉄三」さんですが――。

海部 特に冬柴なんかは、与党になろうと思えば、それしかない。

伊藤 いまの説明であつたように、自公が連立すれば自由党はなくてもいい、それでその通りに、自由党が「出ていくぞ」といつても、「どうぞ」ということになる。

海部 「どうぞ」とは言わんだろうけれど、言わんばかりの扱いを受けるわけです。

伊藤 そこで、自由党の中がまた割れるわけでしょう。小沢さんという人は、くつついている人がいつも同じではないですね。

海部 あそここの出入りは最も激しいですね。

伊藤 面白いですね。いつも側近が違ふ。

海部 小沢が最初に幹事長をやった頃は、中村喜四郎が腰巾着みたくにくつついていると思つたが、離れちゃった。それからこのあいだ離れたのは熊谷弘だ。あれは一時期は小沢の家来で、四島返還の

ガセネタをもって、ボリスキイとかいう男のところへ駆けだして、小沢のロシアに対する窓口を開くために努力したわけです。それから、最後に中西「啓介」と二階「俊博」が小沢と一緒にやらずに別れてきたときに、僕はびつくりしたんだな。

佐道 小沢さんの側近だということで、小沢さんに近いといわれた人たちが、やがて小沢さんとは俱に天を戴かずという感じになりましたね。

海部 近ければ近いほど、ひしと感じる憎悪感が大きいみたいだな。伊藤 遠くで見ているほうがいいということですね。

海部 はい。

佐道 若手は、しかし「小沢チルドレン」という人たちが、これまでたしっかりいるわけですね。

海部 当選をさせてもらうためには、それしかない。資金が比較的来るためには、それを言い、人寄せパンダみたいに出て行って、人を集めてよくやってくれる。選挙にもプラスになる。そういうことの提供はこまめにやっておるだろう。

楠 一面倒見がいいんですか。

海部 そう、そう思うんだ。けれどももう一方の評価は、西岡なんかが表向きはくつついておるけれど、心が離れているのは、会に出てきて話もしないし、なんとかの会にはあんたは来るなどか、おまえは来るなどか、人好みもよくやるし、結局わがままで、というんだね。そういつたことで、西岡が心を許さなくなったのは、小沢にとってはかわいそうだけれど、悪いことだったな、という気がしますよ。

■保守党の結成

伊藤 だんだん最近の話になりますが、変転が激しいじゃないですか。自自連立ができて、自自公連立ができて、自由党が離れる。こ

れは短い期間ですね。

海部 短い期間ですよ。

伊藤 それで自由党の中の残留派は、先生が保守党をつくられるわけですね「二〇〇〇年四月」。そして保守党と自民党と公明党の連立、三党連立ということになりますね。

海部 はい、そしてあのときなぜ短命に終わるようなことになったかというところ、やっぱり保守党のほうで、最後は保守新党になったかな、あれが間違っていたんだ。熊谷弘というまがいものが入ってきたがために。

伊藤 最初の保守党の時は野田「毅」さんが党首みたいな形ですね。

海部 これも言いにくい話だが、「どうしても顔を立ててそうしてもらわんと、あなたはもう総理大臣もやられたし、立派に通る名前と顔だけれど、私の場合は、今度させてもらえなければ落選してしまふ。選挙区で当落がかかっているんだ」ということを首をうなだれて言うわけだ。事情を調べてみると、その前に僕も一緒に応援に行ってやった熊本の市長、三角「保之」君という若いのが当選したんだが、それも市長選で自民党公認に負けちゃったんです。それでももう駄目だということで、野田君は自分の地位を確保するためにいろいろな人に頼んで、自民党に帰るといふ話をし出した。

伊藤 党首になってからですか。

佐道 それは保守新党になる前後のときのことですね。

楠 最初保守党は扇千景さんが党首だったんですね。

海部 扇だ。扇さんを「保守党党首に」したのもこつちの責任で、扇さんは「私は女だから」と言っただけです。私は女だから、先生、やっつてよ」と言うから、「おまえさんね、われわれはいまみんなすべてを賭けて、みんなが自分をさらけ出して、どうやったら日本の政治のためにこの党が成り立つかということ、良質の部分だけでも残っていかねければならぬので、やっついているんだから。女だからできることもあるんじゃないの」と言っただけ、一晩かかりましたね。

党首にしてやろう、ということになった。そうでない、本当に選挙は危なかったんだ。選挙でやられちゃうということで、みんなの助け合い運動で、野田党首にしたんだけど、残念ながらそんなころ、裏で熊谷と手を握って約束をしておいて、熊谷のほうはおかしな動きをしておる。だから僕は、ああいうときはわかりやすくやらなければいかんから――。

伊藤 熊谷さんと組んで、どうするんですか。

海部 熊谷がたくさん連れてきて、民主党が大きくガバツと分かれるという触れ込みだったんです。

伊藤 そのことと野田さんとはどういう関係になるんですか。

海部 野田さんはそんなことになっても、ならんでも、なんでもいからとにかく自分がいっぺんは大将にしてみらわんと、選挙区へ顔向けがならん。もうこれでいいんじゃないかと言われて追い落とされるから、そこは頼む、ということだったんですね。

伊藤 この二〇〇〇年六月の総選挙で、先生は保守党ですが、自民党の推薦も受けるということで、ひさかたぶりに自民党の本部にも行かれたということですが。

海部 いや、自民党の県連が、いっぺんちよつと顔を出してくれという。

伊藤 県連はわかりますが、本部にも行かれたんですか。

海部 本部にも行ったんです。久しぶりだな、ということ。こだわっておつてもしょうがないですから。

伊藤 まあ、連立しているんですからね。

海部 ところが、そのときに中へ入ったやつが、「写真を本部に掛けますから、写真を見に来たと行って入ってもらえば、入りやすいでしょう」という。

伊藤 写真はそのとき、ないんじゃないですか。

海部 いや、ないんですよ。ないから、掛けるというんです。「それは手続きも何もなしであれしたら、本当にミエミエじゃないか。この次の選挙いっぺんぐらいは、歯を食いしばって頑張つて勝つて

くるよ」といって、その話はパーにしたんですね。

伊藤 この保守党の時の選挙は、海部党の選挙ですから、別に――。
海部 そうです。自民党は対立候補を立てないんだから。その前の時もそうですから。結局、三回僕は「自民党の外で選挙を」やったんですけれどね。三回とも私の選挙区には自民党は「候補者を」立てない。自民党の県連の幹事長や選対委員長がみんな揃つて来て、「先生、今度絶対にこつちからは立てませんから、あまりひどいことを言つてこきおろしてくださいな」「わかった、わかった、ほどほどにしておくからな」と言つて、そのころがサトカン「佐藤観樹」の煩悶の時期だったんだね。

■森内閣から小泉内閣へ

伊藤 それで、小淵さんが倒れられて、森内閣ができます「二〇〇〇年四月」。この森内閣ができるときにまたいろいろ話がありました。海部 聞こえてくる話ですし、聞こえてくるよりも、聞かせたいと思つておる人もおるわけです。だからああいう話は、意識的にずつとある。

伊藤 森さんも、言つてみれば早稲田の仲間ですね。

海部 そうです。

伊藤 肉体派か何かわかりませんが（笑い）。

海部 肉体派であつて、頭脳派ではなかったけれど。学生の時、だつて登壇して演説をやったことはないんだもの。記録が残っていないんだから。けれどもラグビーのほうでは赫赫たる成果がある。ルックス・ライクでわかるでしょう。

伊藤 わかりますよ、あの体型はそうですね。

海部 ラグビーの体型だ。

楠 でもいちおう雄弁会のメンバーということにはなっているんで

すか。

海部 籍は入れておったでしょう。会費を払っておったかどうかは知らないけれど。

佐道 保守党というか、その前から自連立で与党側にいらつしやつたわけですね。党は分かれたけれど、小淵さんとは親しくされておられて、会話もあつたと思うんですが、先ほどの話ですと、例えば小沢さんが「連立から」出るぞ出ないぞ、という話をして、それは狼少年みたいになっているから、自民党の側にはそんなに大きなショックはない。実際に自民と公明とがいれば政権は安定するわけです。その一方で、小淵さんが倒れたときに、当時の報道で、小沢さんが連立を離脱の決定をしたことが小淵さんにはショックだったんだ、こたえたんだ、と言われていたんですが、小淵さん自体は、連立の解消ということについてどう思っておられたんでしょうか。あるいは、自由党との連立について小淵さんとお話をされたことはございますか。

海部 それはあるけれど、どれが本音でどれが人を噛んで振るうか、小淵は大政治家だからね。人の裏の裏まで読んで、あさつてのほうの物を言うから、それはどうかかわらんけれど、少なくとも僕と小淵君との関係は長いこと続いておつて、裏も隠しもないわけです。だから、相気にしておつたことは間違いない。それはまた一般にみんなが、あれは小沢が殺したんだ、とひそひそ言つたじゃないですか。

伊藤 それで森内閣ができますが、森内閣に対しては、小淵内閣と同じような感じですか。

海部 私個人は、早稲田の雄弁会におつたということもあるし、森のおやじの終わり頃の選挙の応援に行つてあげたら、大雪が降つて閉じこめられたこともある。「つば甚」という料亭みたいな旅館に泊まつておつたら、大雪が降つて出られなくなつた。「つば甚」にあつた蟹を全部食べてもまだ国鉄が動かなかったという、これは実話です。それぐらい森のあれには頼まれて、応援に行つたことがあ

りますから、よく覚えておるんです。

それから森は、ああいうふうな身体が大きいので、ラグビーを一所懸命やつたんだ。雄弁会の部室に来て練習したり、弁論大会に出て早稲田のために一等、二等という賞をとつたことは寡聞にして聞いたことはないけれど、ラグビーのほうは、早稲田で頑張つてやつておりましたね。

お父さんというのができた人で、長い間、根上（ねあがり）という町の町長さんをやつていらつしやつた。東京に出てくると、日頃からお世話になりますので、どうぞよろしく」なんて、お父さんのほうがわれわれを上座に座らせて、ご馳走してくれたものでした。

「お父さんはそういう人なのになあ。あのお父さんがあるから、あれもあれだけ救われているんだ」というようなことをみんなで言つておりましたけれどね。人が好いところを丸出しにするものだから、ああいうことになつちやうわけだな。

伊藤 さて、ここから先ですが、森内閣は短いんですね。

海部 だって初めに石に躓いたんだもの。そして素直に認めて、素直に言い訳もしないでやればいいけれど、それでもなかつたでしょう。

伊藤 それで小泉内閣になつてしまふということですね。

海部 小泉は、そもそも森にとつてみれば家来みたいに思つていきますからね。弟みたいに思つているんだから。それでみんなに「このことを小泉に聞いてこい」なんていつても、「このごろはあかん、あれも頑固で何も聞きやせんから」ということで、最近では、三位一体の中で、命がけでわしが反対してつづしてやるなんて言つておつた。けれども結局、あれも途中で中学校の教諭のところだけカットして、八五〇〇億。あとのことは全部そのままにして、中教審にボールを投げた。中教審にボールを投げれば、だいたいどんなところへ落ちるか、任命権者が上なんだから、そういうことになつて片が付くんでしょう。

保守新党

伊藤 民主党の熊谷さんたちの「保守党への」合流の話は、前々からあるんですか。

海部 そんなに前々からではないけれど、少し候補者を立てておつても、わがほうも、なかなかいい候補者がおらんわけだ。それから、立てても当選できると決まったものではない。金城湯池のように思つておつた愛知県でさえ、江崎鉄磨一人をかるうじて最後に救済するのが精一杯であつたのではあかんから、そういう一緒になつてやろうという同志がおれば、完成品が入ってきてくれればそれは手取り早いではないか。ただ、一人や二人ではいかんから、なるべく二桁でござつと来てくれるようにしなさいよ。ただ、言つたことは、こちらから物欲しそくに数を増やしてくると言つても、熊谷はもともと社会党の連中だから。

楠 いや、違いますよ。彼は通産官僚ですよ。自民党でしょう。自民党の参議院ですよ。

海部 自民党か。参議院か。ただあれは小沢の家来で、四島返還の時に、ボリスキイというロシアのいい加減なやつに深入りした。こんな話をしたことはないけれど、「まず五〇〇億円手付け金を出してやつて。そうすれば、これは二島で進みますよ」「おまえ、二島ではいかん、四島だ、あくまで四島しかいかんぞ」といつて小沢と相当議論したことがある。小沢も「それは同時着陸でなくても、これがついたときにあとの二島はこういう手続きをして、これまでに入れるとか、あるいは将来の国境線はこれだとか」というようなことを言うから、「四島でなければ駄目だ。世論が収まらんから」と言つた。熊谷にも「そんなことは四島でなければ駄目だよ」ということを話したことを覚えておりますからね。

伊藤 それは総理の時代ですか。

海部 総理の時代です。そんな権限があるのは総理です。小沢一郎は総理特使で行つたんですから。

伊藤 結局その話は作り話だったわけですか。

海部 作り話だつたと思うのは、小沢が向こうに行つたときに、お膳立てが何もできていなかった。僕のところへ電話してきて、「ちよつと帰りが一日、二日遅れますが、こういう理由でボリスキイを呼び出して、とことん話をしていきます。四島のことをきちんとしてきます」と言つて電話してきたことまでは正確に覚えています。「頼むぞ、二島あたりでうんと言つてくれたらいかんよ」と言つたんだ。

あの頃から二島返還論というのはくすぶつておりましたね。平沢和重さんなんていうのが中に入つて、三木さんにも二島返還論で行けばまず立場がよくなるというようなことをひそひそ言つたときに、それは駄目だといつて、三木さんとも僕はいろいろ議論した。北方領土の四島問題を片づけたいと駄目ですよ、ということをお本當に声を大にして言つたぐらいですな、身体を張つて。

熊谷はそれをやるうと思つたんだらうな。だけど駄目だよ、ということはおよく言つておいた。小沢も自分が行つて話すときは、「それは総理もそこまでおつしやるから、その通りで片づけていきますよ」と言つた。

伊藤 熊谷さんが民主党を出ようと思つたのは、民主党の中で面白くなかつたんですかね。

海部 ということです。

楠 だけど熊谷さんというのは、民主党にいたときは反創価学会の先鋒だつたんですね。だけど民主党を出て連立に参加するということになつたら、仇敵の公明党と手を結ばなければならぬ。実際に彼は平謝りして、詫び状まで書いたという話がありますけれどね。

海部 政治家として恥ずかしいことですよ。

楠 そんなに民主党がいやだつたんですかね。というか、民主党に将来がないと踏んだんですかね。

佐道 民主党の中で立場がなくなつたんですかね。

伊藤 それで保守新党になるわけですね。そして野田さんは出ていく。

海部 それは出ていって独立しなければ選挙が駄目だ、ということですよ。

伊藤 保守党では駄目だ、ということですね。

海部 うん。

佐道 自民党に応援してもらわないと選挙に勝てない。

海部 それで逆に言うと、「私が党首になって保守党をこうしておいて、自民党でなければいかんといって復党を頼んだら、一番わかりやすいPRではないか」というようなことまで自民党に頼んで、自民党は、「じゃあいらっしやい」と言ったけれど、あそこ「野田氏の小選挙区」は役人の古いのを「自民党は」公認していただきましたね。建設官僚です。だからそれはそれで選挙をやったので、比例の当選の可能性があるところに野田は入れてもらって、選挙をやったんですよ。

伊藤 だから入ってくる人あり、出ていく人ありで、実勢力としてはあまり変わらない。

海部 プラスマイナスぐらいです。顕微鏡で見るとようなものだ。

それで楠木正成じゃないけれど、刀折れ矢尽きた。況んや、「野田氏は」間違つても党の代表になつた男ですから、いかに長い間のしがらみがあつたとは言え、われわれも心の片隅で、その人が飛び出していくわけだからね。

伊藤 これは海部さんとしては非常に辛い感じだろうな、と思ひますね。

海部 それは辛い。いまでこそ、こんなことを言っておれるが、辛い感じですよ。いま自民党に戻つたら、僕の席のちよつと離れたところに野田毅がおるじゃないか。俺の隣が空いているときは、通路から物を言ってくるから、物を言わんわけにもいかん。「どうだ、元気でやっておるか」なんていう話はしておりますが、もう、ちよつ

と――。

■自民党への合流

伊藤 結局、去年「二〇〇三年」の十一月の総選挙で、党首「熊谷氏」が落選するという事態になります。

海部 「保守新党で当選したのは」四名です。もう四名では何もできません。せめて法案の提出権とか、議運・国対の出席権とか、院内交渉団体の立場とか、そういうものがないと、あの中では何もできません。個人では何もできませんことになる。

伊藤 無所属と同じですね。

海部 はい。そんなくないなら、ここで一つ、まことに慚愧に耐えん話だけれど、みずからの非もさらけ出し、敗北も率直に認める。それには選挙の結果に従うというのが一番わかりやすい説明ですから。

伊藤 そうですね。だからこの総選挙の結果として、そういう態度「自民党への復党」をとるということですね。

海部 はい、そうです。それしかない。

伊藤 ほかに選択肢はないですね。

海部 ありません。それをそのまま僕は、帰ったときも正直に言いました。ありがたいことに、僕の後援会は親戚みたいなものだから、「わかつておるで、そんなことはいちいち言わんでも、先生。どこまでもついで行くで、頑張つて。それより身体に気をつけて」というようなことで、逆に励ましてくれる雰囲気だったから、ありがたかつたんですね。

伊藤 自民党におられなかったあいだに、自民党の中の派閥関係といいますが、そういうものがガラガラと変わってしまいましたね。平成研究会はあまり力がなくなつて、森派でも、小泉が森派の派閥の会長の言うことを聞かない。全然聞かない。言うとは逆になる、という

話だから、ずいぶん様変わりしているという感じだと思っんですが。
海部 思いますね。派閥の体を成しておらんですね。

伊藤 本当にそうなんですか。

海部 特に経世会が昔は鉄の団結を誇っておったんだけど、現状、まことに哀れです。特に橋本龍太郎自身がああいう立場に立たされると、対応の仕方をあまり知らんでしよう。金丸さんや竹下さんのように上手にしぶとく切り抜けていくとか、世論に対して物を言うとか、そういうことがないでしょう。

伊藤 一億円の小切手の問題、村岡「兼造」さんがやられて、「なんで俺だ！」とだって怒っていますね。

海部 それはそうですよ。僕らから見てもそうなもの。

伊藤 村岡さんは落選していたのが不幸の元だという。

海部 だからハメられた、落とされたということになるわけだね。

■自民党の変化

楠 派閥の力関係のほかに、何か久しぶりに古巣に戻られて、変わったな、という印象を持たれたことはありますか。世代的にも変わってきたんじゃないですか。そんなに長い間留守をされたわけではないでしょうけれど。

海部 だって選挙三回だもの。

楠 そうか、三回というのは大きいですね。

伊藤 三回選挙すれば、三分の一以上は替わりますね。

楠 そうすると、知らない自民党議員もずいぶん増えたということですね。

海部 それはいます。向こうから名刺を持ってくる当選早々の議員もいます。

楠 向こうが知らないということはないでしょう。こっちが知らないのはあるけれど。

海部 けれども、地球環境行動会議とか、日独友好議員連盟とか、党派を超えた会合には、僕もちよいちよい行きますから、そこへは一年生が来ている。こいつは自民党だったか、社会党だったか、公明党だったかな、という明確な色分けがないから、家に帰ったら国会便覧を見て、あれはこうだったか、と思う。それから先月ドイツに行ったときも、「私も日独議員連盟の一員ですから連れて行ってください」という自薦他薦が党内からもよその党からも来ます。だから、そういうことで、今日までずっとやってきたことが続いていることは続いておりますね。

楠 先生は政界でも長老になられていると思うんですが。

伊藤 もう、一番の長老ですか。

楠 そうですね。当選回数から見ても。

海部 当選回数からいくと、最も長老ということになります。当選十五回だもの。

楠 その長期間、政界におられて、若い頃といまの政界、自民党を比較して、変わったな、と思うところはありますか。

海部 昔は、われわれは礼儀を知らなかったな、ひと言で言うのと。

楠 昔の先生方が、ですか。

海部 うん。いまの若い連中のような、ああいう態度対応がとれるということとは、まことに驚くべきことですが、それが世の中の常識になったのかもしれないね。

楠 若い者が礼儀を知っているということですか。

海部 いや、知らないんだ。農林省から来て、自民党にいる若い議員で、自分の派閥の長である橋本龍太郎に、面と向かって、「あなただけ早く替わりなさい」というようなことを言いに行つて、それに同調して五、六人が署名しておる。クソツツといって、橋本のことだからカリカリ怒るけれど、知らん顔している。

伊藤 そんなことをやったからといって、派閥から除名するわけにはいかんでしょう。

楠 それは派閥の力関係の変化を象徴したお話だと思いますが、ほ

かに実感として変わったな、と思われれることはありませんか。

海部 ほかにと言っても、現に一番派閥が効力を発揮するのは、先輩が後輩のために一所懸命協力してやる、応援にも行く、尽くすということですが、そういうきめ細かい選挙のお世話というのは、いまはどうか。いまの現実には知りませんけれど、昔われわれがやったように、あれは外科で、これは内科で、これは精神科でというように、それぞれ医者との係があるように、派閥の中にも、農村向きの人、中小企業向きの人、教育者向きの人、いろいろあるじゃないですか。それにふさわしい人がそれぞれいて助けに来るとか、いろいろなことがありました。本一冊をつくるにしても、五、六人が集まって、その人をヨイショして、本を作ってあげる。そうすると出版記念会ができる。そこに仲間がみんな行ってあげれば一挙両得だ。名前は売れるし、資金もいくら集まる。昔はよくそれをやりました。このごろどうだ、と聞いたら、やっているようですね。

伊藤 各派閥は会合はやっているんでしょうけれどね。だけど選挙の時の資金は減ったことは確かでしょうね。

海部 会合をやっている。毎週の会合は、僕も自分を顧みてわかるんですが、あそこで情報が一番集まるんです。だから朝飯会で、それぞれの所属の委員会のことを担当に報告させると、だいたいわかりますな。それからいかんことは、「今度委員会で局長にこう言つて質問してみるよ」なんて聞いてくる。その返事がどんな返事が来るか。またそんなことを話していることが伝わると、局長本人が飛んできて、「先生、頼む、勘弁してください、そんなこと言われるとかなわんから」と言ってくるのもおる。そういう派閥の効用は、派閥の知的効用という言葉がきれい過ぎますが、知識を集める。

伊藤 情報だということですね。

海部 情報と言ったほうがいいかもしれない。その情報をどう判断するか、どう精査するかということは、それはまた別の講座として指導する人がおる。そういうことじゃないですか。

佐道 情報交換の場としての派閥というのは、意味があるということ

とですかね。

伊藤 その意味では健在なんですかね。

海部 健在です。

伊藤 じゃあ森派なら森派は毎週会合をやって、そういうことをやっているんですかね。

海部 やっているんですね。

佐道 橋本派にしろ森派にしろ、昔のような結束力がなくなっちゃったということですね。前は派閥の長を担いで、政権獲得、総裁選レースということをやっていたわけですが、自民党の中で、誰がトップになるかという争い方、仕組みも変わってこざるを得ない、ということになりますか。

海部 だっていま派閥の長といっても、みんな功成り名遂げたやつがおる場所になっている。森や橋本がまた志を立てて、中原に鹿を追おうという気力も迫力もないわ。

伊藤 そうすると、自民党の総裁候補というのはどこにいますか。

海部 だから自民党の総裁候補の選び方が変わってくるんじゃないですか。

楠 来年で結党五十周年ですね。そろそろ五十年経って、自民党というのは活力が枯渇してきたのか、まだまだこれからなのか――。

伊藤 自民党にいるのに、枯渇したとは言えないでしょう(笑い)。

楠 長くいらつしやるから、表現はともかくとして(笑い)。

海部 一人ひとりのコマを見れば、まだまだこれは公明党や民主党の議員よりはしつかりしているな、と思える人が多いですよ。自民党の中堅以下にはいっぱい、いいのがおると思うな。

伊藤 人材ですね。ただいま総理候補として云々されるような人たちで、あまり魅力的な人はいないじゃないですか。海部先生は、いまの中堅幹部を見て、これだったら総理にしたいという人は――。

海部 それは昔から続いている長い間、連続しておる質問の一つだ。

伊藤 でも昔、「三角大福中」といったときに、みんな「総理大臣

に」なったじゃないですか。いまはその三角大福中がないんですね。海部 まとめて「中二階」というんです。

伊藤 これはかなわない（笑い）。でも中二階からは出てこないと思うな（笑い）。

楠 総理大臣になる資格というのか、そういうものが大きく変わってきたからでしょうか。

海部 もっと極端に言えば、資格といえ、いままではものをよく知っているということや、必要にして十分な最小限度の資金があるとか、それなりに資金以外のものでも、人の心を掴むだけのものがあるとか、そういう人徳の面も併せて、総合的に敵を作らないで引っ張っていける人というのは、おのずから生み出されてきたものですね。

伊藤 そうですね。さつき言った三角大福中のあとも、「安竹小」といいましたか。

楠 「小」は途中で消えましたけれど。

海部 あれは本当は小坂「徳三郎」のことを指したんだろうね。小淵は俺のことだと言っておったよ。

伊藤 小坂さんは財界をバックにしましたからね。

海部 それで、安竹小という小坂のことだと、みんながそれとなく認めておったんだけれど。

伊藤 いまそう言ういわれ方をする人たちがいないんですね。

海部 だからまとめて「中二階」だ。誰かもっと努力して早く上がってこい、ということでしょう。

伊藤 その中二階も、結構なお歳でしょう。

■過去から未来へ1（総理のリーダーシップ）

佐道 役所でも中二階だと、責任あるポジションにない人たちがいらっしやるわけですが、党と役所の関係については、この十年ぐら

いで、大蔵省バッシングがあったり、外務省バッシングがあったり、いろいろな不祥事があって、省庁再編とかいろいろなことがあります。人材的にも、最近の日本の官庁はだいぶ実力が低下しているんじゃないかという言い方がされることがあるんですが、先生がごらんになって、最近はどうですか。

海部 正直に言うと、昔はここへでも昼に課長、課長補佐クラスのところを各省別に呼んでは、一緒にカレーライスを食べながら、話を聞いたり、宿題を出したりしていましたが、総理になったときには、それ以上はできませんから、公邸のほうに夜来してもらって、あそこの食堂で話を聞いたりした。その中の一人が外務省におった岡本「行夫」。あんなふうの間違って行っちゃうとは思わなかったけれど。もっと外務省の官僚として素直に伸びるだろうと思ったんだけれどな。

伊藤 内閣府の力がかなり大きくなってきたんじゃないかということが言われますが、各省の上にもう一つ内閣府があって、ここが総合調整をするといいますか。その上に総理が乗っかって、総理の言うとおりに動くのか動かないのかわかりませんが、そういう政治のメカニズム自体がちよっと変わってきているんじゃないかと思えますが。

海部 外からごらんになって、そうお感じになるならば、それはいい方向へ変わりつつある兆候だと思えますよ。そして、例えば組織で反対されるようなことでも、総理大臣がこうするんだと決断したら、その通り、じゃあやっ行ってこうと動くシンクタンクみたいなものが、国の政治にはどうしても要るんですね。ですから総理大臣というのは、僕が言うところのように聞こえるけれど、自分自身がまず納得して、こうするんだと決めて、それに対して、何か意見があったら言うてみるという、聞いてみる。いろいろな意見が出てくるけれど、それを全部、脅かすのではなくて、論破して、説き伏せるだけのものがないと、こうしろ、ということではできません。

それをやった体験があったかという、私は例の日米構造協議の

時に、あれだけいろいろなことを言われたけれど、これだけは何としてもやったほうが日本のためになると思うよ、ということ自分を思った。これはトップとトップの話でしたから、なおまじいけれど、ジョージ・ブッシュが私に「トシキ、頼む。いま俺は議会からいろいろ言われて、戦っておるんだけれど、もう弾薬もないんだ。だから日本から助けてほしい」「なんだ」というと、トイザラスに象徴されるような大店舗法を変えてくれということだ。あれは通産省が挙げて反対したんです。首相官邸に通産省の局長たちがみんな揃って来て、「大店法だけはどうしても守ってください」と言ってきたんだ。

こういうときは小沢一郎というのは使い勝手がよかった。小沢「総理、本当にそう思いますか」、海部「そうだ」、小沢「わかりました、本当にそう思われるならば、私が通産省はみんなこれをやっちゃいましょう」「雑巾を絞るような格好をする」。海部「大店法を作ってやらないと、アメリカの言う消費者の利益のためになるような国に日本は生まれ変わったんだ、という筋が通らなくなるよかんから、ぜひこれはやれ」、小沢「本当にそう思いますか」、海部「本当にそう思う」、小沢「わかりました」と言って、彼はいまだ言うなら抵抗勢力をつぶして回った。

その先の選挙法になってからでも、小選挙区法になったときに、どこどこどこ、日本全国の小選挙区の表を持ってきて、そこにクエスチョンマークをつけた選挙区がずっと三分の一ぐらいあったんだからね。「ここはいいです、こっちもいいです。この三分の一は荒っぽい仕事があるところ。その荒っぽい仕事のところは、現職をこれ「絞る」しなければならぬところもある。それは隣との関連もあれば、いろいろなしがらみがある。全部調べさせておきますから、これはこれで腹を決めてやってください」という。

俺はそういう約束もしておるし、なにしろ後藤田さんと伊東正義さんが相手だったからね。あの二人をきちんとするには、この小選挙区制度をきちんとやる。「表紙を変えるだけではないかんよ、中味

を変えろよ」と言う伊東正義さんがおるわけだ。中味を変える、ということ、選挙区制を変えましたという表紙だけではないかん。イギリスの何年法と言ったか、腐敗防止法みたいなものもきちんとつくって、中味もきちんと変えていかなければならない。「本当にそれを総理、やるつもりですか」というから、「やらねばいかんじゃないか。いったんなった以上、それはやらなければ駄目だ」と言った。

そのとき、そこまできなかな難しいと思うけれど、当時幹事長の小沢一郎が、「誰を委員長にするかで、それができるかできないかが決まりますから、誰もおらなかつたら私がやりましょう。私が委員会に行つて、その法律を通しちゃう」と言う。それで夜遅くまで話し合つて、手を握つて別れたこともありまうから。そういう意味で、小沢一郎という人は、お互いに話が腹に入つて、納得できれば、頼もしい味方になる。

伊藤 やはり総理が強力な幹事長のバックアップを受けるか、官房長官以下、内閣の強力なバックアップを受けるか、どちらかがないと、通産なら通産が挙げてやってきたら、これはなかなか抵抗できないですね。

海部 そうです。そして、すぐに全国の族議員を使って、業界団体に火をつけて東京に集めて、やりまうからね。けれども、それも僕は思つたけれど、死んだ気になれば何でもできるな。

伊藤 海部先生、総理というのは、やろうと思えば相当できるんじゃないでしょう。

海部 できると思います。

伊藤 だから小泉さんだつてやっているわけでしょうけれどね。

海部 けれど、森にいくら話しても、あれは言うこと聞かんのでないかん、というけれど、言うことを聞かせるようにすれば、できるんです。

伊藤 議論したら森さんが負けるでしょう。肉体では勝てるかもしれないけれど。

佐道 議論が不得手の森さんと、あまり論理的に話をしない小泉さんとは――。

伊藤 全然話が通じないと思いますね。

■過去から未来へ2（世界の中の日本）

伊藤 先ほどおっしゃったように、海部先生は一応自民党に戻られて、どこかの派閥に入っておられるわけでもなさそうですし、ある程度、元総理大臣ということで、活躍する場は非常に大きいわけですね。さっきおっしゃった地球環境問題、ヨーロッパとの関わり、アジアとの関わり、いろいろと自由に行動できる。それは僕は、羨ましい楽しい政治家生活だな、と思いますね。

海部 おかげさまで私は、日本青年海外協力隊というのを手がけましたので、あの歴史は語んじておるくらいです。それは、アジアに足を伸ばしたり、アジアに手を伸ばすと、どこにでもいるわけです。その話は、外務省の連中もみな知っているわけだな。だからアジアはいちいち言わなくても、そういうのが至る所にあります。

それからヨーロッパはドイツとの関係をずっとやってきたおかげで、EU・ジャパン・フェストの日本側の名誉委員長になっていまして、毎年行って話をして帰ってくる。それも毎年ヨーロッパまで行くんですから、大変なことです。

楠 それに、アメリカは一番仲がよかった大統領の息子さんがまた大統領ですからね。

海部 そこは電話で済むから。

佐道 ブッシュ・ファミリーが近いということは、すごいことですね。

海部 「ブッシュ、頼むよ、おとつあん」という話もできる。そばにおる通訳たちもみんな長いからね。それはありがたい話だと思うんですが、ただ、いまの段階になったら、ブッシュもそういうこ

とを聞かんから。「あんた、もう一呼吸おいてから考えろ、ちよつと結論を出すのが早過ぎる。それではせつかく今日まで築いてきたアメリカの地位が、目に見えてひびが入る、亀裂が生じるということに対して、僕は非常に心配して憂えているんだけど、もつたいないよ」というようなことを言うんですが、お父さんはそれがわかるんだな、「トシキ、おまえ、よく言ってやってくれ、あれに」という。だから僕は、もう一息おけば、国連のほうもうまくできる。だってアメリカが代わりにやらなければできないやつはいないんだもの。

伊藤 ヨーロッパが束になってもできないですからね。

海部 NATO軍で穴埋めするなんてえらそうなことを言っても、できっこないんだもの。

伊藤 むちやくちやになるだけです。

海部 そこのところをもうちよつとなんとか、と思つて、いま一懸念ヨーロッパを説いている。特にドイツのシュレーダーに、「あんたはなぜ弟分に当たるブッシュをあんなに横からいじめるんだ」「いじめておりやせん」と言うから、「いやわれわれから見ると、そういうふうに見える」と言つたんだ。

伊藤 しかし面白い地位ですね。

海部 いま一番無責任だから。

伊藤 いや無責任というより、過去の遺産を有効活用している。

海部 そうです、それだけのことです。

伊藤 ものすごく有効に活用しているということですから、意義のあることだと思いますね。

海部 そして、いろいろな国のいろいろな人たちが昔言つたこと、やつたことを覚えておる。例えばまだあまり言いませんが、「NATO軍の爆撃の時に、国連のOKを取つたか。NATO軍が爆撃に行つたときは、とつていないじゃないか」と、そんなことを言いますと、きりがなく廻るから僕は言わんけれど。「アメリカが安保理事会の決議をとつてからやればよかつたに決まつておるんだけど、

それが時間的な関係でどうしても駄目だから、なんとかそここの顔が立つようにしてやってもええないか」と言っても、なかなかうんとは言わん。

これは先月、ドイツに行ったときに外務大臣が来て、それをおいでオフレコ話にして会議をやったり、いまでもドイツには親アメリカもおるんだから。そしてこちらが言い出さなくとも、最後の第二次世界大戦の撤退作戦の時にアメリカがどれだけ血の犠牲を払って、ドイツやヨーロッパのために頑張ったか、いっぺん思い出してやってくれ。百歩譲ってそれができなかったら、アメリカに「あなたは出て行かんでもよろしい、NATO軍が代わりに行ってやってきますから」といって、NATO軍の実力だつて、そう捨てたものではない。

伊藤 いや、捨てたものですよ（笑い）。

海部 それは無理ですけれど、そういって挑発するわけです。任しておけというなら、やりなさい。だからハラハラすることが多いけれど、言うべきことは言わなければならん。

伊藤 その話は非常に面白いですよ。誰から見ても、NATO軍だつて安保理事会の了解を取ってやっているわけじゃないんですね。

海部 そうですよ、とっていないんですよ。

伊藤 いや、あれはヨーロッパの中だとか言つてやっているんですよ（笑い）。

海部 そういうよそに通じない言い方ではいかん。そうすればジョージ・ブッシュの言うように、あそこは放っておくといかん、あそこは民主政府に変えた方がいいんだ、だからやるんだと言うのと変わりないじゃないか。日本には「五十歩百歩」という言葉があるけれど、それと一緒にだよ、と言つて。

■過去から未来へ3

伊藤 日本の将来とか、自民党の将来に対して、海部先生は楽観的なほうですか。

海部 大きく分ければ、私は楽観的です。その代わり、日本という国も、自民党という党も悪者になつてはいけませんから、善人になつて性善説でやつていかなければならん。それは当然のことですが、それでやつていけば、長い目盛りの将来は、私は楽観しております。要するに日本の国の中には、大変な世論の英知というものがあつて、右にも左にもそんなに極端にブレないと思つておりますね。

伊藤 もう左にブレることはないんです。左がなくなりましたので、狭い幅の中で動いていますから。

海部 はい。それがまた極端に右にブレようとするときには、右のほうでわれわれがブレーキをかけなければならんときがあるかもしれない。

伊藤 右のほうにブレるということはたぶんないんじゃないですかね。左の方はなくなつたし。ただ活力の問題ですね。いま一番大きな問題は憲法改正問題とかいろいろありますが、ひとつ総理の場合のご経験で、例えば情報ですね。総理というのはどの程度情報を得ることができるものか。国内情勢について言えば、公安調査庁があるでしょうし、海外情報というと、外務省になるんでしょうか。外政審議室とか、絶えず情報が入ってくるものか。今度の地震の問題にしても情報が遅いとか、なんとかかんとかと言われていますね。

海部 私の乏しい経験で判断してお答えすれば、全般にいつもおっしゃっているそれぞれの役所から入ってくる情報は、正確に的確に入つてきております。それは総理大臣の都合によつて、月曜日というのはいない、閣議がありませんから、こちらが無理をして月曜日の八時からといえば、みんな八時に集まります。そこで、そういう情報は一本にして聞いております。

伊藤 一本にして、というのは、それぞれから聞くということですか。

海部 いや外務次官――。

伊藤 外務次官が主ですか。

海部 はい。それから軍事とか、そういう関係になつてくると、時によつては防衛庁長官から聞いたり、公安調査庁長官から聞いたりする。これは主として思想信条に関する問題ですね。国内のオウムの問題とか。

伊藤 外務次官が来るのは週に一回ではないですか。

海部 あれは月に一回です。月に一回というのがだいぶありますから、それは多過ぎるからちよつと固めて、二度にいつぱんにやることがあつたかもしれません。けれども問題は、それだけではないかんです。外務大臣、外務次官を通じては来ない、そこでネグレクトされてしまう情報がたくさんあるんです。

私はあまりそういう裏をかく趣味はないんですが、たまたま自然体でおるところにそういうのが入つてくることがある。わかりやすい例でいうと、一つはイラク情勢。昔、片倉「邦雄」という大使がいて、その奥さんが、いかなる加減か三木武夫さまの奥様に可愛がられておつた。近かつたから。だから寝物語で亭主が、何の電報を打つても全然反応がない、海部総理の目にはあれはとまつておるのだからか、ということを心配しておる。それを「片倉夫人が三木夫人に」持つてくる。そうすると「三木夫人が」、わかりました、私が聞いてあげましょうということ、ぜひ「私に」会いたいと言う。そういうところから入つてくる情報のほうが、次官説明で聞いている情報よりは、うんと温かい血の通つた情報です、現地のホットなニュースです。

ですから、いまサマワの実情なんていうのは、小泉の耳に正確に入つてゐるのだからと、ちよつと首を傾げます。そしてあの答弁だって、ミサイルが立て続けに飛んで来たのに、そんなのは撤退の条件じゃないんだ、と言つたりしているが、それはないんです。人間の命ですから、人の命を守つてあげるといふことと、それとともに果たさなければならぬ役割はどれだけかということ、両方を正しくバランスして出さなければ、弾が何発以上飛んできたら危ない

とか、何人以上犠牲者が出たら駄目だとか、そういうものではないと思ひます。それが僕の考えだ。

だからよく国会で青年協力隊の議論をしたときも、「あんな演説と物資とお金だけでやつておる協力隊では」という質問をよくするから、「あれは始まつてから今日までにすでに五十六人犠牲者があるんですよ。それだけの犠牲がおつても、なおその死を乗り越えて続けていこうという志が日本の隊員たちに残つてゐる以上は、あれは続けます。続けてもみなさんは反対しないでしよう。けれどもそういうことを喜んでゐるわけではなくて、そういう犠牲がないように努力もします。協力隊はそういう指導していくつもりだ」と、国会でも何回か叱られて、言つたことがありますけれどね。

だけれども、ああいうものがあるから、いまアジアでは非常に日本性善説が流れておつて、われわれの入り込みやすい点がそこにもあるわけです。だから小泉さんにもサマワの本当の実情をもう少し話してあげるか、知らせてあげたほうがいいんじゃないかと思ふな。といつて、怪我人が出たからいかんとか、何人以上出たからいかんというわけではありません。何十人出ても、それは比較対照する保護法益の問題にもなつてくるわけです。

伊藤 いや、本当に長い間、ありがとうございます。私はまだ海部先生からお聞きしたいことが山ほどあります。でもまた、このプロジェクトが終わつて、冊子ができて、もう一回読み直して、そのうえでまた機会がありましたらぜひ、「ちよつとここは」というようなところで、時間が経てばまたよろしくなることもたぶんあるだろうと思ひます。また一つよろしくお願ひいたします。

海部 はい、いろいろありがとうございます。

伊藤 長い間、ありがとうございます。

楠、佐道 ありがとうございます。

海部 これも不思議な縁ですね。

伊藤 本当ですね。本当に長く続けましたね。

海部 佐道 伊藤

よくみなさんが棒を折らずに——。
毎回たいへん面白く、また勉強になりました。
楽しみに伺っております。本当にありがとうございました。

〈以上〉

あとがき

海部俊樹元首相（在任期間一九八九年八月～九一年十一月）のオーラル・ヒストリーは、私の個人的な関係からお願ひして始まった。談話のなかにしばしば登場するように、私の父・楠正俊は一九六五年から八三年まで全国区選出の参議院議員を務めていた。自由民主党所属ではあったが無派閥であり、三木派所属の海部氏とは特に親しいわけではなかったが、さまざまな経緯から父の引退後にかえって現職の時代以上に家族ぐるみで親しく交流させていただいている。そのような関係から、オーラル・ヒストリーをお願いしたところ、快くお引き受けいただいた。ここに、あらためて海部氏と海部事務所スタッフの方々に、心から感謝申し上げます。

オーラルのメンバーは、伊藤隆政策研究大学院大学教授、田中善一郎東京工業大学教授、佐道明広政策研究大学院大学助教授（途中から中京大学助教授）、それに私の四名で、月一回、永田町の海部事務所において毎回二時間のペースで進められた。初回は二〇〇〇年十二月十八日で、〇四年十一月二十六日の最終回まで、実に三五回も続いた。途中から田中教授が都合で参加されなくなったこと、第一四回から佐道氏が詳細な質問事項を作成し、事前に海部氏に送付したことなどの若干の変化はあるものの、終始和やかな雰囲気の中であったという間に三五回を消化してしまったというのが率直な感想である。特に印象に残るのは、海部氏ご自分の師匠である三木武夫元総理のことを話される時、「クワイフ君」と三木氏の徳島弁なまりの声色を使って場を和ませられたことである。サービス精神たっぷりな海部氏はまた、我々の時として不躰な質問にも必ず正面からお答え下さった。

一九六〇年に初当選した海部氏は、現在の時点で国会議員のなかでは最古参となる。また、五五年体制に入って最初の当選組のひとつであり、秘書出身という代議士には比較的多いパターンに属する。ただし、これまでに形の上で父親の秘書を務めた二世議員を除けば、秘書出身で内閣総理大臣に上りつめた例は海部氏を除いてほかにない。海部氏は内閣総理大臣・自由民主党総裁だけでなく、新進党党首なども経験した戦後政治の最も重要な生き証人でもある。しかも、総理大臣在職中に勃発した湾岸戦争は、わが国の戦後政治のあり方を決定的に変えるきっかけとなった。思えば、近年活発化してきた憲法改正論議も、この事件を起点としているといつてよいだろう。こうしたなかで、たとえば、湾岸戦争勃発前後の秘話（第二九回）、海部政権崩壊の顛末（第三二回）や、党総裁まで経験した海部氏が自民党を飛び出した理由（第三三回）など、その本音にもとづいた貴重な証言が数多くあり、興味は尽きない。このオーラル・ヒストリーは、その意味で戦後政治史研究に貴重な情報を提供することになるはずである。

最後に、本オーラルの記録作成から編集までを担当された丹羽清隆氏及び連絡調整など事務的作業でご協力頂いたオーラル・政策研究プロジェクト事務局の方々にもお礼申し上げます。

二〇〇五年二月二十七日

東洋英和女学院大学教授

楠 精一郎

平成16年度 文部科学省科学研究費補助金 特別推進研究(COE)

研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕

発行：2005年3月31日 《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2

Tel:03(3341)0458 Fax:03(3341)0446